

福島飯玉遺跡

国道354号道路改築事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

2008

群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第446集

ふく しま いい だま
福 島 飯 玉 遺 跡

国道354号道路改築事業に係わる

埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

2008

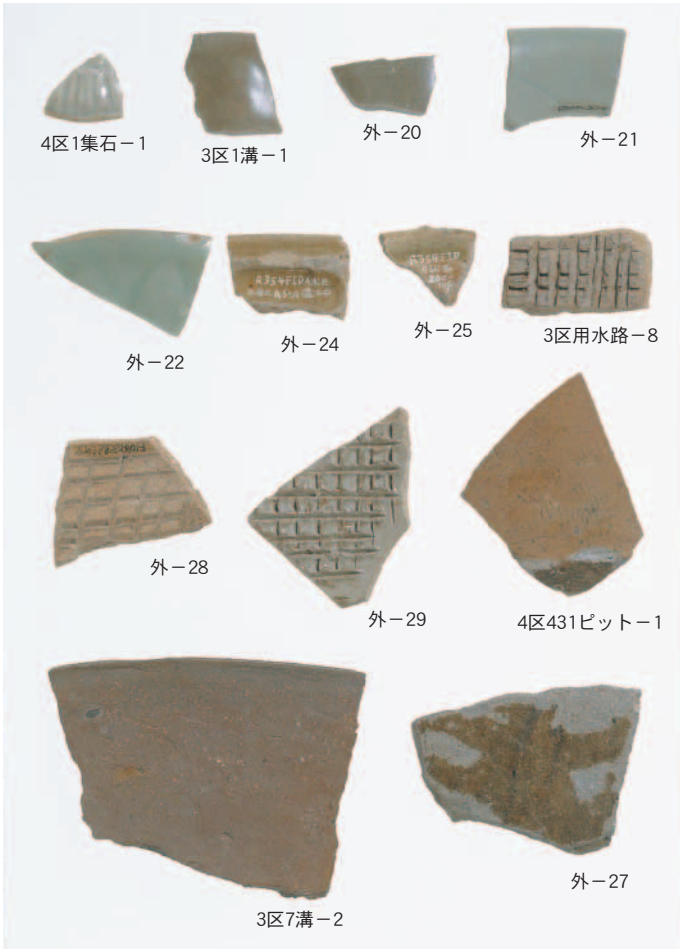
群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 3区・4区第5面1号・2号屋敷と用水路



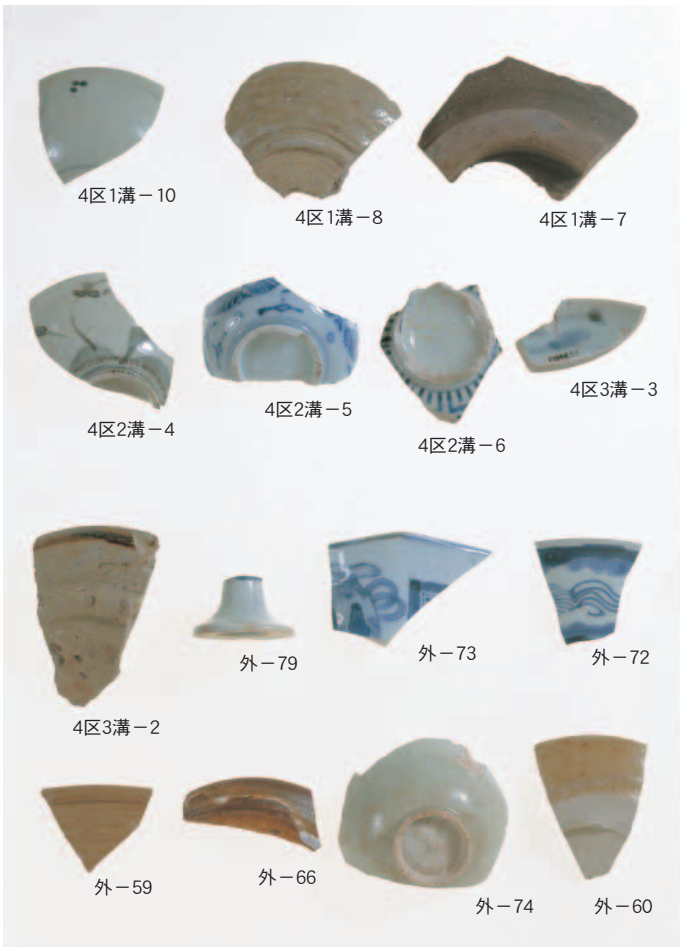
2 4区第5面1号屋敷1号・2号掘立柱建物



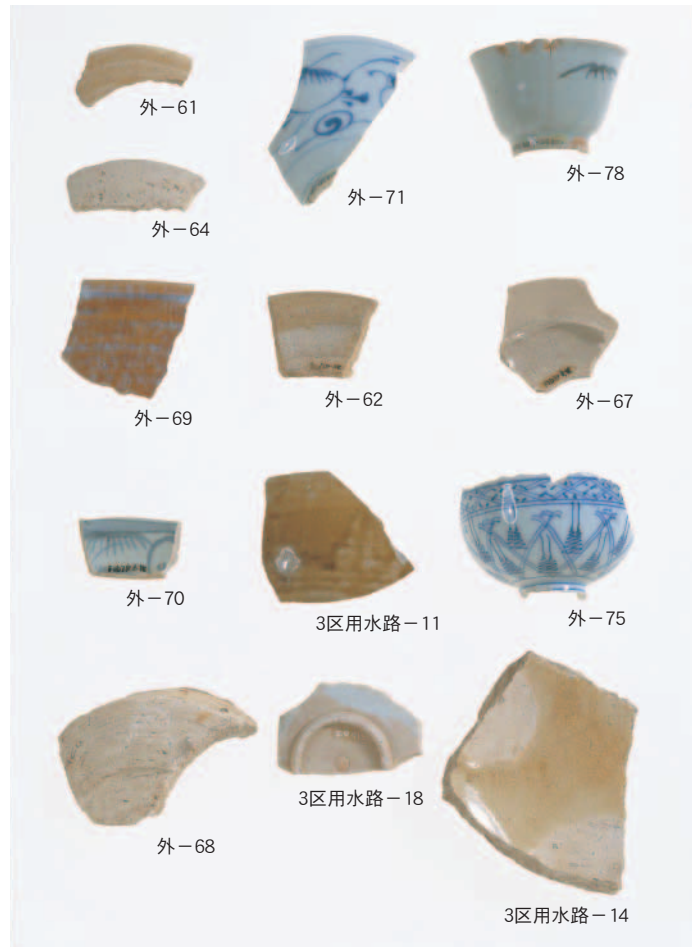
1 福島飯玉遺跡出土の陶磁器 (1)



2 福島飯玉遺跡出土の陶磁器 (2)



3 福島飯玉遺跡出土の陶磁器 (3)



4 福島飯玉遺跡出土の陶磁器 (4)

序

本書は、佐波郡玉村町に所在し、国道354号道路改築事業に伴い発掘調査された福島飯玉遺跡の調査報告書です。本遺跡の調査は、群馬県伊勢崎土木事務所からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成13・14年度に実施したものです。

今回の調査により江戸時代から古墳時代の遺構や遺物が多数出土し、この玉村の地に古くから先人たちの生活が展開していたことが明らかになりました。

特に、周囲に溝をめぐるし区画をした中世の屋敷跡2箇所は、その内側から掘立柱建物や井戸が発見され、当時の生活で使用されていた陶磁器や軟質陶器、石臼、板碑などが多数出土しました。また、これらの屋敷は近接して検出された大用水路と溝を介してつながっていたことも分かりました。これらの調査成果は、今後、整理作業が予定されている斉田竹之内遺跡の成果とともに、多くの城館や屋敷跡が存在することで知られる玉村地域の歴史に新たな資料を提供することとなるものと考えられます。そして、この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県県土整備部および伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会および地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成20年10月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

- 1、本書は、国道354号道路改築工事に伴い発掘調査された福島飯玉遺跡の調査報告書である。
- 2、福島飯玉遺跡は、群馬県佐波郡玉村町福島111-1番地他に所在する。
- 3、事業主体 群馬県（伊勢崎土木事務所）
- 4、調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5、調査期間 平成13年（2001年）4月2日～平成14年（2002年）3月29日
平成14年（2002年）4月1日～平成14年（2002年）12月27日
- 6、整理期間 平成19年（2007年）4月1日～平成20年（2008年）3月31日
- 7、発掘調査体制は次の通りである。

平成13年度

理事長 小野宇三郎
常務理事 吉田 豊 赤山容造
管理部長 住谷 進 調査研究部長 能登 健 調査研究第3課課長 中束耕志
事務担当 大島信夫 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 中沢 悟 吉田有光 森下弘美 片岡徳雄
補助員 吉田恵子 並木綾子 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子
北原かおり 狩野真子 松下次男 吉田 茂 蘇原正義
発掘調査担当 飯田陽一 伊平 敬 齊田智彦

平成14年度

理事長 小野宇三郎
常務理事 吉田 豊
事業局長 神保侑史
管理部長 萩原利通 調査研究部長 巾 隆之 調査研究第1課課長 中束耕志
事務担当 植原恒夫 小山建夫 高橋房雄 須田朋子 吉田有光 森下弘美 田中賢一
補助員 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 狩野真子
松下次男 吉田 茂
発掘調査担当 谷藤保彦 齊藤和之 増田真次

- 8、整理事業体制は次の通りである。

理事長 高橋勇夫 常務理事 木村裕紀 事業局長 津金澤吉茂
総務部長 萩原 勉 資料整理部長 佐藤明人 調査研究部長 西田健彦
資料整理第2グループリーダー 大木紳一郎
事務担当 笠原秀樹 石井 清 須田朋子 齊藤恵理子 柳岡良宏 矢島一美 齋藤陽子
補助員 今井もと子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 狩野真子 武藤秀典
保存処理 関 邦一 小材浩一 津久井桂一 多田ひさ子
遺物写真 佐藤元彦
遺物機械実測 田中精子 福島瑞希 田所順子 伊東博子 岸 弘子
整理補助 八峠美津子 狩野芳子 新井雅子 高橋初美 土田三代子

整理担当 徳江秀夫

9、本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 徳江秀夫

執 筆 III 分析 檜崎修一郎 左記以外 徳江秀夫

10、発掘調査および報告書作成には、群馬県教育委員会 群馬県伊勢崎土木事務所 玉村町教育委員会 峰岸純夫氏 伊勢屋ふじこ氏 大江正行氏 小柴可信氏 中島直樹氏をはじめ関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。

11、調査の経過、遺構に対する所見、周辺遺跡の動向については、当事業団職員の原 雅信、飯田陽一、飯森康広、齊田智彦に、中・近世の土器類については大西雅広に、軟質陶器については木津博明に、板碑については新倉明彦に助言を得ている。各氏に感謝申し上げます。

12、発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1、挿図に示す方位記号は国家座標上の北を基準としている。

2、遺構および遺物実測図中の縮尺は、それぞれの図中に表示している。

3、遺構の呼称は算用数字を用い、掘立柱建物、溝、土坑などを区ごと、種別ごとに番号を付した。

4、報告にある火山噴火物の標記は以下の通りである。

As-A : 浅間山A軽石 1783年(天明3年)

As-B : 浅間山B軽石 1108年(天仁元年)

Hr-FP : 榛名二ッ岳軽石 6世紀中頃

Hr-FA : 榛名二ッ岳火山灰 6世紀初頭

As-C : 浅間山C軽石 4世紀初頭

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例
挿図目次
表 目次
写真目次

	I 発掘調査と遺跡の概要	(2) 水田……………36
		(3) 溝……………42
1	発掘調査に至る経過…………… 1	4 第6面の調査
2	整理業務の経過…………… 2	(1) 概要……………44
3	遺跡の立地と周辺の遺跡	(2) 畠……………44
	(1) 遺跡の立地…………… 4	(3) 溝……………44
	(2) 周辺の遺跡…………… 6	5 第5面の調査
4	発掘調査の方法と経過	(1) 概要……………46
	(1) 遺跡の呼称と調査区の設定……………14	(2) 4区1号屋敷……………50
	(2) グリッドの設定……………14	1) 概要……………50
	(3) 調査の方法……………15	2) 溝……………50
	(4) 調査経過……………15	3) 掘立柱建物……………56
	(5) 整理作業の方法……………16	4) 柵列……………61
		5) ピット……………63
		6) 井戸……………76
		7) 土坑……………81
	II 発掘調査の記録	(3) 4区2号屋敷……………85
1	遺跡の概要	1) 概要……………85
	(1) 基本土層と確認遺構……………17	2) 溝……………85
	(2) 遺構の概要……………20	3) 掘立柱建物……………89
2	第8面の調査	4) 柵列……………95
	(1) 概要……………24	5) ピット……………99
	(2) 水田……………25	6) 井戸……………102
	(3) 溝……………25	7) 土坑……………105
	(4) 竪穴状遺構……………35	(4) 1号・2号屋敷外……………105
	(5) 土坑……………35	1) 概要……………105
3	第7面の調査	2) 溝……………107
	(1) 概要……………36	

3) 柵列	108
(5) 用水路	109
6 第4面の調査	
(1) 概要	112
(2) 溝	115
(3) 墓坑	117
(4) 火葬跡	117
(5) 集石	119
7 第3面の調査	
(1) 概要	121
(2) 水田	121
(3) 畠	123
(4) 溝	129
8 第2面の調査	
(1) 概要	132
(2) 水田	132
(3) 畠	135
(4) 溝	137
9 第1面の調査	
(1) 概要	137
(2) 掘立柱建物	140
(3) 水田	141
(4) 復旧溝	141
(5) 畠	143
(6) 溝	145
(7) 土坑	153

10 遺構外出土の遺物	
(1) 概要	154
(2) 縄文時代の遺物	154
(3) 古墳時代の遺物	154
(4) 奈良・平安時代の遺物	155
(5) 中・近世以降の遺物	155

III 分析

檜崎修一郎

1 福島飯玉遺跡出土人骨	161
2 福島飯玉遺跡出土馬歯	164

IV 調査成果と整理のまとめ

1 調査の成果について	165
-------------	-----

参考文献	171
------	-----

遺物観察表	173
-------	-----

写真図版

報告書抄録

付図

挿 図 目 次

第1図	福島飯玉遺跡の位置	1	第57図	4区5号・8号～11号土坑	83
第2図	福島飯玉遺跡と国道354号玉村バイパスの計画路線	3	第58図	4区5号土坑出土遺物	84
第3図	群馬県中部の地形と福島飯玉遺跡の位置	4	第59図	2号屋敷	86
第4図	福島飯玉遺跡周辺の地形	5	第60図	4区4号溝土層断面	87
第5図	福島飯玉遺跡周辺の遺跡分布(1)—調査遺跡	8	第61図	4区7号溝	88
第6図	福島飯玉遺跡周辺の遺跡分布(2)—中・近世城館	11	第62図	4区7号溝出土遺物	89
第7図	福島飯玉遺跡調査区の位置とグリッドの設定	14	第63図	4区5号掘立柱建物	90
第8図	福島飯玉遺跡の基本土層(1)と土層観察地点	18	第64図	4区6号掘立柱建物	92
第9図	福島飯玉遺跡の基本土層(2)	19	第65図	4区7号掘立柱建物	93
第10図	福島飯玉遺跡遺構調査の概要(1)	21	第66図	4区8号掘立柱建物	94
第11図	福島飯玉遺跡遺構調査の概要(2)	22	第67図	4区2号柵列	95
第12図	福島飯玉遺跡遺構調査の概要(3)	23	第68図	4区3号柵列	96
第13図	2b区第8面水田	26	第69図	4区2号屋敷ピット(1)	99
第14図	2b区第8面水田断面	27	第70図	4区2号屋敷ピット(2)	100
第15図	2b区第8面水田土層断面	28	第71図	4区2号屋敷ピット(3)	101
第16図	2b区3号溝土層断面	28	第72図	4区1号・2号井戸と1号井戸出土遺物	103
第17図	3区13号～21号溝	29	第73図	4区3号井戸と出土遺物	104
第18図	3区14号～21号溝土層断面	30	第74図	4区2号土坑	105
第19図	4区16号・18号・19号溝	32	第75図	4区17号・15号溝	105
第20図	4区16号・18号・19号溝土層断面	33	第76図	4区15号溝出土遺物(1)	106
第21図	4区1号竪穴状遺構と出土遺物	34	第77図	4区15号溝出土遺物(2)	107
第22図	4区12号土坑と出土遺物	35	第78図	4区4号柵列	108
第23図	2a区・2b区3区第7面水田	37	第79図	3区用水路	110
第24図	2a区・2b区第7面水田	38	第80図	3区用水路出土遺物	111
第25図	2a区第7面水田土層柱状図	38	第81図	4区第4面の遺構	113
第26図	2a・2b区第7面水田断面	39	第82図	4区8号～11号溝と8号溝出土遺物	114
第27図	3区第7面水田	40	第83図	4区13号溝	116
第28図	3区第7面水田土層断面	41	第84図	4区14号溝	117
第29図	3区11号溝	43	第85図	4区1号墓坑と出土遺物	118
第30図	3区第6面畠	45	第86図	4区1号火葬跡	118
第31図	3区第10号溝	46	第87図	4区1号火葬跡出土遺物	119
第32図	3区・4区第5面の遺構	47	第88図	4区1号・2号集石と1号集石出土遺物	120
第33図	1号屋敷(1)	48	第89図	4区3号～6号集石と集石部出土遺物	120
第34図	1号屋敷(2)	49	第90図	4区第3面の遺構と第3面水田土層断面	122
第35図	3区7号・8号溝土層断面	51	第91図	3区第3面の畠(1)	124
第36図	3区7号溝出土遺物	52	第92図	3区第3面の畠(2)	126
第37図	4区6号溝土層断面と出土遺物	53	第93図	3区第3面の畠(3)	127
第38図	4区5号溝	54	第94図	3区第3面の畠(4)	128
第39図	4区5号溝出土遺物(1)	55	第95図	2a区3号・4号溝	129
第40図	4区5号溝出土遺物(2)	56	第96図	2b区1号・2号溝	130
第41図	4区1号掘立柱建物	58	第97図	3区12号溝	131
第42図	4区2号掘立柱建物	59	第98図	3区第2面の遺構	133
第43図	4区3号掘立柱建物	60	第99図	3区第2面水田断面	134
第44図	4区4号掘立柱建物	61	第100図	3区第2面畠	135
第45図	4区1号柵列	62	第101図	3区5号・6号・9号溝	136
第46図	4区1号屋敷ピット(1)	70	第102図	3区第1面の遺構	138
第47図	4区1号屋敷ピット(2)	71	第103図	4区第1面の遺構	139
第48図	4区1号屋敷ピット(3)	72	第104図	3区1号掘立柱建物	140
第49図	4区1号屋敷ピット(4)	73	第105図	3区第1面復旧溝	142
第50図	4区1号屋敷ピット(5)	74	第106図	4区第1面耕作痕	143
第51図	4区1号屋敷ピット出土遺物	75	第107図	2a区1号・2号溝	144
第52図	4区4号・5号井戸と5号井戸出土遺物(1)	77	第108図	3区1号・3号溝と出土遺物	146
第53図	4区5号井戸出土遺物(2)	78	第109図	3区2号溝と出土遺物	147
第54図	4区6号井戸と出土遺物(1)	79	第110図	3区4号溝と出土遺物	148
第55図	4区6号井戸出土遺物(2)	80	第111図	4区1号溝出土遺物	149
第56図	4区1号・3号・4号・6号・7号土坑と1号土坑出土遺物	82	第112図	4区1号・2号溝	150
			第113図	4区2号溝出土遺物	151

第114図	4区3号溝と出土遺物	152
第115図	3区1号～3号土坑	153
第116図	遺構外出土の遺物(1)	154
第117図	遺構外出土の遺物(2)	156
第118図	遺構外出土の遺物(3)	157
第119図	遺構外出土の遺物(4)	158
第120図	遺構外出土の遺物(5)	159

第121図	福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土歯出土部位	162
第122図	出土部位図(左側面観)	162
第123図	出土部位図(前面観)	163
第124図	出土部位図(後面観)	163
第125図	馬歯出土部位	164
第126図	福島飯玉遺跡と斉田竹之内遺跡1a区・1b区の中世遺構	169

表 目 次

第1表	国道354発掘調査遺跡一覧	2
第2表	福島飯玉遺跡周辺の遺跡概要(1)―発掘調査遺跡	9
第3表	福島飯玉遺跡周辺の遺跡概要(2)―中・近世城館	12
第4表	福島飯玉遺跡確認遺構一覧表	23
第5表	2b区第8面水田小区画計測値一覧	28
第6表	3区第6面畠耕作痕一覧	44
第7表	4区1号掘立柱建物計測値一覧	60
第8表	4区2号掘立柱建物計測値一覧	60
第9表	4区3号掘立柱建物計測値一覧	60
第10表	4区4号掘立柱建物計測値一覧	60
第11表	4区1号柵列計測値一覧	62
第12表	4区1号屋敷ピット計測値一覧	64
第13表	4区1号屋敷ピットの諸分類	69
第14表	4区5号掘立柱建物計測値一覧	91

第15表	4区6号掘立柱建物計測値一覧	91
第16表	4区7号掘立柱建物計測値一覧	91
第17表	4区8号掘立柱建物計測値一覧	91
第18表	4区2号柵列計測値一覧	95
第19表	4区3号柵列計測値一覧	96
第20表	4区2号屋敷ピット計測値一覧	97
第21表	4区2号屋敷ピットの諸分類	98
第22表	4区4号柵列計測値一覧	108
第23表	3区第3面畠計測値一覧	125
第24表	3区1号掘立柱建物計測値一覧	140
第25表	福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土人骨永久歯冠計測値及び比較表	161
第26表	福島飯玉遺跡主な出土遺物の時期	166
第27表	掲載遺物器種別一覧(面別)	192

文中写真目次

写真1	2b区東壁土層断面	19
写真2	4区北壁土層断面	19
写真3	福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土歯	162

写真4	福島飯玉遺跡4区1号火葬跡出土火葬人骨	163
写真5	頬側面観	164
写真6	舌側面観	164

写真図版目次

PL1-1	福島飯玉遺跡の位置(空中から)	
PL2-1	福島飯玉遺跡遠景(東、福島飯塚遺跡から臨む)	
	2 福島飯玉遺跡遠景(西、福島飯塚遺跡方向を臨む)	
PL3-1	2b区第8面古墳時代水田(南から)	
	2 2b区第8面古墳時代水田(北から)	
	3 2b区第8面古墳時代水田(南東から)	
	4 2b区第8面古墳時代水田(東から)	
	5 2b区北東壁土層断面(南西から)	
PL4-1	2b区第8面3号溝(西から)	
	2 2b区第8面3号溝土層断面(北から)	
	3 3区第8面13号～21号溝(西から)	
	4 3区第8面20号・21号溝土層断面(南から)	
	5 4区第8面16号・18号・19号溝(空中から)	
	6 4区第8面12号土坑土層断面(北から)	
	7 4区第8面16号溝土層断面(南西から)	
	8 4区第8面19号溝(南西から)	
PL5-1	2a区第7面浅間B軽石下水田(西から)	
	2 2a区第7面浅間B軽石下水田(北西から)	
	3 2b区第7面浅間B軽石下水田全景(空中から)	

	4 2b区第7面浅間B軽石下水田畦畔(南から)	
	5 3区第7面浅間B軽石下水田全景(北西から)	
PL6-1	3区第7面浅間B軽石下水田、用水路北側(西から)	
	2 3区第7面浅間B軽石下水田、用水路南側(西から)	
	3 3区第7面浅間B軽石下水田畦畔(北から)	
	4 3区第7面11号溝(南東から)	
	5 3区第7面11号溝(南東から)	
	6 3区第6面耕作痕全景(西から)	
	7 3区第6面10号溝(南から)	
PL7-1	斉田竹之内遺跡1a区、福島飯玉遺跡3区・4区第5面(空中から)	
PL8-1	4区第5面1号・2号屋敷全景(空中から)	
	2 4区第5面1号屋敷、5号溝(南から)	
	3 4区第5面1号屋敷、5号溝内柵状痕(北から)	
	4 4区第5面1号屋敷、5号溝土層断面(北から)	
	5 4区第5面1号屋敷、5号溝柵状痕土層断面(北から)	
PL9-1	4区第5面1号屋敷、6号溝(北から)	
	2 4区第5面1号屋敷、6号溝壁土層断面(北西から)	
	3 3区第5面1号屋敷、8号溝(西から)	

- 4 3区第5面1号屋敷、8号溝土層断面(南から)
- 5 3区第5面1号屋敷、7号溝(南から)
- 6 3区第5面1号屋敷、8号溝、7号溝との合流地点土層断面(東から)
- 7 3区第5面1号屋敷、7号溝土層断面(南から)
- P L10-1 4区第5面1号屋敷内1号・2号掘立柱建物(南から)
- 2 4区第5面1号屋敷内1号掘立柱建物P1土層断面(南から)
- 3 4区第5面1号屋敷内1号掘立柱建物P3土層断面(南東から)
- 4 4区第5面1号屋敷内2号掘立柱建物P4土層断面(南から)
- 5 4区第5面1号屋敷内2号掘立柱建物P5土層断面(南から)
- P L11-1 4区第5面1号屋敷内3号掘立柱建物(南から)
- 2 4区第5面1号屋敷内3号掘立柱建物P3土層断面(南から)
- 3 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物(北から)
- 4 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P1土層断面(南から)
- 5 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P2土層断面(南から)
- 6 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P3土層断面(南から)
- 7 4区第5面1号屋敷内1号柵列(北から)
- 8 4区第5面1号屋敷内1号柵列P3土層断面(西から)
- P L12-1 4区第5面1号屋敷内4号井戸礫出土状況(北から)
- 2 4区第5面1号屋敷内4号井戸土層断面(南から)
- 3 4区第5面1号屋敷内5号井戸(南から)
- 4 4区第5面1号屋敷内5号井戸遺物出土状況(南から)
- 5 4区第5面1号屋敷内5号井戸土層断面(南から)
- 6 4区第5面1号屋敷内5号井戸遺物出土状況(南から)
- 7 4区第5面1号屋敷内6号井戸(西から)
- 8 4区第5面1号屋敷内6号井戸礫出土状況(西から)
- P L13-1 4区第5面1号屋敷内1号土坑(北から)
- 2 4区第5面1号屋敷内1号土坑遺物出土状況(北から)
- 3 4区第5面1号屋敷内3号土坑(東から)
- 4 4区第5面1号屋敷内4号土坑(北から)
- 5 4区第5面1号屋敷内6号土坑(南から)
- 6 4区第5面1号屋敷内5号・8号・9号土坑(北から)
- 7 4区第5面1号屋敷内10号土坑(北から)
- 8 4区第5面1号屋敷内11号土坑(北から)
- P L14-1 4区第5面1号屋敷内299号・484号・300号ピット土層断面(南東から)
- 2 4区第5面1号屋敷内145号ピット土層断面(南から)
- 3 4区第5面1号屋敷内274号ピット土層断面(南から)
- 4 4区第5面1号屋敷内325号ピット土層断面(南から)
- 5 4区第5面1号屋敷内178号ピット遺物出土状況(南から)
- 6 4区第5面1号屋敷内203号ピット土層断面(南から)
- 7 4区第5面1号屋敷内122・211(左)号ピット土層断面(南西から)
- 8 4区第5面1号屋敷内221号ピット土層断面(南から)
- 9 4区第5面1号屋敷内253号ピット土層断面(南から)
- 10 4区第5面1号屋敷内321号ピット遺物出土状況(東から)
- 11 4区第5面1号屋敷内308号ピット遺物出土状況(南から)
- 12 4区第5面1号屋敷内308号ピット土層断面(南から)
- 13 4区第5面1号屋敷内416号ピット土層断面(南から)
- 14 4区第5面1号屋敷内271号～273号ピット遺物出土状況(北から)
- 15 4区第5面1号屋敷内267号ピット遺物出土状況(北から)
- 16 4区第5面1号屋敷内188号ピット(北から)
- 17 4区第5面1号屋敷内209号ピット(北から)
- 18 4区第5面1号屋敷内265号ピット土層断面(西から)
- P L15-1 4区第5面2号屋敷(空中から)
- 2 4区第5面2号屋敷、4号溝(南から)
- 3 4区第5面2号屋敷、4号溝土層断面(北から)
- 4 4区第5面2号屋敷内7号溝遺物出土状況(南から)
- 5 4区第5面2号屋敷内7号溝掘削工具痕(西から)
- 6 4区第5面2号屋敷内7号溝土層断面(北から)
- 7 4区第5面2号屋敷内7号溝遺物出土状況(北から)
- P L16-1 4区第5面2号屋敷内2号・3号柵列(南から)
- 2 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物(東から)
- 3 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P2遺物出土状況(南から)
- 4 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P1土層断面(南から)
- 5 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P3土層断面(南から)
- P L17-1 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物(南から)
- 2 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P2土層断面(南から)
- 3 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P5(南から)
- 4 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P5土層断面(南から)
- 5 4区第5面2号屋敷内7号・8号掘立柱建物(南から)
- 6 4区第5面2号屋敷内7号掘立柱建物P1土層断面(南から)
- 7 4区第5面2号屋敷内8号掘立柱建物P3土層断面(南西から)
- 8 4区第5面2号屋敷内2号柵列P3土層断面(南から)
- P L18-1 4区第5面2号屋敷内2号柵列P2土層断面(南から)
- 2 4区第5面2号屋敷内2号柵列P3土層断面(南から)
- 3 4区第5面2号屋敷内2号柵列P4土層断面(南から)
- 4 4区第5面2号屋敷内3号柵列P1土層断面(南から)
- 5 4区第5面2号屋敷内3号柵列P2土層断面(南から)
- 6 4区第5面2号屋敷内3号柵列P3土層断面(南から)
- 7 4区第5面2号屋敷内39号ピット土層断面(南から)
- 8 4区第5面2号屋敷内19号ピット土層断面(南から)
- 9 4区第5面2号屋敷内106号ピット土層断面(南から)
- 10 4区第5面2号屋敷内117号ピット土層断面(西から)
- 11 4区第5面2号屋敷内75号ピット土層断面(南から)
- 12 4区第5面2号屋敷内26号ピット土層断面(南から)
- 13 4区第5面2号屋敷内27号ピット土層断面(南から)
- 14 4区第5面2号屋敷内3号ピット(南から)
- 15 4区第5面2号屋敷内3号ピット土層断面(南から)
- 16 4区第5面2号屋敷内28号ピット土層断面(南から)
- 17 4区第5面2号屋敷内37号ピット土層断面(南西から)
- 18 4区第5面2号屋敷内38号ピット土層断面(南から)
- P L19-1 4区第5面2号屋敷内1号井戸(北から)
- 2 4区第5面2号屋敷内1号井戸土層断面(南西から)
- 3 4区第5面2号屋敷内2号井戸(北から)
- 4 4区第5面2号屋敷内2号井戸土層断面(南から)
- 5 4区第5面2号屋敷内3号井戸礫出土状況(東から)
- 6 4区第5面2号屋敷内3号井戸遺物出土状況(東から)
- 7 4区第5面2号屋敷内2号土坑(南から)
- 8 4区第5面2号屋敷内2号土坑土層断面(南から)
- P L20-1 4区第5面15号溝(南から)
- 2 4区第5面4号柵列P3土層断面(東から)
- 3 4区第5面17号溝(東から)
- 4 3区第5面用水路集石(南西から)

- 5 3区第5面用水路土層断面(西から)
6 3区第5面用水路集石(北東から)
7 3区第5面用水路土層断面(西から)
P L 21-1 3区第5面用水路(西から)
2 3区第5面用水路(空中から)
P L 22-1 4区第4面8号・9号溝(東から)
2 4区第4面10号溝(北から)
3 4区第4面11号溝(東から)
4 4区第4面14号溝(東から)
5 4区第4面13号溝(南から)
6 4区第4面13号溝土層断面(南から)
P L 23-1 4区第4面1号火葬跡骨片出土状況(東から)
2 4区第4面1号火葬跡(東から)
3 4区第4面1号集石(北から)
4 4区第4面2号集石(北から)
5 4区第4面3号集石(北から)
6 4区第4面4号集石(北東から)
7 4区第4面5号集石(北から)
8 4区第4面6号集石(北から)
P L 24-1 3区第3面畠(空中から)
2 3区第3面畠土層断面(南から)
3 4区第3面畠(南から)
4 4区第3面水田(西から)
5 4区第3面水田区画段差(西から)
P L 25-1 2a区第3面3号溝(西から)
2 2a区第3面4号溝(西から)
3 2b区第3面1号・2号溝(西から)
4 3区第3面12号溝土層断面(南西から)
5 3区第2面水田(西から)
P L 26-1 3区第2面畠(西から)
2 3区第2面5号溝(西から)
3 3区第2面6号・9号溝(西から)
4 3区第2面5号溝土層断面(東から)
5 3区第1面1号掘立柱建物(南から)
6 2a区第1面2号溝(南から)
7 2a区第1面1号溝(西から)
P L 27-1 3区第2面水田・第1面畠復旧溝(西から)
2 3区第1面畠復旧溝土層断面(南東から)
3 3区第3面畠・第1面畠復旧溝(東から)
4 3区第1面畠復旧溝土層断面(南東から)
5 4区第1面耕作痕(西から)
6 3区第1面1号・3号溝(西から)
7 3区第1面2号溝(北から)
P L 28-1 3区第1面4号溝(西から)
2 4区第1面1号～3号溝(東から)
3 4区第1面1号溝(東から)
4 4区第1面2号溝(北から)
5 4区第1面2号溝土層断面(北から)
6 4区第1面3号溝(北から)
P L 29-1 3区第1面1号土坑(西から)
2 3区第1面3号土坑(南から)
3 3区第1面2号土坑(北から)
4 3区第1面2号土坑土層断面(南から)
P L 30-1 4区第8面1号竪穴状遺構出土遺物
2 3区第5面7号溝出土遺物
3 4区第5面5号溝出土遺物
P L 31-1 4区第5面5号溝出土遺物
2 4区第5面6号溝出土遺物
3 4区第5面ピット出土遺物
4 4区第5面5号井戸出土遺物
P L 32-1 4区第5面5号井戸出土遺物
2 4区第5面6号井戸出土遺物
3 4区第5面1号土坑出土遺物
4 4区第5面5号土坑出土遺物
P L 33-1 4区第5面7号溝出土遺物
P L 34-1 4区第5面1号井戸出土遺物
2 4区第5面3号井戸出土遺物
3 4区第5面15号溝出土遺物
P L 35-1 3区第5面用水路出土遺物
2 4区第4面8号溝出土遺物
3 4区第4面1号墓坑出土遺物
4 4区第4面1号火葬跡出土遺物
P L 36-1 4区第4面1号火葬跡出土遺物
2 4区第4面集石出土遺物
3 3区第1面1号溝出土遺物
4 3区第1面3号溝出土遺物
5 3区第1面4号溝出土遺物
6 4区第1面1号溝出土遺物
P L 37-1 4区第1面1号溝出土遺物
2 4区第1面2号溝出土遺物
3 4区第1面3号溝出土遺物
4 遺構外出土の遺物(縄文)
5 遺構外出土の遺物(古墳)
6 遺構外出土の遺物(奈良・平安)
7 遺構外出土の遺物(中世)
P L 38-1 遺構外出土の遺物(中世)
P L 39-1 遺構外出土の遺物(近世)
2 遺構外出土の遺物(時期不明)

I 発掘調査と遺跡の概要

1 発掘調査に至る経過

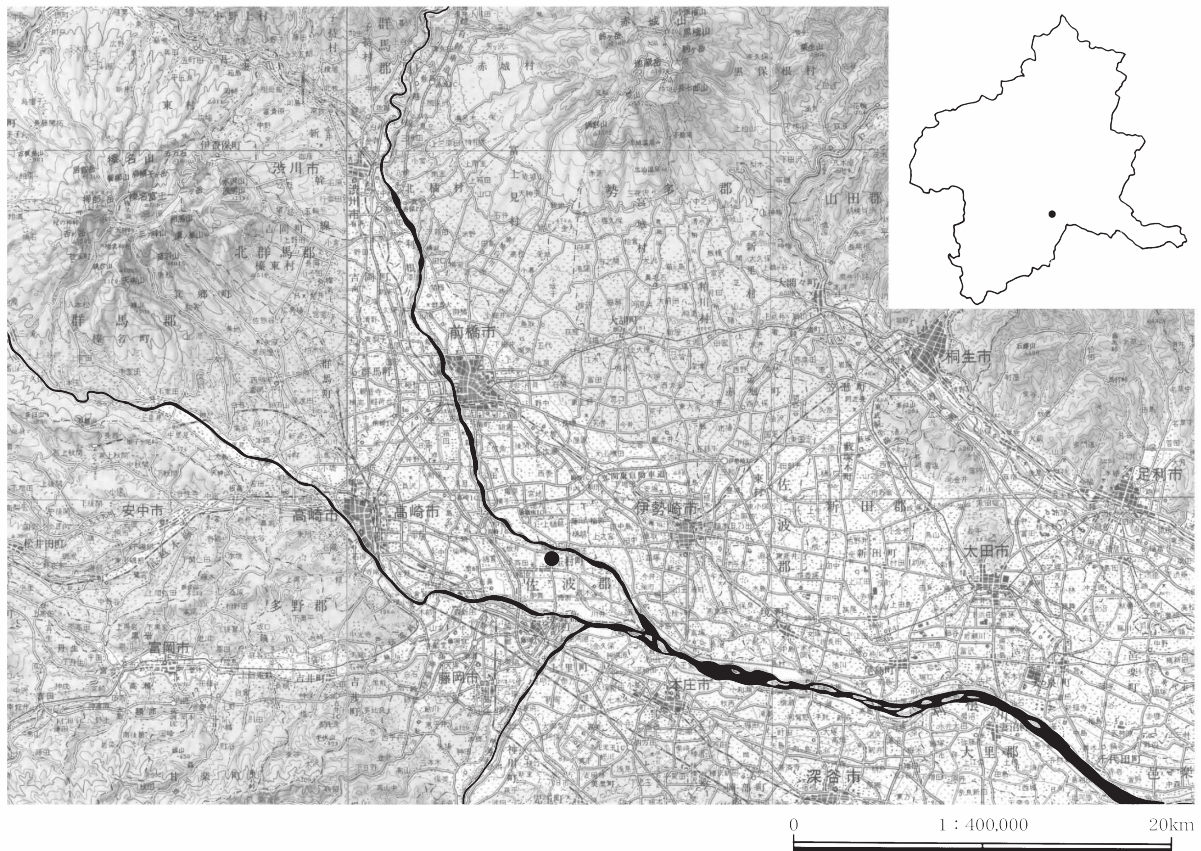
東毛広域幹線道路は、高崎駅東口を起点とし、伊勢崎市、太田市、館林市などの東毛地域の主要都市を結び、東北自動車道館林インターチェンジを経て、板倉町に至る延長58.6kmの広域幹線道路である。

県央と東毛の地域間の連携を深め、沿線の産業立地、物流の効率化、生活圏の拡大など、地域発展に貢献する交通網の整備の一環として事業計画が策定されるものとなった。

1962(昭和37)年度に東北自動車道館林インターチェンジ周辺から事業化されて以降、順次工事が着手され、2013(平成25)年度までに全区間の95%が供用される計画となっている。この間、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査も順調に実地されている。

今回の玉村町地内の事業は、国道354号高崎玉村バイパスとして、1993(平成5)年度から道路改築事業として延長5.3kmが事業化された。計画路線内の埋蔵文化財についても群馬県教育委員会および群馬県土木部(現群馬県県土整備部)、伊勢崎土木事務所による協議を経て、1996(平成8)年度から発掘調査が着手されることになった。発掘調査は、工事工程との関係から主要地方道藤岡大胡バイパス(2001年(平成13)年12月15日開通)から西側の計画路線について順次着手するものとなった。

1996(平成8)年度には、町道345号の跨道橋部のカルパートボックス部の調査を福島大島遺跡として実施した。1997(平成9)年度には引き続き福島大島遺跡の調査を行った。1998(平成10)年度から2000(平成12)年度は、工事工程との関係により調査の中断期間



第1図 福島飯玉遺跡の位置

I 発掘調査と遺跡の概要

第1表 国道354発掘調査遺跡一覧

遺跡略号	遺跡名	調査区	調査担当者()内は嘱託	調査期間
FO	福島大島遺跡	東・西	木津博明・岩崎泰一・熊谷 健	9.1.1～9.3.11
		水路東・西	原 雅信・熊谷 健・(原 眞)	9.4.1～10.3.11
FI	福島飯塚遺跡	1～4	原 雅信・廣津英一・小成田涼子	10.4.1～10.12.25
		4・5	原 雅信・小成田涼子・(原 眞)	11.8.1～12.1.31
		1～3・6	原 雅信・高柳浩道・小成田涼子・(村上章義)	12.8.1～13.3.31
FID	福島飯玉遺跡	2 a・3・4	飯田陽一・伊平 敬・齊田智彦	13.4.2～14.3.29
		2 b	谷藤保彦・増田眞次・齊田智彦	14.4.1～14.12.27
ST	斉田竹之内遺跡	2 a	原 雅信・高柳浩道・小成田涼子・(村上章義)	12.8.1～13.3.31
		1 a・1 b・2 b	飯田陽一・伊平 敬・齊田智彦	13.4.2～14.3.29
		2 b	坂井 隆・谷藤保彦・斉藤和之・伊平 敬・増田眞次・齊田智彦	14.4.1～14.12.27
SN	斉田中耕地遺跡	I	坂井 隆・谷藤保彦・斉藤和之・伊平 敬・増田眞次・齊田智彦	14.4.1～14.12.27
		I～IV	神谷佳明・飯森康広・瀧川仲男・渡辺弘幸・石坂 聡	15.7.1～16.3.31
		III・IV	洞口正史・桜岡正信・土屋崇志・津島秀章・堀口英子	16.4.1～16.9.31
KN	上新田中道東遺跡		洞口正史・桜岡正信・土屋崇志・津島秀章・堀口英子	16.8.1～17.3.31

をはさみながら福島飯塚遺跡の発掘調査を実施した。なお、2000(平成12)年度には路線内の土質調査および土圧試験を行うため、斉田竹之内遺跡を部分的に先行調査を実施した。2001(平成13)年度は福島飯玉遺跡、斉田竹之内遺跡、2002(平成14)年度は福島飯玉遺跡、斉田竹之内遺跡、斉田中耕地遺跡、2003(平成15)年度は斉田中耕地遺跡、2004(平成16)年度は斉田中耕地遺跡、上新田中道東遺跡の発掘調査を行い順次完了している。2004(平成16)年度までの各遺跡の発掘調査の体制は第1表のとおりである。なお、2004(平成16)年度の上新田中道東遺跡の発掘調査からは側道部のみの調査となっている。

高崎玉村バイパス建設も進み、2001(平成13)年12月には主要地方道藤岡大胡バイパスから主要地方道藤岡大胡線間の0.82kmが暫定2車線で部分開通し、2006(平成18)年3月には主要地方道藤岡大胡線から都市計画道路与六分前橋線間の1.2kmが供用開始となった。引き続き工事工程に沿って埋蔵文化財発掘調査が実施される予定となっている。

2 整理業務の経過

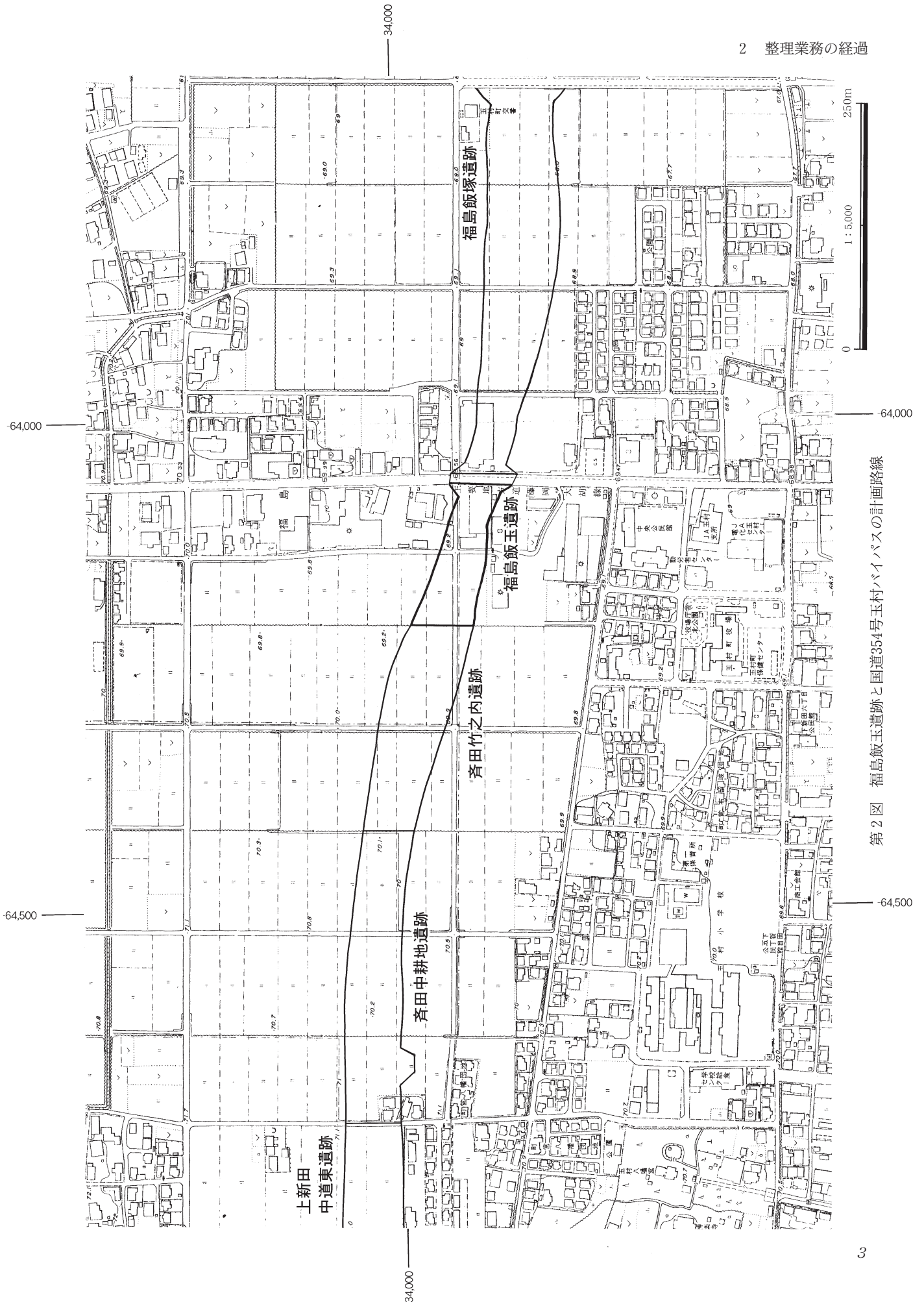
国道354号高崎玉村バイパスに関連する発掘調査は、概ね前記のように実施されてきた。発掘調査は1996(平成8)年度から継続的(一時中断)に実施されていることから、整理業務および発掘調査報告書の刊行についてもなるべく近接した時期に着手し、整理業務の進捗をはかるとともに、調査報告書のすみ

やかな刊行が期待された。発掘調査が先行しているため、整理についても早期にという方向で協議が行われたが、発掘調査の進捗と関連して、整理業務については、2003(平成15)年度から着手する計画となった。玉村工区における埋蔵文化財中・長期整理計画については策定中であったが、整理業務1年次の2003(平成15)年度は調査遺跡のうち、特に平安時代の墨書土器が大量に出土した福島飯塚遺跡から着手する計画となった。報告書の刊行は次年度とし、整理業務も継続事業として実施された。

しかし、年度後半に至り継続事業として着手した整理業務について、急遽同年度にて一旦中断する事態となった。そのため、年度末にはその時点までの整理各種資料(遺物、図面、写真、その他記録類)をすべて収蔵庫へ撤収するとともに、整理業務そのものも1年次で中断ということになった。

その後2年間の中断期間において、平成18年度に福島飯塚遺跡の整理業務が再開され、当事業に係る整理業務の2年次を迎えることになった。再開に当たっては、2003(平成15)年度に実施した整理業務を継続することとなり、2006(平成18)年度に報告書を第1分冊として『福島飯塚遺跡(1)』を刊行した。

2007(平成19)年度はこの間に策定された埋蔵文化財整理計画に基づき、福島飯塚遺跡・福島大島遺跡、および今回報告する福島飯玉遺跡の整理業務を実施し、『福島飯塚遺跡(2)』を刊行した。次年度以降も関連遺跡の整理業務が予定されている。



第2図 福島飯玉遺跡と国道354号玉村バイパスの計画路線

3 遺跡の立地と周辺の遺跡

(1) 遺跡の立地

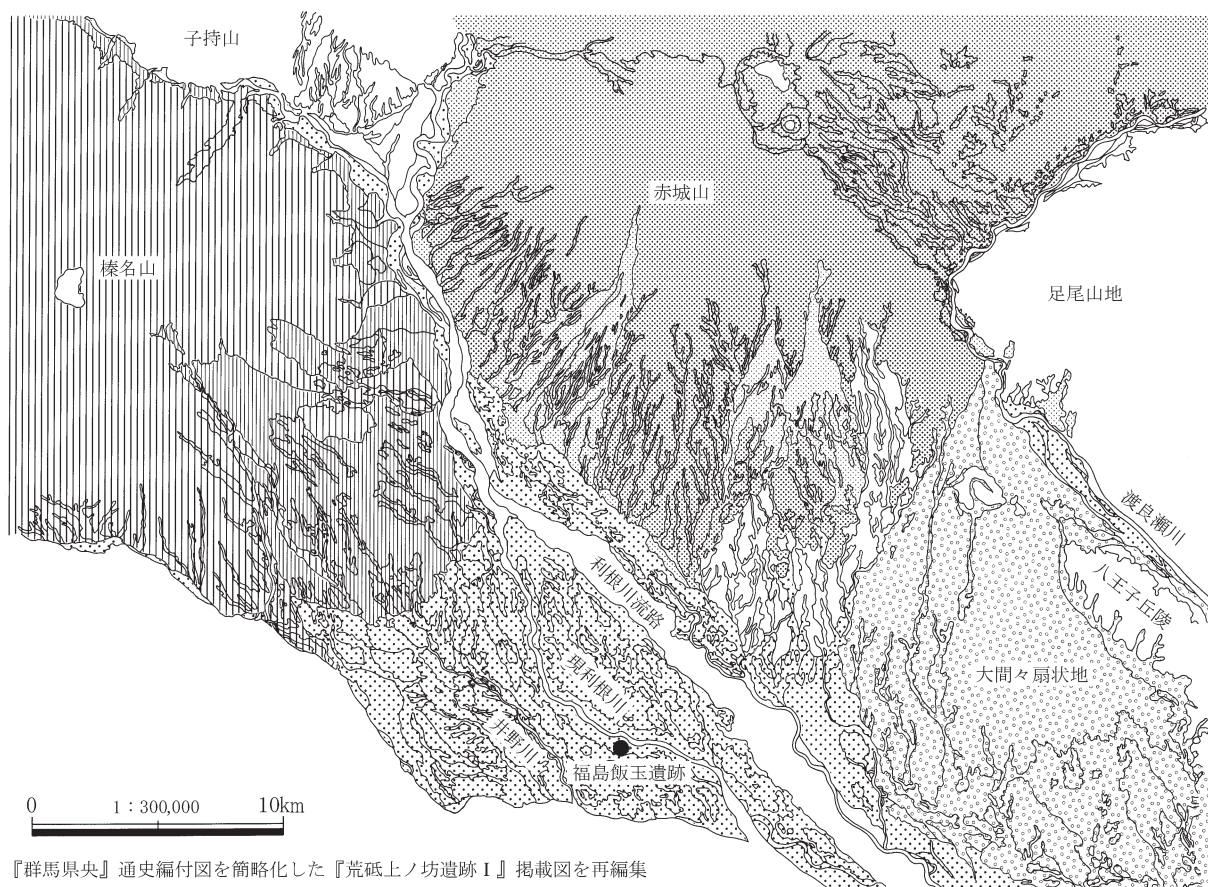
福島飯玉遺跡は、群馬県佐波郡玉村町の中央部からやや北西寄り、大字福島に位置し、JR高崎線の新町駅から北に約4.5kmの距離にある。

本遺跡の所在する佐波郡玉村町は、関東平野の北西端に位置し、東経139度07分10秒・北緯36度22分32秒(本遺跡の位置)を測る。地形的には低湿地と微高地の違いによる多少の高低差があるものの、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜する平坦地が形成されている。標高は68mから69mを測る。町域の北東部を北西から南東に利根川が流れ、西には井野川が南流している。また、南には井野川と合流し南東方向に流れる烏川がある。

遺跡の南約1.3kmには日光例幣使街道(現国道354号)が東西に、西約3.5kmには関越自動車道が南北に走る。北約2.0kmには高崎を分岐点とし、太田ICまで

開通した北関東自動車道が東西に横断する。遺跡地周辺には、圃場整備により整然と区画された水田地帯が広がり、米麦二毛作を中心とした農業が行われてきたが、近年は隣接する前橋市や高崎市、伊勢崎市などのベッドタウンとして住宅建築が激増し、人口もここ数年で著しく増加した。また、開発の余波による大型商業店舗の進出や工場、倉庫などといった生産・物流企業関連の施設も増加の傾向にある。それに伴い主要道路の建設や整備、利根川の橋架建設などの交通網の整備が大々的に行われ、玉村町はここ数年で著しい発展と変貌を遂げてきている。

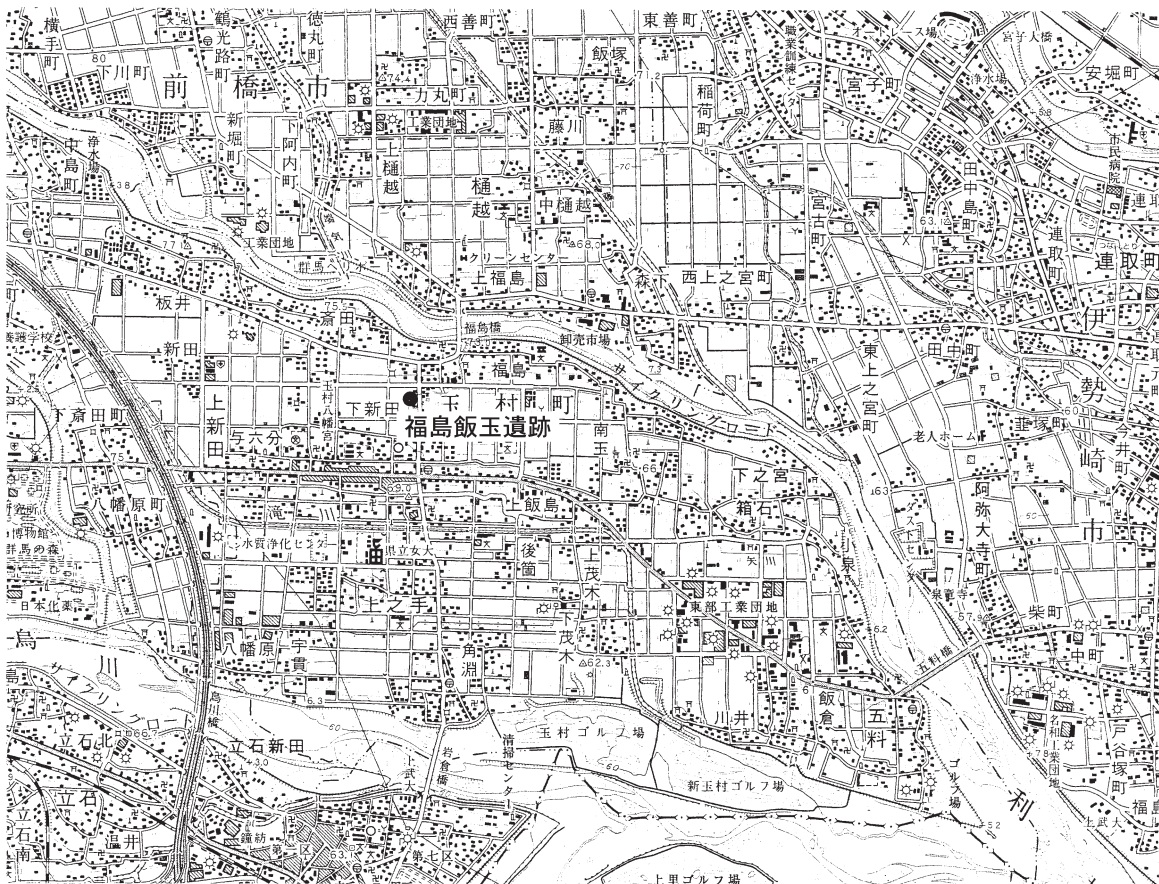
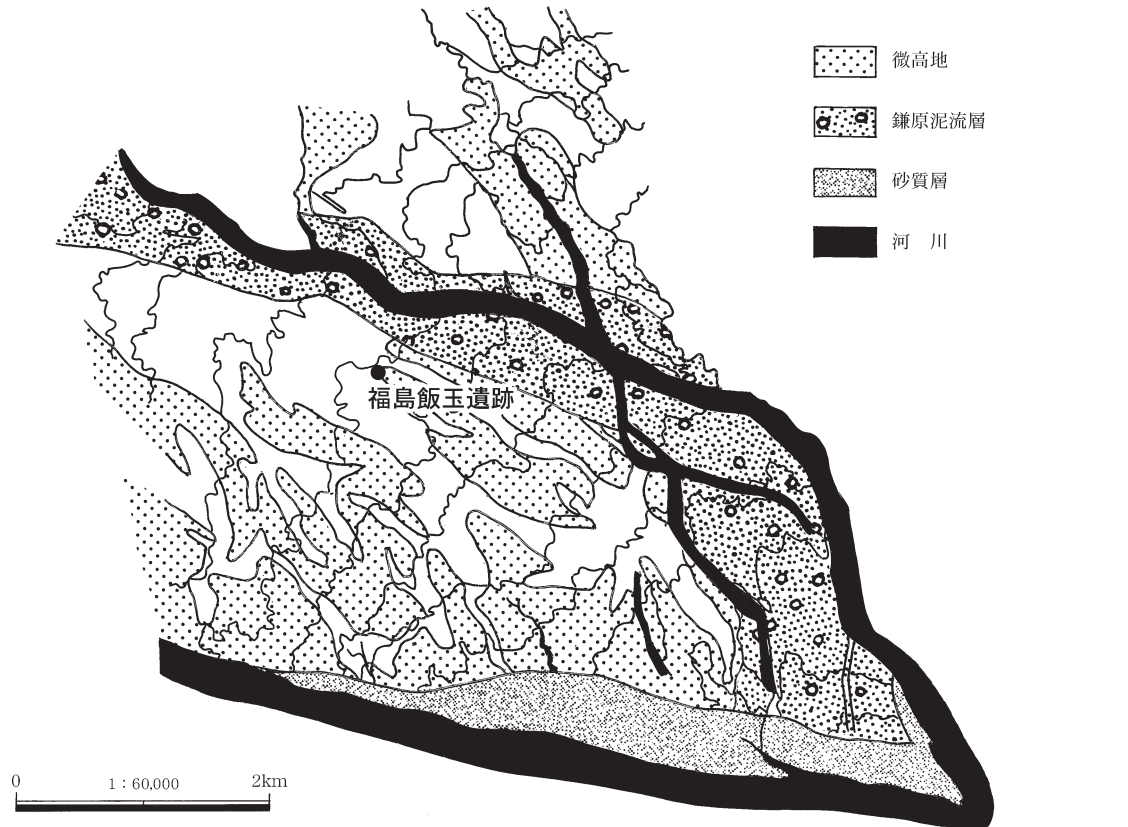
福島飯玉遺跡は、この玉村町の利根川右岸前橋台地の南端に立地する。この前橋台地は、洪積世後期、利根川によってもたらされた、厚さ200m以上も堆積した前橋砂礫層の上に、約20,000年から24,000年前の浅間山の山体崩落に起因する前橋泥流が極めて短期間にこの台地を覆って堆積し、形成されたものである。凝灰角礫岩を含むこの土層は前橋泥流堆積層



『群馬県史』通史編付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡1』掲載図を再編集

第3図 群馬県中央部の地形と福島飯玉遺跡の位置

3 遺跡の立地と周辺の遺跡



第4図 福島飯玉遺跡周辺の地形

I 発掘調査と遺跡の概要

と呼ばれ、西は高崎市の旧群馬町域から高崎市北・東部の平野部へと広がり、東は前橋市の北東部から伊勢崎市西部にかけて10m以上の厚さで堆積しており、烏川と広瀬川とに挟まれた県央の平野部の基盤層となっている。この前橋泥流堆積層の上には、シルト・粘土・砂・泥炭層などによって構成されている水成ローム層が堆積している。シルト・泥炭層は水中や湿潤な環境で形成されることから、この時期の前橋台地が湿地状態であったことを示している。科学的分析によると、水成ローム層に含まれる泥炭質粘土層は約13,000年前という測定値を示し、現在の1000m～1500mの山岳地帯の落葉樹林帯を形成する植生が推定できることから、その形成はウルム氷期に比定されるようである。

こうして形成された前橋台地上には洪積世後期以降、利根川をはじめとする幾つかの河川が流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成していった。特に台地の東側を流れる利根川は、榛名山南東麓の末端を浸食する形で南流している。約24,000年前は、総社町辺りから新前橋駅を経て染谷川、滝川付近を流れ、井野川に注いでいたとされる。その後、約17,000年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。現在は前橋市大手町付近から、玉村町五料付近まで、前橋台地を貫通している。現在の河道に移ったのは中世後期であると考えられている。その後、利根川は大きな変流こそ起きなかったが、洪水などの氾濫を度々起こし周辺の小河川に影響を与えながら前橋台地を刻み続けた。その結果、後背湿地と微高地とが複雑に入り組んだ地形が形成された。

利根川は、中世の変流後も幾度となく大洪水を引き起こし、本遺跡においても利根川の洪水堆積層に被覆された水田や畠が確認されている。近年に至っても1947(昭和22)年のキャサリン台風の直撃を受け、町はその氾濫によって大きな被害を被っている。

(2) 周辺の遺跡

ここでは福島飯玉遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境についてふれてお

きたい。概観する範囲は玉村町とこれに接する前橋市の一部である。レイアウトの都合により、第5図から玉村町南東部を除外した。

第6図は、第5図よりやや広い範囲の中・近世の城館・屋敷の分布の在り方をまとめてみた。

なお、本遺跡は西接する斉田竹之内遺跡との間に遺跡を区分するような大きな地形の変化はない。検出された遺構の種類、内容もほぼ同様である。ゆえに、福島飯玉遺跡の理解は、斉田竹之内遺跡の成果と合わせ行われるべきものと考えられる。

以下、玉村町周辺の遺跡の動向について時代ごとに記しておく。なお、玉村町域においては、現在までに旧石器時代の遺跡は知られていない。

【縄文時代】本遺跡においては石鏃1点の出土を見たが、玉村町域における縄文時代の遺跡分布は非常に稀薄である。遺構としては福島曲戸遺跡(9)、福島大光坊遺跡(7)、上之手石塚Ⅲ遺跡(40)、角瀨城遺跡(47)で土坑が検出されているが、竪穴住居の存在は現在のところ知られていない。この他に福島飯塚遺跡(5)などで少量の土器の出土が知られる。上新田中道東遺跡(4)や砂町遺跡(76)では有舌尖頭器が出土している。

【弥生時代】縄文時代に引き継ぎ弥生時代の遺跡分布も稀薄である。その中、上飯島芝根Ⅱ遺跡(24)で中期後半の住居1軒が検出されている。一万田遺跡(65)では中期後半の再葬墓が、上之手Ⅲ遺跡では土坑が検出されている。この他に福島飯塚遺跡などで少量の土器が出土している。

【古墳時代】古墳時代前期になると玉村町の遺跡分布は弥生時代後期の状況から一転、多くの集落が形成される状況が見られる。国道354号事業関連の調査例としては、本遺跡周辺の福島曲戸遺跡、福島大光坊遺跡、福島久保田遺跡(8)、上新田中道東遺跡などがある。

町域の南側、烏川左岸では上之手八王子遺跡(34)や下郷遺跡(37)、角瀨城遺跡などが知られている。各地域とも圃場整備が進み、旧地形を復元することが困難になっているが、沖積地を臨む微高地上に集

落が占地していたものと考えられる。

砂町遺跡では4世紀初頭と後半の2時期に掘削され溝が検出されている。

また、上新田中道東遺跡、福島飯塚遺跡、赤城遺跡(38)などの遺跡から古墳時代前期の方形周溝墓が検出された。下郷遺跡では28基の方形周溝墓をはじめ円形周溝墓、土坑が前方後方墳や前方後円墳とともに検出された。前期の主要古墳としては、前方後円墳の川井稲荷山古墳(芝根7号墳)・下郷天神塚古墳、円墳の軍配山古墳(53)が知られている。

中期の古墳としては、前方後円墳とされる梨ノ木山古墳(49)が5世紀後半の築造である。他に横堀遺跡で5世紀後半の円墳が検出されている。

後期には町域東南部の古墳分布が充実している。この時期の前方後円墳としては、小泉大塚越3号古墳やオトカ塚古墳(52)が知られる。また、烏川左岸の若宮・八幡原古墳群(43)や角淵古墳群、川井古墳群では、6世紀から7世紀にかけてと広範囲にわたる群集墳が形成されている。しかしながら本遺跡の周辺にはほとんど古墳の分布が見られず、天神古墳(13)が円墳の可能性を指摘されているにとどまる。また、7世紀代の有力古墳についても不明である。

古墳の分布から見れば、前期の集落は中期・後期へと継続して展開していったことが考えられるが、調査成果からはそれを読みとることは困難な状況にある。

本遺跡においては、2b区でHr-FPあるいはHr-FA泥流下から、いわゆる小区画水田を検出したが、近接する斉田中耕地遺跡(3)、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡(6)、福島大光坊遺跡、福島久保田遺跡、福島曲戸遺跡で古墳時代後期の水田が検出されている。

【奈良・平安時代】現在の玉村町周辺は律令期の那波郡域にあたり、倭名類聚抄に記載された佐味と、鞆田郷・朝倉郷の一部に比定することができる。また、地域内に延喜式内社の火雷神社と倭文神社の2社が鎮座している。

奈良時代の集落は、福島稲荷木遺跡(10)や上之手

八王子遺跡をはじめ、古墳時代同様微高地上に立地する傾向がみられる。さらに平安時代の集落は本遺跡に隣接する斉田竹之内遺跡(2)、福島飯塚遺跡の他、上之手八王子飯遺跡や行人塚遺跡などをはじめ、町域のほぼ全域で発見されており、奈良時代から平安時代の集落動向を知ることができる。

その中、一万田遺跡では直径1mの柱穴からなる柵列の検出や瓦の出土が見られ、9世紀前半から中頃を中心とする時期に郡衙や寺院などの官衙施設が存在していたことが想定される。福島曲戸遺跡からは「村長」と線刻された紡錘車や多数の緑釉陶器が出土している。福島飯塚遺跡の大溝からは、「家」などの文字が記された墨書土器、250点以上が出土している。上飯島芝根II遺跡からは銅印の出土が知られる。

砂町遺跡と上福島尾柄町遺跡(70)からは推定東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)(77)と考えられる幅員4mの道路状遺構が検出されている。

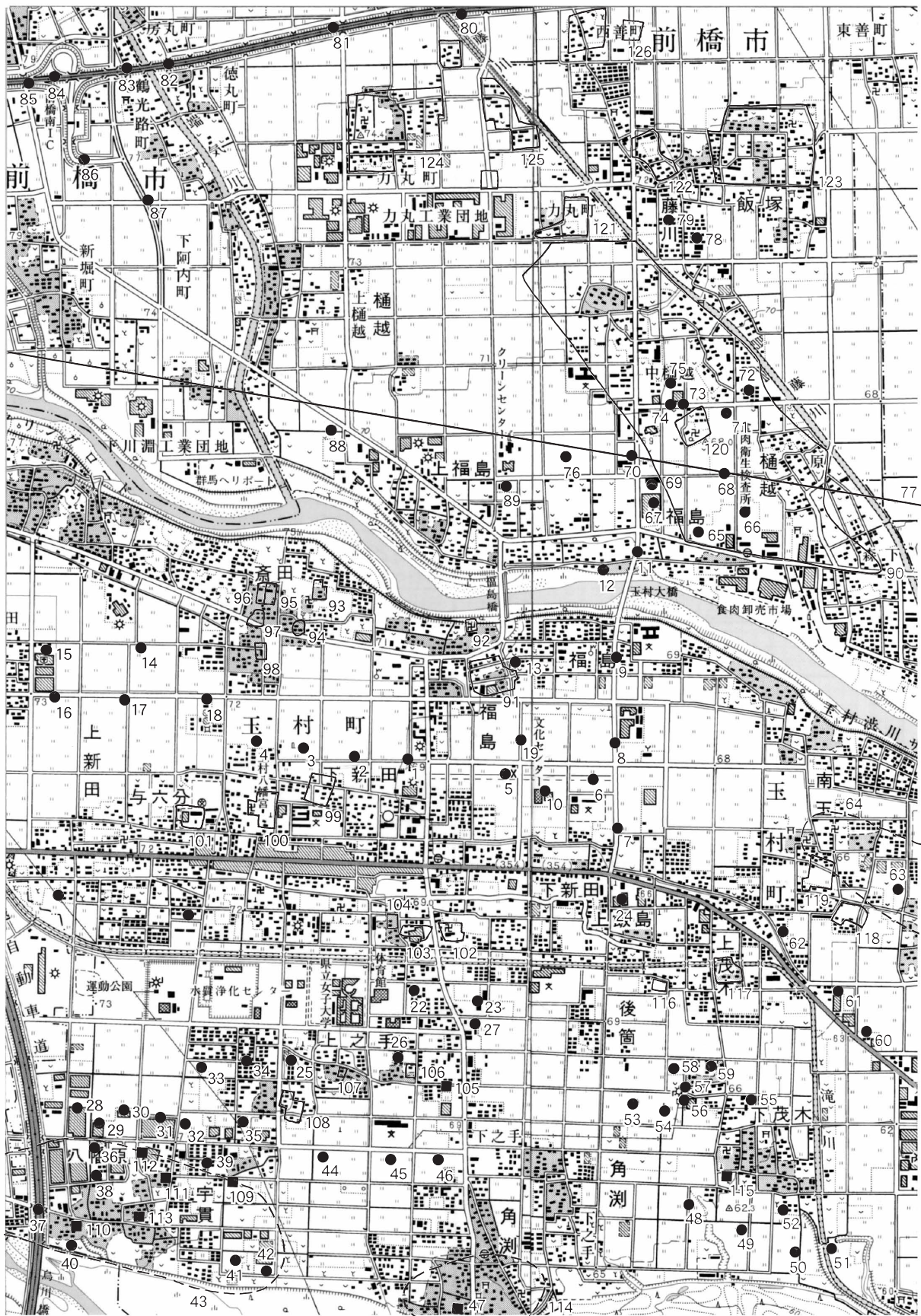
集落の分布と呼応するように、この時期、水田開発が急速に進行したのと考えられる。本遺跡の調査でも検出されたが、1108年(天仁元)年の浅間山噴火による軽石、浅間B軽石で埋没した水田遺構は町内各所から多数検出されている。町域のほぼ全域にわたる沖積地が、水田耕地化されていたと考えられるような状況である。

12世紀中頃には伊勢神宮収領の玉村御厨(90)が構えられたとする記録があり、これより以前には玉村保が成立していたと考えられている。

【中世】鎌倉時代の玉村町域は上野国奉行人安達氏、およびその被官である玉村氏の支配下にあったとされる。玉村氏は、玉村御厨成立の際の在地開発領主であったと考えられている。霜月の乱で安達氏没落後は、北条得宗家の支配下にあったと考えられる。

室町時代には、上杉氏守護のもと那波氏の領域となったとされる。戦国時代には、玉村町域のみならず上野国一帯が、上杉・武田・後北条氏の3氏の争奪戦の渦中に置かれた。この中、宇津木氏は大字福

I 発掘調査と遺跡の概要



第5図 福島飯玉遺跡周辺の遺跡分布(1)―調査遺跡

第2表 周辺遺跡の概要(1)―発掘調査遺跡

No		旧石器	縄文	弥生	古墳			奈住	平生	中世		近世		その他の遺構・遺跡の概要	参考文献	
					前	中	後			住	生	住	生			
					住墓	生	住墓			生	住墓	生	敷			田
1	福島飯玉遺跡		●						○	○		○	○	×	本報告の遺跡。	
2	斉田竹之内遺跡								○	○			○	×	福島飯玉遺跡に西接。	67
3	斉田中耕地遺跡						○		○		○			×	奈良・平安洪水水田。	68
4	上新田中道東遺跡		●	○	□				○					×	草創期有舌尖頭器、As-B上からの耕作痕。	69
5	福島飯塚遺跡		●	□	○		○	○	○		○	○	×	?	弥生土坑。平安大溝。	64
6	福島大島遺跡						○	○	○		○			×		66
7	福島大光坊遺跡		●	○	△		FP	○	○	○	?	○	○	×	縄文中期土坑。	60
8	福島久保田遺跡		●	○			FP	○	○	○	○		○	×	東側に久保田遺跡近接。	60
9	福島曲戸遺跡		●	○			○	○	○		?	○	○	×	縄文中期土坑、土師器焼成遺構、As-A復旧水田。	55
10	福島稲荷木遺跡					○		○	○	○					古墳時代住居時期不明、稲荷木II近接	
11	上福島遺跡								○				○	×	古墳時代の溝、ピット。	55
12	上福島中町遺跡		●						○	○	○	○	○		平安時代の土坑・古墳時代の溝。	61
13	天神古墳														円墳か。	6
14	一本木遺跡								○					×		47
15	中道西遺跡								○							17
16	中道西II遺跡								○			○			古墳時代溝。	17
17	中道東遺跡								○			○			古墳時代溝。	17
18	蛭堀東遺跡								○					×	古墳時代溝。	
19	福島稲荷木IV遺跡			□			FA	○	○							
20	上新田地区遺跡群								○							24
21	南東耕地遺跡														平安井戸、土坑、溝。	21
22	中袋遺跡											○			奈良の土坑。	32
23	曲田遺跡								○						平安の井戸、溝。	22
24	上飯島芝根II遺跡			○				○	○	○					弥生中期住居。	40
25	中郷遺跡															52
26	上之手立野遺跡							○	○		○	○				49
27	曲田遺跡II								○							23
28	八幡原赤塚遺跡														時期不明の溝。	39
29	八幡原赤塚III遺跡															42
30	赤城II遺跡														古墳土坑、平安土坑。	15
31	宇貫遺跡			○				○	○	○					中世井戸・土坑墓。	25
32	上之手地区遺跡群(2)								○							24
33	上之手地区遺跡群(1)								○	○		○				24
34	上之手八王子遺跡			○				○	○	○				×		5
35	行人塚遺跡							○	○						奈良・平安の溝・土坑。	52
36	八幡原赤塚II遺跡							○	○	○		○				33
37	下郷遺跡			○	□		○		○							39
38	赤城遺跡				□					○		○			下郷遺跡・宇貫城に隣接。	50
39	行人塚III遺跡							○								28
40	上之手石塚III・IV遺跡		●	●	○		○	○	○	○		○			弥生土坑。	12 13
41	蟹沢II～IV遺跡		●									○				10 11
42	蟹沢遺跡									○	○		○			36
43	若宮・八幡原古墳群			○	○	○									後期を中心とした古墳群。(下郷・城遺跡内の古墳も含まれる)	39
44	宮ノ下遺跡											○	○			27
45	若王子II遺跡								○			○	○			27

I 発掘調査と遺跡の概要

No.		旧石器	縄文	弥生	古墳			奈住	平生	中世		近世		その他の遺構・遺跡の概要	参考文献
					前	中	後			住	生	住	生		
					住墓	生	住墓			生	住墓	生	屋敷		
46	天神巡りⅢ遺跡						○					○	○	土師器焼成坑。	27
47	角瀧城遺跡	●		○	○	○			○	○		○	○	縄文時代の前期土坑・円墳・中世の土坑・近世の井戸。	37
48	浄土山古墳			○		○								前方後円墳。(前期・後期に再利用)	6
49	梨ノ木山古墳				○									前方後円墳。(後期)	6
50	殿台山古墳													前方後円墳か。	6
51	房子塚古墳					○								前方後円墳か。	6
52	オトカ塚古墳			○□		○								前方後円墳。(後期)	45
53	軍配山古墳			○										円墳、径約40m、高さ約6m、	6
54	玉村町第3号墳													円墳か。横穴式石室。	6
55	下茂木地区遺跡群														24
56	神明遺跡							○	○			○		6世紀後半、方墳か。	52
57	下茂木神明Ⅱ遺跡														24
58	萩塚古墳					○									6
59	滝川南遺跡						○					○			26
60	三境遺跡							○	○					18	
61	十王堂・十王堂Ⅱ遺跡								○					古墳。 箱石浅間山古墳を含む古墳群。 弥生後期再葬墓、平安柵列、江戸畑。	29
62	十王堂Ⅲ遺跡						○	○							52
63	社宮島古墳														6
64	箱石古墳群			○		○									6
65	一万田遺跡	●						○							44
66	神人村Ⅱ遺跡		●				○	○	○					弥生土坑。	7
67	尾柄町遺跡								○					8	
68	中之坊遺跡								○			○		奈良平安時代道路状遺構。	70
69	尾柄町Ⅱ遺跡													奈良道路。時期不明の土坑・溝。	9
70	上福島尾柄町遺跡							○						推定東山道駅路。(牛堀・矢野原ルート)	54
71	原浦Ⅱ遺跡							○	○			○		古墳時代前期の溝。	16
72	原浦遺跡							○				○		古墳前期溝。	20
73	松原遺跡													古墳時代中期の石製模造品の製作跡。	41
74	松原Ⅲ遺跡					○								41	
75	松原Ⅱ遺跡								○	○		○		52	
76	砂町遺跡	●								○		○		縄文草創期有舌尖頭器、古墳時代用水路。	70
77	推定東山道駅路													奈良時代道路遺構。	70
78	前通遺跡							○	○					35	
79	藤川前遺跡							○						14	
80	西善尺司遺跡	●		○□			FA	○	○	○		○	○	53	
81	徳丸仲田遺跡	●	●	○	○	○	FA	○	○	○		○	○	縄文草創期土器・石器、古墳時代前期大水路、新井屋敷。	58
82	徳丸高堰遺跡			○					○	○		○	○	4～6世紀中頃水田。	63
83	鶴光路榎橋遺跡							○	○	○		○	○	59	
84	西田遺跡	●				○		○	○	○		○		As-C混土下水田。	56
85	村中遺跡	●						○	○	○		○		As-C混土下水田。	56
86	下阿内町畑遺跡						FA	○	○	○		○	○	As-C混土上水田。	65
87	下阿内前田遺跡	●						○	○	○		○	×		65
88	柄田添遺跡							○	○	○		○	○		
89	金免遺跡							○							
90	玉村保・玉村御厨							○	○					12世紀後伊勢神宮領として成立。	

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。旧石器、縄文の●は住居以外の遺構・遺物の出土を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、○は古墳を、生の△はAs-C下の畠を、FAはHr-FA下の水田、FPはHr-FP下の水田を表す。中世・近世の屋敷の項は、屋敷を構成する堀・土居・掘立柱建物・井戸の検出を、その他の項は、土坑・墓・溝の検出を表す。



第6図 福島飯玉遺跡周辺の遺跡分布(2)一中・近世城館

I 発掘調査と遺跡の概要

第3表 周辺遺跡の概要(2)一中・近世城館

※参考文献、全ての城館1～4、項中はそれ以外の文献

No.	遺跡名	所在地	中世	近世	築・在城者 (推定・伝承)	遺跡の概要	備考	参考文献
1	福島飯玉遺跡	玉村町福島	○			屋敷2箇所、堀、用水路。	本報告の遺跡。近世には生産城に。福島飯玉遺跡に西接。	67
2	斉田竹之内遺跡	玉村町斉田	○			屋敷3箇所、堀。		68
3	斉田中耕地遺跡	玉村町斉田	○			一辺30m以上の環濠屋敷。		64
5	福島飯塚遺跡	玉村町福島	○			館と考えられる溝群。		
6	福島大島遺跡	玉村町福島	○			一辺108mの館。		66
7	福島大光坊遺跡	玉村町福島	○			2重堀、土居、外郭東西65m、南北75m、内郭東西、南北各45m。	34	
8	福島久保田遺跡	玉村町福島	○			東西80～95m、南北50～70m前後の堀。	東側に久保田遺跡近接。14世紀前半。	60
12	上福島中町遺跡	玉村町上福島	○	○		堀。	15・16世紀。	61
19	福島稲荷木IV遺跡	玉村町福島	○					
31	字貫遺跡	玉村町字貫	○			2重堀、土居。北側部分を調査。		25
34	上之手八王子遺跡	玉村町上之手	○				上之手八王子II遺跡近接。	5
36	八幡原赤塚II遺跡	玉村町八幡原	○			2重堀。南西部分を調査。	14世紀後半。	33
37	下郷遺跡	玉村町八幡原	○			一辺35～40mの区画。2重堀か。	15世紀。	
40	上之手石塚III・IV遺跡	玉村町上之手	○			屋敷3箇所。3号屋敷は一辺60m、新井屋敷の一部で北側部分を調査。	上之手石塚遺跡近接。13・14世紀。	12 13
42	蟹沢遺跡	玉村町上之手	○	○		館2箇所。1号館は2重堀、東西58m、南北55m。2号館は東西220m、南北26mの範囲に南北2郭か。		36
91	福島砦	玉村町福島	○					
92	宇津木館	玉村町福島	○					
93	田口下屋敷	玉村町斉田	○		田口俊政 (田村甚兵衛)	東西75m、南北100m、2重堀。		34
94	田村屋敷	玉村町斉田	○		(田村甚右衛門)	東西70m、南北55m、堀。		
95	温井東屋敷	玉村町斉田	○		温井氏?		斉田東屋敷とも呼称。	
96	温井西屋敷	玉村町斉田	○		温井氏?		斉田西屋敷とも呼称。	
97	町田屋敷	玉村町斉田	○		町田氏	東西・南北40m、堀。		
98	石原屋敷	玉村町斉田	○	○	石原氏	東西65m、南北75m、堀。		
99	玉村館	玉村町下新田	○		吉里入道	東西150m、南北120m、堀、戸口。		
100	玉村八幡館	玉村町下新田	○			堀、土居。		
101	与六屋敷	玉村町与六分	○		早川与六	東西120m、南北100m、堀。		
102	観照寺屋敷	玉村町上之手	○		伝玉村太郎	2重堀、土居。		
103	宮下屋敷	玉村町上之手	○			堀。		
104	内田屋敷	玉村町上之手	○	○	内田善右衛門	東西90m、南北150m、2重堀、土居、戸口。		49
105	木暮屋敷	玉村町上之手	○		木暮氏	南北約30～40m、東西約45m、堀。		49
106	秋山屋敷	玉村町上之手	○		秋山氏	東西約70m、堀。	文献49では近世。	49
107	重田屋敷	玉村町上之手	○		重田氏			
108	原屋敷	玉村町上之手	○	○	原嘉門	東西130m、南北80m、2重堀、土居、板碑、井戸。	東原屋敷、西原屋敷。	49
109	新井屋敷	玉村町上之手	○		新井氏	堀、土居、石仏。	北側に上之手石塚II・III遺跡。	13
110	八幡原城	玉村町八幡原	○			城郭、一城二郭。		1
111	字貫館(2)	玉村町字貫				2重堀。	北西部分を字貫II遺跡として調査。	25・57
112	字貫館(1)	玉村町字貫				外郭、東西・南北100m、2重堀。		25・51
113	字貫城	玉村町字貫	○		川端玄蕃	外郭100m、内郭50m、2重堀、戸口。		31
114	角瀧城	玉村町角瀧	○		鳥山式部大輔	城郭、2重堀、戸口。北辺・西辺の一部を調査。		37
115	下茂木屋敷	玉村町下茂木		○	斎藤甚五兵衛			
116	後箇屋敷	玉村町五箇	○		田口広安?	東西・南北75m、2重堀。		
117	茂木館本館(田口屋敷)	玉村町上茂木	○		田口氏	東西・南北150m、2重堀。		
118	南玉館(原武屋敷)	玉村町南玉	○			戸口、2重堀、土居、戸口。		
119	玉村城(南玉原屋敷)	玉村町南玉	○		金原氏	城郭、堀、土居、寺五輪塔、板碑。		
120	阿左美館	玉村町樋越	○		藤姓那波氏	東西・南北130m、2重堀、戸口。		
121	徳丸東環濠遺構群	前橋市徳丸町	○			堀。		
122	藤川環濠集落	玉村町藤川				堀。		
123	飯塚環濠集落	玉村町飯塚	○	○	宇津木氏			
124	力丸城	前橋市力丸町	○		力丸氏	堀、土居、戸口、根小屋。	15・16世紀。	
125	東力丸環濠遺構群	前橋市力丸町	○			堀。		
126	横堀環濠遺構群	前橋市西善町	○	○		6箇所の遺構、堀、土居。		

島を本拠地とした氏族である。

本遺跡の調査においては、これまで未周知であった中世に構築された未周知の屋敷2箇所が検出され、区画内から掘立柱建物、井戸などが検出された。屋敷は西接する齊田竹之内遺跡においても検出されている。また、上幅10mを越える用水路の掘削も注目に値するものである。

玉村町域においては、山崎一氏の長年の研究や、群馬県教育委員会が実施した城郭分布調査により明らかになったように、城郭や周囲に堀(溝)をめぐる屋敷が多数存在することが知られている。第6図には玉村町域とこれに接する前橋市南部地域における城郭関係の遺跡遺構を示した。

『群馬県の中世城館跡』によれば、中世の城郭・屋敷として玉村町域内で34箇所を掲載している。この中で観照寺屋敷(102)、玉村城(南玉原屋敷)(119)、南玉館(原武屋敷)(118)の存続期間を13世紀、阿左美館(120)を13～16世紀としている。角淵城(114)は15・16世紀、田口下屋敷(93)、茂木館(本木館)は16世紀とする。

また、近年の発掘調査においても多数の城郭・屋敷の検出がなされている。国道354号関連の遺跡では齊田竹之内遺跡、齊田中耕地遺跡、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡で当該期の遺構・遺物を検出している。また、玉村町教育委員会により、久保田遺跡、宇貫遺跡(31)、八幡原赤塚II遺跡(36)、上之手石塚遺跡、蟹沢遺跡(42)、内田屋敷(104)、原屋敷(108)、田口下屋敷などが調査されている。

八幡原赤塚II遺跡からは14世紀後半に位置づけられる内耳鍋が、蟹沢遺跡からは13世紀代の土師質土器皿が出土している。福島砦は本遺跡の東北東方向600mに位置し、那波氏に関連するとされる。福島氏所蔵の絵図から一城二郭と推定されているが、築造年代は不詳である。遺構は消滅したとされる。福島久保田遺跡と久保田遺跡の調査では、東西80～95m、南北50～70m前後の長台形に区画溝がめぐると考えられる屋敷の存在が明らかになり、その内区から掘立柱建物、井戸などが検出された。築造年代は14世

紀前半と考えられている。

生産遺構としては、本遺跡周辺から東側の国道354号関連の各遺跡において、畠遺構を検出している。福島久保田遺跡では小範囲であるが、1427(応永34)年に起こったと推定される大洪水による堆積層で埋没した水田が検出されている。上之手立野遺跡(26)では水田・畠が検出されている。利根川の変流以後、町域は数々の洪水被害を重ねて受けることとなる。

【近世】近世の玉村町域は天領、藩領が複雑に入り組んでいたようである。『玉村町史』によれば1601(慶長6)年、諏訪頼忠転封後は徳川幕府代官伊奈忠次の管掌となったという。伊奈氏は1610(慶長15)年に滝川用水を完成させ、周辺の新田開発を推進した。

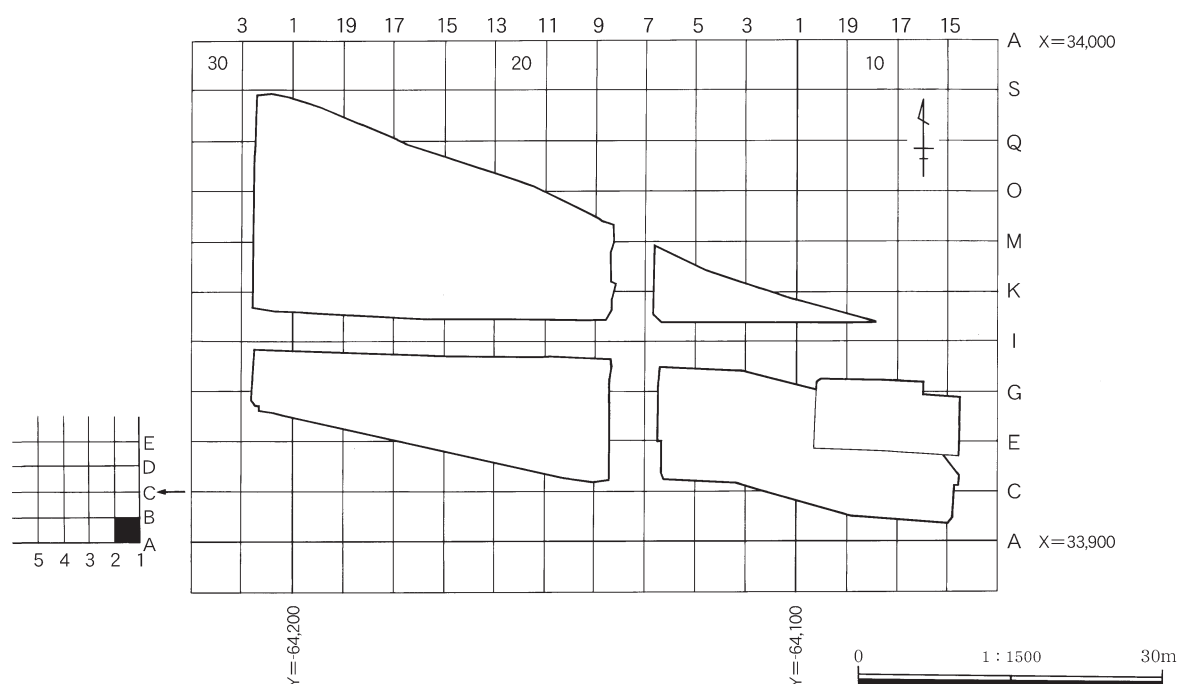
1668(寛文8)年には前橋藩酒井氏の知行となる。本遺跡の含まれる福島村の村高は871.9石であったとされる。1764(明和元)年の明細帳は幕府代官へ提出している。1812(文化9)年の明細帳は旗本の二相給になった際の提出である。1647(正保4)年以降は、日光例幣使の通行により、街道・玉村宿が周辺地域の中心として整備されていく。

中世に続き、江戸時代の屋敷も多数形成されている。それらは、伊奈忠次の陣屋が置かれたとされる玉村館や与六屋敷、内田屋敷などに代表される。

上福島中町遺跡(12)では、1783(天明3)年の浅間山噴火の際に発生した泥流により埋没した建物跡や、陶磁器をはじめとする多種・多様の生活用具が検出された。樋越諏訪前遺跡では、家屋・植え込み・土手畠が検出された。利根添遺跡では、矢川の堤防と下之宮と南玉の村境の役割を兼ねていたと考えられる土手が泥流下に埋没した形で検出された。この時の泥流災害により旧芝根村はじめ町域全域が大きな被害を受けている。

生産遺構では、1783(天明3)年時に埋没した水田・畠、その耕作地を復旧する際に天地返しのために掘削された復旧溝・復旧土坑が福島治郎前遺跡、天神前II遺跡をはじめ多数の遺跡から発見されている。

I 発掘調査と遺跡の概要



第7図 福島飯玉遺跡調査区の位置とグリッドの設定

4 調査の方法と経過

(1) 遺跡の呼称と調査区の設定

調査対象地は、平成4年度に玉村町教育委員会が発行した『玉村町の遺跡』に町台帳125として登載される周知の包蔵地の一部であった。遺跡の呼称については、調査に先立ち、玉村町教育委員会、群馬県教育委員会、当事業団の3者により協議を行った上、従来からの当事業団の遺跡命名法を踏襲し、遺跡所在地の大字名「福島」に小字名である「飯玉」を付し、「福島飯玉」遺跡とした。

本遺跡の東側には、主要地方道藤岡大胡線を挟み、福島飯塚遺跡が、西側には南北方向の町道を挟み斉田竹之内遺跡が接し、さらに斉田中耕地遺跡、上新田中道東遺跡へと続いている。

発掘調査に際しては、(2)に後述するような国家座標を基準とする区画やグリッドの設定とは別に、国道354号高崎玉村バイパス計画路線内を南北に走行する現道および水路を境界として、任意の調査区に区分けした。第7図のグリッド設定図中の調査区内に表記する1区から4区がこの任意の調査区呼称である。なお、2区については工事工程との都合か

ら、北東部分の調査を平成13年度に実施した。この部分を2 a区と呼称し、平成14年度に調査を行った残りの部分を2 b区とした。

(2) グリッドの設定(第7図)

国道354号高崎玉村バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査においては、国家座標(旧測値系)に基づき玉村町全域を網羅するように南東隅の座標 $X = 30,000$ m・ $Y = -60,000$ mを起点とする10km四方の区画を設定し、それを「地区」と呼称した。

そして、その「地区」を1km四方に分割し、南東隅から北西に向けて1～100の番号を平行式に付して「区」(大区画)とした。

次にこの大区画を100m四方に分割し大区画同様に番号を付し、「中グリッド」とした。

さらに中グリッドを5m四方に分割し、「小グリッド」と称した。小グリッドには南東隅を起点として西方向(X軸方向)にアラビア数字を「1～20」、北方向(Y軸方向)にアルファベットを「A～T」と付した。発掘調査の実施にあたってはこの「小グリッド」を基本としている。

なお、福島飯玉遺跡の各区は、「34区」(大区画)の「20」「30」(中グリッド)内に位置する。

この報告書で記載するグリッドは、このような大・中・小の各区画のうち、基本的に「中グリッド」および「小グリッド」を表記することで特定している。例えば「20A-1グリッド」と呼称するものは、「20」中区画、「A-1」小区画を表している。

(3) 調査の方法

調査対象地は水田地域を横断するため、耕作期には農業用水が導水され、遺跡調査に影響を生じることが想定されるため、事前に調査区周囲に排水用の止水溝を設定した。その際、土層断面の観察を行い、堆積土層や遺構確認面の把握に努めた。

この段階で、複数の火山噴出物堆積層や洪水氾濫層などが堆積土層中に確認することができ、同時に複数の遺構面の存在も認識されるものであった。さらにそのような自然堆積層、遺構面は遺跡内に均一に存在するのではなく、比較的小範囲で、残存状況が大きく異なる点も合わせて看守された。

発掘調査に際しては、表土および火山噴出物堆積層や洪水氾濫層などの遺構確認面被覆層、および3区用水路の埋没土掘削についてはバックホーによる重機掘削を行い、この間に人力での遺構検出作業を継続的に実施した。

確認された遺構は、中央部に土層確認用のベルトを設定し、調査を進めた。なお、土坑、ピットなど小規模な遺構についてもこれに準じた。

遺構名称は、各区ごと、掘立柱建物・土坑・溝・ピットなど遺構種別ごとに1号から順次番号を付した。しかし、調査の都合上一部に重複や欠番も生じている。整理作業時も原則として調査時の遺構名称および番号のまま報告しているが、重複などが明らかかな場合はその段階で変更した。なお、遺構番号の序列は遺構の時間的前後関係を示すものではない。

遺構の記録は、実測図化と写真撮影により行った。遺構の図化は、遺構の状況に沿って縮尺40分の1、20分の1により図化した。5面の屋敷部分や浅間B軽石下水田をはじめとする水田・畠遺構については調査対象部分をグリッドに則して分割して図化を進めた。特殊な場合はこの限りではない。

遺構写真は、モノクロ写真を6×7判および35ミリ1眼レフカメラ、カラー(リバーサル)を35ミリ1眼レフカメラにて撮影した。また、遺構が広範囲にわたる水田遺構や屋敷部分の溝・用水路などは業者に委託し、気球による航空写真測量で効率化を図った。状況によっては、気球・高所作業車を利用して写真撮影による記録も行った。

(4) 調査経過

福島飯玉遺跡の調査は2001(平成13)年度、2002(平成14)年度に行われた。

2001(平成13)年度は4月に調査事務所を設営し発掘の準備に入った。調査は職員3名1班の体制で西接する斉田竹之内遺跡の調査と併行して実施した。

調査区の設定後、3区の表土削平から調査を開始した。また、周辺が水田地帯のため、夏季の出水に備え、あらかじめ調査区境界に沿って止水溝を掘削、防水対策を行った。

3区・4区の調査は、近世から古墳時代にいたるまでの間に、合計5面の遺構確認面を設定し、遺構の検出・記録を行った。調査は3区が4月から8月までの間、4区が4月から9月前半までの間で終了し、一部残務整理を継続しながら埋め戻し作業を行った。

その後、調査の主体は斉田竹之内遺跡へと移行していたが、12月になり工事用搬入路の着工に先立ち、2区の北東部分の調査が必要となった。この部分の調査区名を2a区と呼称することとし、11月末に表土削平を開始、12月中に調査を終了させた。

2002(平成14)年度の調査は、4月から職員3名1班体制で実施した。対象地は2区の中で昨年度に調査を行った2a区以外の部分であった。この部分を2b区と呼称し、6月末で調査を終了した。

調査日誌抄録

2001(平成13)年度

4月3日 調査事務所開設準備。

4月10日 調査開始。

4月11日 1区から4区までの調査区を設定。3区、重機にて表土削平開始。

I 発掘調査と遺跡の概要

4月12日	4区、止水溝掘削。	た51号溝の延長を確認するため、現行水路際にトレンチを設定、掘削。
4月16日	4区、表土削平開始。	
4月26日	3区、幅10m超の用水路の存在を確認。	2002(平成14)年度
5月5日	3区、調査区東側部分の浅間A軽石混土の橙色洪水層下水田面の検出を行う。	4月3日 調査開始準備。
5月11日	4区、浅間A軽石混土下水田調査開始。	4月18日 2b区、表土掘削開始。
5月22日	3区、浅間A軽石復旧溝調査開始。	4月23日 2b区、止水溝掘削。
5月25日	3区、浅間A軽石下水田、浅間A軽石下復旧溝全景写真撮影。	4月26日 2b区、浅間A軽石混土層面遺構確認作業。
6月11日	3区、7号溝調査。	5月10日 2b区、浅間B軽石下水田面精査。
6月18日	3区、7号・8号溝調査。	5月17日 2b区、浅間B軽石下水田空中写真撮影。
6月20日	3区、用水路検出作業開始。	5月24日 2b区、Hr-FP泥流層下水田確認作業。
6月22日	4区、ピット群はじめ、中世面の遺構調査本格化。	6月11日 2b区、Hr-FP泥流下水田空中写真撮影。
6月28日	3区、用水路調査終了。人為的に掘削した用水路と判明。	6月17日 2b区、埋め戻し作業開始。
7月4日	3区、浅間A軽石下畠耕作痕平面実測継続。	6月25日 2b区、埋め戻し作業完了。これをもって福島飯玉遺跡の全ての調査を終了。
7月12日	4区、墓坑・土坑の調査。	(5) 整理作業の方法
7月17日	3区・4区、空中写真撮影・測量(用水路・1号・2号屋敷など)。	福島飯玉遺跡の調査成果・出土遺物の整理作業、および報告書編集作業は2007(平成19)年4月1日から2008(平成20)年3月31日まで実施した。刊行作業は2008(平成20)年度に実施した。
7月18日	3区、浅間B軽石下面調査を開始。	遺構図面については、調査時作成の図面に編集作業を加えた後、トレース・版下作成・レイアウト等の作業を行った。
8月3日	3区、浅間B軽石下水田全景写真撮影。	出土遺物については、出土遺構・地点ごとに接合作業を行った後、報告書に掲載する遺物を選別・抽出した。実測に際しては、その一部について器械実測により素図を作成しこれを精図した。器形の復元が困難な資料については、断面のみ実測を行い、これに拓本を添付した。石器・石製品は石材同定を依頼した。作成した実測図は、トレース作業を行い、遺構図面と合わせ版下作成・レイアウト等の作業を行った。
8月20日	3区、用水路北側、Hr-FP泥流下調査開始。4区、柵列完掘、全景写真撮影、平面実測終了。	
8月28日	4区、古墳時代調査面調査。	
9月3日	4区、調査区北壁基本土層実測。	
9月4日	3区、調査区埋め戻し開始。	
9月6日	3区、平面実測を追加。4区、調査終了。	
9月13日	4区、埋め戻し開始。	
11月28日	2a区、表土掘削開始。	
12月10日	2a区、浅間B軽石下面の調査開始。	
12月17日	2a区、浅間B軽石下水田・3号溝・4号溝平面実測終了。Hr-FP泥流下面、トレンチを設定し遺構確認を行う。	掲載資料については、台帳作成後収納作業を行った。掲載を断念した土器・石器などは出土遺構・地点ごとに種別・器種の分類を行い、計数後収納した。
12月18日	2a区、調査終了。	記録写真類は、出土遺構・地点ごとに整理し、レイアウト・版下作成作業を行った。
2月19日	3区、齊田竹之内1a区東壁際で検出し	

II 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

(1) 基本土層と確認遺構

調査対象地周辺は、明治時代の地図によると水田と畠が入り組んだ土地利用の状況にあった。しかしながら、昭和30年代に圃場整備事業が実施されたことから、一帯は平坦な水田地帯となっていた。標高は68から69m前後である。調査直前の地目は、2区が商用地、工場用地、3区・4区は水田であった。

調査の結果、圃場整備以前における調査区内の地形は、遺跡の東端、2a区から2b区において、北西から南東に延びる小規模な沖積地が存在することが確認された。3区・4区では平安時代以降くり返された耕地化や、屋敷地の造成により平坦面が作り出されていたが、西接する齊田竹之内遺跡2a区では、周囲よりわずかに高い微高地が存在し、その部分が古墳時代前期、平安時代の居住域に当てられていたことが判明し、現在の地勢からは予想することができないような複雑な地形が、土中に埋没していることが判明してきたところである。

第8図右端に本遺跡の基本土層を示した。第8・9図に掲載した柱状図は、遺跡内の各所における土層の堆積状況を記録した模式図である。先に記したような埋没地形やその後の土地利用の変遷により、各区ごと、または同一区内でも土層の堆積に相違が見られ、遺構確認面も連続しない状況が見られた。以下、各層の概要を記す。

【1層】表土 1783(天明3)年以降の耕作土で、浅間A軽石を混入する土層である。この上に昭和30年代に実施された圃場整備時の客土が乗っているところもある。全体に浅間A軽石を多量に含む。

【2層】褐灰色土層 部分的に灰黄色や橙色をおびる。洪水による堆積層で、砂質。斑鉄が多く見られる。この層上面で第1面の遺構を確認した。

【3層】黄灰色土層 洪水堆積層である。数次にわたる堆積が確認される。橙色をおびる地点もある。褐灰色・灰白色の粘質土を含むが、全体に砂質である。浅間A軽石や浅間B軽石は含まれない。この層の上面で第2面の遺構を確認した。

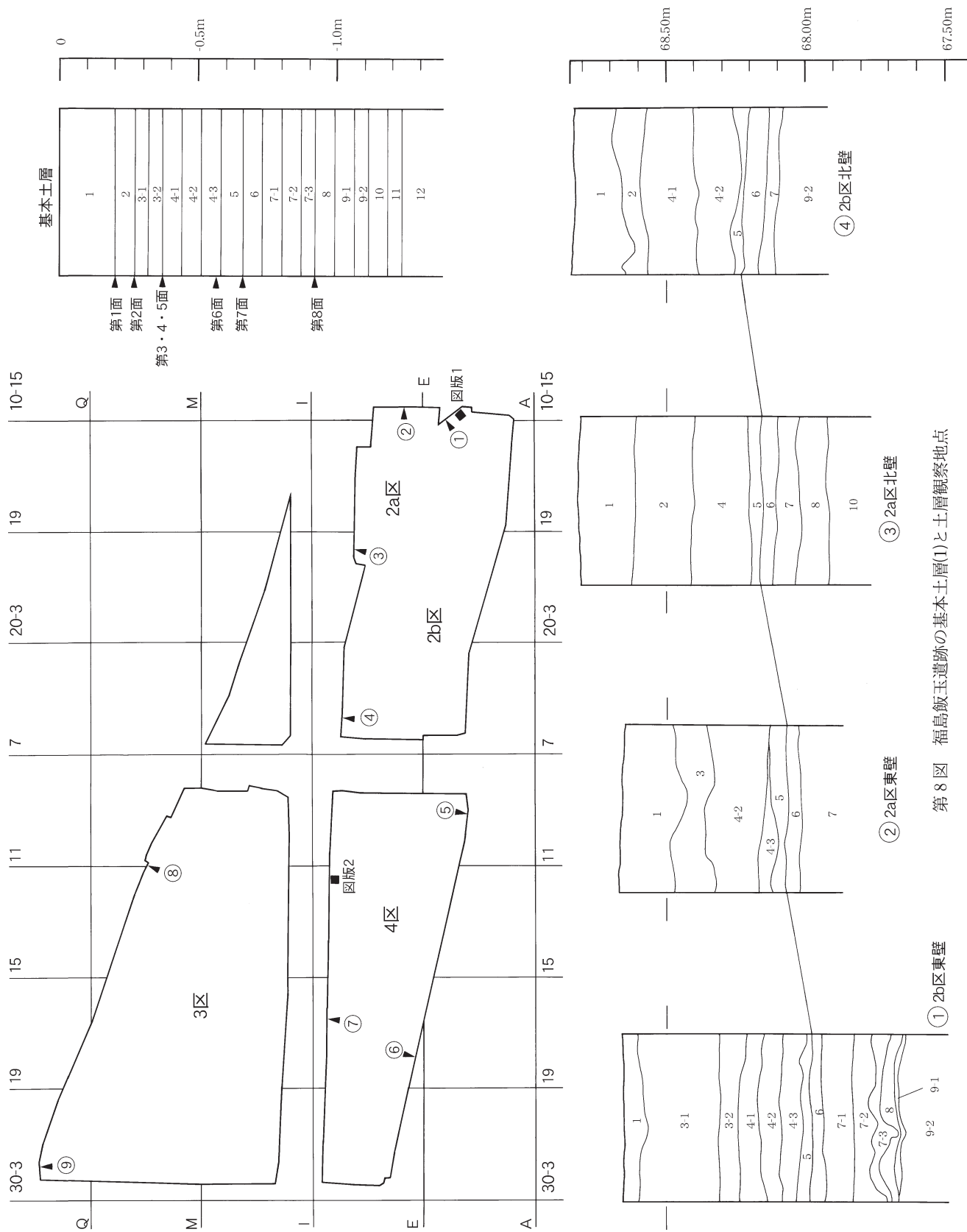
【4層】暗褐色土・褐色土層 3・4区では色調が灰黄褐色、にぶい黄橙色となる。いわゆる「B混」と通称される土層である。2b区・4区では浅間B軽石の混入の度合いにより細分された。4-1層は浅間B軽石を少量含んでいた。4-2層、4-3層は浅間B軽石を多量に含んでいた。この層上面で第3～5面の遺構を検出した。

【5層】浅間B軽石層 1108(天仁元)年に噴出、堆積した火山灰層。褐灰色である。第1次堆積層であるが、上層に火山灰の堆積は見られない。2a区、2b区、3区では調査区のはほぼ全面にその堆積が見られた。3区の調査区北壁では、4cmから10cmの厚さで堆積していることが確認されたが、4区では残存状況は不良であった。3区ではこの層の直上から畠の耕作痕が検出されたことから、これを第6面とした。また、2a区、2b区、3区では層下面から平安時代の水田遺構が検出された。これを第7面とした。

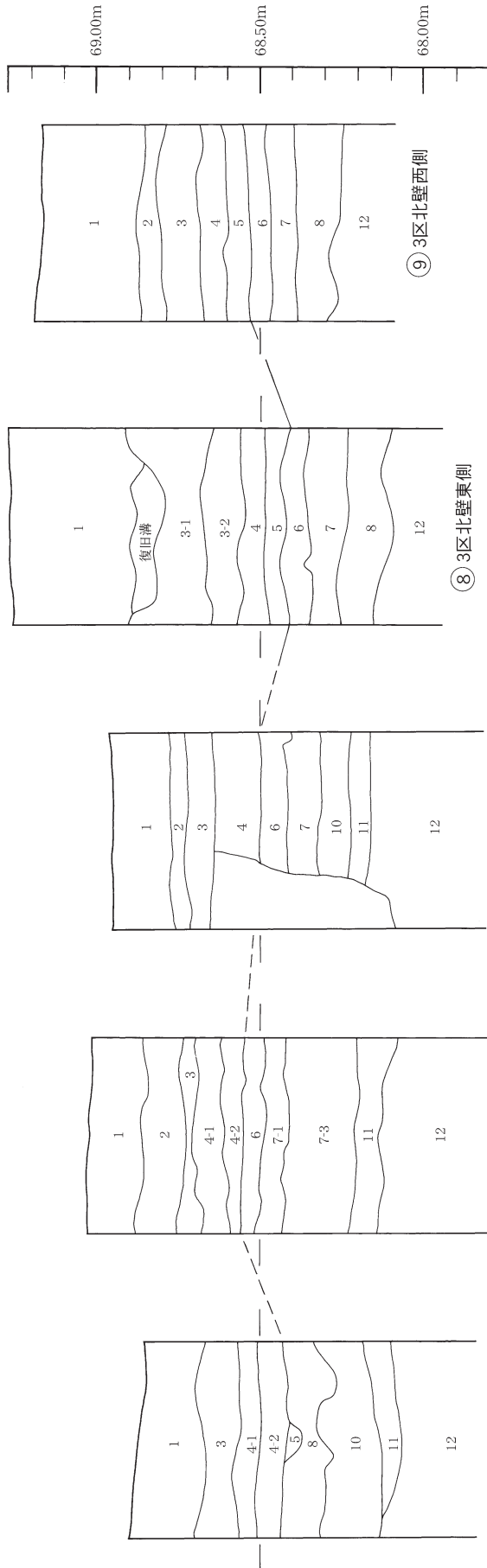
【6層】黒褐色土層 粘性をおびている。浅間B軽石によって埋没した水田の耕作土である。

【7層】青灰色土・褐灰色土層 榛名山二ツ岳の噴火に起因するHr-FP、およびHr-FAの降下に伴い発生した泥流堆積層と考えられる。4区東側部分を除く各区でその堆積が認められた。いずれも粘性をおびていた。この層の上下から第8面の遺構を検出した。2b区北東部分、4区調査区南壁西側部分では分層された。2b区では3層に細分された。最上層の7-1層は青灰色土である。次の7-2層は暗青灰色で、粘性が7-1層に比して弱くなっていた。2

II 発掘調査の記録



第8図 福島飯玉遺跡の基本土層(1)と土層観察地点



第9図 福島飯玉遺跡の基本土層(2)



写真1 2 b区東壁土層断面



写真2 4区北壁土層断面

II 発掘調査の記録

b区3号溝はこの泥流層で埋没していた。この上記2層はHr-FPに関わる泥流と考えられる。7-3層は粘性を有する黄色土で、Hr-FAに関わる泥流との調査所見がある。この層下面から2b区において、古墳時代水田面を検出した。

【8層】黒色土層 浅間C軽石を混入する土層である。「C混」と通称される。部分的に浅間B軽石やHr-FA粒が鋤き込まれたように含入している。2b区の水田検出部では粘性をおびた暗褐色土となり、水田耕作土と化していた。4区では堆積の確認されない部分が広範囲にわたっていたが、微高地部分で上層からの攪拌により削平された可能性も考えられる。古墳時代前期の土器を少量出土している。

【9層】黒色土層 2b区では混入物の少ない粘質土である9-1層と、これより色調の明るい9-2層に細分された。

【10層】黄褐色土層

【11層】浅間板鼻黄色テフラ(As-YP)層

【12層】灰白色シルト層

(2) 遺構の概要

本項では各遺構確認面の内容について、各調査区の調査状況、および遺構の概要と合わせて記しておきたい。

先に本遺跡の基本土層を示したとおり、本遺跡周辺は数次にわたる洪水や火山灰の降灰にみまわれており、これらに被覆された状態で遺構が残存していた。調査は洪水層や火山灰を鍵層に、上位面を第1面とし、以下順次、調査の進捗に則し、第2面、第3面と遺構確認面を呼称・表記してきた。その結果、江戸時代から古墳時代にいたる合計5面の遺構確認面を把握、各遺構の調査を実施した。

今回、整理作業を進める中で、個々の遺構の掘削時期を検討してみると、同一遺構確認面で調査を実施した遺構の中に、前後関係のある遺構が混在することが確認された。報告にあたり、これらの面と遺構のあり方を整理、細分した。具体的には、調査時の第1面の遺構群を1783(天明3)年の浅間A軽石降下前と、降下後の2面に分けた。また、調査時第3

面は、中世の屋敷地に関わる遺構を検出した面であるが、その中から屋敷地の区画、構成には関連性の低いと考えられる溝、墓坑、火葬跡、集石を分離し、2面に分けた。そのため、本報告書では、遺構確認面を第1面から第8面で呼称し、記載を進める。なお、各面の遺構の位置や種別については、第10~12図、第2表を参照いただきたい。

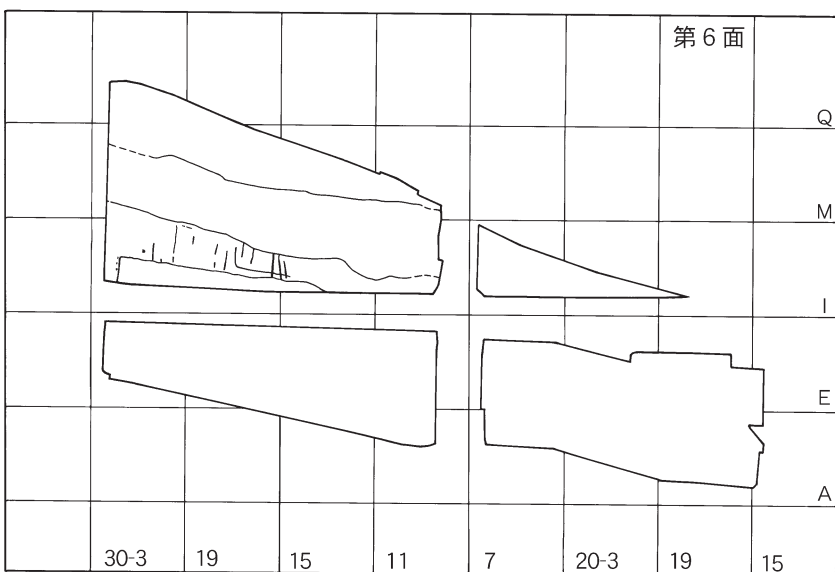
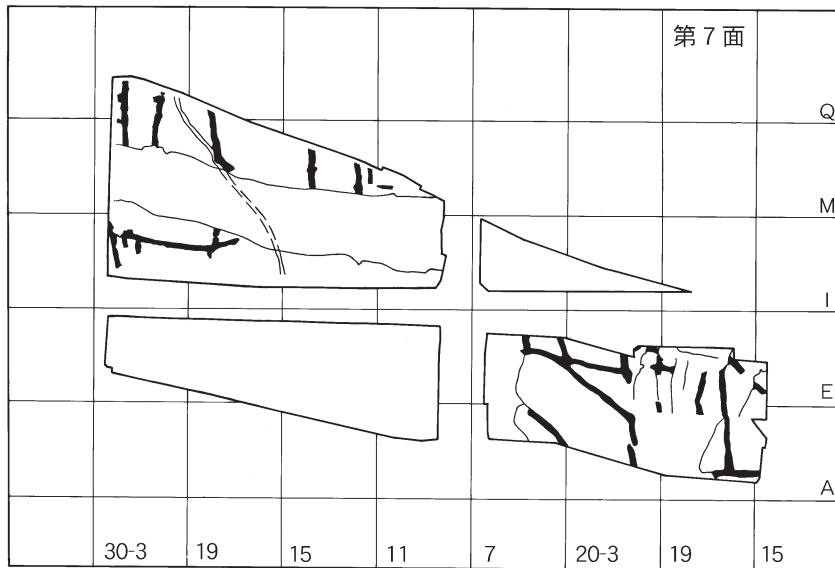
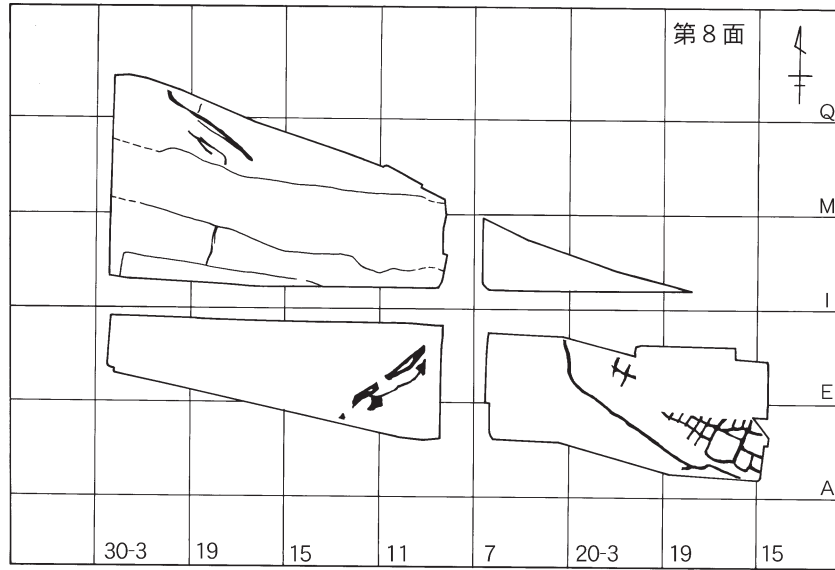
【第8面】古墳時代、6世紀中頃の榛名山ニッ岳の噴火後に起きた洪水層(FP泥流)の上面、および下面から検出した遺構である。3区で溝9条を、4区で溝3条、竪穴状遺構1基、土坑1基を検出した。2b区では、FP泥流により埋没した溝1条と、6世紀初頭の榛名山ニッ岳の噴火後に起きた洪水層(Hr-FA泥流)によって埋没したと考えられる水田が検出された。この水田は残存状態が不良で、畦畔の高まりはほとんど認められなかったが、小区画水田で浅間C軽石を混入する土層、いわゆる「C混」上で確認されたものである。調査時の第5面である。

【第7面】1108(天仁元)年に噴出、降下した浅間B軽石層によって埋没した水田が2a区、2b区、3区のほぼ全域で確認された。条里地割に沿った区画を基本としていたと考えられるが、一部に自然地形に合わせて、区画が不規則に歪んでいた部分も見られた。3区11号溝は水田区画を壊しているため、水田よりやや後出の遺構と考えられる。4区は第5面の遺構数が多量であったため、面としての調査が困難であった。調査時の第4面である。

【第6面】この面は調査時の第3面と第4面の間に位置づけられる面で、遺構を検出したのは3区だけで、浅間B軽石の堆積層の直上から、畠耕作痕と溝1条を検出した。

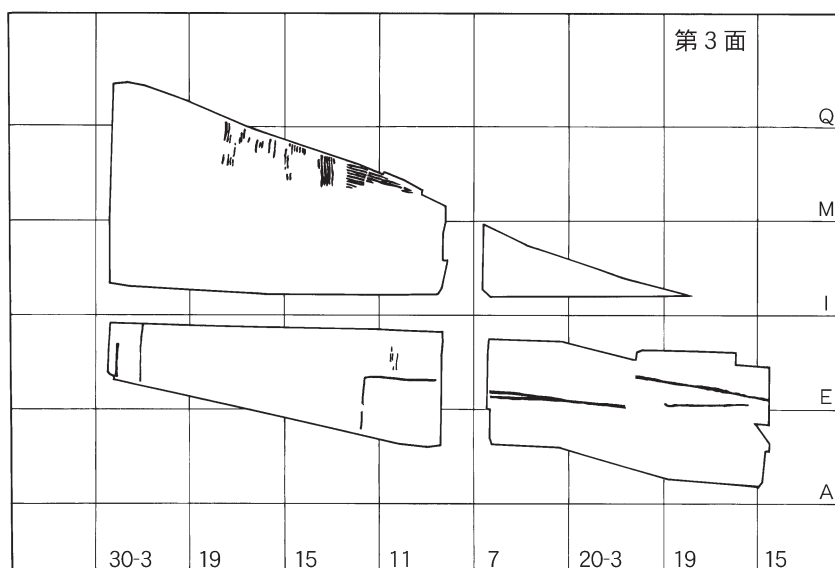
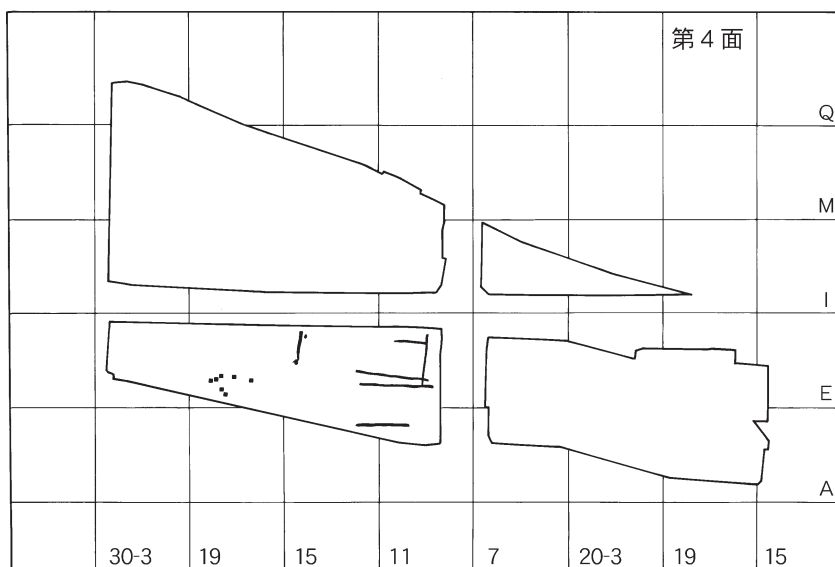
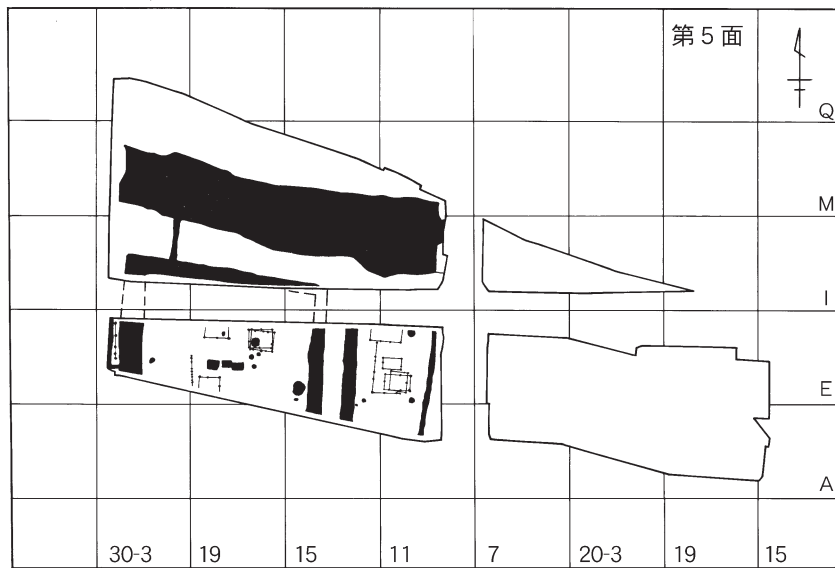
【第5面】調査時の第3面である。中世の遺構が数多く発見された。4区では周囲を溝で方形に区画した2箇所(1)の屋敷を検出した。区画内から合計500基近いピットを検出、井戸・土坑・柵列・溝を検出した。ピット群からは8棟の掘立柱建物が復元できたが、これに倍する建物が存在したことが考えられる。

溝からの出土遺物は比較的少量であったが、井戸

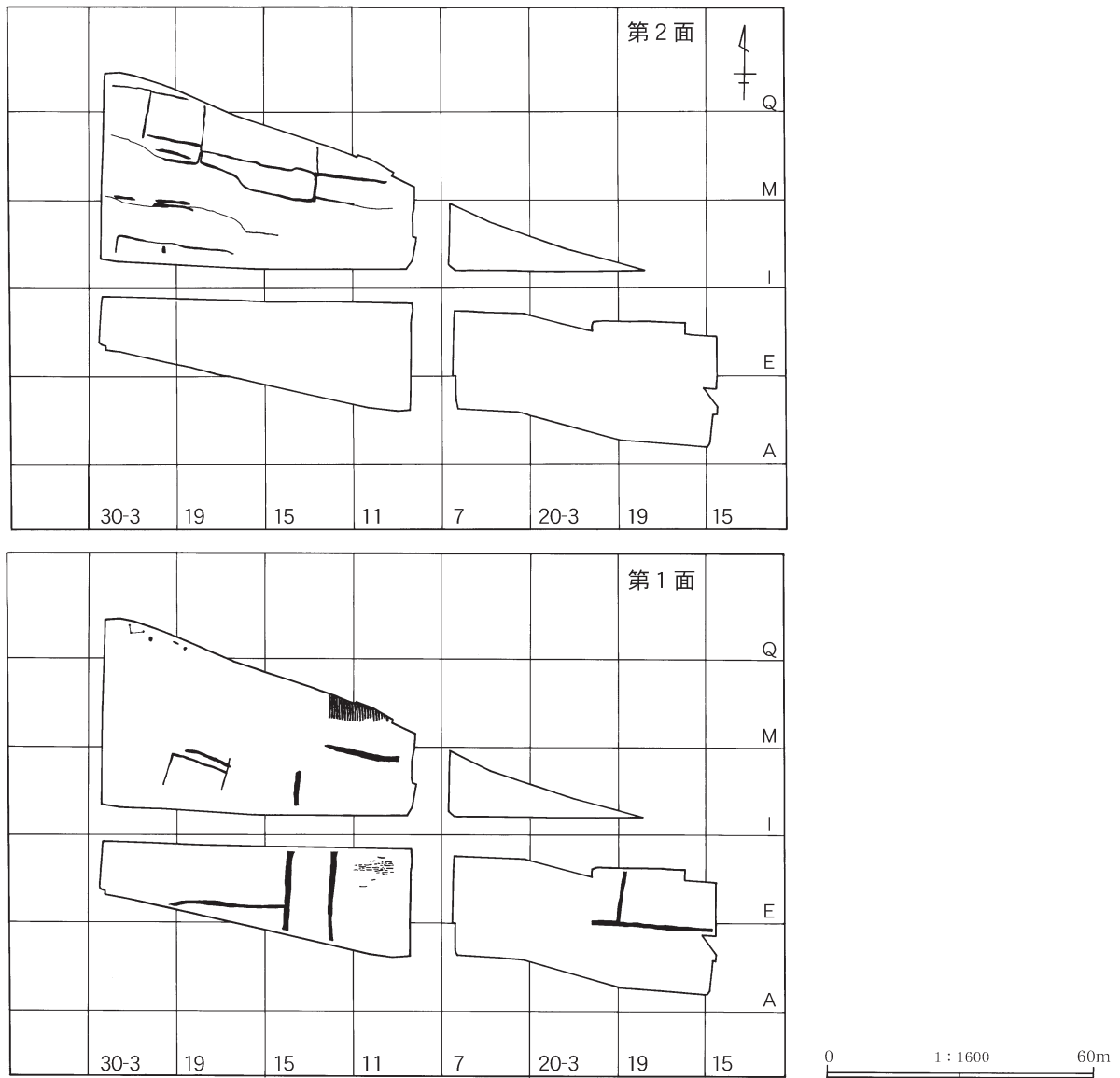


第10図 福島飯玉遺跡遺構調査の概要(1)

II 発掘調査の記録



第11図 福島飯玉遺跡遺構調査の概要(2)



第12図 福島飯玉遺跡遺構調査の概要(3)

第4表 福島飯玉遺跡確認遺構一覧表

	2 a 区	2 b 区	3 区	4 区
1 面	1・2号溝		1号掘立柱建物・水田・1~4号溝・復旧溝・1~3号土坑	1~3号溝・耕作痕
2 面			水田・畠(耕作痕)・5・6・9号溝	
3 面	3・4号溝	1・2号溝	水田・畠・12号溝	
4 面				8~11・13・14号溝・1号墓坑・1号火葬跡・1~6号集石
5 面			1号屋敷 7・8号溝	1号屋敷 1~4号掘立柱建物・1号柵列・4~6号井戸・5・6号溝・1・3~11号土坑・ピット(301個)
			屋敷外 用水路	2号屋敷 5~8号掘立柱建物・2・3号柵列・1~3号井戸・2号土坑・4・7号溝・ピット(87個)
6 面			畠・10号溝	屋敷外 4号柵列・15・17号溝
7 面	水田	水田	水田・11号溝	
8 面		水田・3号溝	13~21号溝	16・18・19号溝・1号竪穴状遺構・12号土坑

II 発掘調査の記録

を中心に陶磁器や軟質陶器、石臼、板碑などが出土した。

また、3区では、斉田竹之内遺跡で検出された用水路遺構が、調査区中央部分を横断するように掘削されていた。この用水路は、3区7号溝を通じて、1号屋敷の区画溝と接続していたことが確認されている。

【第4面】調査時の第3面から、4区の1号屋敷・2号屋敷の構成に直接関わらないと判断した遺構を分離したものである。溝6条、墓坑1基、火葬跡1基、集石6基がこれにあたる。墓坑・火葬跡から出土した銅銭はすべて中国からの渡来銭であった。

【第3面】洪水堆積層に被覆されていた、いわゆる「B混」土層上で確認された面である。調査時の第2面で、部分的に第4面、第5面もこの層上面を確認面としている。時期決定は困難であるが、室町から江戸時代初頭の面と考えられた。2a区、2b区では溝が2条ずつ、4区では水田、畠、溝1条を検出した。

3区畠は第5面用水路の旧流路北側部分で検出された。東西方向に1群、南北方向に3群以上、耕作痕が平行して掘削されていた。

また、2a区の調査区土層断面で、浅間B軽石を含む灰黄褐色土で埋没した畠耕作痕が確認されている。第3面から第6面までのいずれかの面に属するものと考えられる。

【第2面】洪水による堆積層に覆われた面で、浅間A軽石降下以前、江戸時代の遺構を3区で検出した。他の調査区では、その後の連続した土地利用の関係のためか遺構の検出はなかった。調査時には第1面と同一確認面として認識されていた面である。

検出した遺構は、水田・畠耕作痕・溝3条で、いずれも第5面に掘削された用水路の旧流路に起因して生じた微地形に則して形成されたものである。

【第1面】この面では、1783(天明3)年の浅間山噴火以降の遺構を確認した。本遺跡周辺では、広範囲にわたり浅間山噴火により被災した耕地を復旧するための、火山灰埋設溝(復旧溝の名称で報告)が認め

られる。本遺跡では、3区の北側部分で畠の復旧溝を検出した。同様の遺構は、隣接する福島飯塚遺跡や斉田竹之内遺跡でも検出されている。

その他に3区で浅間A軽石を混入する土層を耕作面とする水田を、4区で復旧溝とは様相の異なる畠耕作痕を検出した。

各遺構確認面における調査の概要は以上のとおりである。各区の調査面積は、2区が2165㎡、3区が2660㎡、4区が1652㎡で、合計6477㎡である。

今回の調査で得ることのできた資料は、60×37×15cmの遺物収納箱に6箱である。本報告書で掲載した資料の内訳は233点である。また、資料化の困難であったものの内訳は1158で、合計1391点である。

2 第8面の調査

(1) 概要

本項では、6世紀中頃の榛名山の噴火後に起きた洪水層(Hr-FP泥流)層下から発見された遺構について報告する。

2b区では、浅間C軽石を混入する黒色粘質土層上面において水田を検出した。検出面は2b区の調査としては表土層下、浅間B軽石層下に続く第3面である。水田は洪水層埋没後復旧された様子は見られない。また、微高地上から溝1条を検出した。

3区・4区の調査においては、上層から数えて第5面目の遺構確認面に当たる。3区では調査区西側部分で溝9条を検出した。いずれも幅の狭いもので、残存状態も不良であった。

4区では、調査区東側部分で溝3条、竪穴状遺構1基、土坑1基を検出した。溝は、2次堆積ロームの堆積により形成された微高地の北縁に沿うようにして掘り込まれていた。

2b区・3区・4区のいずれの調査区においても、本調査面において多数の風倒木痕が検出されている。2b区では微高地上に、3区では用水路の旧流路南側部分で見られた。倒木による根鉢の直径は、1.5～2m、中には3mにおよぶものも含まれていた。風倒木痕の存在は、耕地開発が進行する過程で、

周辺の環境が大きく変化していったことを表わしている。

(2) 水田

2 b 区水田 (第13～15図 PL 3)

位置 10A—14G (南東端)～20G—2 G (北西端)

形状 2 b 区東側を中心に東西32.8m、南北26.2mの範囲内で検出した。調査面積は422m²である。この部分の地形は、南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、水田はこの傾斜地から低位部にかけて形成されていたものと考えられる。

水田の区画は、東西方向の畦が等高線の走行に沿って延びている。走行はN—114°—Eである。南北方向の畦は等高線に直交していた。

検出した小区画は合計29区画を数えたが、このうち全体形状を把握できたものは6区画だけで、あとは一部分の検出にとどまった。形状は南北方向に長軸を有する長方形を基本としていた。No.9は平面、三角形であった。

全体を検出した小区画の規模は、南北1.77～4.48m、東西1.44～5.59mである。No.12は、他の区画の4区画分を合わせた広さを有していた。No.8も大区画である。

畦の遺存状態は不良で、ほとんどの区画で高まりがなく、上端・下端の区別がなくなっている部分が大勢であった。畦の幅は、下端0.25～0.72m、上端0.28～0.34mであった。高さは良好な地点でも0.02～0.04mであった。調査時の所見では、No.4・12とNo.5・13・19を区分する南北方向の畦を大畦と認識している。この畦の下端幅は0.56～0.70mである。確かにこの南北畦を境に西側の区画は比較的整備されているのに対し、東側は形状や区画の規則性に乱れが生じている。

水田面には無数の凹凸が検出されたが、足跡、稲株跡と断定するまでにはいたらなかった。

水田耕土は、暗黒色粘質土で、厚さ0.05～0.08mを測った。

各小区画の規模については、第4表に一括して掲載した。

覆土 水田面は調査時の地表面から約1.00m下位から検出された。調査区北東部分の低位部は、Hr-FAあるいはHr-FPの泥流層と考えられる黄色粘質土で直接覆われていた。その上位に暗青灰色粘質土を挟み、Hr-FP泥流層と考えられる青灰色粘質土が調査区全体を覆っていた。

遺物 水田面を精査する際に、S字状口縁台付甕の破片6点を含む土師器杯9点・甕45点、須恵器5点が出土したが、本遺構に直接伴うものではない。

所見 古墳時代後期の水田と考えられる。北西から南東方向に延びる低位部と、これに接する傾斜地部分から検出された。畦畔は地形の傾斜に則して形成されていた。区画全体が検出された部分は少なかったが、福島飯塚遺跡など周辺の遺跡で検出されたHr-FP泥流層下の水田と同形の小区画水田であったと考えられる。

微高地上で検出された3号溝から、給水を受けていた可能性が考えられる。

(3) 溝

2 b 区3号溝 (第13・16図 PL 4)

位置 10A—15 (南東端)～20G—3 (北端) G

形状 微高地の縁辺を地形に則して回る南北方向の溝である。南北両端とも調査区域外に延びている。20E—2グリッドで走行を変え、その後約30mは直線を指向する。走長50.87mを検出した。10B—17グリッドではS字状に蛇行する。この地点のやや西側寄り、南縁辺では溝状の落ち込みが検出され、調査時の所見として水田からの排水口の存在が推定されている。断面形は逆台形、あるいは皿状を呈する。規模は上幅0.37～0.60m、下幅0.17～0.38m、残存高0.02～0.17mを測る。底面の標高は南端で67.86m、北端から10.96m地点で67.89mである。2点における標高差は0.03mである。調査時、雨水が北西から南東方向に向かって流れる状況が認められた。

方位 N—126°—E (南側)、

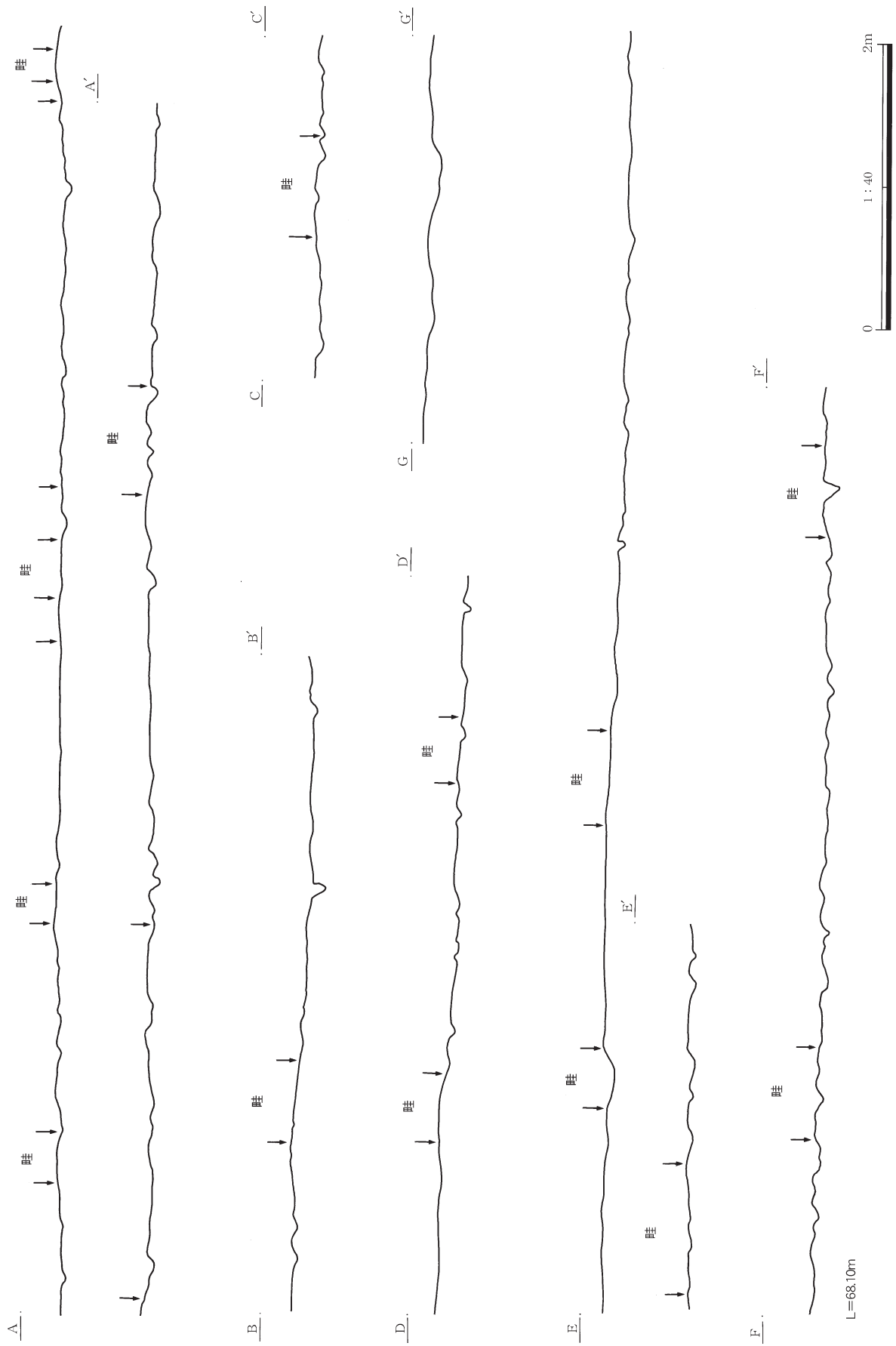
N—173°—E (北側)

埋没土 Hr-FP泥流層と考えられる青灰色粘質土で埋没している。流水の有無は確認されていない。

II 発掘調査の記録

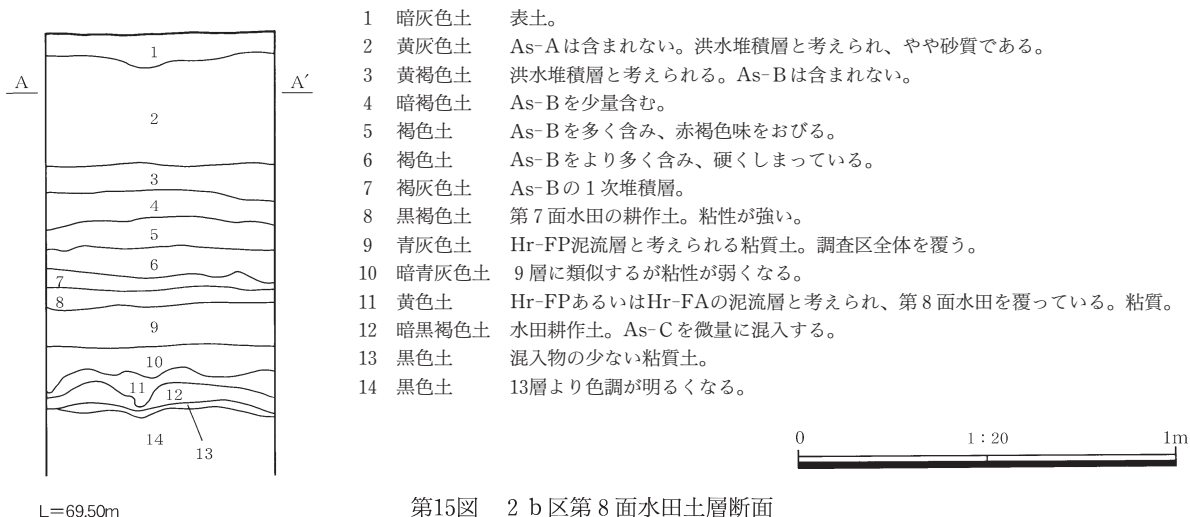


第13図 2 b区第8面水田

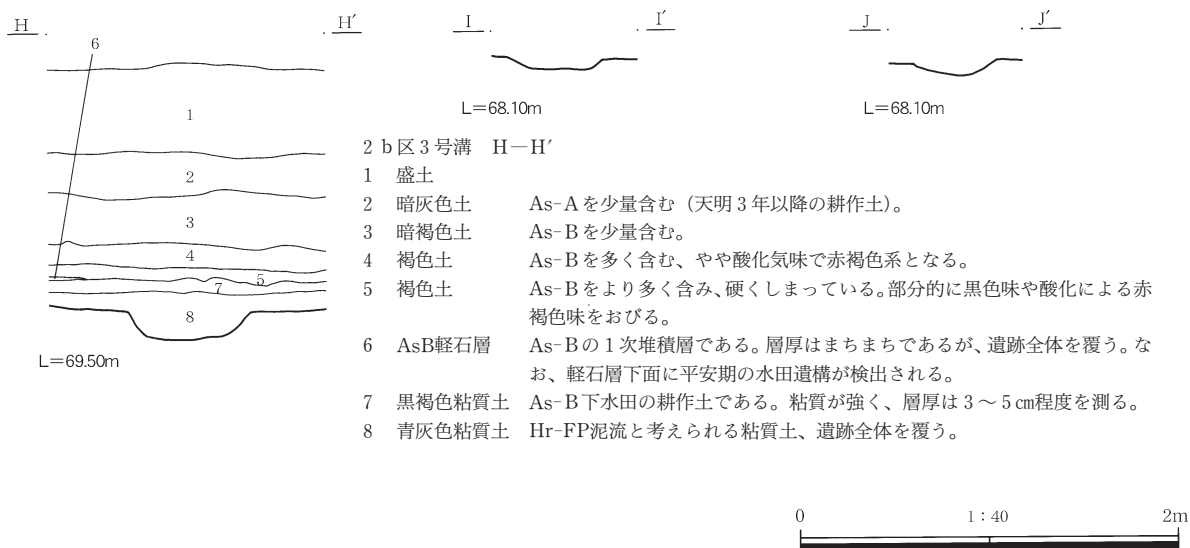


第14図 2 b 区第8面水田断面

II 発掘調査の記録



第15図 2 b区第8面水田土層断面



第16図 2 b区3号溝土層断面

第5表 第8面2 b区水田小区画計測値一覧

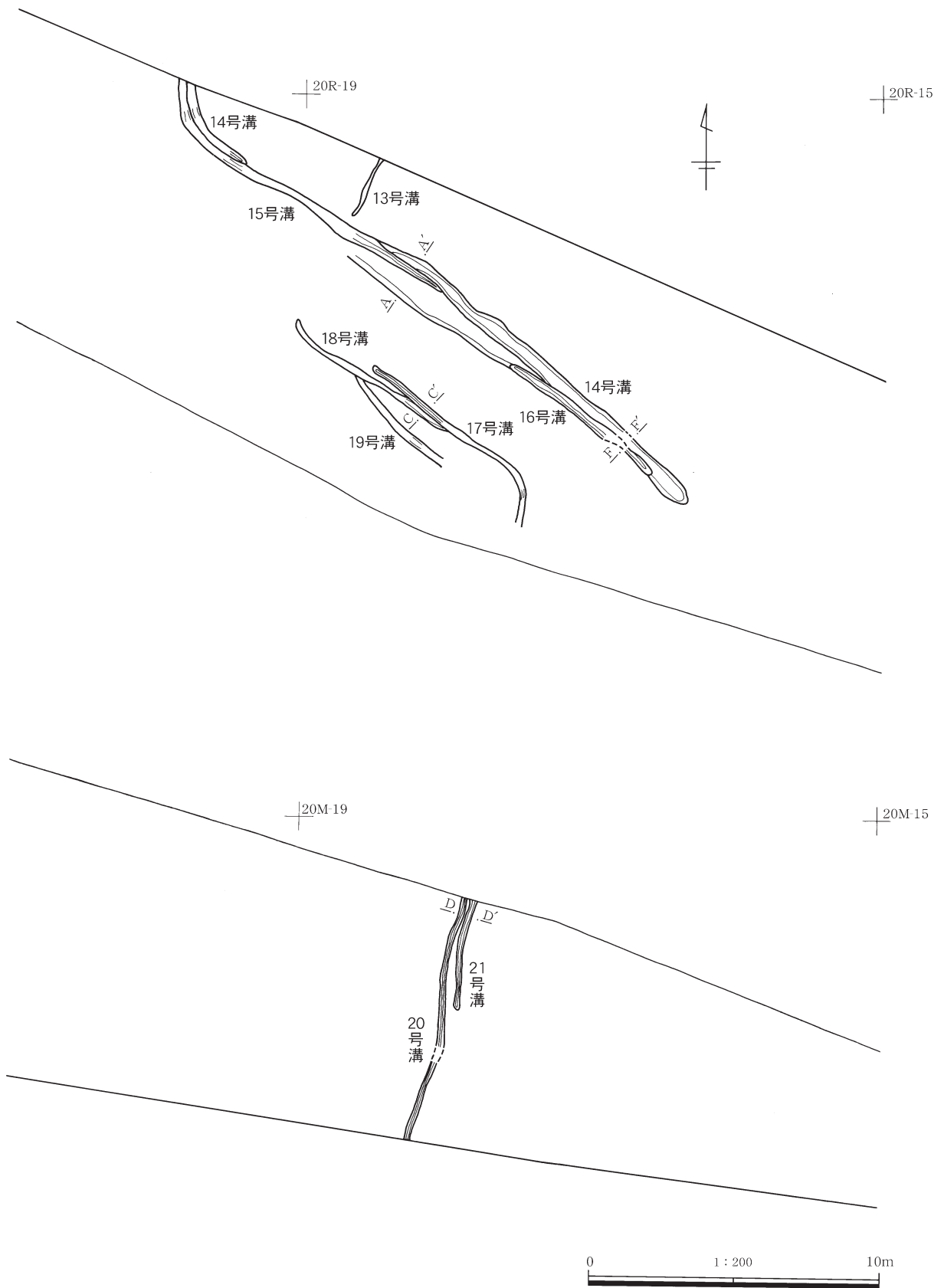
No.	規模	東西長 cm	南北長 cm	面積 ㎡	No.	規模	東西長 cm	南北長 cm	面積 ㎡
1	(188)	(159)	—	16	151	192	(2.84)	—	
2	88	(162)	—	17	146	(158)	—		
3	134	(174)	—	18	(106)	(10)	—		
4	240	(138)	—	19	232	(238)	—		
5	182	(184)	—	20	(236)	166	—		
6	147	(113)	—	21	(211)	156	—		
7	(124)	(61)	—	22	140	(30)	—		
8	(452)	390	—	23	(172)	(12)	—		
9	318	190	4.18	24	(186)	(10)	—		
10	(236)	240	—	25	(160)	(174)	—		
11	283	271	8.29	26	(240)	(218)	—		
12	559	488	24.96	27	(50)	(172)	—		
13	182	233	4.23	28	(62)	(152)	—		
14	144	209	2.98	29	240	(266)	—		
15	164	177	2.92						

所見 出土遺物が全くなく、詳細な掘削時期は不明である。Hr-FP・Hr-FA泥流を覆土・埋没土とすることから、古墳時代後期の遺構の可能性が高い。近接して検出された水田への給水溝としての機能が考えられるが、埋没土が水田覆土より一層上位の土層であることから、両者の間に時間差があることも考えられる。

3区13号溝（第17図 PL4）

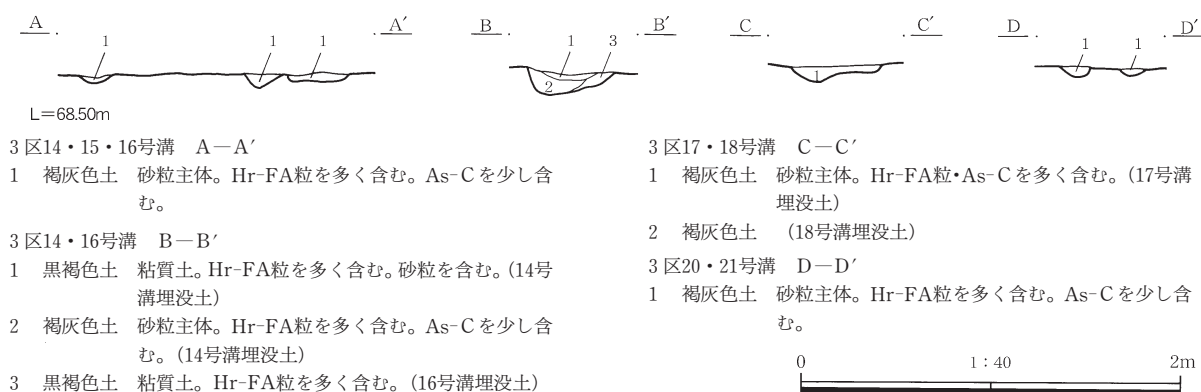
位置 20Q-18G

形状 南北方向に走行する。走長2.27mを検出した。断面の規模は、上幅0.08～0.22m、残存高0～0.01mを測る。



第17図 3区13号~21号溝

II 発掘調査の記録



第18図 3区14号～21号溝土層断面

方位 N-24°-E

埋没土 浅間C軽石混土層を掘り込み、Hr-FP泥流相当層により被覆されている。流水の痕跡は確認されていない。この状況は他の14号～21号溝までの8本の溝も同様である。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。覆土との関係から、Hr-FP泥流層堆積以前の遺構と考えられる。14号～21号溝も同様の所見である。

3区14号溝 (第17図 PL4)

位置 20Q・R-19G (14-1号溝)

20O-16・17、P-17・18G (14-2号溝)

重複 15号・16号溝と重複する。前後関係は判然としないが、15号溝に後出するか。

形状 南東から北西方向に走行する。中位で途切れていることから、西側部分を14-1号溝と、東側を14-2号溝と細別して記述する。14-1号溝の北西端と14-2号溝の南東端との距離は23.20mである。

14-1号溝は南方向に張る弧状を呈する。走長3.60mを検出した。断面形は凸レンズ状である。規模は上幅残存0.35m、下幅0.08～0.17m、残存高0.10～0.07mを測る。底面の標高は南西端で68.26m、北西端から1.00mの地点で68.24mである。2点における標高差は0.02mである。

14-2号は14-1号溝の東方、約5.47mに西端が位置する。直線を指向し延びている。走長14.13mを検出した。規模は上幅0.33～0.68m、下幅0.13～0.47

m、残存高0.06～0.14mを測る。最大幅は20O-16グリッド内であった。底面の標高は南東端で68.16m、北西端で68.28mである。両端における標高差は0.12mである。

方位 N-168°-E (14-1号溝)

N-129°-E (14-2号溝)

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土で埋没していた。

3区15号溝 (第17図 PL4)

位置 20P-18、Q-18・19、R-19G

重複 14号溝と重複、これに後出するか。

形状 南東から北西方向の走行である。北西部分は、14-1号溝の南側にこれに沿うように弧をなして延びるが、西側部分の掘り込みはほとんど認められなかった。東側は14-2号溝と同じ方向に延びていた。走長12.27mを検出した。断面の規模は、上幅0.25～0.47m、下幅0.03～0.20m、残存高0.01～0.06mを測る。底面の標高は、南端で68.25m、北端から1.34m地点で68.27mである。2点における標高差は0.02mである。

方位 N-120°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

3区16号溝 (第17図 PL4)

位置 20O-16・17、P-17・18G

重複 14-2号溝と重複している。前後関係は判然としないが、これに後出するか。

形状 南東から北西方向の走行である。14-2号溝や15号溝とほぼ同じ方向に延びる。20O-16・17グリッドで14-2号溝と重複する。走長13.04mを検出した。断面の規模は、上幅0.09~0.41m、下幅0.05~0.17m、残存高0.01~0.18mを測る。底面の標高は南端から0.72m地点で68.21m、北端から0.84m地点で68.28mである。2点における標高差は0.07mである。

方位 N-121°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

3区17号溝 (第17図 PL4)

位置 20O-17・18、P-18G

重複 18号溝と重複するが、前後関係は判然としない。これに後出するか。

形状 20O-17グリッドで南から大きく弧を描き、北西方向に延びる走行である。東側部分では掘り込みは確認されなかった。走長8.03mを検出した。断面の規模は、上幅0.05~0.22m、下幅0.04~0.11m、残存高0.01~0.08mを測る。底面の標高は南端で68.32m、北西端で68.28mである。両端における標高差は0.04mである。

方位 N-126°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

3区18号溝 (第17図 PL4)

位置 20O-17・18、P-18・19G

重複 17号・19号溝と重複、17号溝より前出するか。

形状 南東から北西方向の走行である。北西端は走行を北方向に変える兆しが見られる。走長6.83mを検出した。断面の規模は、上幅0.13~0.26m、下幅0.07~0.18m、残存高0.03~0.05mを測る。底面の標高は南東端から0.72m地点で68.29m、北西端から0.30m地点で68.26mである。2点における標高差は0.03mである。

方位 N-122°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた

と考えられる。

3区19号溝 (第17図 PL4)

位置 20O・P-18G

重複 18号溝と重複。前後関係は不明。

形状 南東から北西方向の走行である。あまり明瞭な掘り込みは認められなかった。走長4.40mを検出した。断面の規模は、上幅0.17~0.29m、下幅残存0.16m、残存高0.01~0.06mを測る。底面の標高は南端で68.32mである。

方位 N-135°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

3区20号溝 (第17図 PL4)

位置 20J・K-18、K・L-17G

形状 南北方向の走行である。緩やかに蛇行している。東側に約0.4~1.5mの間隔を置いて、21号溝が同じ方向に延びている。南端は調査区域外に延びる。北端は用水路によって切られている。走行の先には用水路を挟み17号溝があるが、同一遺構との判断はできない。走長8.75mを検出した。断面の規模は、上幅0.10~0.21m、下幅0.04~0.09m、残存高0.01~0.04mを測る。底面の標高は南端で68.31m、北端で68.29mである。両端における標高差は0.02mである。

方位 N-8°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

3区21号溝 (第17図 PL4)

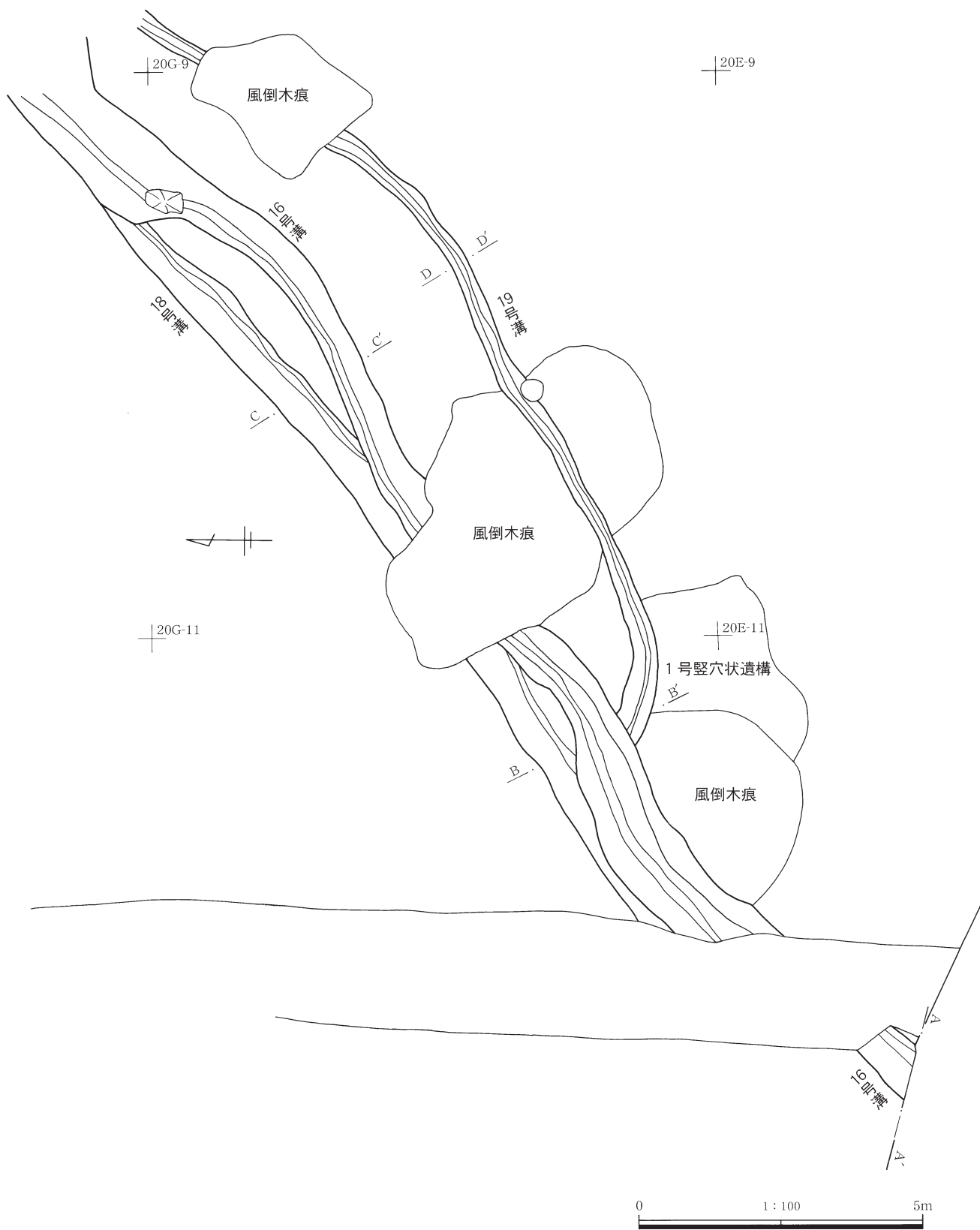
位置 20K・L-17G

形状 南北方向の走行である。走長3.79mを検出した。断面の規模は、上幅0.10~0.25m、下幅0.030~.08m、残存高0.01~0.05mを測る。底面の標高は南端で68.29m、北端で68.29mである。両端における標高差は認められなかった。

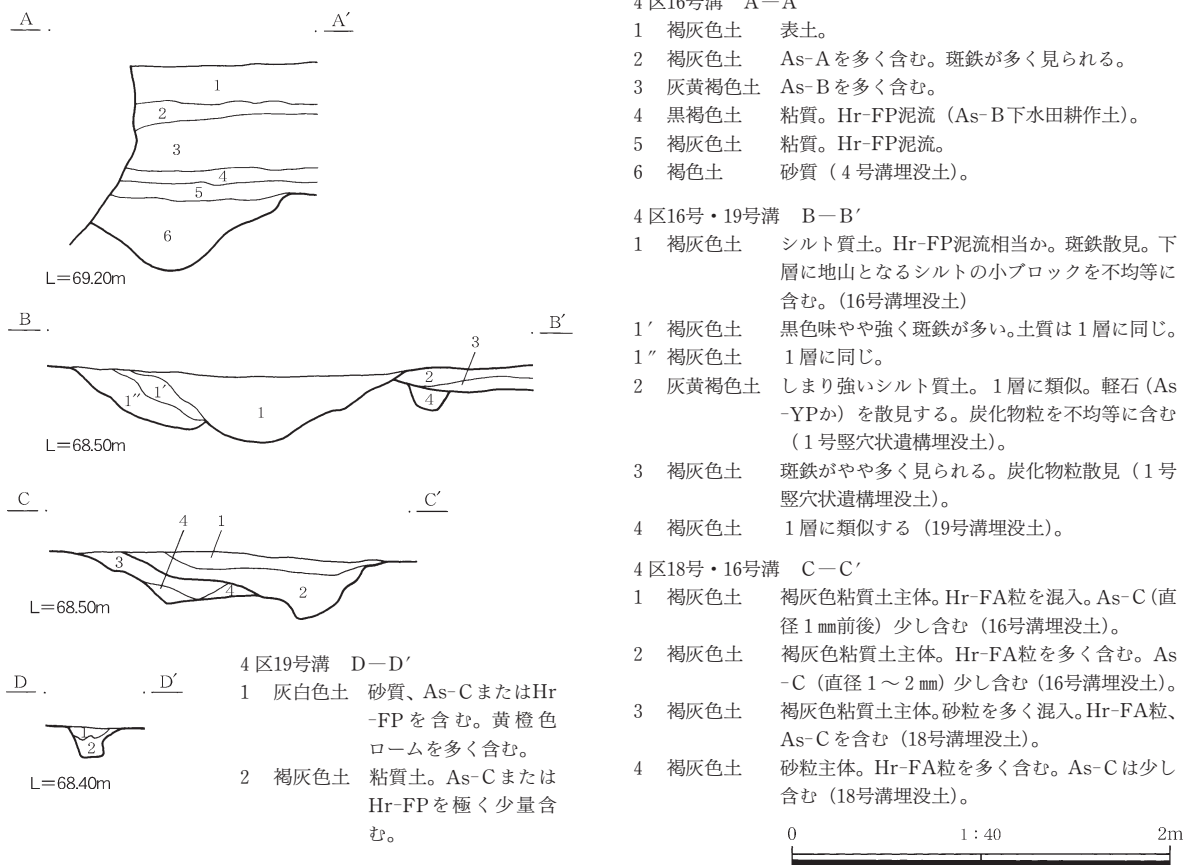
方位 N-9°-E

埋没土 砂粒を主体とする褐灰色土が堆積していた。

II 発掘調査の記録



第19図 4区16号・18号・19号溝



第20図 4区16号・18号・19号溝土層断面

4区16号溝 (第19・20図 PL4)

位置 20D-12G (南端)~G-8G (北端)

重複 4号溝に先出、18号・19号溝に後出する。

形状 南西方向から北東方向に走行する溝である。振幅の小さい緩やかな蛇行をくり返している。走長20.20mを検出した。南西端は調査区域外におよぶ。断面形は弧状を呈し、法面、底面とも凹凸が顕著であった。規模は上幅0.55~1.70m、下幅0.07~0.20m、残存高0.13~0.44mを測る。底面の標高は南西端で67.93m、北東端で67.80mである。両端における標高差は0.13mである。

方位 N-61°-E (南側)、N-44°-E (北側)

埋没土 Hr-FP泥流に相当すると考えられる褐灰色土が堆積し、これに被覆されている。流水の有無については確認できなかった。

遺物 埋没土中から土師器壺の破片7点・器種不明の破片1点が出土したが、資料化するに足り得な

いものであった。

所見 覆土・埋没土の状況から古墳時代の溝と考えられる。下限をHr-FAの降下時期とすることから、古墳時代の溝とすることができ、詳細な時期は不明である。

4区18号溝 (第19・20図 PL4)

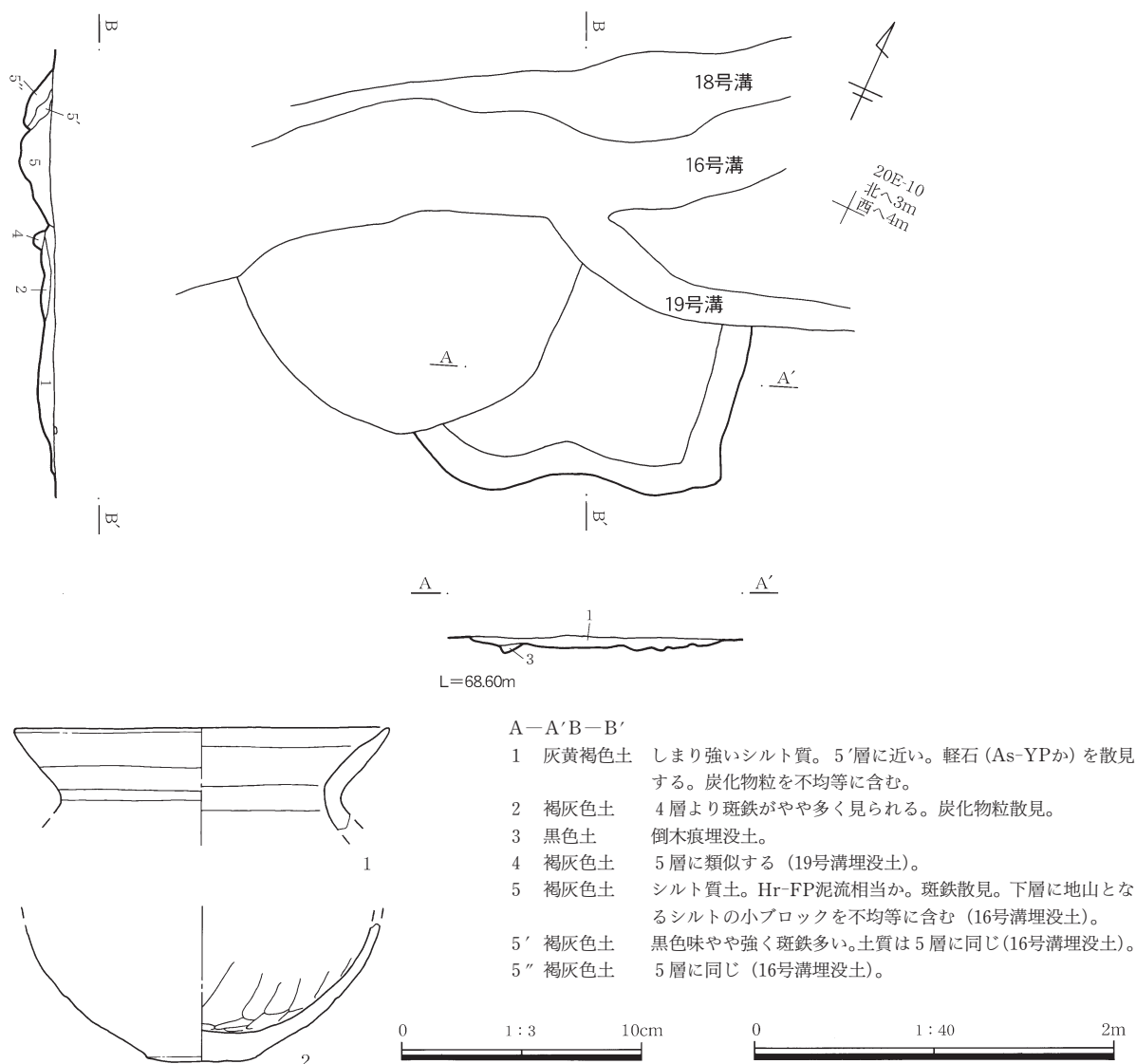
位置 20E-10~12、F-9・10、G-9G

重複 19号溝に後出、16号溝に先出する。

形状 16号溝に沿うようにして、南西から北東方向に向かって走行する。ほとんど蛇行していない。走長16.22mを検出した。16号溝により削平を受けたため断面形の全体形状は不明である。検出した規模は、上幅の残存0.48~1.00m、下幅0.04~0.17m、残存高0.08~0.33mを測る。底面の標高は南端から4.05m地点で67.99m、北端で67.98mである。2点における標高差は0.01mである。

方位 N-52°-E

II 発掘調査の記録



第21図 4区1号竪穴状遺構と出土遺物

埋没土 褐灰色土が堆積していた。最下層は砂粒が主体であるが、流水の有無については確認できなかった。

所見 古墳時代の溝と考えられるが、出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。

4区19号溝 (第19・20図 PL4)

位置 20E-9~11、F-8・9、G-8 G

重複 16号溝・1号竪穴状遺構に先出する。また、本溝埋没後に生育した樹木の風倒木痕により、掘り方が破壊されている。

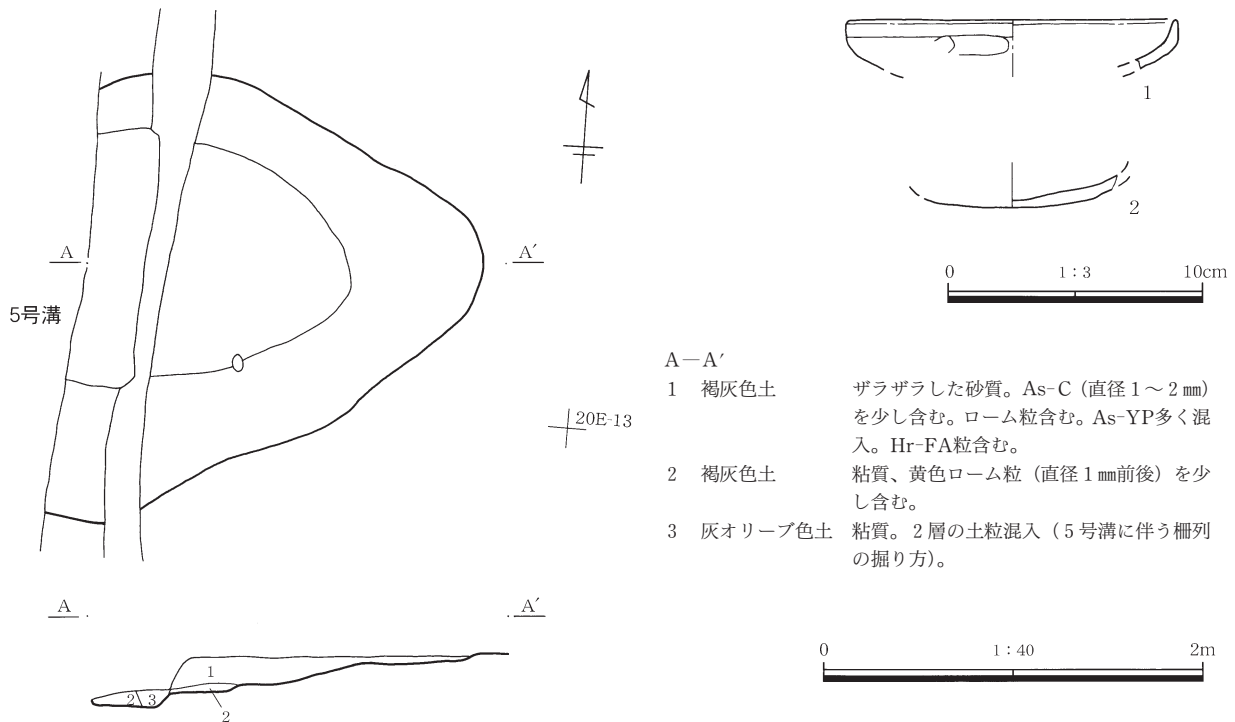
形状 南西から北東方向に走行をとるが、弧状を呈し、南側に大きく張り出す。南西端は西北西に向

きを変えたところで途切れている。走長16.53mを検出した。断面形は明瞭なU字形を呈する。規模は上幅0.23~0.57m、下幅0.05~0.19m、残存高0.04~0.26mを測る。底面の標高は南西端で68.08m、北東端で68.04mである。両端における標高差は、0.04mである。

方位 N-62°-E (南側)、N-31°-E (北側)

埋没土 灰白色土・褐灰色土が堆積している。流水の有無は確認できなかった。

所見 古墳時代の溝と考えられるが、出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。



第22図 4区12号土坑と出土遺物

(4) 竪穴状遺構

4区1号竪穴状遺構 (第21図 PL30)

位置 20D・E-10・11

重複 19号溝に後出、16号溝に先出すると思われる。

形状 溝・風倒木痕との重複により残存状態が不良のため、全体形状は不明である。不整四角形の南東隅部分を検出したものと考えられる。残存長は東西2.72m、南北1.94mである。底面の深さは約0.10mである。

方位 N-85°-E

埋没土 灰黄褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から出土した土師器甕(1・2)を資料化した。5世紀代の所産であろうか。この他に非掲載遺物として、土師器の破片で杯1点・壺1点・甕41点が出土している(観P175)。

所見 竪穴住居の可能性を考慮して調査を行ったが、掘り方が不整形であり、炉・床面等を確認できなかった。調査時には、複数の風倒木痕が重複した痕跡との所見も出されたが、土器が集中して出土したことから竪穴状遺構として扱った。

(5) 土坑

4区12号土坑 (第22図 PL4)

位置 20E-13G

重複 5号溝に後出する。

形状 5号溝により削平されたため、全体形状は不明である。平面形は楕円形を基本とした不整形であったと考えられる。規模は東西の残存長が2.08m、南北2.38mを測る。底面は西側に向かって緩やかに下がり、深さ0.12mを測る。

方位 N-89°-W

埋没土 Hr-FA粒を含む褐灰色土が堆積していた。

遺物 埋没土中、底面近くから土師器杯(1・2)が出土した(観P175)。

所見 埋没土状況、出土した土師器の特徴から、古墳時代から奈良時代の所産と考えられる。性格は不明である。

II 発掘調査の記録

3 第7面の調査

(1) 概要

本項では、1108(天仁元)年に降下した浅間B軽石層下から検出した遺構について報告する。

2 a区・2 b区・3区では、浅間B軽石の1次堆積層により埋没した水田が検出された。3区では、同時期の溝1条も合わせて検出した。4区においても浅間B軽石の堆積が所々で確認された。他の区と同様に水田面が広がっていたと考えられるが、後述するように、その後、中世の屋敷として土地利用がなされたため、畦畔等の検出が困難となったものと考えられる。なお、これらの水田はその後復旧されていない。

2 a区・2 b区の調査としては第2面、3区の調査としては第4面目の確認面となる。

玉村町域では、浅間B軽石により埋没した水田遺構が広範囲にわたり検出されており、本遺跡に隣接する福島飯塚遺跡、齊田竹之内遺跡においても同時期の水田を検出している。砂町遺跡では大畦畔が検出されている。本遺跡においても2区と3区を合わせ、東西方向に約140.4mにわたり水田面を検出したわけであるが、条里地割りの方1町の区画を踏襲したと見られるような大畦畔の検出はなかった。

(2) 水田

2 a区水田 (第24～26図 PL5)

位置 2 a区全域

形状 浅間B軽石により埋没した水田である。

2 a区では調査区の全域で、調査時の地表下約0.50mの層位に、浅間B軽石の1次堆積が確認された。層厚は0.04～0.06mであった。色調は褐灰色化しており、水浸りの状態にあったことがわかる。

調査対象地が、南北約28.5m、東西約14.0m、面積388㎡と小範囲であったため、区画が完全にわかるものはなかったが、最大で11区画を数えることができる。区画は、南北方向で6条、東西方向で2条の畦、あるいは畦状の高まり、段差により区分されていた。いずれも水田面に比してわずかに高いだけで、

带状に延びる状態であった。

南北方向の畦の方向はN-10°-EからN-14°-Eであった。東西方向の畦の方向は、N-101°-Eであった。

調査区北東部分では、北西から南東方向に斜めに延びる畦を検出した。その方位は、N-135°-Eであった。これは地形の制約により、傾斜に沿った区画がなされたことにより、畦の方向が乱れたためと考えられる。

畦の規模は、下幅0.50～0.90mを測った。本来は断面蒲鉾状を呈していたと考えられるが、後世の土圧の影響を受けたためか、押しつぶされたように、高まりがほとんど認められなかった。その中、20E-14グリッド内で、上幅約0.40～0.50m、高さ0.03mを測った。

水口・置石などは確認できなかった。

水田面の標高は北東隅で68.11m、南西隅で68.19mである。面全体に特に大きな変化はなかった。水田耕土は黒色粘質土であった。

所見 東西・南北の区画に条里地割りを踏襲した畦畔が検出されたが、北東部分では低位部の旧地形の影響を受けて、区画に歪みが生じている。直接水田に伴う遺物は出土していない。

2 b区水田 (第24～26図 PL5)

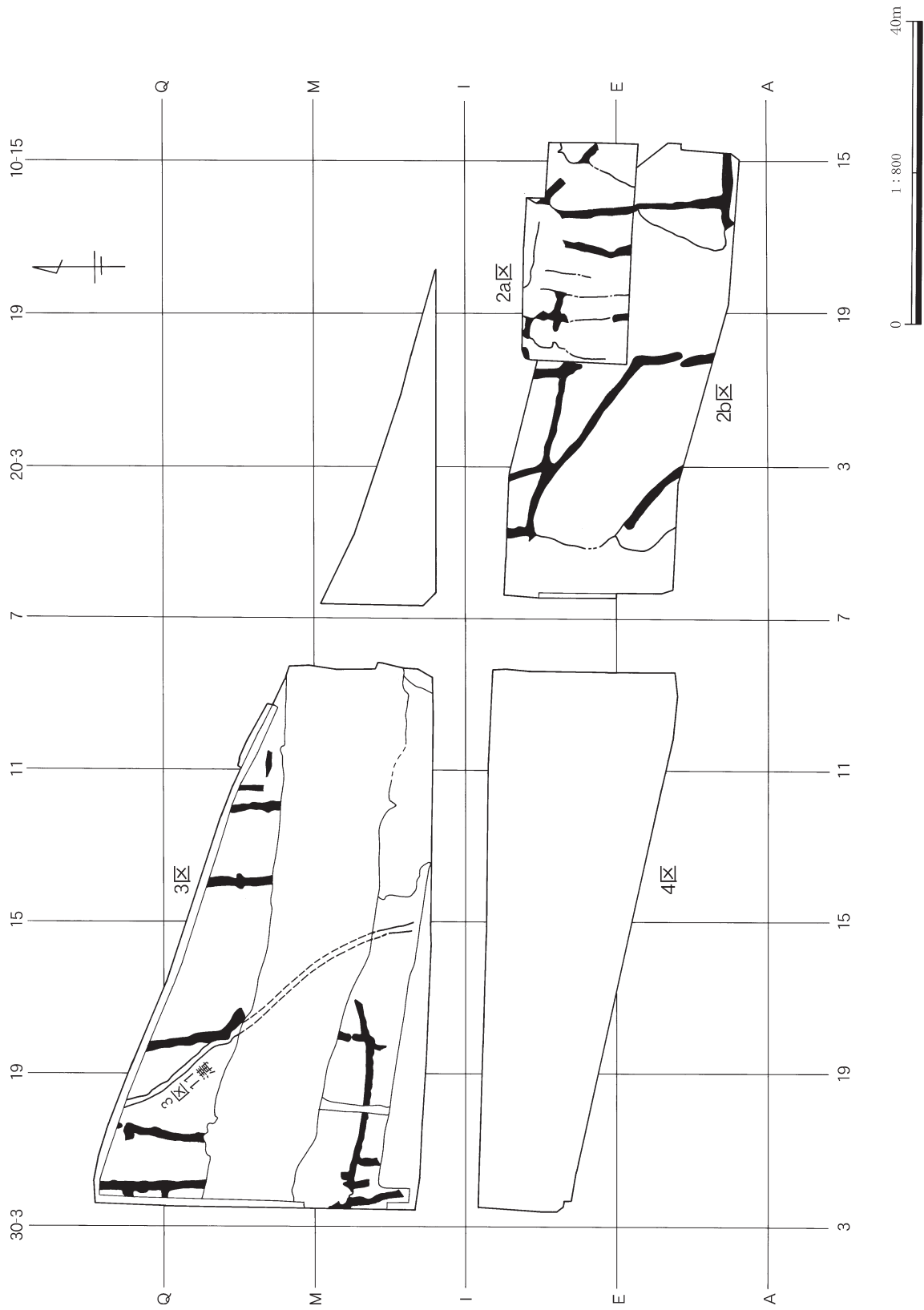
位置 2 b区全域

形状 浅間B軽石により埋没した水田である。

2 b区は、2 a区の南側あるいは西側に接する調査区で、調査区全域において浅間B軽石の1次堆積が確認された。

調査区は東西約58.7m、南北約31.0m、面積1069㎡を測る。

区画が完全に把握できた部分はなかったが、9区画以上が検出された。畦は南北方向に4条、東西方向に2条、斜め方向に2条が検出された。北西部分では、20-Gライン付近を東西方向に延びる畦に、南北方向の3条の畦が合流している状況が見られる。東西方向の畦の方位は、N-103°-Eである。南北方向はN-3°-Wである。

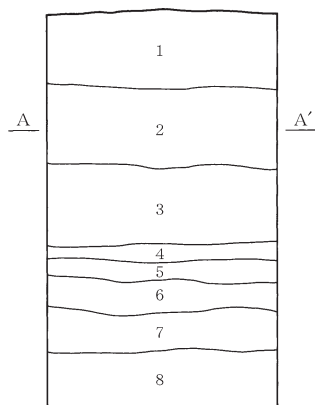


第23図 2 a 区・2 b 区 3 区第7 面水田

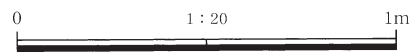
II 発掘調査の記録



第24図 2 a 区・2 b 区第7面水田



- 2 a 区第7面水田 A-A'
- | | | |
|---|---------|---------------------------------|
| 1 | 暗灰黄色土 | 表土。 |
| 2 | 暗灰黄色土 | As-Aの混入は少ない。 |
| 3 | にぶい黄褐色土 | As-B混土層。下層に向かって漸移的にAs-Bの混入量を増す。 |
| 4 | 褐灰色土 | As-B 1次堆積。 |
| 5 | 黒褐色土 | As-B 下水田耕作土。 |
| 6 | 暗灰黄色土 | Hr-FP、あるいはHr-FAに伴う泥流層に相当する。 |
| 7 | 黒褐色土 | As-C下の黒色土に相当すると考えられる。 |
| 8 | にぶい黄褐色土 | ローム層に相当すると考えられる。 |



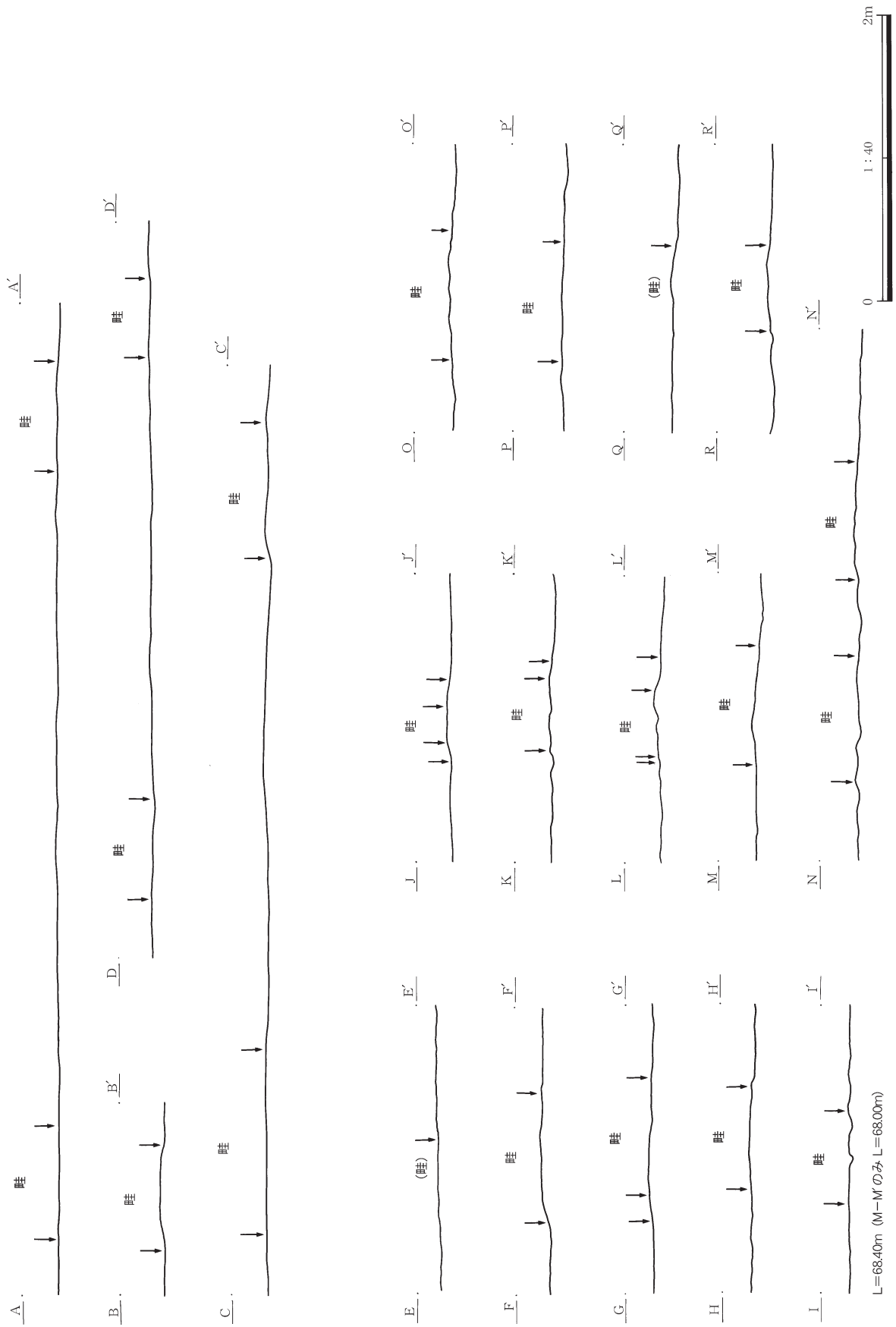
第25図 2 a 区第7面水田土層柱状図

東側寄りの、10グリッド-16ラインの西側では、2 a 区から南側に延びた南北方向の畦が見られ、10 B-16グリッドで、東西方向の畦と接する。西側部分で検出された斜め方向の2本の畦の方位は、東側がN-128°-E、西側がN-130° Eとほぼ平行である。等高線に沿った区画が行われていることがわ

かる。

10C-20グリッドでは、南北方向の畦の途中が、食い違うように隙間を開けている部分があるが、水口の痕跡との断定はできなかった。

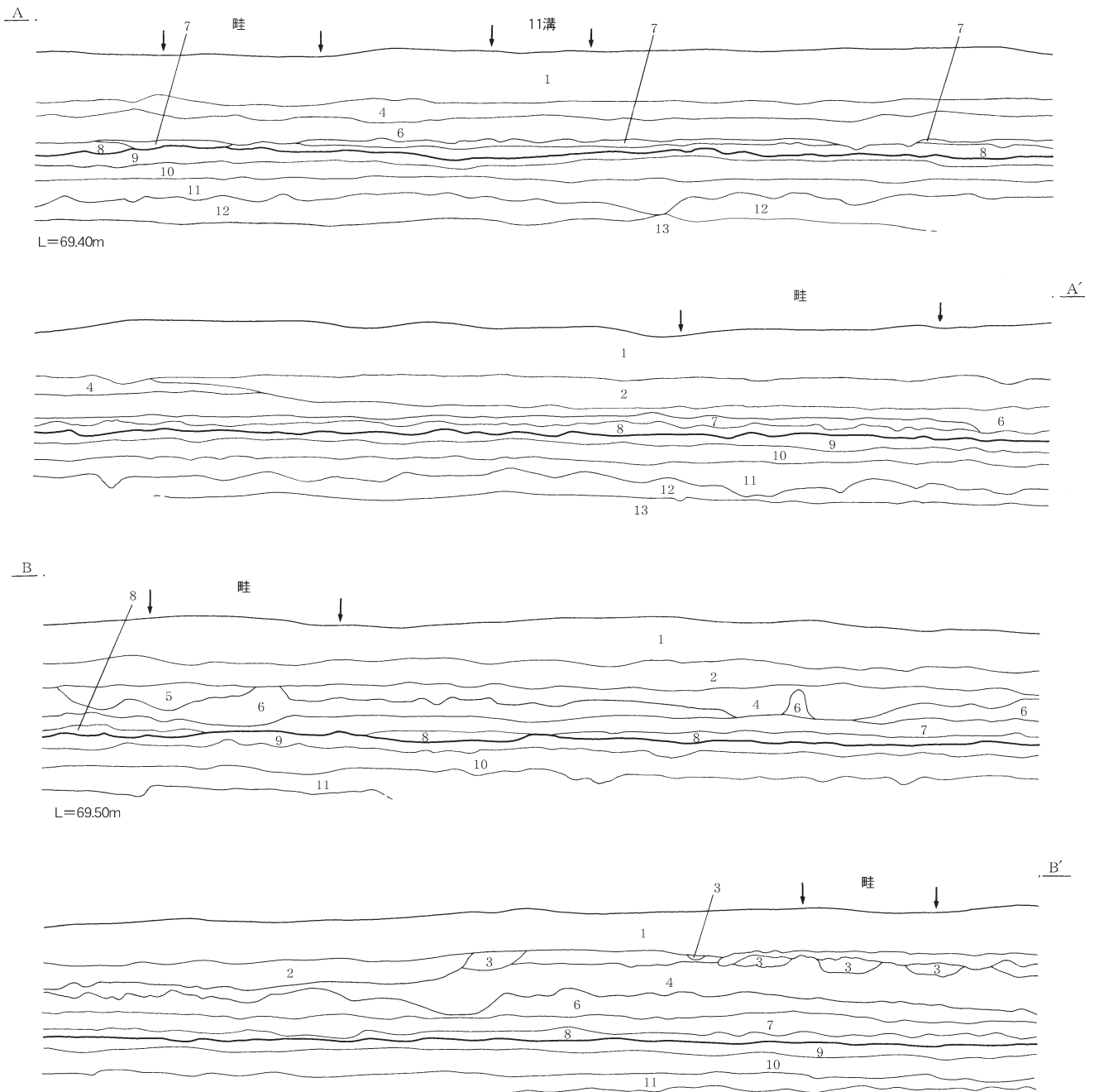
本調査区においても畦の残存状態は不良で、ほとんど高まりが見られない状況であった。畦の規模は、



第26図 2 a・2 b区第7面水田断面



第27図 3区第7面水田



3区第7面水田 A-A' B-B'

- 1 褐灰色土 表土。
- 2 褐灰色土 圃場整備時の客土。
- 3 褐灰色土 第1面復旧溝の充?土。
- 4 褐色土 As-Aを含まない。砂質。やや粘性を有する灰白色土を多く含む。
- 5 褐灰色土 As-Aを多く含む。褐灰色粘質土を多く混入する。
- 6 浅黄橙色土 砂質。やや粘性を有する灰白色土を含む。
- 7 褐色土 As-Bを多く含む。
- 8 褐灰色土 As-Bの1次堆積。
- 9 黒褐色土 As-B下水田耕作土。Hr-FP泥流で粘質。
- 10 褐灰色土 粘質土。Hr-FA粒を含む。
- 11 黒褐色土 粘質土。Hr-FA粒・As-C軽石を含む。
- 12 灰白色土 還元状態の中で灰白色化したローム。
- 13 暗紫灰白色土 As-YPの1次堆積。



第28図 3区第7面水田土層断面

II 発掘調査の記録

下幅0.55～1.00m、上幅0.30～0.50m、高さ0.02～0.04mであった。

水田面の標高は、南東隅68.00m、北西隅で68.26mであった。水田面および畦の上面からは、粗密の差があるものの、ほぼ全体にわたり無数の凹凸が検出された。本調査区においても、浅間B軽石に埋没後復旧された様子は見られない。

所見 水田面全体は南西から北東方向に緩やかな傾斜を有していた。2 a区同様、旧地形の影響を受け、等高線に沿った区画が行われた部分も見られた。

3区水田 (第27・28図 PL5・6)

位置 3区全域

重複 11号溝が後出する。

形状 浅間B軽石により埋没した水田である。3区では調査区の全域で調査時の地表下約0.70～0.80mの層位に、浅間B軽石の1次堆積が確認された。

3区は東西が約70.8m、西辺の南北が約44.0mを測る調査区であるが、中央を用水路に、南側を8号溝や後世の攪乱により失っており、検出した水田の面積は、949m²であった。

上記のような削平を受けたため、完全な区画が把握できた部分はなかったが、用水路の北側で、南北方向の畦を6条検出した。畦の間隔は、西側から1番目と2番目が約7.8mを測り、その東側に順次、約11.0m、約20.1m、約9.7m、約2.5mであった。これらの畦の方位は、N-11°-EからN-3°-Wであった。西側から1番目と2番目、4番目の畦は、東西方向の畦が分岐する状況が見られる。東西方向の畦は、20N-10グリッドで一部を検出した。

用水路の南側では、20K-17から30L-2グリッドへ、南側に弱く張り出しながら延びる東西方向の畦が1条検出された。また、この畦と交差・分岐する形で、南北方向に延びると考えられる畦5条が見られる。

畦の規模に大きな相違はなかった。用水路北側の南北方向の畦は、下幅0.55～1.22m、上幅0.22～0.70m、高さ0.02～0.08mであった。用水路南側の東西方向の畦は、下幅0.54～0.78m、上幅0.23～0.71

m、高さ0.04mであった。

水口の設置については、いまひとつ判然としない点もあるが、20Q-20グリッドと20L-17グリッドに、南北方向の畦が途切れる部分がある。また、20K-20グリッドと30L-1グリッドで、畦の上端の線が内側に入り込む様子が見られ、これらが水口部分と考えられる。

水田面の標高は、調査区北西隅で68.54mである。ここから64.30m東方向の調査区北東端で、68.40mであった。調査区南西端は68.53mであった。

このように全体的に見ると、水田面は西側から東側に緩やかに傾斜する面上を区切って、区画されていることがわかる。

細かく見ると、用水路北側の南北方向の畦を挟んだ両側の水田面では、西側よりも東側が2～3cmずつではあるが、全体的に低くなる傾向が見られる。このことから3区においては、西側から東側にわずかず段差を設けながら、区画ごとの平坦面が造成されていたことがうかがえる。

水田耕土は他区と同様の黒色粘質土である。

所見 本水田遺構に直接伴う遺物の出土はなかった。1108(天仁元)年に降下した浅間B軽石により埋没していることから、平安時代後期の水田と考えられる。残存状態は必ずしも良好とは言いが、南北に長軸を有する長方形の区画が造成されていたことが想定される。

(3) 溝

3区11号溝 (第29図 PL6)

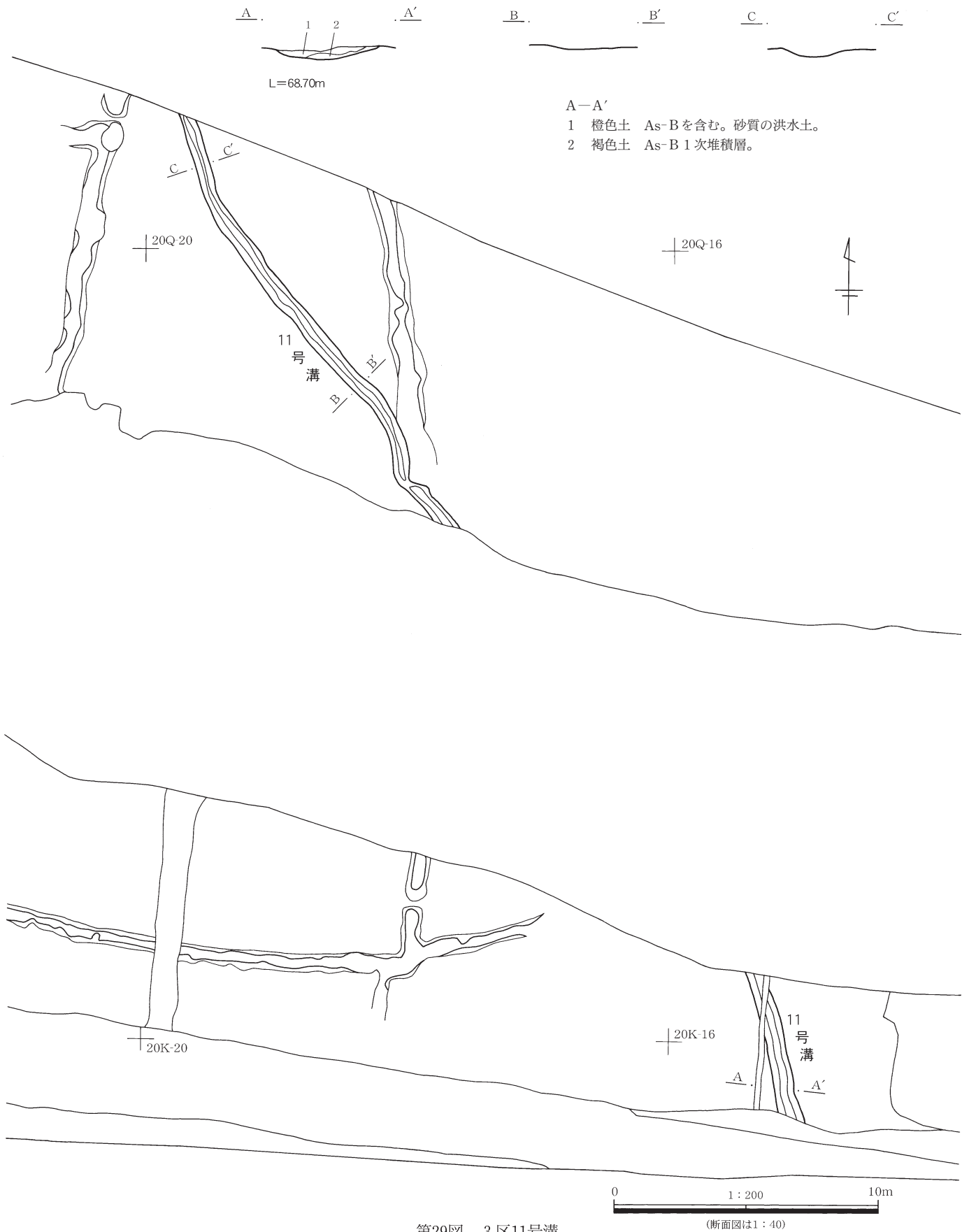
位置 20N-17(南端)～R-19(北端)G(11-1号溝)、20J-14・15、K-15G(11-2号溝)

重複 浅間B軽石下水田に後出する。

形状 調査区中央に掘削された3区用水路により分断された2条の溝が検出された。しかしながら、検出位置、形状、埋没土などから判断し、本来は南北方向に走行を有する一連の溝であると判断される。用水路北側を11-1号溝、南側を11-2号溝と仮称し、基礎データを記す。

11-1号溝は、緩やかにS字を描く走行で、走長18.

3 第7面の調査



第29図 3区11号溝

II 発掘調査の記録

93mを検出した。断面形は皿状を呈し、規模は上幅0.35～0.72m、下幅0.06～0.30m、残存高0.01～0.06mを測る。底面の標高は北端から0.27m地点で68.50mである。

11-2号溝は、走長5.90mを検出した。断面の規模は、上幅0.68～0.80m、下幅0.19～0.30m、残存高0.03～0.08mを測る。底面の標高は南端で68.42mである。11-1号溝北端寄りとの標高差は、0.08mである。

方位 N-141°-E (11-1号溝)

N-166°-E (11-2号溝)

埋没土 浅間B軽石の1次堆積で埋没していた。

所見 総延長は約45mとなる。出土遺物は全くないが、平安時代後期の溝である。浅間B軽石下水田の畦畔と一部重複する箇所があることから、水田に後出して掘削された用水と考えられる。

4 第6面の調査

(1) 概要

第6面の調査を実施したのは、3区の用水路南側、3区8号溝との間に残された部分だけである。調査時の確認面としては、第4面(中世面)と、第5面(浅間B軽石下の水田面)との間に位置する面である。調査時には「河川南As-B直上」面として呼称され、遺構の検出・記録作業が実施された。

報告書作成時に、上層の遺構確認面とともに呼称の整理をした際、新たに第6面とした遺構面である。

検出した遺構は、畠の耕作痕と溝1条である。

(2) 畠

3区畠 (第30図 PL6)

位置 用水路南側、20J-14(東端)、30J-2(西端)G

重複 耕作痕No16は、10号溝より新しい。

形状 幅の狭い溝状、あるいはサク状の掘り込みである。確認面は、浅間B軽石の堆積層上面である。調査面積は279m²であった。東西約41.8mの範囲内に南北方向に13条、東西方向に2条を検出した。これら15条は、ほぼ直線的に延びるものである。No16は

20J-14グリッドに東端を、20K-16グリッドに西端を置くもので、L字状に曲折していた。断面形は浅い皿状、または凸レンズ状である。各計測値は第5表に記したとおりである。

埋没土 浅間B軽石を多く含む暗褐色土が堆積していた。

所見 畠の耕作痕と考えられるが、詳細な掘削時期や、耕作対象物については不明である。第6面の調査から、浅間B軽石の降下により第7面で検出された水田の耕作は中断され、その後これに変わり、畠作が行われていたことが明らかになった。

(3) 溝

3区10号溝 (第31図 PL6)

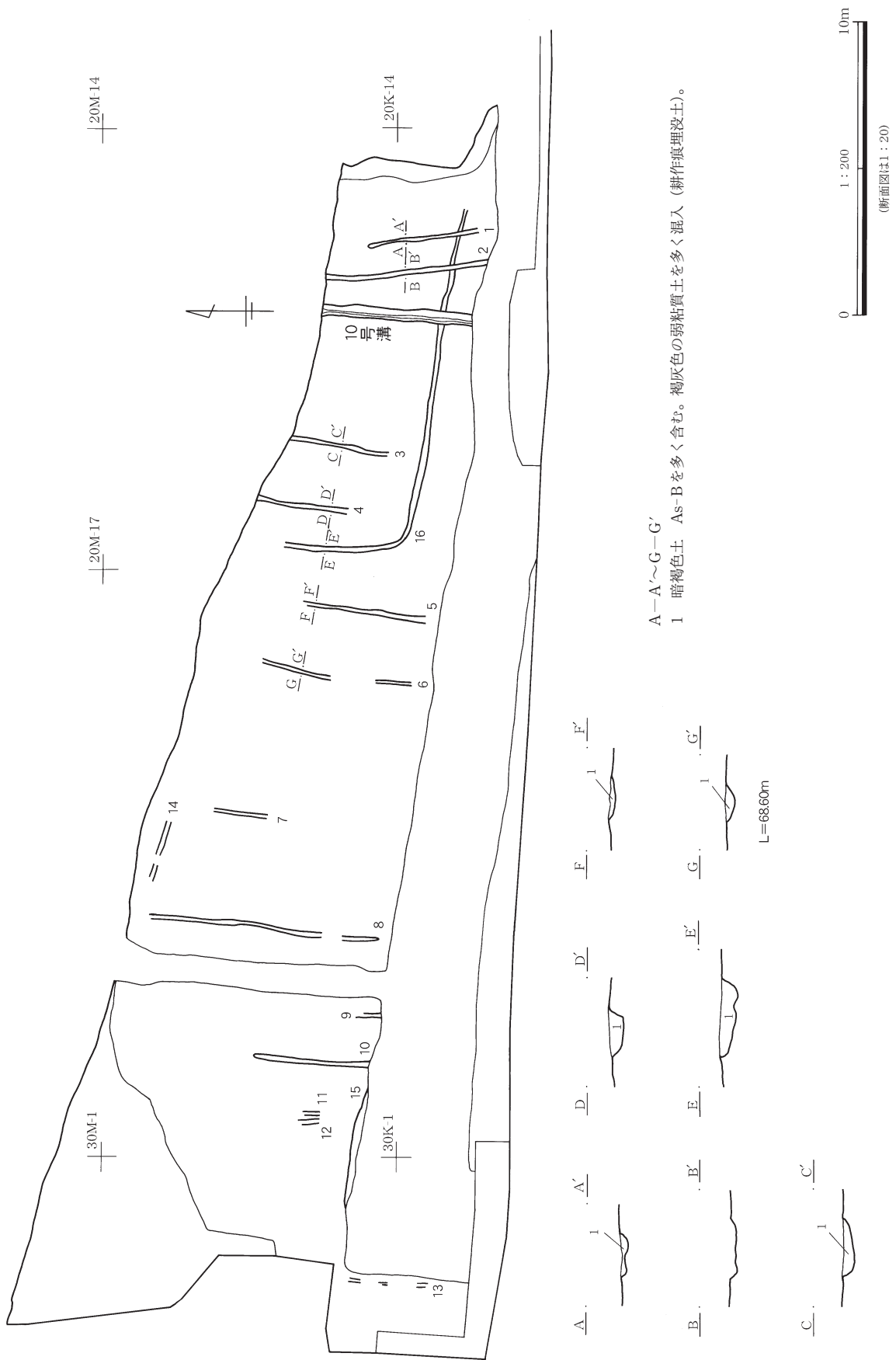
位置 20J・K-15G

重複 畠耕作痕のうちの1条に先出する。

第6表 3区第6面畠耕作痕一覧

単位：m

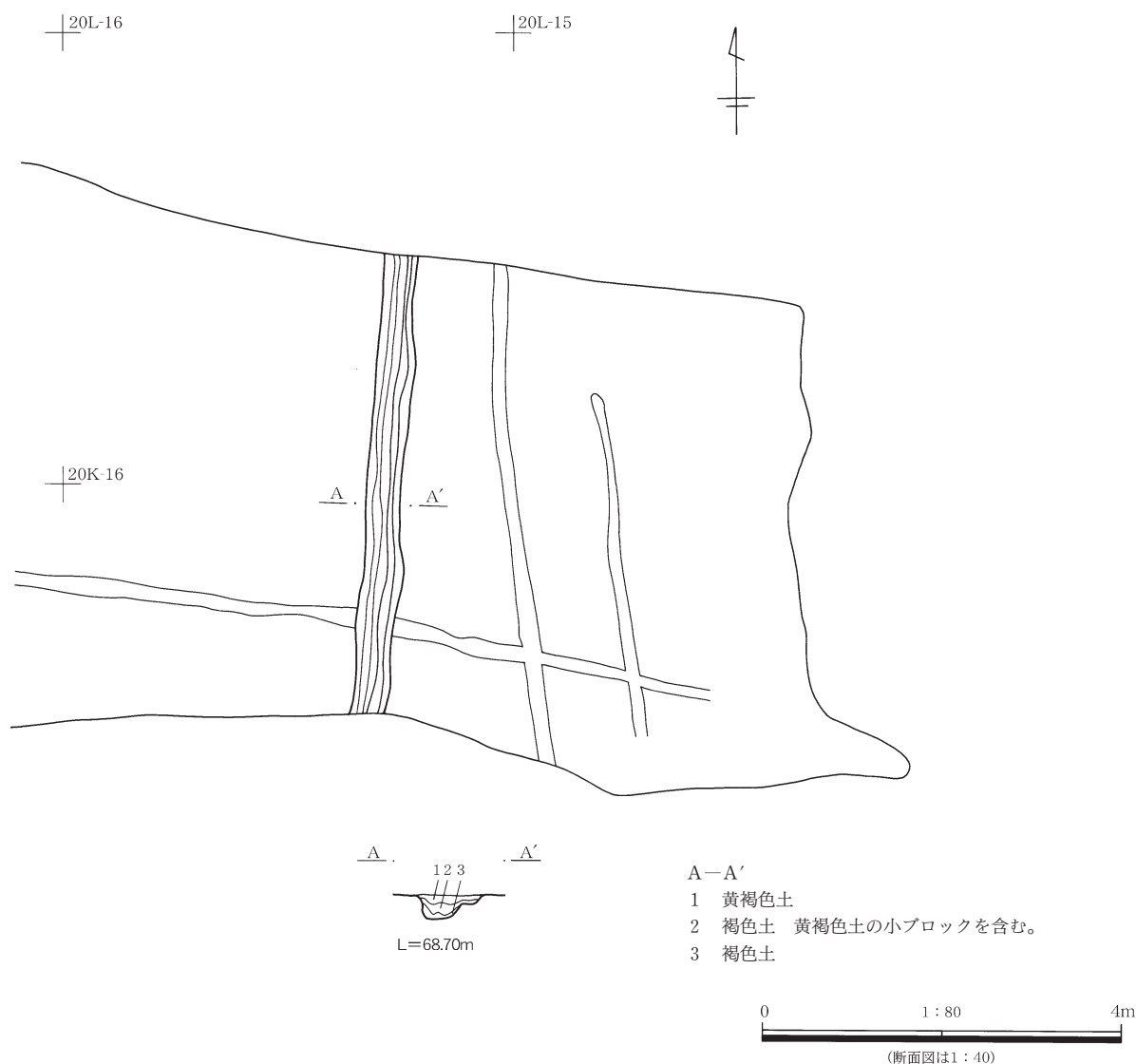
No.	グリッド	方向(位)	長さ	幅	深さ	西側との間隔
1	20K-14 20J-14	N-7°-W	3.76	0.16 0.04	0.025	1.10 1.06
2	20J・K-14・15	N-5°-W	5.50	0.20 0.10	0.025	6.05 5.58
3	20K-16	N-10°-E	3.38	0.18 0.13	0.040	2.25 2.15
4	20K-16	N-9°-E	3.20	0.18 0.09	0.050	3.30 3.25
5	20K-17 20J-17	N-8°-E	3.85	0.22 0.12	0.020	2.42 2.35
6	20K-17 20J-17	N-16°-E N-4°-E	5.22	0.15 0.07	0.030	5.22 5.05
7	20L-18 20K-18	N-8°-E	2.02	0.14 0.10		3.82 3.65
8	20L-19 20K-19	N-6°-E	5.84	0.20 0.14		2.62 2.60
9	20K-20	N-2°-E	0.82	0.14 0.12		1.70 1.65
10	20K-20	N-5°-E	3.85	0.19 0.10		1.75 1.65
11	20K-20	N-1°-W	0.66	0.13 0.12		0.32 0.30
12	20K-20	N-2°-W	0.68	0.14 0.13		—
13	20J-21 20K-21	N-4°-E	2.73	0.14 0.06		—
14	20L-19 20L-18	N-74°-W	2.06	0.18 0.12		—
15	20K-21 20K-20	N-79°-W	4.05	—		—
16	20K-16 20J-14~16	N-89°-W N-0°	15.48	0.20 0.08	0.055	—



A-A'~G-G'
 1 暗褐色土 As-Bを多く含む。褐灰色の弱粘質土を多く混入（耕作痕埋没土）。

第30図 3区第6面島

II 発掘調査の記録



第31図 3区第10号溝

形状 南北方向に走行を有し、ほぼ直線を指向する。南端は調査区域外におよぶが、4区ではその延長先は検出されていない。北端は用水路により削平を受けて途切れるが、用水路北側までは延びていない。走長5.12mを検出した。断面の規模は上幅0.30～0.43m、下幅0.03～0.14m、残存高0.04～0.12mを測る。底面の標高は南端で68.43m、北端で68.37mである。両端における標高差は0.06mである。

方位 N—5°—E

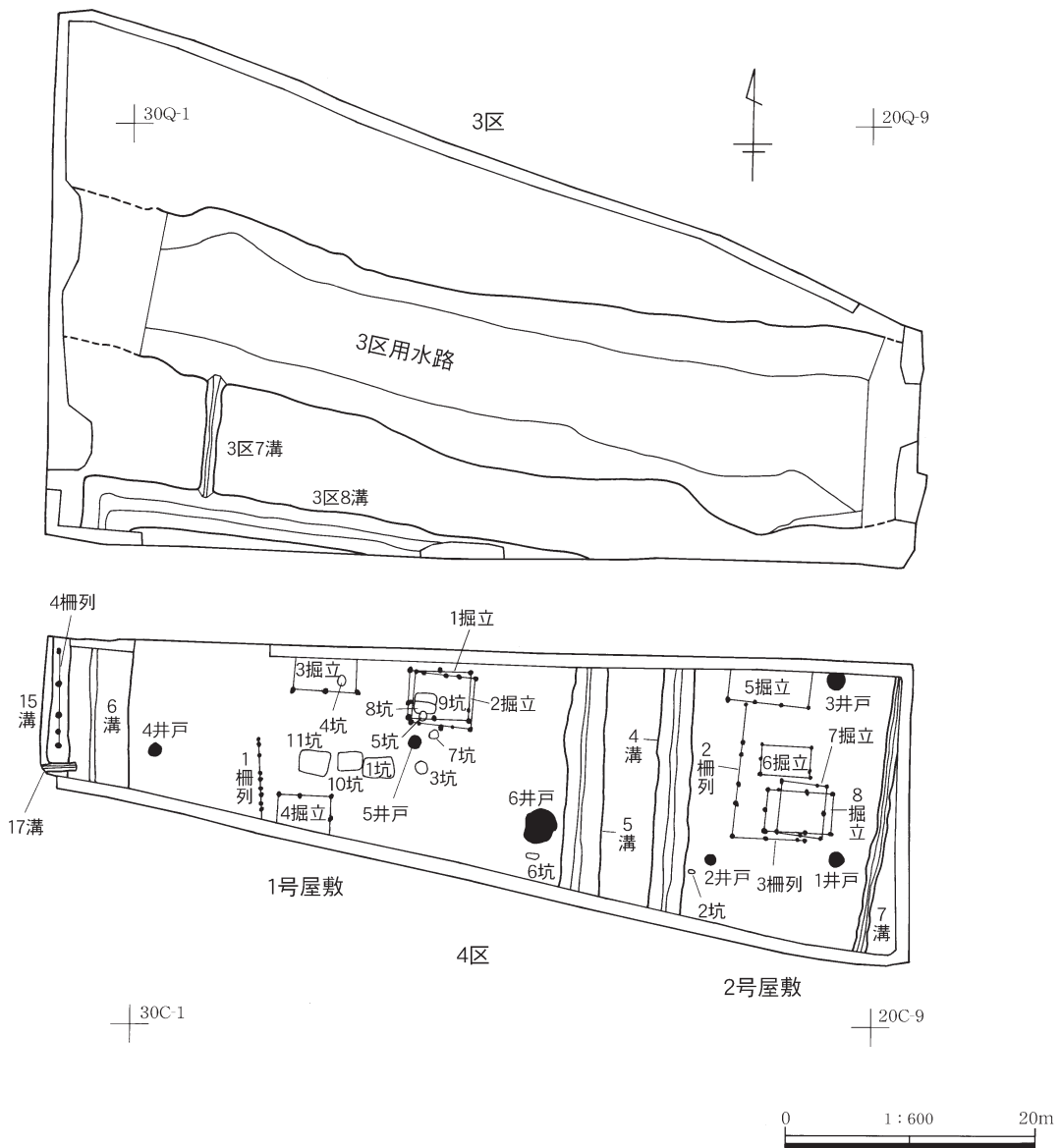
埋没土 浅間B軽石の堆積層上面を確認面とした。埋没土は、上層に浅間B軽石を多量に含む暗褐色土が、下層に斑鉄の見られる黄橙色土が堆積していた。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。浅間B軽石の堆積層より上層で検出されたことから、平安時代後期以降の所産であろう。

5 第5面の調査

(1) 概要

調査時の第3面、洪水層下に堆積していた浅間B軽石混土の黒色土を掘り込んでいた遺構である。3区・4区で遺構が検出された。この中から整理作業時の検討から、やや時期が新しくなると考えられた4区の溝6条、墓坑1基、火葬跡1基、集石6基を報告時の第4面に帰属するものとして分離し、これ



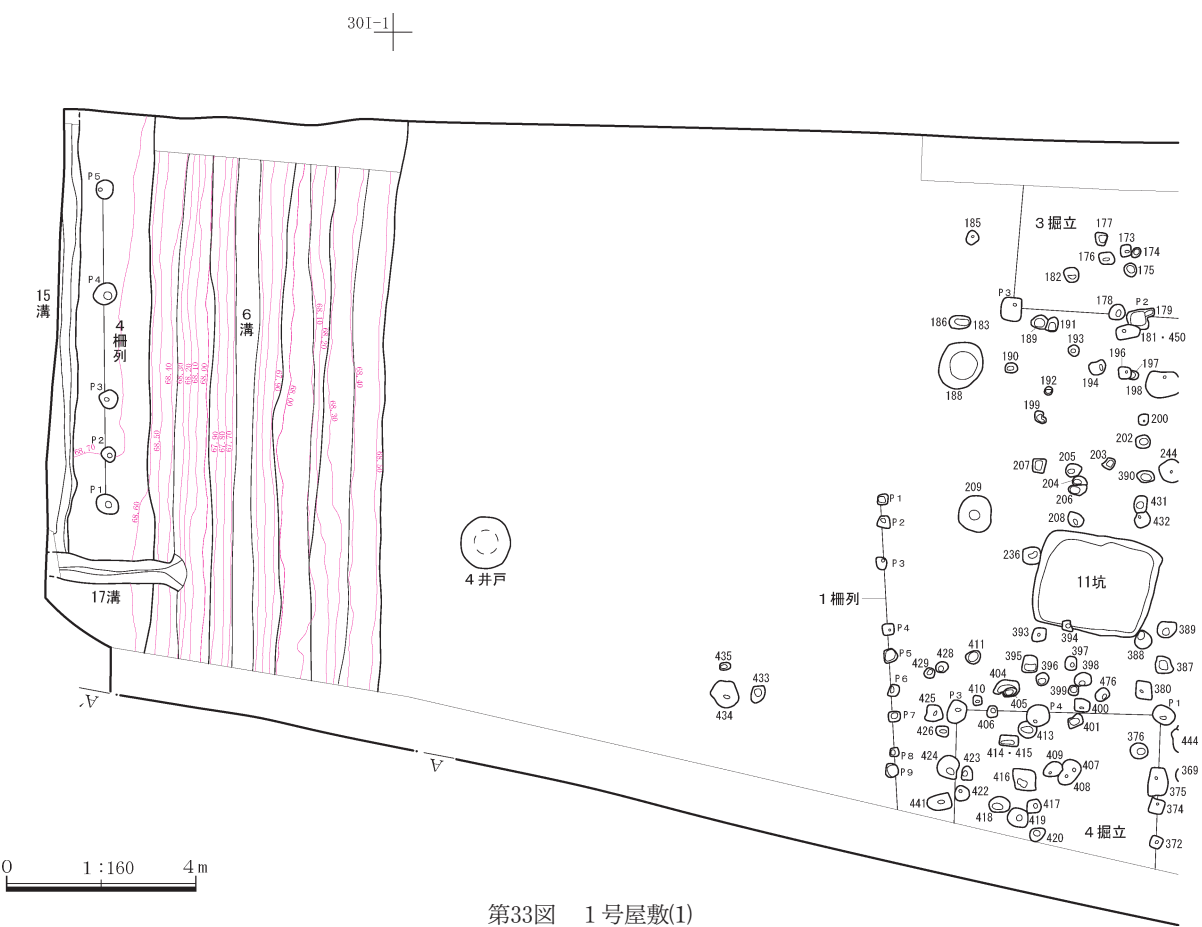
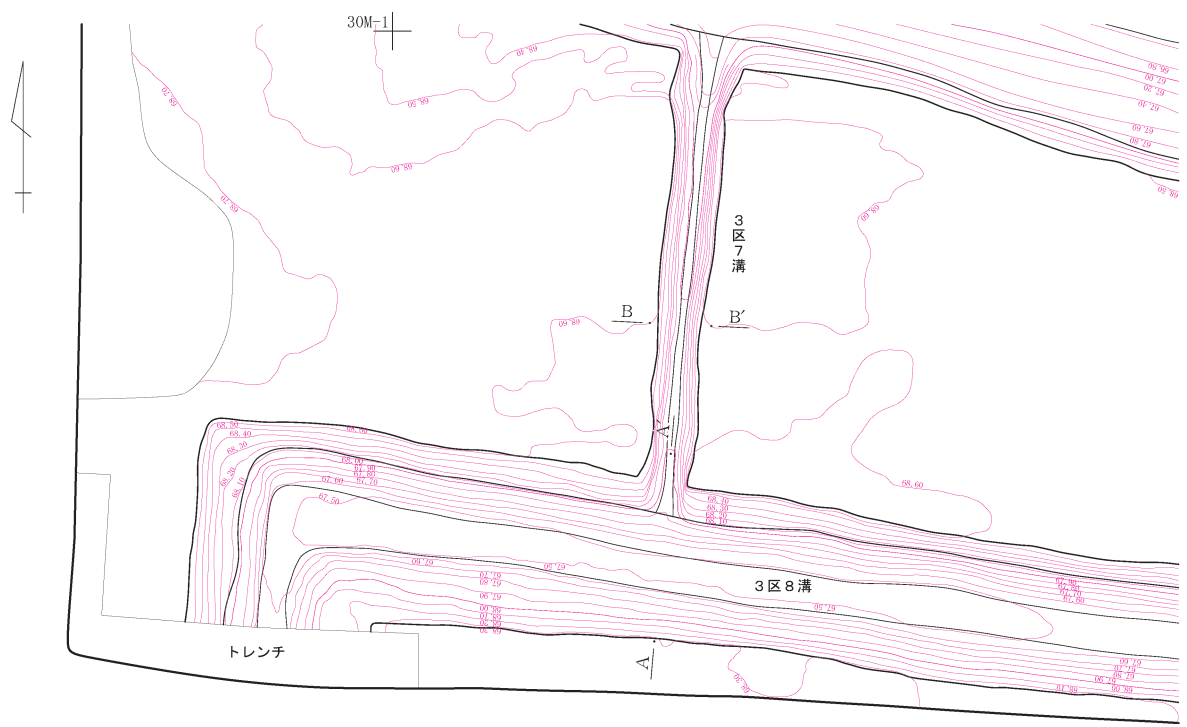
第32図 3区・4区第5面の遺構

以外について第5面の遺構として本項に報告した。第5面は、室町時代から江戸時代初頭に相当する面と考えられた。

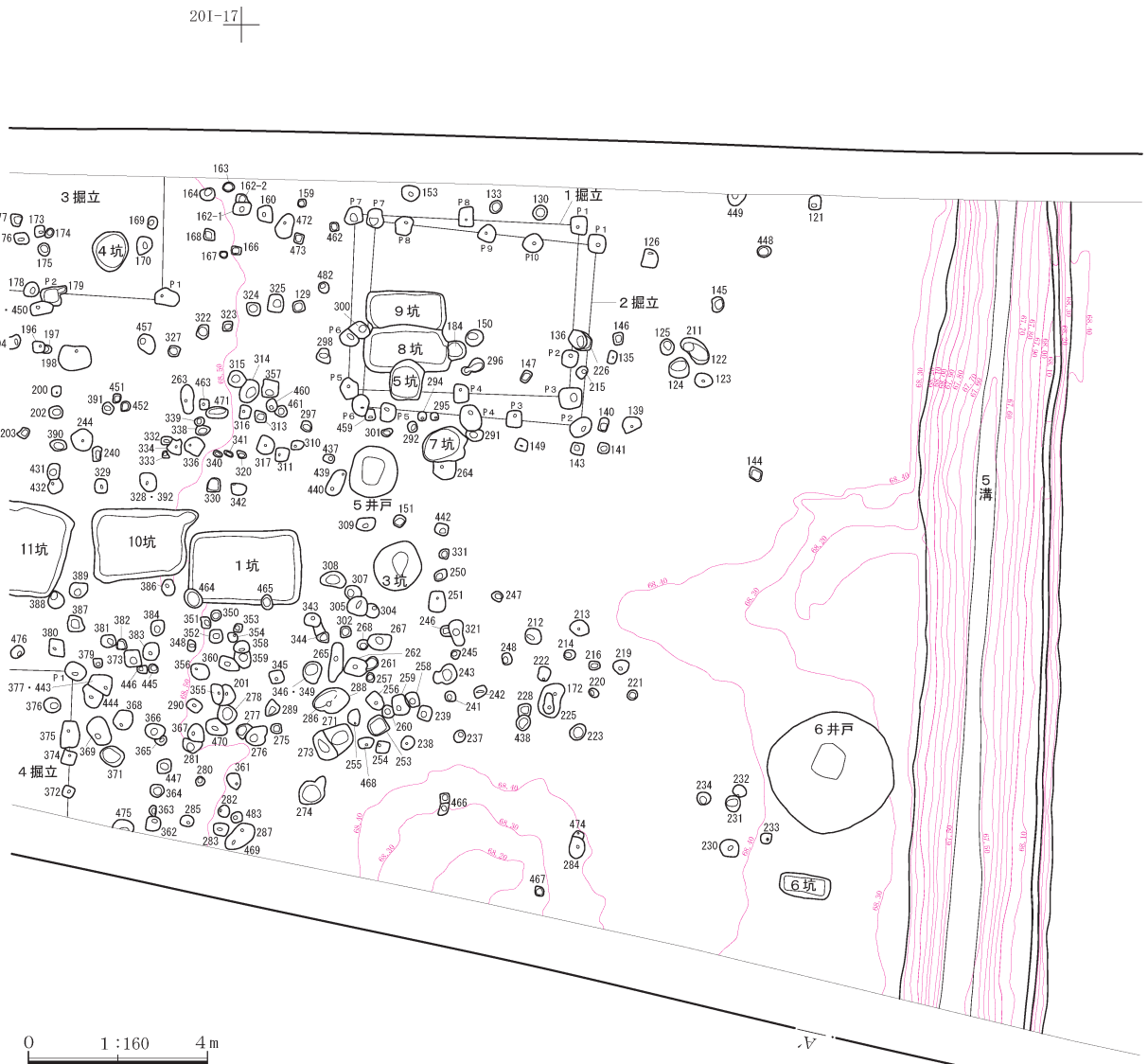
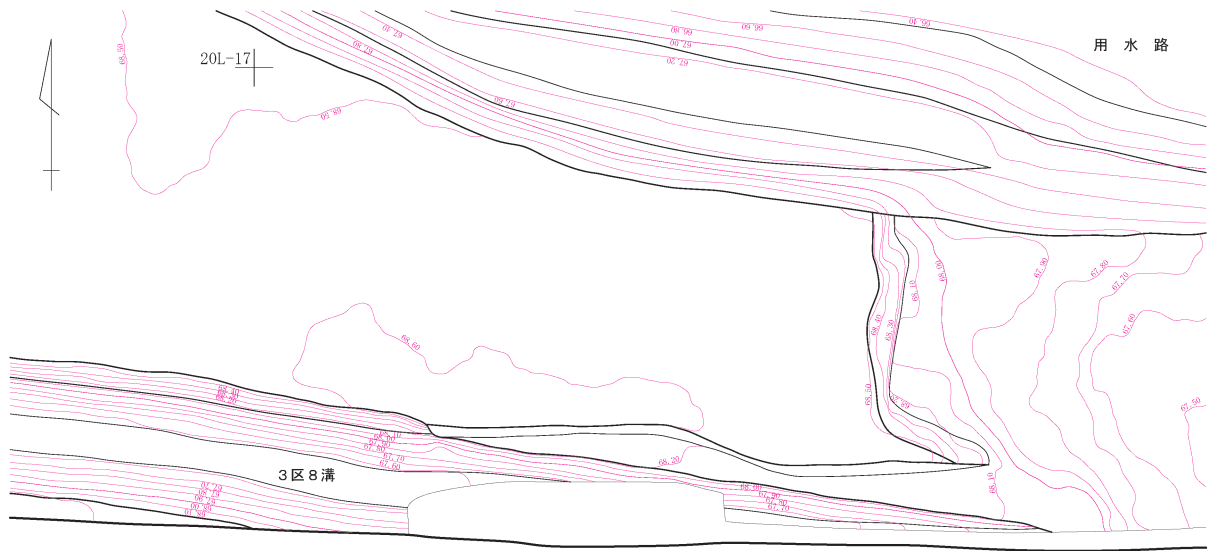
この第5面で報告するのは、溝で方形に区画された屋敷2箇所である(第32図)。全容を明らかにすることはできなかったが、1号屋敷は4区中央部から西側部分を主体に、一部、3区南西部分にかけて検出された。南辺を除く3辺の区画溝が確認され、その区画内から掘立柱建物、柵列、ピット、井戸、土坑が発見された。2号屋敷は、西辺を区画する溝と区画内の北西部分を検出した。2号屋敷の区画内か

らも掘立柱建物、柵列、ピット、井戸、土坑が発見された。それぞれの屋敷内から検出された遺構の内容については、以下個別に報告を行う。

1号屋敷の西側では、南北方向に走行を有する4区15号溝が検出された。この15号溝は、西接する斉田竹之内遺跡1b区に本体を有する屋敷の東辺を区画する溝である可能性が高い。本項ではこの15号溝、15号溝に後出して掘削された東西方向の17号溝、1号屋敷と竹之内1b区の屋敷の間の空地で検出された4号柵列を、屋敷外(1号・2号屋敷の区画外の意味)の遺構としてまとめて報告する。



第33図 1号屋敷(1)



第34図 1号屋敷(2)

II 発掘調査の記録

また、3区用水路も屋敷外の遺構として取り扱った。本用水路は、1号・2号屋敷の北側、3区の調査区中央をほぼ東西方向に横断した、上幅15.85～11.50mの人口水路である。斉田竹之内遺跡1a区においても、この上流部分が検出されている。3区7号溝により、1号屋敷北辺の区画溝3区8号溝と接続していたことが確認され、1号屋敷と用水路が同時存在していたことが明らかになった。

(2) 4区1号屋敷 (第33・34図 PL8)

1) 概要

3区の調査区南西部分と、4区の調査区中央から西側部分に位置する。方形に区画された屋敷で、周囲を溝で囲まれていたと考えられるが、南側は4区調査区域外におよぶため、その全容を把握するにはいたらなかった。なお、1号屋敷の呼称は本報告にあたり付したもので、調査時からの呼称ではない。

屋敷を区画する溝は、東辺を4区5号溝、西辺を4区6号溝、北西隅から北辺を3区8号溝として調査を行った。4区5号溝と4区6号溝の走行はほぼ平行する関係にある。北西隅の屈曲部の角度は85°とやや鋭角になっている。北東隅は20I-13グリッドにあると考えられるが、現道下にあたり調査することができなかった。

屋敷の規模は、東西で35.54m、南北25.38m以上となる。

当該1号屋敷の北側には、3区用水路が東西方向に掘削されている。北辺、3区8号溝外縁との距離は、約6.0～10.0mである。この3区8号溝と3区用水路は北西隅寄り、3区7号溝により接続しており、このことから同時存在の関係であったことが分かる。

また、当該1号屋敷の東側には2号屋敷が形成されている。2号屋敷の西辺を区画する4区4号溝と、1号屋敷の東辺を区画する4区5号溝の走行はほぼ平行の関係にある。両溝の外縁間の距離は、約4.0～4.7mである。さらに本1号屋敷の西側には、斉田竹之内遺跡1b区に内区が位置する屋敷が形成されている。この2屋敷の距離はわずか1.50mである。

今回の調査において、1号屋敷を構成していたと考えられる遺構としては、掘立柱建物4棟、柵列1列、建物あるいは柵列の柱穴である可能性を有するピット307本、井戸3基、土坑10基が検出された。屋敷出入口部や、橋、土塁の存在については確認できなかった。

これらの遺構群は、その大半が区画内の中央寄りから検出され、区画溝近辺には井戸2基、土坑1基が存在していただけである。4棟の掘立柱建物は、その軸線がほぼ同一方向を向いているが、1号と2号に重複関係が見られることから、屋敷の継続に時間幅があることが分かる。

また、1号・2号掘立柱建物は、5号・8号・9号土坑と重複関係にある。この部分の土坑については、第4面に分離した墓坑や火葬跡と近い時期の所産の可能性も考えられるところである。

出土遺物は、4区5号・6号溝から軟質陶器が少量出土しているが、総じて屋敷の区画溝からの出土量は少なかった。他に1号土坑から陶器、軟質陶器が、5号・6号井戸から石製品が少量ずつ出土している。

1号屋敷の形成時期は、埋没土の状況や出土遺物の年代観から、14世紀から15世紀代と考えられる。

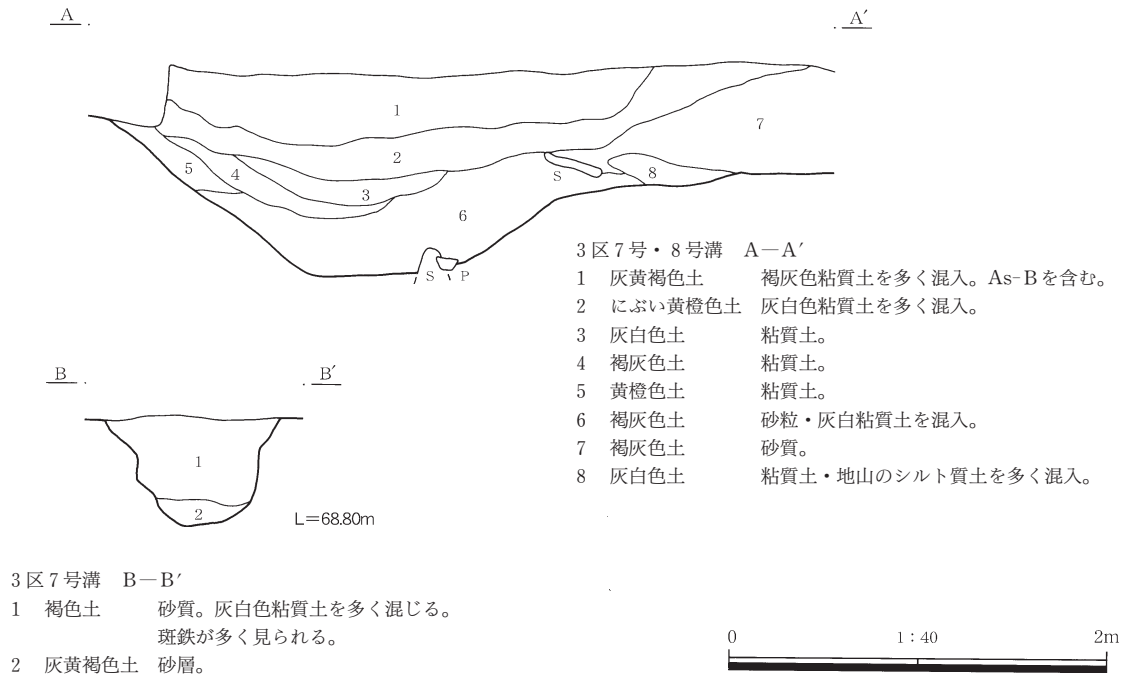
2) 溝

3区7号溝 (第33・34図 PL9・30)

位置 20J～L-19G

重複 8号溝、用水路と同時期に存在。

形状 南北方向に直線的な走行を有する。走長は9.76mを測る。南端は3区8号溝とほぼ垂直、90°の角度で接する。8号溝の底面との比高差は約0.40mである。北端は用水路南縁に接する。用水路の底面との比高差は、約1.00mである。断面形はU字形を呈するが、用水路との合流部近くでは、底面の中央が幅0.15mほどさらにV字状にくぼみ、流水があったことがうかがえる。規模は上幅0.89～1.40m、下幅0.10～0.35m、残存高0.54～0.72mを測る。底面の標高は南端から0.43m地点で67.97m、北端から2.14m地点で67.96mである。2点における標高差は0.



第35図 3区7号・8号溝土層断面

01mである。

方位 N-6°-E

埋没土 下層の0.20mほどに砂粒を含む灰黄褐色土が堆積する他は、砂質の褐色土が堆積している。調査時の所見では、本溝が一気に埋没したものと考えている。また、8号溝との合流部直下と、本溝底面から検出された人頭大の礫の重なりは、本来は本溝底面上にあり、堰の機能を有していたものが、本溝や8号溝を埋没させた土砂が用水路から流入する際に、8号溝底面に落下したものとしている。

遺物 埋没土中からの出土量は少なく、掲載した陶器片口鉢(2)と、板碑(1)が出土しただけである(観P175)。

所見 掘削状況、埋没土の観察から、1号屋敷に属する施設である。屋敷の北辺を区画する8号溝を通して、区画溝内に滞留した雨水・湧水を、用水路に自然排水する役割を有していたと考えられる。

3区8号溝 (第33・35図 PL9)

位置 20J-13(東端)~30J-1(北端)G (北辺溝)、30J・K-1G (西辺溝)

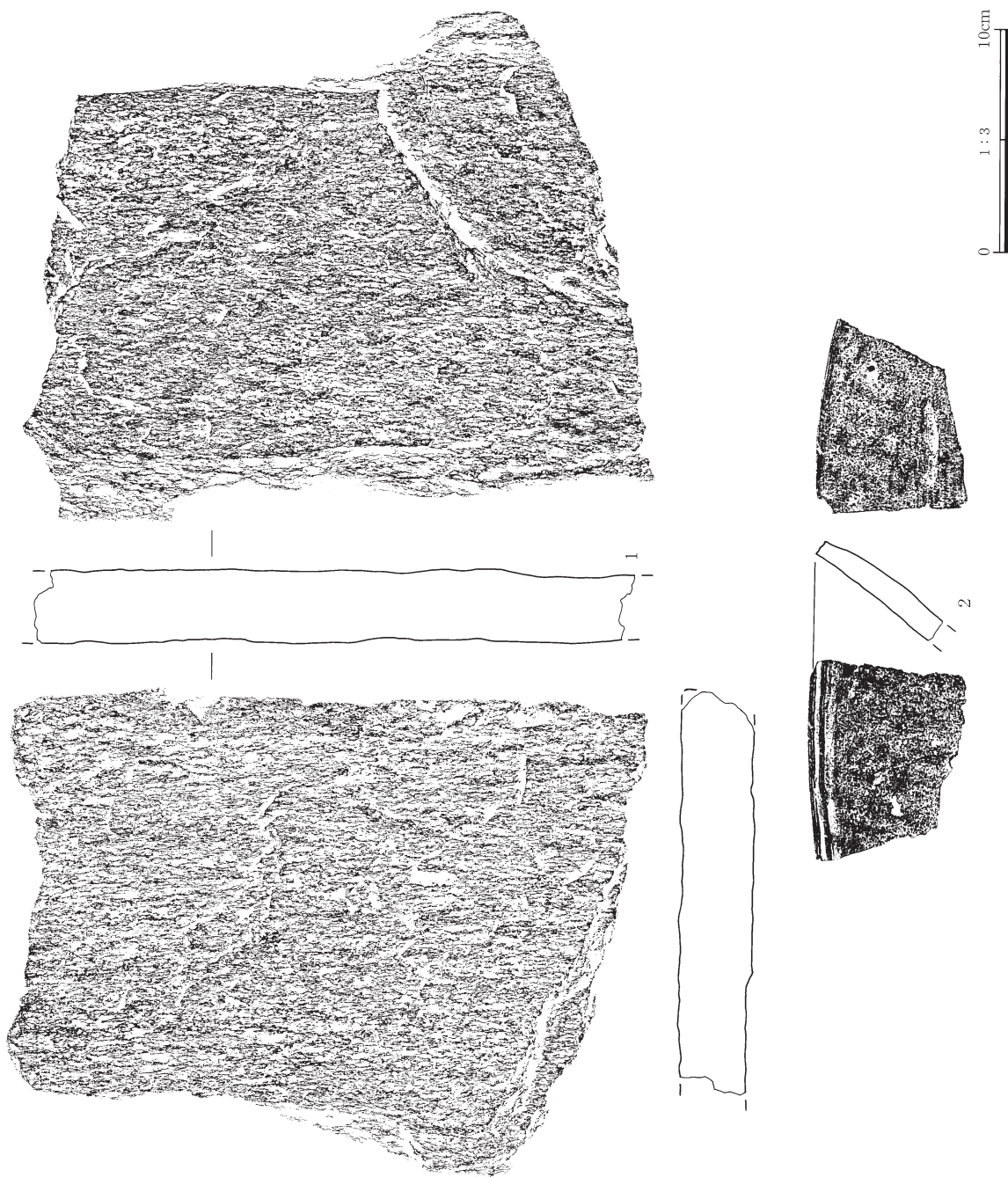
重複 7号溝、用水路と同時期に存在。

形状 L字状に屈曲し1号屋敷の北西隅を区画している。東西方向に直線的に走行する溝は、屋敷の北辺を区画するものである。北辺の検出長は41.49mで、東端は3区と4区間の現道下へと伸びている。断面形は上方に向かって大きく外傾する逆台形状を呈し、底面は平坦であった。規模は上幅2.88~4.04m、下幅0.62~0.92mと東側に行くに従い幅が狭くなった。残存高は0.79~1.14mを測る。底面の標高は、東端から16.00m地点で67.57m、西端から1.79m地点で67.55mである。2点における標高差は0.02mとわずかである。

北西隅で屈曲後は南北に走行を変え、1号屋敷の西辺を区画している。その後、3区調査区南壁外へ南進、4区に伸びている。本溝は、4区の調査において、4区6号溝と呼称した溝と同一遺構で、本来ならばいずれかの呼称を欠番とすべきものである。

3区における、西辺部分の検出長は、外縁部分で4.32mを測った。断面の規模は、上幅3.98m、下幅0.78m、深さ1.16mを測る。底面の標高は調査区南壁から1.55m地点で67.53mである。

方位 N-99°-E (北辺溝)



第36図 3区7号溝出土遺物

N-4°-E (南辺溝)

埋没土 7号溝との合流部分における土層の堆積状況を見ると、上半には浅間B軽石を含む灰黄褐色土、にぶい黄橙色土、灰白色土、褐灰色土がレンズ状に堆積していた。下半には砂粒を含む褐灰色土が堆積していた。7号溝との前後関係は認められなかった。また、土層の状況からは、区画内に土塁が存在したことの有無については判断できなかった。

遺物 比較的広範囲にわたり調査を実施したにもかかわらず、出土遺物は皆無である。

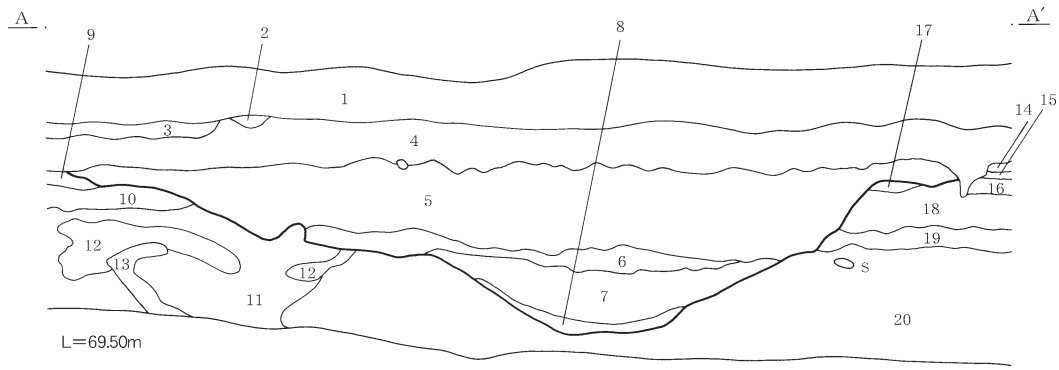
所見 1号屋敷の北西隅を中心に、北辺および西辺を区画する溝である。

4区6号溝 (第33・37図 PL9・31)

位置 20H-20、30F~H-1・2G

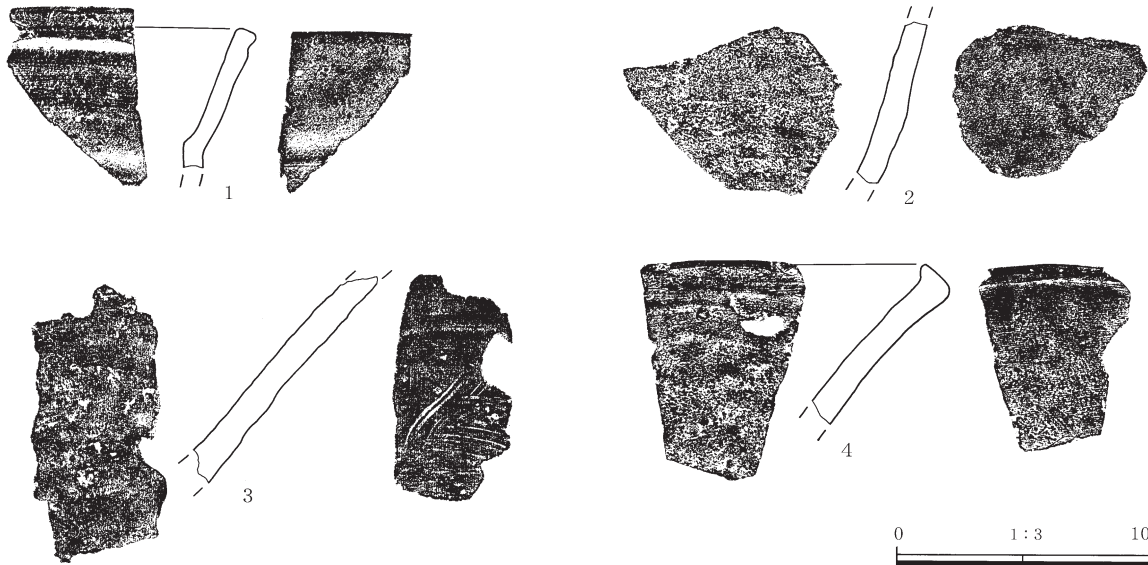
重複 17号溝と重複、同時期に存在か。

形状 南北に直線的な走行を有する。南端は4区



A—A'

- | | | |
|-----------------------|--------------------|------------|
| 1 褐灰色土 現表土。 | 7 褐灰色土 粘性あり。 | 14 灰褐色土 |
| 2 明黄褐色土 | 8 褐灰色土 粘性あり | 15 灰褐色土 |
| 3 明黄褐色土 | 9 褐灰色土 | 16 黒褐色土 |
| 4 明黄褐色土 | 10 褐灰色土 | 17 褐灰色土 |
| 5 明黄褐色土 (5～8層6号溝埋没土)。 | 11 褐灰色土 | 18 にぶい黄褐色土 |
| 6 明黄褐色土 5層より黄色味が強い。 | 12 シルト質土 ブロック状に混入。 | 19 暗赤灰色土 |
| | 13 明黄褐色土 ブロック状に混入。 | 20 シルト質土 |



第37図 4区6号溝土層断面と出土遺物

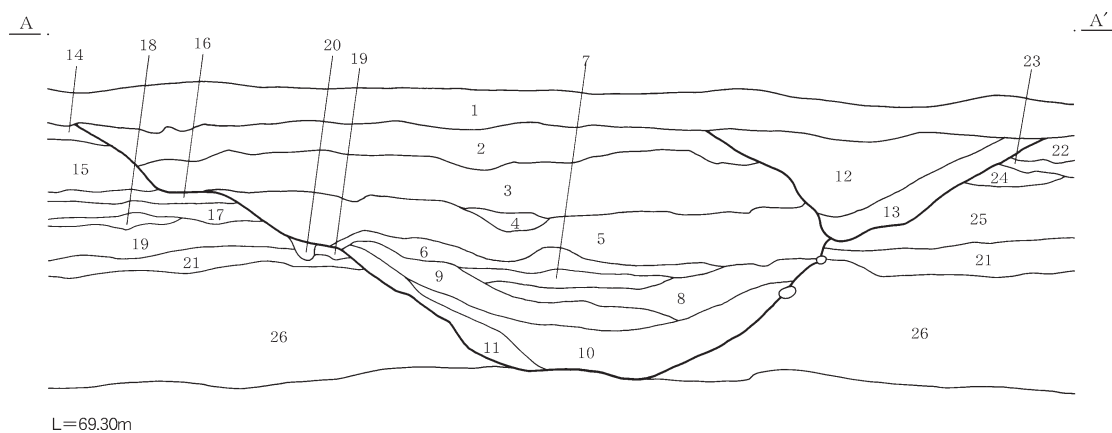
南側の調査区域外に延びている。走長12.16mを検出する。断面形は、上方に向かって大きく外傾して立ち上がる逆台形状を呈している。底面はほぼ平坦で、著しい凹凸も見られない。東西両縁とも立ち上がりの中位と上縁近くに傾斜変換点が見られる。特に東縁では、底面から0.20m上方、標高68.00m部分に、幅0.60～0.90mの中段平坦面が形成されていた。規

模は上幅4.78～5.36m、下幅0.34～0.51m、残存高0.92～1.02mを測る。底面の標高は南端から1.52m地点で67.61m、北端から1.76m地点で67.61mである。底面における標高はほぼ一定であった。

方位 N-1°-E

埋没土 上層に明黄褐色土が、下層に粘性を有する褐灰色土が堆積していた。土層の堆積状況からは、

II 発掘調査の記録

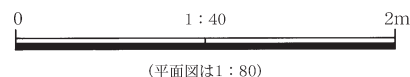
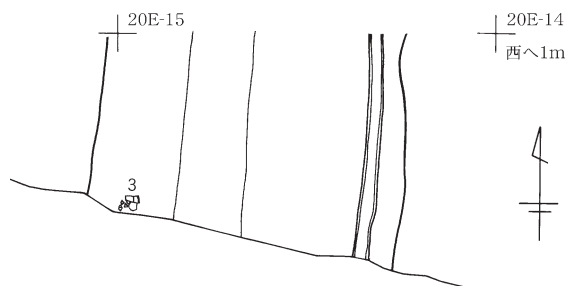


L=69.30m

A-A'

- 1 褐灰色土 As-Aを含む(表土)。
- 2 明黄褐色土 砂質。灰白色粘質土を多く混入。白色軽石(As-A)を少し含む。
- 3 明黄褐色土 砂質。灰白色粘質土を多く混入。
- 4 明黄褐色土 砂粒主体。
- 5 灰黄褐色土 As-Bを含む。やや粘質。
- 6 褐灰色土
- 7 褐灰色土 As-Bを多く含む。As-B混土、As-B下水田黒色粘質土をブロック状、極くわずかに含む。
- 8 灰白色土 粘質土。斑鉄が見られる。
- 9 褐灰色土 As-B多く含む。As-B混土、As-B下水田黒色粘質土をブロック状に極くわずかに含む。
- 10 褐灰色土 粘質土。
- 11 灰黄褐色土 褐灰色粘質土主体。灰黄褐色のAs-B混土を混入。

- 12 灰黄色褐色土 灰色味やや強い(2号溝埋没土)。
- 13 灰黄色褐色土 12層より黒色味増す(2号溝埋没土)。
- 14 黒褐色土 攪乱。
- 15 灰黄褐色土 As-Bを多く含む。As-B混土。
- 16 黒褐色土 As-B下水田耕作土。粘質。Hr-FP泥流。
- 17 褐灰色土 Hr-FAを多く含む。粘質。Hr-FP泥流。
- 18 明黄褐色土 砂粒主体。
- 19 黄褐色土 明黄褐色ローム主体。As-C混黒色土を混入。
- 20 黄褐色土 柵状部分の埋没土。
- 21 赤灰色土 As-YP堆積層。
- 22 明黄褐色土
- 23 明黄褐色土
- 24 明黄褐色土
- 25 明黄褐色土 白色軽石含む。ローム堆積土と思われる。
- 26 シルト層



第38図 4区5号溝

土層の存在の有無は判断できない。

遺物 遺物の出土量は少量である。埋没土中から軟質土器内耳鍋(1・2)・播鉢(3・4)が出土している。この他に非掲載遺物として、軟質陶器内耳鍋17点、板碑の小破片1点がある(観P175)。

所見 1号屋敷の西辺を画する溝で、3区8号溝と同一遺構である。17号溝を通して、15号溝と連結していた可能性が考えられる。

4区5号溝(第38~40図 PL 8・30・31)

位置 20D・E-13・14、F~H-12G

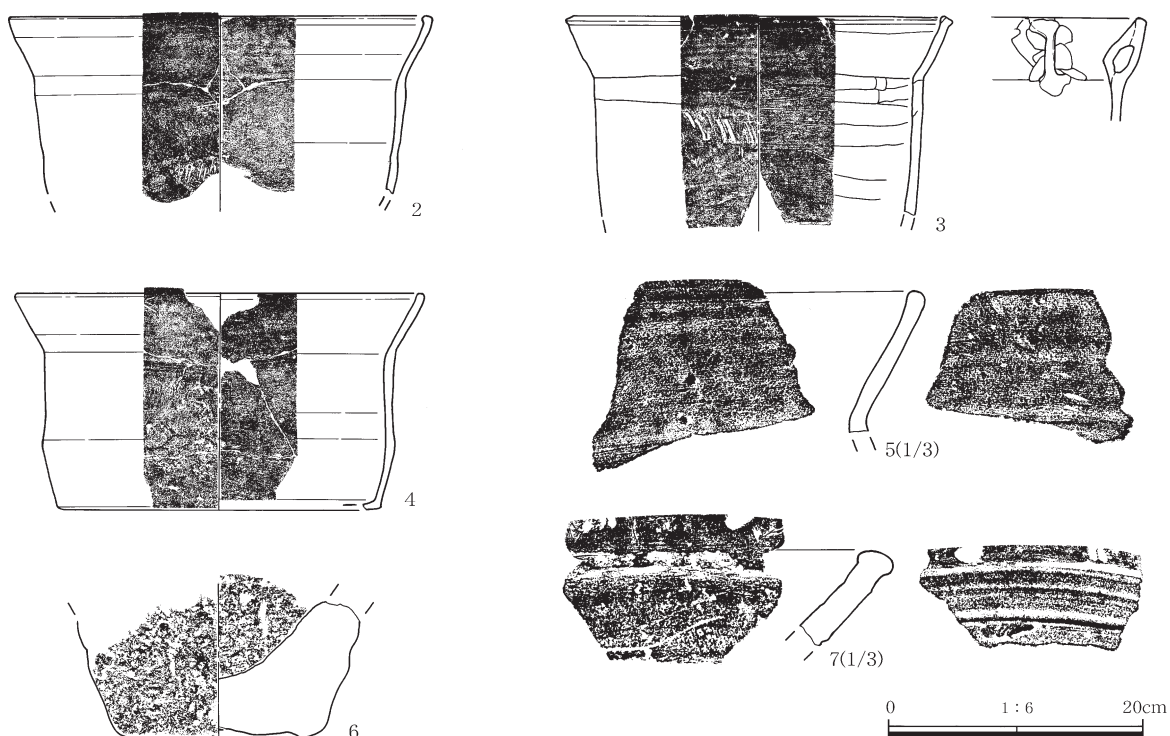
重複 西縁は2号溝により削平を受ける。

形状 南北方向に直線的に走行する。南端は調査区域外に延びている。北端も調査区域外におよび、西方に屈曲すると考えられる。走長18.64mを検出した。断面形は、上方に向かって大きく外傾して立ち上がる逆台形を原形としていたと考えられる。中位よりやや上方に変換点を有し、外傾の度合いを増している。底面は緩やかな弧状を呈していた。また、東縁には上端から約0.15m底面寄りに、幅0.16m、深さ0.12mの断面U字形の細溝が掘り込まれている。



第39図 4区5号溝出土遺物(1)

II 発掘調査の記録



第40図 4区5号溝出土遺物(2)

た。この細溝については柵列、あるいは塀の掘り方の可能性が考えられた。規模は上幅2.48~3.28m、下幅0.32~0.69m、残存高0.78~0.97mを測る。底面の標高は南端から1.70m地点で67.46m、北端から1.72m地点で67.56mである。2点における標高差は0.10mである。

方位 N-4°-E

埋没土 上層は洪水層と考えられる明黄褐色土や灰黄褐色土で被覆されている。以下には褐灰色土、灰白色土、灰黄褐色土が、各々0.10~0.20mの厚さで堆積している。浅間B軽石や浅間B軽石混土、浅間B軽石下の黒色粘質土ブロックの混入が目立った。

遺物 遺物の出土量は少量である。南端、D-14グリッド中の壁面、上位の法面に接するようにして、軟質陶器内耳鍋(3)が出土している。他に埋没土中から、軟質陶器内耳鍋(1・2・4)・播鉢(5)、石鉢(6)、板碑(7)が出土している。非掲載遺物として、陶器碗1点・播鉢1点、軟質陶器内耳鍋1点がある(観P175・176)。

所見 1号屋敷東辺を画する溝である。3区と4

区との現道下において屈曲、3区8号溝に連結するものと考えられる。

3) 掘立柱建物

概要 1号屋敷区画内からは、1号から4号の合計4棟の掘立柱建物の存在を確認した。1号屋敷内からは掘立柱建物や柵列の他に、307本のピットが検出されており、今回報告の4棟以外の建物が存在していたことは、充分予想されるところである。

4棟の分布を見ると、重複して検出された1号・2号建物は、1号屋敷の北半、中央からやや東側寄りに位置している。この2棟の西方、やや北側に寄った位置に3号建物がある。両者の距離は、約4mである。

4号建物は、1号・2号建物の南西8.50mの位置にある。また、西方に南北方向に延びる3号柵列との距離は、約1.5mである。ふたつの遺構の軸線は、方向をやや異にしている。

4棟の建物は、いずれも主屋のみの遺構と考えられる。底は出されていない。内部構造も不明である。

1号と2号建物が重複関係にあることから、屋敷

内の建物に時期差があることは明らかであるが、一時期における建物と柵列・井戸・土坑などといった付属施設との組成については不明である。

4区1号掘立柱建物（第41図 第7表 PL10）

位置 20G・H-15・16G

重複 2号掘立柱建物と重複する。5号・8号・9号土坑と実質的に重複する。重複するピットは少ない。

形状 2×1間(南辺5.02×東辺3.83m)の東西棟である。桁行は2間の柱間が等しく、3本の柱穴が軸線上に位置する。梁行は桁行の柱間より間隔が広くとられている。

方位 N-92°30'-E

柱穴 掘り方の平面形は方形を基本としている。長辺は0.41~0.51m、深さは0.335~0.495mである。埋没土はいずれも灰黄褐色の浅間B軽石混土を主体としている。柱痕は確認できない。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷の形成時期の所産と考えられる。2号掘立柱建物との前後関係は不明であるが、両者が立て替えの関係にある可能性も考えられる。

4区2号掘立柱建物（第42図 第8表 PL10）

位置 20G・H-15・16G

重複 1号掘立柱建物と重複する。5号・8号・9号土坑と実質的に重複する。重複するピットは少ない。

形状 2×1間(南辺5.02×東辺4.12m)の東西棟である。桁行の柱間が均等であること、梁行の1間が桁行の柱間より間隔が広い点などは、1号掘立柱建物と共通している。梁行の長さは、1号建物より、東西両辺とも0.31m長い。

方位 N-95°30'-E

柱穴 掘り方の平面形は、P1が方形である他は円形を基本として、その変形である長円形が多く見られた。長径(長辺)は0.38~0.57m、深さは0.375~0.600mである。埋没土は、灰黄褐色の浅間B軽石混土を主体としており、1号掘立柱建物と同様である。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

4区3号掘立柱建物（第43図 第9表 PL11）

位置 20G・H-17・18G

重複 4号土坑と実質的に重複している。

形状 東西方向の2間3本の列を検出した。列の長さは5.12mである。中間に位置するP2は、軸線上からわずかに南側に外れている。調査では、掘立柱建物の南辺を検出したものと認識した。梁行の柱穴、および桁行の北辺は調査区域外にあると考えられ、全容は不明である。

方位 N-93°-E

柱穴 掘り方の平面形は各種混在状態であるが、基本はP3のように方形であったと考えられる。長辺(長径)は0.45~0.50m、深さは0.58~0.65mである。P2は底面近くから礫が出土している。埋没土は灰黄褐色の浅間B軽石混土を主体としており、1号掘立柱建物と同様である。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

4区4号掘立柱建物（第44図 第10表 PL11）

位置 20E・F-17・18G

重複 なし。西側に3号柵列が近接する。重複するピットは少ない。

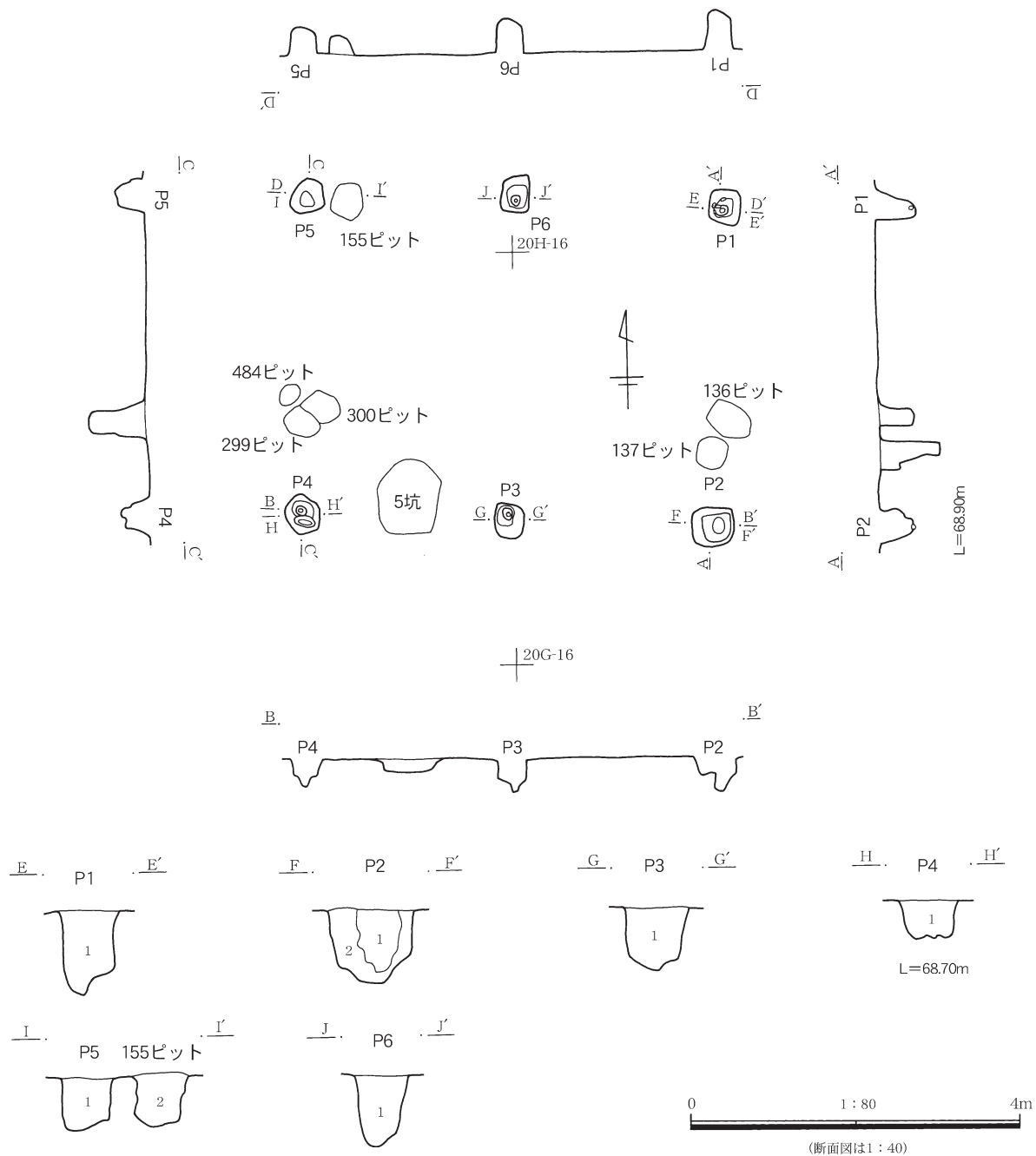
形状 2×2間の東西棟の可能性が考えられるが、南側部分が調査区域外におよんでおり、全容は不明である。桁行と考えられる北辺は、長さ4.37mである。柱間は等分でなく、P4は西側に寄っており、なおかつ軸線から南側に外れている。梁行の東列は、3.16m以上である。

方位 N-91°30'-E

柱穴 掘り方の平面形は、P2が方形、その他の3本は、円形・長円形である。長径(長辺)は0.32~0.50m、深さは0.56~0.68mで、4本ともしっかりとっている。埋没土は灰黄褐色の浅間B軽石混土を主体としており、1号掘立柱建物と同様である。

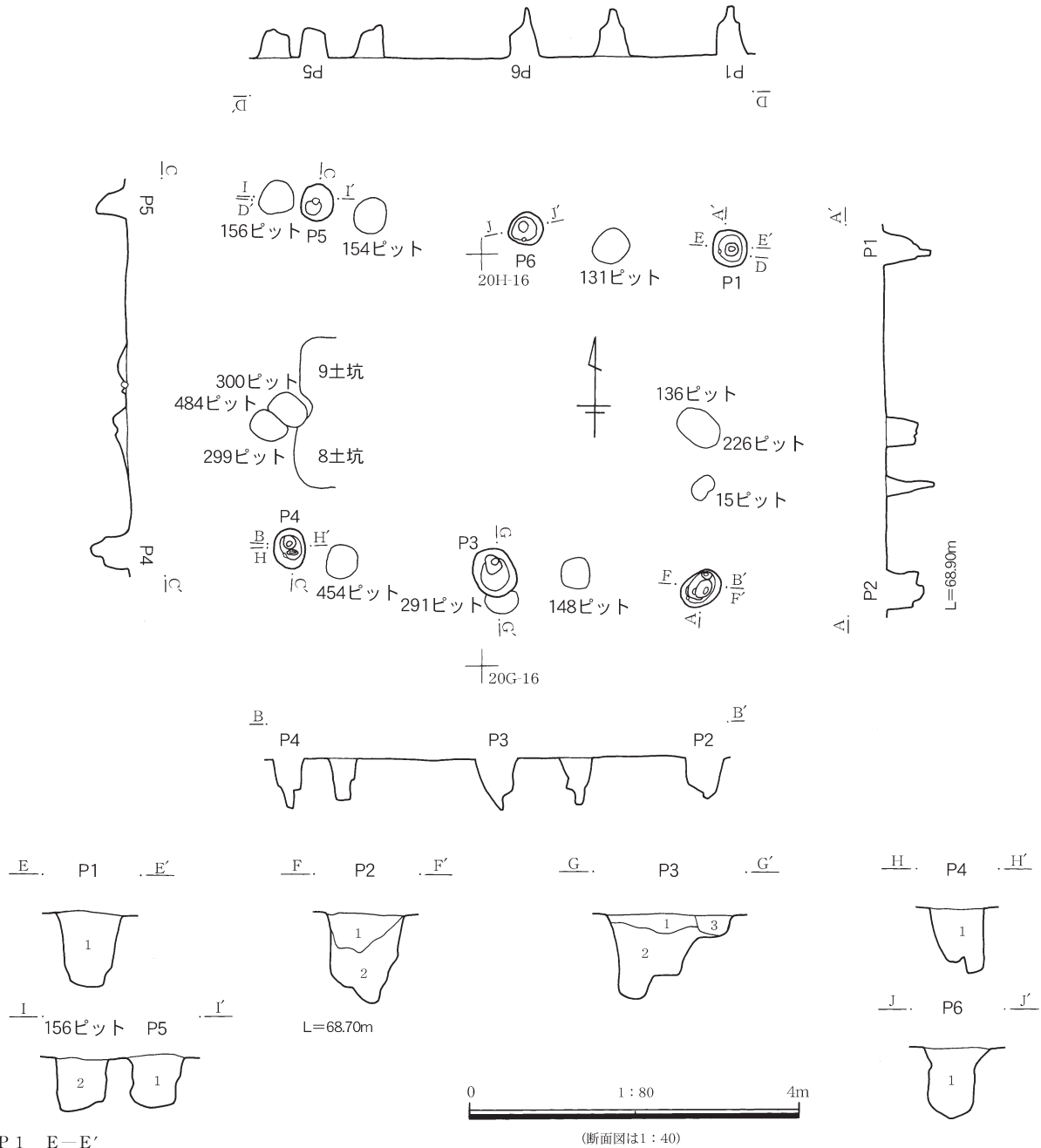
所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

II 発掘調査の記録



- P 1 E-E'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 2 F-F'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。斑鉄が多く見られる。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 3 G-G'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土をブロック状に少し含む。
- P 4 H-H'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。
- P 5・155ピット I-I'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色土粘質土ブロックを少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。
- P 6 J-J'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土をブロック状に含む。

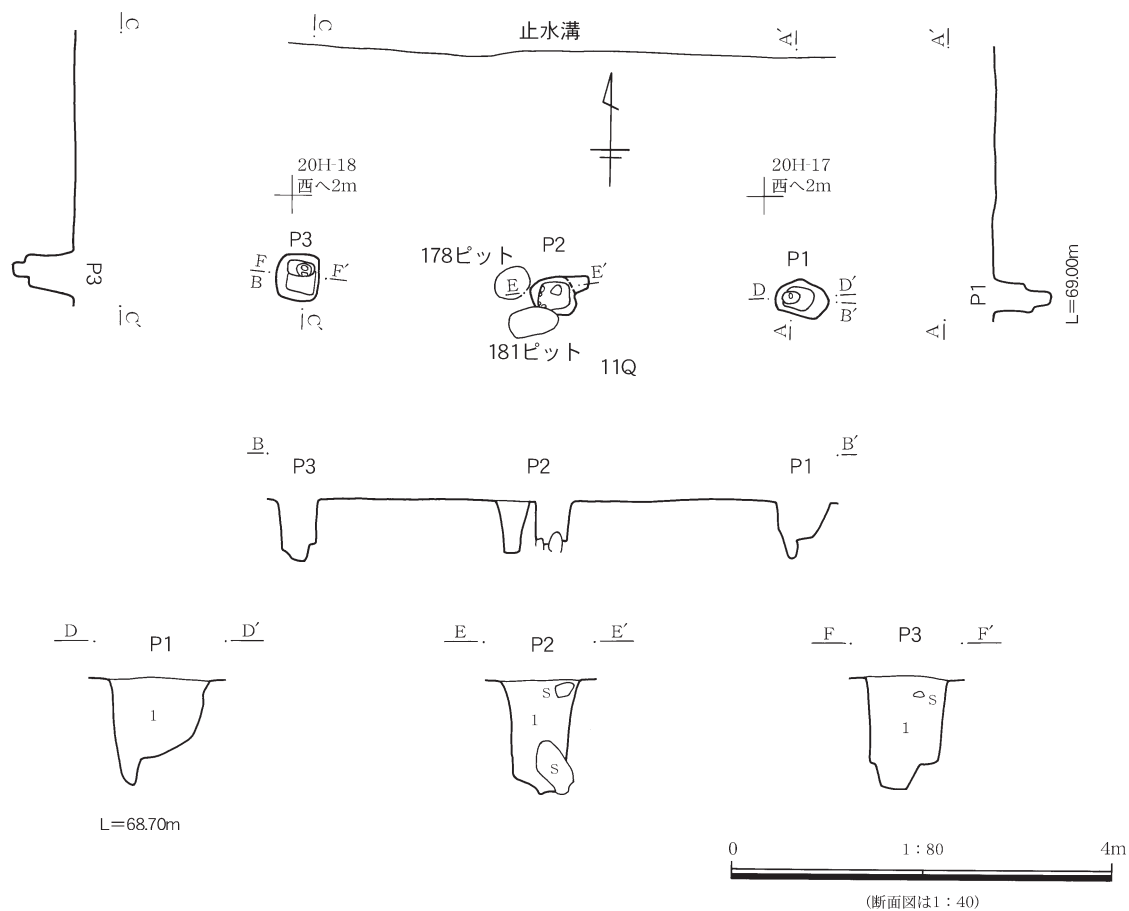
第41図 4区1号掘立柱建物



- P 1 E-E'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 2 F-F'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。灰白色のシルトを多く混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 3 G-G'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。Hr-FA泥流を多く含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。1層よりHr-FA泥流の混入が少ない。
- 3 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。粘土質ブロックの混入が多い。
- P 4 H-H'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-EA泥流を少し含む。
- P 5 156ピット I-I'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。
- P 6 J-J'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土をブロック状に含む。

第42図 4区2号掘立柱建物

II 発掘調査の記録



- P 1 D-D'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。
- P 2 E-E'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。Hr-FA泥流を少し混入。
- P 3 F-F'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。Hr-FA泥流を少し含む。

第43図 4区3号掘立柱建物

第7表 4区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2×1間		面積	19.32㎡			
主軸方向	N-92°30'-E		庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
東辺	3.83	P 1	41	38	49.5	方形	3.83
南辺	5.02	P 2	51	47	42.0	方形	2.55
		P 3	41	33	39.5	長方形	2.50
西辺	3.76	P 4	46	41	36.5	不整形	3.77
北辺	5.02	P 5	42	37	33.5	不整形	2.53
		P 6	44	32	35.0	長方形	2.52

第8表 4区2号掘立柱建物計測値一覧

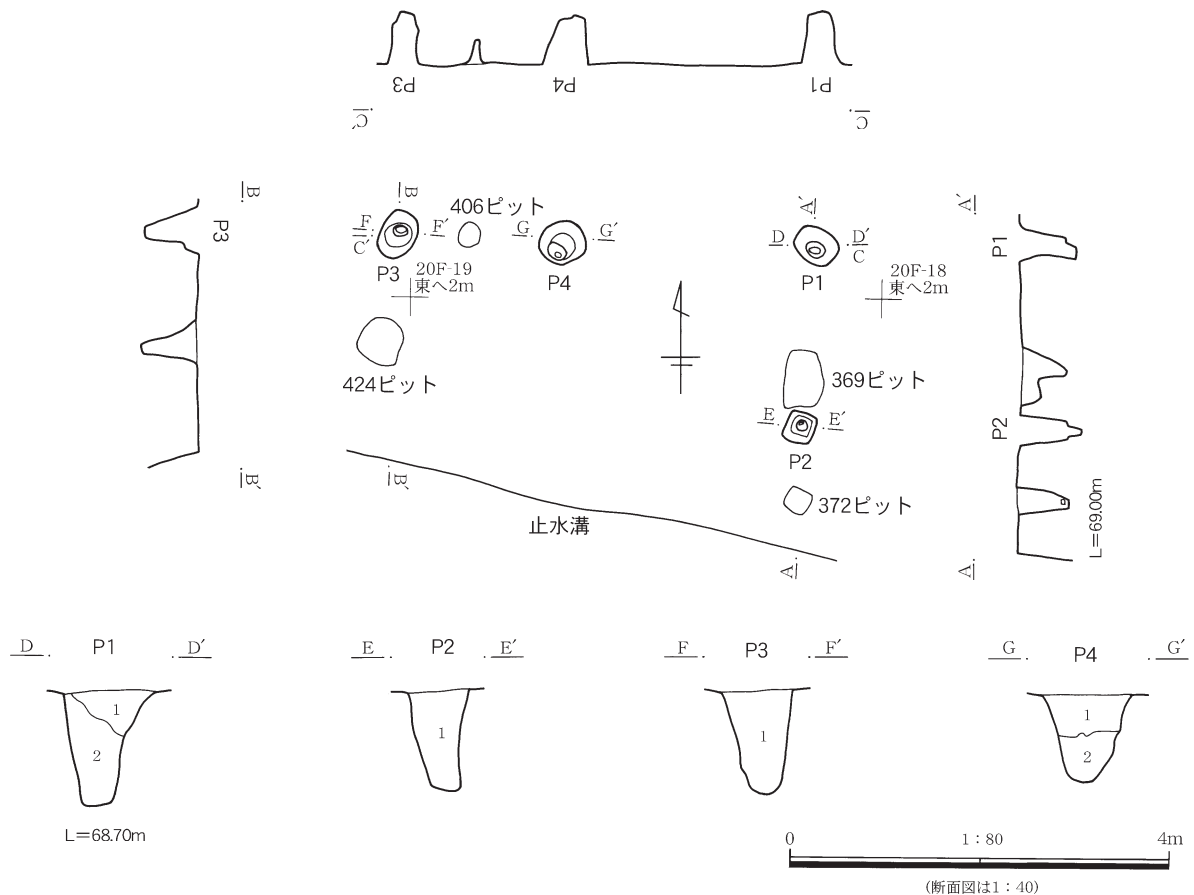
建物全体規模	2×1間		面積	20.91㎡			
主軸方向	N-95°30'-E		庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
東辺	4.12	P 1	40	42	37.5	方形	4.12
南辺	5.02	P 2	52	38	58.0	長円形	2.55
		P 3	57	47	60.0	長円形	2.47
西辺	4.07	P 4	49	37	50.0	長円形	4.07
北辺	5.07	P 5	42	35	36.0	不整形	2.54
		P 6	38	36	59.0	長円形	2.53

第9表 4区3号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2×?間		面積	(12.45) ㎡			
主軸方向	N-93°-E		庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
南辺	5.12	P 1	50	34	58.0	長円形	2.45
		P 2	45	42	60.0	方形	2.66
		P 3	50	43	65.0	長方形	5.12

第10表 4区4号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2×2?間		面積	(12.31) ㎡			
主軸方向	N-91°30'-E		庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長径	短径	深さ			
東辺	3.16+α	P 1	47	38	59.0	長円形	1.82
		P 2	32	31	68.0	方形	—
西辺	2.42+α	P 3	50	38	56.0	長円形	1.65
北辺	4.37	P 4	48	45	56.5	円形	2.73



- P 1 D-D'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流・灰白色シルトを混入。
 - 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層より灰白シルト層土が少ない。
- P 2 E-E'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 3 F-F'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- P 4 G-G'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを多く含む。灰白色シルトブロックを少し含む。
 - 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層と比較して混入物少ない。

第44図 4区4号掘立柱建物

4) 柵列

4区1号柵列 (第45図 第11表 PL11)

位置 20E~G-18G

重複

形状 南北方向の柵列である。4号掘立柱建物の西側に位置する。列の長さは5.78mである。9本8間の柱穴を検出した。配列は緩やかに弧を描いており、規格性をやや欠いている。柱間の間隔も0.44~2.00mと不揃いである。特にP3とP4の間隔は、他の柱間の2間から4間分も開いている。出入り口が設けられていたためであろうか。南端は調査区域外

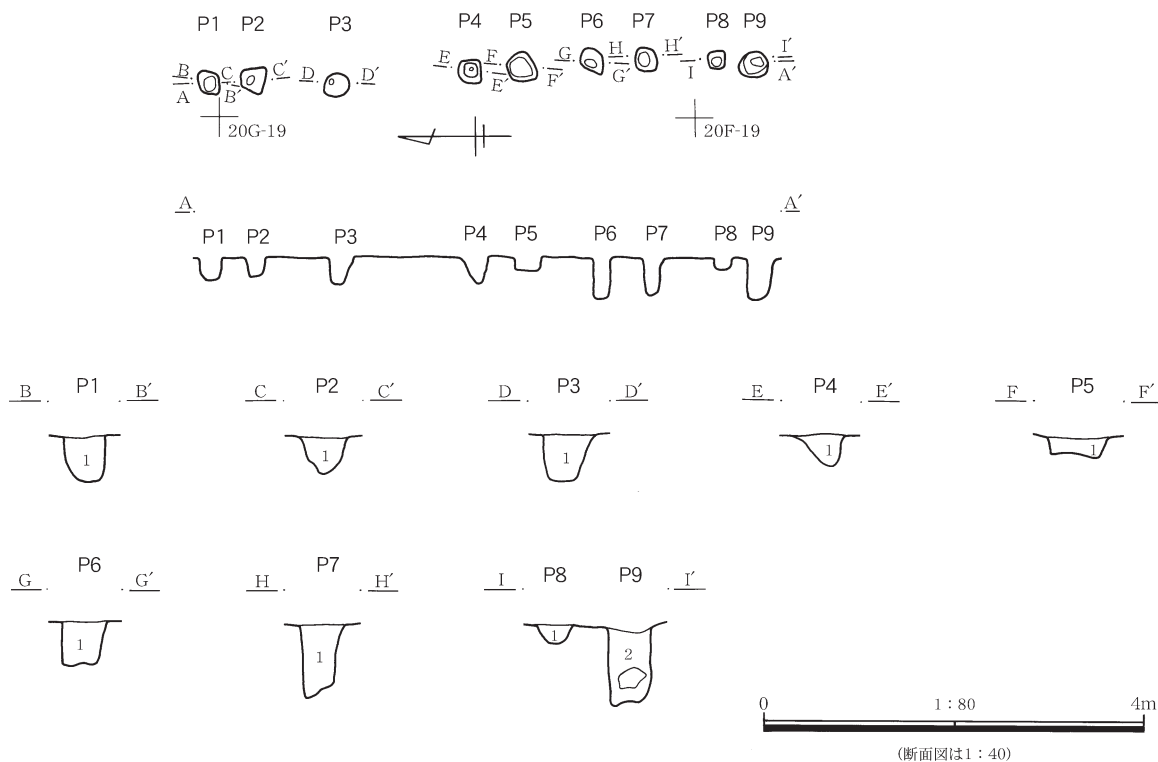
に延びている可能性がある。

方位 N-2°-W

柱穴 掘り方の平面形は、方形と長円形が混在するが、方形が基本であったか。長軸(長辺)は0.19~0.39m、深さは0.12~0.42mである。4本が深さ0.21m以下の浅い掘り込みであった。特にP8は小規模であった。P9は下層に礫の混入が見られた。埋没土は灰黄褐色の浅間B軽石混土を主体としており、この点は他の掘立柱建物と同様である。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明であるが、掘立柱建物、その他ピット群と前後す

II 発掘調査の記録



- P 1 B-B'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- P 2 C-C'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- P 3 D-D'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- P 4 E-E'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 5 F-F'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 6 G-G'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 7 H-H'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- P 8・P 9 I-I'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。Hr-FA泥流を混入。黒褐色粘質土ブロックを含む。

第45図 4区1号柵列

第11表 4区1号柵列計測値一覧

建物全体規模	8間					
主軸方向	N-2°-W			長さ(m)	5.78	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
	P 1	22	22	21.0	方形	0.45
	P 2	26	25	17.5	方形	0.84
	P 3	26	21	25.5	長円形	1.48
	P 4	25	24	22.5	方形	0.52
	P 5	29	28	14.5	方形	0.74
	P 6	27	21	42.0	長円形	0.56
	P 7	26	21	38.5	長方形	0.76
	P 8	19	18	12.0	方形	0.44
	P 9	39	30	28.5	長円形	

る時期の所産と考えられる。

本遺構を境に、これより西側部分ではピット群の分布数が激減している。本柵列が、屋敷内の土地利用を区分するような役割を有していたことも考えられる。

5) ピット

4区ピット (第33・34・46～51図 PL14・31)

概要 1号屋敷の区画内からは、合計307本のピットが検出された。個々の情報については、第12・13表に掲載したとおりである。なお、表中のピットの番号は、4区全体の調査の進行に則って、掘立柱建物や柵列を構成した柱穴も含めて、一連の番号が付されていた。そのため、今回、1号屋敷・2号屋敷に分離し、掘立柱建物・柵列の柱穴となったものを除いた形で報告することにより、表中の番号が不連続になっている。以下、分布、形状、埋没土、出土遺物の順に、確認された点の概要を記しておく。

分布 1号屋敷の南北方向の規模が、東西方向とほぼ同様であったと推定すると、調査を実施した範囲は、屋敷の区画内全体の約3分の1強ほどである。

その調査区内におけるピットの検出状況は、粗密の差が著しく大きいものであった。まず、屋敷の西側に南北方向に延びる1号柵列と、屋敷の西辺を区画する4区6号溝東縁との間の幅約11mにおいては、ピット3本を検出したのみである。この部分においては、他には4号井戸が配置されているだけの全くの空白地帯であった。また、屋敷の東辺を区画する4区5号溝の西縁から西側約4m以内では、検出したピットの本数は8本である。この分布の稀薄な状況は、1号・2号掘立柱建物の東辺あたりまで続いている。

すなわち、これまでに報告した掘立柱建物・柵列を構成する柱穴、および第12表に掲載したピット307本は、20グリッドの15ラインから19ラインまでの東西約20m、南北約15mの範囲内において掘り込まれていたことになる。

そして、この範囲内においても、検出状況に若干の差が見られた。1つには、掘立柱建物や土坑と重複するピットが、比較的少数であったことが上げられる。これは先に、1号・2号掘立柱建物が重複関係があることから、1号屋敷の存続期間に時間幅があることを述べたが、それとは相反するように大半のピットと掘立柱建物や土坑が、同時存在していた

ことを示しているものと考えられる。2つ目は、4号掘立柱建物の東側、20E・F-16・17グリッドに、ピットの分布が特に集中する地点が見られる点である。この地点には、何らかの建物遺構が存在していたと考えられるが、確認するにいたらなかった。形状、深さ、埋没土中から礫の出土したものについては、各項目でその状況についてふれてみたい。

形状 平面の形状は、円形あるいは方形を基本とするものに大別できる。第12表では、これを円形(53本)、長円形(145本)、方形(50本)、長方形(25本)、不整形(27本)、その他(7本)に分類した。これらの分布は混在状態にあった。

26号ピットは、上端の形状が長方形であるのに対し、下端の形状が円形を呈していた。調査の過程を考慮する必要があるが、他にも35号・40号・95号・99号・173号などのピットで上端と下端の形状が異なる状況が見られた。

長径あるいは長軸の規模は、188号ピットの1.04mを最大、333号ピットの0.16mを最小と隔差が大きい。その中、0.21～0.30mが100本、0.31～0.40mが99本、0.41～0.50mが54本で、これを合計すると253本となり、全体の約8割以上となる。

断面形は、その大半が筒状を呈しているが、平面長円形を呈する267号ピットのように、両脇が浅く、中央部分のみ深く掘られている事例もある。掘り込みは、下位のシルト層にまでいたるものと、浅間C軽石を混土するHr-FA泥流層で止まる浅いものがある。

残存する深さは、346号ピットの0.910mを最深に、220・308号ピットの0.055mまでであった。特定の深さに片寄る傾向は見られず、0.105～0.500mまでが0.100m単位の中に各40本以上、0.505～0.700mが各25本以上と分散していた。

1号屋敷内で検出されたピットの大半は、建物の柱穴を構成していたものと考えられる。その中の一部に、柱穴とは考え難いと思われるものが見られたが、ここではそれらも細別せず、ピットとして報告した。

II 発掘調査の記録

第12表 4区1号屋敷ピット計測値一覧

凡例

1. 調査区、調査面は全て 4区第5面である。
2. Noには欠番が生じている。また、整理事業段階で枝番を付したのものもある。
3. 形は、円形・長円形・方形・長方形・不整形に分類した。
4. 柱痕はその痕跡が認められたものに○を記した。
5. 埋没土の分類はAからFとし、その土層内容については、本文74ページに記したとおりである。
6. 備考には当該ピットと重複するピットのNo、礫や遺物の出土状態、形状の特徴他を特記した。

No	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
121	20H-14G	長方形	32	27	38.0		C			
122	20G-14G	長円形	—	40	18.0		A	P211	48	14
123	20G-14G	長円形	40	30	59.5		C			
124	20G-15・16G	円形	45	44	73.5		C			
125	20G-15G	長円形	36	31	14.5		A			
126	20G-15G	不整形	41	34	38.5		A	2本重複か		
129	20G-16G	方形	26	24	24.0		C		47	
130	20H-15G	円形	33	31	33.0		C			
131	20G-15G	長円形	45	41	53.0		C			
133	20H-15G	長円形	30	25	33.0		C			
135	20G-15G	長方形	27	18	36.0		C	礫有り		
136	20G-15G	長円形	45	42	54.5		C	P226		
137	20G-15G	方形	37	39	84.0	○	C			
139	20G-15G	長円形	41	32	61.0		C			
140	20G-15G	長円形	31	20	14.0		C			
141	20G-15G	方形	24	24	37.5		C			
143	20G-15G	方形	28	26	45.5		C			
144	20F・G-14G	長方形	38	25	16.0		C			
145	20G-14G	不整形	35	27	33.0	○	C	下層に礫1点有り	47	14
146	20G-15G	長方形	27	22	13.5		C			
147	20G-15G	長方形	28	20	19.5		C			
148	20G-15G	長方形	38	34	39.0		C			
149	20G-15G	方形	26	26	27.5		—			
150	20G-15G	円形	39	37	57.0		C			
151	20F-16G	方形	28	27	20.0		C			
153	20H-16G	長円形	41	34	59.0		C			
154	20H-16G	不整形	42	37	41.0		C			
159	20H-16G	長円形	24	20	13.0		C			
160	20H-16G	不整形	52	37	58.0		C			
162-1	20H-16・17G	不整形	36	32	45.0		C	P162-2		
162-2	20H-16・17G	円形	25	—	21.0		—	P162-1		
163	20H-17G	長円形	26	22	15.0		C			
164	20H-17G	長円形	34	27	27.5		C			
165	20G-17G	—	—	—	—		—	P171		
166	20G・H-17G	方形	22	18	10.0		C			
167	20G-17G	円形	21	19	15.5		C			
168	20H-17G	方形	24	24	32.0		C			
169	20H-17G	長円形	31	28	58.0		C			
170	20G・H-17G	不整形	41	34	51.0		C	下層に礫1点有り、陶器甕1点	47	
172	20E・F-15G	不明	—	43	61.0		C	→P225、土師質土器皿2点（P225と重複のため正確な 帰属不明）	46	
173	20H-17G	長方形	24	21	39.5		C	下端は円形	47	
174	20H-17G	長円形	23	17	20.5		C			
175	20G・H-17G	長円形	29	25	45.5		C			
176	20H-17・18G	長方形	32	25	44.5		C	上層に礫1点有り	46	
177	20H-17・18G	長方形	27	22	32.0		C			
178	20G-17G	円形	35	32	55.0		—	上層に礫有り	48	14
179	20G-17G	長円形	23	18	20.0		C	P180と重複		
181	20G-17G	方形	31	29	61.0		C	→P450	46	
182	20G-18G	長円形	33	31	47.0		—	未注記		
183	20G-18G	円形	46	28	47.5		C	P186		

5 第5面の調査

No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
184	20G-15・16G	円形	42	40	21.5		C	→8号土坑		
185	20H-18G	長円形	29	25	61.5		C		46	
186	20G-18G	長円形	—	—	—		C	P183		14
188	20G-18G	長円形	104	88	26.0		C			
189	20G-18G	長円形	—	28	32.0		C	P191		
190	20G-18G	長円形	25	21	13.0		C			
191	20G-18G	長円形	32	23	35.0		C	P189		
192	20G-18G	円形	18	17	17.5		C			
193	20G-18G	円形	23	22	12.0		C			
194	20G-17・18G	円形	28	24	31.0		C	P195		
195	20G-17・18G	円形	26	22	33.0		C	P194		
196	20G-17G	方形	29	26	69.0		C	P197		
197	20G-17G	長円形	—	24	12.5		C	P196		
198	20G-17G	長円形	74	48	76.5		C	複数本重複か		
199	20G-18G	不整形	26	22	27.0		C			
200	20G-17G	方形	26	25	49.0		C			
201	20E・F-17G	長円形	47	—	40.5		D	P355・278と重複		
202	20G-17G	円形	31	28	62.5		C			
203	20G-17G	方形	25	20	28.5		C	上層に礫1点有り	47	14
204	20G-18G	長円形	31	—	15.5		C	P206		
205	20G-18G	長円形	34	27	31.0		C			
206	20G-18G	長円形	38	22	15.0		C	P204		
207	20G-18G	方形	29	27	44.0		C			
208	20F-18G	長円形	34	29	48.0		C	礫1点有り、陶器皿1点		
209	20F・G-18G	長円形	77	68	38.0		C	土坑状		14
211	20G-14・15G	円形	35	32	36.5		C	P122と重複、底面近くに礫1点有り	48	14
212	20F-15G	長円形	40	34	44.0		C			
213	20F-15G	長円形	46	37	50.0		C	底面近くに礫1点有り		
214	20F-15G	長円形	31	27	34.0		C			
215	20G-15G	長円形	28	22	59.0		C			
216	20F-15G	長円形	30	21	35.0		C			
219	20F-15G	長円形	38	32	65.0		C			
220	20F-15G	長円形	23	18	5.5		C			
221	20E・F-15G	円形	24	22	17.0		C	埋没土中に礫1点有り	48	14
222	20F-15G	長円形	36	34	26.0		C			
223	20E-15G	長円形	38	32	38.5		C			
225	20E・F-15G	長円形	72	52	68.0		C	P172→、土師質土器皿2点（P172と重複のため正確な 帰属不明）	46	
226	20G-15G	不明	—	42	54.5		C	P136		
228	20E-15G	方形	—	28	15.5		C	P438		
230	20E-14G	長円形	52	43	83.0	○	C	礫6点有り		
231	20E-14G	円形	36	35	24.0		C			
232	20E-14G	長円形	32	25	30.0		C			
233	20E-14G	長円形	28	22	38.5		C	礫3点有り、須恵器杯1点		
234	20E-14G	長円形	35	28	52.0		C			
236	20F-18G	方形	38	37	47.0		C	土師質土器皿1点、下端は不整形		
237	20E-16G	長円形	29	24	54.5		C	下層に礫3点有り		
238	20E-16G	長円形	36	27	56.5		C			
239	20E-16G	方形	32	31	36.0		C	下端は円形		
240	20G-17G	長円形	34	19	13.5		C			
241	20E・F-16G	円形	27	26	39.5		C			
242	20F-15G	長円形	29	22	44.0		C	礫1点有り		
243	20F-16G	不整形	54	42	39.0		C	2本重複か		
244	20G-17G	円形	49	47	49.0		C	土師質土器皿1点		
245	20F-16G	長円形	28	22	40.5		C			
246	20F-16G	長方形	31	—	38.0		C	P321、石製品板碑2点（P321と重複のため正確な帰属 不明）	49	
247	20F-15G	長円形	24	21	25.5		C	下層に礫1点有り		
248	20F-15G	長円形	26	21	45.5		C			
250	20F-16G	長方形	27	23	35.5		C			

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
251	20F-16G	長方形	46	35	46.0		C			
253	20E-16G	方 形	42	41	14.0		C	上層に礫 2 点有り	48	14
254	20E-16G	方 形	31	29	62.0		C	礫 4 点有り、下端は円形か	46	
255	20E-16G	長円形	37	27	12.0		C			
256	20E・F-16G	長円形	42	32	44.5		C	礫 1 点有り		
257	20F-16G	長円形	23	17	10.5		C			
258	20E・F-16G	長円形	41	31	54.5		C	礫 4 点有り		
259	20E・F-16G	長方形	46	33	45.0		C	P260、礫 1 点有り		
260	20E-16G	長円形	30	25	40.5		C	P259、土師質土器皿 1 点		
261	20F-16G	長円形	—	25	11.5		C	P262		
262	20F-16G	長円形	54	39	31.5		C	P261、軟質土器内耳鍋 1 点		
263	20G-17G	長円形	65	29	53.5		C	複数本重複か		
264	20F・G-16G	方 形	51	—	27.0		C	7号土坑・P453、土坑状		
265	20F-16G	長円形	96	34	62.5		C	複数本重複か、礫 2 点有り		
267	20F-16G	長円形	53	35	40.0		C	P268、埋没土中に礫 7 点有り	48	
268	20F-16G	円 形	28	26	18.5		C	P267	48	
271	20E-16G	長円形	51	23	40.0		C	P272・273、礫有り	48	14
272	20E-16G	円 形	52	32	53.0		C	P271・273、底面近くに礫 1 点有り	48	14
273	20E-16G	長円形	68	24	34.0		C	P271・272、礫有り	48	14
274	20E-16G	円 形	57	51	31.5		G	土坑状	47	14
275	20E-16G	円 形	25	22	10.0		C			
276	20E-16G	円 形	54	42	64.0		C	P277、礫 1 点有り		
277	20E-16・17G	長円形	34	24	44.0		C	P276、底面に礫 1 点有り		
278	20E-17G	長円形	50	41	44.0		C	P201		
280	20E-17G	長円形	27	22	22.5		C			
281	20E-17G	不整形	41	26	36.0		C	P367、底面に礫 1 点有り		
282	20E-17G	長円形	32	27	31.0		C	陶器皿 1 点		
283	20E-17G	長円形	37	28	63.0		C			
284	20E-15G	長円形	46	35	46.5		C	P474、底面に礫 1 点有り		
285	20E-17G	長円形	29	23	30.0		C			
286	20E・F-16G	長円形	61	—	42.5		C	P288		
287	20E-16・17G	円 形	45	42	65.0		A	P469、下層に礫 1 点有り		
288	20E・F-16G	長円形	63	39	42.5		C	P286		
289	20E-16G	不整形	36	29	17.5		C	下層に礫 3 点有り		
290	20E-17G	長方形	33	27	28.0		C	下端は長円形		
291	20G-15G	円 形	38	—	15.0		C	P293		
292	20G-16G	長円形	33	26	16.0		C			
294	20G-16G	長方形	23	18	33.0		C			
295	20G-16G	円 形	20	19	36.5		C			
296	20G-15・16G	不整形	54	29	35.0		—			
297	20G-16G	長円形	29	26	15.0		C			
298	20G-16G	長円形	45	31	47.0		C			
299	20G-16G	長円形	41	32	77.0		C	P300・484	46	14
300	20G-16G	長円形	41	34	75.5		C	P299・484	46	14
301	20G-16G	長円形	33	24	15.5		C			
302	20F-16G	長円形	30	27	18.5		C			
304	20F-16G	長円形	36	27	55.0		C	P305		
305	20F-16G	長円形	44	40	60.5		C	P304・307		
307	20F-16G	長円形	39	30	28.5		C	P305、2本重複か		
308	20F-16G	不整形	60	40	5.5		C	中層に礫 2 点有り	48	14
309	20F-16G	円 形	41	34	25.0		C			
310	20G-16G	長円形	26	21	27.5		C	中層に礫 1 点有り		
311	20G-16G	方 形	31	29	45.5		C			
313	20G-16G	方 形	25	24	15.0		C	下端は長円形		
314	20G-16・17G	長円形	54	41	58.0		—	P315		
315	20G-16・17G	円 形	39	36	38.0		C	P314		
316	20G-16・17G	長方形	29	23	8.0		C			
317	20G-16・17G	長円形	41	36	60.0		C			
320	20G-16G	長円形	22	15	13.5		C			

5 第5面の調査

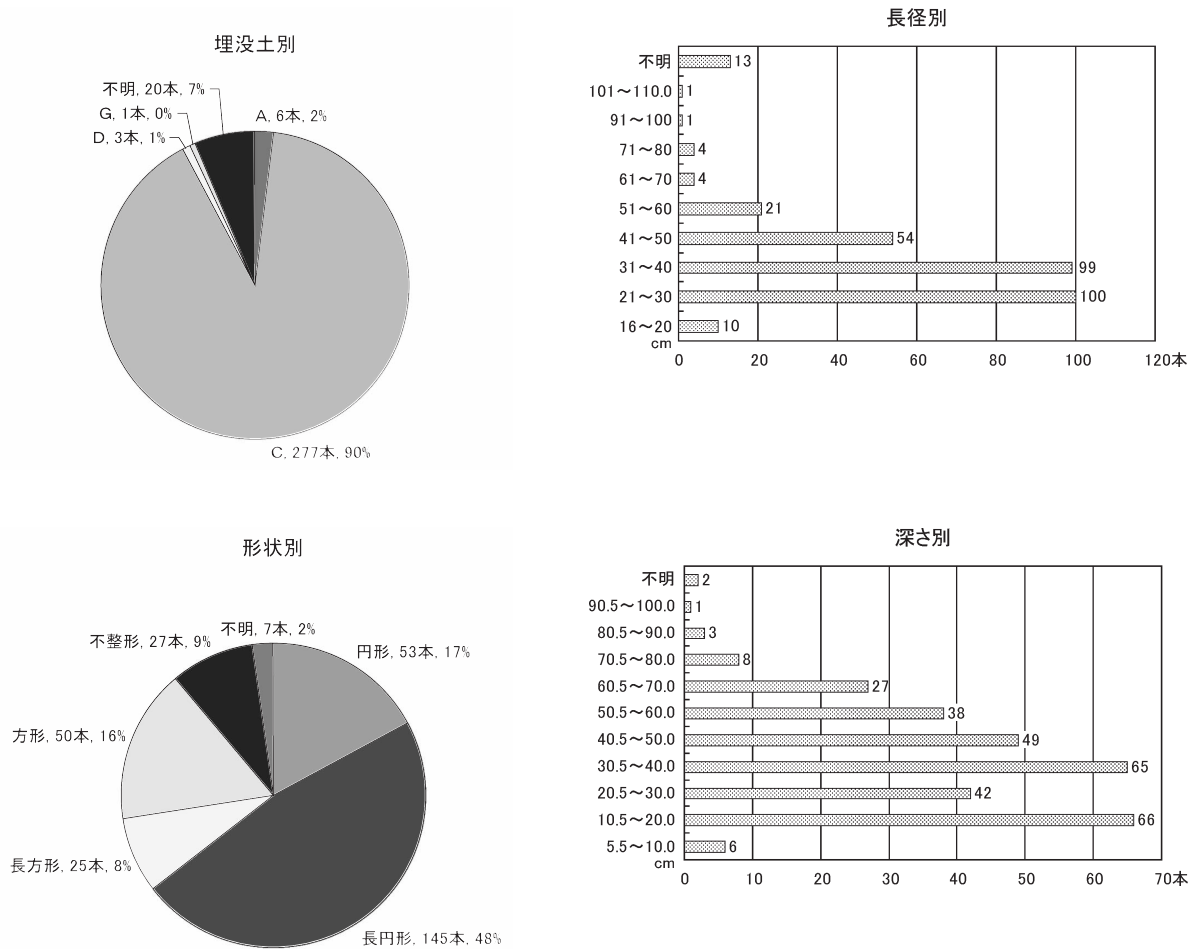
No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
321	20F-15・16G	長円形	58	34	78.0		C	P246、陶器皿1点、石製品板碑4点（2点はP246と重複のため正確な帰属不明）		14
322	20G-17G	不整形	34	26	44.5		C		49	
323	20G-17G	方形	21	21	13.5		C			
324	20G-16G	円形	37	32	35.0		C			
325	20G-16G	長方形	41	33	47.0		C	底面に礫1点有り	47	14
327	20G-17G	円形	24	24	13.5		C			
328	20F-17G	長円形	38	36	40.0		C	P392、礫1点有り		
329	20F-17G	長円形	39	32	52.0		C			
330	20F-17G	長方形	34	27	37.0		C	礫3点有り		
331	20F-16G	方形	22	21	14.5		C			
332	20G-17G	円形	23	19	22.0		C	P334		
333	20G-17G	不整形	16	11	10.0		C			
334	20G-17G	不整形	31	28	64.0		C	P332		
336	20G-17G	円形	39	32	69.5		C	小ビット		
338	20G-17G	長円形	31	22	12.6		C	P339		
339	20G-17G	円形	22	19	13.0		C	P338		
340	20G-17G	長円形	20	14	10.5		C			
341	20G-17G	長円形	22	16	10.5		C			
342	20F-16・17G	不明	41	—	43.0		C	方形か		
343	20F-16G	不整形	57	42	44.0		C	P344、もう1本重複か、礫4点有り		
344	20F-16G	円形	24	23	34.5		C	P343、もう1本重複か		
345	20F-16G	方形	31	29	27.0		C	下端は円形		
346	20F-16G	長円形	54	47	91.0		C	P349		
348	20F-17G	長方形	26	19	36.5		C			
349	20F-16G	円形	25	23	17.0		C	P346		
350	20F-17G	円形	24	24	11.0		C			
351	20F-17G	長円形	26	23	19.0		C			
352	20F-17G	円形	32	31	49.5		C	下層に礫1点有り		
353	20F-16・17G	方形	19	18	12.0		C	中層に礫1点有り		
354	20F-17G	円形	25	23	20.0		C			
355	20E・F-17G	長円形	47	28	58.0		D	→P201、礫1点有り		
356	20F-17G	長方形	45	31	71.0		C	下端は長円形		
357	20G-16G	不整形	38	37	58.5		C	2本重複か		
358	20F-16・17G	長円形	36	27	51.0		C	P359		
359	20F-16・17G	長円形	37	—	50.5		C	P358、底面に礫3点有り、土師質土器杯1点	49	
360	20F-17G	長円形	48	30	34.5		C		49	
361	20E-17G	長円形	35	35	16.5		C			
362	20E-17G	方形	32	31	36.5		C	P363		
363	20E-17G	長円形	26	14	22.5		C	P362		
364	20E-17G	円形	30	29	39.5		C	土師質土器皿1点		
365	20E-17G	長円形	24	—	18.0		C	P366	49	
366	20E-17G	長円形	45	35	41.5		C	P365、土師質土器皿1点、陶器碗3点	49	
367	20E-17G	不整形	42	36	62.0		C	P281		
368	20E-17G	円形	43	44	39.0		C			
369	20E-17G	長円形	76	49	56.0		C	礫2点有り		
372	20E-17G	方形	26	26	49.0		C	礫1点有り		
373	20F-17G	方形	38	37	41.5		C	軟質土器内耳鍋1点	49	
375	20E-17G	長方形	59	42	63.5		C	2本重複か、礫1点有り		
376	20E-17G	円形	37	34	18.0		C			
377	20F-17G	方形	36	35	36.0		C	P443		
379	20F-17G	方形	19	19	21.0		C			
380	20F-17G	方形	37	32	76.5		C	2本重複か、下端は長円形		
381	20F-17G	長方形	32	24	53.0		C			
382	20F-17G	方形	24	23	19.0		C			
383	20F-17G	長円形	43	38	66.0		C	下層に礫1点有り		
384	20F-17G	長円形	36	32	54.5		C	下層に礫4点有り		
386	20F-17G	長円形	34	31	62.0		C			
387	20F-17G	方形	37	37	42.5		C			
388	20F-17G	長円形	37	36	79.5		C	古銭「元祐通寶」1点	49	

II 発掘調査の記録

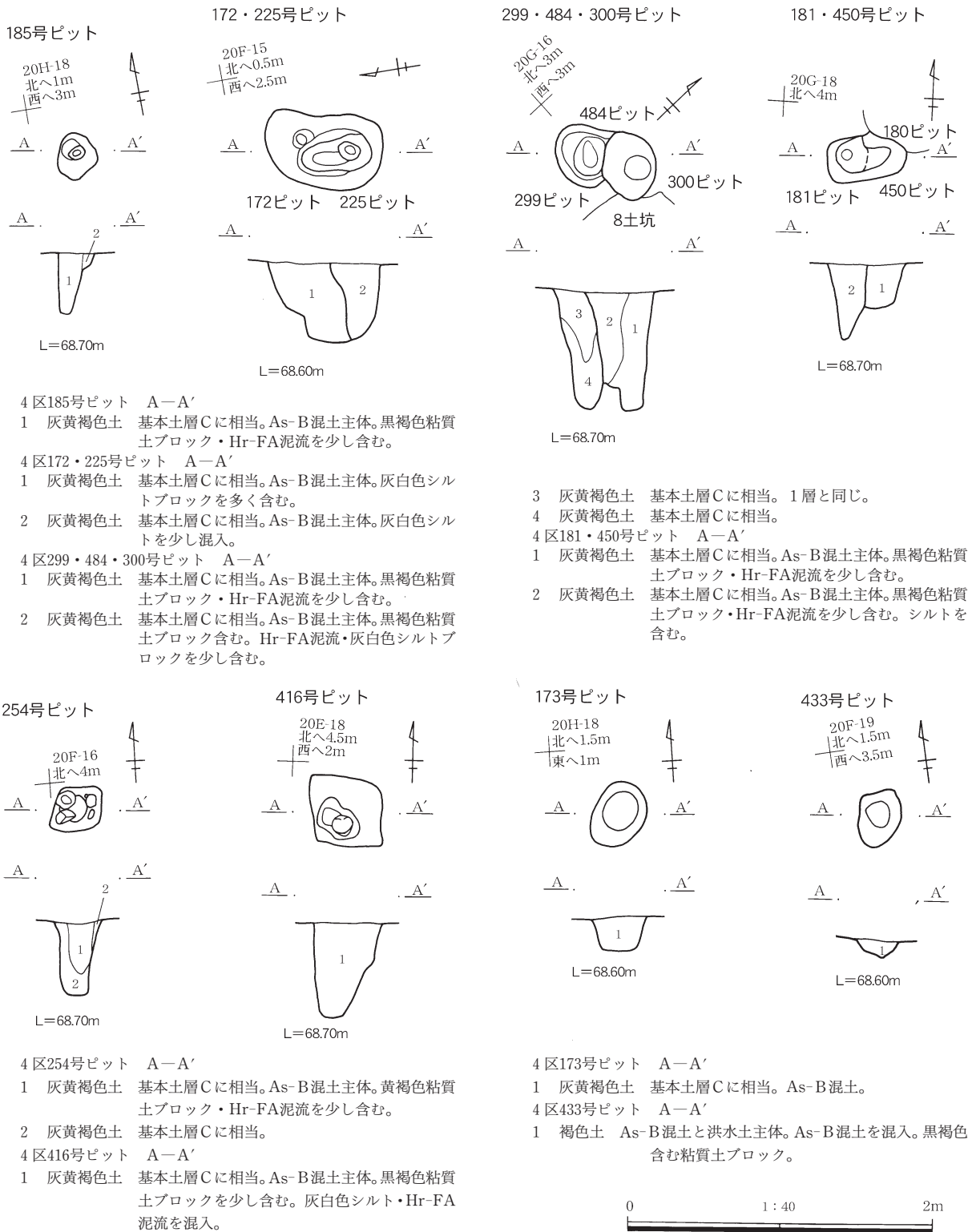
No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
389	20F-17G	長円形	41	33	61.5		C			
390	20G-17G	長円形	34	26	48.0		C			
391	20G-17G	長円形	26	24	45.0		C			
392	20F・G-17G	不明	—	36	19.5		C	P328		
393	20F-18G	方形	29	28	32.0		C			
394	20F-18G	不整形	29	22	36.0		—			
395	20F-18G	方形	37	32	53.5		C	礫4点有り		
396	20F-18G	円形	27	28	30.0		C			
397	20F-18G	長円形	36	28	61.5		C	礫2点有り		
398	20F-18G	長円形	36	27	58.5		C			
399	20F-18G	方形	20	20	25.0	—	—	下層に礫1点有り	48	
400	20F-18G	長方形	32	27	23.5		C			
401	20F-18G	不整形	33	27	41.0		C			
404	20F-18G	長円形	52	20	20.0		C	P405		
405	20F-18G	長円形	30	19	46.5		C	P404		
406	20F-18G	方形	25	22	25.0		C			
407	20E-18G	長円形	40	37	41.5		C	P408・409		
408	20E-18G	円形	35	32	58.5		C	P407・409、石製品板碑1点		
409	20E-18G	長円形	42	32	40.0		C	P407・408	49	
410	20F-18G	方形	22	19	18.5		C			
411	20F-18G	長円形	32	26	17.0		C	埋没土中に礫有り		
413	20F-18G	円形	39	33	29.0		C	P412		
414	20E-18G	長円形	22	14	17.0		C	P415		
415	20E-18G	方形	24	22	22.0		C	P414		
416	20E-18G	方形	46	44	63.0		C	礫1点有り、軟質土器内耳鍋1点	46	
417	20E-18G	方形	29	27	21.5		C			
418	20E-18G	長円形	46	43	84.0		C			
419	20E-18G	長円形	50	37	32.5		C			
420	20E-18G	長円形	35	27	32.0		—			
422	20E-18G	円形	33	31	52.5		C			
423	20E-18G	長円形	29	22	21.5		C			
424	20E-18G	長円形	47	42	57.0		C	礫1点有り		
425	20F-18G	不整形	34	34	42.5		C			
426	20F-18G	長円形	28	22	25.5		C			
428	20F-18G	長円形	30	24	48.0		C			
429	20F-18G	円形	25	24	22.0		C			
431	20F・G-17G	長円形	37	27	44.5		C	P432、陶器甕2点	49	
432	20F-17G	長円形	34	32	55.5		C	P431、軟質土器内耳鍋1点	49	
433	20F-19G	長円形	35	28	12.0		A		46	
434	20F-19G	不整形	60	57	32.0		D	2本重複か、軟質土器内耳鍋1点	47	
435	20F-19G	長円形	31	25	30.5		A		47	
437	20G-16G	長円形	34	28	18.0		C			
438	20E-15G	長円形	35	30	18.5		C	P228と重複		
439	20F・G-16G	長円形	—	29	42.5		C	P440→	49	
440	20F-16G	長円形	45	32	40.5		C	→P439、軟質土器内耳鍋1点	49	
441	20E-18G	長円形	51	34	34.5		C			
442	20F-16G	方形	31	30	46.5		C			
443	20F-17G	不整形	—	43	36.0		C	P377		
444	20E・F-17G	不整形	50	41	68.5		C	中層に礫4点有り		
445	20F-17G	方形	22	20	19.0		C			
446	20F-17G	長方形	23	17	20.5		C			
447	20E-17G	方形	38	36	54.0		C	礫1点有り		
448	20G・H-14G	長円形	30	26	14.0		C			
449	20H-14G	不明	—	40	31.0		C	1/2残存、円形か		
450	20G-17G	円形	26	22	37.0		C	P181→	46	
451	20G-17G	方形	19	17	16.5		C			
452	20G-17G	方形	21	21	12.5		C			
453	20G-16G	円形	49	44	35.0		C	7号土坑内、P264		
454	20G-16G	長円形	42	34	52.5		C			
457	20G-17G	長円形	42	36	62.0		C			

No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿 図 番 号	写 真 図 版
459	20G-16G	長方形	26	21	19.0		C	P 458		
460	20G-16G	円形	28	23	27.5		C			
461	20G-16G	円形	25	25	13.0		C			
462	20H-16G	方形	20	19	20.0		C			
463	20G-17G	方形	23	22	30.0		C			
464	20F-17G	長円形	45	35	30.5		C	1号土坑		
465	20F-16G	長円形	34	24	31.0		C	1号土坑		
466	20E-16G	不整形	48	20	21.0		C	2本重複か		
467	20E-15G	方形	20	20	29.0		C	軟質土器内耳鍋1点		
468	20E-16G	長円形	34	27	64.0		—			
469	20E-16・17G	長円形	41	35	51.0		—	P 287、下層に礫1点有り		
470	20E-17G	不整形	48	37	36.0		—			
471	20G-17G	長円形	49	24	11.5		—			
472	20H-16G	不整形	56	35	67.0	—	—			
473	20H-16G	方形	21	22	20.0	—	—			
474	20E-15G	円形	24	—	27.5	—	—	P 284		
475	20E-17G	不明	47	—	27.0	—	—	1/2残存		
476	20F-17・18G	長円形	33	25	31.0	—	—			
482	20G-16G	円形	27	26	32.0		—			
483	20E-16・17G	円形	29	25	26.0		C			
484	20F-16G	長円形	29	—	59.5		C	P 299・300	46	14

第13表 4区1号屋敷ピットの諸分類



II 発掘調査の記録



第46図 4区1号屋敷ピット(1)



第47図 4区1号屋敷ピット(2)

20G-18グリッドに位置する188号ピットや、20F-19グリッドに位置する434号ピットは、土坑状を呈していた。平面形は、長円形または不整形を呈している。掘り込みが浅く、断面形は皿状に近い形状である。同様のピットとして、20E-16グリッドに位置する274号ピットがある。平面形は円形に近いものであった。20F・G-18グリッドに位置する209号

ピットは、平面形が円形、断面形が楕円状を呈していた。20F-16グリッドに位置する265号ピットの平面形は、短径の小さな長円形である。底面の中央から北側寄りか、柱穴状に落ち込んでいることが特徴的である

埋没土 埋没土については、第12表に掲載したとおりである。土層の分類や、基本土層の内容は、凡例

II 発掘調査の記録

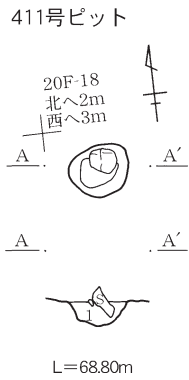


第48図 4区1号屋敷ピット(3)

に記したとおりである。全体の9割にあたる277本の埋没土が、浅間B軽石を混土した灰黄褐色土(基本土層C)であった。他は暗褐色土(基本土層A)が6本、暗灰黄色土(基本土層D)3本、灰黄褐色土と黒褐色土の混土(基本土層G)1本であった。

なお、ピットの埋没土については、調査時の土層観察の所見に基づいてAからGの6層に分類を行っ

た。各埋没土の内容については、以下の凡例のとおりである。各土層断面図の注記中で使用した基本土層AからGは、この分類内容を指している。掘立柱建物・柵列の土層断面の注記中においても同様に使用している。また、第12表1号屋敷ピット計測値一覧、第20表2号屋敷ピット計測値一覧の埋没土の項に記した記号もこの分類内容を表している。

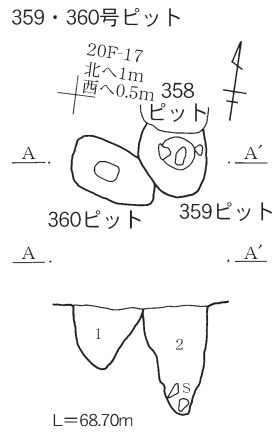
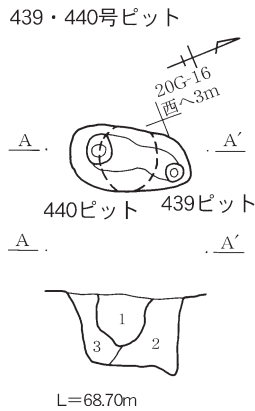


4区411号ピット A-A'

1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。

4区439・440号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を多く含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- 3 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。

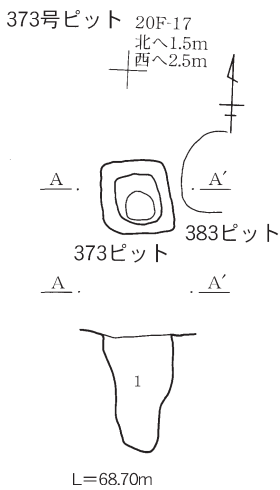
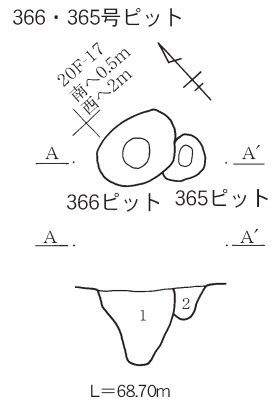


4区359号・360号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層よりもHr-FA泥流を多く含む。

4区366号・365号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。Hr-FA泥流が多い。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層よりHr-FA泥流が少ない。



4区373号ピット A-A'

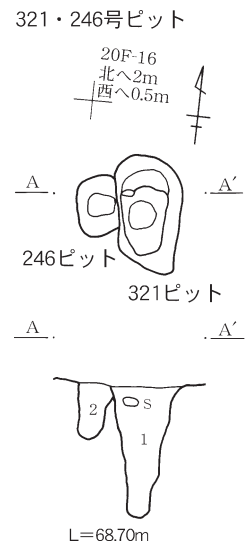
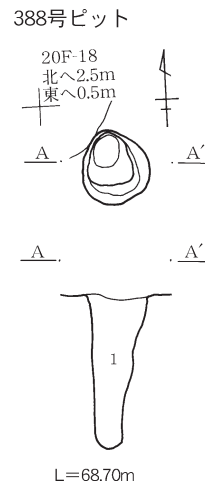
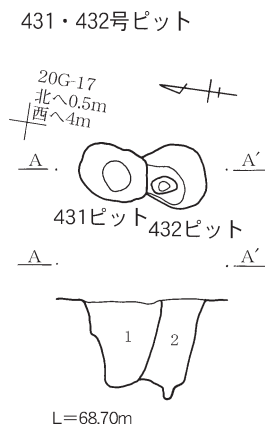
1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。

4区431号・432号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックが多い。Hr-FA泥流を少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層と同一。

4区388号ピット A-A'

1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。



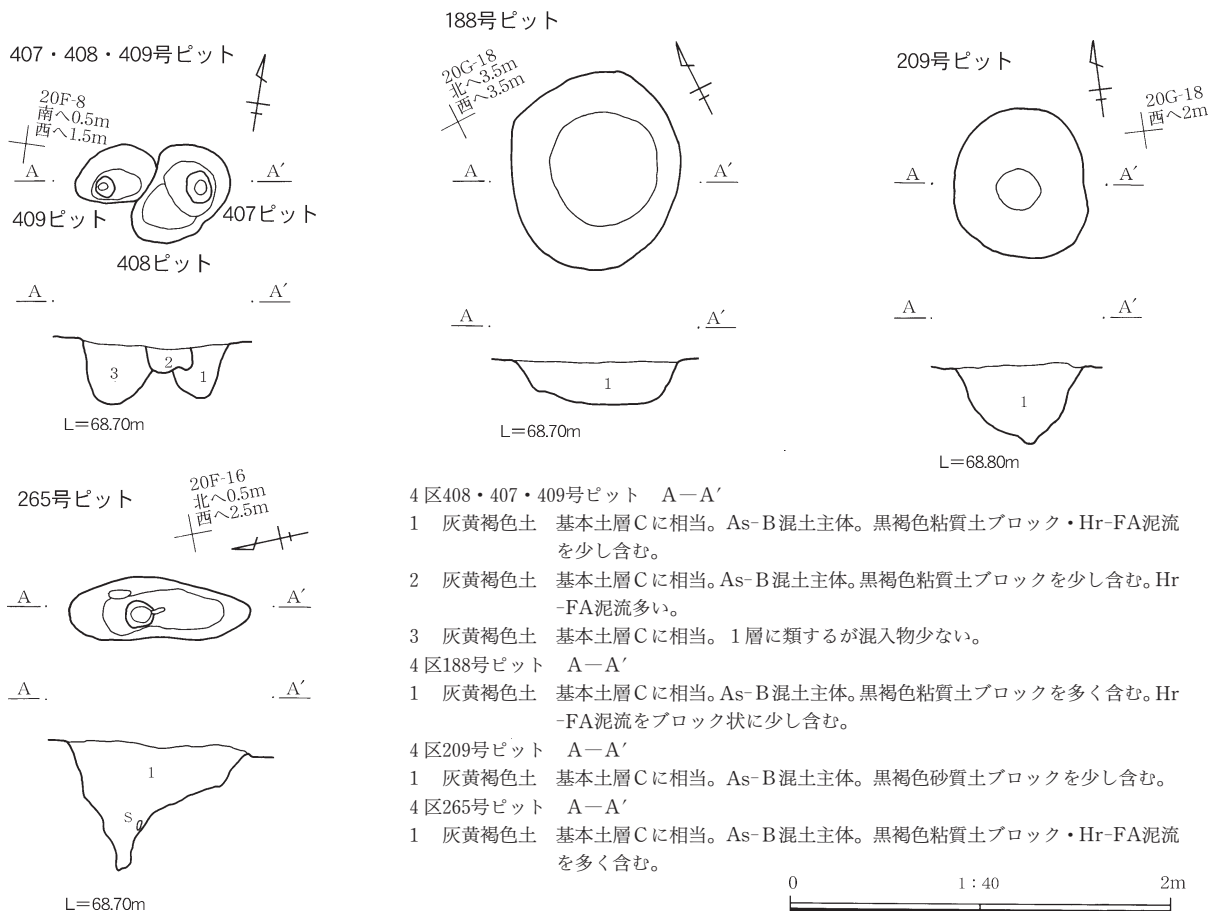
4区321号・246号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを含む。Hr-FA泥流を少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層と似ているがHr-FA泥流を多く含む。



第49図 4区1号屋敷ピット(4)

II 発掘調査の記録



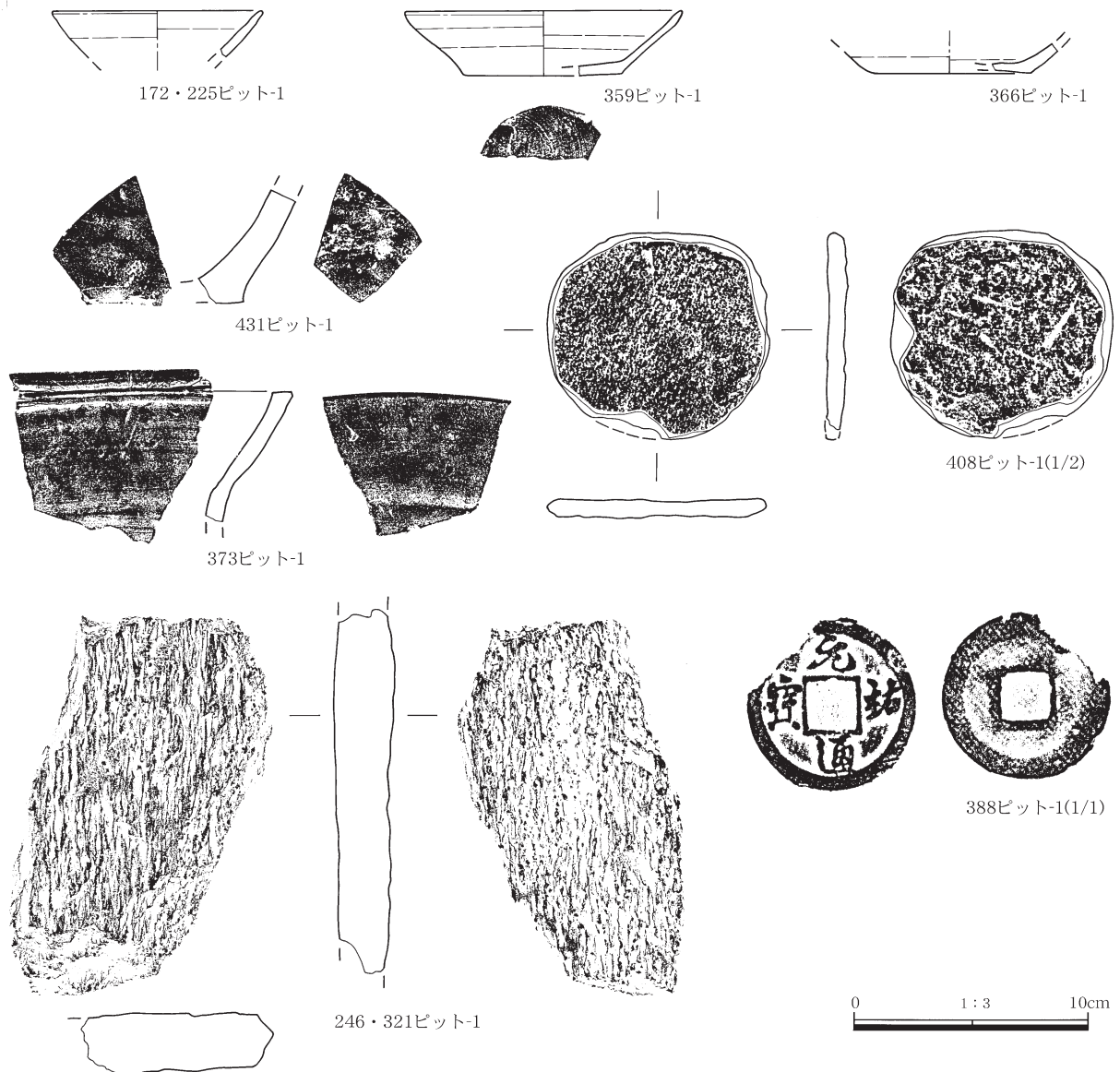
- 4区408・407・409号ピット A-A'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を少し含む。
- 2 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを少し含む。Hr-FA泥流多い。
- 3 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。1層に類するが混入物少ない。
- 4区188号ピット A-A'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロックを多く含む。Hr-FA泥流をブロック状に少し含む。
- 4区209号ピット A-A'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色砂質土ブロックを少し含む。
- 4区265号ピット A-A'
- 1 灰黄褐色土 基本土層Cに相当。As-B混土主体。黒褐色粘質土ブロック・Hr-FA泥流を多く含む。

第50図 4区1号屋敷ピット(5)

埋没土基本土層凡例

- A 暗褐色土 粒子が細かな砂質土(洪水砂)のほぼ純層。若干斑鉄がある。炭化物も散見する。浅間B軽石混土層上の砂質洪水層で粘性もある。黄色味強いことが特徴である。
- A' 暗褐色土 褐色土が混入し、色調、黒色味増す。粘性やや増し、粒径やや細くなる。
- B にぶい黄褐色土 Aに近い砂質土だが、粒径がやや粗く、黒色味もやや増す。浅間山と考えられるが給源不明の軽石細粒を霜降り状に含む。
- B' にぶい黄褐色土 浅間C軽石下の黒色土や浅間B軽石下の黒色土などの混入物が多い。
- B'' にぶい黄褐色土 黄褐色のシルトの混入が多い。

- C 灰黄褐色土 浅間B軽石下の黒色土や榛名山給源の軽石。浅間板鼻黄色軽石(As-YP)や、その下層のシルトなどのブロックを主体にしたしまりの強い土層。
- C' 灰黄褐色土 褐色味強い。粘性土多い。
- D 暗灰黄色土 A、Bに比べ、さらに粒径の粗い砂質土が主体だが、シルトの混入も多いのか、粘性を有する土層である。
- D' 暗灰黄色土 シルトブロックの混入多い。
- E 黒褐色土 粒子の細かな弱粘性土。混入物少ない。
- F 暗灰黄色土 色調はDに近いが、浅間B軽石の混入が多く、いわゆる色調の濃い浅間B混土と薄い浅間B混土の中間的な土質である。



第51図 4区1号屋敷ピット出土遺物

F' 暗灰黄色土 混入物多い。

次に柱痕の確認状況、埋没土中の礫の検出状況について記しておく。

柱痕を確認したピットはわずか3本である。230号ピットでは、幅0.08～0.12m、深さ0.60mの柱痕部分に、灰黄褐色土が入り込んでいた。145号ピットでは、埋没土中の中位に、長さ0.20m、幅0.06mの中空部分が認められた。柱材の腐食した痕跡と考えられる。

埋没土中から礫が出土したものは58本を数えた。これらのピットは調査区の南側寄り、20E・F

—16～18グリッド内に多く見られ、残存した深さが0.50mを越えるものが19本を数えた。礫の出土状況は概ね以下の4パターンが見られる。

第1は416号ピットのように、底面に扁平な礫が置かれたような状態で出土したものである。271～273号ピットも同様の状況であった。221号ピットは小穴で、掘り方とほぼ同規模の礫が入っていた。211号ピットや399号ピットでは、底面近くからの出土である。

第2は埋没土上層から、掘り方の規模に匹敵するような大型礫が出土した例である。178号ピットでは、3個の礫が重なって出土、上位に行くに従い大

II 発掘調査の記録

型になっていた。308号ピットでは、2個が上下に重なった状態での出土である。321号ピットは上位から1個、中位から3個の出土である。

第3も埋没土上層から礫が出土した例であるが、その位置が掘り方の中央でなく、外縁寄りから出土している点が第2のパターンと異なる。267号ピットがその代表例である。267号ピットの平面形は長円形である。中央部分が深く掘り込まれ、底面からも礫が出土している。176号・203号・253号・411号ピットも同様の事例である。

第4は中層から礫が出土したものである。211号ピットに代表される。拳大の礫を投げ込んだような状態のものも見られた。

第1・第2のパターンは、建物の柱を据える際、補強のために置かれた可能性が考えられる。第2のパターンは、掘り方内に据えた柱を両脇から押さえ、安定させる目的、根固のために置かれたものと推定される。

遺物 埋没土中から、何らかの形で遺物の出土を見たものは、22本(重複のあるものを1本と見た場合)あった。出土した遺物の器種は陶器、磁器、土師質土器皿、軟質陶器内耳鍋・播鉢、土師器、須恵器、板碑、古銭であった。土器の残存状態はいずれも破片で、完形のものはない。出土状況と合わせて考えると、柱穴内に埋納、あるいは意図的に破砕した上で、埋納するなどの行為は見出しがたいものであった。土師質土器皿や軟質陶器、板碑などは屋敷の変遷する過程で、遺構の掘り方内に埋没土と一緒に混入したものと考えることもできよう。

出土遺物の中で資料化に足るものを第51図に掲載した。土師質土器皿は、172・225号ピットの重複部分、359号ピット、366号ピットからの出土である。373号ピットからは軟質陶器内耳鍋が出土した。431号ピットからは常滑産の陶器甕と考えられる破片が出土した。重複する246・321号ピットからは板碑が、408号ピットからは緑色片岩製の円盤が出土している(観P176・177)。

所見 その分布が1号屋敷の区画内にあり、区画

溝や掘立柱建物との関連性を想起させること、埋没土の内容が共通することから、ここに報告するピットの大半が第5面に属し、1号屋敷の形成時期の所産であると考えられる。

6) 井戸

4区4号井戸 (第52図 PL12)

位置 20F-20G

形状 西方約1.5mに6号溝が近接する。素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形を呈する。確認面における直径は1.02m、底面の直径は0.50mを測る。断面形は筒状を呈しており、下位に向かって徐々に直径を狭めている。深さは1.81mを測った。

方位 N-0°-E

埋没土 褐灰色土が堆積してた。確認面から約1.0m下位あたりから、長径0.20m前後の礫が多く出土するようになり、ふた抱え程もある大型礫も出土した。

所見 出土遺物はなかったが、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区5号井戸 (第52・53図 PL12・31・32)

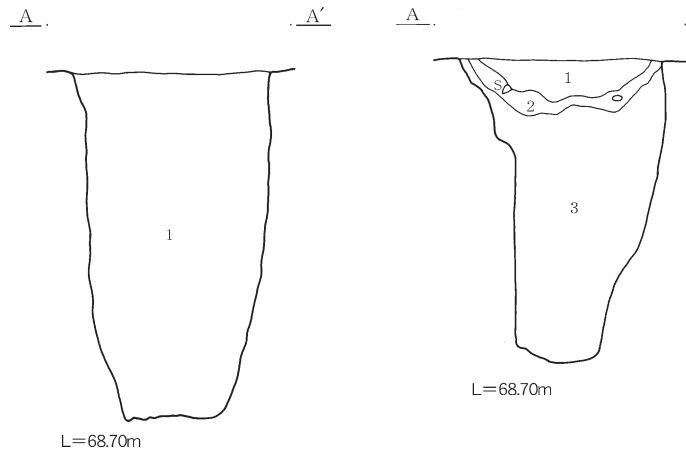
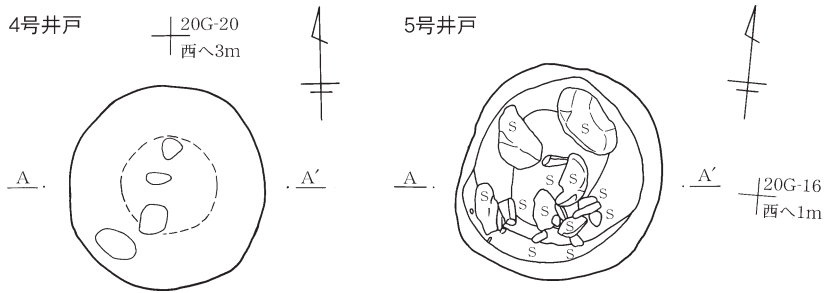
位置 20F・G-16G

形状 1号・2号掘立柱建物の南側に位置する。確認面における平面形は、南北に長軸を有する長円形を呈する。規模は長径1.20m、短径1.04mである。底面にいたるとその平面形は台形状の四角形となる。その規模は長軸0.63m、短軸0.45mを測る。断面形は確認面から約0.15mの深さの位置で弱い段をなした後は、徐々にその規模を縮め底面にいたっている。深さは1.50mである。

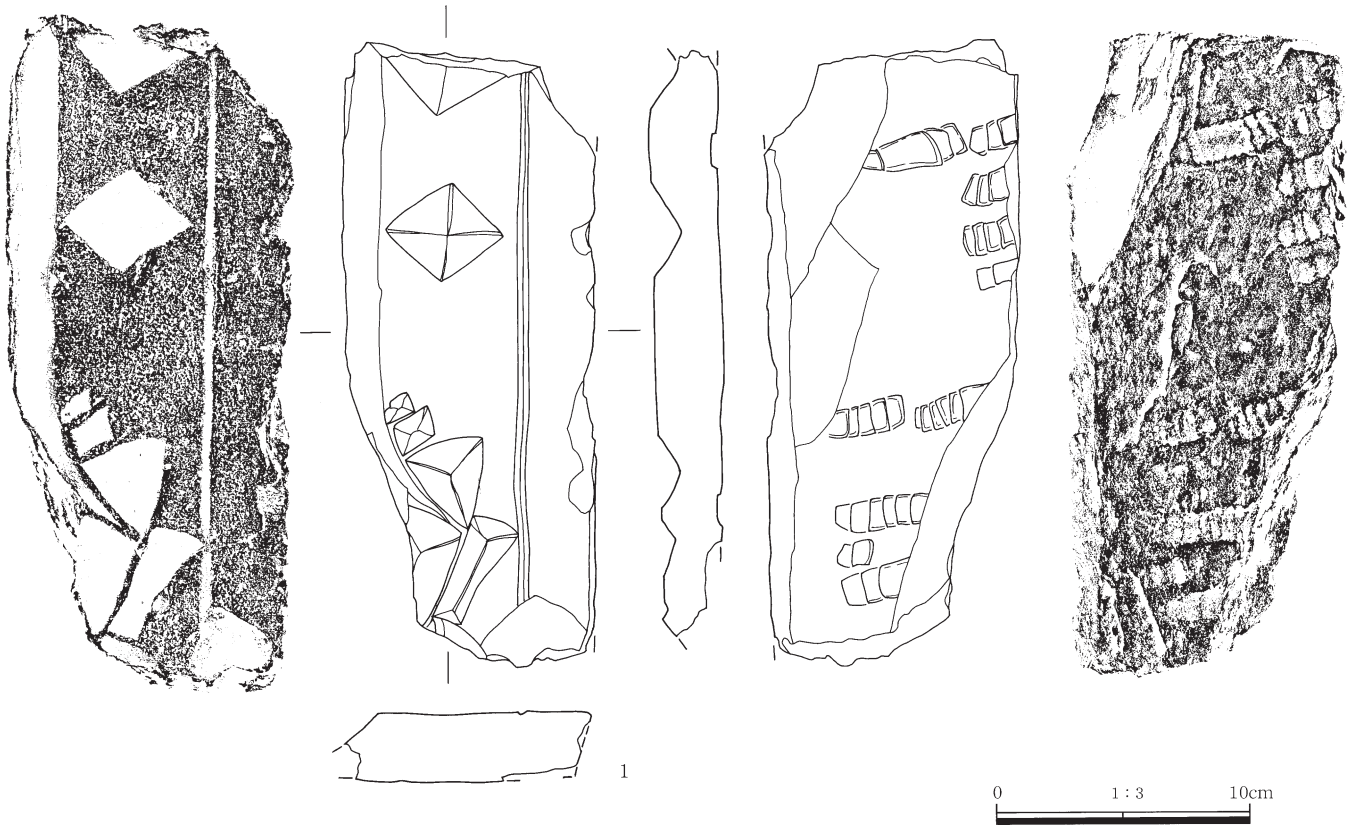
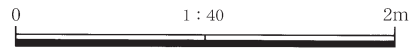
方位 N-12°-E

埋没土 上層には褐灰色土、にぶい黄褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物 西壁寄りの確認面から深さ0.10mほどの位置から、板碑の大型破片(6)が出土している。また、深さ0.9mほどの位置からは、大型礫とともに石臼(1)が出土している。この他にも石臼(3)、砥石(2・4)、板碑(5)が出土している。非掲載遺物として、陶器皿1点、軟質陶器内耳鍋1点・播鉢1点、

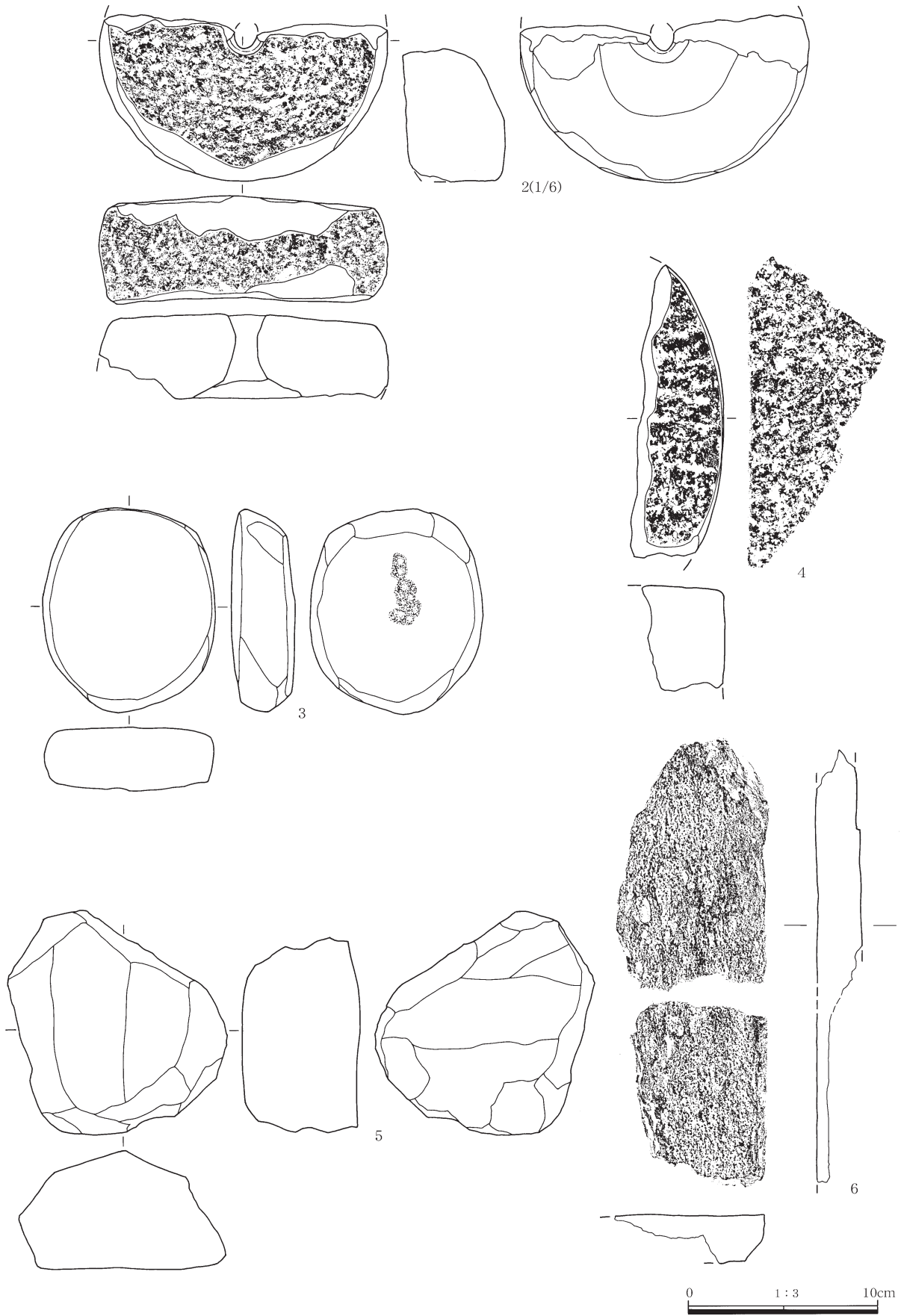


- 4区4号井戸 A-A'
- 1 褐灰色土 As-B混土主体。黒褐色粘質土、灰白色シルト層をブロック状にわずかに含む。
- 4区5号井戸 A-A'
- 1 褐灰色土 As-B混土。
- 2 にぶい黄褐色土 砂質でザラザラしている。褐灰色のAs-B混土を少し混入。
- 3 褐灰色土 As-B混土主体。灰白色シルトがブロック状に多く混入。

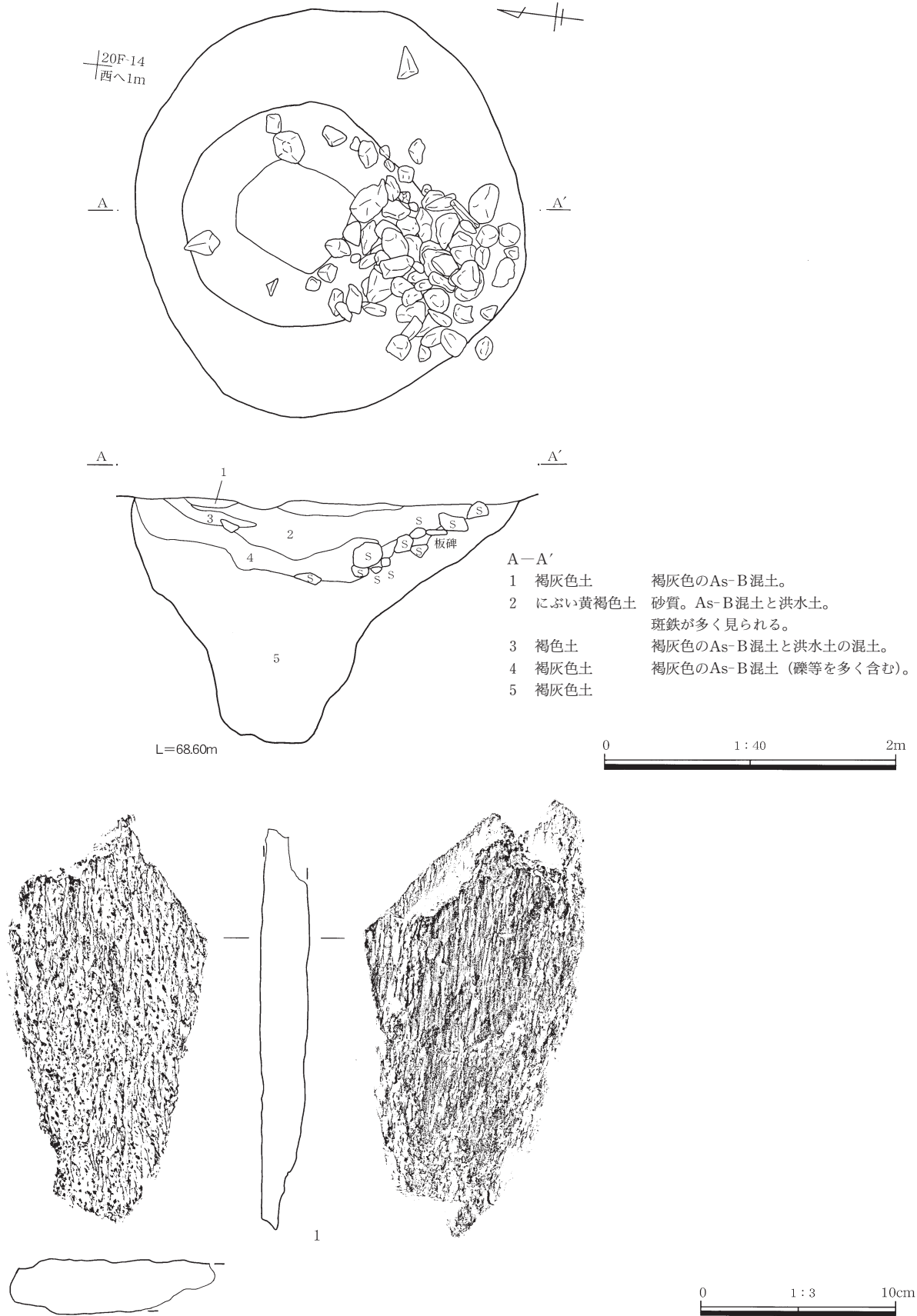


第52図 4区4号・5号井戸と5号井戸出土遺物(1)

II 発掘調査の記録

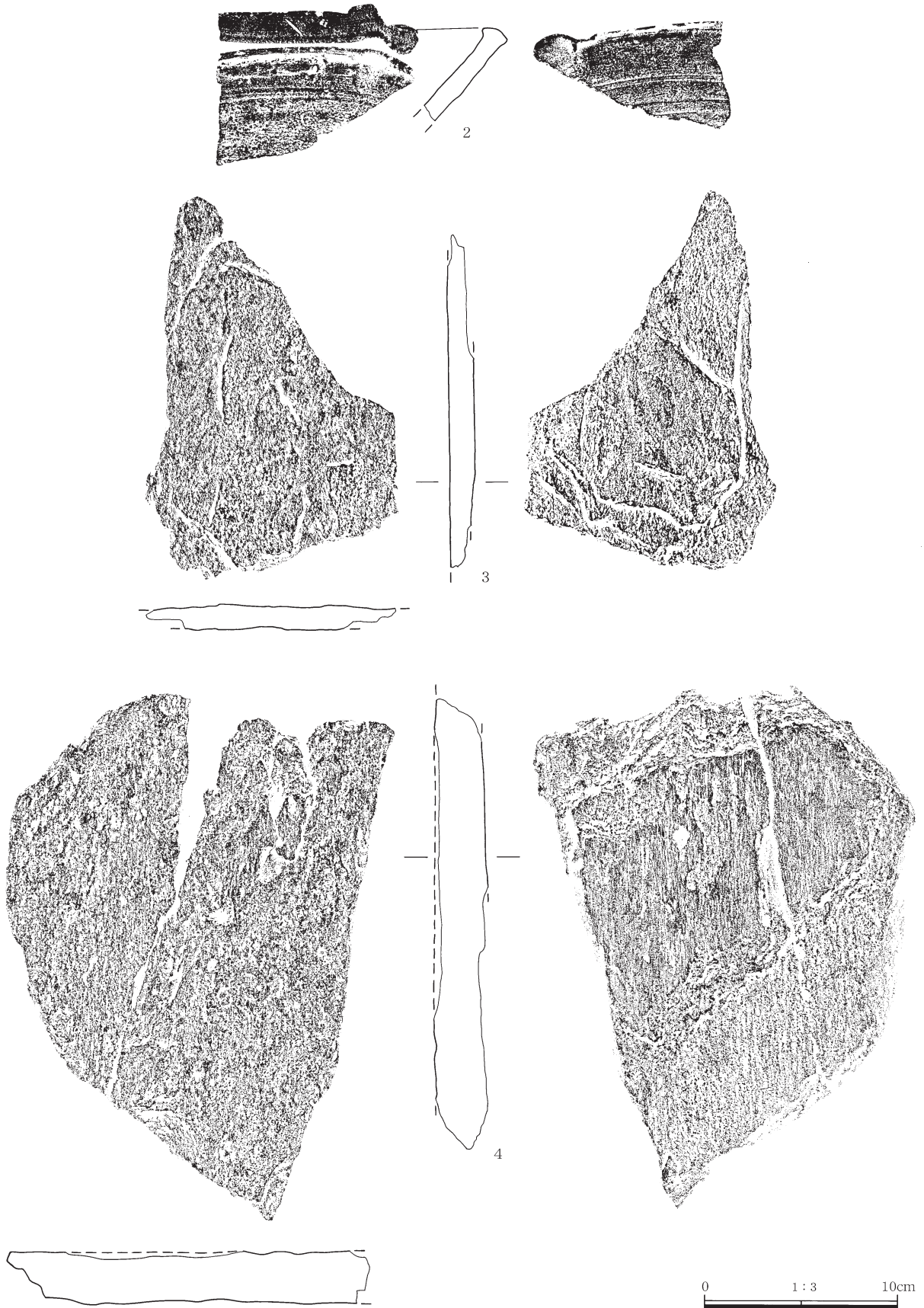


第53図 4区5号井戸出土遺物(2)



第54図 4区6号井戸と出土遺物(1)

II 発掘調査の記録



第55図 4区6号井戸出土遺物(2)

板碑2点などがある(観P177)。

所見 出土遺物の特徴なども考慮すると、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区6号井戸 (第54・55図 PL12・32)

位置 20E-14G

形状 東側に5号溝がほぼ接する位置にある。他の井戸に比して一段と規模の大きいものである。確認面における平面形は、東西方向に長軸を有する楕円形で、規模は長径2.79m、短径2.54mを測る。底面の平面形は長方形に近い形状で、長軸は南北方向にある。その規模は、長軸0.76m、短軸0.55mである。断面形は上方に向かって大きく外反して立ち上がる形状で挿鉢を呈している。深さは1.53mである。

方位 N-24°-E(上端)、N-74°-W(下端)

埋没土 上層には褐灰色土、にぶい黄褐色土が薄い層をなしてレンズ状に堆積していた。また、上層では南西部分から集中して、長径0.20~0.30mの礫が多量に出土している。同規模の礫は、中・下層からも出土している。

遺物 埋没土中から出土した軟質陶器挿鉢(2)、板碑(1・3・4)を資料化した。また、埋没土中から桃の果核完形3点、破片1点が出土している。非掲載遺物としては、軟質陶器内耳鍋1点、土師器杯1点がある(観P178)。

所見 上層から出土した多数の礫は、壁面を構成していたものでなく、埋没過程で投棄されたものと考えられる。1号屋敷形成期の所産と考えられる。

7) 土坑

4区1号土坑 (第56図 PL13・32)

位置 20F-16・17G

重複 464号・465号ピットと重複する。

形状 西側に10号・11号土坑が近接する。平面形は隅のやや丸い長方形を呈する。長軸2.53m、短軸1.57m、深さ0.20mを測る。底面はほぼ平坦である。南西隅と南辺、南東隅寄りにピットが重複する。

方位 N-89°30'-E

埋没土 暗灰黄色土1層で、人為的に埋土されている。

遺物 南東隅近くの埋没土中から遺物が集中して出土した。軟質陶器内耳鍋(1)、陶器火鉢(2)を資料化した。非掲載遺物として、土師質土器皿1点、軟質陶器内耳鍋6点、土師器1点がある(観P178)。

所見 1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区3号土坑 (第56図 PL13)

位置 20F-16G

形状 底面の平面形は、南北に長径を有する円形に近い形状を呈する。規模は長径1.15m、短径1.02m、深さ0.31mである。断面形は浅い挿鉢状を呈している。埋没土中位から、長径0.16~0.32mの礫3個が出土している。

方位 N-27°-E

埋没土 上層に暗灰黄色土が、下層に黒色の灰が堆積していた。焼土・炭化物は含まれなかった。灰に混じり礫3個が出土している。

所見 出土遺物はない。壁面に焼土化するなどの痕跡は見られないことから、竈などからの灰捨て穴であったと考えられる。1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区4号土坑 (第56図 PL13)

位置 20G・H-17G

形状 平面形は南北方向に長径を有する長円形を呈する。規模は長径0.92m、短径0.78m、深さ0.20mを測る。底面は西から東に向かって徐々に下がっている。

方位 N-23°30'-E

埋没土 暗灰黄色土1層が堆積していた。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

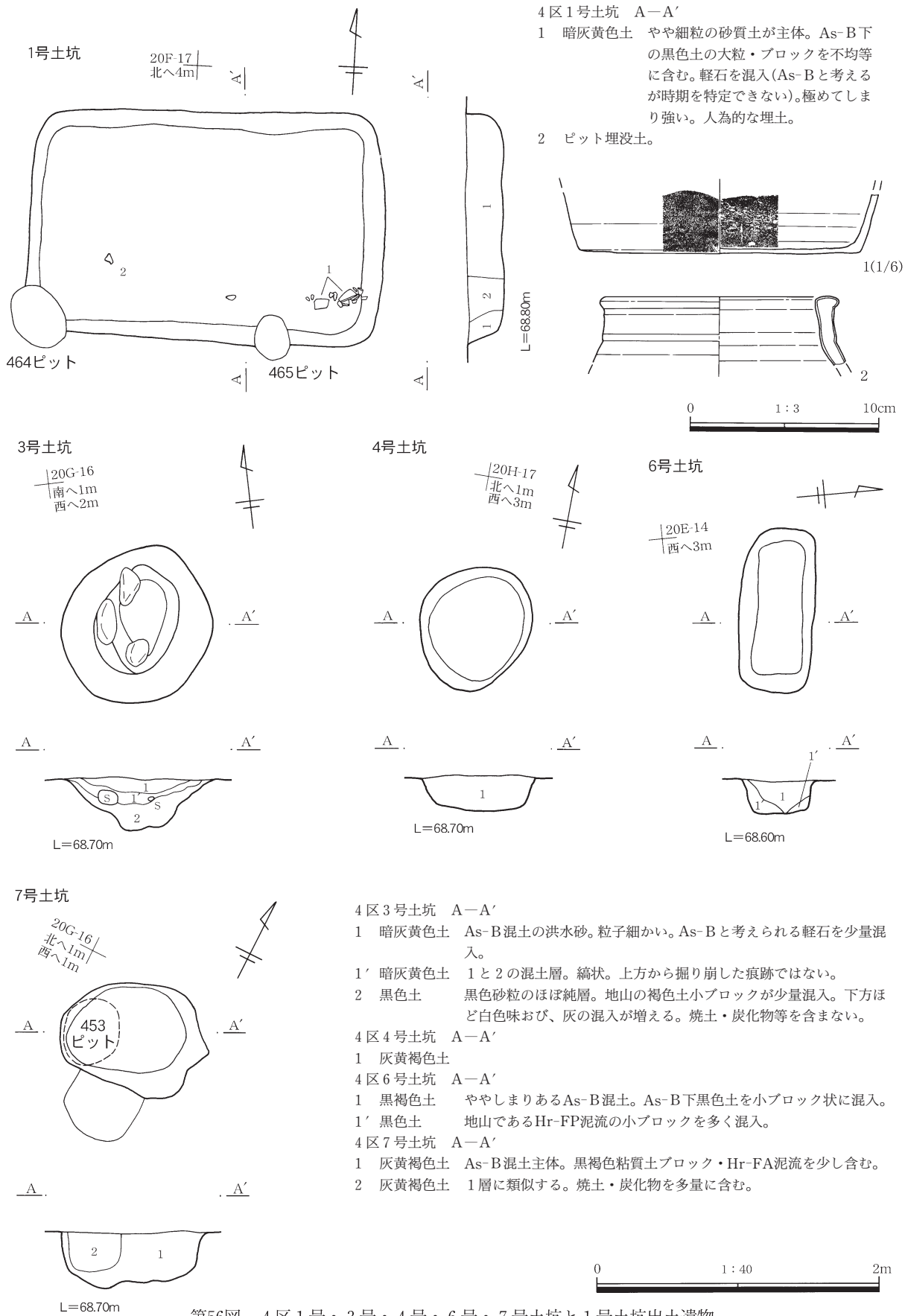
4区5号土坑 (第57・58図 PL13・32)

位置 20G-16G

重複 8号土坑に先出する。

形状 平面形は、南北方向に長軸を有する長方形を呈していたと考えられるが、北側は8号土坑により削平されている。規模は長軸の残長が0.91m、短軸0.73m、深さ0.15mである。底面は北側に向かって下がっていた。壁面には火熱による焼土化は認め

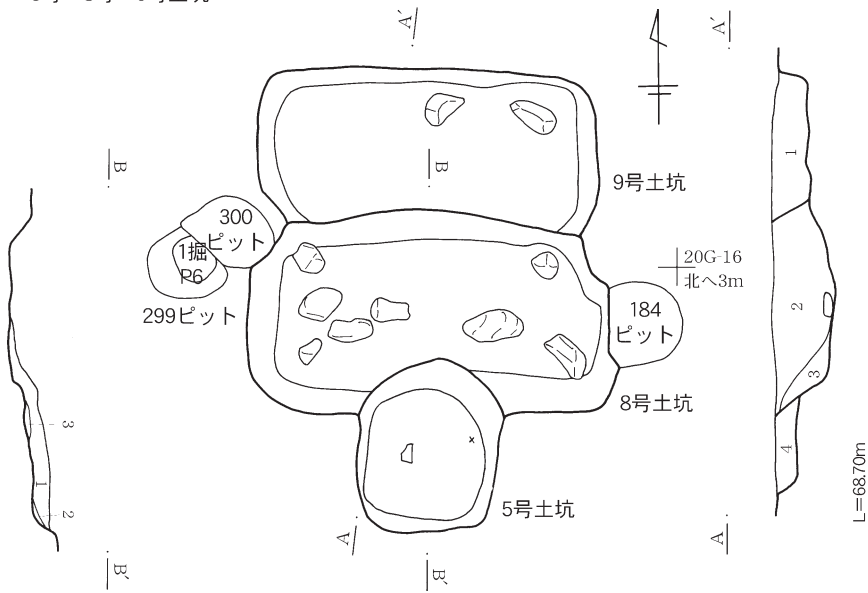
II 発掘調査の記録



第56図 4区1号・3号・4号・6号・7号土坑と1号土坑出土遺物

5 第5面の調査

5号・8号・9号土坑



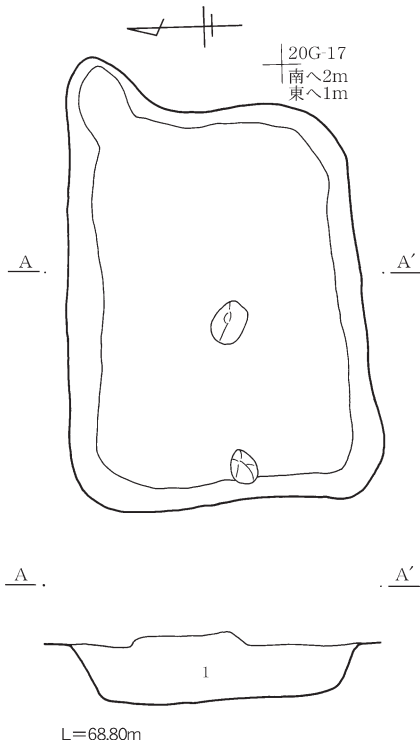
4区5・8・9号土坑 A-A'

- 1 暗灰黄色土 暗い色調のAs-B混土。しまり強い。中層付近に黒色土が縞状に混入する以外混入物は少ない。(9号土坑埋没土)
- 2 暗褐色土 やや暗いAs-B混土で、下位に黒色土・Hr-FA泥流と思われる黄褐色土をブロック状(不揃い、不均等)に混入。南側には5号土坑の埋没土である黒色砂粒が流れ込んだ状況は見られない(8号土坑埋没土)。
- 3 暗褐色土 (8号土坑埋没土)
- 4 黒褐色土 粒子の細かな粘性土中に多量の黒色砂粒を含む。ややしまりない。断面部分には現れないが焼土ブロックの混入はやや多い。(5号土坑埋没土)

4区5号土坑 B-B'

- 1 褐灰色土 As-B混土主体。焼土と炭化物・骨片を多く含む。
- 2 褐灰色土 As-B混土主体。焼土少し含む。骨片も含む。
- 3 褐灰色土 灰主体。炭化物含む。

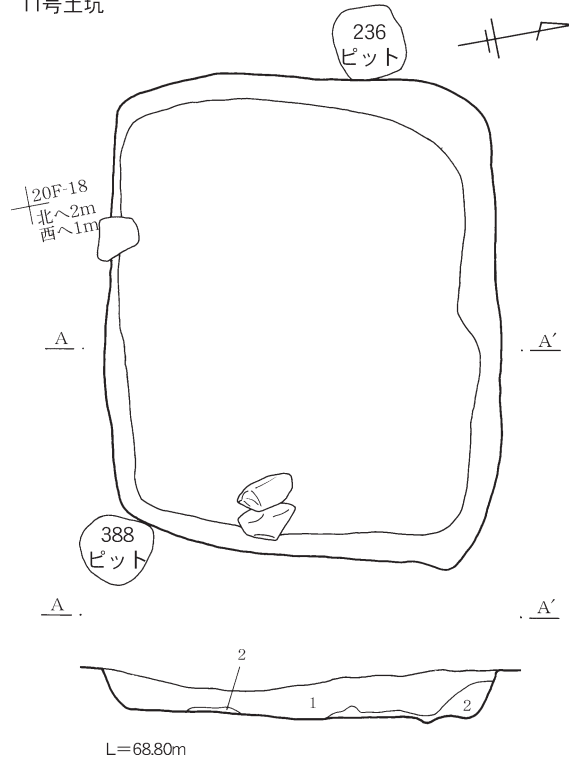
10号土坑



4区10号土坑 A-A'

- 1 灰黄褐色土 ややしまりの強い粘性土。細粒。As-B下黒色土ブロック(直径1~5mm大)の混入物が目立つ。一気に埋め戻している。

11号土坑



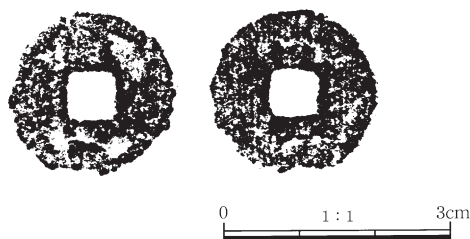
4区11号土坑 A-A'

- 1 灰黄褐色土 しまりやや強い粘性土。主体は細粒。As-B下黒色土ブロック(直径1~5mm大)の混入物が目立つ。一気に埋め戻している。10号土坑よりしまり強い。
- 2 黒褐色土 しまりの強い粘性土。混入物少量。



第57図 4区5号・8号~11号土坑

II 発掘調査の記録



第58図 4区5号土坑出土遺物

られない。

方位 N-5°30'-E

埋没土 焼土・炭化物・骨片を多く含む褐灰色土が堆積していた。人為的に埋め戻された状態が見られる。

遺物 東壁寄りの埋没土中から、古銭(1)が出土している(観P178)。

所見 焼土・炭化物・骨片は他所で焼却後、本遺構に廃棄されたような出土状態である。1号屋敷形成時期、あるいはこれにやや後出する時期の所産と考えられるか。

4区6号土坑 (第56図 PL13)

位置 20E-14G

形状 平面形は東西方向に長軸を有する長方形を呈する。規模は長軸1.15m、短軸0.53m、深さ0.23mを測る。底面はほぼ平坦である。

方位 N-82°30'-W

埋没土 黒褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から、軟質陶器内耳鍋の破片1点が出土しているが、資料化するに足るものでなかったため非掲載とした。

所見 詳細な掘削時期を決定することは困難であるが、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区7号土坑 (第56図)

位置 20G-15・16G

重複 264号・453号ピットと重複。

形状 平面形は、東西方向に長径を有する長円形を呈するが、南西部分の上端は形状がやや乱れている。規模は長径1.05m、短径0.62m、深さ0.35mを測る。

方位 N-71°30'-E

埋没土 灰黄色土が堆積していた。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区8号土坑 (第57図 PL13)

位置 20G-16G

重複 5号土坑に後出、9号土坑に先出する。184号・300号ピットと重複。

形状 平面形は東西方向に長軸を有する長方形を呈する。規模は長軸1.91m、短軸0.91m、深さ0.27mを測る。底面はほぼ水平で、直上から合計7個、人頭大の礫が出土している。

方位 N-89°30'-W

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区9号土坑 (第57図 PL13)

位置 20G-16G

重複 8号土坑に後出する。

形状 平面形は、東西方向に長軸を有する長方形を呈している。規模は長軸1.78m、短軸0.74m、深さ0.22mを測る。底面はほぼ水平で、北辺寄りの直上から礫2個が出土している。

方位 N-90°-E

埋没土 暗灰黄色土が堆積している。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区10号土坑 (第57図 PL13)

位置 20F-17G

形状 東側に1号土坑、西側に11号土坑が近接する。平面形は、東西方向に長軸を有する長方形である。東辺は西辺に比べて短い。北東隅の突出部は、ピットの重複の可能性もある。規模は長軸2.07m、短軸1.56m、深さ0.31mを測る。底面はほぼ水平で、中央と西辺中央の各1箇所から礫が出土している。

方位 N-89°-W

埋没土 灰黄褐色土1層により、一気に埋め戻されている。炭化物を少量混入している。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区11号土坑 (第57図 PL13)

位置 20F-17G

重複 西辺で236号ピットと重複する。

形状 平面形は、東西に長軸を有する長方形を呈する。北辺は下端の走行が一部乱れている。規模は長軸2.53m、短軸2.06m、深さ0.25mである。底面は北東隅が高く、西南隅が低い。東辺の中央部分から、長軸0.30mの礫2点が出土している。

方位 N-79°30'-W

埋没土 10号土坑の埋没土と類似する。灰黄褐色土1層により一気に埋めている。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。

(3) 4区2号屋敷(第59図 PL8・15)

1) 概要

4区の調査区東側部分に位置する。周囲を溝で囲まれていたと考えられるが、西辺を区画すると考えられる4区4号溝以外は検出されておらず、その全容を把握するにはいたらなかった。4号溝は南北方向に走行をとるが、3区ではその延長部分を検出していないことから、3区と4区の間を横断する現道下で屈曲、東西方向に走行を変えていることが想定される。ただし、この2号屋敷の東辺を区画する南北方向の溝は、東側の2区では検出されていない。このことから2号屋敷の存在そのもの、あるいは西側1号屋敷との関係については、今後も慎重な検討が必要であることも明記しておく。

今回の調査において、2号屋敷を構成していたと考えられる遺構として、掘立柱建物4棟、柵列2列、建物、あるいは柵列の柱穴である可能性を有するピット92本、井戸3基、土坑1基、屋敷内を区画する溝1条が検出された。入り口、橋などの施設、土塁の有無については確認できなかった。

これらの遺構群は、4号溝とのあり方から、屋敷内の北西部分に築造されていたと考えられる。掘立柱建物や柵列は、その軸線が同一方向を向いている

ことから、一定の企画性を持って配置されたものと考えられる。ただし、掘立柱建物では、7号と8号のように重複関係が見られるものもあり、屋敷の継続期間にある程度時間幅があったことがうかがえる。なお、2号屋敷の呼称は本報告にあたり付したものである。

検出した部分の規模は、東西の残長17.58m、南北の残長22.50mである。

出土物については、個々の遺構の項で報告するが、全体的には決して豊富な出土量ではない。4区6号・7号溝、4区1号・3号井戸から軟質陶器内耳鍋を中心に少量ずつの出土が見られただけで、陶磁器の出土はほとんどなかった。

2号屋敷の形成時期は、埋没土の状況や出土遺物の年代観から、1号屋敷と大差はなく、中世、15世紀代と考えられよう。

2) 溝

4区4号溝 (第59・60図 PL15)

位置 20D-12、E~H-11・12G

重複 直接ではないが16号溝に後出、3号溝に先出する。

形状 南北方向に直線的な走行を有する。南端は調査区域外に延びる。北端も調査区域外に延びるが、4区でその延長部分は検出されていない。検出長は20.13mを測る。断面形は上方に向かって彎曲ぎみに立ち上がる形状で、底面は中央が皿状に低くなっていた。5号溝、6号溝とはやや異なる形状であった。規模は上幅2.40~2.83m、下幅0.38~0.72m、残存高0.81~0.98mを測る。底面の標高は南端から2.19m地点で67.48m、北端から1.00m地点で67.63mである。2点における標高差は0.15mである。

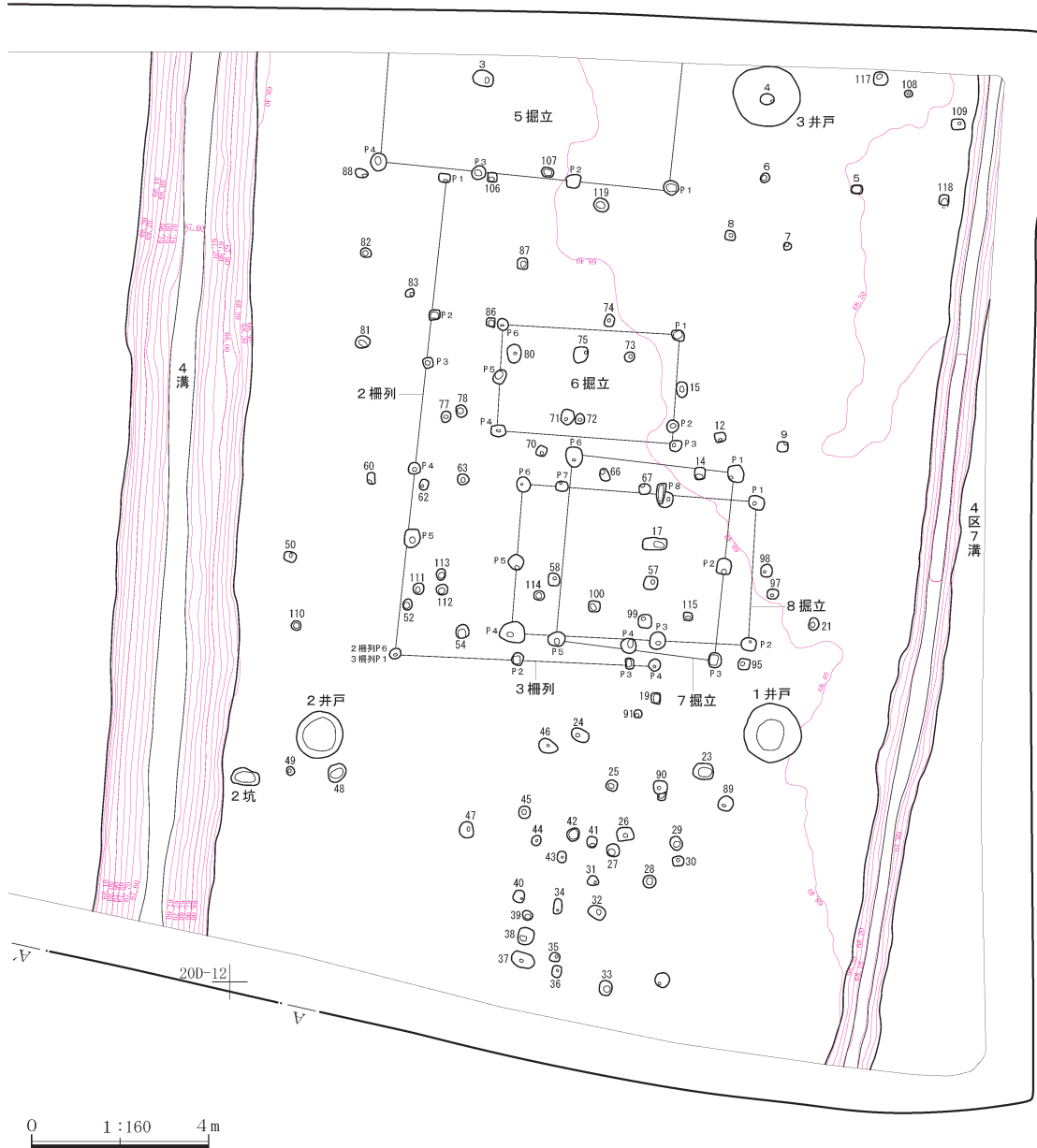
方位 N-3°30'-E

埋没土 上層から中層には、洪水層と考えられるにぶい黄橙色土が堆積している。最下層から2層目に粘性を有する灰白色土が、最下層は砂粒を主体とする灰白色が堆積していた。このことから本溝は、掘削当初は流水や滞水があったことがうかがわれる。

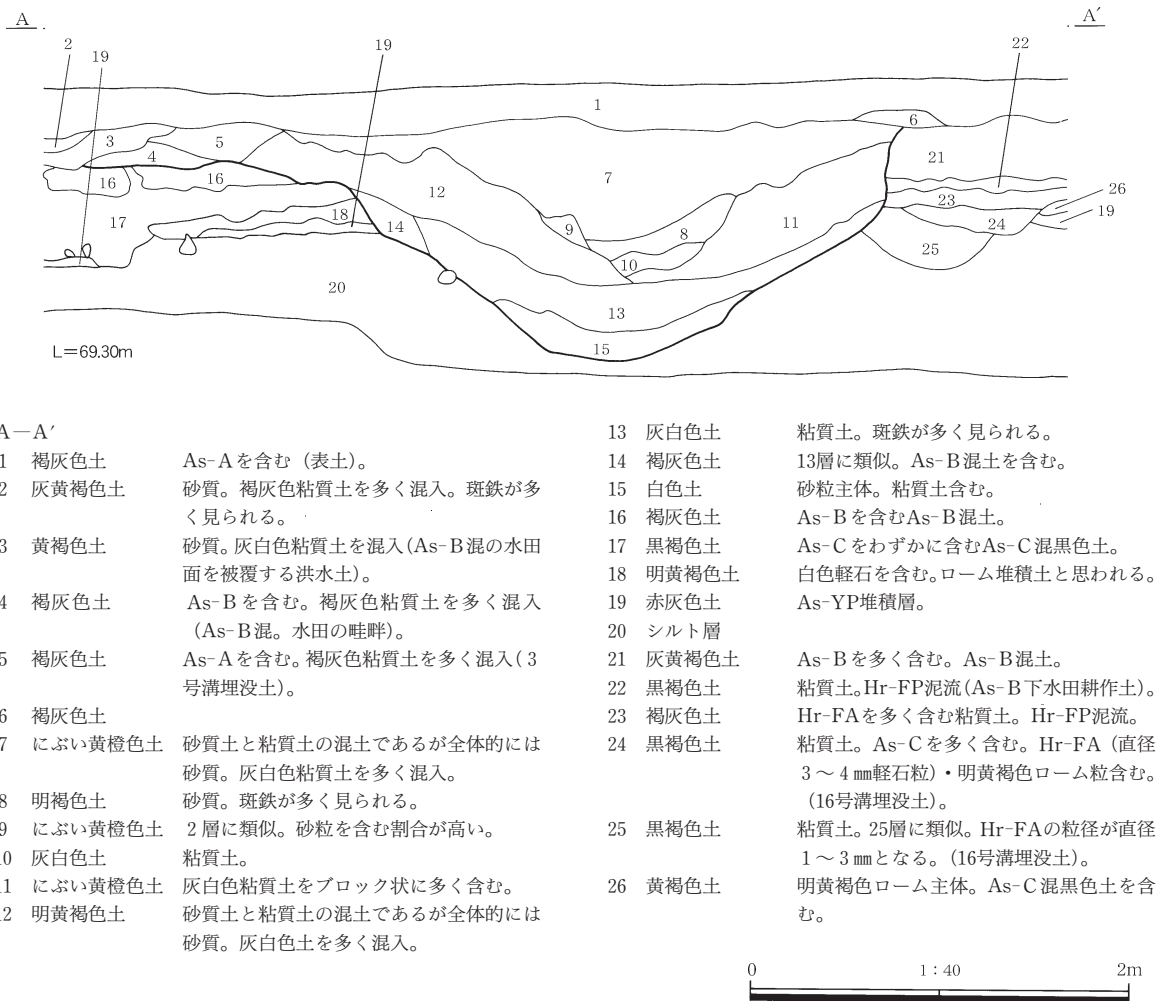
遺物 調査が比較的広範囲におよんだにかかわら

II 発掘調査の記録

201-12



第59図 2号屋敷



第60図 4区4号溝土層断面

ず、遺物の出土はなかった。

所見 2号屋敷の西辺を区画する溝と考えられる。

4区7号溝 (第60~62図 PL15・33)

位置 20C-9、D・E-8・9、F~H-8G

重複 8号、9号溝に先出する。

形状 調査区東端で検出した。南北方向にほぼ直線的に走行する。南北両端とも調査区域外におよび、全容は不明である。走長は23.05mを検出した。断面形は、上方に向かって大きく開くもので、いわゆる薬研堀状を呈していた。底面から0.15~0.20mの位置に稜を有していた。

底面には2列並んで、鋏あるいは鋤状の工具による掘削痕が明瞭な状態で検出された。規模は上幅0.

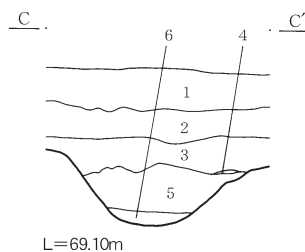
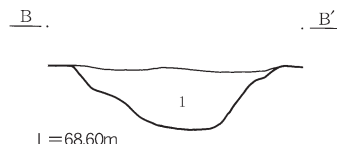
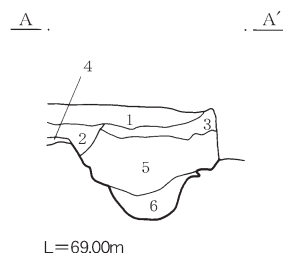
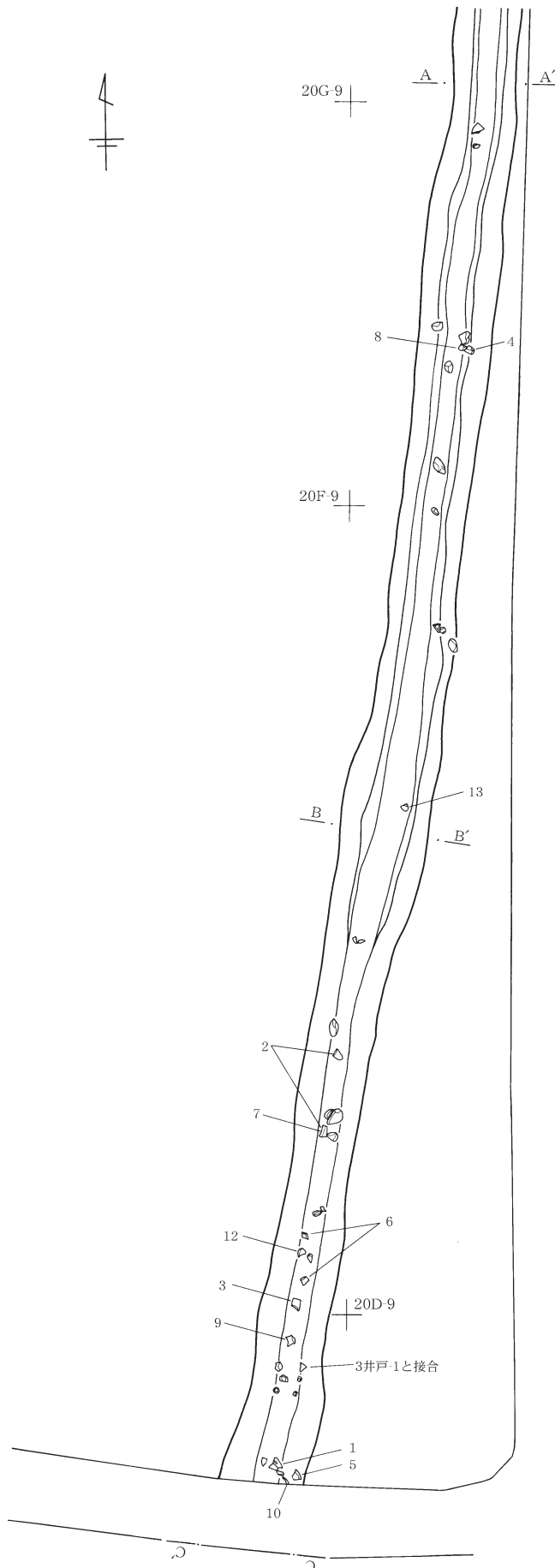
69~1.09m、下幅0.18~0.41m、残存高0.33~0.37mを測る。底面の標高は南端から7.93m地点で68.05m、北端から10.69m地点で67.99mである。2点における標高差は0.06mである。

方位 N-7°-E

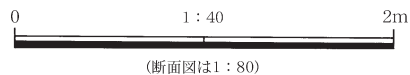
埋没土 にぶい黄褐色土、あるいは暗灰黄色土が堆積している。

遺物 埋没土中から、礫とともに軟質陶器が破片の状態出土している。平面的には、全体に点々と出土するといった状態である。出土高は、底面直上から0.1mほどの埋没土下層に多数見られた。この中の軟質陶器内耳鍋(1~8・10~12)・播鉢(13)・火鉢(9)、古銭(14)を資料化した。非掲載遺物としては、軟質陶器内耳鍋4点、陶器碗1点、土師器12点、

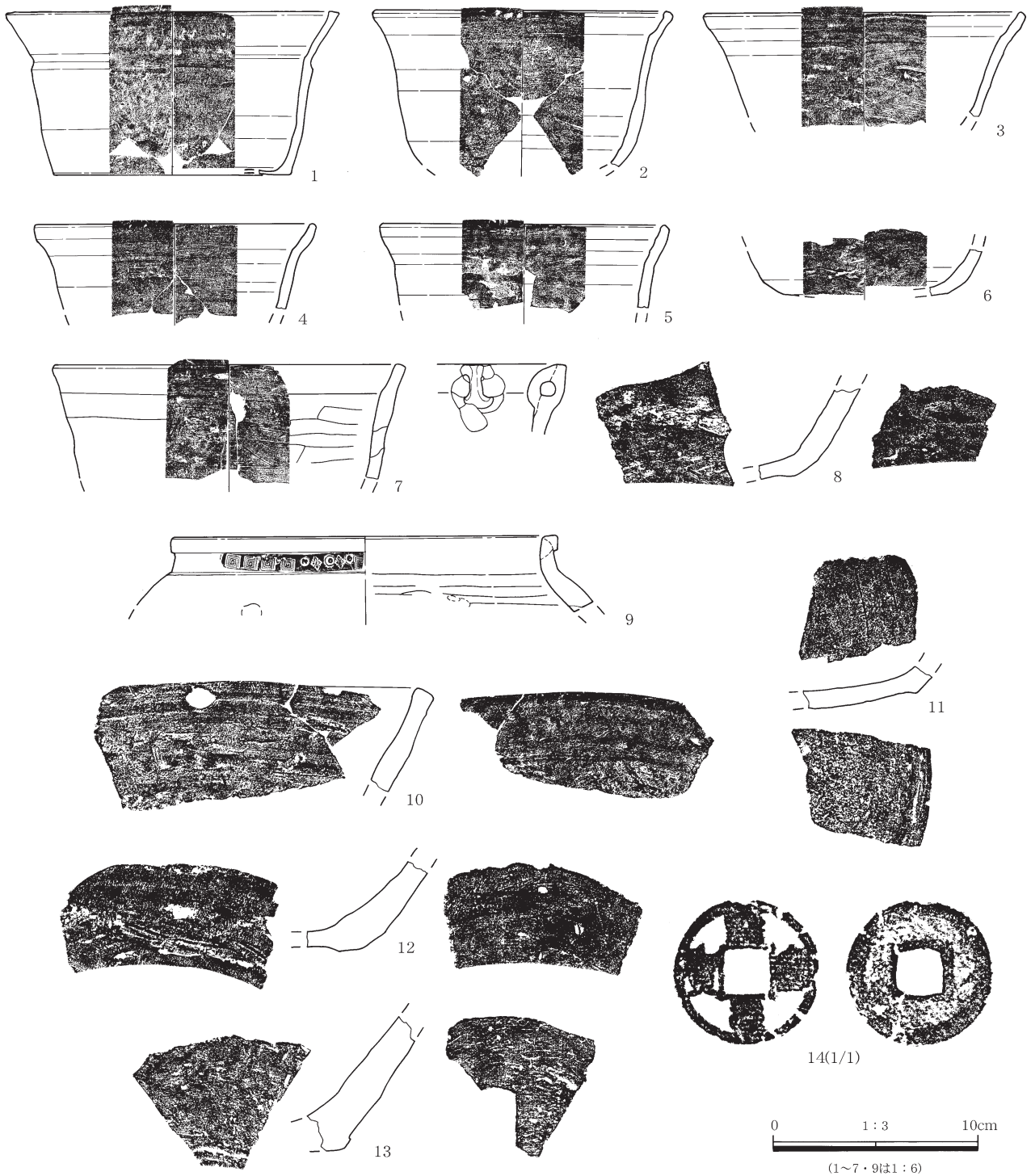
II 発掘調査の記録



- A-A'
- 1 灰黄褐色土 砂質。色調の明るいAs-B混土。斑鉄は黄色味おびる。
 - 2 灰黄褐色土 3層との漸移的な層。
 - 3 灰黄褐色土 やや粒径の粗い川砂を混入。
 - 4 にぶい黄褐色土 色調の暗いAs-B混土。
 - 5 暗灰黄色土 不揃いな川砂を多量に含む。全体に砂質でしまりなし。
 - 6 暗灰黄褐色土 微粒砂が主体。一部はラミナ状。
- B-B'
- 1 暗灰黄褐色土 粘性土と細砂の混土。As-Bが混入か。不均等に斑鉄あり(赤色味強い)。炭化物のブロック・As-B混等雑多な混入物あり。しまりのやや強い弱粘性土。
- C-C'
- 1 褐灰色土 表土 (As-Aを多く含む)。
 - 2 にぶい黄橙色土 にぶい黄橙色砂質洪水土主体。明黄褐色砂質洪水土を少し混入。
 - 3 にぶい黄橙色土 砂質。As-Bを含む。
 - 4 黒色土 ブロック状に混入。
 - 5 にぶい黄褐色土 As-B混土主体。As-C混黒色土をブロック状に含む。
 - 6 にぶい黄褐色土 As-B混土主体。As-C混黒色土を少し含む。



第61図 4区7号溝



第62図 4区7号溝出土遺物

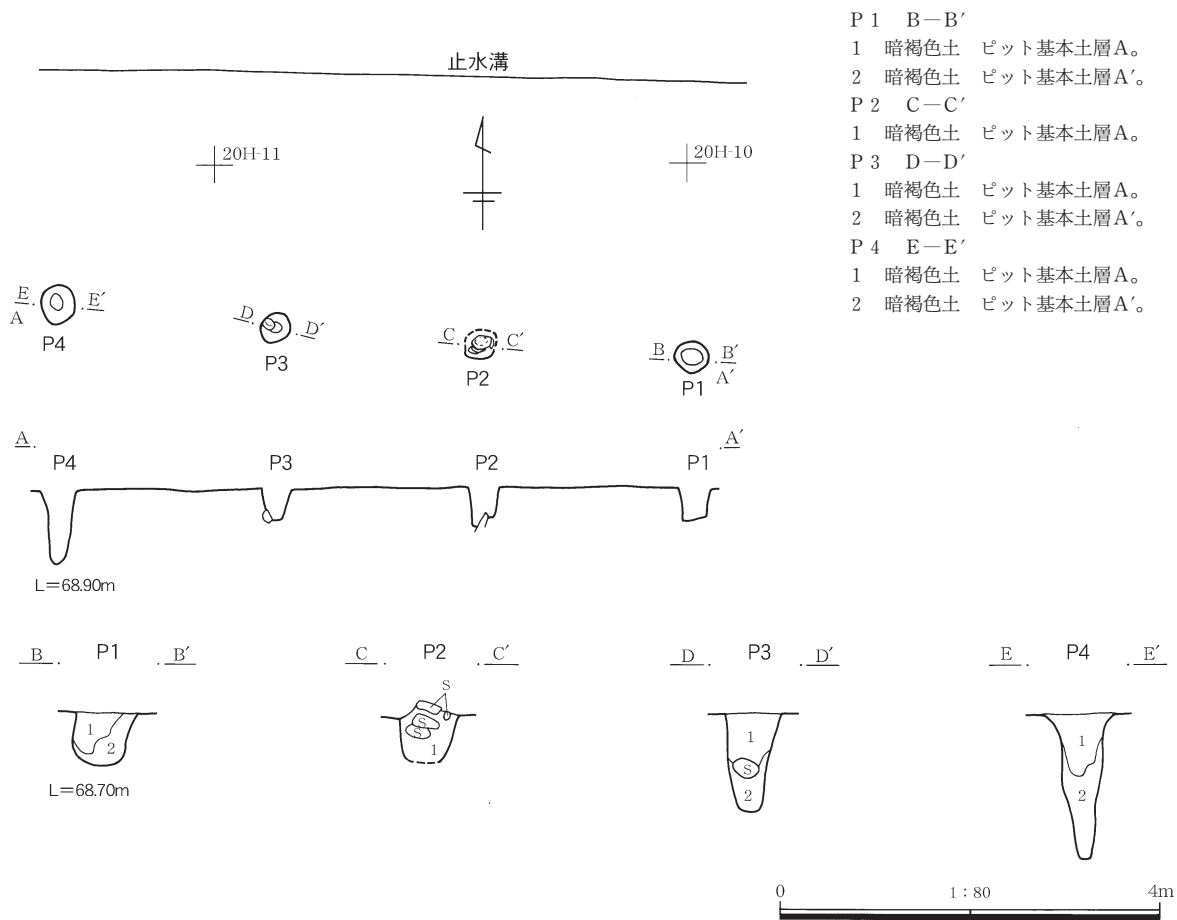
須恵器5点などがある(観P178・179)。

所見 2号屋敷の区画内を細分する区画溝と考えられるが、その走行が掘立柱建物の軸線や、西辺を区画する4号溝の走行と異なることから、これらとは時間差を有する可能性もある。

3) 掘立柱建物

概要 2号屋敷区画内からは、5号から8号の合計4棟の掘立柱建物の存在を確認した。2号屋敷の検出が全体の一部にとどまったため、4棟の掘立柱建物の屋敷内における位置づけについて検討すること

II 発掘調査の記録



第63図 4区5号掘立柱建物

とは困難であるが、総じて大型の建物の検出はなかった。なお、2号屋敷内からは、掘立柱建物や柵列の他に、92本のピットが検出されており、今回報告の4棟以外の建物が存在していたことは、充分考え得ることである。

4棟の分布を見ると、検出した2号屋敷内のほぼ中央で、7号と8号建物が重複して検出された。この北西部には、6号建物が位置している。5号建物は、調査区北壁寄りからの検出である。

4棟の建物は、いずれも主屋のみの構造で、庇は付いていない。内部構造も不明である。これらは1号屋敷の建物と同様のあり方である。

7号と8号建物が重複関係にあることから、屋敷内の建物構成に、時期差があることが予想されるが、その組成については不明である。

4区5号掘立柱建物 (第63図 第14表 PL16)

位置 20G-9~11G

重複 なし。6号掘立柱建物北辺との距離は、3.4mである。2号柵列北端の柱穴も近接する。

形状 東西方向の3間4本を検出した。列の長さは6.67mである。これらは軸線上に整然と並んでいた。柱間の間隔もほぼ一定である。調査では掘立柱建物の南辺を検出したものと認識している。梁行の柱穴、および桁行の北辺は調査区域外にあると考えられ、全容は不明である。

方位 N-95°-E

柱穴 柱穴、掘り方の平面形は、円形を基本としている。長径は0.31~0.39m、深さ0.26~0.76mである。P2は確認面を最上位に、垂直方向に3石、礫が重なっていた。P3は埋没土の中層から礫が出土している。埋没土はいずれも、黄色味の強い暗褐色土である。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、2号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

第14表 4区5号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	3×?間		面積	(18.19) m ²		
主軸方向	N-95°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
南辺 6.67	P 1	34	27	27.5	長円形	2.21
	P 2	31	29	26.0	不明	2.16
	P 3	32	30	45.0	円形	2.32
	P 4	39	36	76.0	円形	6.67

第15表 4区6号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	1×1間		面積	9.72m ²		
主軸方向	N-92°30'-E		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 2.50	P 1	31	24	40.5	長円形	2.50
南辺 3.99	P 2	26	24	52.0	長円形	3.99
西辺 2.38	P 3	33	26	45.0	長円形	1.27
	P 4	34	25	27.0	長円形	1.12
北辺 4.01	P 5	27	26	37.0	円形	4.01

第16表 4区7号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2×1間		面積	15.21m ²		
主軸方向	N-5°30'-E		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 4.16	P 1	38	35	60.0	不整形	2.13
	P 2	37	31	51.5	長円形	2.02
南辺 3.57	P 3	33	29	43.0	長円形	3.09
西辺 4.29	P 4	39	32	67.5	長円形	4.29
北辺 3.58	P 5	44	38	52.0	長円形	3.58

第17表 4区8号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2×1間		面積	17.90m ²		
主軸方向	N-92°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 3.14	P 1	39	32	45.5	長円形	3.16
南辺 5.45	P 2	34	29	73.5	長円形	2.06
	P 3	39	34	71.5	長円形	3.38
西辺 3.35	P 4	56	53	84.5	長円形	3.40
北辺 5.30	P 5	34	30	71.0	長円形	3.26
	P 6	34	—	37.5	不明	1.98

4区6号掘立柱建物 (第65図 第15表 PL17)

位置 20F-9・10G

重複 なし。南東方向に7号・8号掘立柱建物が近接する。2棟との距離は0.40m、実質的な重複関係にある。

形状 1×1間(南辺3.99×東辺2.50m)の東西棟である。桁行は南北辺とも4m前後と、柱間が広く開いている。

方位 N-92°30'-E

柱穴 掘り方の平面形は、円形を基本とし、長円

形が混在する。長径は0.26~0.34m、深さは0.27~0.52mである。P2は柱痕が認められた。P1は大型礫の混入が見られる。埋没土は黒褐色土、暗褐色土が堆積しているが、柱穴ごとにはばらつきが大きい。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、2号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

4区7号掘立柱建物 (第65図 第16表 PL17)

位置 20E・F-9・10G

重複 8号掘立柱建物と重複する。3号柵列が近接する。

形状 2×1間(東辺4.16×南辺3.57m)の南北棟と考えられるが、梁行と桁行の長さは約0.50mである。桁行は東辺が2間であるのに対し、西辺は1間である。

方位 N-5°30'-E

柱穴 掘り方の平面形は長円形を呈している。長径は0.33~0.44mである。深さは0.430~0.675mと、6本とも明瞭な掘り方であった。P4は柱痕が認められた。埋没土は灰黄褐色土、暗灰黄色土などが堆積しているが、柱穴ごとにはばらつきが見られた。

所見 出土遺物はない。8号掘立柱建物との前後関係は不明である。詳細な掘削時期も不明であるが、2号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

4区8号掘立柱建物 (第66図 第18表 PL17)

位置 20E・F-9・10G

重複 7号掘立柱建物と重複する。3号柵列が近接する。

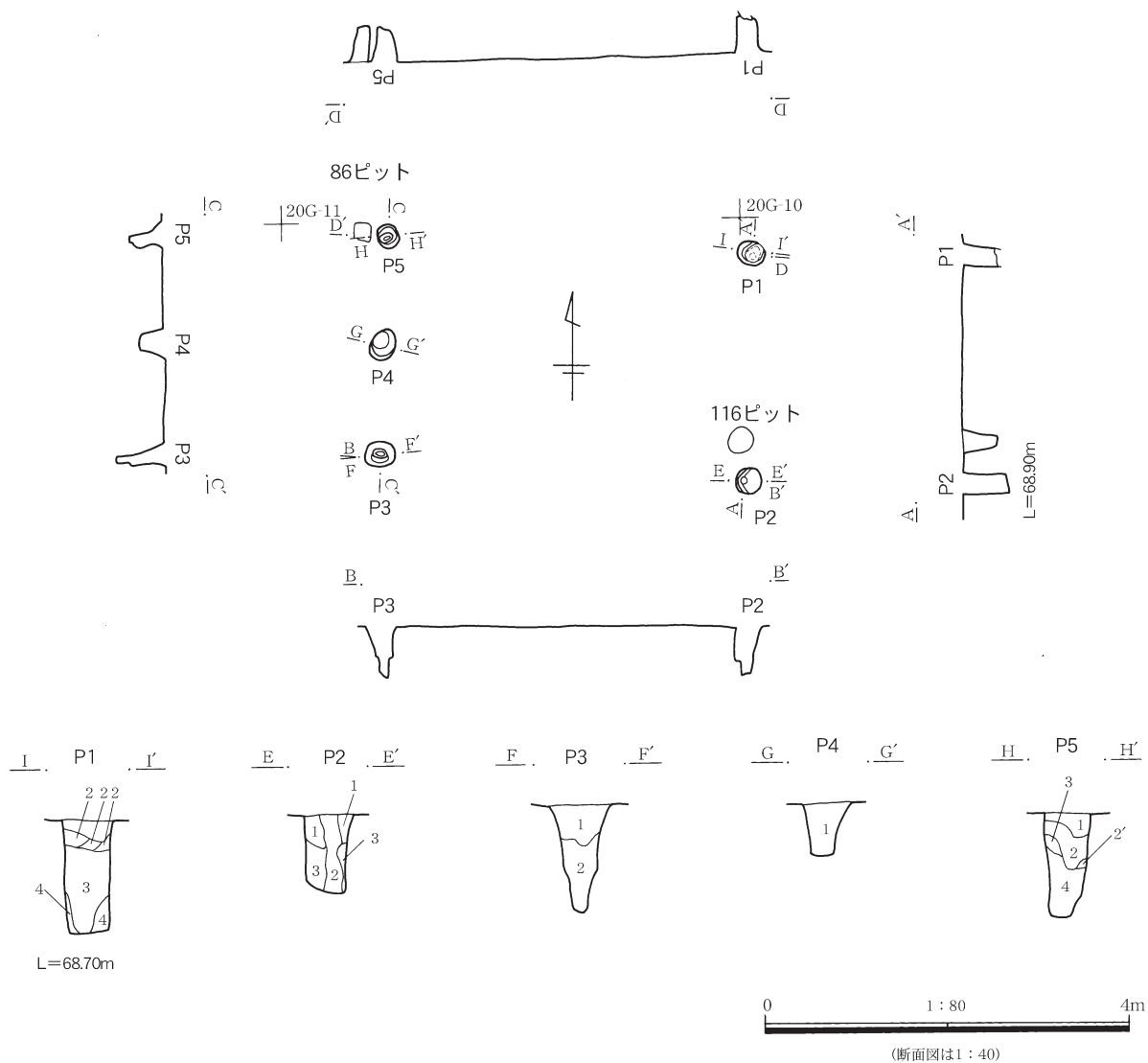
形状 2×1間(南辺5.45×東辺3.14m)の東西棟である。桁行の柱間は不均等である。梁行も東辺より西列が0.21m広がっている。

方位 N-92°-E

柱穴 掘り方の平面形は、円形を基本とする長円形を呈する。長径は0.34~0.56mである。深さは0.375~0.845mであった。埋没土にはふい黄褐色土、灰黄褐色土が堆積していた。柱痕は認められない。

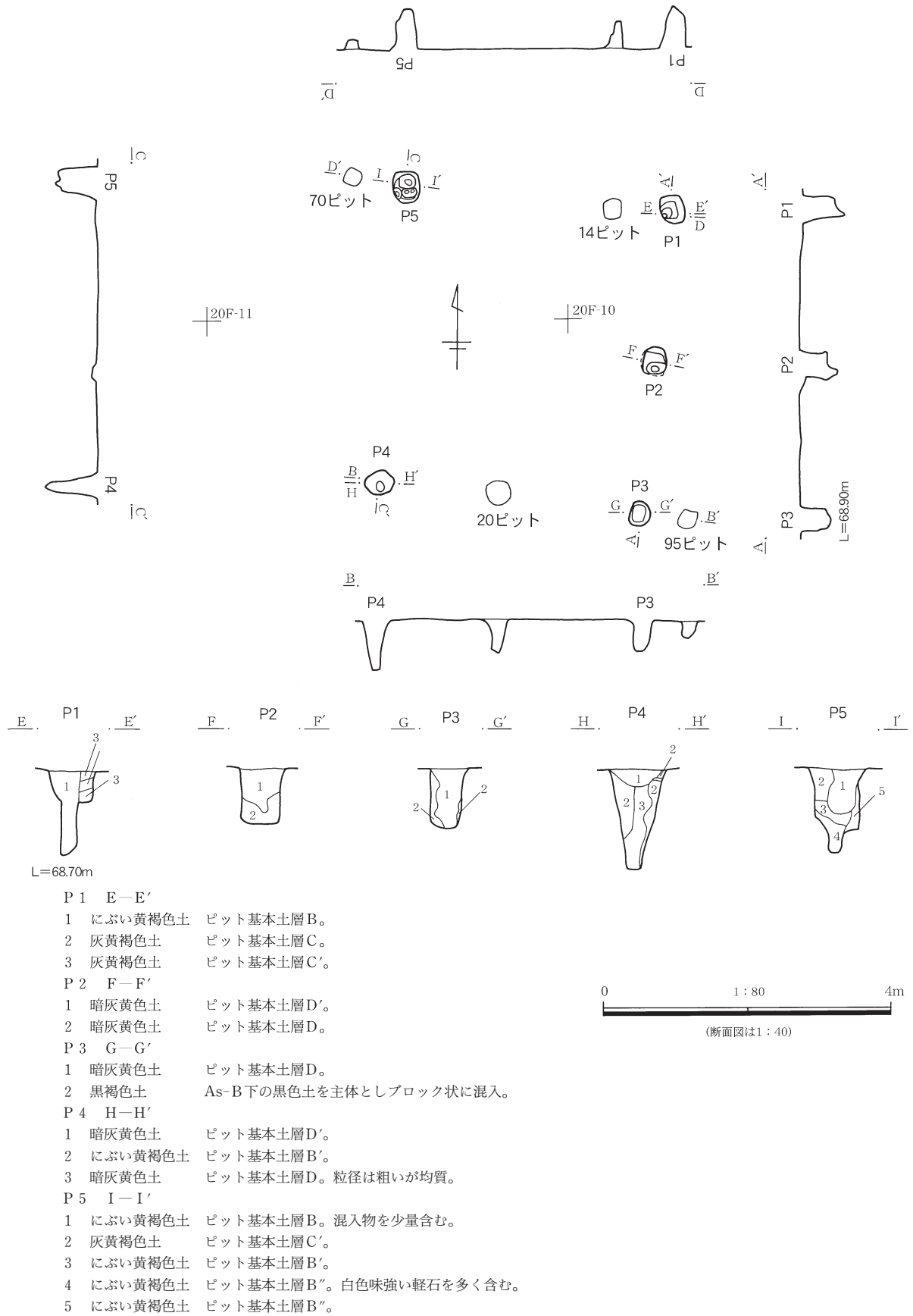
所見 出土遺物はない。7号掘立柱建物との前後関係は不明である。詳細な掘削時期も不明であるが、2号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

II 発掘調査の記録



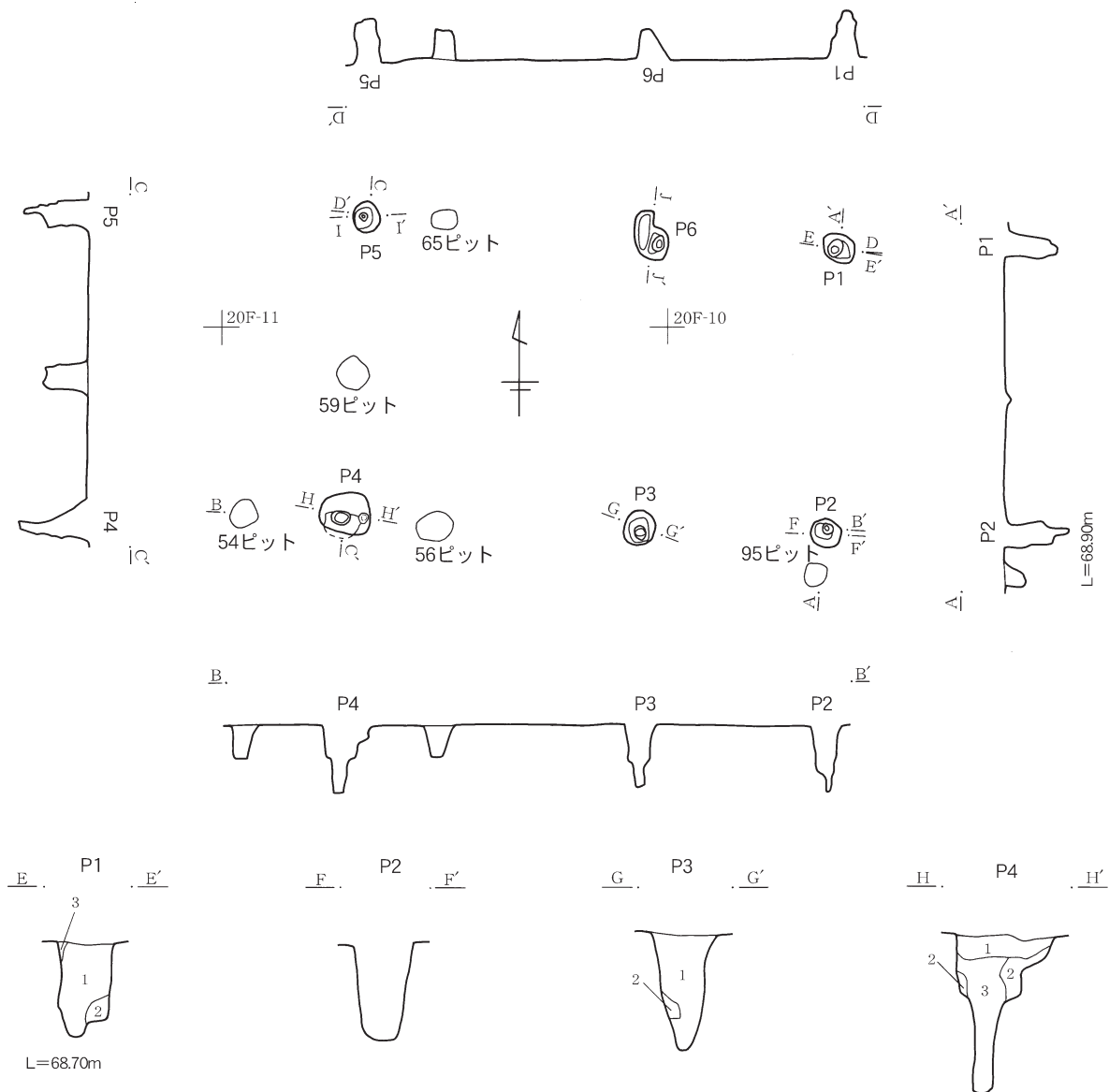
- P1 I-I'
- 1 黒褐色土 基本土層Eに相当。黒色粘性土ブロックを混入。やや砂質の非粘性土。斑鉄散見。軽石細粒を少量含む。しまり強い。
 - 2 暗褐色土 やや粒子の粗い微粘性土。ややしまり欠く。地山との区別が困難。
 - 2' 暗褐色土 炭化物粒をやや多く混入することから、埋没土と判断した。ややしまり欠く。
 - 3 注記不明
 - 4 注記不明
- P2 E-E'
- 1 灰黄褐色土 ピット基本土層C'。
 - 2 暗灰黄色土 ピット基本土層D。
 - 3 黒褐色土 ピット基本土層E。
- P3 F-F'
- 1 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。
 - 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B'。混入物は不均等。中央部分のしまりやや欠ける。
- P4 G-G'
- 1 灰黄褐色土 ピット基本土層C。混入物は小粒で少量。
- P5 H-H'
- 1 黒褐色土 P1の1層に同じ。
 - 2 にぶい黄褐色土 P1の2層に比べしまり強い。軽石の混入やや多い。炭化物は不明。
 - 2' 黒褐色土
 - 3 暗褐色土 P1の2層に類似するがしまり強い。地山か。
 - 4 注記不明

第64図 4区6号掘立柱建物

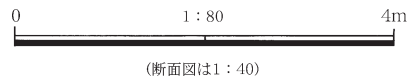


第65図 4区7号掘立柱建物

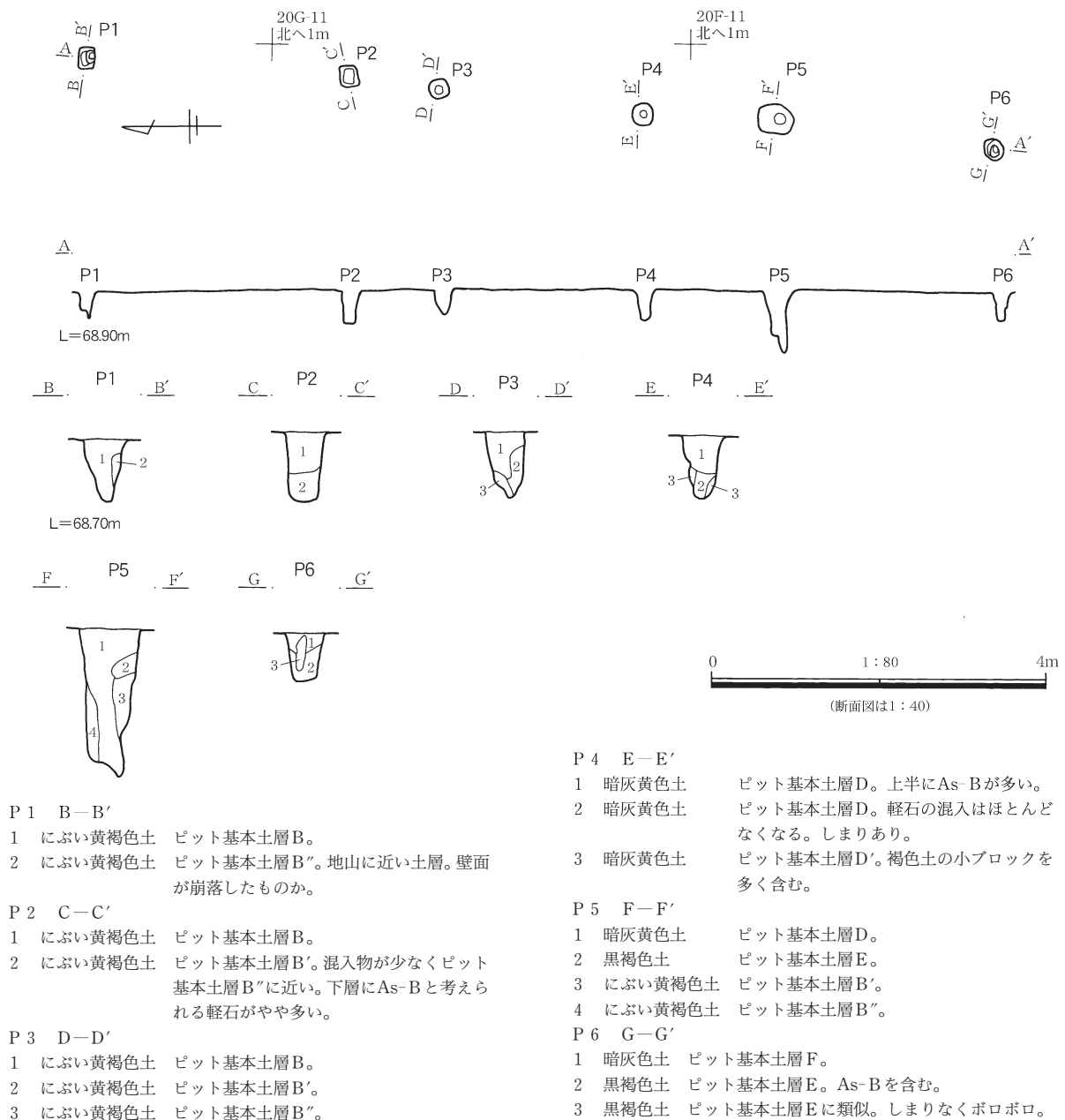
II 発掘調査の記録



- P 1 E-E'
- 1 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。中央部分はしまりなし。
 - 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B'。
 - 3 灰黄褐色土 ピット基本土層C。
- P 3 G-G'
- 1 暗灰黄色土 ピット基本土層D。上半は漸移的に黄色味を増す。
 - 2 灰黄褐色土 ピット基本土層C。
- P 4 H-H'
- 1 暗灰黄色土 ピット基本土層D。
 - 2 黒褐色土 ピット基本土層E。
 - 3 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B'。下位ほど混入物が多くなる。
- P 5 I-I'
- 1 灰黄褐色土 ピット基本土層C。
 - 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。
 - 3 灰黄褐色土 ピット基本土層C'。黒色土を多く含む。
- P 6 J-J'
- 1 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B''。
 - 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。
 - 3 灰黄褐色土 As-B混じりの洪水砂。



第66図 4区8号掘立柱建物



第67図 4区2号柵列

第18表 4区2号柵列計測値一覧

建物全体規模	5間				長さ(m)	10.73
主軸方向	N-6°-E				形状	次柱穴との間隔(m)
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
	P 1	27	19	20.5	長方形	3.05
	P 2	25	22	38.5	方形	1.10
	P 3	24	22	29.0	方形	2.42
	P 4	27	26	36.0	円形	1.61
	P 5	41	34	54.0	長円形	2.60
	P 6	25	23	32.0	円形	

4) 柵列

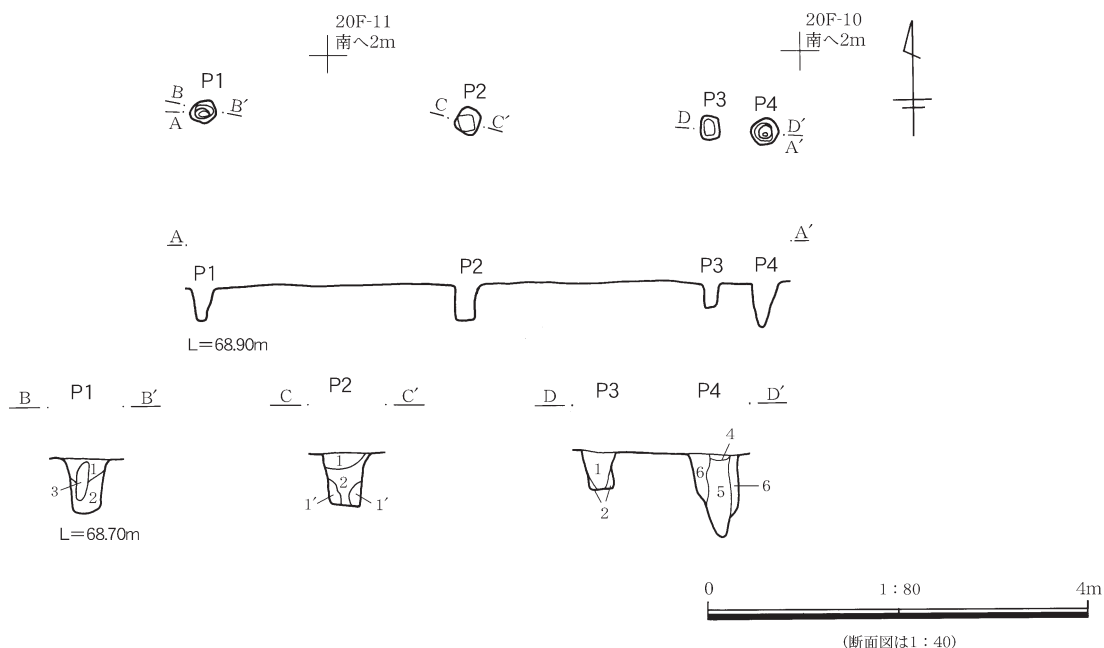
4区2号柵列 (第67図 第18表 PL16・17)

位置 20E~G-11G

重複 3号柵列と重複する。

形状 南北方向の柵列である。7号・8号掘立柱建物の西側に位置する。6本5間の柱穴を検出した。列の長さは10.73mである。柱間の間隔は、1.10~3.05mと極めて不揃いである。また、南端に位置するP6は3号柵列の西端、P1と共通するものである。

II 発掘調査の記録



P 1 B-B'

- 1 暗灰色土 ピット基本土層F。
- 2 黒褐色土 ピット基本土層E。As-Bを含む。
- 3 黒褐色土 ピット基本土層Eに類似。しまりなくボロボロ。

P 2 C-C'

- 1 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B'。
- 1' にぶい黄褐色土
- 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。

P 3・P 4 D-D'

- 1 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。
- 2 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B'。
- 3 灰黄色土 上面にシルト質土のブロックがやや多い。
- 4 にぶい黄褐色土 ピット基本土層B。しまりなくボロボロ。
- 5 灰黄褐色土 ピット基本土層C。

第68図 4区3号柵列

第19表 4区3号柵列計測値一覧

建物全体規模	3間					
主軸方向	N-93°-E				長さ(m)	5.86
桁・梁行の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
	P 1	25	23	32.0	円形	2.74
	P 2	27	25	36.5	長円形	2.55
	P 3	24	19	26.0	長方形	0.60
	P 4	26	26	35.0	円形	

この柱穴部分でほぼ90°屈曲し、全体がL字形を呈していた柵列である可能性がある。ここでは南北方向、東西方向を分離して報告する。

方位 N-6°-E

柱穴 掘り方の平面形は各種が混在していた。長径(長軸)は0.24~0.41m、深さは0.205~0.540mである。埋没土は、にぶい黄褐色土が堆積しているものが多数あった。P 4、P 6では柱痕が認められた。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明であるが、軸線の方向が、7号・8号掘立柱建物の梁行の方向とほぼ等しいことから、これらの建物の

と前後する時期の所産と考えられる。

4区3号柵列 (第68図 第19表 PL16・17)

位置 20E-10・11G

重複 2号柵列と重複する。

形状 東西方向の柵列である。7号・8号掘立柱建物の南側にあり、実質的には重複関係にある。4本3間の柱穴を検出した。列の長さは5.86mである。柱間の間隔は東側の2本、P 3とP 4の間が0.60mと、他の2間と比較して極端に狭い。

方位 N-93°-E

柱穴 掘り方の平面形は円形を基本としている。長径は0.24~0.27m、深さは0.260~0.365mである。P 3が他の3本よりやや小規模である。埋没土はP 1が暗灰色土、他はにぶい黄褐色土が主体である。P 1、P 4では柱痕が認められる。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明であるが、7号・8号掘立柱建物と前後する時期、第5面の所産と考えられる。

第20表 4区2号屋敷ピット計測値一覧

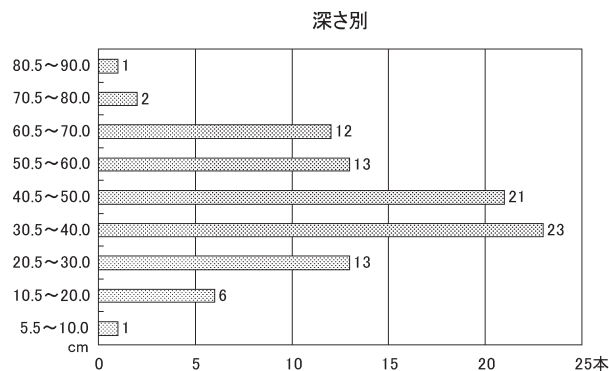
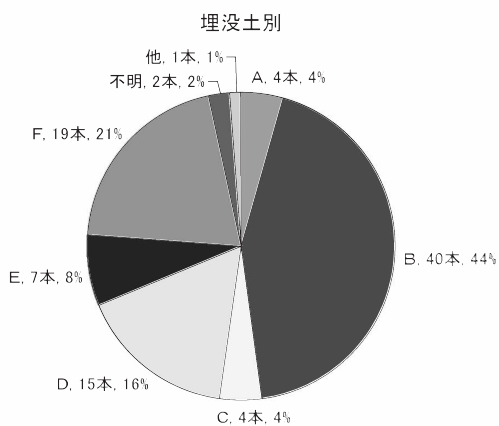
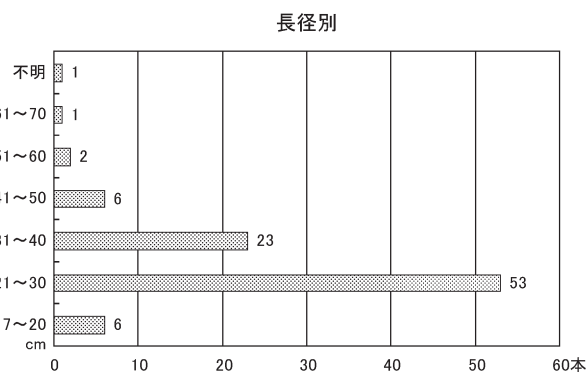
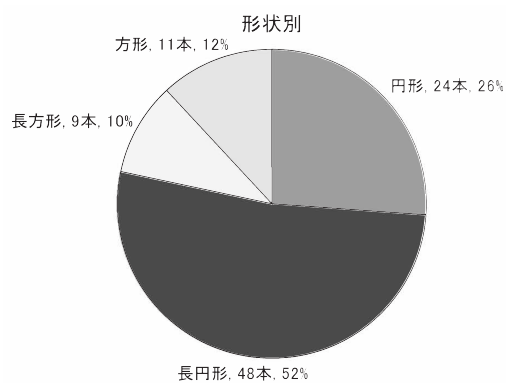
凡例は、1号ピット計測値一覧に準ずる。

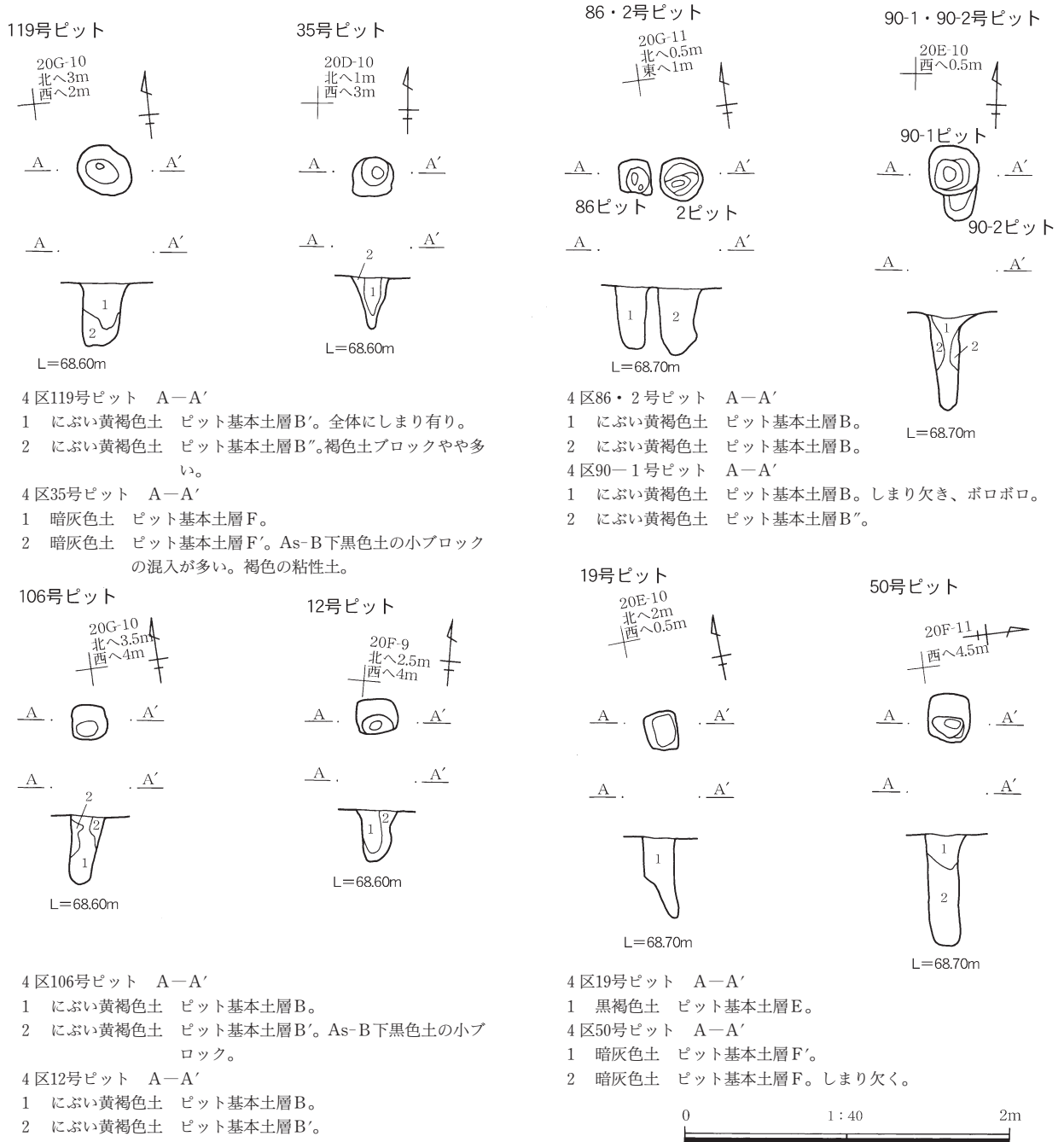
No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備考	挿 図 番 号	写 真 図 版
3	20H-10G	長円形	48	36	50.5	○	E	2本重複か	71	18
4	20G・H-9G	長円形	31	24	74.0		A	→3号井戸		
5	20G-9G	長円形	27	20	32.0		B			
6	20G-9G	円形	21	20	17.0		B			
7	20G-9G	円形	19	19	36.5		B			
8	20G-9G	長円形	27	22	36.0		B			
9	20F-9G	方形	24	22	26.5		B			
12	20F-9G	長方形	24	20	32.0	○	B		69	
14	20F-9G	長方形	27	22	40.0	○	B		70	
15	20F-9G	長円形	39	24	43.0	○	B			
17	20E・F-10G	長方形	61	26	67.0		C	2本重複か		
19	20E-10G	長方形	24	20	44.5		E		69	18
20	20E-10G	長円形	35	32	43.0		D			
21	20E-9G	長円形	28	22	51.0		D			
23	20D-9G	長円形	54	43	49.5		E			
24	20E-10G	長円形	45	33	47.0	○	F	2本重複か		
25	20D-10G	円形	26	25	45.5		F	下層に礫1点有り		
26	20D-10G	長方形	39	28	65.0	○	C	下端は円形	70	19
27	20D-10G	長円形	39	29	67.5	○	C		71	
28	20D-10G	円形	29	28	52.5	○	F	下層に礫2点有り、陶器鉢1点	71	18
29	20D-9・10G	長円形	29	26	52.5		E	下層に礫1点有り		
30	20D-9G	長円形	26	22	50.5		F			
31	20D-10G	長円形	26	24	43.5		F			
32	20D-10G	長円形	40	32	65.0		E			
33	20C-10G	長円形	37	34	70.5		D			
34	20D-10G	長円形	30	26	36.5		F	土師器台付甕1点		
35	20D-10G	方形	25	24	45.0	○	F	下端は円形	69	
36	20D-10G	長円形	30	27	37.5	○	F			
37	20D-10G	長円形	53	35	66.5	○	E	2本重複か		
38	20D-10G	長円形	39	36	13.0	*		14号溝→、断面皿状、灰が堆積		
39	20D-10G	長円形	29	24	6.5		F	断面皿状		
40	20D-10G	長方形	27	22	68.0	○	F	下端は円形		
41	20D-10G	長円形	30	24	69.0	○	F			
42	20D-10G	円形	29	28	54.5	○	F			
43	20D-10G	円形	28	26	56.0		F	土師器甕1点		
44	20D-10G	長円形	29	21	56.0		F	中層に礫1点有り		
45	20D-10G	円形	32	28	28.5		F			
46	20E-10G	長円形	44	34	48.5		D			
47	20D-10G	長円形	28	24	69.0		F			
48	20D-11G	長円形	42	38	24.5		D			
49	20D-11G	円形	20	17	49.0	○	F			
50	20E-11G	長方形	39	25	66.0		F	9号溝→		
52	20E-11G	長円形	25	21	13.5		F			
54	20E-10G	円形	31	29	39.5	○	D			
57	20E-10G	長円形	35	30	62.0		B	9号溝		
58	20E-10G	長円形	31	29	26.0		B	9号溝		
59	20E-10G	円形	35	34	47.5		E	9号溝		
60	20F-11G	長円形	26	17	31.0		D			
62	20F-11G	長円形	24	19	36.5		D			
63	20F-10G	長円形	30	25	51.5	○	B	8号溝	71	
65	20F-10G	長円形	28	22	39.0		B	8号溝		
66	20F-10G	長円形	27	20	34.0	○	B	8号溝		
67	20F-10G	円形	26	24	40.0		B	8号溝		
68-1	20F-10G	長円形	49	19	33.5		—	8号溝→、P68-2		
70	20F-10G	方形	22	21	14.0		B			
71	20F-10G	円形	32	30	30.0		B			
72	20F-10G	円形	22	21	42.5		B			
73	20F-10G	円形	25	21	21.0		B			
74	20F・G-10G	長円形	27	21	34.0	○	B			
75	20F-10G	長円形	36	31	49.0	○	B	埋土中に礫3点有り	71	
77	20F-11G	円形	24	22	21.5		B			
78	20F-10G	長円形	28	24	41.0		B			
80	20F-10G	長円形	41	30	59.0		C			

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	柱 痕	埋没土	備 考	挿図 番号	写真 図版
81	20F-11G	長円形	32	28	80.5		B			
82	20G-11G	長円形	27	25	69.0		D			
83	20G-11G	方 形	19	17	16.0		B			
86	20F-10G	方 形	20	19	37.5		B		69	
87	20G-10G	長円形	26	23	46.0		B			
88	20G-11G	長円形	27	19	31.0		B	2本重複か		
89	20D-9G	円 形	34	32	28.5		D	下層に礫2点有り	69	
90-1	20D-10G	方 形	30	29	60.5	○	B	P90-2	69	
90-2	20D-10G	長方形	—	18	10.5		—	P90-1		
91	20E-10G	円 形	22	22	24.0		B		70	
95	20E-9G	方 形	26	24	29.0		D	下端は円形		
97	20E-9G	円 形	27	25	52.5		D	9号溝		
98	20E-9G	長円形	34	30	56.0	○	B	9号溝	70	
99	20E-10G	方 形	35	34	45.0		B	下端は円形		
100	20E-10G	方 形	26	24	32.0	○	B	底面に礫1点有り	69	18
106	20G-10G	方 形	22	21	53.5	○	B			
107	20G-10G	長円形	27	20	41.0		B			
108	20H-8G	円 形	17	17	23.0		B	10号溝		
109	20G-8G	長方形	32	23	47.5	○	A			
110	20E-11G	円 形	25	23	33.0		D			
111	20E-11G	円 形	26	25	21.0		B			
112	20E-11G	円 形	26	24	40.5	○	B			
113	20E-11G	長円形	27	22	36.0	○	B			
114	20E-10G	円 形	25	23	43.0		D			
115	20E-9G	方 形	19	18	25.0		D			
116	20F-9G	円 形	28	25	37.0		B			
117	20H-9G	長円形	39	33	32.0	○	A		70	18
118	20G-8G	長円形	29	22	47.0		A			
119	20G-10G	長円形	34	29	38.5		B	底面近くに礫1点有り	69	

第21表 4区2号屋敷ピットの諸分類





第69図 4区2号屋敷ピット(1)

5) ピット

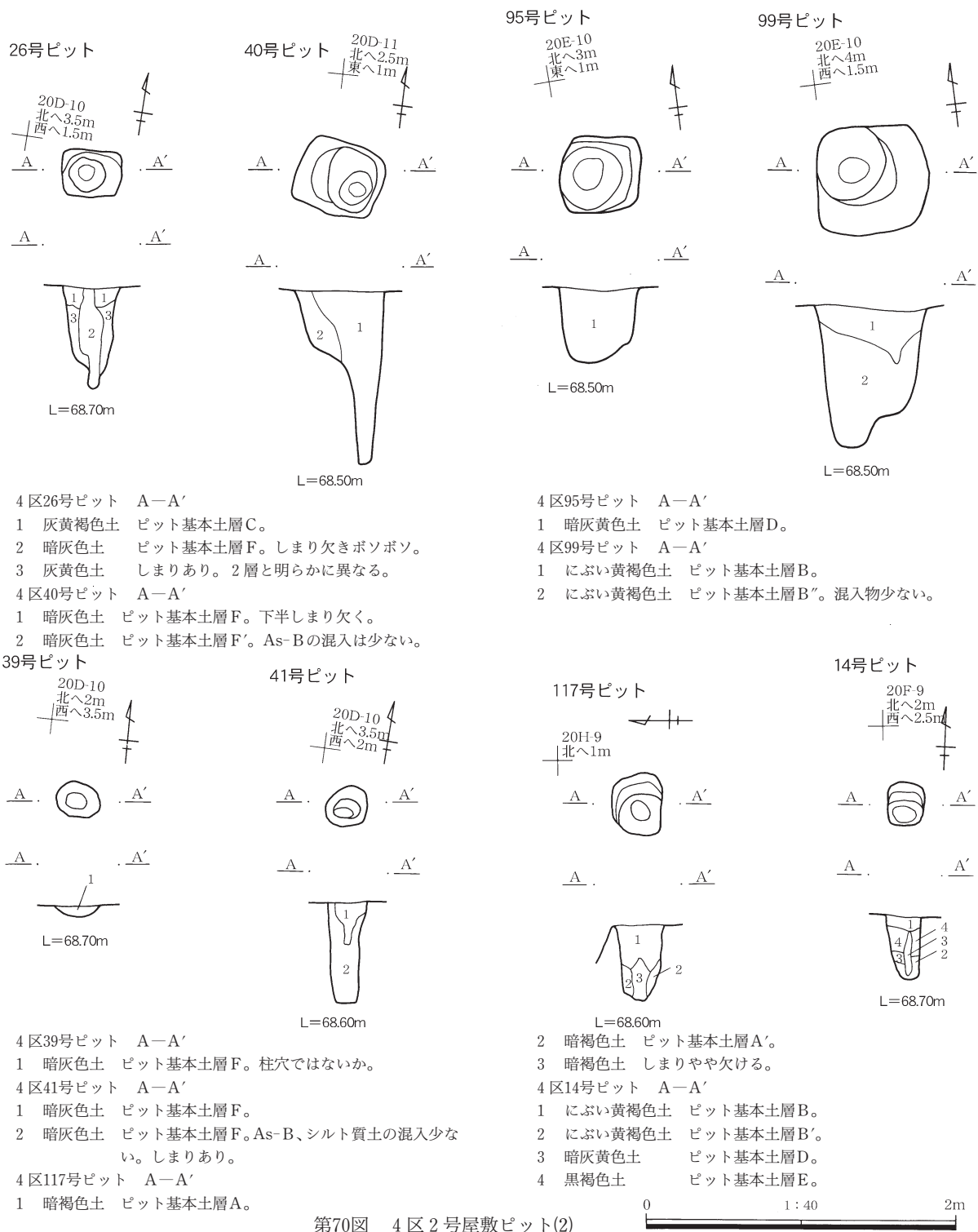
4区ピット (第59・69~71図 PL19)

概要 2号屋敷の区画内からは、合計92本のピットが検出された。個々の情報については、第20・21表に掲載したとおりである。表中の番号は、1号屋敷の項で記したのと同じ理由で不連続になっている。以下、分布、形状、埋没土、出土遺物の順に確認された点を記しておく。

分布 屋敷の区画内全体が検出されていないので、調査した範囲内での傾向を述べると、1号屋敷に比べ、全体に散漫な状況にある。その中で、6号~8号掘立柱建物の検出された部分とその南側、20G-10グリッド周辺に集中傾向が見られたが、それも特段の規則性を見出しえなかった。

これに対し、屋敷内の区画溝と考えられる7号溝に沿った、西側3m以内の範囲から検出された数は

II 発掘調査の記録

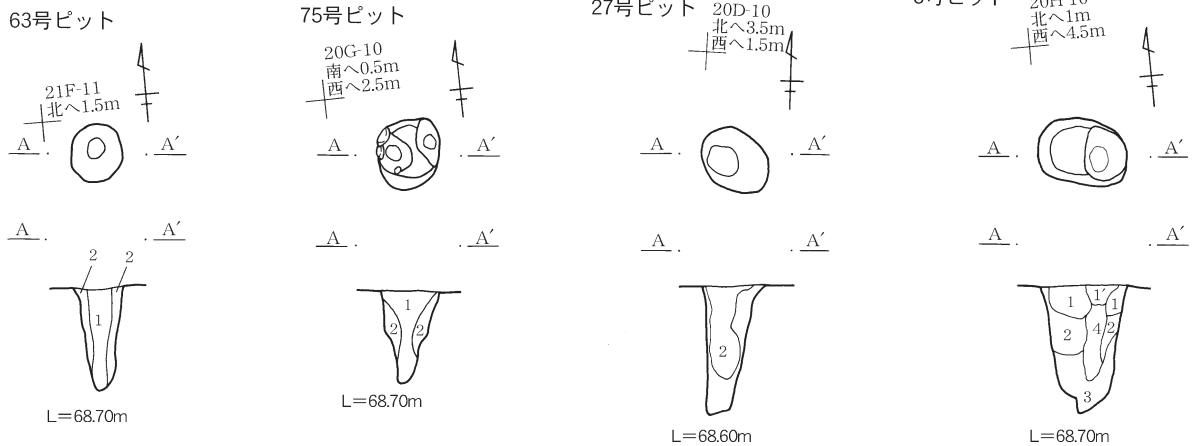


第70図 4区2号屋敷ピット(2)

3本である。また、屋敷の西辺を区画すると考えられる4号溝の東側2m以内の範囲から検出された数は4本である。

埋没土別の分布を見ると、基本土層Bを充填するものが、7号・8号掘立柱建物から北側寄りに、基

本土層Fを充填するものが、20G-10グリッド付近に比較的まとまる傾向にあった。円形・方形の平面形状の相違、埋没土中に礫を有するものの分布なども検討したが、特段の傾向は見られなかった。0.60m以上の深さを有するピット15本のうち、9本が20



4区63号ピット A-A'

- 1 におい黄褐色土 ピット基本土層B。柱痕ボソボソでしまりなし。
- 2 におい黄褐色土 ピット基本土層B。下層にはシルト質土の混入が若干多くなる。

4区75号ピット A-A'

- 1 におい黄褐色土 ピット基本土層B。表層にAs-Bやや多い。下層にはAs-Bと考えられる軽石が多い。
- 2 におい黄褐色土 ピット基本土層B''。

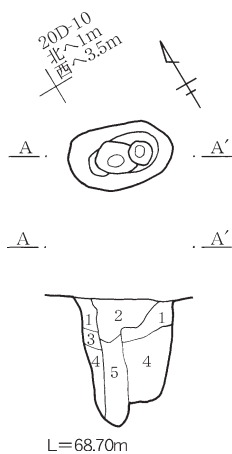
4区27号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 ピット基本土層C。下方に向かうに従い褐色軽石ブロックの混入を増す。
- 2 暗灰色土 ピット基本土層F'。

4区3号ピット A-A'

- 1 黒褐色土 基本土層Eに相当。大粒の黒色土ブロックを混入。軽石も多い。
- 1' 黒褐色土 砂質土のブロックを混入。
- 2 黒褐色土 黒色粘質土ブロックを混入。しまり強い。
- 3 黒褐色土
- 4 柱痕 空洞になっていた。

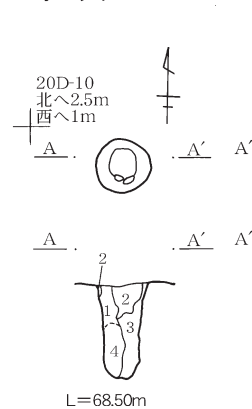
37号ピット



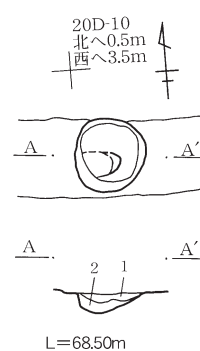
4区37号ピット A-A'

- 1 灰黄褐色土 ピット基本土層C。
- 2 暗灰黄色土 ピット基本土層D。
- 3 暗灰黄色土 ピット基本土層D'。
- 4 黒褐色土 ピット基本土層E。
- 5 黒褐色土 ピット基本土層E。しまり著しく欠く。

28号ピット



38号ピット

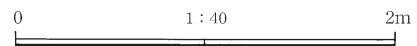


4区28号ピット A-A'

- 1 暗灰色土 ピット基本土層F。
- 2 暗灰色土 ピット基本土層F'。
- 3 暗灰色土 ピット基本土層F'。下層ほど褐色シルト質土の小ブロックの混入を増す。
- 4 柱痕 空洞になっていた。

4区38号ピット A-A'

- 1 黒色灰 焼土ブロック混を混入。白色灰もブロック状に混入。
- 2 灰黄褐色土 色調の濃いAs-B混土。赤褐色味が強い。黒色灰は混入しない。



第71図 4区2号屋敷ピット(3)

G-10グリッド周辺で検出されたが、これも規則性は認められなかった。

なお、4区の東側、2a区、2b区においてはピットの検出はなく、2号屋敷に続くような状況は見ら

れなかった。後世の土地利用との関係からくる相違であろうか。

形状 平面の形状は、第20表に示したように、円形(24本)、長円形(48本)、方形(11本)、長円形(9本)

II 発掘調査の記録

がある。

長径あるいは長軸の規模は、17号ピットの0.61mを最大、108号ピットの0.17mを最小に、概ね0.30～0.50mの範囲内に収まっている。

断面形はその大半が筒状を呈している。残存する深さは、81号ピットの0.805mを最深、39号ピットの0.065mを最浅とする。0.300～0.500mの規模のものがやや多いものの、0.200～0.700mまでの各規模に分散する傾向にある。

検出されたピットの大半は、建物の柱穴を構成したものと考えられる。その中、一部に柱穴とは性格を異にするとと思われるものも見られたが、細別せず、ピットとして報告する。

38号ピットは、20D—10グリッドに位置し、14号溝と重複していた。平面形はほぼ円形を呈している。規模は長径0.39m、短径0.36m、深さ0.13mを測る。埋没土中に灰が充填されていた。灰を廃棄した坑と考えられる。

39号ピットは、20D—10グリッドに位置する。平面形が長円形である。断面形が皿状を呈していた。埋没土は基本土層のFである。

埋没土 埋没土については、第20表に掲載したとおりである。土層の分類内容は、1号屋敷と同様である(P74)。土層分類別に見ると、1号屋敷のように特定の土層に片寄ることなく、ほぼ同様の本数ずつ、基本土層のAからFまでの土層で埋没していた。

柱痕を確認したものは28本である。3号ピット、37号ピットではともに幅0.10mの柱痕が見られた。柱痕の周囲には柱を据えた後、その周囲を固めるように掘り方内に土砂を充填した様子が確認できた。3号ピットは底面に段差がある。これは粗く掘り方を掘った後、柱の高さに合わせて、底面を微調整した痕跡とも考えられた。26号ピットでは、幅0.06～0.15m、深さ0.65mと底面に達する柱痕が見られた。

埋没土中から礫が出土したものは8本である。礫の出土状況は1号屋敷と同様であり、特記するような事例は見られなかった。100号ピットでは、底面から礫を出土している。

遺物 埋没土から遺物を出土したものが3本あったが、資料化に足るものではなかった。

所見 その分布が2号屋敷の区画内にあり、区画溝や掘立柱建物との関連性を想起させることから、ここに報告するピットの大半が第5面に属し、2号屋敷の形成時期の所産であると考えられる。

6) 井戸

4区1号井戸 (第72図 PL18・34)

位置 20E—9G

形状 東方約2.00mに7号溝が近接する。素掘りの井戸と考えられる。確認面における平面形は、南北方向に長軸を有するが、円形に近い形状である。長径1.34m、短径1.28mを測る。下端における平面形は、南北方向に長軸を有する長円形を呈し、長径0.72m、短径0.60mを測る。断面形は上端から0.50mの深さで変換点を有し、それより上位は外傾して立ち上がる形状、それ以下は筒状の形状を呈している。深さは1.30mである。

方位 N—23°—W(上端)、N—16°—E(下端)

埋没土 上半部に暗灰黄色土が堆積していた。遺物とともに、長径0.10～0.30mほどの礫が、10個前後出土してゐる。

遺物 埋没土中の中位以下から、軟質陶器内耳鍋(1～3)が出土した(観P179)。

所見 出土遺物は中世の特徴を有している。2号屋敷形成時期の所産と考えられる。

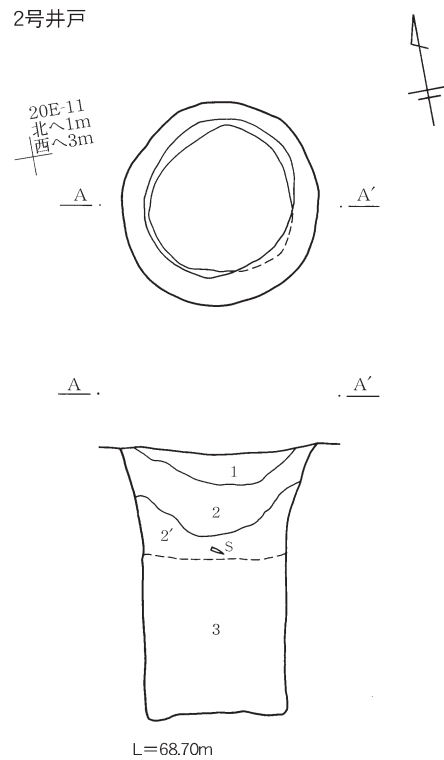
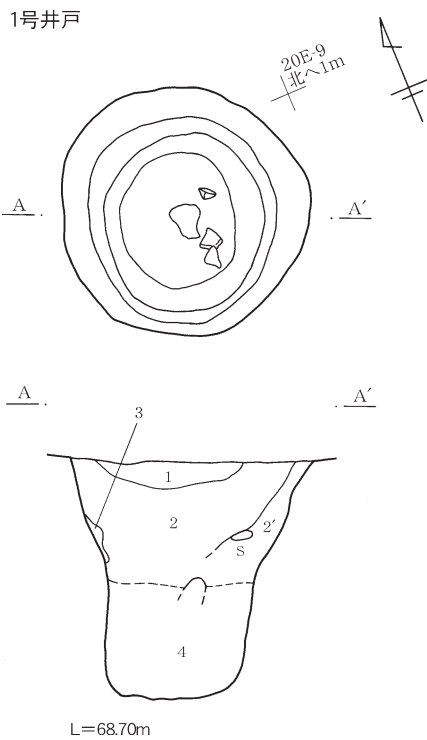
4区2号井戸 (第72図 PL18)

位置 20E—11G

形状 西方約1.60mに4号溝が近接する。素掘りの井戸と考えられる。確認面における平面形は、南北方向に長軸を有するが、円形に近い形状である。下端も同様の形状である。上端は長径1.17m、短径1.02mを測る。下端は長径0.77m、短径0.72mを測る。断面形は筒状を呈し、底面に向かって徐々に直径を狭めている。深さは1.45mを測る。

方位 N—33°—E

埋没土 灰黄褐色土が堆積している。混入物・色調などで細分が可能であった。また、長径0.10～0.25

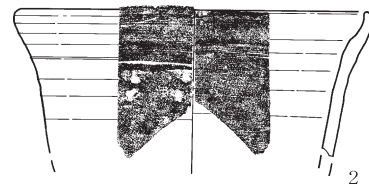
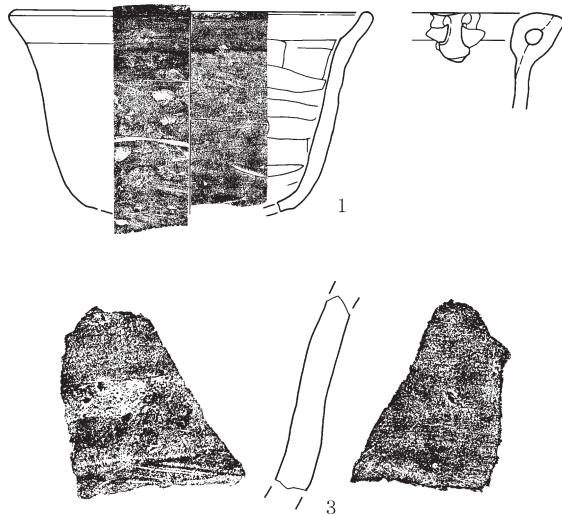


4区1号井戸 A-A'

- 1 黄褐色土 粒子細かな微粘性土。洪水砂層でAs-Bを含まない。細かな斑鉄はない。
- 2 暗灰黄色土 やや粒子の粗い非粘性砂粒。洪水砂層で大粒の斑鉄が多い。軽石は見られない。
- 2' 暗灰黄色土 斑鉄少ない。
- 3 灰黄褐色土 やや粒子の細かい弱粘性土。混入物は少ない。
- 4 注記不明

4区2号井戸 A-A'

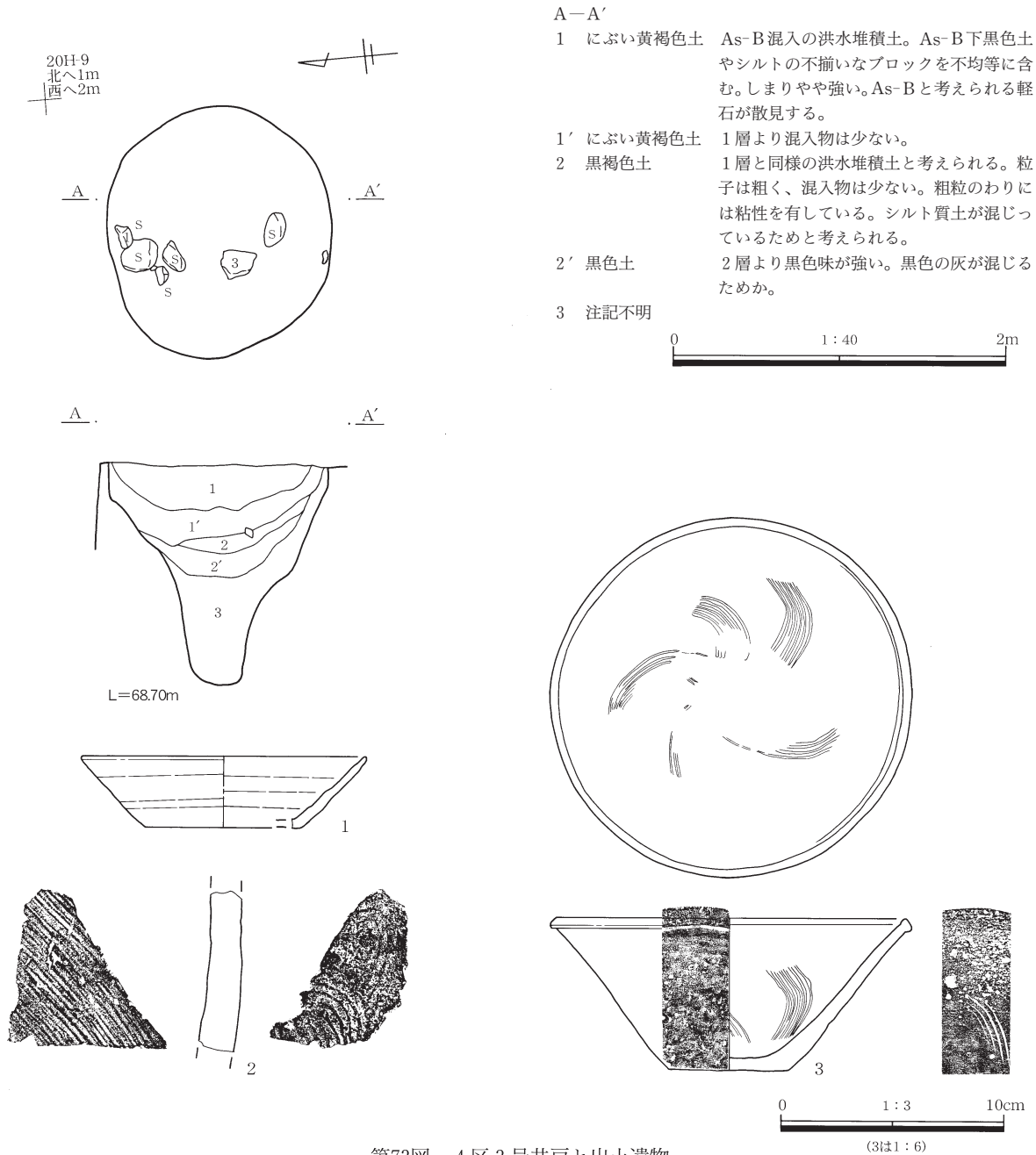
- 1 灰黄褐色土 粒子の細かな微粘性土。洪水堆積土でシルト質。斑鉄有り。上面からの落ち込みで1号井戸の埋没土と同じ。
- 2 灰黄褐色土 粒子の細かな粘性土。不揃いな斑鉄あり。シルト質のブロック(Hr-FAか)を含む。炭化物を含み、ややしまりあり。
- 2' 灰黄褐色土 2層よりやや細粒となりボソボソする。灰色味増すが、基本的には2層と同じ。
- 3 注記不明



(3は1:3)

第72図 4区1号・2号井戸と1号井戸出土遺物

II 発掘調査の記録



第73図 4区3号井戸と出土遺物

mの礫が10個ほど出土している。

所見 出土遺物はなかった。2号屋敷形成時期の所産と考えられる。

4区3号井戸 (第73図 PL18・34)

位置 20G・H-9G

重複 埋没土中に4号ピットが掘り込まれていた。

形状 調査区北側で検出、東方約4.00mに7号溝が位置する。確認面における平面形は、東西方向に

A-A'

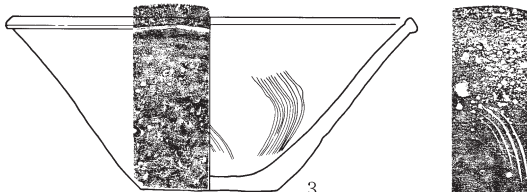
1 にぶい黄褐色土 As-B混入の洪水堆積土。As-B下黒色土やシルトの不揃いなブロックを不均等に含む。しまりやや強い。As-Bと考えられる軽石が散見する。

1' にぶい黄褐色土 1層より混入物は少ない。

2 黒褐色土 1層と同様の洪水堆積土と考えられる。粒子は粗く、混入物は少ない。粗粒のわりには粘性を有している。シルト質土が混じっているためと考えられる。

2' 黒色土 2層より黒色味が強い。黒色の灰が混じるためか。

3 注記不明



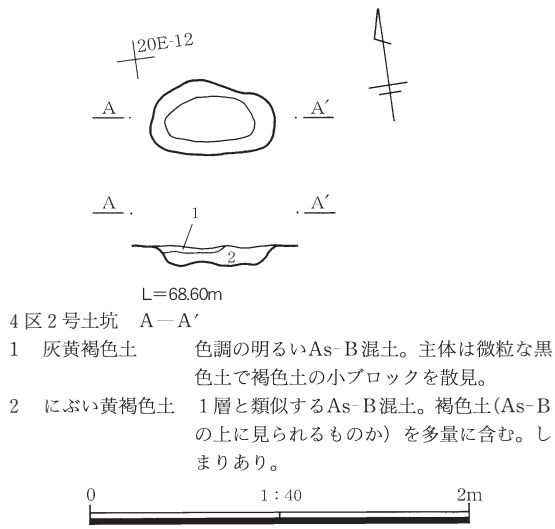
0 1:3 10cm

(3は1:6)

長軸を有する長円形を呈する。規模は長径1.50m、短径1.28mを測る。断面形は漏斗状を呈している。上端から0.70mの深さに変換点を有し、以下は筒状を呈している。深さは1.30m以上である。

方位 N-73°-W

埋没土 上層の厚さ0.40~0.50mににぶい黄褐色土が、次の厚さ0.10~0.20mに黒褐色土が堆積している。埋没土中に輝石安山岩・角閃石安山岩の礫が含まれていた。



第74図 4区2号土坑

遺物 埋没土中、上端から約0.70mの高さから軟質陶器播鉢(3)が出土している。他に土師質土器皿(1)、須恵器甕(2)が出土している(観P179・180)。
所見 出土遺物は少なかったが、2号屋敷形成時期の所産である。

7) 土坑

4区2号土坑 (第74図 PL18)

位置 20D-11G

形状 4号溝に接して位置する。平面形は、東西方向に長径を有する長円形を呈する。北西部分の外縁がやや張り出す。規模は長径0.64m、短径0.38m、深さ0.13mを測る。底面はほぼ平坦である。

方位 N-80°30'-W

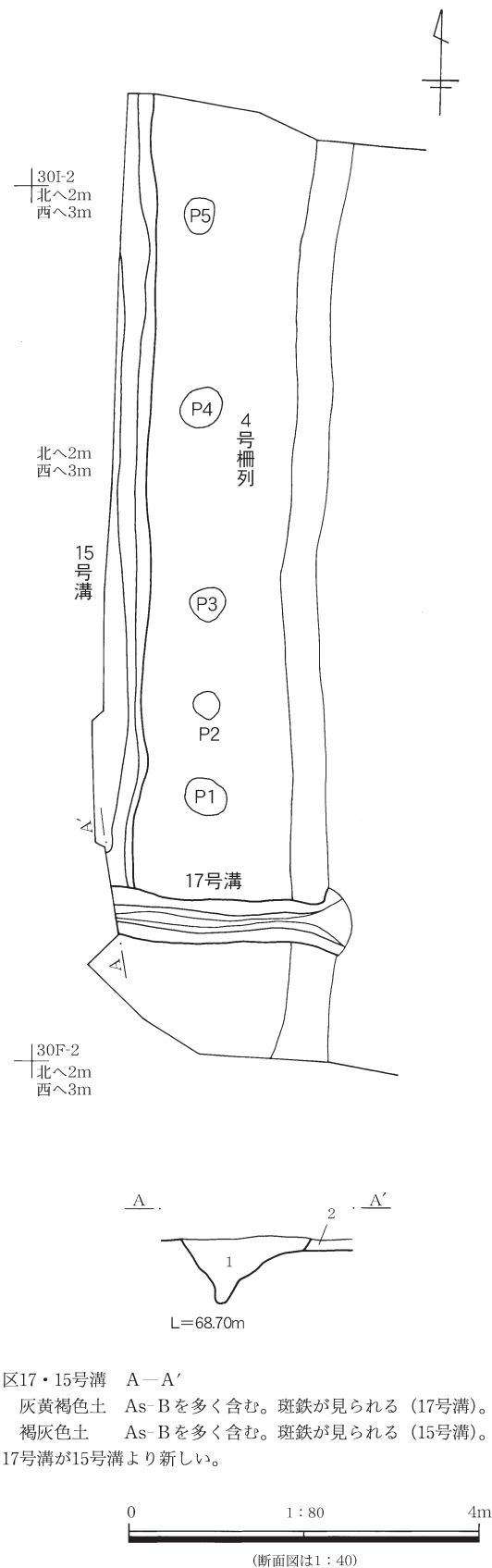
埋没土 As-B軽石下の黒色土を掘り込んでいる。埋没土上層の一部に灰黄褐色土が、他には、にぶい黄褐色土が堆積している。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。2号屋敷の形成時期の所産と考えられる。

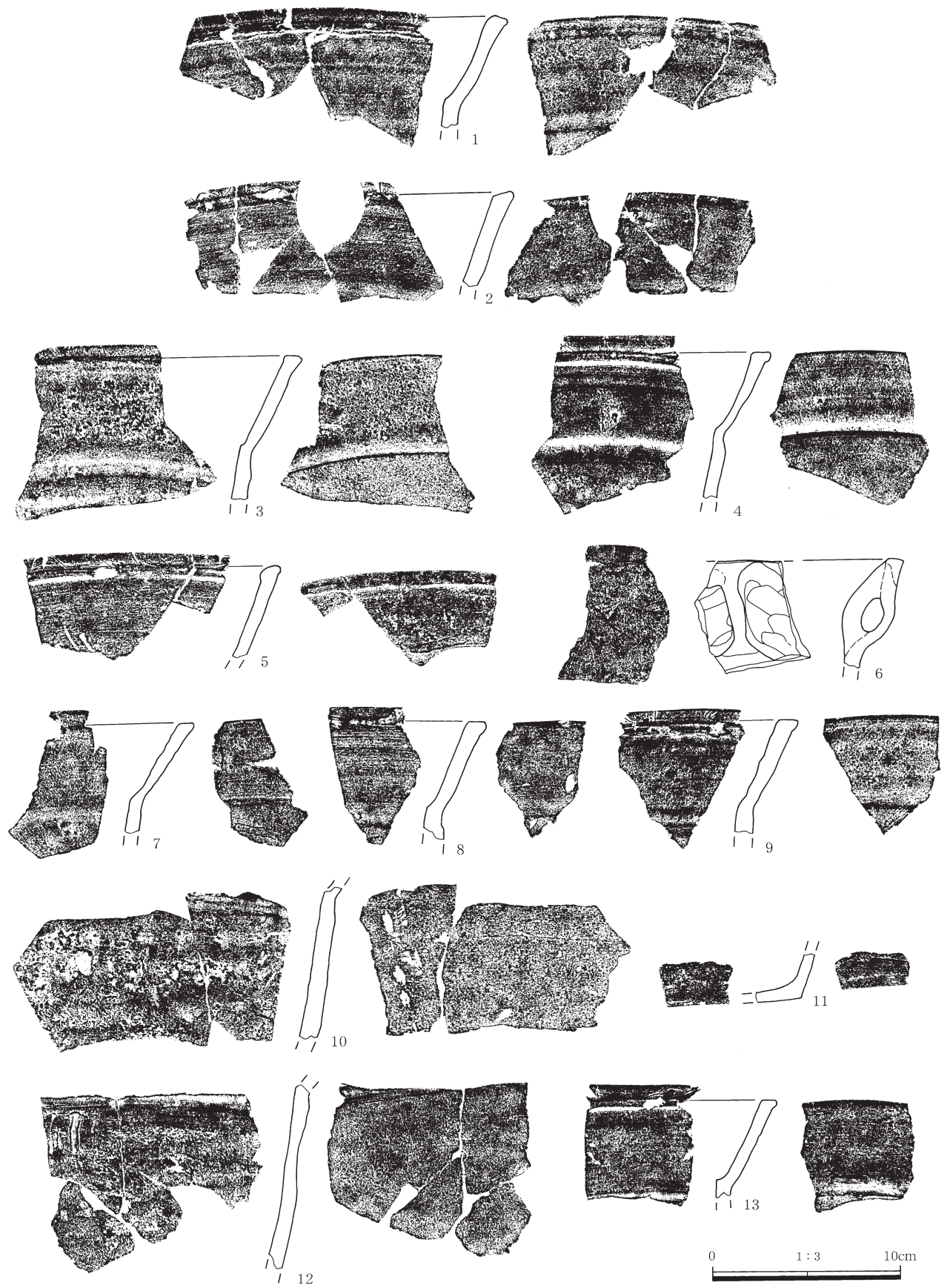
(4) 1号・2号屋敷外

1) 概要

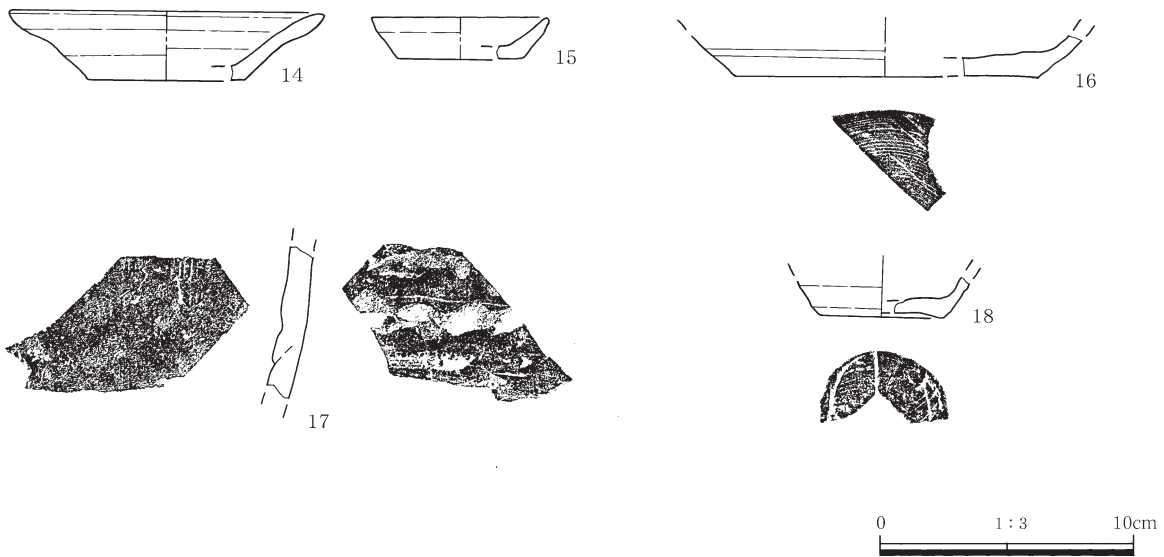
1号屋敷の西辺を南北に区画する6号溝の西側において、南北方向に走行する4区15号溝を検出した。調査区南側寄りでは、この溝に後出する4区17号溝が東西方向に延び、4区6号溝とも重複関係にある。



第75図 4区17号・15号溝



第76図 4区15号溝出土遺物(1)



第77図 4区15号溝出土遺物(2)

また、4区6号溝と4区15号溝の間では、南北方向に並ぶ5本の柱穴列を検出した。これを第4号柵列として報告する。

2) 溝

4区15号溝 (第75～77図 PL20・34)

位置 30F～H-2G

重複 17号溝に先出する。

形状 南北方向に走行する溝であるが、調査区西壁際で検出、また、現行水路と重複したことにより、東側の上端とその周辺の壁面を検出しただけで、横断面全体については確認することができなかった。走長9.11mを検出した。上幅の残存は0.64m、残存高は0.21mを測る。

方位 N-2°-E

埋没土 褐灰色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から多数の土器を出土した。その主体は軟質陶器内耳鍋(1～13)である。この他に、土師質土器皿(14～16・18)、陶器甕(17)がある。非掲載遺物としては、陶器碗2点・播鉢1点、磁器碗2点、軟質陶器内耳鍋70点・鍋2点、土師質土器皿12点、土師器7点、須恵器1点、砥石1点、板碑1点などがある(観P180)。

所見 南北方向の溝で、全容を確認するにいたらなかったが、1号屋敷の西側、斉田竹之内遺跡1b

区に内区を置く屋敷の東辺を区画する溝と考えられる。

4区17号溝 (第75図 PL20)

位置 30F-1・2G

重複 15号溝に後出し、6号溝とは同時期と考えられる。

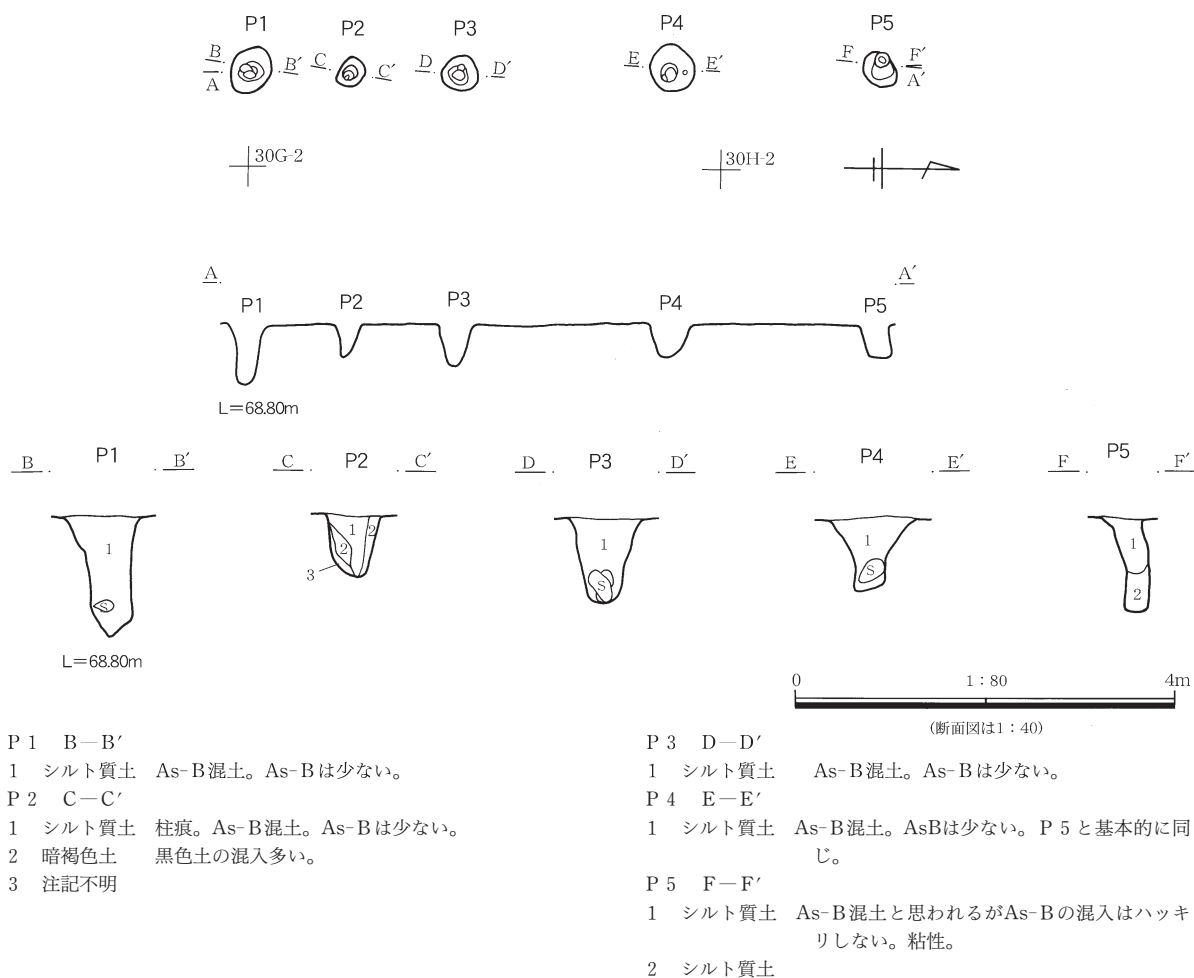
形状 東西方向に走行する。走長2.71mを検出した。6号溝以东には延長部分は確認できなかった。規模は、上幅0.47～0.73m、下幅0.04～0.50m、残存高は0.10～0.40mを測る。底面の標高は、東端で68.16m、西端で68.16mである。両端における標高差はなかった。6号溝との合流部分では幅が一段と広がり、底面も低くなっていた。

方位 N-94°-E

埋没土 少量の礫を含む灰黄褐色土1層が堆積していた。

所見 出土遺物はない。検出状況から6号溝と同時期に存在したもので、1号屋敷形成時期の所産と考えられる。1号屋敷と15号溝、すなわち斉田竹之内遺跡1区に内区を置く屋敷の東側区画溝を連結する役割を有していた可能性も指摘されている。

II 発掘調査の記録



第78図 4区4号柵列

第22表 4区4号柵列計測値一覧

建物全体規模	4間			長さ(m)	6.69	
主軸方向	N-1°-W			形状	次柱穴との間隔(m)	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長径	短径	深さ		
	P1	24	21	64.0	長円形	1.02
	P2	16	14	34.0	円形	1.16
	P3	19	19	42.0	円形	2.25
	P4	24	22	40.0	円形	2.24
	P5	20	17	31.0	円形	

3) 柵列

4区4号柵列 (第78図 PL20)

位置 30F~H-2G

形状 南北方向の柵列である。1号屋敷西辺を区画する6号溝の西縁と、調査区西壁際で検出した15号溝東縁の間に生じた、幅約1.50~1.80mの空白地帯のほぼ中央に位置する。軸線上に整然と並ぶ5本4間の柱穴を発見した。列の長さは6.69mである。

P1とP2、P2とP3の柱間は狭く、他の柱間の約2分の1となっている。北端は列が延長される可能性がある。南側には柱穴の検出がないことから、P1が列南端になることが考えられる。

方位 N-1°-W

柱穴 掘り方の平面形は円形、長円形である。長径は0.16~0.24m、深さは0.31~0.64mである。P2で柱痕が認められる。埋没土は浅間B軽石を混土するシルト質である。P2・P5以外の3本は埋没土中から礫が出土している。

所見 出土遺物はない。詳細な掘削時期は不明であるが、1号屋敷を区画する6号溝や、斉田竹之内遺跡1b区の屋敷を区画すると考えられる15号溝と走行を等しくしており、第5面の所産と考えられる。ただし、身舎を西側調査区外に置く、掘立柱建物の東辺である可能性も全く否定することはできない。

(5) 用水路

3区用水路 (第79・80図・付図 PL20・21・35)

位置 3区の中央部分を東西方向に横切っている。20J-9(東端)~M-20(西端)G

重複 浅間B軽石の1次堆積層により埋没した水田に後出する。記録を取らなかったが、土層断面の観察の際、埋没土(覆土か)の上層で、浅間A軽石にかかわる復旧溝が見られたとされる。

形状 東西方向にほぼ直線的に走行する。走長は5.89mを測る。調査上の都合で、西端の約6mと東端の4mについては、上端の走行を確認しただけで、壁面の掘り込みを検出していない。

掘り込みの幅に大きな変化は見られないが、上幅は11.50~15.85m、下幅は6.65~12.00mを測った。東端寄りでは上幅の最大値を測った。下幅の最大値は、3区7号溝がT字状に接している地点である。最小値は西端部分で測った。

断面形は底幅の広い逆台形を原形としていたと考えられる。壁面は全体的に北縁側の傾斜が強く、南縁側が弱い。北縁の20グリッド16ラインにおける角度は48°である。南縁は15ラインから東方3m以東は、後世の攪乱を受けて削平されているため、残存高が低くなっている。壁面は水流の影響を受けて、えぐれたりした様子はあまり見られない。残存高は約1.20~2.26mを測った。底面は緩やかなU字形を描いている。底面の標高は西端で66.51m、東端で66.34mを測る。両端の標高差は0.17mで、全体を通して大きな変化は見られない。

南縁の東端寄りには、上縁から底面に向かう傾斜路が取り付けられていた。その幅は上縁で約2.8m、底面にいたりその幅を広げ、約3.0mを測った。法面には地山の褐色粘質土上に、拳大の礫が一面に敷き詰められていた。地山が軟弱であったことから、養生のために施されたことが考えられる。その性格については不明である。舟つき場などを検討してみる必要があるか。

方位 N-105°-E

埋没土 壁面は浅間B軽石下の黒色粘質土(基本土

層6層)から、灰白色シルト(基本土層12層)までを掘り抜いている。下位部分は前橋泥流層に達し、深い部分ではこの泥流層を約0.6m掘り込んでいる。埋没土最下層は、砂粒・小礫が混在する礫層で、厚さは約0.3mである。この上層に北縁寄りでは、細砂と黒ボク土状の土粒が、混土する土層が堆積している。さらに北側半分では、黒褐色土・灰褐色土が0.20~0.30mの厚さでレンズ状に堆積している。いずれも砂粒を多く含んでおり、全体的に見ると大差が見られない状態である。東端寄りでは記録した土層断面では、北縁から南方向に9.50~12.00mの間では、下層から上層にいたるまで、多数の円礫・砂粒を主体とする礫層が、何層にも重なって堆積していた。各層に含まれる礫は、最大のものが0.15~0.30mで、強い水流があったことがうかがわれる。

遺物 本用水路の流路部分は、用水としての機能を失い埋没した後も、帯状の低位部を残し、後世の溝の流路として踏襲されてきたことは、既述のとおりである。このため覆土中から第5面以降の時期、特に近世の遺物が多数出土している。その反面、掘削時および用水として機能していた時期に対応する資料の出土は、皆無に近い状態であった。本報告では、上層出土の資料も一括して報告しておく。

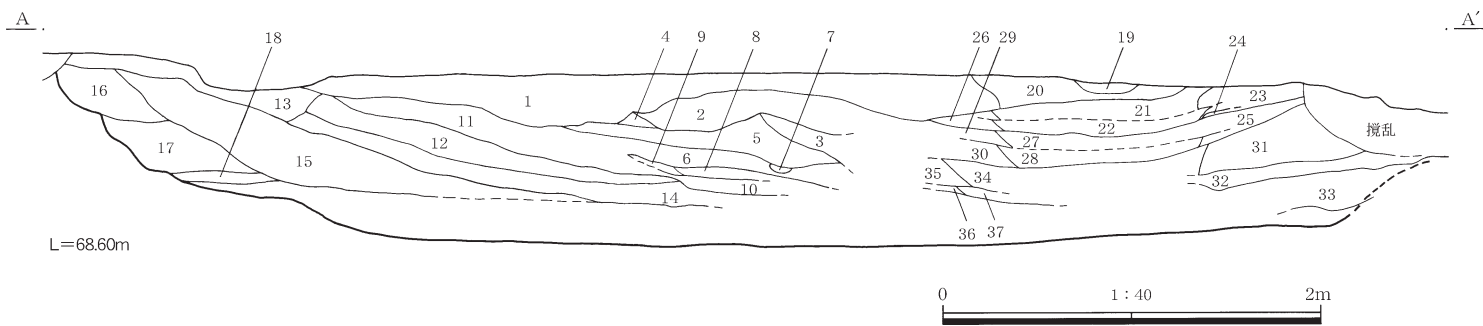
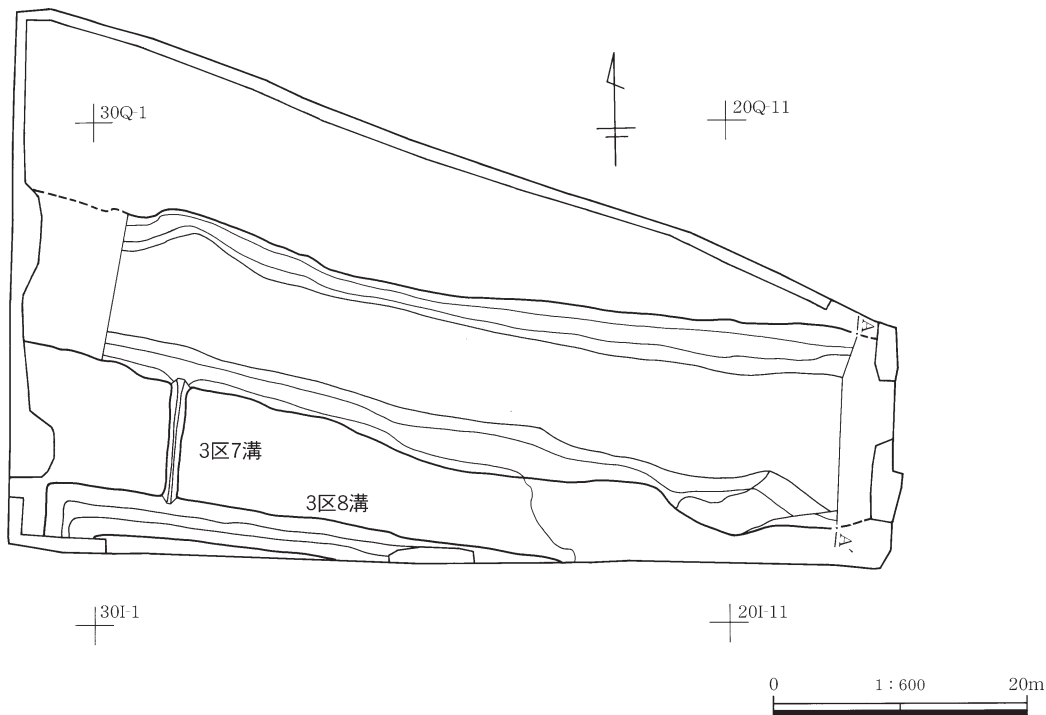
中世の所産と考えられる資料には、陶器おろし皿(8)、軟質陶器播鉢(2~4)・甕(1)がある。軟質陶器内耳鍋(5)もこの時期のものであろうか。

近世の所産と考えられるものでは、陶器片口鉢(9)・皿(10)・碗(11・12)・練鉢(14)、磁器碗(13)・徳利(16)・小杯(17)・皿(18)、砥石(15)を資料化した(観P181・182)。

非掲載資料としては、陶器碗・皿など24点、磁器碗・皿など21点、軟質陶器3点、土師器8点、須恵器2点、ガラス製品3点など合計61点がある。

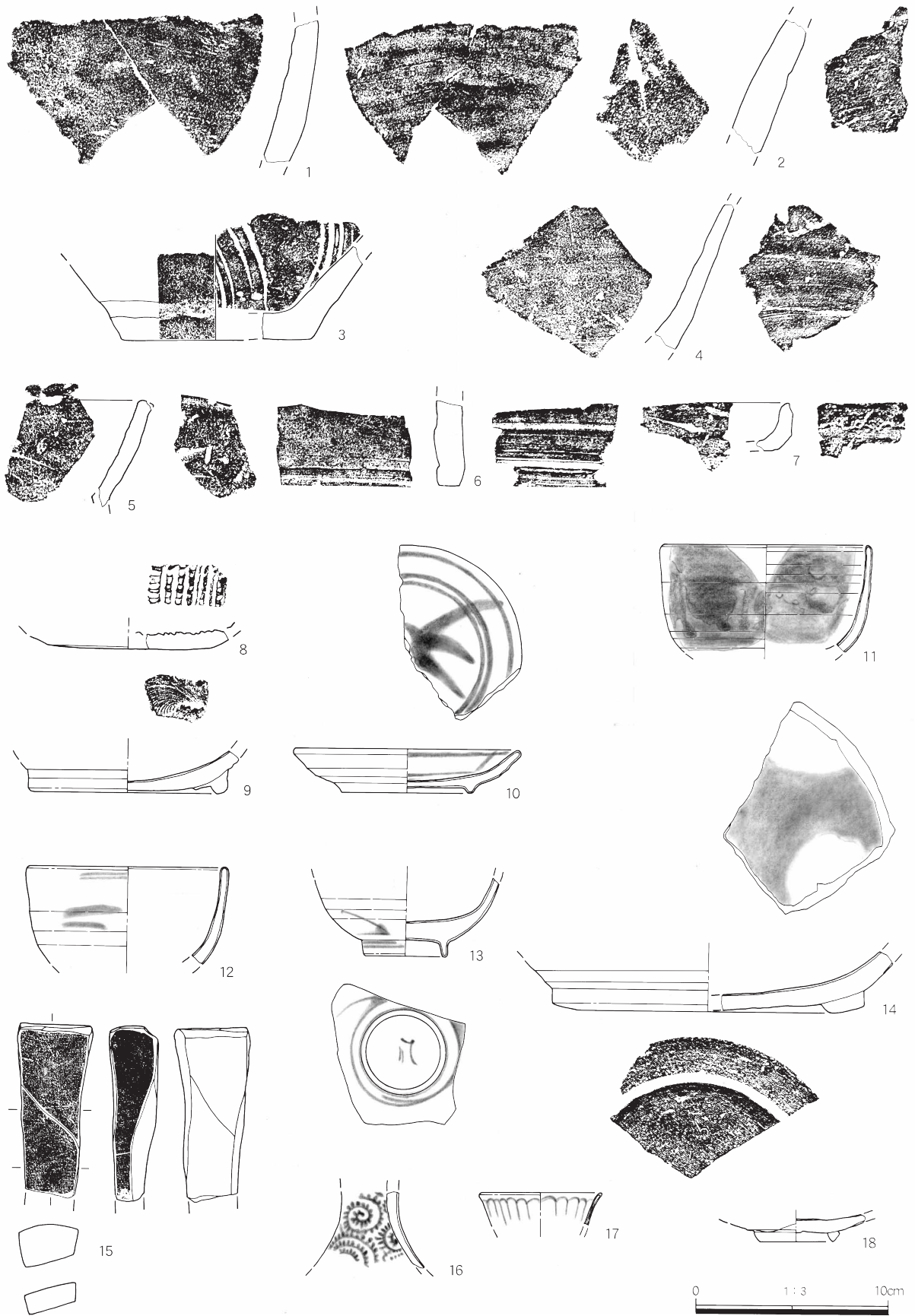
所見 本用水路は、上幅15.85~11.50m、残存高1.18~2.26mの規模を有している。南流する流路を斉田竹之内遺跡1a区内でほぼ直角に屈曲、本遺跡内では西から東方向へと変えている。本遺跡より下流については判然としないものの、再度南方向に屈

II 発掘調査の記録



- | | | | |
|------|---------------------------------|---------|-------------------------------|
| A—A' | | 20 礫層 | 最大、直径20cmの円礫が密に混入。粗砂混入。 |
| 1 | 灰褐色土 耕作土。 | 21 礫層 | 最大、直径30cmの円礫。 |
| 2 | 灰褐色土 | 22 礫層 | 最大、直径20cmの円礫。斑鉄顕著に見られる。 |
| 3 | 灰褐色土 | 23 砂層 | 細砂。 |
| 4 | 灰褐色土 粗砂主体。 | 24 砂層 | 粗砂。 |
| 5 | 灰褐色土 | 25 砂層 | 細砂。 |
| 6 | 灰褐色土 | 26 砂層 | 細砂。 |
| 7 | 灰褐色土 粗砂多い。 | 27 礫層 | 最大、直径15cmの円礫。粗砂はない。斑鉄顕著に見られる。 |
| 8 | 灰褐色土 斑鉄多く見られる。粗砂多く、しまり欠く。 | 28 礫層 | 最大、直径20cmの円礫。粗砂はない。斑鉄多く見られる。 |
| 9 | 灰褐色土 | 29 細砂層 | |
| 10 | 黒褐色土 | 30 砂層 | 細砂。黒ボク土の粘性を有する土層。 |
| 11 | 灰黄褐色土 粗砂・微細砂がラミナ状に堆積（7枚以上）。 | 31 砂層 | 中砂。上面、細砂（ラミナ状）。 |
| 12 | 灰黄褐色土 粗砂・中砂がラミナ状に堆積（4枚以上）。 | 32 砂層 | 直径2～15cmの円礫混じりの中砂。 |
| 13 | 砂質土 | 33 砂層 | 黒ボク土、微細砂。 |
| 14 | 細砂と黒ボク土の混土層 細砂主体。黒ボク土を混入（3枚以上）。 | 34 砂層 | 細砂。直径2～15cm程度の円礫混入。 |
| 15 | 細砂と黒ボク土の混土層 | 35 褐色土 | 黒ボク土状の粘性を有する土粒混入。細砂の混入が多い。 |
| 16 | 砂質土 不揃いなラミナ状に堆積。斑鉄やや多く見られる。 | 36 灰褐色土 | |
| 17 | シルト質土 不均等な斑鉄が見られる。 | 37 黒ボク土 | |
| 18 | シルト質土 最大、直径20cmの円礫混入。 | | |
| 19 | 灰褐色土 | | |

第79図 3区用水路



第80図 3区用水路出土遺物

II 発掘調査の記録

曲し、主要地方道藤岡・大胡線の路面下を南流している可能性が高い。

本用水路が人口河川であることの根拠については、伊勢屋ふじ子氏により、底面が平坦であること、壁面の傾斜角が48°と、自然河川にみられる傾斜角30°を上回っている点などを指摘されたことによる。

掘削時期については、下層の調査により、3区第7面で検出した浅間B軽石の1次堆積層により埋没した水田の南北方向の畦や、南北方向に走行する11号溝が、本用水路の流路により、切断・削平されていることが判明した。このことから、用水路の掘削は浅間B軽石の降下以降、すなわち、1108(天仁元)年以降であることが明らかとなった。

なお、第7面水田、あるいは4区11号溝との重複関係を見る限り、浅間B軽石降下時には、本用水路の前身となるような溝などの遺構が存在しなかった地点に、新たに大用水路が掘削されたものであることがうかがえる。

さらに、第5面で検出した1号屋敷では、北辺を区画する3区8号溝から延びた3区7号溝を経て、区画溝内に滞水した湧水・雨水などを用水路に向かって排水していたことが推測された。用水路の掘削と1号屋敷の形成時期の時間的な関係については、十分な検討が必要であるが、3区7号溝の存在からは、一時的であっても同時存在していた可能性が高く、その掘削時期の確定に、1号屋敷の形成時期が参考となるところである。本用水路の存続期間についても判然としない部分であるが、浅間A軽石の降下、泥流の発生時には、帯状の低位部としてその痕跡は残るものの、流路の大半は埋没していたと考えられる。

1877(明治9)年作成の耕地図、あるいは圃場整備事業前作成の航空写真や地図を見ると、この低位部に、東西方向の幅2mほどの用水路があったことが確認できる。後世の土地利用に少なからず影響をおよぼしていたものと考えられる。本用水路の掘削年代は、中世の所産と考えられる。

6 第4面の調査

(1) 概要

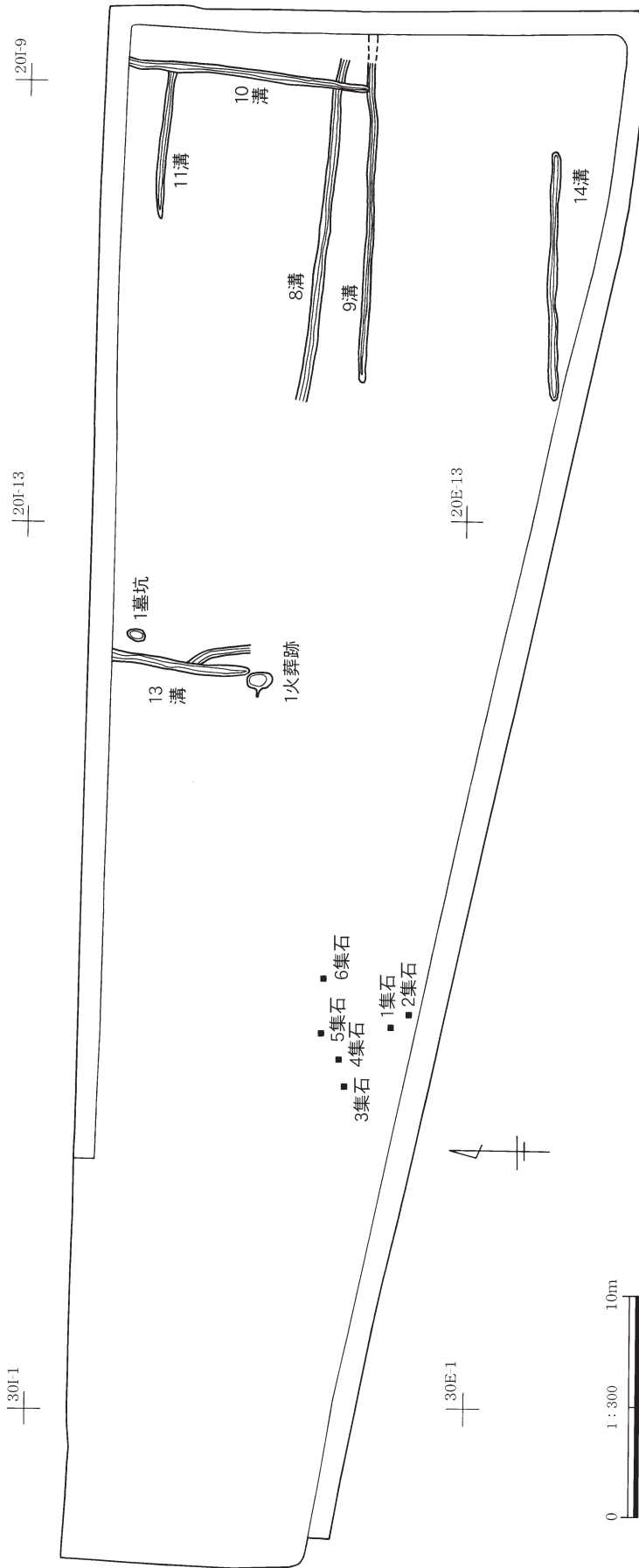
本項で報告する遺構は、4区調査時に遺構確認面の第3面に帰属する遺構として、1号・2号屋敷を構成していた掘立柱建物や、土坑・ピットなどの諸遺構と合わせて検出、記録作業を行ったものである。その後、整理作業時に1号・2号屋敷に帰属する遺構の抽出を行い、屋敷に帰属しない可能性の高い遺構としたものについて、今回報告の第5面から分離し、新たに第4面の遺構として報告した。そのため、遺跡全体の中で、第4面の遺構が存在するのは4区だけとなっている。

検出した遺構は、溝6条、墓坑1基、火葬跡1基、集石6基である。溝は2つの屋敷を構成する溝や、その他の遺構と重複関係にあるものを本項の扱いとした。

検出された6条の溝の中で、13号溝を除く5条は、第5面の2号屋敷内にあたる範囲から検出され、いずれも直線を指向し、東西方向に走行を有する14号・9号・11号溝は、ほぼ平行関係にある。8号溝は9号溝との間隔が、その東端で約1.3mであったものが、9号溝西端では約8.6mと広がるものの、ほぼ平行関係にあると言えよう。南北方向の10号溝は、8号・9号・11号溝と直交方向に走行をとり、第5面で検出された5号・7号溝と平行するように掘削されている。

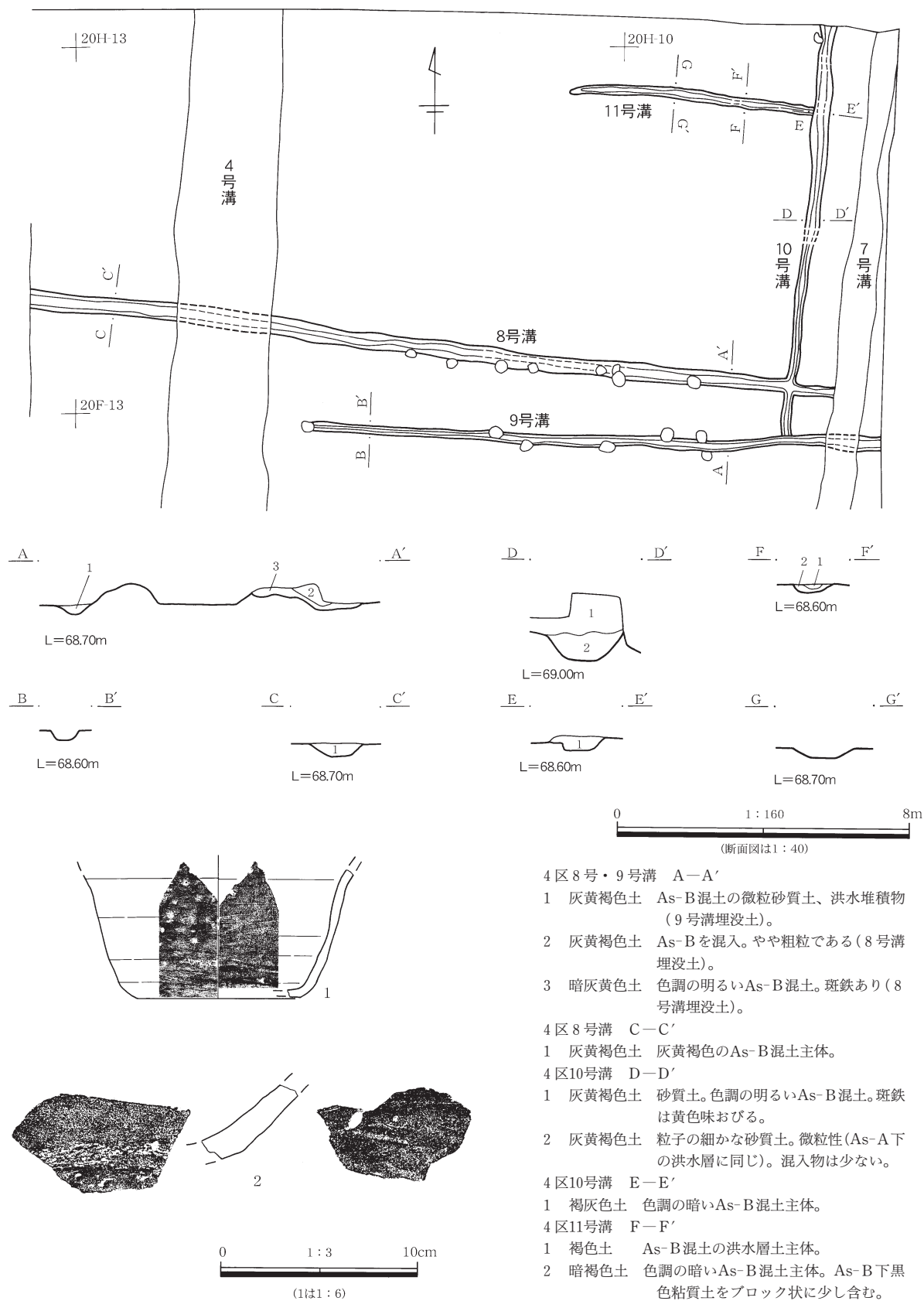
墓坑・火葬跡は、その検出位置が、日常の居住空間と考えられる1号屋敷内にあったことから分離した。

集石については、1号屋敷内の20F-17グリッド周辺にまとまりをもって6基検出された遺構である。調査当初は、掘立柱建物の礎石としての可能性を考えて、記録の収集に努めたところである。その他のピット群を調査していくと、埋没土が浅間B軽石混じりの褐灰色土であるのに対し、集石の覆土は、浅間B軽石混土層上の褐色洪水堆積土であること、これらの集石を含む形で、掘立柱建物が復元される



第81図 4区第4面の遺構

II 発掘調査の記録



第82図 4区8号～11号溝と8号溝出土遺物

にいたらなかったことから、第5面のピット群から分離し、第4面の遺構として報告するものである。

以上のような第4面における溝の走行からは、屋敷廃絶後もその区画溝が、その後の土地利用の区画に、影響をおよぼしていたことがうかがえる。

(2) 溝

4区8号溝 (第82図 PL22)

位置 20F-8~13G

重複 4号・5号・7号溝に後出する。10号溝との関係は不明である。

形状 東西方向に直線的に走行する溝である。西端は5号溝と重複する20F-13グリッドにあり、5号溝より以西には延びていない。東端は7号溝と重複する20F-8グリッドである。東端も7号溝以东では検出されていない。走長は22.24mである。途中、4号溝との重複部分では両遺構を同時に調査したため、不明部分がある。

断面形は逆台形状を呈する。規模は、上幅0.25~0.52m、下幅0.08~0.29m、深さ0.01~0.13mを測る。底面の標高は、東端で68.30m、西端で68.36mである。両端における標高差は0.06mである。

埋没土 灰黄褐色土、褐灰色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。

遺物 埋没土中から軟質陶器内耳鍋(1・2)を出土しているが、混入品の可能性も考えられる(観P182)。

所見 区画溝であったのか。詳細な掘削時期は不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

4区9号溝 (第82図 PL22)

位置 20E-8~11G

重複 7号溝、ピット群と重複、これに後出する。10号溝とも重複する。

形状 東西方向にほぼ直線的に走行する溝である。西端は20E-11グリッド、4号溝の手前1.05mで終わっている。東端は7号溝と交差した後20E-8グリッドで調査区域外に延びている。走長15.63mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。規模は上幅0.18~0.33m、下幅0.07~0.16m、残存高0.

02~0.19mを測る。底面の標高は東端で68.16m、西端で68.44mである。両端における標高差は0.28mである。

方位 N-92°-E

埋没土 浅間B軽石を含む褐灰色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。掘り込みは確認面の浅間B軽石混土層を掘り抜き、青灰色のHr-FP泥流層にまで達していた。

所見 区画溝の可能性が考えられる。出土遺物もなく、詳細な掘削年代は不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

4区10号溝 (第82図 PL22)

位置 20E-9、F・G-9・10、H-8G

重複 8号・9号・11号溝と重複、11号溝に後出か。

形状 南北方向に走行、ほぼ直線的に延びる。北端は調査区域外に延びているが、3区では検出されていない。南端は9号溝に接するがそこで途切れ、それより南側には延びていない。走長11.43mを検出した。断面形は皿状を呈する。規模は上幅0.45~0.23m、下幅0.20~0.05m、残存高0.03~0.12mを測る。底面の標高は南端で68.34m、北端で68.31mである。両端における標高差は0.03mである。

方位 N-7°-E

埋没土 褐灰色土、灰黄褐色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。

所見 区画溝の可能性が考えられる。出土遺物もなく、詳細な掘削年代は不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

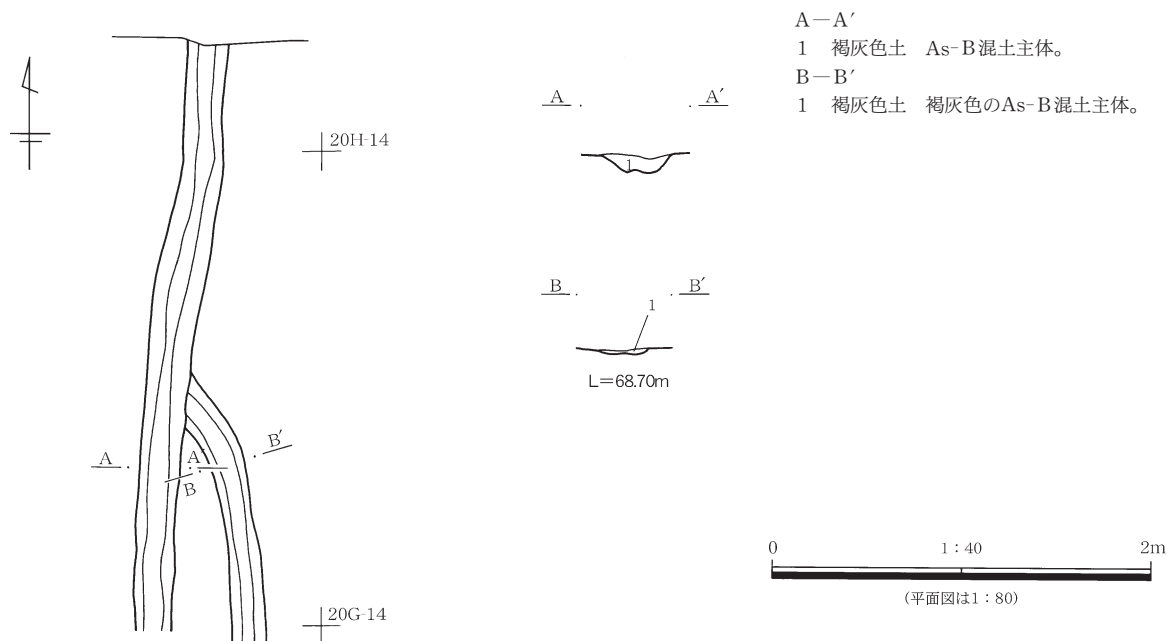
4区11号溝 (第82図 PL22)

位置 20G-8~10G

重複 10号溝と重複、これに先出するか。

形状 東西方向の走行を有する。走長は6.73mと短い。断面形は浅い凸レンズ状である。規模は、上幅0.19~0.34m、下幅0.06~0.13m、残存高0.01~0.06mを測る。底面の標高は東端で68.36m、西端で68.40mである。両端における標高差は0.04mである。

II 発掘調査の記録



第83図 4区13号溝

方位 N-97°-E

埋没土 洪水堆積層である褐色土、暗褐色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。掘り込みは浅く、浅間B軽石混土層中で終わっている。

所見 区画溝の可能性が考えられる。出土遺物がなく、詳細な掘削年代は不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

4区13号溝 (第83図 PL22)

位置 20G・H-14G (13-1号溝)

20F・G-14G (13-2号溝)

重複 13-1号溝は1号墓坑と重複、これに先出する。

形状 南北方向に走行を有する溝である。20G-14グリッドの基点から北へ3m、西へ1mの地点で2本に分岐している。調査時にこの2本とも13号溝と理解されていたことを踏襲し、20H-14グリッドの調査区北壁に北端を有し、ここから南方向にほぼ直線的に延びる部分を13-1号溝と、東側に分岐、弧状に延びる部分を13-2号溝と呼称し報告する。

13-1号溝は走長6.17mを検出した。断面形は浅い皿状を呈する。規模は上幅0.34~0.52m、下幅0.09~0.21m、残存高0.05~0.14mを測る。底面の標

高は南端で68.33m、北端で68.42mである。両端における標高差は0.09mである。南端は途中で途切れている。

13-2号溝も南北方向の溝である。走長2.83mを検出した。断面形は13-1号溝よりさらに浅い皿状を呈する。規模は上幅0.29~0.37m、下幅0.14~0.21m、残存高0.02~0.07mを測る。底面の標高は南端で68.38m、北端で68.38mである。両端における標高差はなかった。南端は途切れている。

方位 N-10°-E (13-1号溝)

N-156°-E (13-2号溝)

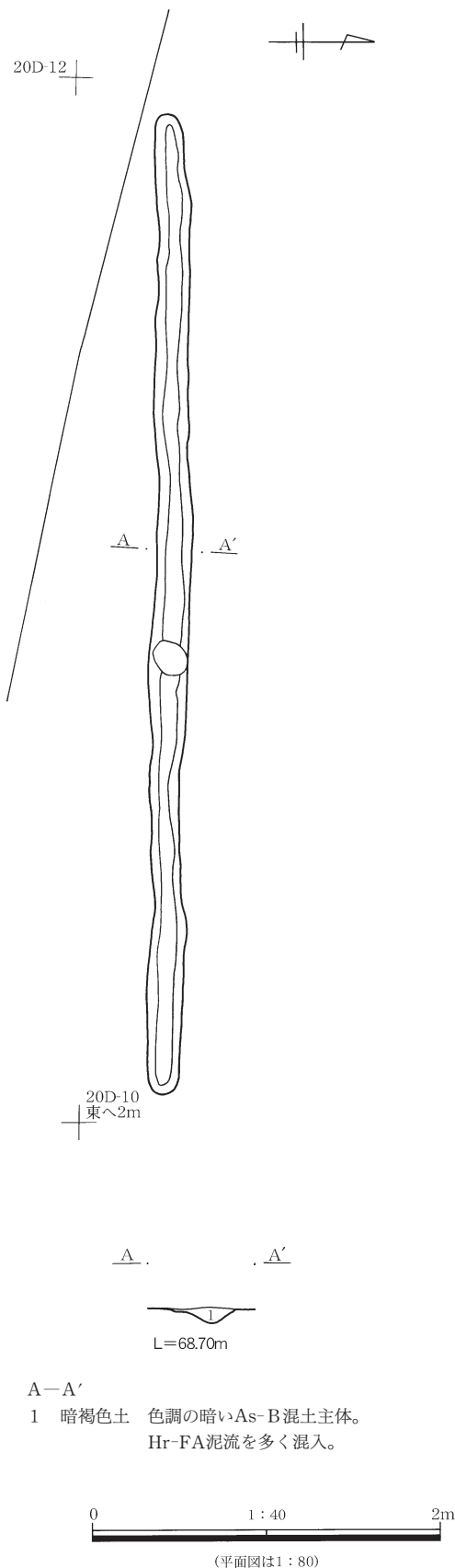
埋没土 褐色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。掘り込みは、確認面の浅間B軽石混土層を掘り抜き、Hr-FP泥流に達していた。

所見 性格は不明であるが区画溝であろうか。出土遺物もなく、詳細な掘削年代も不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

4区14号溝 (第84図 PL22)

位置 20D-9~11G

形状 東西方向に直線的に走行する。走長11.29mを検出したが、さらに両側に延びる可能性がある。断面形は凸レンズ状を呈する。規模は、上幅0.43~0.



第84図 4区14号溝

26m、下幅0.12~0.22m、残存高0.01~0.11mを測る。底面の標高は東端で68.31m、西端で68.44mである。両端における標高差は0.13mである。

方位 N-93°-E

埋没土 浅間B軽石を含む暗褐色土が堆積していた。流水の有無は確認できない。掘り込みは、浅間B軽石下の黒色粘質土層に達していた。

所見 区画溝であろうか。出土遺物もなく、詳細な掘削年代は不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

(3) 墓坑

4区1号墓坑 (第85図 PL35)

位置 20G・H-13・14G

形状 平面形は長円形を呈する。規模は長径0.78m、短径0.55m、深さ0.13mを測る。壁面は上方に向かってやや開いている。浅間B軽石層の黒色土層を掘り込み、底面はHr-FP泥流層に達していた。

方位 N-12°30'-E

埋没土 暗褐色土が堆積していた。焼土・炭化物の混入は見られなかった。

遺物 埋没土中、北側寄りから人歯20本が集中して、南東寄りから古銭6枚が出土した(観P182)。

所見 推定4才とされる人歯がまとまって出土したことから墓坑と考えられる。埋没土中に焼土・炭化物が見られないことから、遺体を北頭位で直葬したものであろう。古銭の出土状況については、調査時の所見として、遺体に布袋等を持たせ、その中に銭を納めたものという考え方が示されている。本遺構の詳細な掘削年代は不明であるが、出土銭に寛永通寶が含まれていないことから、中世の所産と考えられる。なお、出土人歯については、IIIにその分析結果を報告した。

(4) 火葬跡

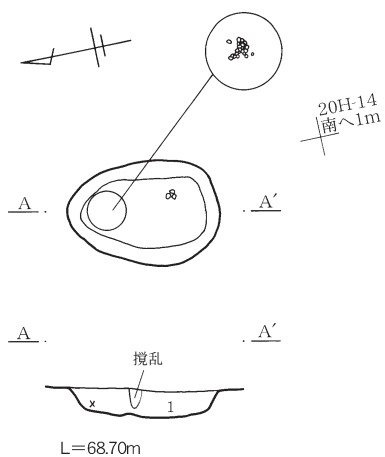
4区1号火葬跡 (第86・87図 PL23・35・36)

位置 20F-14G

重複 13号溝と重複、これに後出する。

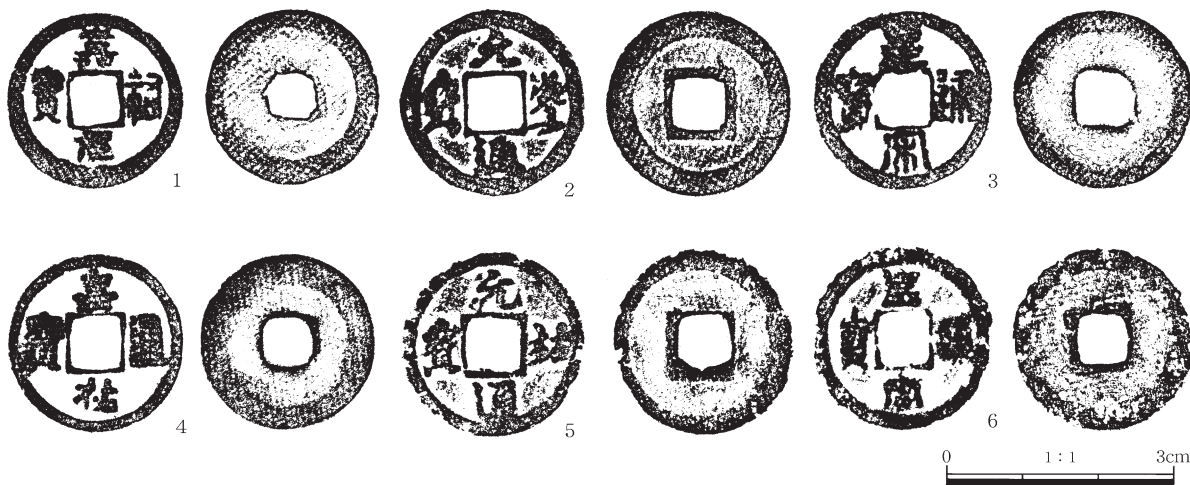
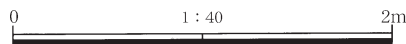
形状 調査時は4区2号墓坑と呼称していた。平面形は南北に長軸を有する隅丸長方形の本体と、そ

II 発掘調査の記録

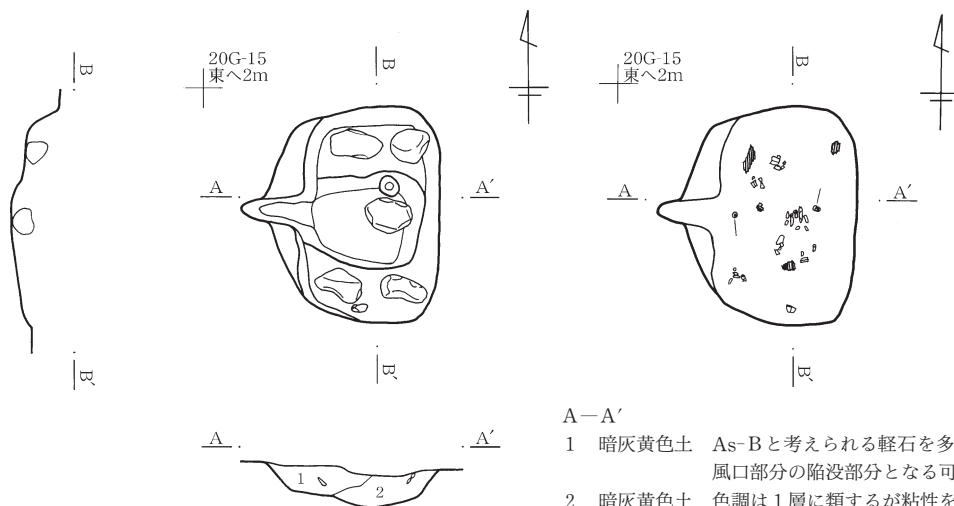


A-A'

1 暗灰黄色土 粒子の細かな洪水砂粒主体。Hr-FA泥流の小ブロック・炭化物細片・As-Bと考えられる軽石を不均等に含む。斑鉄は赤色味おびる。ややしまり欠く。

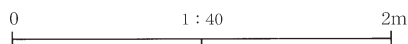


第85図 4区1号墓坑と出土遺物



A-A'

1 暗灰黄色土 As-Bと考えられる軽石を多量に含む砂質。送風口部分の陥没部分となる可能性もある。
2 暗灰黄色土 色調は1層に類するが粘性を有する、黒色土・Hr-FP泥流の小ブロックを1層よりやや多く含む。炭化物粒はない。焼土・骨片散見。



第86図 4区1号火葬跡

の西辺中央部分から西方向に直角に突出する送風口からなる。本体の規模は、長軸1.13m、短軸0.72m、深さ0.09～0.25mを測る。送風口の長さは0.37mである。本体底面は、四周に比して、中央部分が一段低く掘り込まれていた。また、底面には長軸0.18～0.28mの礫5個が、短辺寄りに2個ずつ、中央部分に1個配されていた。これらの礫は被熱赤変色していた。火葬の際、遺体あるいは棺を支えるために、設置されたものと考えられる。

方位 N-1°-E

埋没土 暗灰黄色土が堆積、焼土・骨片が散見される。

遺物 本体の中央部分の広範囲から骨片が、壁面近くから炭化物が出土した。これらとともに古銭4枚が出土している。銭種は、開元通寶・熙寧通寶・淳熙元寶である。開元通寶は火熱により変形していた(観P182)。

所見 本遺構は、埋没土中から焼土・炭化物とともに多数の人骨が出土したこと、その形状から遺体を焼却した火葬跡と考えられる。詳細な掘削年代は不明であるが、出土銭に寛永通寶が含まれないことから、中世の所産と考えられる。なお、出土人骨については、IIIにその分析結果を報告した。

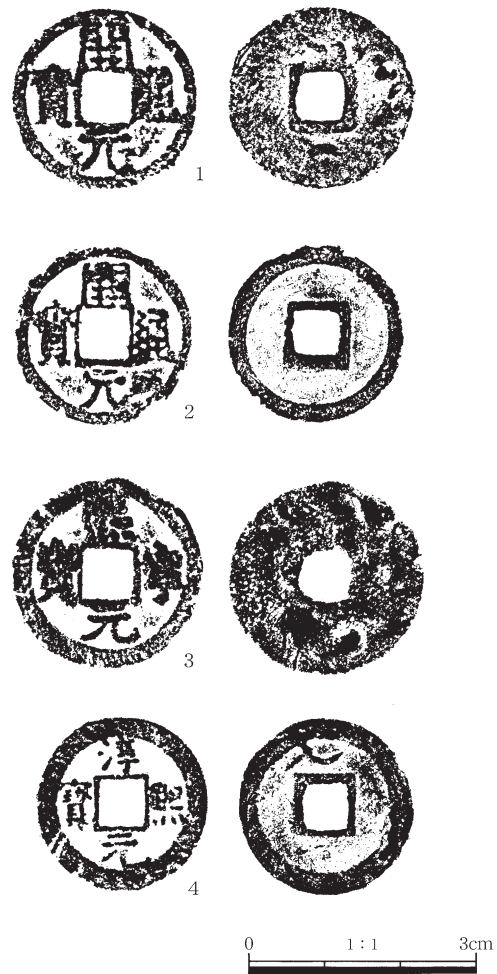
(5) 集石

4区1号集石 (第88図 PL23・35)

位置 20E-17G

形状 先に集石全体の概要を述べると、20E～G-17、20F-18グリッド内の南北約10m、東西約6mの範囲内に、直径0.10～0.30mの礫が散布していた。複数の礫が集中して検出された部分には集石の名称を付し、1～6号の遺構名を付して呼称した。20G-17グリッドでは、礫が単独で出土する状況も見られ、これに少量の土器が伴っていた。また、同じ20G-17グリッド内では、4号集石から北側方向、約2.30mの地点からは鉄製碗を検出した。集石をはじめ他遺構との関連性については不明である。

1号集石は、20E-17グリッドの基点から北に3.00m、西に2.00mのところを位置し、南東方向に2



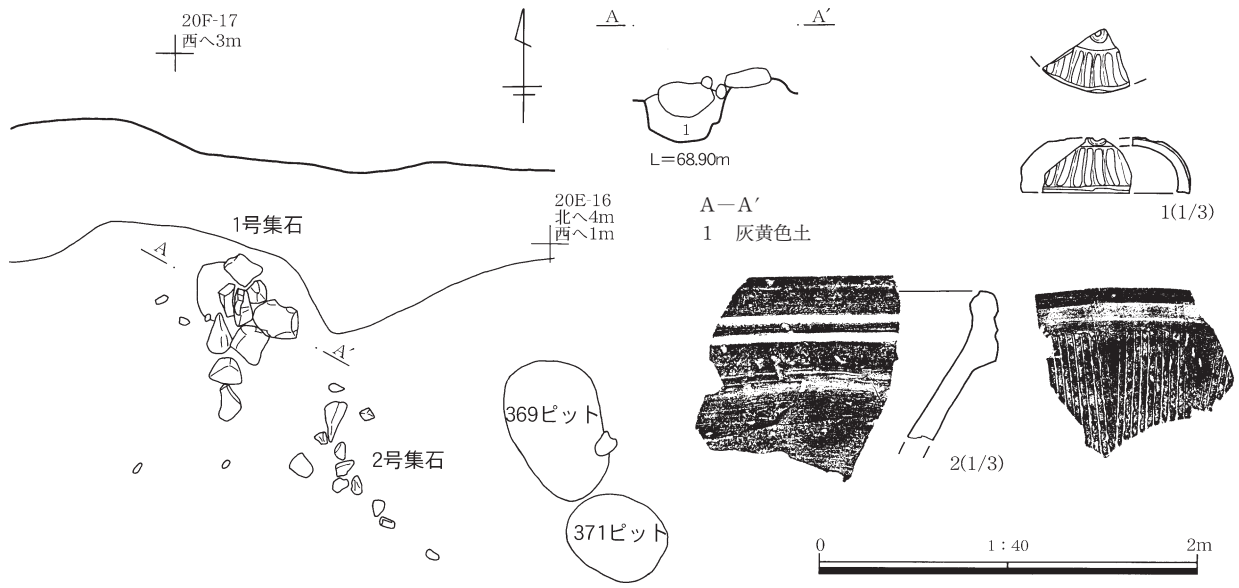
第87図 4区1号火葬跡出土遺物

号集石が接している。集石は10石からなる。北端の直径0.30mの扁平な円礫は、その下位に深さ0.22mのピット状の掘り方を有していた。この円礫と一部重なりながら、南側に礫9石が並んで検出された。埋没土 浅間B軽石の混土層上面において検出された。覆土は褐色の洪水層である。この状況は1号～6号までの6基に共通した状況である。

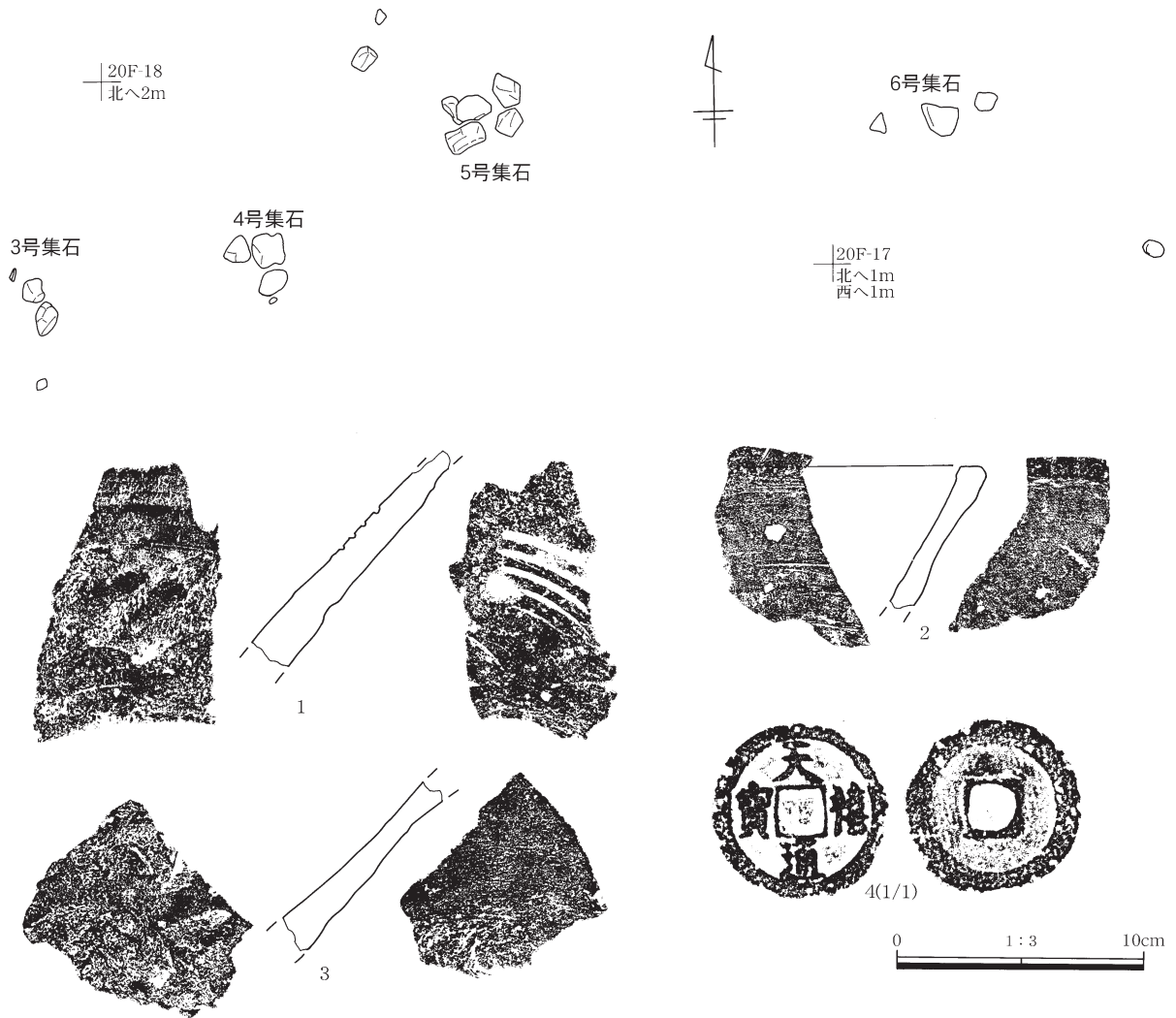
遺物 精査時に磁器蓋(1)が出土している。近接して陶器搗鉢の破片(2)が出土している。また、注記に4区集石部とある軟質陶器搗鉢(1～3)、古銭(4)がある。1号～6号集石のいずれかに近接して出土したものと考えられる(観P183)。

所見 性格は不明である。調査当初は、5面で検出された屋敷内の掘立柱建物の柱の礎石と考えたが、結果的には特段の規則性が見られなかった。上

II 発掘調査の記録



第88図 4区1号・2号集石と1号集石出土遺物



第89図 4区3号～6号集石と集石部出土遺物

下の堆積土の状況から、中世から近世の所産と考えられる。このことは1号～6号まで共通に認められることである。

4区2号集石 (第88図 PL23)

位置 20E-17G

形状 20E-17グリッドの基点から北へ2.00m、西へ1.20mのところに位置し、北西方向に1号集石がある。長軸0.20mの礫1石の他は、長軸0.08～0.13mの小振りの礫が、列状に11石出土している。

4区3号集石 (第89図 PL23)

位置 20F-18G

形状 20F-18グリッドの基点から北へ0.80m、西へ0.30mに位置する。長軸0.15m前後の礫2石が出土した。東方向1.30mに4号集石がある。

4区4号集石 (第89図 PL23)

位置 20F-17G

形状 20F-17グリッドの基点から北へ1.00m、西へ4.00mのところに位置する。長軸0.20m前後の礫3石が集中していた。西方向に3号集石が、北東方向1.4mに5号集石がある。

4区5号集石 (第89図 PL23)

位置 20F-17G

形状 20F-17グリッドの基点から北へ1.00m、西へ1.20mのところに位置する。長軸0.15～0.20mの礫5石が集中して出土している。南西方向に4号集石が、東方向2.50mに6号集石がある。

4区6号集石 (第89図 PL23)

位置 20F-17G

形状 20F-17グリッドの基点から北へ1.00mのところに位置する。長軸0.15mの礫1石、長軸0.10mの礫2石が出土している。西方向に5号集石がある。

7 第3面の調査

(1) 概要

この面は調査時の第2面にあたる。洪水で運ばれた砂質の堆積土で埋没した水田、畠、溝が検出された。洪水堆積土層は、数次にわたる堆積状況が観察

された。

出土遺物がほとんどなく、この面の時期決定は極めて困難であるが、室町時代から江戸時代初頭の面と考えられる。

2a区では浅間B軽石下水田の精査時に、この面を掘り込む東西方向の溝2条を検出した。また、面的な確認はできなかったものの、調査区壁面部分の土層断面において、浅間B軽石降下以降、第3面までの間に作られた畠耕作痕2条を確認した。耕作痕はサク状を呈すると考えられ、その幅は0.20mを測る。浅間B軽石を含む灰黄褐色土で埋没していた。

2b区でも2a区と同様、浅間B軽石下水田面精査時に溝2条を検出した。

3区では畠と溝1条が検出された。畠は第5面で検出した用水路の旧流路より北側部分で、サク状の溝群が検出された。サクは東側部分では東西方向であるが、中央から西側寄りでは南北方向となっており、走行の相違が畠の区画の相違に当たると考えられる。

4区では水田と畠を検出した。水田の調査区南東部分で、20F-11グリッドを屈曲部とするL字状の段差が確認され、この内側が耕作面となっていたと考えられる。また、この地点とは反対の調査区西端においては、第5面の時期に掘削された6号溝の埋没痕を利用したと考えられる水田面を検出した。

畠は第5面調査時に、浅間B軽石混土面に上層から掘り込まれたサク状の耕作痕が、小範囲に検出されている。

(2) 水田

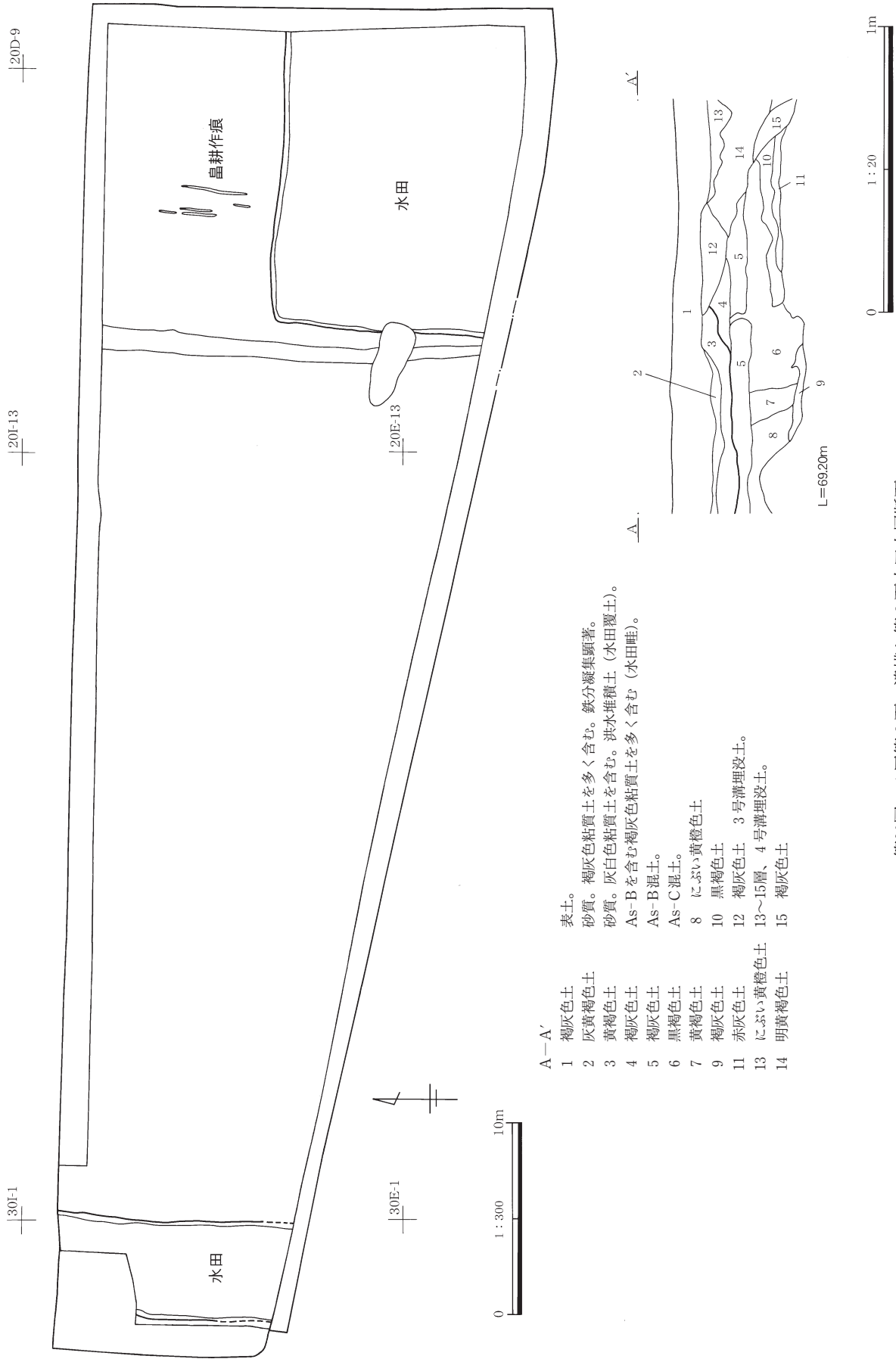
4区 水田 (第90図 PL24)

位置 20C～F-8～11G(南東部分)

30F・G-1・2、H-1G(西端部分)

形状 調査区の2箇所水田区画が検出された。

1箇所は調査区南東部分である。畦畔は後世の耕作等により削平され残存していなかったが、水田面へ移行するわずかな段差が検出された。段差の北辺の長さは15.08m、その方向はN-92°-E、西辺の長さは11.24m、その方向はN-4°30'-Eであった。検



第90図 4区第3面の遺構と第3面水田土層断面

出面積は188㎡である。水田面はほぼ平坦であった。

もう1箇所は調査区西端、第5面で検出した6号溝が埋没する過程で、後世に残した帯状のくぼみを利用して造成されていた。ここも畦畔の高まりは残存せず、南北方向に延びる2辺の段差が確認された。西側が低くなる東辺は長さ12.10mで、段差は0.05～0.11mであった。東側が低くなる西辺は長さ7.02mを検出、段差は0.04～0.13mであった。検出面積は44㎡である。水田面はほぼ平坦であった。

埋没土 南東部分、西端部分ともに砂質で、灰白色粘質土を含む黄褐色土により被覆されている。この土層は、洪水により堆積していたものと考えられる。南東部分の水田耕土は、浅間B軽石を多く含むにぶい黄褐色土である。

所見 出土遺物がなく、詳細な耕作時期は不明である。上下の堆積土の状況から、中世の所産と考えられる。

(3) 畠

3区 畠 (第91～94図 第23表 PL24)

位置 調査区北側部分

20N-9G(東端)、20Q-17G(西北端)

形状 第3面の概要でも記したように、第3面の調査を実施した際、調査区の中央部分は、第5面の時期に掘削された用水路の流路が完全に埋没しておらず、まだ地表面に帯状のくぼみ低位部が残された状態であった。本項で報告する畠は、この用水路の旧流路の北側部分で東西方向に長く検出された。グリッドの基線に則した場合の東西両端の間は、直線距離で約41.0m、南北は長さ約15.5mを測る。面積は約250.3㎡であった。

なお、用水路の旧流路中や、その南側部分においては、畠に関わる遺構は検出されなかった。

今回調査を行った畠は、サク(畝と畝との間に掘られた溝)の検出により、その存在が確認された。畝の上半部(作付面)の状況は全く残されていなかった。これはその後の洪水や、耕作の影響によるものと考えられるが、その要因を断定することは困難であ

る。

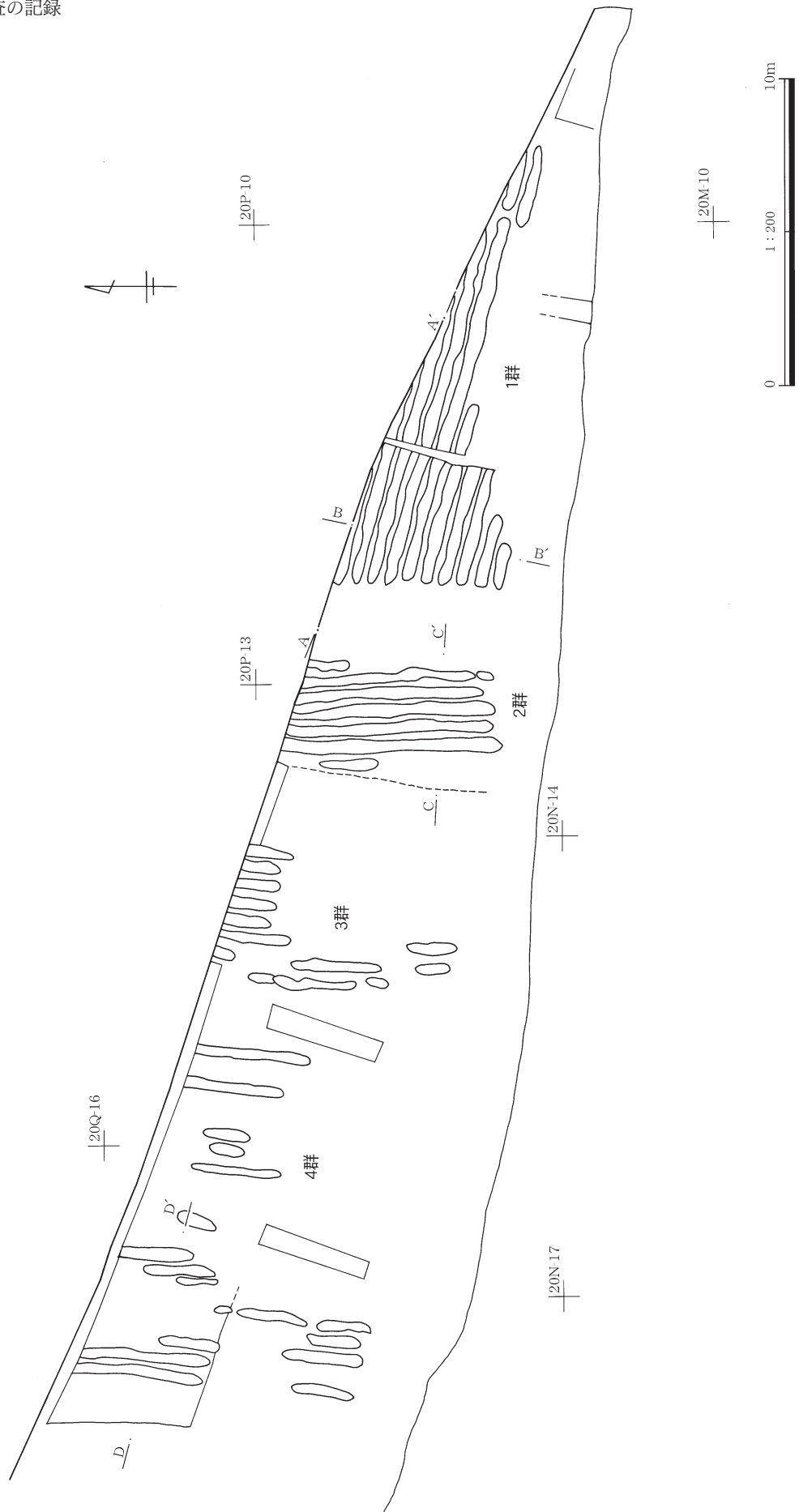
検出された畝は、走行、畝幅(サクとサクの中心の距離)の相違から、4群以上に分けることが可能である。これは、作物の種類、耕作の時期の相違を現すとともに、土地利用の区画を現しているものと考えられる。いずれもサクが調査区域外におよぶことから、検出範囲は部分的で、全容を調査するまでにはいたらなかった。

1群は調査区東側寄りの一群である。東西方向のサク10条を検出した。北側は調査区域外におよんでいる。検出面積は約40.2㎡である。10条のサクの規模は、残存長14.69～1.48m、最大上幅0.39～0.52m、深さ0.15～0.05mである。北側から5条目のサクは、一部途切れる部分を含め、長さ14.66m、上幅0.52～0.38m、深さ0.13～0.04mを測る。その走行はN-75°-Eである。畝幅(サクタテ)は、北側の2条目から10条目までの9本の畝幅の距離である4.48mを8で除すと、0.56mとなる。

2群は1群の西側に位置する一群である。東端は20N・O-12グリッドにある。南北方向のサク7条を検出した。北側は調査区域外におよんでいる。検出面積は約22.1㎡である。調査の上では、1群との間に約2.5mの空白地帯がある。これは地割りの境界、あるいは道路状遺構の存在と想定される。

7条のサクの規模は、全体的に見ると長さ7.20～1.38m、最大上幅0.45～0.30m、深さ0.11～0.02mである。西側から2条目のサクは、長さ7.20m、上幅0.45～0.33m、深さ0.10～0.05mを測る。走行はN-0°-Eである。畝幅は、東側から1条目を除いた、2条目から7条目までの6本の畝幅の距離である3.24mを5で除した0.64mである。

3群は2群の西側に位置する一群である。東端は20O-14グリッドにある。南北方向のサク8条を検出した。北側は調査区域外におよんでいる。調査面積は約18.3㎡である。調査の上では、2群との間に約2.4mの空白地帯がある。8条のサクの規模は、全体的に見ると長さ7.80～1.26m、最大上幅0.45～0.35m、深さ0.015～0.115mである。東側の5条は、



第91図 3区第3面の畠(1)

第23表 3区第3面畝計測値一覧

1群 単位：cm

No.	長さ	上 幅		下 幅		深 さ		間 隔	
		最大	最小	最大	最小	最深	最浅	サクの中心とサクの中心	サクの上端とサクの上端の間
1	4.10	—	—	—	—	11.0	2.0	50.0	15.0
2	6.40	42.0	22.0	30.0	10.0	9.0	3.0	53.0	9.0
3	9.75	47.0	30.0	30.0	17.0	8.0	1.0	57.0	15.0
4	12.00	47.0	29.0	31.0	11.0	10.0	3.5	54.0	21.0
5	14.66	52.0	38.0	37.0	11.0	12.5	4.0	60.0	17.0
6	14.69	47.0	30.0	33.0	22.0	14.5	2.5	62.0	22.0
7	4.05	50.0	36.0	38.0	23.0	10.5	6.0	54.0	15.0
8	3.94	46.0	25.0	26.0	13.0	12.5	1.0	57.0	21.0
9	2.38	39.0	33.0	25.0	16.0	5.0	3.0	52.0	15.0
10	1.48	41.0	35.0	28.0	24.0	8.0	4.0	—	—

3群 単位：cm

No.	長さ	上 幅		下 幅		深 さ		間 隔	
		最大	最小	最大	最小	最深	最浅	サクの中心とサクの中心	サクの上端とサクの上端の間
1	1.57	40.0	26.0	25.0	11.0	9.0	3.0	50.0	14.0
2	1.26	45.0	30.0	20.0	12.0	6.0	2.5	60.0	28.0
3	1.48	35.0	29.0	21.0	15.0	7.0	1.0	64.0	30.0
4	1.50	42.0	30.0	22.0	13.0	10.0	3.0	57.0	23.0
5	1.55	40.0	30.0	21.0	17.0	11.5	6.0	52.0	17.0
6	7.78	38.0	27.0	20.0	9.0	13.0	6.5	62.0	30.0
7	7.80	40.0	20.0	22.0	8.0	7.5	2.5	62.0	24.0
8	4.61	41.0	17.0	26.0	8.0	5.0	1.0	—	—

長さ1.50m前後の検出長である。走行は3条目がN-6°-E、4条目がN-8°-Eである。これらのサクは、南端以南が後世に削平されていることが考えられるが、これで終息していたとすると、6条目以西とは細分する必要が生ずる。6条目は緩やかな弧を描くとともに、途中が大きく途切れている。長さは7.78mを測る。畝幅は、東側から1条目から6条目までの6本の畝幅の距離である2.82mを5で除した0.56mである。

4群は3群以西で検出したサク18条(途切れたサクを1単位とすると14条)を一群とする。検出上のサクの走行や、畝幅に相違が見られることから、細分される可能性は高い。検出した範囲は東西11.56m、南北9.24mとなる。残存状況は不良である。サクの規模は、全体的に見ると長さ9.24~1.26m、最大上幅0.45~0.22m、深さ0.13~0.01mである。東側か

2群 単位：cm

No.	長さ	上 幅		下 幅		深 さ		間 隔	
		最大	最小	最大	最小	最深	最浅	サクの中心とサクの中心	サクの上端とサクの上端の間
1	1.38	30.0	21.0	22.0	13.0	5.5	3.0	50.0	23.0
2	6.35	45.0	26.0	35.0	13.0	6.5	2.0	43.0	13.0
3	6.20	40.0	27.0	24.0	10.0	10.0	3.0	63.0	27.0
4	6.70	43.0	21.0	23.0	5.0	11.0	3.0	59.0	19.0
5	6.80	44.0	32.0	22.0	14.0	10.0	5.0	54.0	11.0
6	7.20	45.0	33.0	28.0	12.0	10.0	5.0	53.0	20.0
7	1.96	36.0	26.0	17.0	12.0	5.0	3.0	—	—

4群 単位：cm

No.	長さ	上 幅		下 幅		深 さ		間 隔	
		最大	最小	最大	最小	最深	最浅	サクの中心とサクの中心	サクの上端とサクの上端の間
1	4.30	38.0	32.0	20.0	15.0	12.0	5.0	110.0	75.0
2	3.32	35.0	26.0	17.0	8.0	13.0	5.0	155.0	116.0
3	1.54	39.0	29.0	18.0	14.0	7.5	5.5	50.0	12.0
4	1.26	37.0	34.0	22.0	16.0	5.0	1.5	67.0	34.0
5	2.95	24.0	22.0	13.0	9.0	5.5	2.5	175.0	138.0
6	1.35	45.0	37.0	22.0	14.0	4.5	1.0	125.0	87.0
7	2.44	43.0	36.0	28.0	16.0	4.0	1.0	52.0	17.0
8	2.42	39.0	26.0	25.0	13.0	5.0	1.0	32.0	3.0
9	1.37	22.0	12.0	10.0	6.0	2.5	1.5	88.0	72.0
10	5.21	34.0	21.0	18.0	7.0	5.5	1.0	50.0	21.0
11	1.79	35.0	25.0	15.0	12.0	5.0	1.5	53.0	19.0
12	6.70	37.0	26.0	23.0	11.0	8.5	1.0	50.0	13.0
13	4.34	42.0	29.0	28.0	12.0	5.0	1.0	58.0	17.0
14	9.24	35.0	23.0	21.0	5.0	8.5	2.0	—	—

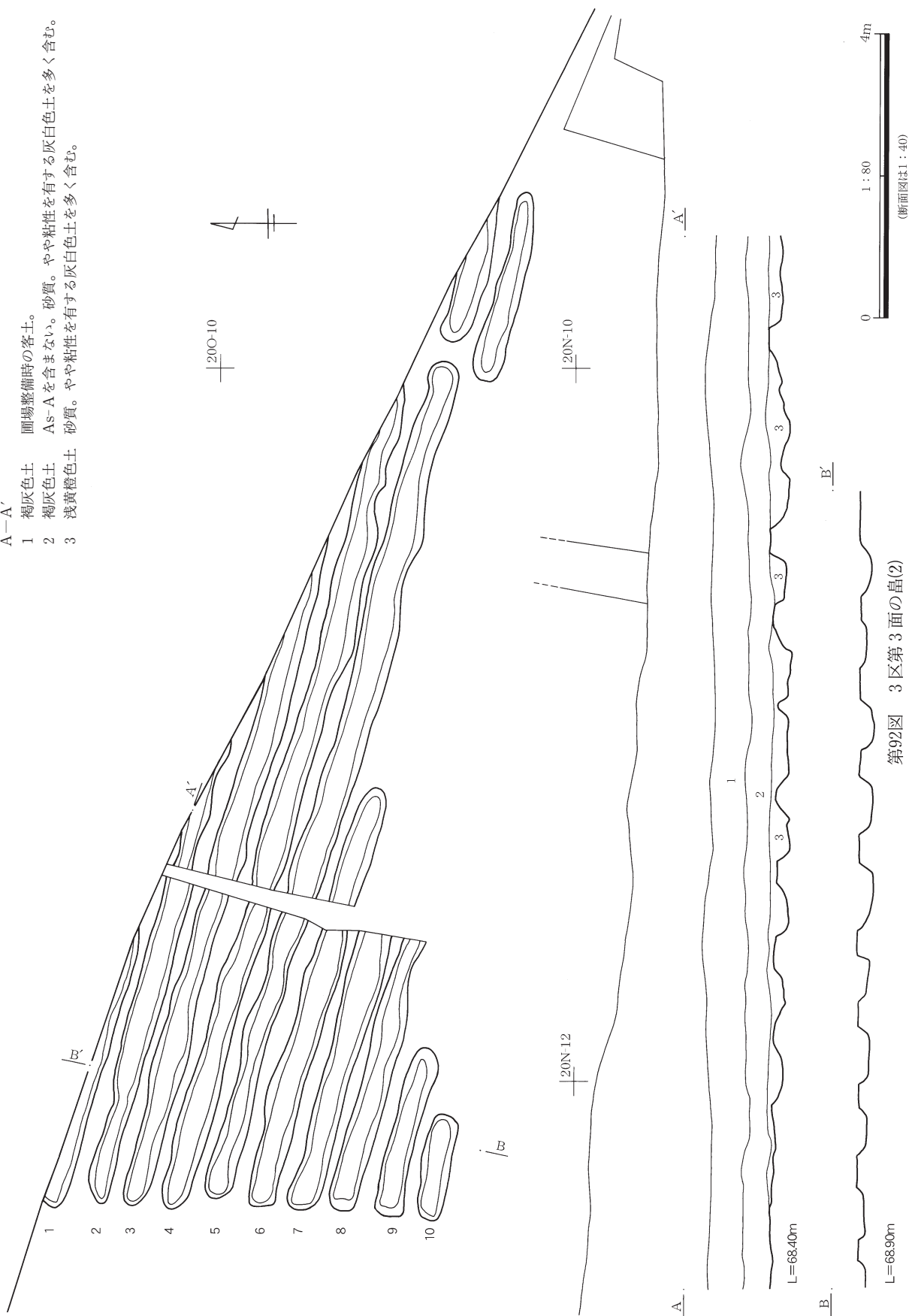
ら1条目は、長さ4.30mを測る。走行はN-4°-Eである。西側から1条目は途中が大きく途切れるが、南側のサクと1単位であるとすれば、長さ7.20mを測る。西側から2条の走行は、N-4°-Eである。

埋没土 これらの畝は、表土下約0.4mで検出された。浅黄橙色土を耕作面としている。この土層は洪水による堆積土で、砂質で、灰白色粘質土を多く含んでいた。層厚は0.05~0.10mである。ただし、東側1群周辺では、この浅黄橙色土の堆積が見られず、サクはこの層の下位に堆積していた浅間B軽石を多く含む褐色土を掘り込んでいた。また、これらの畝は、褐色土により全体が被覆されていた。

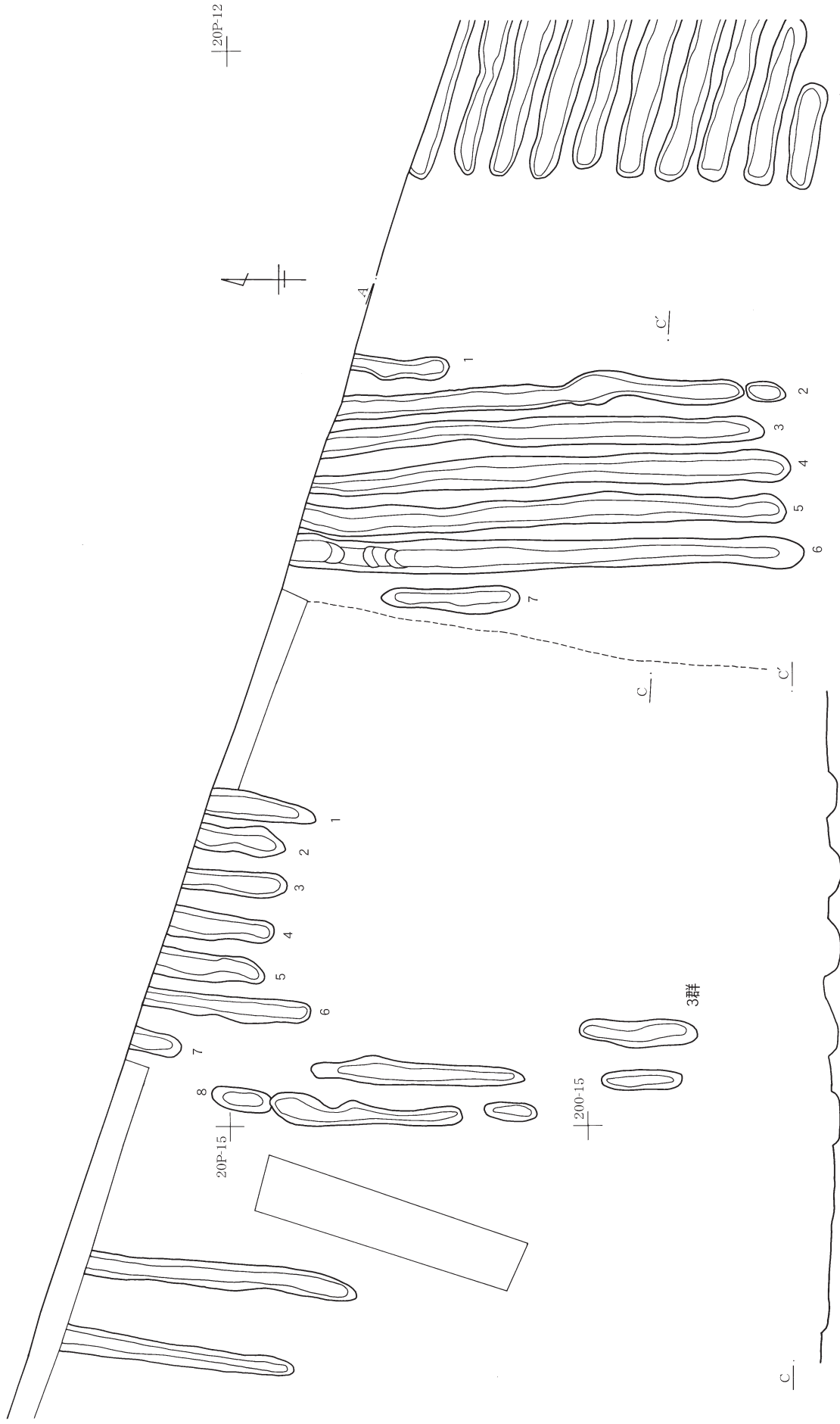
所見 栽培されていた作物については不明である。詳細な耕作の時期も不明であるが、中世から近世の所産と考えられる。

II 発掘調査の記録

- A-A' 圃場整備時の客土。
 1 褐灰色土 圃場整備時の客土。
 2 褐灰色土 AS-A を含まない。砂質。やや粘性を有する灰白色土を多く含む。
 3 浅黄橙色土 砂質。やや粘性を有する灰白色土を多く含む。



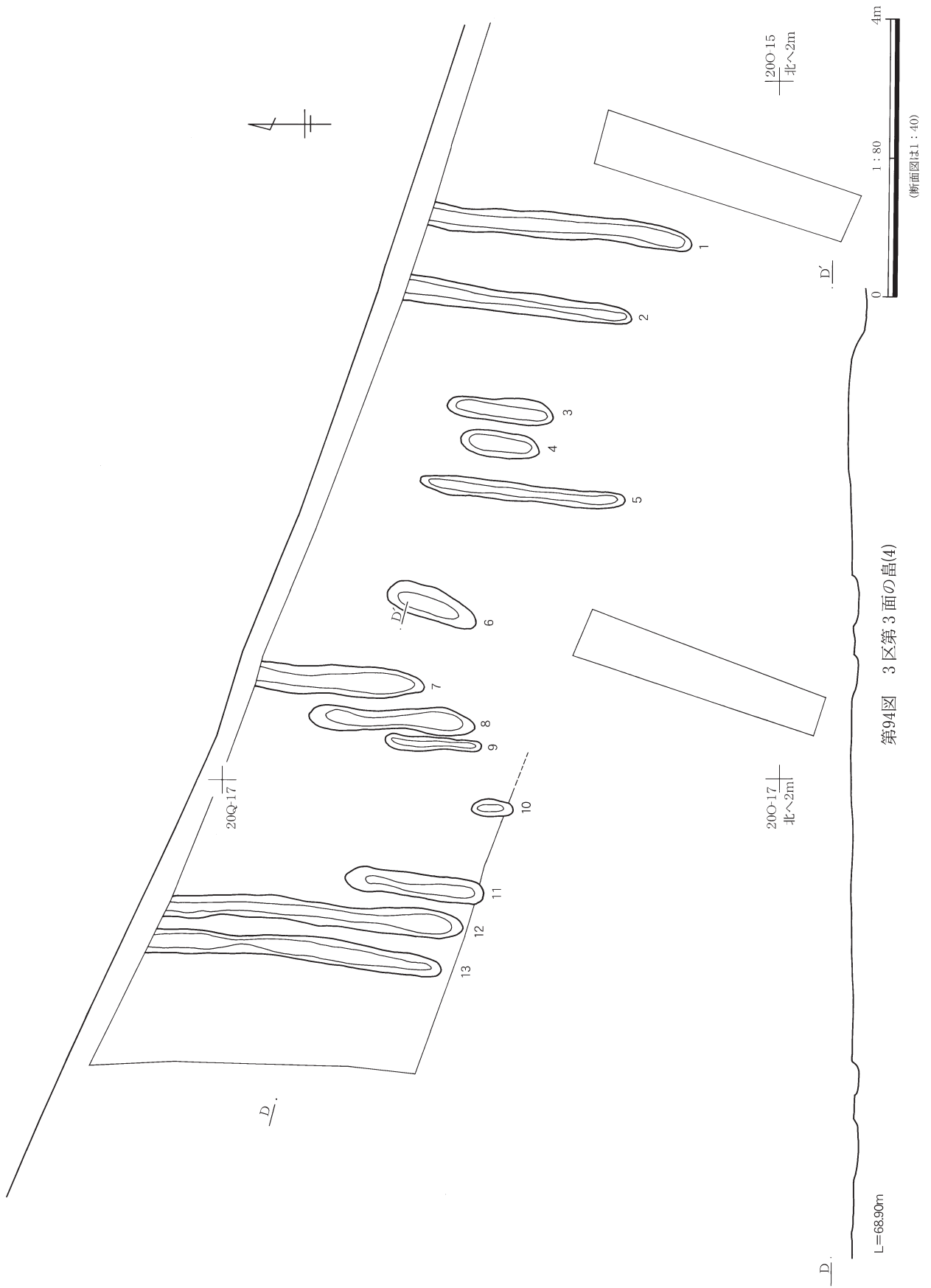
第92図 3区第3面の畝(2)



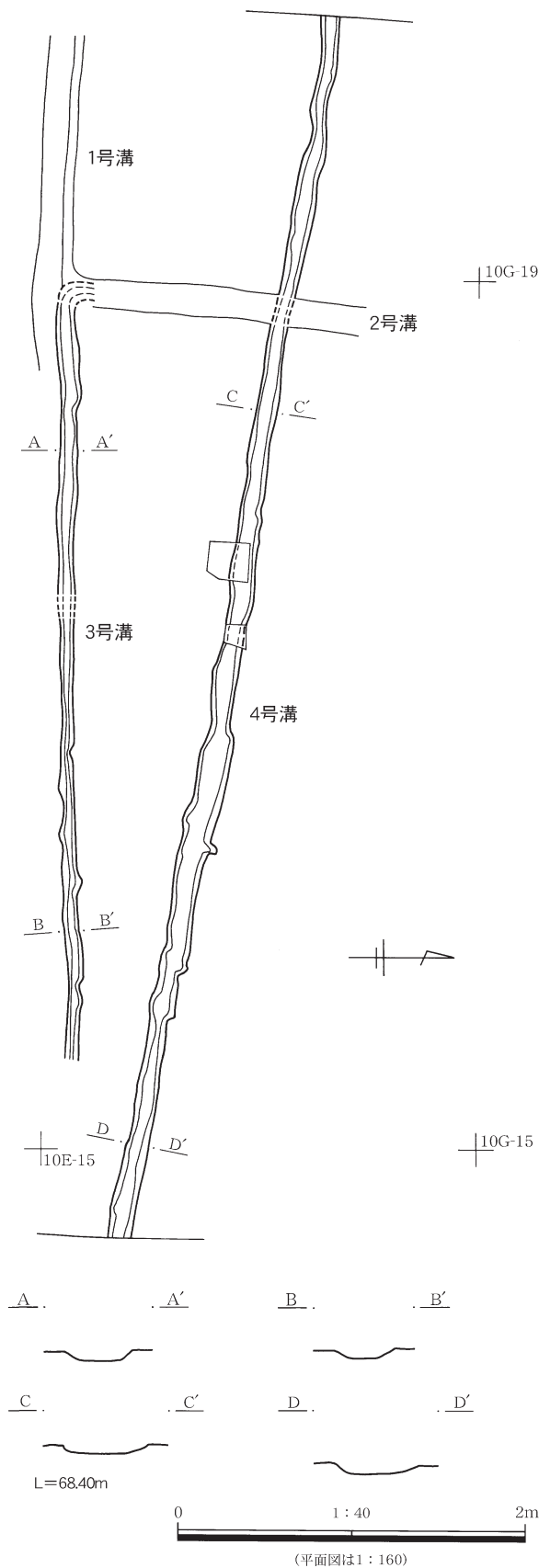
0 1 : 80 4m
 (断面図は1 : 40)

第98図 3区第3面の島(3)

L=68.90m



第94図 3区第3面の島(4)



第95図 2 a区3号・4号溝

4区 畠 (第90図 PL24)

位置 20F・G-20G

形状 第5面の遺構確認時に、サク状の耕作痕を4条ないし5条検出した。いずれも南北方向の走行である。長さは0.71~3.47mである。走行は、N-4°-EからN-7°-Eである。一番東側で検出した条が最も残存長を有していた。規模は3.47m、幅0.12~0.15mである。走行はN-6°30'-Eであった。西側の2条の畝幅は0.44mである。

埋没土 黄灰色土が堆積していた。

所見 畠の耕作痕と考えられる。検出状況から、周囲にも同様の遺構の広がりがあったことが想定される。大半が後世の耕作等による削平をうけた結果、検出された一部分だけが残存していたと考えられる。詳細な掘削時期は不明である。耕作物についても不明である。

(4) 溝

2 a区3号溝 (第95図 PL25)

位置 10E-15~18G

重複 2号溝に先出する。

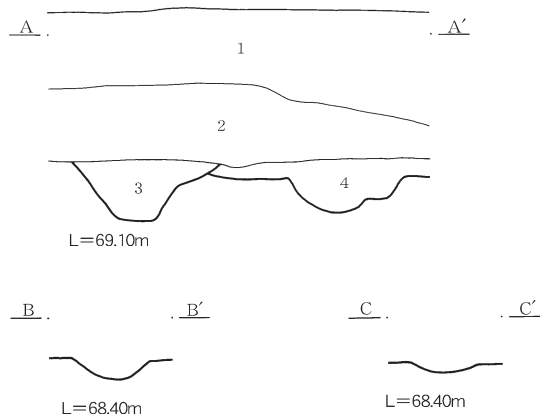
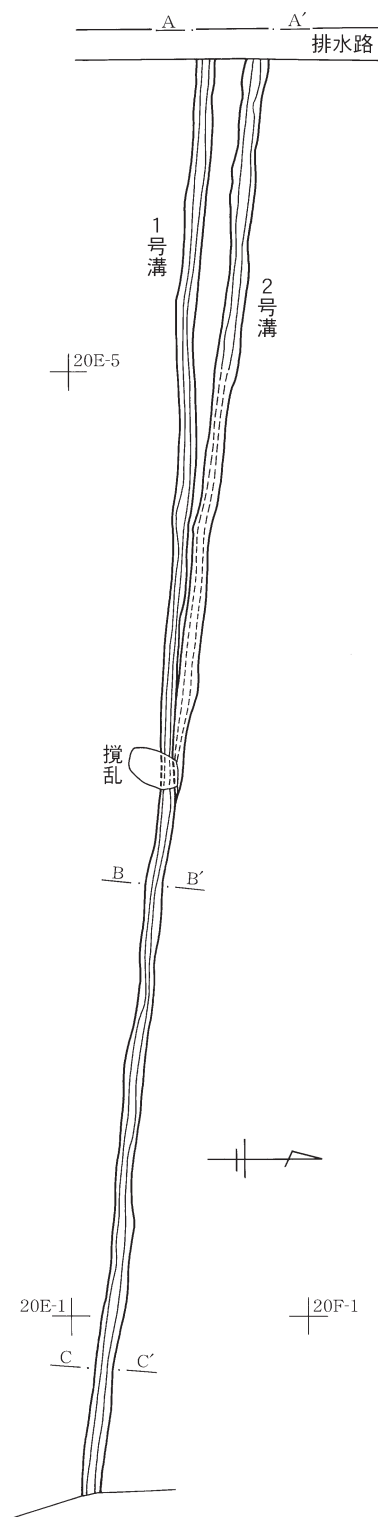
形状 東西方向に直線的に走行する。西端は2号溝により削平されているが、屈曲して北方向に延びていた可能性が考えられる。走長17.87mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。規模は上幅0.21~0.50m、下幅0.06~0.30mである。残存高は0.03~0.12mを測る。底面の標高は東端で68.07m、西端で68.03mである。両端における標高差は0.04mである。

方位 N-89°-E

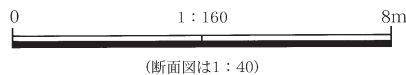
埋没土 灰黄色土が堆積していた。流水の有無は確認されていない。

所見 4区水田区画の北辺と走行をほぼ等しくすることから、区画の溝と考えられる。出土遺物もなく、詳細な掘削時期は不明であるが、中世の所産と考えられる。調査時第1面に属すると考えられる2号溝と、規模・埋没土の類似が指摘されている。

II 発掘調査の記録



- A-A'
- 1 盛土 As-Aは含まない。やや砂質気味で洪水層と考えられる。上層ほど黄色味で中間に灰色系の堆積層が認められるが分層していない。調査区東壁の2層より黄色味が強く、砂質である。
 - 2 黄灰色土 2層を主体とする。溝上部に2層下面に堆積する灰色土が一部に堆積する。As-A・As-Bは含まれない(1号溝埋没土)。
 - 3 暗黄灰色土 東壁の2層より黄色味が強く、砂質である。分層していないが数層の洪水層による堆積土である(2号溝埋没土)。
 - 4 黄灰色土



2 a区 4号溝 (第95図 PL25)

位置 10E-14~18、F-17~20G

形状 東西方向に直線的に走行する。走長28.79mを検出した。断面形は逆台形を呈する。規模は上幅0.25~0.85m、下幅0.10~0.69mである。残存高は0.01~0.09mを測る。底面の標高は東端で68.01m、西端で68.19mである。両端における標高差は0.18mである。

方位 N-99°-E

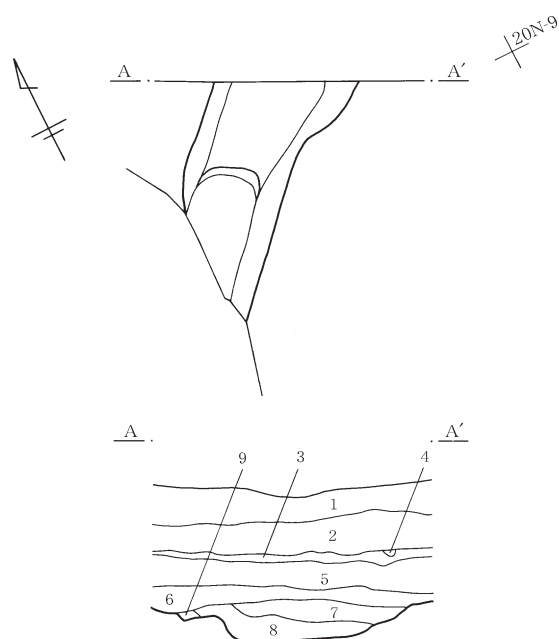
埋没土 浅間B軽石を多く含む暗褐色土が堆積していた。流水の有無は確認されていない。

所見 性格は不明である。出土遺物がなく詳細な掘削時期は不明であるが、中世の所産と考えられる。

2 b区 1号溝 (第96図 PL25)

位置 10E-20、20E-1~7G

第96図 2 b区 1号・2号溝



A-A'

- 1 褐灰色土 表土 (As-Aを多く含む。圃場整備時の土粒)。
- 2 褐灰色土 As-Aを多く含む。褐灰色粘質土を多く混入。
- 3 黄褐色土 As-Aを含まない。褐灰色粘質土を多く混入。
- 4 褐灰色土 砂粒主体。As-Aを含む。
- 5 褐色土 As-Aを含まない。砂質、灰白色の弱粘質土を多く混入。
- 6 褐色土 As-Bを多く含む。
- 7 褐色土 As-Bを多く含む (12号溝埋没土)。
- 8 暗褐色土 As-Bを多く含む。砂粒がラミナ状に堆積 (12号溝埋没土)。
- 9 褐色土 ブロック状に混入 (12号溝埋没土)。

第97図 3区12号溝

重複 2号溝と重複、これに後出する。

形状 東西方向に直線的に走行する。走長30.83mを検出する。断面形は逆台形を呈する。規模は上幅0.23~0.50m、下幅0.05~0.20mである。残存高は平面を検出した部分では、0.02~0.14mであったが、調査区西壁の土層断面では、深さ0.33mの掘り込みが確認された。底面の標高は東端で68.08m、西端で68.11mである。両端における標高差は0.03mである。

方位 N-93°-E

埋没土 暗黄灰色土が堆積していた。浅間A軽石、浅間B軽石は含まれない。流水の有無は確認されていない。

所見 性格は不明である。出土遺物がなく詳細な掘削時期は不明であるが、中世から近世初頭の所産と考えられる。

2 b区2号溝 (第96図 PL25)

位置 20E-3~6G

重複 1号溝と重複、これに先出する。

形状 東西方向に直線的に走行する。走長15.61mを検出した。東側は1号溝と完全に重複する状況で延びていたものと考えられる。断面形は逆台形を呈

していた。規模は上幅0.40~0.53m、下幅0.08~0.29mである。残存高は平面を検出した部分では、0.02~0.08mであったが、調査区西壁の土層断面で、深さ0.15mの掘り込みを確認した。底面には東側を中心に無数の小さな凹凸が見られた。底面の標高は西端で68.18mである。

方位 N-97°-E

埋没土 浅間B軽石を少量含む暗褐色土が堆積していた。浅間B軽石下の水田面を掘り抜いている。流水の有無は確認されていない。

所見 性格は不明である。出土遺物がなく詳細な掘削時期は不明であるが、中世の所産と考えられる。

3区12号溝 (第97図 PL25)

位置 20M・N-9G

形状 南北方向に走行する溝であるが、検出した走長は1.20mにすぎない。断面の規模は、上幅0.50~0.76m、下幅0.31~0.50mである。その形状は下幅が広い逆台形を呈していたと考えられる。掘り替えしのためか底面に弱い段差が見られ、西側がやや深くなっている。残存高は0.05~0.21mを測る。底面の標高は南端で68.11m、北端で68.26mである。両端における標高差は0.15mと比高差の大きなもの

II 発掘調査の記録

であった。

方位 N-38°-E

埋没土 浅間B軽石混土層・浅間B軽石層を掘り込み、底面は浅間B軽石下水田の耕作土である黒褐色土層に達していた。埋没土の褐色土、暗褐色土中には、浅間B軽石や砂粒が多量に含まれ、流水があったことが確認された。

所見 埋没土の状況から、用水路であったと考えられる。出土遺物がなく詳細な掘削時期は不明であるが、中世の所産と考えられる。

8 第2面の調査

(1) 概要

調査の時点においては、表土下で検出された、1783(天明3)年の浅間山噴出軽石層に埋没したり、復旧作業を行った水田や畠、溝、その他の遺構について、調査時の第1面として記録が図られていた。そのため、これらの遺構の中には、浅間A軽石降下前と降下後の遺構が一括されていた。本報告にあたり、これらを2分し、浅間A軽石降下前に存在した遺構については第2面、浅間A軽石降下以降に形成された遺構については第1面として報告する。

第2面に属する遺構は3区で検出された。その他の2a区・2b区・4区では確認されなかったわけであるが、これは、その時期の遺構が存在しなかったということではなく、浅間A軽石降下後の復旧作業、あるいはその後の耕作などにより、浅間A軽石降下前の遺構が、削平・攪拌を受けてしまった結果である可能性も充分考えられることである。

3区で検出された遺構は水田、畠、溝3条である。

第5面の時期、3区の中央部分を東西に貫いて掘削された用水路は、その後埋没する過程で、当該期にいたっても、表土面上に帯状の低位部を残していた。畠の耕作痕と3条の溝は、この帯状低位部の上縁部に沿って検出されている。

水田の区画は、用水路の旧流路から北側の高位部に東西方向に長軸を有する区画が、比較的広範囲にわたって見られた。また、南西部分では、用水路と

同時期に形成された1号屋敷の北辺を画していた、8号溝の埋没痕を利用したと考えられる水田と、この内側を区画する畦の一部が検出されている。

(2) 水田

3区As-A下水田 (第98・99図 PL25・27)

位置

重複 20K・M-10グリッドで、本水田、4号溝、第1面3区水田の順に形成されていることが確認された。

形状 水田面は調査区内の2箇所で見出された。

1箇所は第5面を見出した用水路の旧流路北側部分である。もう1箇所は調査区南西部分である。

用水路の旧流路北側部分では、畦畔および段差により区画された水田2枚を見出した。

1号水田は、周囲を畦により区画された、東西方向に長い長方形を呈していたと考えられる。東側は調査区域外におよび、区画の全容は判明していない。面の規模は、東西19.35m以上、南北6.50mである。水田面は平坦である。西辺を画す南北方向の畦は、下幅0.21m、高さ0.10mを測る。方向はN-3°-Eである。北辺は高さ0.06~0.08mの段差をもって、北側の区画と画されている。段差の方向はN-83°-Eである。南辺は下幅0.38m、高さ0.03mの畦が見出されたが、4号溝の掘削により大半が削平されていた。検出面積は約110㎡である。

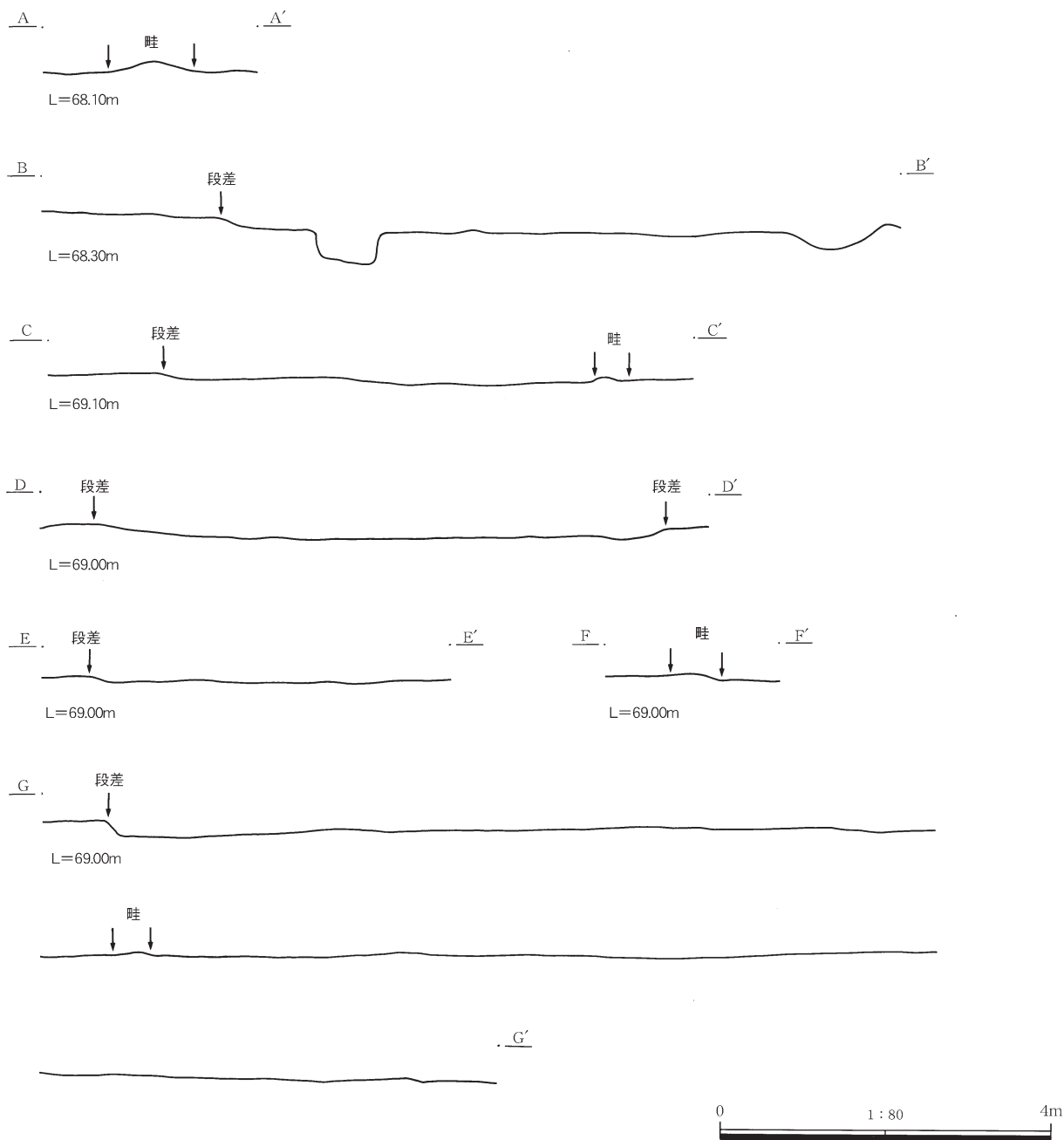
2号水田は1号水田の西側に位置する。東西は畦により、南北は段差により区画されていたと考えられるが、南西部分は削平を受けており、その全容は不明である。規模は東西26.90m、南北7.00mである。西側は南北2.25mに幅を狭めている。水田面は平坦である。西辺を画する畦は、下幅0.55~0.62m、高さ0.05~0.10mを測る。北端は段差の間に0.19mの隙間があることから、水口が設けられていた可能性がある。南端は削平されていた。北辺の段差は高さ0.03~0.06m、南東隅の段差は高さ0.08mであった。検出面積は約138㎡である。

1号水田の南側には、3号水田が造成されていたと考えられるが、一部分の検出に止まった。



第98図 3区第2面の遺構

II 発掘調査の記録

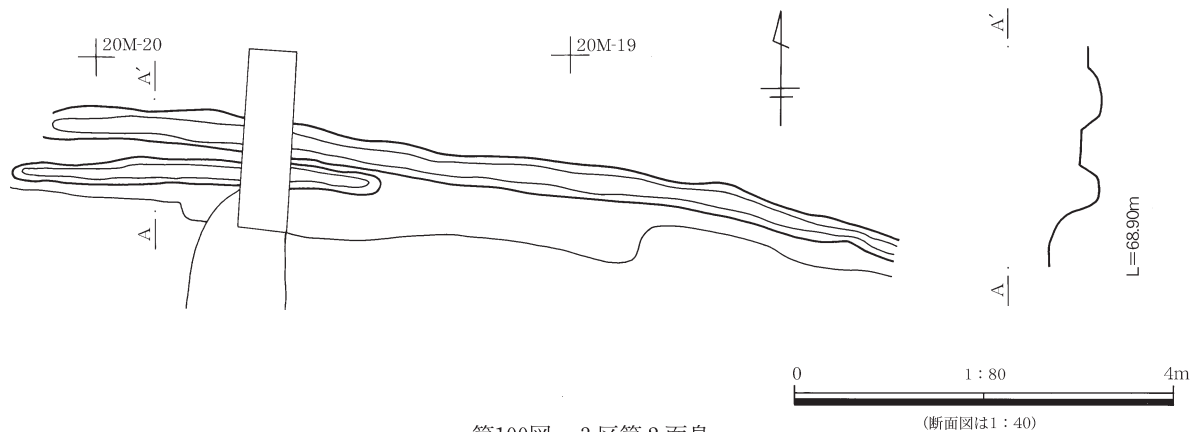


第99図 3区第2面水田断面

用水路の旧流路北側部分では、この2枚の水田の北側に2枚の区画が確認された。1号水田の北側の1号区画は、第1面で復旧溝が検出された区画である。第2面時には畠となっていたものと考えられる。2号水田の北側の2号区画も畠であった可能性が高い。調査区北西部分では、北西端で3号区画を検出した。南辺を高さ0.02~0.08mの段差で区画していた。段差の方向はN-100°-Eである。2号水田、2

号区画以西には、3号区画の他に3枚の区画が存在していたようであるが、これらを明瞭に区分するための畦や段差が検出されなかった。土地利用の地目についても不明である。

調査区南西部分においては、第5面で検出した3区8号溝の埋没跡を利用した水田2枚が検出された。いずれも一部分の残存である。3区8号溝の外縁に沿うように、高さ0.03~0.12mの段差が検出さ



第100図 3区第2面畠

れ、この南側の低位部が水田面となっていた。段差は東西27.34mにわたり、30K-1グリッドでほぼ直角に屈曲、南北方向に走行をとり、調査区域外に延びている。段差の走行はN-98°-Eである。この屈曲部から東側へ10.40mの位置で、南北方向に水田面を区分する畦が検出された。畦は下幅0.35~0.50m、高さ0.04mを測る。段差との間の0.63mの隙間は、水口にあたるか。

畦の西側の4号水田の規模は、東西10.40m、南北3.75m以上を測る。検出面積は約32㎡である。東側の5号水田の規模は東西15.63m以上、南北2.25m以上を測る。検出面積は約23㎡である。両水田とも水田面は平坦である。20K-14・15グリッド内においても東西方向の走行で、北方向に下がる0.05m若の段差が見られたが、水田の区画とは断定できなかった。

埋没土 水田面直上には、全面にわたり、浅間A軽石を含む砂層が薄く堆積しており、浅間A軽石の1次堆積でなく、洪水堆積層により被覆された状況がうかがえた。耕作土は、厚さ0.03m前後の黄褐色土と、その下位に堆積した褐色土である。耕作土中に浅間A軽石の混入は見られない。

遺物 水田面の精査中に、陶器碗・皿・播鉢など23点、磁器碗など8点、土師質土器皿1点、軟質陶器内耳鍋7点、土師器甕7点が出土している。この中の陶器大皿、磁器鉢・瓶・仏飯器、土師質土器皿を中世・近世遺構外出土遺物として資料化した。

所見 水田面は浅間A軽石を含む洪水堆積層に覆われていたが、耕作土中に浅間A軽石の混入が見られないことから、浅間A軽石降下以前に耕作が行われたものと考えられる。

(3) 畠

3区 畠 (第100図 PL26)

位置 20L-18・19、30L-1G

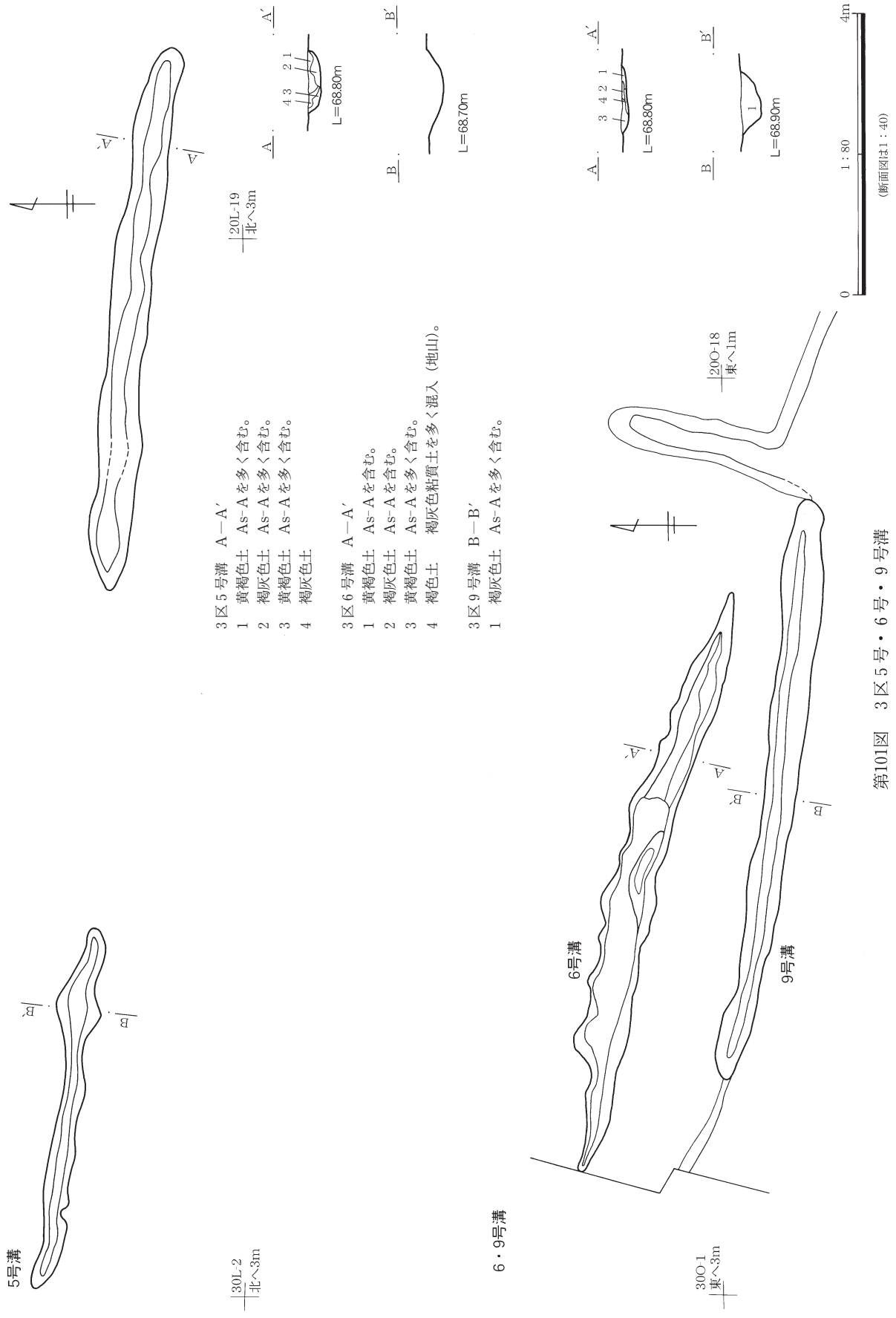
重複 7号溝に先出する。

形状 第5面で検出した用水路は、埋没後も後世にその痕跡を帯状の低位部として残した。調査区南西部分、低位部の南縁法面において、東西方向のサクを2条検出した。2条とも両端は削平を受けている。北側のサクは、長さ4.46m、上幅0.20~0.10m、下幅0.10~0.04m、深さ0.11mである。走行はやや北に張り出す弧状を呈する。方位はN-81°-Wである。南側のサクは、長さ1.05m、上幅0.14~0.10m、下幅0.07~0.04m、深さ0.12~0.03である。走行はN-88°-Wの方向である。2条の畝幅(サクタテ)は、0.23~0.15mであった。

埋没土 褐灰色粘質土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。覆土との関係から、浅間A軽石降下以前に耕作されていた、畠のサクの痕跡と考えられる。周辺にも同様の耕作痕が広がっていることが充分考えられる。耕作物については不明である。

II 発掘調査の記録



第101図 3区5号・6号・9号溝

(4) 溝

3区5号溝 (第101図 PL26)

位置 20M-20、30M-1 G (5-1号溝)

20L-18・19、M-19G (5-2号溝)

形状 第5面で検出した用水路の旧流路に残された低位部南縁に接し、これに沿うようにして東西方向に検出された。中位に4.80mの間削平を受けた部分があるが、最東端から最西端までの走長は、合計17.79mを測る。断面形は皿状を呈しており、底面には小さな凹凸が多数見られた。

西側部分を5-1号溝と呼称すると、走長は5.20m、上幅0.19~0.58m、下幅0.06~0.24m、残存高0.01~0.11mを測る。底面の標高は東端で68.54m、西端で68.66mである。両端における標高差は0.12mである。

東側部分を5-2号溝と呼称すると、走長は7.79m、上幅0.38~0.60m、下幅0.09~0.32m、残存高0.01~0.27mを測る。底面の標高は東端で68.44m、西端で68.38mである。両端における標高差は0.06mである。

方位 N-99°-E (5-1号溝)

N-97°-E (5-2号溝)

埋没土 浅間A軽石を多く含む褐灰色土が堆積していた。部分的に層をなす部分も見られる。流水の有無は不明である。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明であるが、埋没土中に浅間A軽石が堆積することから、1783(天明3)年以前の溝と考えられる。底面近くのみが残存、検出されたものと考えられる。

3区6号溝 (第101図 PL26)

位置 20N-18、O-18~20G

形状 東西方向に走行を有する。全体的にはわずかに弧を描いているが、細部を見ると上端・下端とも小さな波状に出入りをくり返している。走長8.55mを検出した。断面形は皿状を呈し、底面に小さな凹凸が多数見られた。規模は上幅0.15~0.78m、下幅0.10~0.52m、残存高0.02~0.10mを測る。底面の標高は東端で68.57m、西端で68.59mである。両

端における標高差は0.02mである。

方位 N-106°-E

埋没土 5号溝と同様、浅間A軽石を多く含む褐灰色土が堆積していた。流水の有無は不明である。

所見 掘削時期を導き出せるような出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明であるが、1783(天明3)年以前の溝の底面近くが残存、検出されたものであろう。

3区9号溝 (第101図 PL26)

位置 20N-18・19、O-19G

形状 重複関係にはないが、本遺構の北側に走行をほぼ等しくして、6号溝が位置する。東西方向に走行を有する。走長8.37mを検出した。断面の規模は、上幅0.29~0.58m、下幅0.05~0.17m、残存高0.05~0.14mを測る。底面の標高は東端で68.52m、西端から0.92m地点で68.54mである。2点における標高差は0.02mである。

方位 N-98°-E

埋没土 浅間A軽石を多く含む褐灰色土が堆積している。

所見 検出状況から、耕作に関わる区画溝と考えられる。出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、1783(天明3)年以前の掘削と考えられる。

9 第1面の調査

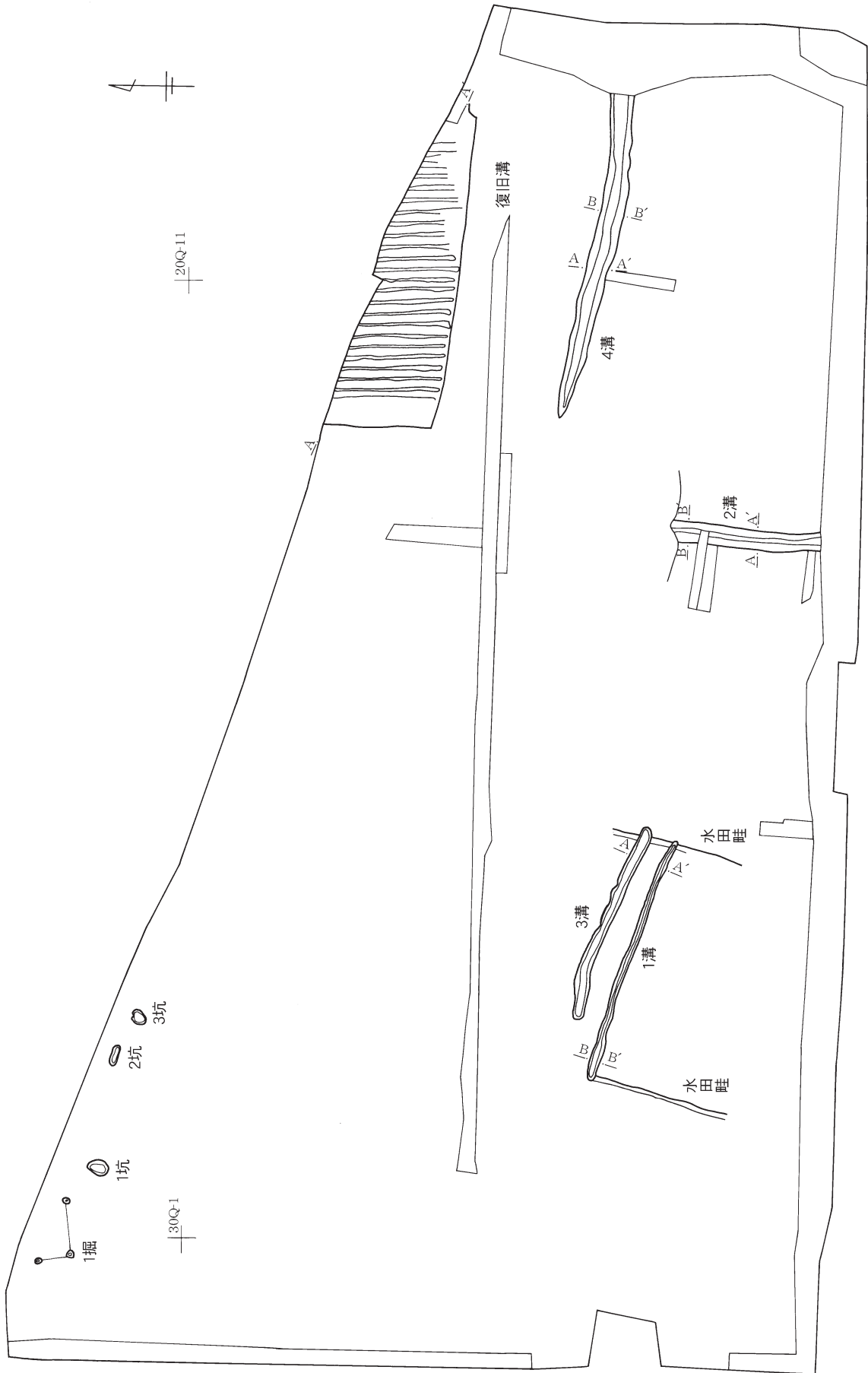
(1) 概要

本項では、調査時に第1面として確認された各区の遺構の中で、1783(天明3)年の浅間A軽石降下以降の遺構について報告を行う。

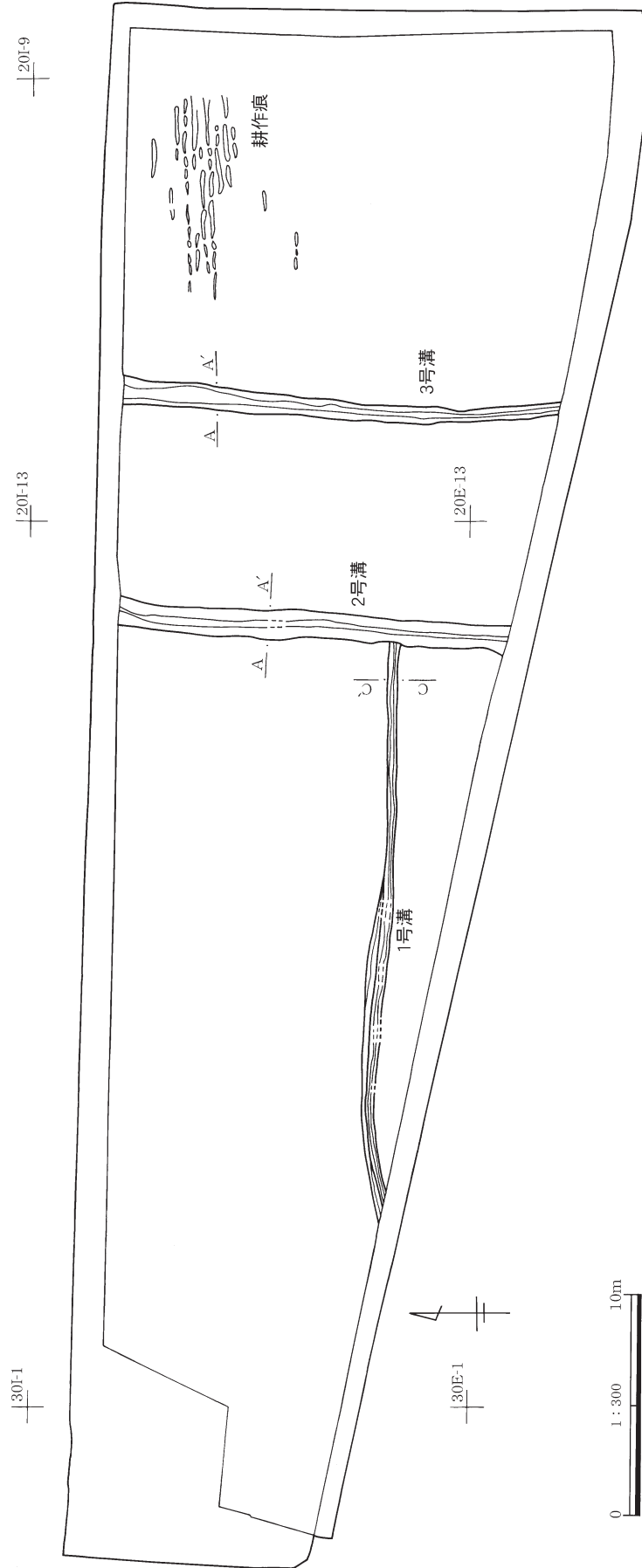
第1面の遺構としては、掘立柱建物1棟、溝9条、土坑3基、水田1面、畝耕作痕、畝復旧溝が検出された。

2a区では溝2条を検出した。両者とも直線的に延びるもので、土地区画に合わせて掘削されたものと考えられる。出土遺物の年代から近世以降、近代にいたるまで使用されていたものであろう。

3区では溝3条、水田1面、畝の復旧溝を検出した。掘立柱建物1棟と土坑3基は調査時の第4面、

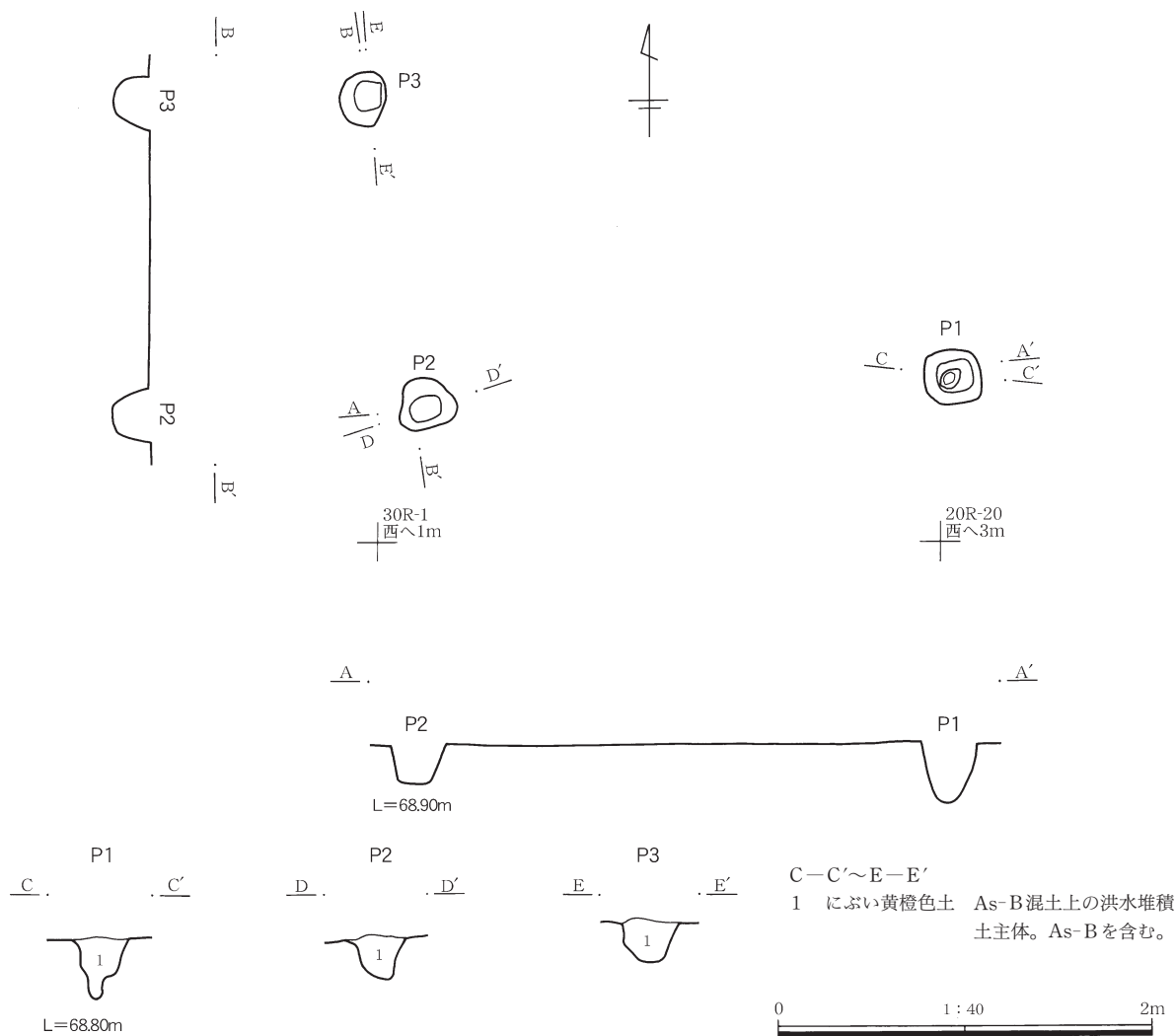


第102図 3区第1面の遺構



第103図 4区第1面の遺構

II 発掘調査の記録



第104図 3区1号掘立柱建物

第24表 3区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	1×1間	面積				
主軸方向	N-85°-E	庇	無し			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
南辺2.82	P 1	30	28	30.0	円形	2.82
西辺1.72	P 2	30	28	20.0	不整形	1.72
	P 3	30	24	19.0	長円形	

本報告の第7面調査の時点で記録化したものである。掘立柱建物を構成する3本の柱穴は、当初土坑と認識していたものを途中で変更した。

畠の復旧溝は調査区の北東部で検出された。その範囲は、第3面で洪水層下から検出した畠の第1群の範囲に相当する。

水田は調査区の南西部分、第5面で掘削された用

水路の旧流路により南側で検出した。区画の残存状態は不良で、畦畔の高まりは後世に削平されたためか確認できず、わずかな段差が残されていただけであった。

4区では溝3条と畠の耕作痕を検出した。畠は調査区の北東部分で検出され、東西方向のサクが確認された。検出した3条の溝のうち、南北方向の2条は、第5面で検出した屋敷を囲む溝に近接して掘削されていた。中世の土地区画が、近世の区画に何らかの影響を与えたものと考えられる。

(2) 掘立柱建物

3区1号掘立柱建物 (第104図 第24表 PL26)

位置 20R-20、30R-1 G

形状 調査当初は、3基の土坑(3区4号～6号土坑)として認識していたが、掘立柱建物を構成する柱穴に変更した。3本の柱穴を検出したものの、残りの柱穴は調査区域外におよび、建物の全容を把握することはできなかった。各辺、各柱穴の規模については、第24表のとおりである。

埋没土 いずれの柱穴にもぶい黄褐色土により埋没していた。柱痕は認められなかった。

所見 検出地点が、前後の時期において生産域となっていることから、その性格については不明である。出土遺物が全くなく、詳細な築造年代は不明である。埋没土の状況から、近世の所産と考えられる。

(3) 水田

3区水田 (第102図)

位置 20K・L-16～19G

重複 1号・3号溝に後出する。

形状 調査区の南西部分、第5面で検出した水路の旧流路の南側で、南北方向の畦を2本検出した。2本とも残存状態は不良で、高まりは全くなく、基底部を検出したにとどまった。東西方向の区画については不明である。

西側の畦は長さ8.35mを検出した。幅は0.32mである。走行はN-16°-Eである。東側の畦は長さ6.96mを検出した。幅は0.36mである。走行はN-16°-Eである。南側はより一段残存が不良であった。2本の畦は平行関係にあり、その間隔は12.40mを測った。

この他に具体的な遺構の検出はなかったが、調査区北東部分では、4号溝の調査の際に行った土層観察で、上記南西部と同様の水田耕作土と考えられる浅間A軽石を混入する橙色土の堆積が認められている。本来は3区の広い範囲で、水田耕作が行われていたものと考えられる。

埋没土 耕作土は、洪水堆積層と考えられる浅間A軽石を混入する橙色土である。

所見 出土遺物はない。浅間A軽石降下後水田であり、第1面で報告する遺構の中では、1号・3号溝に後出する新しい時期に位置づけられる。

(4) 復旧溝

3区復旧溝 (第105図 PL27)

位置 20N-9G(南東端)、
20O-12G(北西端)

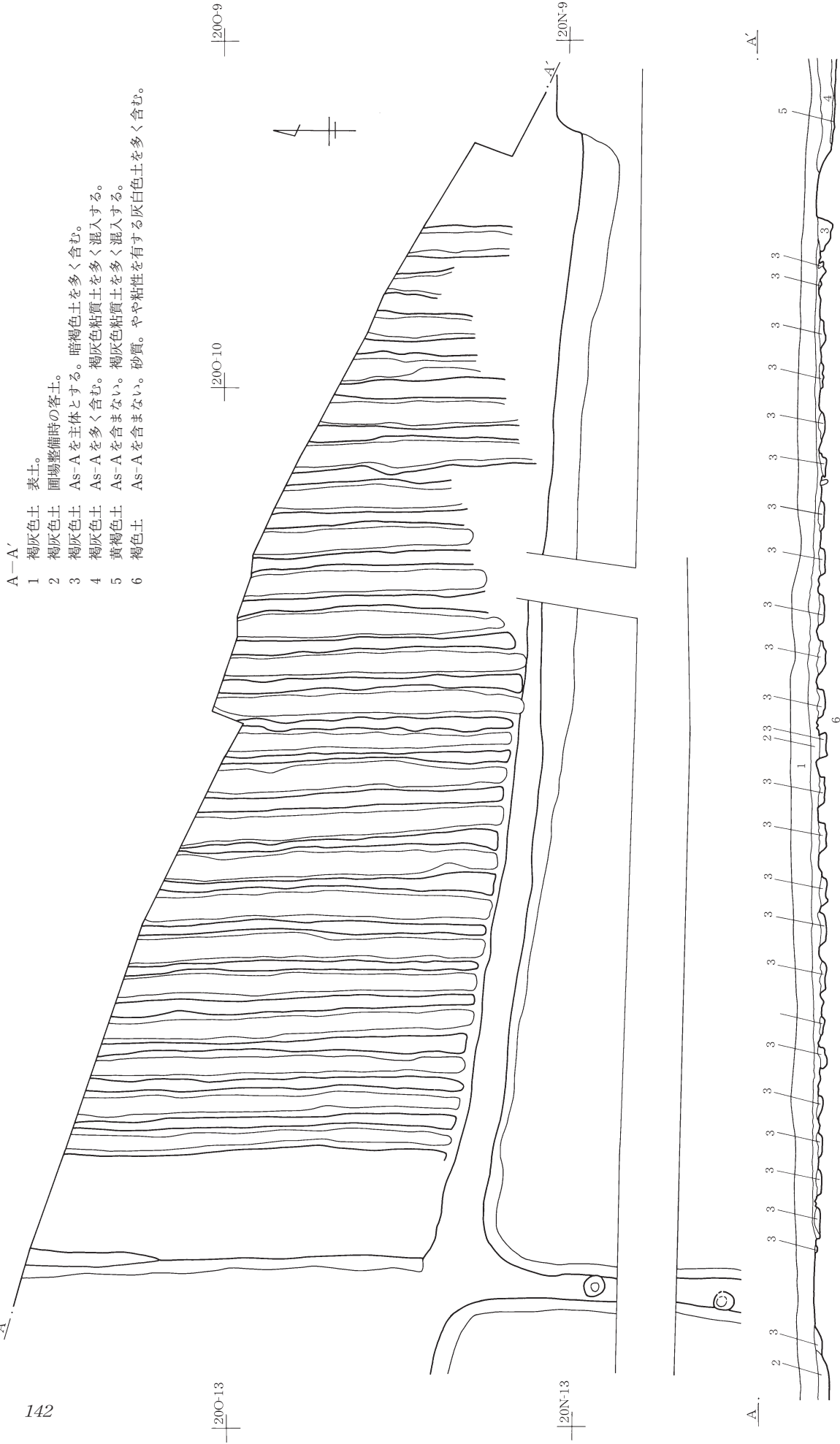
形状 調査区北東部分で、南北方向の溝の集合体を検出した。東西約13.5mの範囲に23条の直線的に延びる溝を確認した。これらは埋没した土層の観察から、1783(天明3)年に降下した浅間A軽石、あるいは浅間A軽石の降下に伴い発生した洪水泥流を除去、埋設処理することを目的に掘削された復旧溝と考えられる。本遺構内で復旧溝が検出されたのは、ここ1箇所だけである。復旧溝の南端は、約0.08m以下の高さの段差を有し、第2面で検出した東西方向の畦に達して終息しており、浅間A軽石降下後もここに区画の境界があったことが、認識されていたことが分かる。西端は最西端の溝から約1.6mの間、空白地帯を有した後、わずかな段差を作っている。この空白地帯には、道状遺構があった可能性も考えられる。溝の北端はいずれも北側調査区域外におよんでおり、1区画の全容を明らかにできなかった。検出した面積は約220㎡である。

個々の溝について見ると、規模は最も残存の良かった最西端の溝で、残長5.55m、上幅0.30～0.40m、下幅0.16～0.22m、深さ0.05～0.02mであった。全体を概観しても上幅0.38～0.55m、深さ0.20～0.05mの範囲に収まった。

断面形は、底面の広い箱形を呈している。確認時は、やや上方に外傾して立ち上がるものが多かったが、原形は垂直に近い掘り込みであったと考えられる。底面はほぼ平坦に整えられていた。壁面も含め、浅いくぼみや、小さな凹凸が見られたが、掘削時の工具痕を明瞭に残すような部分はなかった。各溝間の間隔は、溝と溝の中心間で、0.50～0.72m、隣合う溝の上端と上端の間隔は、0.12～0.24mと非常に狭いものであった。

方位 N-2°-E～N-3°-W

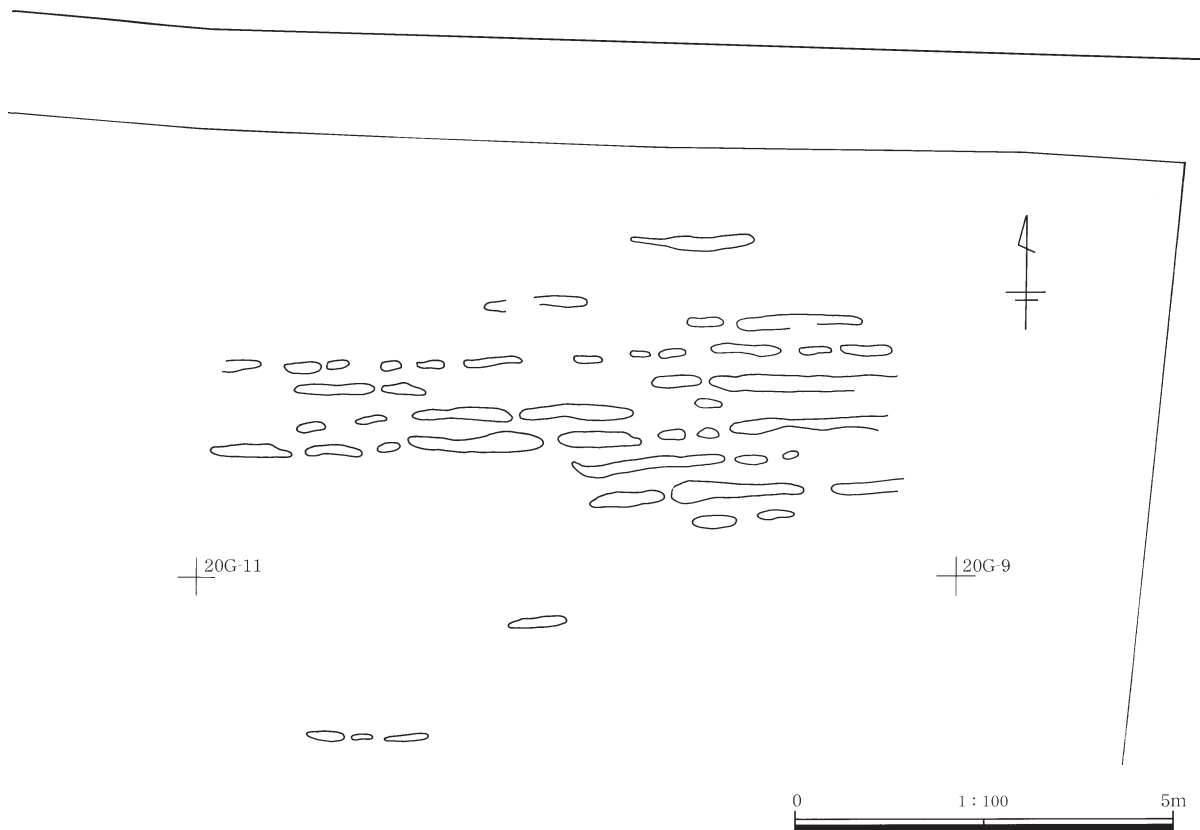
埋没土 これらの溝は、浅間A軽石を含まない褐色土を掘り込んでおり、確認面もこの土層であった。



A-A'

- 1 褐灰色土 表土。
- 2 褐灰色土 圃場整備時の客土。
- 3 褐灰色土 As-Aを主体とする。暗褐色土を多く含む。
- 4 褐灰色土 As-Aを多く含む。褐灰色粘質土を多く混入する。
- 5 黄褐色土 As-Aを含まない。褐灰色粘質土を多く混入する。
- 6 褐色土 As-Aを含まない。砂質。やや粘性を有する灰白色土を多く含む。

第105図 3区第1面復旧溝



第106図 4区第1面耕作痕

確認面は、現地表下0.30～0.40mにあった。

埋没土は、浅間A軽石を主体とする褐灰色土が充填されていた。覆土は浅間A軽石を含む褐色土である。土層の観察からは、溝を掘り上げた際の土粒の単位を、明瞭に把握することはできなかった。耕作等により攪拌されたためであろうか。

所見 出土遺物はない。土層の堆積状況から1783(天明3)年以降の復旧溝で、浅間A軽石埋設を目的として、掘削されたものである。復旧溝が検出された区画は、復旧前は水田であった可能性もあるが、復旧後は畠地となったものと考えられる。

(5) 畠

4区耕作痕 (第106図 PL27)

位置 20F-10、G-9・10G

形状 調査区北東部分で、東西方向に列をなす、サク状の掘り込みを検出した。耕作痕と考えられる。検出した耕作痕の数は、合計12条である。その分布範囲は、途中単位を把握することが困難であった部

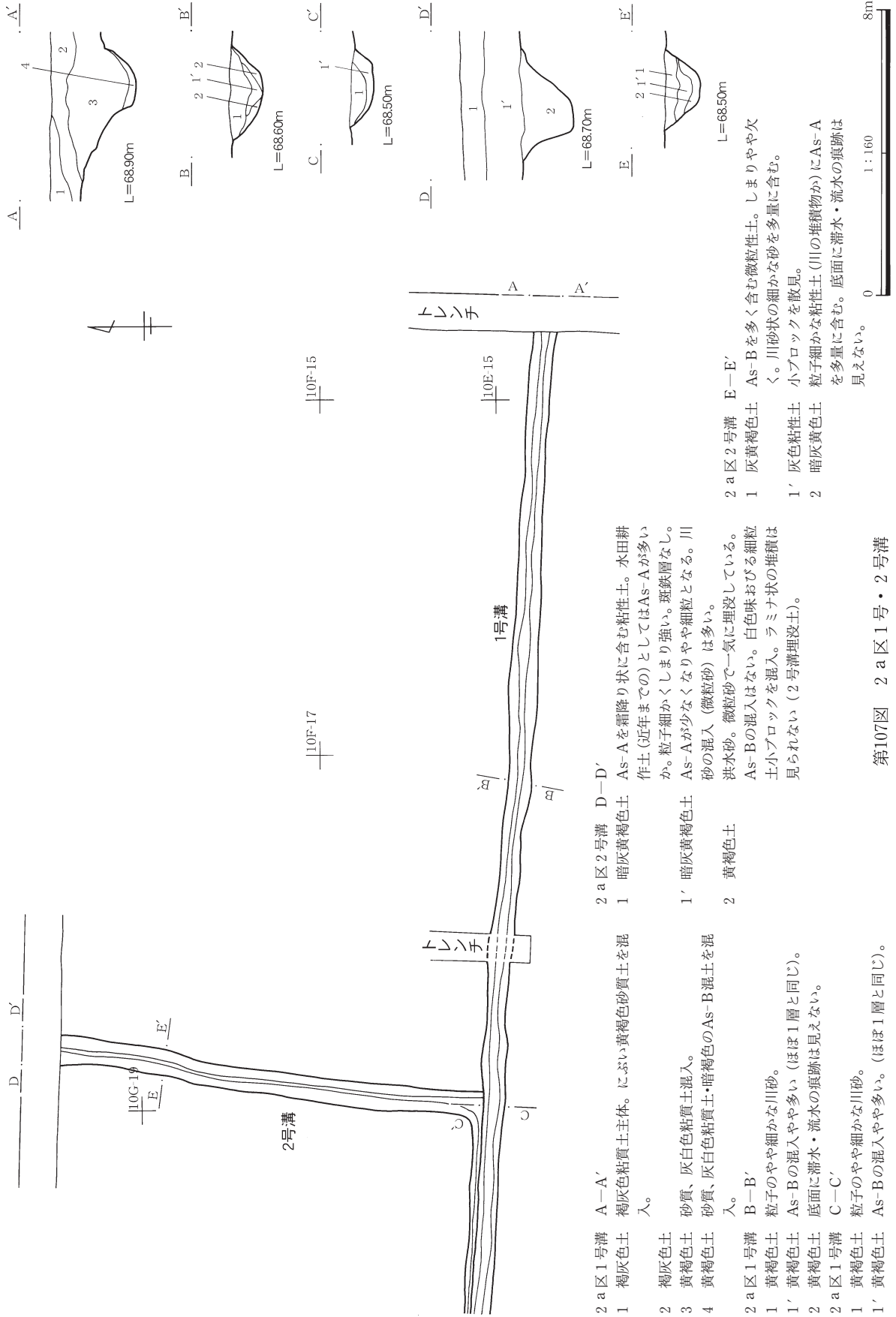
分も含め、東西約9.2m、南北約3.9mを測った。面積は約22m²である。

残存は不良である。いずれも途中で途切れている。これは掘り方が、深所におよんでいた部分のみが残存した結果であろう。北側から7条目の幅は、0.10～0.27m、その走行はN-86°-Eである。他も概ね同じ規模、走行であった。畠とした場合の畝幅は、北側から3条目から10条目までの距離が2.56m、これをサクの数7で除して求めると、その平均が0.37mとなる。

埋没土 灰褐色シルト質土の確認面より黄色味が強く、細砂状の微粘性土が入り込んでいた。

所見 検出したサク状の掘り込みは、畠の耕作痕と考えられたが、水田耕作に伴う可能性もあるため、田・畠を断定することを避けた。後世の削平を受け、掘り込みの最下面が、かろうじて残存していることから、耕作の範囲は、周辺に及んでいたことが推定される。出土遺物もないが、覆土の状況などから、

II 発掘調査の記録



- 2 a 区 1 号溝 A-A' 褐灰色粘質土主体。におい黄褐色砂質土を混入。
 1 褐灰色土 砂質、灰白色粘質土混入。
 2 黄褐色土 砂質、灰白色粘質土・暗褐色のAs-B混土を混入。
 3 黄褐色土 砂質、灰白色粘質土混入。
 4 黄褐色土 砂質、灰白色粘質土・暗褐色のAs-B混土を混入。
- 2 a 区 2 号溝 D-D' 暗灰黄褐色土 As-Aを霜降り状に含む粘性土。水田耕作土(近年までの)としてはAs-Aが多いか。粒子細かくしまり強い。斑鉄層なし。
 1' 暗灰黄褐色土 As-Aが少なくなりやや細粒となる。川砂の混入(微粒砂)は多い。
 2 黄褐色土 洪水砂。微粒砂で一氣に埋没している。As-Bの混入はない。白色味おびる細粒土小ブロックを混入。ラミナ状の堆積は見られない(2号溝埋没土)。
- 2 a 区 1 号溝 B-B' 粒子のやや細かな川砂。
 1 黄褐色土 粒子のやや細かな川砂。
 1' 黄褐色土 As-Bの混入やや多い(ほぼ1層と同じ)。
 2 黄褐色土 底面に滞水・流水の痕跡は見えない。
- 2 a 区 1 号溝 C-C' 粒子のやや細かな川砂。
 1 黄褐色土 粒子のやや細かな川砂。
 1' 黄褐色土 As-Bの混入やや多い。(ほぼ1層と同じ)。
- 2 a 区 2 号溝 E-E' 2 a 区 2 号溝 E-E'
 1 灰黄褐色土 As-Bを多く含む微粒性土。しまりややややく。川砂状の細かな砂を多量に含む。
 1' 灰色粘性土 小ブロックを散見。
 2 暗灰黄色土 粒子細かな粘性土(川の堆積物か)にAs-Aを多量に含む。底面に滞水・流水の痕跡は見えない。

第107図 2 a 区 1 号・2 号溝

(断面図は1:40)

浅間A軽石降下後の遺構と考えられる。

(6) 溝

2 a区1号溝 (第107図 PL26)

位置 10D-14~20、E-17~20G

重複 2号溝に後出する。

形状 東西方向に直線的な走行を有する。10E-19グリッド付近で2号溝と重複する。走長27.89mを検出した。断面形は逆台形を呈する。規模は上幅0.48~0.79m、下幅0.12~0.32mを測る。残存高は平面を検出した部分では、0.10~0.26mを測るが、調査区東壁の土層断面では、0.32mの残存が確認された。底面の標高は東端で68.11m、西端で68.14mである。両端における標高差は0.03mである。

方位 N-96°-E

埋没土 黄褐色の洪水砂層で一気に埋没している。流水の痕跡は確認されていない。

所見 区画溝と考えられる。出土遺物がなく、詳細な掘削年代は不明である。埋没土の状況などから、近世の所産と考えられる。4区1号溝と位置関係、走行、埋没土の状況に類似点がある。

2 a区2号溝 (第107図 PL26)

位置 10E-18~20、F・G-18G

重複 1号溝に先出する。

形状 東西方向、1号溝とほぼ平行する方向に延びていたものが、10E-19グリッドの基点付近で、直角に屈曲、南北方向に走行を変えている。走長は17.45mを検出した。断面形は逆台形、あるいはV字形を呈する。規模は上幅0.63~0.80m、下幅0.07~0.62mを測る。残存高は0.03~0.31mを測るが、調査区北壁の土層断面では、0.39mの残存が確認された。底面の標高は西端で68.16m、北端で67.98mである。両端における標高差は0.18mである。

方位 N-8°-E(南北)、N-92°-E(東西)

埋没土 黄褐色土が堆積していた。滞水・流水の痕跡は認められなかった。

所見 区画溝と考えられる。出土遺物がなく、詳細な掘削年代は不明であるが、近世の所産と考えられる。

3区1号溝 (第108図 PL27・36)

位置 20K-16・17、L-17~19G

重複 第1面3区水田に先出する。

形状 東西方向に走行を有する。北側、1.60mの間隔において3号溝が検出されている。走長13.07mを検出した。断面形はレンズ状を呈している。規模は上幅0.27~0.55m、下幅0.10~0.31m、残存高0.05~0.14mを測る。底面の標高は東端で68.55m、西端で68.63mである。両端における標高差は0.08mである。

方位 N-110°-E

埋没土 浅間A軽石を主体とする褐灰色土が堆積していた。本遺構は、第1面3区水田の耕作土である、浅間A軽石を混土する橙色洪水層により覆われていた。

遺物 埋没土中から青磁碗(1)、陶器碗(3)・灯明受皿(2)が出土している。この他に非掲載遺物として、陶器碗2点、磁器碗2点・鉢1点がある(観P183)。

所見 浅間A軽石降下後に掘削された溝である。浅間A軽石を混土する水田耕作土によって被覆されている。両端は水田耕作により削平されていたと考えられる。

3区2号溝 (第108図 PL27)

位置 20J・K-13G

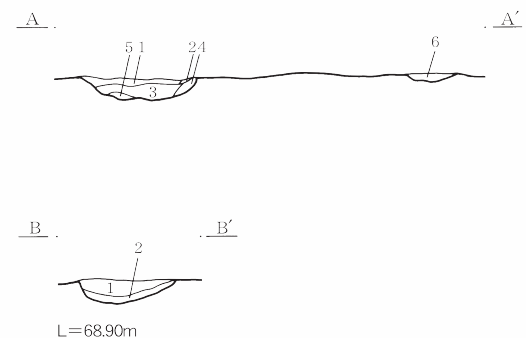
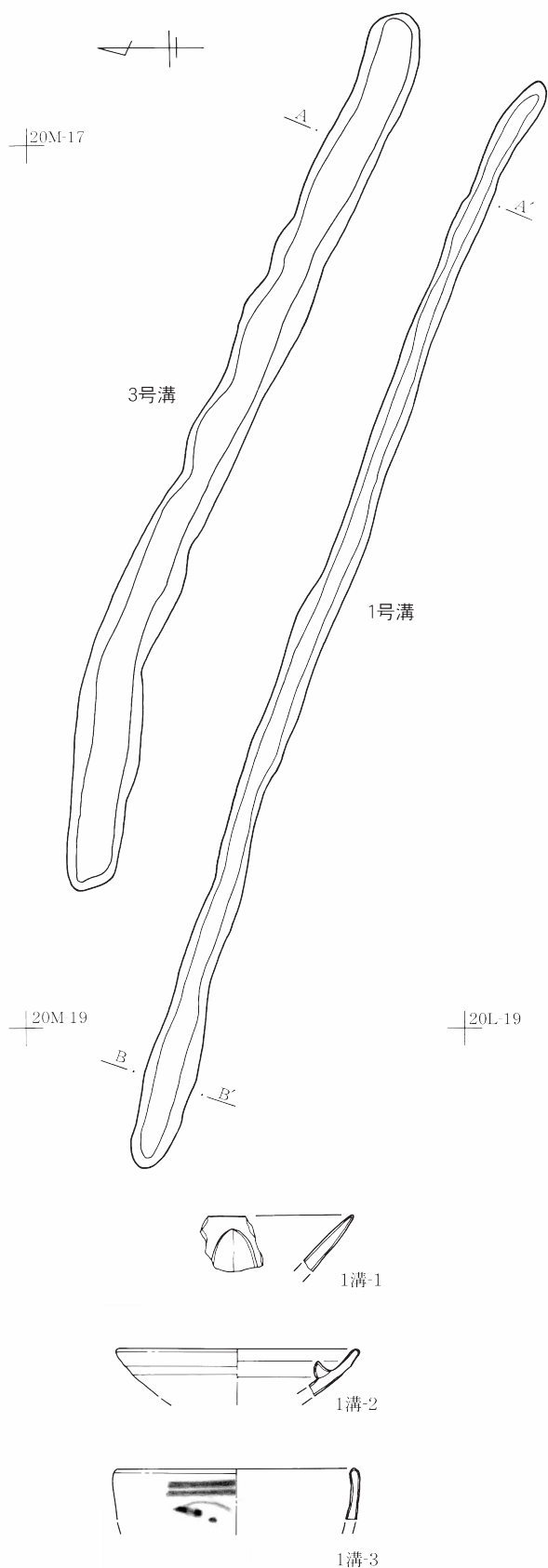
形状 南北方向に直線的に走行する。4区3号溝と位置・走行を類似することから、同一遺構の可能性が考えられる。走長8.03mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。規模は上幅0.76~1.18m、下幅0.20~0.30m、残存高0.38~0.53mを測る。底面の標高は南端で68.15m、北端で68.30mである。両端における標高差は0.15mである。

方位 N-8°-E

埋没土 浅間A軽石を多く含む暗褐色土が堆積していた。

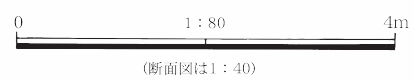
遺物 埋没土中から磁器碗(1)、鉄器鉄釘(2)が出土している。他に非掲載遺物として、陶器皿4点、磁器碗2点、ガラス製品1点、瓦1点、土師器杯1

II 発掘調査の記録

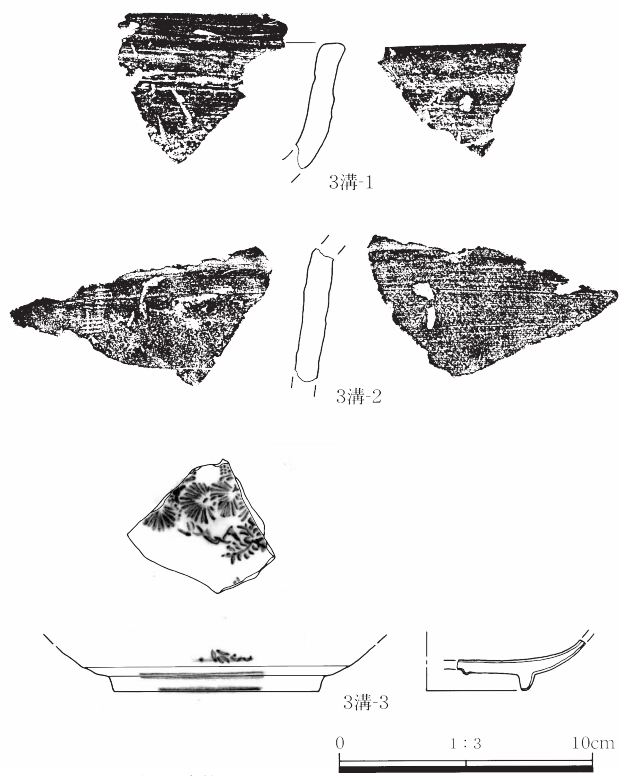


- 3区1号・3号溝 A-A'
- 1 黄褐色土 As-Aを多量に含む。褐色粘質土を多く混入する洪水層。(As-A混水田耕作土)。
 - 2 黄褐色土
 - 3 黄褐色土 As-Aを多量に含む。褐灰色粘質土を少し混入(3号溝埋没土)。
 - 4 褐色土
 - 5 黄褐色土 As-Aを含まない。褐灰色粘質土を含まない。
 - 6 褐灰色土 As-A主体。褐灰色粘質土を少し混入する(1号溝埋没土)。

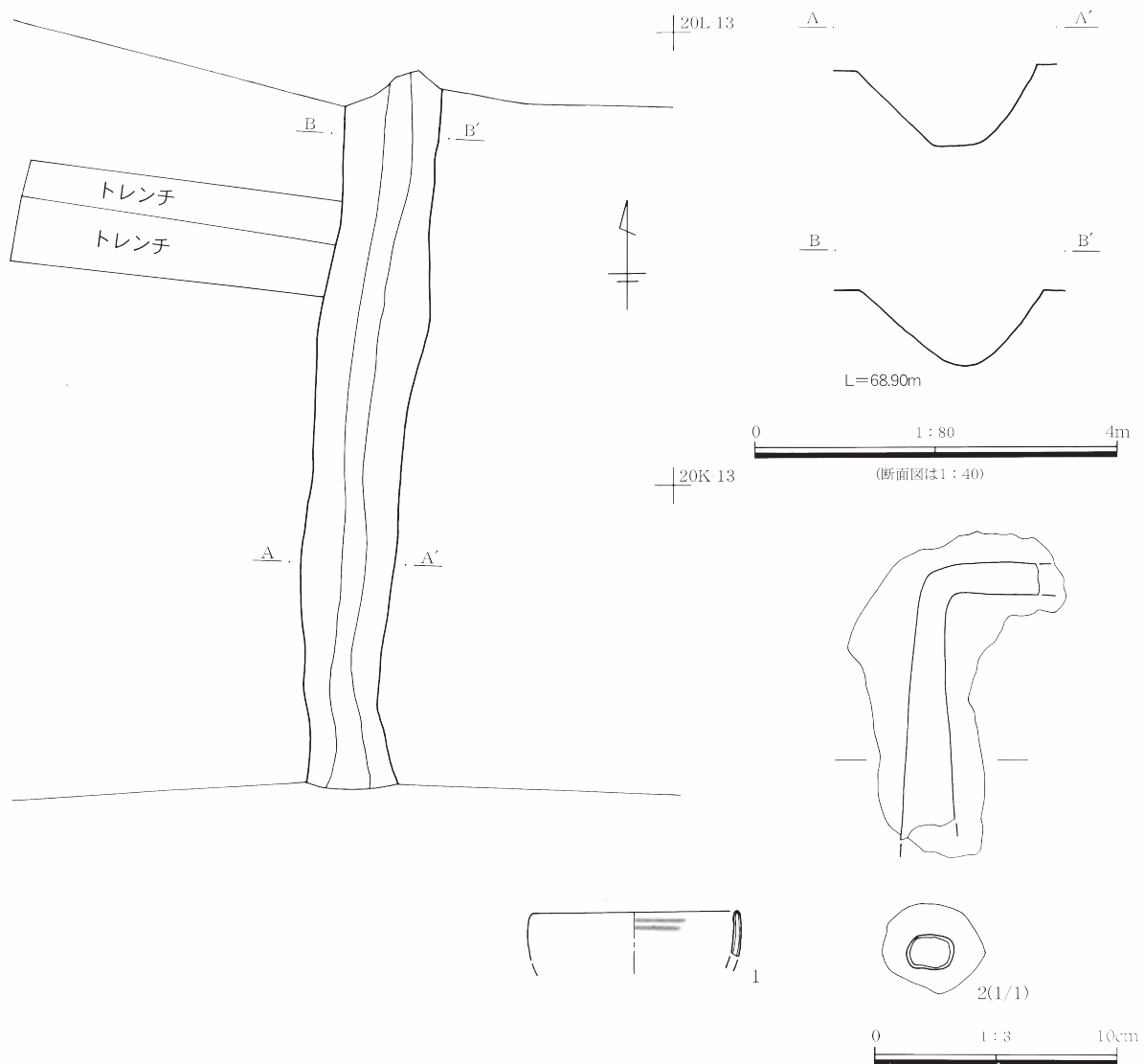
- 3区1号溝 B-B'
- 1 黄褐色土 As-Aを含む。褐灰色粘質土を多く混入(畝耕作土)。
 - 2 褐灰色土 As-Aを主体。黄褐色土を混入する(1号溝埋没土)。



(断面図は1:40)



第108図 3区1号・3号溝と出土遺物



第109図 3区2号溝と出土遺物

点がある(観P183)。

所見 浅間A軽石降下後に掘削され、近代まで使用されていた溝である。

3区3号溝 (第108図 PL27・36)

位置 20L-16~18G

重複 第1面3区水田に先出する。

形状 東西方向に走行を有する。西端はやや南方向に向きを変えている。走長10.56mを検出した。断面形はレンズ状を呈している。規模は上幅0.44~0.75m、下幅0.21~0.45m、残存高0.03~0.14mを測る。底面の標高は東端で68.56m、西端で68.56mである。両端における標高差はなかった。

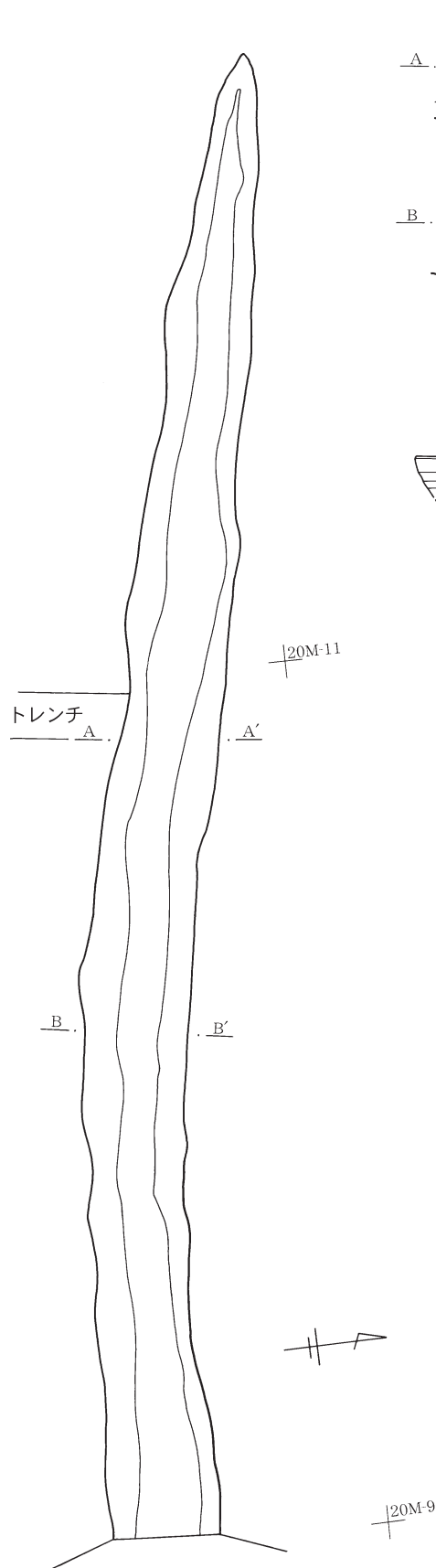
方位 N-115°-E

埋没土 浅間A軽石を多量に含む黄褐色土が堆積する。本遺構は、第1面3区水田の耕作土である浅間A軽石を混土する橙色洪水層により覆われていた。

遺物 埋没土中から軟質陶器鍋(1・2)、磁器皿(3)が出土している。この他に非掲載遺物として、陶器碗2点、磁器碗2点・鉢1点、瓦3点、煉瓦1点、土師器甕1点がある(観P183)。

所見 浅間A軽石降下後掘削され、近世・近代と使用された溝である。

II 発掘調査の記録



A-A'

- 1 黄褐色土 As-Aを多量に含む。褐灰色粘質土を多く混入 (As-A混水田耕作土)。
- 2 黄褐色土 As-Aを含む。褐灰色粘質土を多く混入 (As-A混水田耕作土)。
- 3 褐灰色土 As-Aを主体。黄褐色土をブロック状に少し混入 (4号溝埋没土)。

3区4号溝 (第110図 PL28・36)

位置 20L-9~12、M-11・12G

形状 東西方向に走行を有する。東側は北側寄りに走行を変えている。走長17.21mを検出した。断面形はレンズ状を呈する。規模は上幅0.40~1.28m、下幅0.07~0.69m、残存高0.02~0.28mを測る。底面の標高は東端で68.36m、西端で68.57mである。両端における標高差は0.21mである。西側は後世の削平を受けており、原形はさらに西側方向に延びていたと考えられる。

方位 N-102°-E

埋没土 浅間A軽石を主体とする褐灰色土が堆積していた。第2面で報告した浅間A軽石降下以前の水田耕作土を掘り込み、第1面で報告した浅間A軽石を混入する黄褐色土を耕作土によって覆われている。

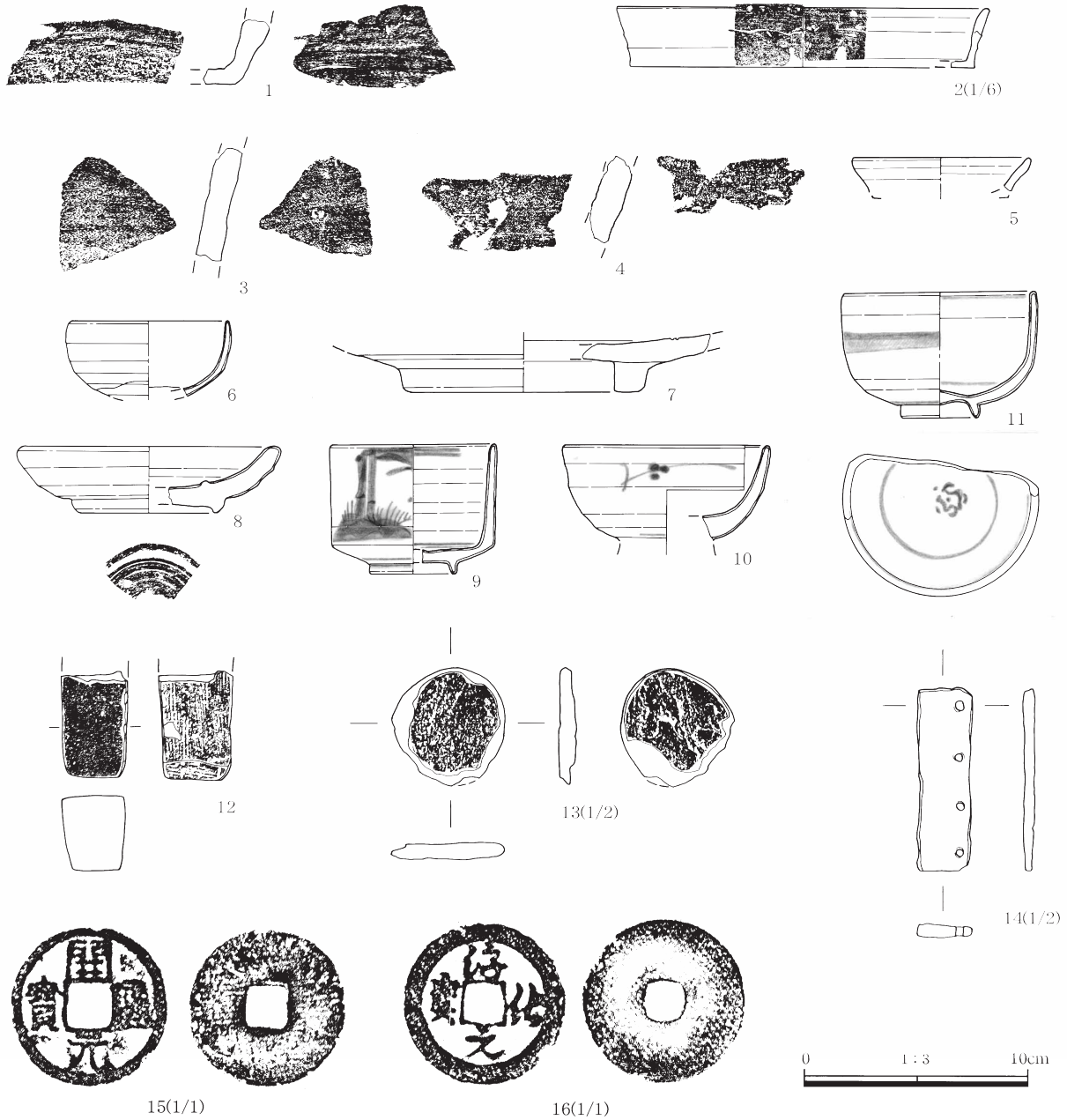
遺物 埋没土中から陶器皿(1)が出土している(観P184)。

所見 浅間A軽石降下後の掘削と考えられる。第3面で検出した水田区画と走行をほぼ一致させていることから、土地区画のための溝と考えられる。

4区1号溝 (第111・112図 PL28・36・37)

位置 20E-14~19、F-17・18G

第110図 3区4号溝と出土遺物



第111図 4区1号溝出土遺物

重複 2号溝と重複するが、前後関係は不明。

形状 調査時に、第1面で1号溝と呼称し調査した溝と、第3面(報告の第4面)で調査した12号溝は、同一遺構と考えられた。ゆえに本報告では、12号溝を欠番とする。

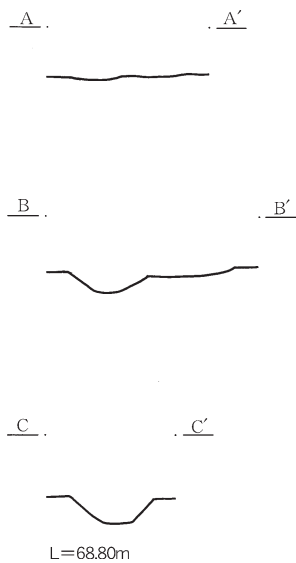
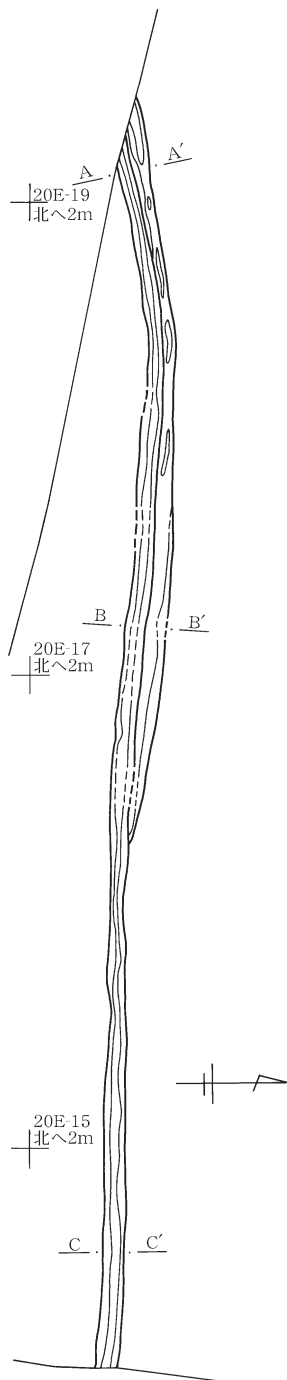
東西方向に走行を有するが、西側は緩やかに弧を描いている。また、東端から西方約11.2mの地点で北縁は中段を有しており、掘り替えしがあったことが分かる。走長26.28mを検出した。断面形は浅い逆

台形、またはレンズ状を呈していた。規模は、上幅0.27~0.80m、下幅0.08~0.28m、残存高0.01~0.16mを測る。底面の標高は東端で68.29m、西端で68.52mである。両端における標高差は0.23mである。

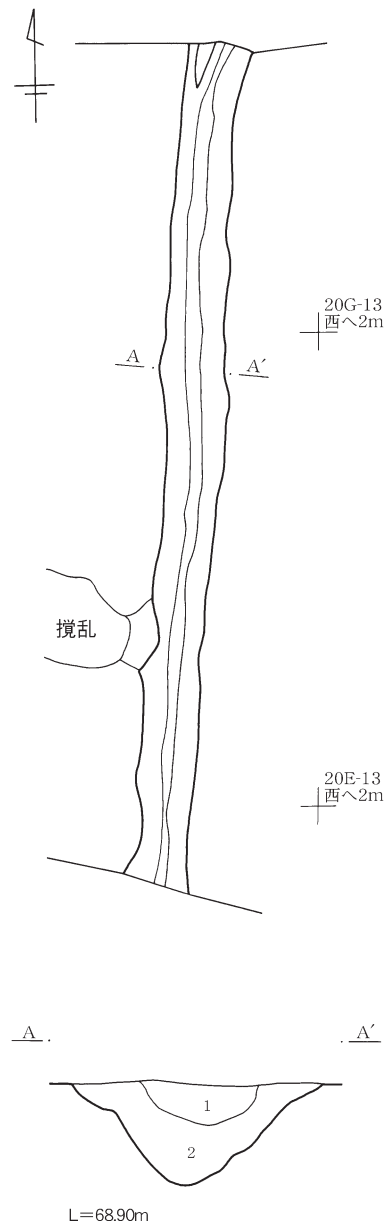
方位 N-90°-E(東側)、N-79°-E(西側)
埋没土 浅間B軽石下の黒色粘質土層まで掘り込んでいた。浅間A軽石を多く含む褐灰色土が堆積している。底面、埋没土中に数個の礫が含まれていた。

II 発掘調査の記録

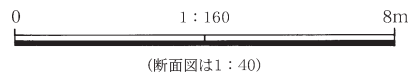
1号溝



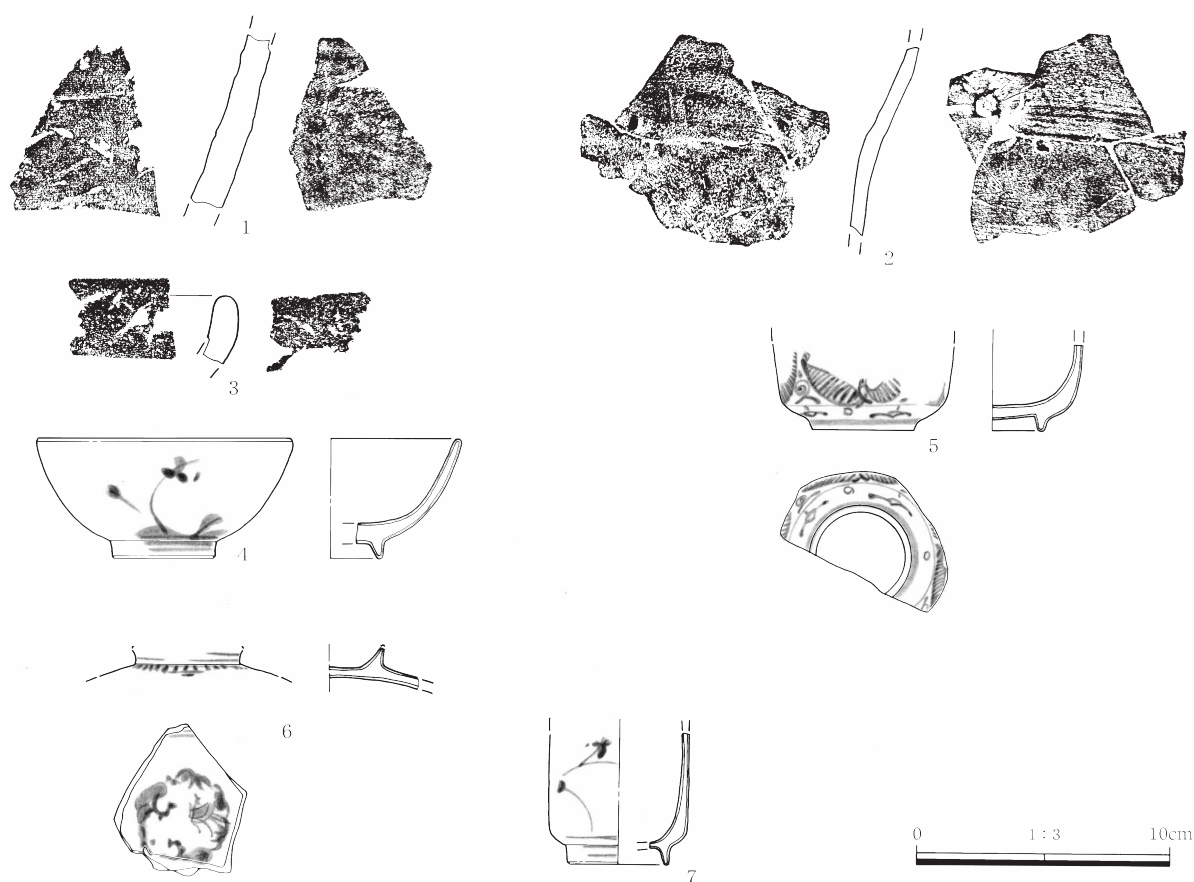
2号溝



- A-A'
- 1 褐灰色土 As-Aを含む。褐灰色粘質土主体。橙色洪水層土は少し含む。
 - 2 明褐灰色土 明褐灰色粘質土主体。橙色洪水層土を含む。
- ※ 1・2層からガラス、プラスチック等の現代の容器も出土する。



第112図 4区1号・2号溝



第113図 4区2号溝出土遺物

遺物 埋没土中から軟質陶器内耳鍋(1・3・4)・焙烙(2)、陶器小碗(6)・鉢(7)・皿(8)、磁器筒形碗(9)・碗(10)・丸碗(11)、土師質土器皿(5)、砥石(12)、石製品円盤(13)、鉄製品板状鉄製品(14)、古銭(15・16)が出土している。非掲載遺物には、陶器皿2点・碗1点・播鉢1点・甕2点、磁器碗7点・皿1点、軟質陶器内耳鍋1点、鉄製品1点、須恵器、土師器など20点がある(観P184・185)。

所見 浅間A軽石降下後も使用されていた溝である。洪水堆積層で埋没した溝を掘り替えしたことも考えられ、上限は浅間A軽石降下前の17世紀代となる可能性もある。調査時の所見では、2号溝と同時期に存在し、この溝から分岐していたことが指摘されている。東端延長線上に2b区1号溝が見られる。

4区2号溝 (第112図 PL28・37)

位置 20D～G-13・14、H-13G

重複 1号溝と重複するが、前後関係は不明であ

る。第5面で掘削された1号屋敷5号溝の埋没土を掘り込む。また、検出部分の90%以上が現代の溝と重複していた。北端延長線上に3区2号溝が検出されている。同一の遺構であろうか。

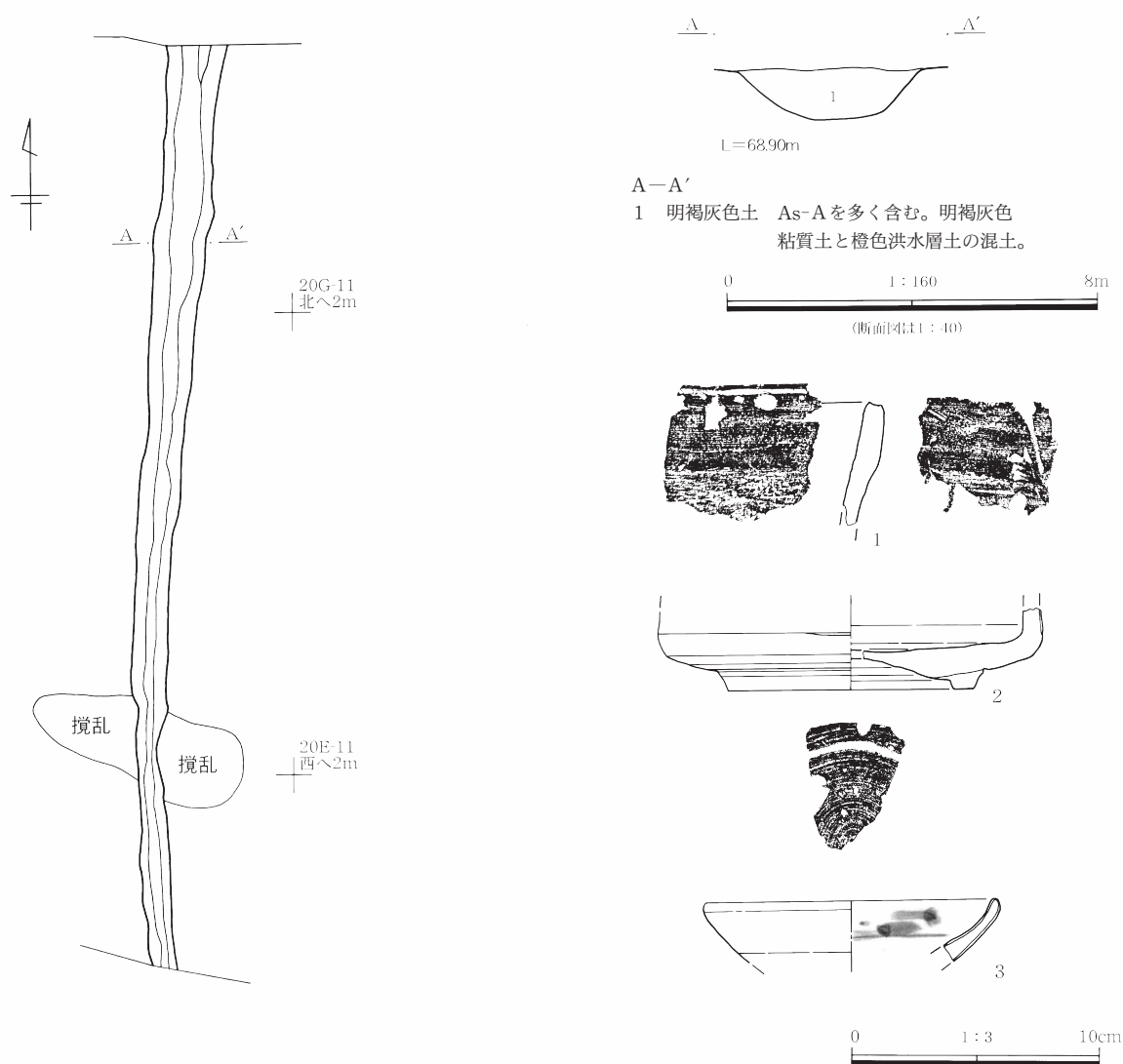
形状 南北方向に直線的に走行する。走長17.99mを検出した。断面形は逆台形、あるいは薬研状を呈していた。規模は上幅0.95～1.40m、下幅0.08～0.41m、残存高0.57～0.31mを測る。底面の標高は南端で68.25m、北端で68.24mである。両端における標高差は0.01mである。

方位 N-3°-E

埋没土 浅間A軽石を含む明褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から陶器蓋(6)、磁器碗(4・5)・小碗(7)、軟質陶器内耳鍋(1～3)を出土している。この他に非掲載遺物として、陶器碗14点・灯明皿2点・播鉢4点、磁器碗12点・鉢7点、軟質陶器内耳

II 発掘調査の記録



第114図 4区3号溝と出土遺物

鍋7点、須恵器2点、土師器4点、ガラス製品2点、瓦12点、砥石1点など73点がある(観P185・186)。

所見 浅間A軽石降下後の掘削と考えられ、近世以降継続して使用されている。埋没土の状況から、1号・3号溝と同時に存在していた可能性が考えられる。

4区3号溝 (第114図 PL28・37)

位置 20D~G-11・12、H-11G

重複 第5面で掘削された2号屋敷4号溝と、検出位置・走行をほぼ等しくする。また、西方約10mで検出された2号溝とも走行を等しくし、平行している。

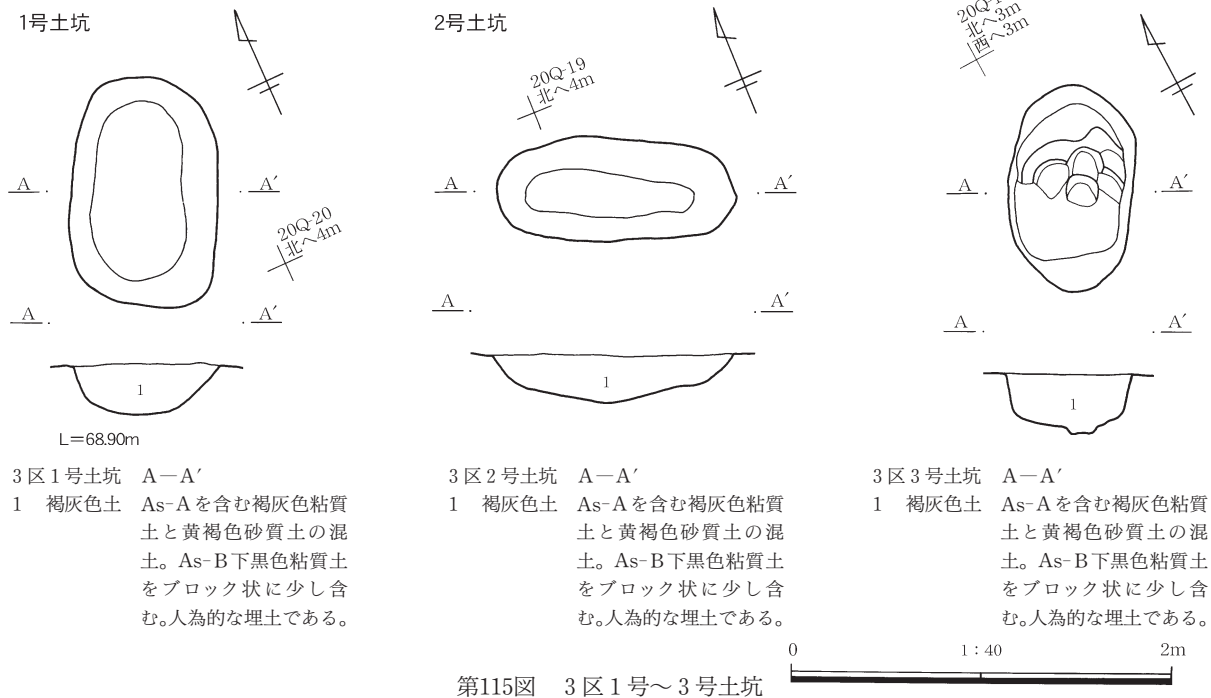
形状 南北方向に直線的に走行する。走長20.11m

を検出した。断面形は逆台形を呈する。規模は上幅0.43~1.29m、下幅0.11~0.68m、残存高0.09~0.32mを測る。底面の標高は南端で68.55m、北端で68.39mである。両端における標高差は0.16mである。

方位 N-5°-E

埋没土 浅間A軽石を多く含む明褐灰色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から陶器甕(2)、磁器皿(3)、軟質陶器内耳鍋(1)が出土している。この他に非掲載遺物として、陶器皿2点・碗1点・挿鉢2点、磁器碗1点、軟質陶器内耳鍋3点、瓦2点など13点が出土している(観P185・186)。



所見 浅間A軽石降下後の掘削と考えられる。近世以降継続して使用されている。埋没土の状況が1号・2号溝と共通しており、同時に存在していた可能性が考えられる。

(7) 土坑

3区1号土坑 (第115図 PL29)

位置 20Q・R-20G

形状 調査区西北部分で検出した。西側方向6.00mに2号土坑、8.00mに3号土坑が位置する。平面形は長円形を呈する。規模は長径1.21m、短径0.76mを測る。底面はほぼ水平で、深さ0.24mである。

方位 N-25°-E

埋没土 底面はHr-FP泥流層まで掘り込まれていた。浅間A軽石を含む褐灰色土が充填されていた。人為的な埋土である。

所見 性格は不明である。土地利用の関係も不明である。陶器碗の破片1点が出土しているが、詳細な掘削年代は不明である。埋没土全体に浅間A軽石を含むことから、近世以降の所産と考えられる。

3区2号土坑 (第115図 PL29)

位置 20Q-18・19G

形状 平面形は、長径に対して短径の小さい長円

形を呈する。規模は長径1.36m、短径0.55mを測る。底面は中央に向かって、0.03mほど低くなる形状である。深さは0.24mである。

方位 N-112°-E

埋没土 浅間A軽石を含む褐灰色土が充填されていた。人為的な埋土である。

所見 性格は不明である。出土遺物がなく、詳細な掘削年代も不明であるが、埋没土全体に浅間A軽石を含むことから、近世以降の所産と考えられる。

3区3号土坑 (第115図 PL29)

位置 20Q-18G

形状 平面形は長円形を呈する。規模は長径1.10m、短径0.65mを測る。底面には、掘削時の鋤または鍬によると考えられる工具痕が残存していた。深さは0.25mである。

方位 N-22°30'-E

埋没土 浅間A軽石を含む褐灰色土が充填されていた。人為的な埋土である。

所見 性格は不明である。出土遺物がなく、詳細な掘削年代も不明であるが、埋没土全体に浅間A軽石を含むことから、近世以降の所産と考えられる。

10 遺構外出土の遺物

(1) 概要

本遺跡の調査においては、江戸時代、1783(天明3)年以降に残された第1面の遺構から、古墳時代の第8面まで、各期・各種の遺構が検出され、ここから出土した遺物については、既に実測図を掲載、個々の観察結果については、その内容を観察表として記したところである。今回の調査においては、それらの出土遺物の他に、遺構検出作業中、あるいは攪乱土層内などから、出土遺構の帰属が確認できない遺物が多数出土している。これらについて、全てを資料化することは不可能であることから、時代・器種・成整形の特徴などから、必要と考えられるものについて、選択して資料化した。以下、縄文時代から中・

近世にいたるまで、時代別に実測図を掲載、観察表にその観察内容を記述しておく。

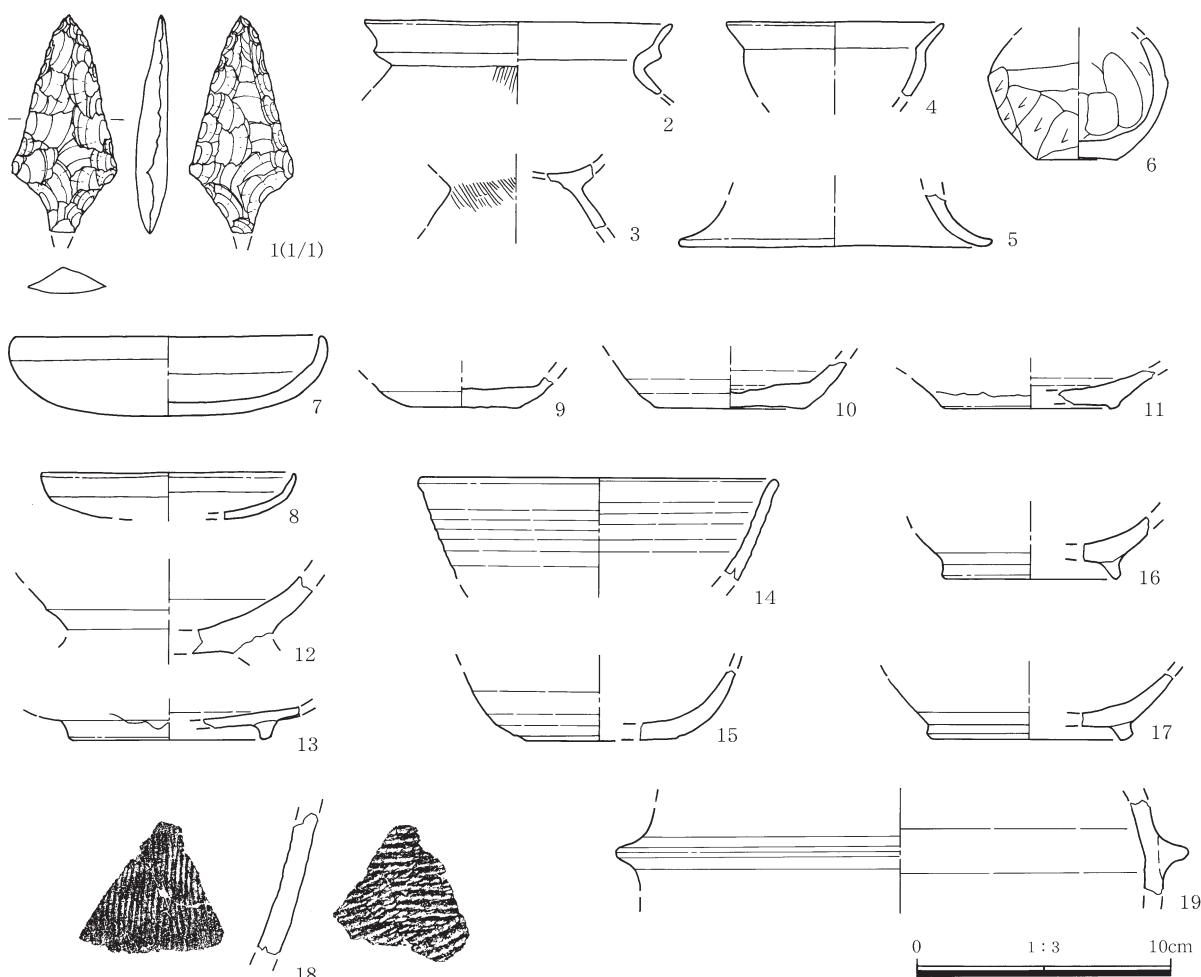
(2) 縄文時代の遺物(第116図 PL37)

本遺跡の調査において、縄文時代の遺構は検出されなかった。Iの3で記したよう、玉村町およびその周辺においては、縄文時代の遺跡分布は稀薄である。近年の調査で、土器・石器の出土が知られる遺跡も増加しているが、多くの遺跡における状況は、本遺跡と同様と言えよう。

本調査では、4区30F-1グリッドから、チャート製の打製石鏃1点が出土している。第116図の1で、形状は凸茎有茎鏃である。製作年代は不明である。

(3) 古墳時代の遺物(第116図・PL37)

今回の調査においては、2b区のHr-FP泥流下から水田が、3区から溝や竪穴状遺構、土坑が検出さ



第116図 遺構外出土の遺物(1)

れている。2 b区では、Hr-FP泥流の層中・層下から、土師器の杯や甕が出土している。3区・4区においても、特段出土集中箇所が見られることはないが、全域の各層からの出土が見られた。

第116図2と3は、2 b区出土の土師器S字状口縁台付甕の破片である。4は2 b区出土の土師器鉢である。5は高杯の脚部破片と考えられる。6は4区20C-9グリッド出土の土師器埴の胴部破片である。2～4は前期、6は前期から中期の所産と考えられる。土師器杯や須恵器甕は、破片が少量ずつ出土しているが、古代の資料との判別が困難であったことから、資料化を行わなかった(観P186)。

(4) 奈良・平安時代の遺物(第116図 PL37)

今回の調査においては、第7面で報告した浅間B軽石下の水田、および4区11号溝が平安時代の所産と考えられる。これらの水田や、溝に直接伴う遺物は全くなかったが、浅間B軽石の上層に堆積し、第5面の確認面にもなった基本土層4層、浅間B軽石混土中から、古代の土師器・須恵器が多数出土した。

8は2 b区出土の土師器杯、7は3区出土の土師器杯である。

10・14・15は、須恵器杯の破片である。9も杯と考えられる。10は3区出土、他は4区南東部分、20E-11グリッド付近からの出土である。11・16・17は、須恵器高台付椀である。17は4区、それ以外は2 b区出土である。13は2 b区出土の灰釉陶器高台付椀である。

12は4区20E-11グリッド付近出土の須恵器で台付壺と考えられる。19は2 a区出土の羽釜の破片である。

それぞれの年代は、土師器杯が7世紀後半、須恵器杯・椀が10世紀後半、羽釜が10世紀代である(観P186・187)。

(5) 中・近世以降の遺物(第118図 PL37～39)

今回の調査の中で、中世の遺構としては、3区・4区にわたり検出した第5面の1号・2号屋敷と、それを構成したと考えられる諸遺構や用水路、これに後出して残されたと考えられる第4面帰属の遺構

がある。これらの遺構からは、軟質陶器を主体とした土器・石製品・古銭が出土している。また、中世から近世にかかる時期の遺構としては、第3面に帰属する3区水田・畠などがあるが、これらに直接伴う遺物は出土していない。

近世の遺構としては、第2面・第1面が浅間A軽石が降下した1783(天明3)年を前後する時期であり、これらの面で検出された溝の埋没土中からは、17世紀以降、近・現代にいたるまでの陶器・磁器などが出土している。

ここでは各面の調査時において、上記の遺構以外から出土した遺物の中から、重要と考えられるものを選別して資料化・掲載した。なお、遺構内外の出土を問わず、明らかに近代以降の所産と考えられる資料については、その残存状況にかかわらず、今回の報告においては資料化から除外している。

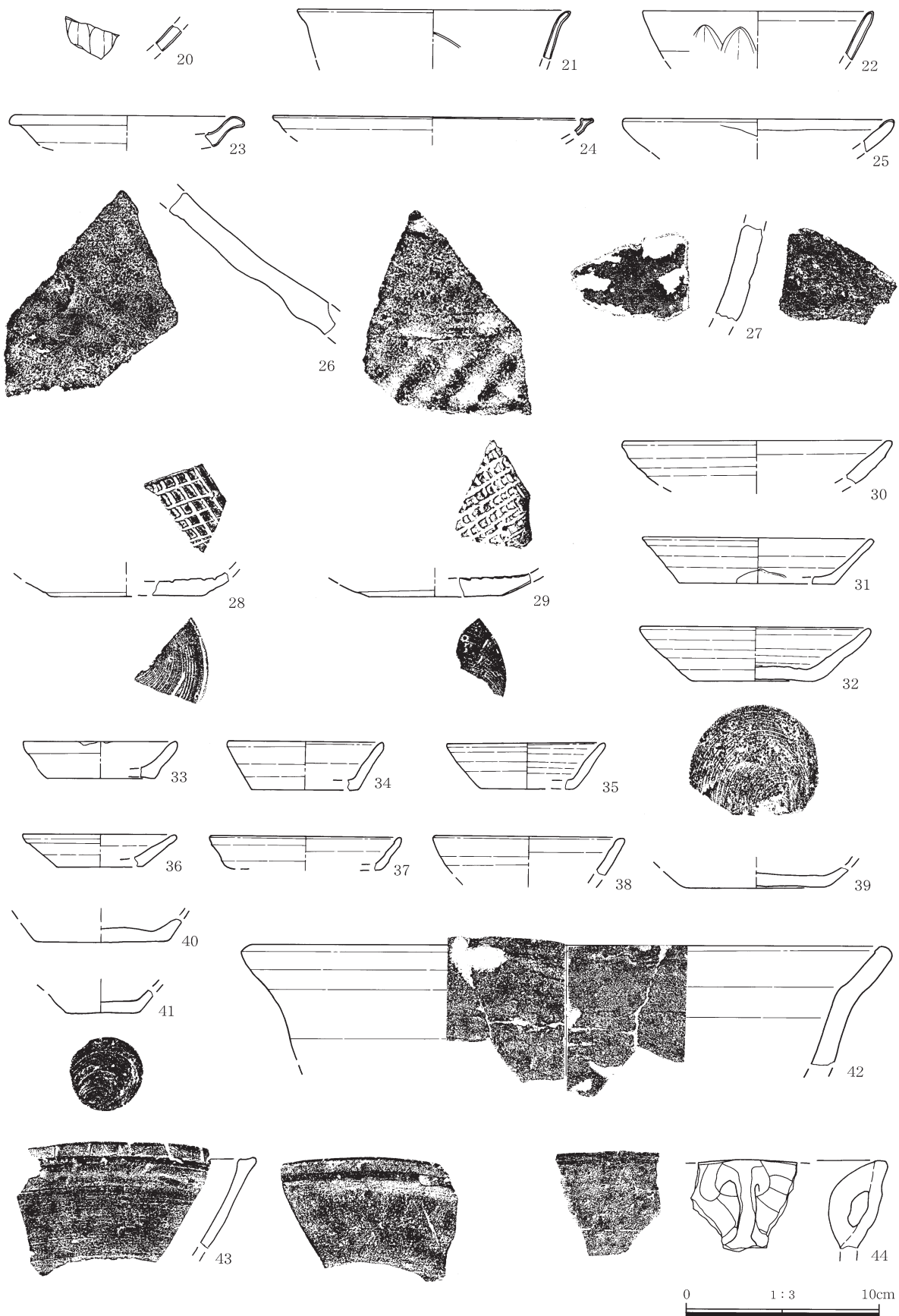
第118・119図20から58は中世の所産と考えられる。出土層位は、3区・4区の浅間B軽石混土層中や、混土層上面からのものが多い。この層位は本報告の第5面(調査時の第3面)にあたることから、これらの遺物は本来は、1号・2号屋敷と関係があったものと考えられる。この他に、浅間A軽石混土層中からの出土も少数認められた。

20～23は青磁である。いずれも破片であるが、20・22は碗で13世紀中～後葉の所産である。中国製と考えられる。21も碗と考えられる。23は盤である。

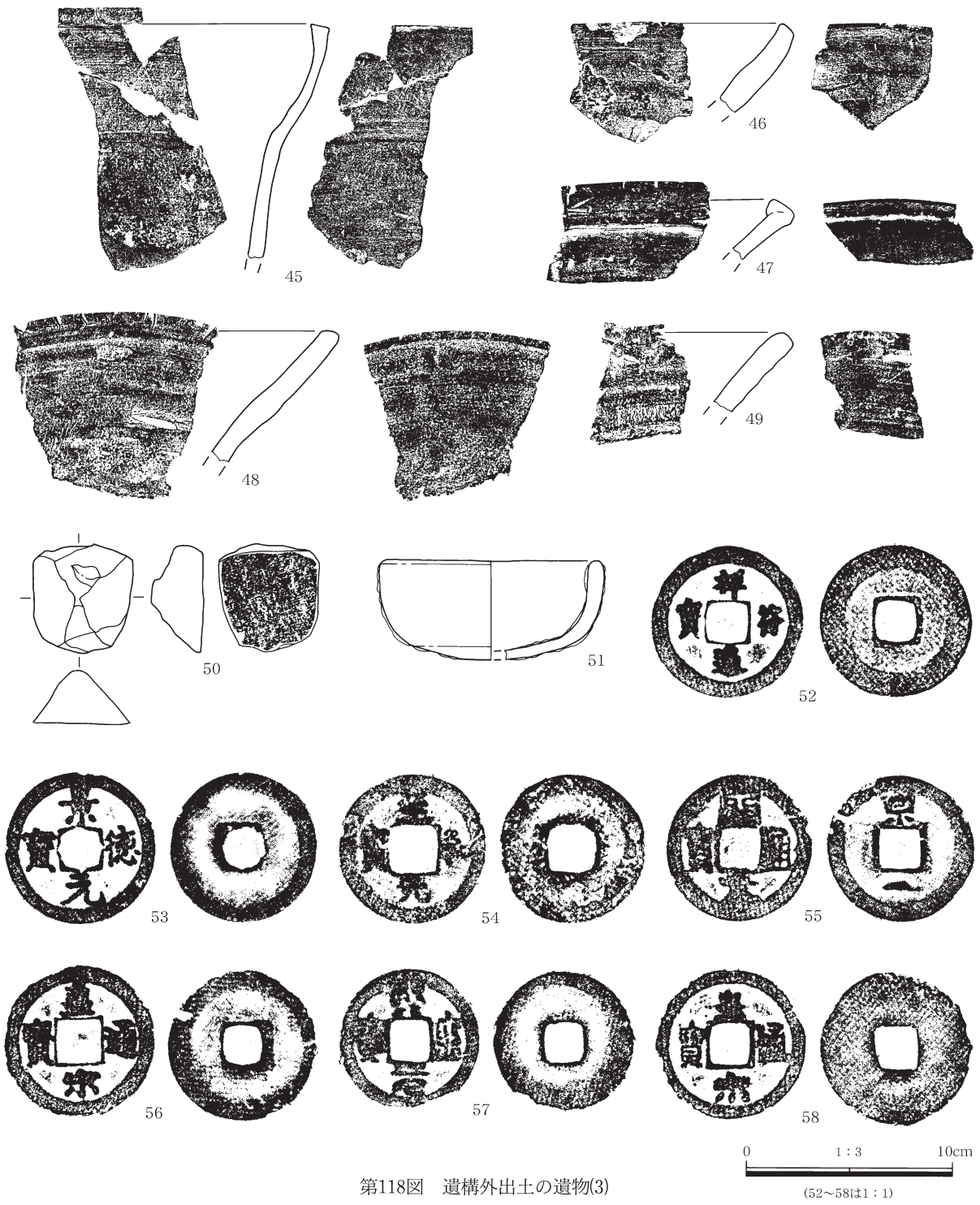
24～29は陶器である。24・25は古瀬戸の大皿・皿である。26・27は甕の胴部破片である。26は常滑産である。27も常滑産と考えられる。28・29は古瀬戸のおろし皿の破片である。

30～41は土師質土器皿である。31・33は口縁部の先端に煤の付着が見られることから、灯明皿として機能していたものと考えられる。形状は口径の規模に差異が認められる。33～36などは、口径8cm前後で小径の部類に入る。31・32は口径12cmほどあり、大径の方に区分される。これらの中には、近世の所産となるものが含まれる可能性はあるが、ここに一括して報告する(観P187～189)。

II 発掘調査の記録



第117図 遺構外出土の遺物(2)



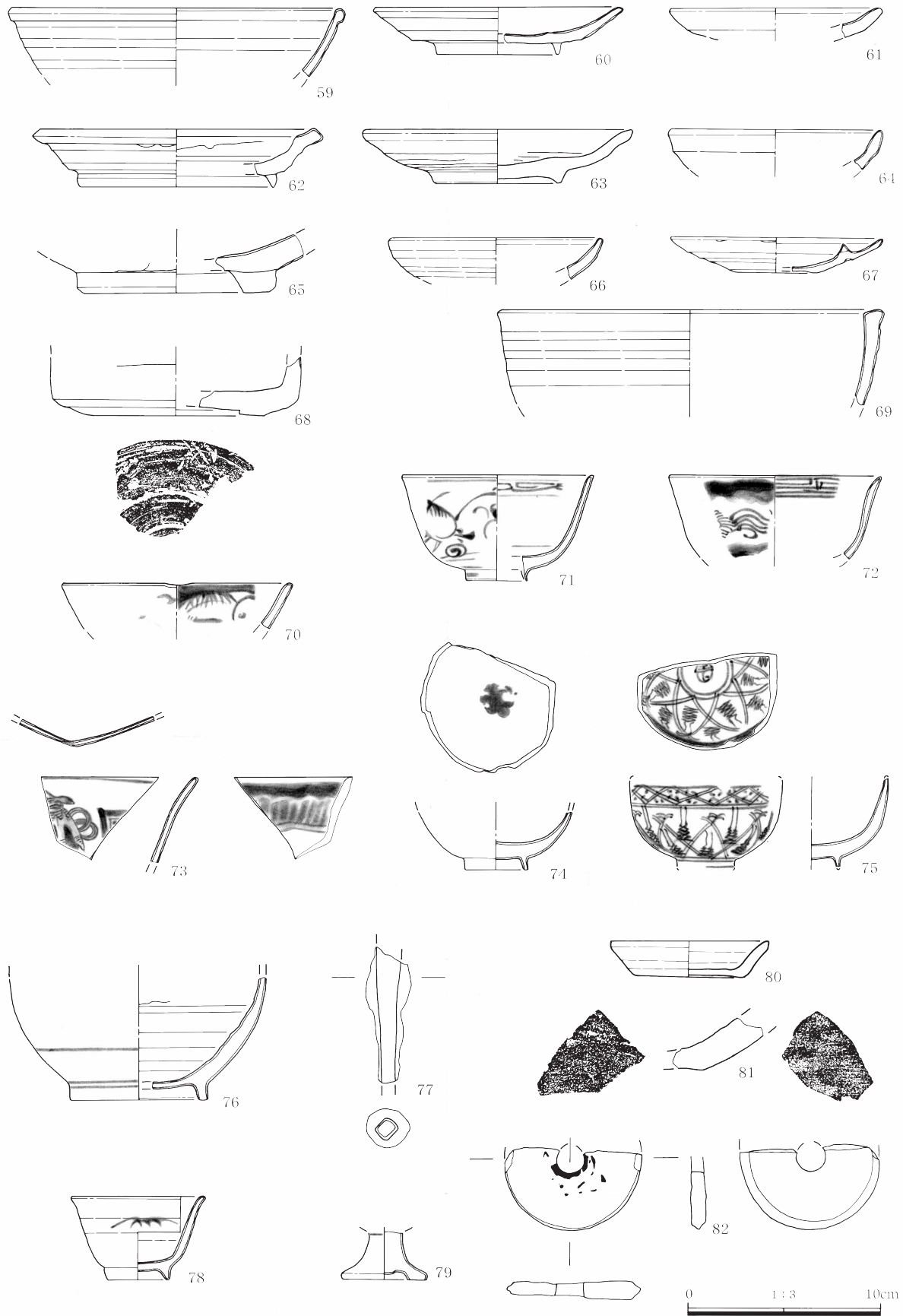
第118図 遺構外出土の遺物(3)

42～49は軟質陶器である。42～46が内耳鍋で、他は搗鉢である。近世の所産となるものが含まれる可能性があるが、江戸末期以降に位置づけられると考えられるようなものはないことから、ここに一括報告した。

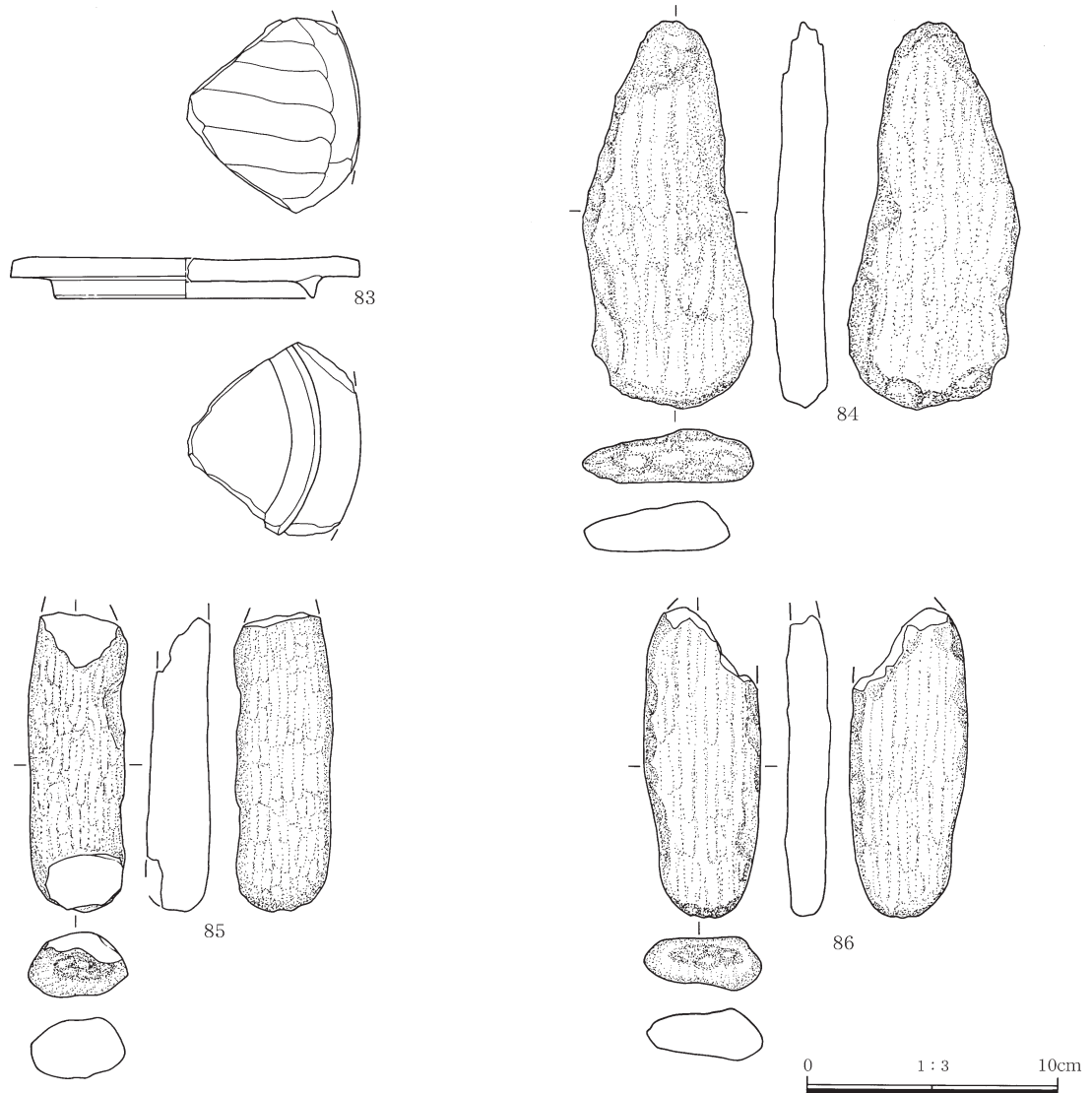
50は石製品で、小型の砥石と考えた。片面は山形を呈している。石材は粗粒輝石安山岩である。

51は鉄製の碗である。調査時の第3面で、4区20F-17グリッド内から検出した。位置的には、第4面で報告した4号集石などに近接している。

II 発掘調査の記録



第119図 遺構外出土の遺物(4)



第120図 遺構外出土の遺物(5)

52～58は古銭である。54は磨耗が著しく、銭種の判別が困難であった。他は中国からの渡来銭である。出土位置は、52の祥符通寶が3区浅間A軽石下畑の注記があることから、第3面の畠畝間からの出土と考えられる。53～58は4区の出土である。53の景德元寶は、20F-10グリッドの第1面、あるいは第2面からの出土である。54以下は第5面の調査時の出土と考えられる。銭種判読不明の54と、57の熙寧元寶は20E-9グリッドからの出土で、B混上・B混の注記がある。56の皇宋通寶は20E-10グリッドの出土で、B混の注記が、55の開元通寶は20F-17グリッドの出土で、B混上の注記が、58は館内・B混

中の注記がある。

第119図59から79は近世の所産と考えられる。59～69は陶器である。59は碗である。60～64は皿である。

64は内外面に灰釉がかけられる。65も皿と考えられる。66は灯明皿、67は灯明受皿である。69は片口の見られる鉢と考えられる。68も鉢であろうか。産地は59が肥前産、60が美濃産、67が京・信楽系である他は、瀬戸・美濃産である。

70～76・78・79は磁器である。71・72・74・75は碗である。72は外面に簡略化した龍の文様、内面に簡略化した雷文が見られる。74は青磁の染付である。

II 発掘調査の記録

内面の見込部に、コンニャク判による五弁花が施されていると考えられる。71は端反碗で、内外面に細かな文様が見られる。75は内外面に文様が描かれている。先端には斜格子状の文様が、下半には山形の区画文が見られる。70は皿で、内外面に草文の文様が描かれている。73は鉢で、口縁部は八角形である。76は瓶で、胴部中位から高台部の残存である。79は仏飯器で、小型の脚部が残存していた。78は小杯で、笹文が描かれている。

71・75を除いた他は肥前産、あるいは肥前産の可能性のあるものである。

77は棒状の鉄製品である。3区浅間A軽石降下前の水田面の覆土中からの出土である(観P 189～191)。

この項の最後に、時期不明の遺構外出土遺物について合わせて記しておく。第119図80～82と第120図83は土器・土製品である。

80は土師質土器皿である。口径は8.1cmと小径である。81は軟質陶器の甕と考えられる破片である。82は土製の有孔円盤である。有孔皿の二次利用と考えられ、孔付近に煤が付着している。83は軟質陶器の蓋である。内面に断面三角形のかえりが付いている。いずれも中世以降の所産と考えられる。

第120図84～86は石製品である。いずれも敲石と推定される。84は断面扁平で板状を呈する。小口部分は敲打により磨耗している。85・86は棒状を呈し、小口部分に敲打痕が認められる。

石材は84が雲母石英片岩、85が黒色片岩、86が粗粒輝石安山岩である(観P 191)。

III 分 析

1 福島飯玉遺跡出土人骨

檜崎 修一郎

はじめに

福島飯玉遺跡は、群馬県佐波郡玉村町福島に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成13(2001)年4月～同14(2002)年12月まで行われた。

本遺跡4区の1号墓坑及び1号火葬跡より、それぞれ中世の土葬人骨及び火葬人骨が出土したので、以下に報告する。なお、1号墓坑及び1号火葬跡は4区の中央北側に位置し、13号溝に接して約5mほど離れて位置している。

1号墓坑出土人骨は平成13(2001)年7月16日～同月17日に検出されており、1号火葬跡出土人骨は平成13(2001)年8月8日に検出されている。

出土人骨は水洗あるいは清掃後、観察・写真撮影・計測を行った。

(1) 4区1号墓坑

1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約78cm・短径約55cm・深さ約13cmの楕円形土坑より出土している。なお、本土坑の長軸方向は、南北である。

2) 人骨の出土部位

人骨の残存状態は非常に悪く、わずかに、出土歯の歯冠部のみ検出されている。被葬者の死亡年齢は、約4歳と推定されている。約4歳の状態では、頭蓋骨及び四肢骨が薄いため歯しか残存しなかったと推

定される。

3) 副葬品

副葬品は、銭貨の嘉祐元寶2点・皇宋通寶2点・元豊通寶1点・元祐通寶1点の合計6点が検出されている。これら6点全てが、北宋銭である。

4) 被葬者の頭位・埋葬状態

出土歯の出土位置から、被葬者の頭位は北である。また、埋葬状態は不明である。しかしながら、本被葬者は、約4歳の女性(女兒)であると推定されている。現代日本人の1975年の統計では、4歳の男児の身長は102.3cm・女兒の身長は101.7cmである(鈴木、1996)。土坑の長径は約78cmであり、伸展葬は不可能である。したがって、屈葬で埋葬されたと推定される。

5) 被葬者の個体数

出土歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

6) 被葬者の性別

出土永久歯の歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性(女兒)であると推定される。

7) 被葬者の死亡年齢

本被葬者の出土歯は、乳歯と永久歯の混合歯列である。これらの出土歯の咬耗度及び歯根の状態から、被葬者の死亡年齢は、約4歳であると推定される。

8) 被葬者の古病理

出土乳歯の内、上顎右第2乳臼歯(m2)の咬合面に、恐らく、齲蝕(虫歯)によると推定される痕跡が認められた。

第25表 福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土人骨出土永久歯歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	福島飯玉遺跡4区1号墓坑				中世時代人* (Matsumura, 1995)		江戸時代人* (Matsumura, 1995)		現代人** (権田, 1959)		
		右	No.	左	No.	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
上顎	I 1	MD	8.0	B-15	8.1	B-16	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
		BL	6.7		6.7		7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28
	M 1	MD	10.0	B-3	10.0	B-4	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		BL	10.9		10.8		11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
下顎	M 1	MD	11.0	No.無し	10.9	B-1	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	10.3		10.2		11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2. 歯種は、I 1 (第1切歯)・M 1 (第1大臼歯)を意味する。

註3. 計測項目は、MD (歯冠近遠心径)・BL (歯冠唇頬舌径)を意味する。

III 分 析

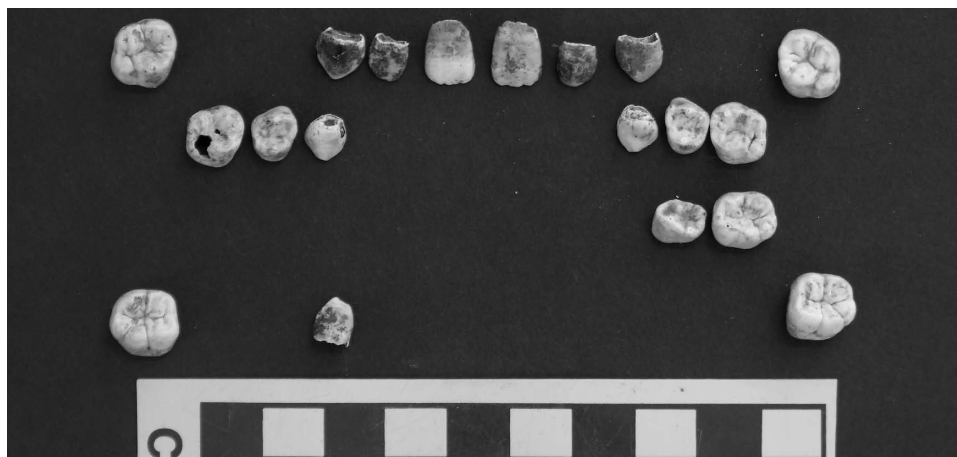
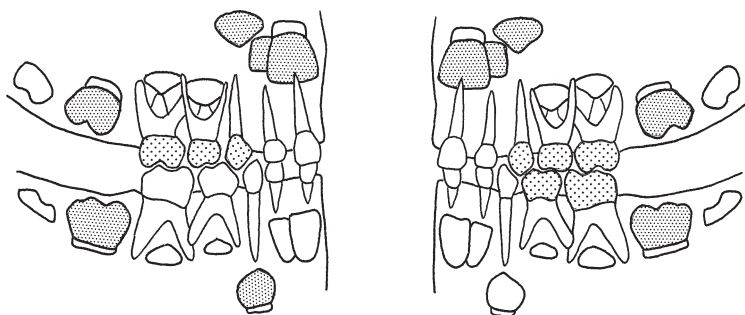


写真3 福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土歯



第121図 福島飯玉遺跡4区1号墓坑出土歯出土部位図（点が密は永久歯で粗は乳歯を意味する）

(2) 4区1号火葬跡

1) 人骨の出土状況

人骨は、長軸約113cm・短軸約72cm・深さ約9cm～25cmの土坑から出土している。なお、本土坑の長軸方向は、南北である。

また、本土坑の西側には、長さ約37cmの突出部が認められる。この突出部は、焼き口と推定されるので、火葬時には恐らく西側から風が吹いていたものと推定される。

2) 被火葬者の火葬状態

人骨の出土状況から、被火葬者は、頭部を北に向けた屈位で火葬に付されたと推定される。

中世人骨から身長を推定した、元北里大学の故平本嘉助によると、鎌倉時代人の身長は男性が約159cm・女性が約145cmであり、室町時代人の身長は男性が約157cm・女性が約147cmである(平本、1972)。本火葬跡の被火葬者は成人女性であると推定されており、この推定からも、被火葬者を伸展位ではなく屈位で火葬にしたと推定される。

3) 火葬方法

火葬人骨は、白色を呈しており、約900°C以上の高温で焼成されたと推定される。また、火葬人骨には捻れ及び亀裂が認められるため、白骨化したものを焼成したのではなく遺体をそのまま火葬にしたと推定される。

4) 副葬品

副葬品は、銭貨の開元通寶2点・熙寧通寶1点・淳熙通寶1点の合計4点が検出されている。これら4点の銭貨は、被熱を受けていないため、火葬前ではなく火葬後に副葬されたと推定される。

5) 火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は少ないが、出土部位は一部ずつ全身に及ぶ。大きな傾向としては、頭蓋骨片が多く四肢骨片が少ない傾向にある。

6) 拾骨方法

火葬人骨の残存量は少ないため、現代にまで続く、ほとんどの火葬人骨を拾骨する全部拾骨をした、東日本タイプの拾骨方法であると推定される。

7) 被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量は少ないが、明らかな重複部位は認められないため、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

8) 被火葬者の性別

火葬による収縮を考慮しても、前頭骨の左眼窩部は薄く華奢であり、左側頭骨の乳様突起は小さく華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

9) 被火葬者の死亡年齢

左上顎骨の歯槽部を観察すると、右は第1切歯(I1)～第2小臼歯(P2)まで、左は第1切歯(I1)～第1小臼歯(P1)まで残存している。歯槽部は、歯の生前脱落による歯槽閉鎖が起きておらず、まず、被火葬者の死亡年齢は老齢では無いことが判定できる。また、切歯縫合は癒合している状態であり、正中口蓋縫合は癒合していない状態であるので、約30歳以上で約50歳以下であると判定できる。

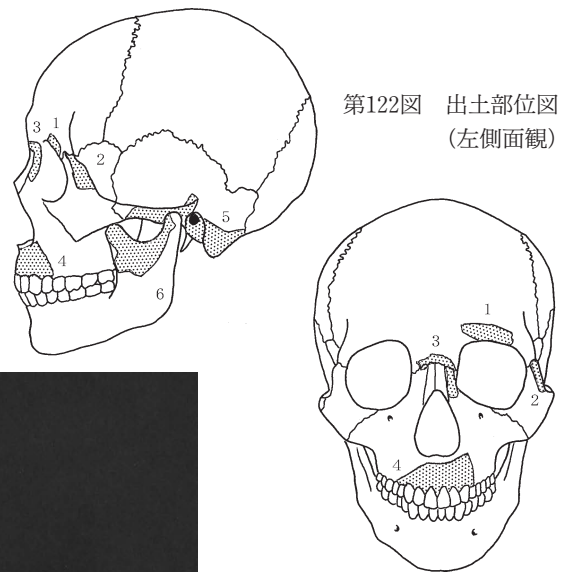
ラムダ(人字)縫合を観察すると、内板は癒合しているものの外板は癒合しかかっている状態である。総合的に、被火葬者の死亡年齢は、約30歳代～40歳代であると推定される。

10) 被火葬者の出自

本被火葬者の前頭骨左眼窩部には、眼窩上孔が認

められた。この眼窩上孔は、弥生時代人・古墳時代人・鎌倉時代人・江戸時代人・現代日本人等の渡来系に多く、縄文時代人や現代アイヌ等の在来系には少ないことが知られている。従って、本被葬者も渡来系である可能性が高い。

なお、群馬県の21遺跡出土45体の中世火葬人骨を調べた研究では、西横手遺跡A区1号火葬人骨と上福島中町遺跡I区3面38号土坑出土火葬人骨のわずか2例にこの眼窩上孔が認められている(檜崎、2007・2008)。ちなみに、この2例共に火葬人骨の残存量が多いため、現代にまで続く、火葬人骨の一部しか拾骨しない西日本タイプの葬法であると推定されており、形質と葬法の一致が認められていた。本被火葬人骨は、形質は渡来系であるが葬法は、東日本タイプである。この形質と葬法の問題は、単純では無いことが問題提起されたことになる。



第122図 出土部位図 (左側面観)

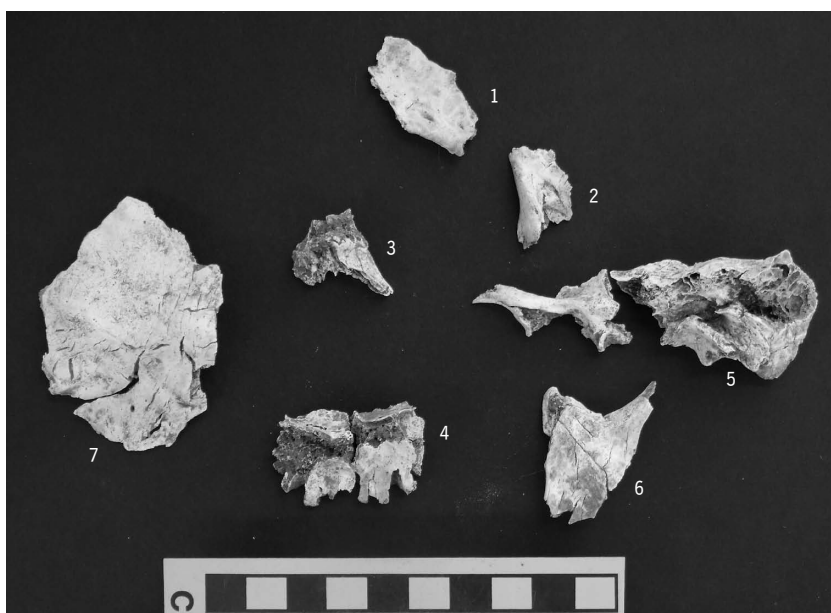
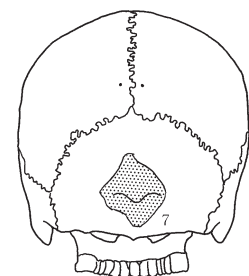


写真4 福島飯玉遺跡4区1号火葬跡出土火葬人骨

第123図 出土部位図 (前面観)



第124図 出土部位図 (後面観)

Ⅲ 分 析

おわりに

福島飯玉遺跡4区の1号墓坑及び1号火葬跡より、中世の土葬人骨及び火葬人骨が出土した。

1号墓坑には、約4歳の女性(女兒)が屈葬で埋葬されていたと推定された。本人骨の上顎右第2乳臼歯には齲蝕が認められた。

1号火葬跡には、約30歳代～40歳代の女性が火葬にされたと推定された。拾骨方法は、全部拾骨する東日本タイプであるが、眼窩上孔が認められ、形質は渡来系であることが推定された。

2 福島飯玉遺跡出土馬歯

檜崎 修一郎

はじめに

福島飯玉遺跡は、群馬県佐波郡玉村町福島に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成13(2001)年4月～同14(2002)年12月まで行われた。

本遺跡3区の用水路上層の溝より、馬歯が出土したので、以下に報告する。出土馬歯は清掃後、観察・写真撮影・計測を行った。なお、出土馬歯の計測方法は、フォン・デン・ドリーシュ(von den DRIESCH, 1976)の方法に従った。

馬歯の鑑定

本馬歯の詳細な出土状況は、不明である。しかしながら、本馬歯の色は斑上に黒色を呈しているため、常時水に浸かった状態ではなく、水の干満の影響を受けていると推定される。したがって、溝の底面では無く、上面の方に埋没していたと推定される。

本馬歯の部位は、下顎右第4小白歯(P4)である。性別は、馬(ウマ)の場合、犬歯の有無や寛骨の形態で推定が可能である。今回、これらは検出されていないため、不明である。

本馬歯の計測値は、歯冠近遠心径(MD)が28mm・歯冠頬舌径(BL)が15mm・歯冠高(CH)が50mmである。したがって、本馬歯の死亡年齢は、約7歳の牡馬であると推定される。

謝辞

本出土人骨を記載する機会を与您にいただき、考古学的情報をいただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の徳江秀夫氏に感謝いたします。

引用文献

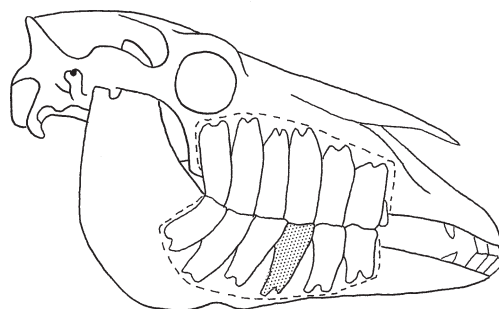
- 檜崎修一郎 2007 群馬県出土中世火葬遺構、「研究紀要」、(25):101-120。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
檜崎修一郎 2008 群馬県中世火葬遺構出土火葬人骨、「研究紀要」、(26):91-118 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



写真5 頬側面観



写真6 舌側面観



第125図 馬歯出土部位図

謝辞

本出土馬歯を記載する機会を与您にいただき、考古学的情報をいただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の徳江秀夫氏に感謝いたします。

引用文献

- von den DRIESCH, Angela 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*, Peabody Museum Bulletins, Harvard University

IV 調査成果と整理のまとめ

1 福島飯玉遺跡の調査成果

今回、福島飯玉遺跡の調査において、古墳時代後期から近世にいたるまでの諸遺構が検出された。調査は、最上層の遺構確認面を第1面とし、以下、順次、第2面、第3面と遺構面を確認しながら、合計5面の調査を実施した。また、報告書作成において個々の遺構について検討し、一部の調査面を細分、合計8面の遺構面として報告した。検出した遺構の各面への帰属と数量は23ページの第4表のとおりである。各遺構から出土した主な遺物については第26表に一覧を掲載した。

各調査面については各概要に記したとおりである。本遺跡の包括的な特徴としては、前橋台地上に形成された帯状の微高地と沖積地が、数次にわたる火山灰の降下や洪水、これに起因して発生した泥流の堆積などを経る中、その時々にも最も有効な土地利用が実行された結果、複数面の遺構確認面が残存し、そこに居住と水田・畠などの生産に係わる遺構が繰り返り、大地・土地に刻まれていたことにある。それは災害復旧の歴史を具体的に示す史料でもある。この特徴は隣接する国道354号関連の遺跡全てに共通する内容である。

(1) 古墳時代の福島飯玉遺跡

今回の調査で最も時代を遡る遺構は6世紀中頃の榛名山の噴火後に発生した洪水層(Hr-PA泥流)下から発見されたもので、第8面として報告したものである。3区で溝9条、4区で溝3条、竪穴状遺構1基、土坑1基を検出した。2b区で検出したいわゆる小区画水田はHr-FA泥流により埋没したものと調査所見が得られている。古墳時代の水田遺構は東接する福島飯塚遺跡の4区・5区で古墳時代前期から後半までの3面の水田が、斉田中耕地遺跡では浅間C軽石降下後とHr-FA下の2枚の水田が検出されている。これらの水田はいずれも区画(畦畔)

の軸線方向が沖積地の走行や傾斜に平行、あるいは直行している。古墳時代後期には本遺跡周辺に2b区と同様、北西から南西方向に延びる沖積地が幾筋もあり、古墳時代にはこの低地部分を対象に水田耕作が行われていたものと考えられる。

斉田竹之内遺跡2a区においては古墳時代前期の竪穴住居や井戸が検出されていることから、福島飯玉遺跡周辺の沖積地の開発も福島飯塚遺跡や斉田中耕地遺跡と同様、古墳時代前期に遡るものと考えられる。ただし本遺跡においては当該時期の遺構は検出されなかった。

(2) 平安時代の福島飯玉遺跡

今回の福島飯玉遺跡の調査においては2区・3区において浅間B軽石の1次堆積層により埋没した水田を検出した。第7面として報告した水田面である。畦畔の残存状況は必ずしも良好ではなかったが、同時期の水田遺構は隣接する福島飯塚遺跡、斉田竹之内遺跡、布留坡遺跡をはじめ玉村町域においても多数の遺跡で検出されており、本遺跡周辺に広範囲に存在していたことが周知されている。今回検出した畦畔の方向は基本的に南北方向を指向していたものの2b区においては斜方向の区画も認められた。

玉村町教育委員会の調査成果では砂町遺跡や中道東遺跡、中道西遺跡などで検出された大アゼ(幅1.3m以上)の存在から、玉村町域における条里区画の復元が検討されている⁽¹⁾。本遺跡においても2区と3区を合わせ、東西方向に約140.4mにわたり水田面を検出した。畦畔の残存状態が必ずしも良好と言えなかったこともあるが、条里地割の方1町(109m四方)の区画を踏襲したと見られるような大アゼと呼ぶに相応しい畦の存在は見られなかった。

上記2点の状況からは、平安時代末の水田開発が、古墳時代のように2区の沖積地を対象とするだけでなく、3区の微高地上に至るまで広範囲に及ぶものであり、その区画は条里制施行時の地割りを基礎に、

IV 調査成果と整理のまとめ

第26表 福島飯玉遺跡主な出土遺物の時期

面		区	遺構	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	近代	金属器	石製品
5-1	3	7号溝	12~13C常滑片口鉢									近代1		板碑
5-1	4	6号溝			中世内耳・甗鉢									石鉢・板碑
5-1	4	5号溝			中世内耳・甗鉢									板碑
5-1	4	172・225ビット			土師質土器皿									
5-1	4	246・321ビット			土師質土器皿									
5-1	4	359号ビット			土師質土器皿									
5-1	4	368号ビット			土師質土器皿									
5-1	4	373号ビット			中世内耳									
5-1	4	388号ビット			中世陶器甕?									
5-1	4	408号ビット			中世内耳									
5-1	4	431号ビット			中世内耳・甗鉢・火鉢		15C内耳							
5-1	4	5号井戸			中世内耳									
5-1	4	6号井戸			中世内耳、土師質土器皿									
5-1	4	1号土坑			中世内耳、土師質土器皿									
5-1	4	5号土坑			中世内耳、土師質土器皿									
5-2	4	7号溝			中世内耳									
5-2	4	1号井戸			中世内耳									
5-2	4	3号井戸			中世内耳、土師質土器皿									
5	4	15号溝			中世常滑甕									
5	3	用水路			中世内耳・甗鉢、 古瀬戸おろし皿					江戸瀬戸・美濃片口鉢?、 17C美濃皿、17C末~18C前肥前皿、 時期不明肥前小御杯、 陶胎染付碗				磁石
4	4	8号溝			中世内耳									
4	4	1号墓坑			中世内耳									
4	4	1号火葬跡			中世中国青白磁蓋									
4	4	1号集石			中世甗鉢									
4	4	集石部			瀬戸・美濃灯明受皿、肥前 陶胎染付碗									
1	3	1号溝			龍泉窯系統									
1	3	2号溝			軟質陶器鉢									
1	3	3号溝			中世内耳・焙烙、 土師質土器皿									
1	3	4号溝			中世内耳									
1	4	1号溝			中世内耳									
1	4	2号溝			瀬戸・美濃灯明受皿、肥前 陶胎染付碗									
1	4	3号溝			中世内耳									
1	3	2号溝			中世内耳・甗鉢、中世古瀬 戸大皿・皿・おろし皿、 中世?常滑鉢、中世中国 甕?・盤、土師質土器皿									
1	3	3号溝			龍泉窯系統 碗、13C碗									
1	3	4号溝												
1	4	1号溝												
1	4	2号溝												
1	4	3号溝												
1	4	3号溝												
1	4	3号溝												

これを踏襲しながらも、浅間B軽石が降下した天仁元年（1108）年の時点ではその後の土地利用、旧地形の状況などの影響を受けて条里地割りからはかなり変形をきたしていたことが改めて確認された。斉田竹之内遺跡の2 a 区では平安時代の竪穴住居が検出されており、微高地上には小規模ながらも居住域が展開する地点もあったようである。

今回検出した水田は、土層の堆積状況の観察から浅間B軽石降下後復旧されていないことが知られる。3区の第5面用水路南側では浅間B軽石直上の面において畠の耕作痕と溝1条を検出しており、浅間B軽石の降下後、水田の一部が畠地へと転換されたことが確認された。これは前橋市の女堀遺跡の調査において、その掘削排土下から広範囲にわたり畠が検出されたと類似する状況である。

(3) 中世の福島飯玉遺跡

第5面の調査において、溝で方形に区画された環濠屋敷2箇所を検出した。調査区の関係からいずれもその全容を明らかにすることはできなかったが、1号屋敷は4区中央部から西側部分を主体に、一部、3区南西部分にかけて検出され、南辺を除く3辺の区画溝が確認された。この区画は、東西を画する溝がほぼ平行関係にあるのに対し、北西隅の屈曲部の角度が85度とやや鋭角になっていた。屋敷の規模は、東西で35.54m、南北25.38m以上を測り、3分の1町ほどであったことが想像される。この1号屋敷の東側には2号屋敷が形成されている。2号屋敷の西辺区画溝と1号屋敷の東辺区画溝の走行はほぼ平行関係にあり、その距離は約4.0から4.7mである。さらに1号屋敷の西側には、斉田竹之内遺跡1 b 区内に内区を有する屋敷が形成されており、4区15号溝がこの屋敷の東辺を画するものと考えられた。この2号屋敷の距離はわずか1.5mであった。

また、3区用水路は、1号・2号屋敷の北側、3区の調査区中央、微高地上をほぼ東西方向に貫通していた、上幅11.50から15.85mの人工水路である。斉田竹之内遺跡1 a 区においてもこの上流部分が検出されており、調査区外を北から南方向に進み、斉

田竹之内遺跡1 a 区内で東方向にほぼ直角に屈曲している。また、福島飯塚遺跡6区ではこの遺構が検出されていないことから、本遺跡の東側において、再度流路を屈曲させ、県道藤岡・大胡線の現道下を南北方向に向かっていった可能性が考えられる。

この用水路は3区7号溝により、1号屋敷北辺の区画溝3区8号溝と接続していたことが確認され、1号屋敷と同時存在していたものと考えられる。8号溝との距離は約6.0mから10mで、この間に同時期の遺構は検出されていない。

1号屋敷を構成していたと考えられる遺構としては掘立柱建物4棟、柵列1列、建物あるいは柵列の柱穴である可能性を持つピット307本、井戸3基、土坑10基が検出されている。屋敷の入り口や橋、土塁の存在については確認できなかった。これらの遺構群は、その大半が区画内の中央寄りから検出されており、区画溝近辺からは井戸2基と、土坑1基が検出されただけである。ピットも同様の分布をなしており、偏在傾向を示していた。1号・2号掘立柱建物はその軸線がほぼ同一方向を向いているが重複関係にあることから、屋敷の継続期間に一定の時間幅があることが理解される。また、1号・2号掘立柱建物と重複関係にある5号・8号・9号土坑は、第4面として分離した墓坑や火葬跡と近い時期の所産である可能性も考えられる。

出土遺物は総じて少量であった。区画溝では東辺の4区5号溝から軟質陶器の内耳鍋・播鉢、石製播鉢、板碑破片が、西辺の4区6号溝から軟質陶器の内耳鍋・播鉢が出土している。3区用水路と北辺の区画溝3区8号溝をつなぐ3区7号溝からは12世紀から13世紀の所産と考えられる常滑産の片口鉢の破片と板碑片が出土した。区画内では5号井戸から石臼・砥石・板碑の破片が、6号井戸から軟質陶器播鉢の破片が、1号土坑から軟質陶器内耳鍋が各々出土している。4区5号溝出土の内耳鍋は底部が平底で、頸部に弱いくびれを有して口縁部が立ち上がる形状を呈している。4区6号溝出土資料は口縁部小破片であるが、形状は4区5号溝のそれと類似する

IV 調査成果と整理のまとめ

ものである。

群馬県内の軟質陶器内耳鍋の編年の序列については木津博明氏の成果がある⁽²⁾。その成果に則して、福島飯玉遺跡出土資料について検討してみると、4区5号溝出土資料は木津氏のIV期の範疇に含まれると考えられ、15世紀後半の所産と考えることができるようである。同様の形状の内耳鍋は、斉田竹之内遺跡1b区に内区を有する屋敷の東辺と考えられる4区15号溝内からも多数出土している。

1号屋敷の形成時期、あるいは存続時期を断定することは困難なことであるが、調査面の層位、各遺構の埋没土の状況、出土遺物の年代観から15世紀後半頃を下限とする時期と考えられる。

2号屋敷は4区の調査区東側で検出した。周囲を溝で囲まれていたと考えられるが、西辺を区画すると考えられる4区4号溝以外は検出されておらず、その全容を把握するにはいたらなかった。検出部分の規模は、東西の残長17.58m、南北の残長22.30mであった。4号溝は3区においてはその延長部分を検出していないことから3区と4区の間を横断する現道下で屈曲、東西方向に走行を変えていることが想定される。また、2号屋敷の東辺を区画する南北方向の溝は、2区では検出されていない。4号溝と2区の調査区東端との距離は約80mを測ることから2号屋敷の全体形状、あるいは1号屋敷との関係については今後も慎重な検討が必要となろう。

2号屋敷を構成していたと考えられる遺構としては掘立柱建物4棟、柵列2列、建物あるいは柵列の柱穴である可能性を有するピット92本、井戸3基、土坑1基、屋敷内を区画する溝1条が検出された。1号屋敷同様、入り口部、橋、土塁などの諸施設は確認できなかった。検出された遺構群は、4号溝とのあり方から、屋敷内の北西部分に位置していたものと考えられ、掘立柱建物や柵列は、その軸線が同一方向を向いていることから、一定の企画性を持って配置されていたものと想定される。掘立柱建物の7号と8号が重複関係にあることから屋敷の存続に一定の時間幅があったことがうかがえるものであ

る。

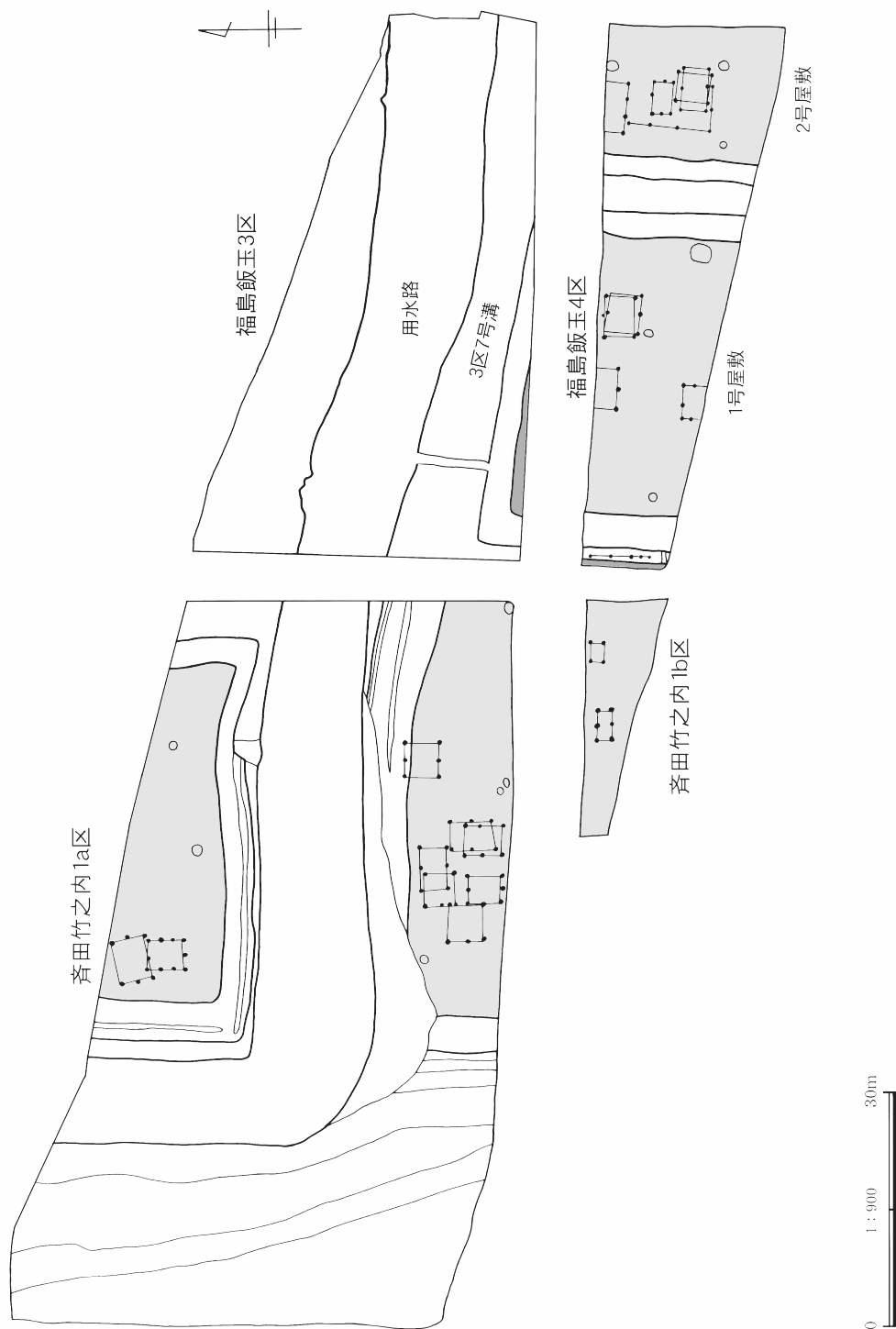
各遺構からの出土遺物は1号屋敷同様、決して豊富とは言えない状況であった。屋敷の区画内を細分するものと考えられた4区7号溝から軟質陶器の内耳鍋・播鉢・火鉢が、1号井戸から内耳鍋が、3号井戸から軟質陶器播鉢、土師質土器皿が出土している。4区7号溝出土の内耳鍋は、底部が丸底で、短い口縁部の付くものと底部が平底のもの2者が見られる。前者は木津氏の編年のII期で15世紀前半の所産、後者はIV期で15世紀後半の所産と考えられる。1号井戸出土の内耳鍋も底部が丸底を呈するもので、口縁部の形状と合わせて考えると木津氏のI期あるいはII期に相当するものと考えられる。3号井戸出土の播鉢は底径に対し器高を有する形状で、内面に卸目があるものである。木津氏により15世紀後半の所産とされるものである。

2号屋敷の形成時期については、各遺構からの出土遺物の年代観からは14世紀後半から15世紀後半と考えられよう。

福島飯玉遺跡の調査で検出された2箇所の屋敷跡は隣接する斉田竹之内遺跡で検出された屋敷跡と同時に、あるいは前後関係があるにしても強い関連性を有する中、存在していたものと考えられる。それは3区で検出した用水路との関係も同様である。今後、斉田竹之内遺跡の調査成果とあわせ、総合的に検討を加える中で本遺跡検出の2箇所の屋敷跡の評価が定まるものと考えられる。

2箇所の屋敷跡の築造主体者像については現在のところ不明である。堅固な防御施設などの検出も見られず、遺物中にも陶磁器類の出土量が極めて少量であることなどから在地農民層の存在が想定される場所である。ただ、屋敷と同時存在する3区用水路の掘削という大土木事業、用水系の管理などについては地域内における社会的位置づけ、確固たる経済基盤の上に可能となることと考えられる。

玉村町周辺では、中世・近世以降に形成された屋敷がそのまま現在にいたるまで継続していたり、現在の区割やその土地利用に影響を与えているものも



第126図 福島飯玉遺跡と斉田竹之内遺跡 1 a 区・1 b 区の中世遺構

IV 調査成果と整理のまとめ

少なくない。その中で、本遺跡、あるいはこれに隣接する齊田竹之内遺跡の屋敷群は、その後、水田、あるいは畠として耕作化が進行していった。利根川の変流による洪水の多発などとともにその要因、あるいは社会的背景について今後、充分、検討しなければならない課題である。

また、3区用水路については、その後、本来的な機能が停止した後も埋没が進行する過程において、その流路を踏襲するように新たな用水路が掘削されていることが知られた。その継続状況について全てを追跡することはできないが、埋没土中から17世紀、18世紀の陶磁器が多数出土していることから江戸時代の後半にはほぼ同様の位置関係で用水路が存在していたことが解る。また、明治時代初期の「壬申地券地引絵図」には「鯉沢」の名で記録されている。「鯉沢」用水は、「滝川」が開削されて以後はその支流の一つとして榎町堰で分流された用水が供給されていたようで、昭和にいたり圃場整備事業が実施されその姿を消すまで地図上にその流路を確認することができる。

3区用水路が掘削時どの河川から用水の供給を受けていたのかについては現時点では不明である。地図上で「鯉沢」用水の流路を北方向に遡ると、利根川の流路をはさんで端気川が南流していることに気がつく。今後は周辺の発掘調査で本用水路の一部が検出されることに期待するとともに端気川の流路の変遷や利根川の変流以前に前橋台地を流下していた未周知の自然河川の検出にも注意が必要となる。

(4) 中世から近世の福島飯玉遺跡

ここでは1号・2号屋敷や用水路などが検出された第5面、これに近接すると考えられる墓坑や火葬跡などを検出した第4面以降の遺構の状況について記したい。

第3面は洪水堆積層下の遺構検出面である。出土遺物がほとんどなく、この面の時期決定は極めて困難であるが、第5面の屋敷の継続時期が15世紀後半頃までと考えられることから、それ以降から江戸時代初頭の頃の面と考えられる。2a区・2b区では

各々2条ずつ溝を検出した。3区では5面で掘削された用水路の旧流路北側部分で畠のサク状の溝群が広範囲にわたり検出された。サクは東側の第I群では東西方向であったものが、それ以西の第II群以下では南北方向となっており、この走行の相違が畠の区画の相違を示しているものと考えられた。また、この部分はその後、江戸時代の第2面、第1面においても畠地として利用されており、第I群部分だけで浅間A軽石降下後の天地がえしとしての復旧溝が掘削されている。このことから土地利用上の区画が比較的長期間にわたり固定化されていたことが確認された。

4区の調査では調査区南東部分とこれとは反対の調査区西端において水田面を検出した。調査区西端の水田は第5面で掘削された1号屋敷6号溝の埋没痕を利用したものと考えられる。

第2面は浅間A軽石降下以前の遺構検出面である。3区で水田・畠・溝が検出された。水田としては用水路の旧流路北側部分で東西方向に長軸を有する区画が検出された。また、南西部分のそれは1号屋敷8号溝の埋没痕を利用した耕作面である。

浅間A軽石降下後の遺構面である第1面では2a区で溝2条を、3区で溝4条・水田1面、畠の復旧溝を、4区で溝3条と畠の耕作痕を検出した。各区で検出した溝はいずれも区画溝と考えられた。この中には4区で検出した南北方向の溝のように第5面の屋敷の周囲を区画する溝の掘り方を踏襲する形を取っているものが見られた。

以上のように第3面以降の遺構の検出状況からは、中世時の土地区画が近世末期にいたるまでその影響を及ぼしていたことを見て取ることができた。

註

- (1) 中島直樹「第7章まとめ(2)平安時代水田跡(As-B下水田跡) 大アゼと玉村町の条里」『中道東遺跡 中道西II遺跡 蛭堀東遺跡(第2次調査) 中道東II遺跡 中道東II遺跡(第2次調査)』玉村町教育委員会 2008
- (2) 木津博明「上野国に於ける在地生産土器に就いて—上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして—」『中世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会 1989

参 考 文 献

- 1 山崎 一『群馬県古城塁址の研究』上巻1978
- 2 山崎 一『群馬県古城塁址の研究』補遺篇上巻1979
- 3 山崎 一『群馬県古城塁址の研究』補遺篇下巻1979
- 4 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
- 5 玉村町教育委員会『上之手八王子遺跡』1991
- 6 玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
- 7 玉村町教育委員会『神人村II遺跡』1992
- 8 玉村町教育委員会『尾柄町遺跡』1992
- 9 玉村町教育委員会『尾柄町II遺跡』1992
- 10 玉村町教育委員会『蟹沢II遺跡』1993
- 11 玉村町教育委員会『蟹沢IV遺跡』1993
- 12 玉村町教育委員会『上之手石塚III遺跡』1993
- 13 玉村町教育委員会『上之手石塚IV遺跡』1993
- 14 玉村町教育委員会『藤川前遺跡』1993
- 15 玉村町教育委員会『赤城II遺跡』1993
- 16 玉村町教育委員会『原浦II遺跡』1996
- 17 玉村町教育委員会『中道西遺跡（第1次・第2次調査）』1996
- 18 玉村町教育委員会『三境遺跡・三境II遺跡』1997
- 19 玉村町教育委員会『上之手八王子II遺跡 原屋敷II遺跡』1997
- 20 玉村町教育委員会『原浦遺跡』1998
- 21 玉村町教育委員会『南東耕地遺跡』1999
- 22 玉村町教育委員会『曲田遺跡』1999
- 23 玉村町教育委員会『曲田II遺跡』1999
- 24 玉村町教育委員会『上之手地区遺跡群（1）・（2） 稻荷森遺跡 天神塚遺跡 宇貫地区遺跡群 稻荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明II遺跡 上新田地区遺跡群』1999
- 25 玉村町教育委員会『宇貫遺跡』1999
- 26 玉村町教育委員会『滝川南遺跡』1999
- 27 玉村町教育委員会『宮ノ下遺跡 若王子II遺跡 天神巡りIII遺跡』2000
- 28 玉村町教育委員会『行人塚III遺跡』2000
- 29 玉村町教育委員会『十王堂・十王堂II遺跡』2000
- 30 玉村町教育委員会『角淵城II遺跡』2000
- 31 玉村町教育委員会『上之手石塚遺跡』2000
- 32 玉村町教育委員会『中袋遺跡』2000
- 33 玉村町教育委員会『八幡原赤塚II遺跡』2000
- 34 玉村町教育委員会『田口下屋敷遺跡』2000

参考文献

- 35 玉村町教育委員会『前通遺跡』2000
- 36 玉村町教育委員会『蟹沢遺跡』2001
- 37 玉村町教育委員会『角淵城遺跡』2001
- 38 玉村町教育委員会『福島治部前遺跡』2002
- 39 玉村町教育委員会『角淵伊勢山遺跡・角淵伊勢山IV遺跡 下郷II遺跡・天神塚II遺跡 八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
- 40 玉村町教育委員会『上飯島芝根遺跡 上飯島芝根II遺跡』2002
- 41 玉村町教育委員会『松原III遺跡』2003
- 42 玉村町教育委員会『八幡原赤塚III遺跡』2003
- 43 玉村町教育委員会『天神前II遺跡』2003
- 44 玉村町教育委員会『一万田遺跡』2003
- 45 玉村町教育委員会『オトカ塚遺跡』2003
- 46 玉村町教育委員会『久保田遺跡』2004
- 47 玉村町教育委員会『一本木遺跡』2004
- 48 玉村町教育委員会『横掘遺跡 街道南遺跡』2004
- 49 玉村町教育委員会『内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡』2004
- 50 玉村町教育委員会『赤城遺跡』2004
- 51 玉村町教育委員会『宇貫II遺跡（第1次・第2次調査）』2005
- 52 玉村町教育委員会『神明遺跡 行人塚遺跡 十王堂III遺跡 中郷遺跡 松原II遺跡 杉山遺跡』2006
- 53 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『西善尺司遺跡』2001
- 54 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上福島尾柄町遺跡』2002
- 55 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島曲戸遺跡 上福島遺跡』2002
- 56 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『西田遺跡 村中遺跡』2002
- 57 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『中内村前遺跡（1）』2002
- 58 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『徳丸中田遺跡（2）』2002
- 59 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『鶴光路榎橋遺跡』2002
- 60 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島久保田遺跡 福島大光坊遺跡』2003
- 61 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上福島中町遺跡』2003
- 62 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『前田遺跡』2004
- 63 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『徳丸高堰遺跡』2005
- 64 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯塚遺跡（1）』2007
- 65 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下阿内壱町畑遺跡 下阿内前田遺跡』2001
- 66 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報16』1997
- 67 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報20』2001
- 68 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報22』2003
- 69 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報24』2005
- 70 玉村町教育委員会『砂町遺跡（第1～3次調査） 尾柄町III遺跡 中之坊遺跡』2007

遺物觀察表

例 言

1. 本項は、福島飯玉遺跡の発掘調査報告書の遺物観察表である。

凡 例

1. 遺物の一覧表は、遺構ごとに作成した。
2. 遺構は時期ごとに、発掘区の番号順で並べた。
3. 掲載頁・図番号は本文・写真図版で報告した頁・図番号を、掲載写真は写真図版のPL番号を記載した。
4. 出土状態の項①は遺構内の平面的位置を表す。②は埋没土中の垂直的位置を表す。
5. 法量の項の口は口径、底は底径を表し、()のあるものは復元値を表す。高は器高を表し、残高とあるものは残存値を表す。
6. 胎土については混入する砂粒の粒径、特徴的な鉱物などについて記した。
7. 古銭の計測値のうち、銭径A・Cは方孔の左上～右下の対角上で外径・内径を、銭径B・Dは右上～左下の対角上で外径・内径をノギスで計測した。銭厚は①は方孔の上、②は右、③は下、④は左の位置で同じくノギスで計測した。

目 次

4区1号竪穴状遺構 ……175	4区5号土坑 ……178	4区2号溝 ……185
4区12号土坑 ……175	4区7号溝 ……178	4区3号溝 ……185
3区7号溝 ……175	4区1号井戸 ……179	縄文時代遺構外出土遺物 ……186
4区6号溝 ……175	4区3号井戸 ……179	古墳時代遺構外出土遺物 ……186
4区5号溝 ……175	4区15号溝 ……180	奈良・平安時代遺構外出土遺物 ……………186
4区172・225号ピット ……176	3区用水路 ……181	中世遺構外出土遺物 ……187
4区246・321号ピット ……176	4区8号溝 ……182	近世遺構外出土遺物 ……189
4区359号ピット ……176	4区1号墓坑 ……182	時期不明遺構外出土遺物 ……191
4区366号ピット ……176	4区1号火葬跡 ……182	
4区373号ピット ……177	4区1号集石 ……183	
4区388号ピット ……177	4区集石部 ……183	
4区408号ピット ……177	3区1号溝 ……183	
4区431号ピット ……177	3区2号溝 ……183	
4区5号井戸 ……177	3区3号溝 ……183	
4区6号井戸 ……178	3区4号溝 ……184	
4区1号土坑 ……178	4区1号溝 ……184	

福島飯玉遺跡出土遺物観察表

4区1号竪穴状遺構(第21図 PL30・31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	①②埋没土	口縁部～頸部破片 口・(15.6) 残高・4.2	①粗砂 ②還元 ③橙		口縁部は頸部からくの字状に屈曲して立ち上がる。先端は丸味をおびる。	器面・割れ口磨滅。
2	土師器 甕	①②埋没土	胴部下位～底部破片 底・(4.6) 残高・5.6	①粗砂多量 ②還元 ③にぶい黄橙		底部は狭小で不安定な形状。内面はヘラナデ。	外面磨滅。

4区12号土坑(第22図)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①②埋没土	口縁部破片 口・(13.0) 残高・1.9	①細砂 ②酸化 ③明赤褐		口縁部は短く内彎ぎみに立ち上がる。底部外面はヘラケズリ。	
2	土師器 杯	①②埋没土	底部破片 残高・1.2	①粗砂 ②酸化 ③橙		丸底。外面ヘラケズリ。	

3区7号溝(第36図 PL30)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 板碑	①②埋没土	破片 残長・28.9 幅・21.3 厚・3.4 重・3585.4g	石材 緑泥片岩		塔身部の破片である。天地不明。一方の側縁部が残存する。表面は磨耗しており、種子他の彫り込みは判別できなかった。	
2	陶器 片口鉢	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂多量 ②還元 ③灰褐		外面は先端のみヨコナデ。以下はタテ方向のナデ。内面はヨコ方向のナデ。片口鉢II類。	中世。常滑。12～13世紀。

4区6号溝(第37図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①西堀 ②埋没土	口縁部破片	①粗砂少量 ②還元 ③灰		口縁部先端は平坦面をなす。頸部内面の稜は弱い凹面をなす。内外面ともヨコ方向のナデ。	
2	軟質陶器 内耳鍋	①西堀 ②埋没土	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③褐灰、炭素吸着		内外面ともヨコ方向のナデ。	外面に付着物。
3	軟質陶器 搦鉢	①西堀 ②埋没土	胴部破片	①粗砂少量 ②還元 ③灰		内面には櫛状工具による搦目が施されたが、使用によりほとんど消えかけている。研磨痕顕著。	
4	軟質陶器 搦鉢	①西堀 ②埋没土	口縁部破片	①粗砂少量 ②還元 ③灰、炭素吸着		口縁部先端は内面側が突出する。	

4区5号溝(第39・40図 PL30)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 板碑	①②埋没土	破片 長・33.5 幅・14.6 厚・3.1 重・2171.6g	石材 緑泥片岩		大型品。頂角から塔身部上半、左側部分の大型破片である。外形の縁辺部は大部分が欠損している。二条線や輪郭線は施されていない。表面は磨耗剥離が著しいがキリクと考えられる種子の彫り込みが一部残る。彫り込みは元来浅いものである。	14世紀代。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
2	軟質陶器 内耳鍋	①20E-15Gと 埋没土接合 ②埋没土	口縁部～胴部中位破 片 口・(34.0) 残高・14.3	①細砂 ②還元 ③にぶい黄橙、炭素 吸着		口縁部先端は平坦だがやや丸味を有する。 内側へわずかに突出する。頸部内面の稜は 弱い凹面をなす。口縁部はヨコ方向のナデ。 胴部もナデ。一部にヘラケズリを残す。	
3	軟質陶器 内耳鍋	①20D-14G ②壁面直上	口縁部～胴部下位 1/4 口・(31.0) 残高・16.1	①細砂・雲母多量 ②還元 ③にぶい橙、炭素吸 着		口縁部先端は平坦で外傾する。頸部内面の 稜は弱い凹面をなす。内外面とも幅の狭い ヨコ方向のナデを施す。耳は細くきゃしゃ。	
4	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部～底部破片 口・(33.0) 底・(26.0) 高・17.3	①細砂 ②還元 ③灰黄、炭素吸着		口縁部先端、頸部内面の稜は1に類似する。 底部は平底。胴部外面は粗雑なヨコ方向の ナデ。	
5	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片	①細砂 ②還元 ③褐灰、炭素吸着		口縁部先端は丸味をおびる。頸部内面はく の字状を呈する。	
6	石製品 石鉢	①②埋没土	胴部中位～底部 1/4 底・(15.0) 残高・10.8	石材 粗粒輝石安山 岩		外面にわずかに工具痕が残る。内面には使 用による研磨痕が顕著に認められる。	
7	軟質陶器 播鉢	①②埋没土	口縁部破片	①細砂 ②還元 ③灰、炭素吸着		口縁部先端は内外両面にやや肥厚。断面T 字状を呈する。内外面ともヨコ方向のナデ。	焼成、やや軟 質。

4区172・225号ピット (第51図)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師質土器 皿	①②埋没土	口縁部破片 口・(9.0) 残高・3.0	①細砂・雲母 ②酸化 ③にぶい褐		左回転クロコ成形か。	

4区246・321号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 板碑	①②埋没土	破片 長・16.1 幅・10.2 厚・2.7 重・664.4g	石材 緑泥片岩		基部いわゆる柄の右側縁部の破片と考えら れる。器面は内外面とも磨耗している。	

4区359号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師質土器 皿	①②埋没土	口縁部～底部 1/4 口・(11.8) 底・(6.8) 高・2.7	①粗砂 ②還元 ③橙		口縁は外傾著しく立ち上がる。左回転クロ コ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	

4区366号ピット (第51図)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師質土器 皿	①②埋没土	口縁部下半～底部破 片 底・(7.0) 残高・1.2	①細砂 ②還元 ③黄褐		左回転クロコ成形か。	

4区373号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂・雲母 ②還元 ③褐灰		口縁部先端は平坦で、外側にわずかに突出する。頸部内面の稜は弱い凹面をなす。	

4区388号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国	備考
1	古銭 元祐通寶	①②埋没土	A (21.60) B ()	C 24.25 D 19.55	① 1.00 ③ 1.10 ② 1.00 ④ 1.10	(1.78)	1086年 北宋	左上欠損

4区408号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 円盤	①②埋没土	完形 長・5.8 幅・6.2 厚・0.5 重・32.0g	石材 緑泥片岩		平面長円形を呈する。周縁部はていねいに研磨している。	板碑の破片を二次利用した可能性もあるか。

4区431号ピット (第51図 PL31)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	陶器 甕?	①②埋没土	胴部下位～底部破片	①黒色鈹物粒 ②還元 ③にぶい橙		底部は平底。外面にはヘラケズリが見える。	中世。 常滑。

4区5号井戸 (第52・53図 PL31・32)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 板碑	①南西 ②	破片 長・26.4 幅・20.6 厚・2.9 重・1459.9g	石材 緑泥片岩		塔身部上位の右側部分の破片である。縁辺部に沿って垂下する輪部線(杵)とその左側にキリークの種子、その下位に蓮弁の一部が認められる。種子・蓮弁は葉研彫りで良好な彫り込みである。裏面は横方向のノミ痕が多数認められる。	
2	石製品 石白、下白	①②埋没土	下白 1/2 長・17.9 幅・10.9 厚・10.5 重・7590g	石材 粗粒輝石安山岩		粉挽き白の下白である。上縁部分は欠損が著しい。中央に芯孔が貫通している。磨り合わせ面は使用により磨耗、分画は不明である。	
3	石製品 砥石	①②埋没土	完形 長・10.8 幅・9.1 厚・3.3 重・318g	石材 榛名山二ツ岳 軽石		円礫を板状に加工している。表・裏両面、および側面全周に磨面を有する。裏面中央には集中敲打痕が認められる。	
4	石製品 石白、下白	①②埋没土	下白破片 長・15.4 幅・5.0 厚・5.5 重・469g	石材 粗粒輝石安山岩		粉挽き白の下白、上縁部の小破片である。磨り合わせ面は磨耗を受け平滑になっているが、副溝が5本認められる。分画は不明である。	
5	石製品 砥石	①②埋没土	破片 長・11.7 幅・11.6 厚・6.2 重・1024g	石材 粗粒輝石安山岩		置砥石と考えられる。角礫状の原石に幅広い研磨面が認められる。表面は平行して2面、裏面ではやや方向をたがえて4面が見られる。研磨面はわずかに中央がへこみ凹面をなしている。	
6	石製品 板碑	①②埋没土	破片 長・23.5 幅・8.0 厚・2.3 重・406.9g	石材 緑泥片岩		塔身部の破片である。一部右側と考えられる側縁部が残る。裏面の剥離も著しく、一部で原形時の器厚を知ることができるだけである。表面も磨耗している。	

遺物観察表

4区6号井戸 (第54・55図 PL32)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 板碑	①②埋没土中・ 下層	破片 長・22.6 幅・10.5 厚・2.9 重・847.8g	石材 緑泥片岩	塔身部の最下位から基底、いわゆる柄の部分の破片である。左側縁部が残存している。表・裏面とも磨耗が著しい。石質は4区246・321号ピット出土の接合資料と同様である。	
2	軟質陶器 播鉢	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂・白色鈹物粒 ②還元 ③灰、炭素吸着	片口が付く。先端は内外に肥厚、断面形はT字状を呈する。	
3	石製品 板碑	①②埋没土中・ 下層	破片 長・20.1 幅・13.1 厚・1.3 重・386.5g	石材 緑泥片岩	塔身部の破片と考えられるが、器面の剝離が著しく天地も不明である。	
4	石製品 板碑	①②埋没土中・ 下層	破片 長・27.4 幅・20.5 厚・2.9 重・2245.8g	石材 緑泥片岩	塔身部下位から柄部分の残存である。器面は剝離・磨耗が著しい。	

4区1号土坑 (第56図 PL32)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①南東 ②埋没土	胴部中位～底部破片 底・(30.2) 残高・6.4	①粗砂 ②還元 ③灰褐、炭素吸着	胴部はヘラケズリ後でいねいなナデ。底部は平底でいわゆる砂底に近い状態。	
2	陶器 火鉢	①南西 ②埋没土	口縁部破片 口・(12.6) 残高・3.6	①精選 ②還元 ③淡黄	口縁部先端は平坦に近く、外側にやや張り出す。内外面とも灰釉。丸い体部を有する瓶掛と呼ばれるものか。	瀬戸・美濃。 江戸時代。

4区5号土坑 (第58図 PL32)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
1	古銭 不明	①北東部分 ②埋没土	A (21.30) B (17.00)	C (22.15) D (17.10)	①(1.00) ③(1.20) ②(1.10) ④(1.05)	1.23		天地不明

4区7号溝 (第62図 PL33)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①20C-9G ②底面直上	口縁部～底部破片 口・(33.0) 底・(23.6) 高・16.2	①粗砂、結晶片岩を含む。 ②還元 ③灰黄褐	口縁部先端は平坦面。頸部は外面側に強い変換点をもつ。内面の稜は弱い凹面をなす。平底。胴部外面は粗雑なナデ。その他はヨコ方向のナデ。	胴部下位に付着物。
2	軟質陶器 内耳鍋	①20D-9G ②底面直上	口縁部～胴部下位破片 口・(30.0) 残高・15.3	①細砂・白色鈹物粒 ②還元 ③黄灰、炭素吸着	口縁部の立ち上がりは短い。先端はやや丸い。頸部内面の稜は弱い凹面状。口縁部はヨコナデ。胴部外面は粗雑なナデ。最下位にヘラケズリ。	
3	軟質陶器 内耳鍋	①20D-9G ②底面直上	口縁部～胴部中位破片 口・(32.0) 残高・10.3	①粗砂・細砂 ②還元 ③灰、炭素吸着	口縁部先端はやや丸い。頸部内面の稜は弱い凹面をなす。口縁部はヨコナデ。胴部内面は斜めヨコ方向のナデ。	5と同一固体か。
4	軟質陶器 内耳鍋	①20F-8G ②埋没土	口縁部～胴部中位破片 口・(28.0) 残高・8.4	①細砂・白色鈹物粒 ②還元 ③灰、炭素吸着	口縁部先端は丸い。内側に弱く突出する。頸部内面の稜はくの字状を呈する。口縁部と胴部内面はヨコナデ。胴部外面はナデ。	外面、付着物。
5	軟質陶器 内耳鍋	①20C-9G ②底面直上	口縁部～胴部上位破片 口・(29.0) 残高・8.2	①粗砂・細砂 ②還元 ③灰、炭素吸着	形状、調整は3と同一。	3と同一固体か。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)		①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考	
			残存状態	計測値 (cm)					
6	軟質陶器 内耳鍋	①20D-9G ②底面直上	胴部下位～底部破片 底・(16.4) 残高・4.6		①細砂・白色鈹物粒 ②還元 ③灰、炭素吸着		胴部はやや凸底の底部から彎曲して立ち上がる。下位はヘラケズリにナデを重ねる。内面もナデ。		
7	軟質陶器 内耳鍋	①20D-9G ②底面直上+埋没土	口縁部～胴部中位破片 口・(35.0) 残高・11.3						①粗砂、緻密 ②還元 ③黄灰、炭素吸着
8	軟質陶器 内耳鍋	①20F-8G ②埋没土	胴部下位～底部破片		①細砂・白色鈹物粒 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		胴部は底部から立ち上がり、途中に変換点を経てから斜め上方に立ち上がる。外面胴部下位にていねいなナデ。	焼成不良か。	
9	軟質陶器 火鉢	①20C-9G ②埋没土	口縁部～肩部破片 口・(38.2) 残高・7.1						①細砂 ②還元 ③灰
10	軟質陶器 内耳鍋	①20C-9G ②底面直上	口縁部破片		①粗砂少量 ②還元 ③褐灰、炭素吸着		口縁部先端はやや丸味を残す平坦面をなす。頸部の屈曲は外面側には全く見られない。内面は強いヨコナデにより弱い稜をなす。		
11	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	底部破片						①細砂多量 ②還元 ③黄灰
12	軟質陶器 内耳鍋	①20D-9G ②+4	胴部下位～底部破片		①細砂・白色鈹物粒 ②還元 ③灰白		形状調整は6に類似するが、内面のナデがていねい。		
13	軟質陶器 搦鉢	①20E-8G ②+3	胴部下位～底部破片						①白色鈹物粒・赤色粘土粒 ②還元 ③灰
挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)		重さ (g)	初鑄年代 国名	
14	古銭 □□元寶	①20F-9G ②埋没土	A 23.90	C 23.95	①(1.20) ③(1.10)	(1.94)			
			B 20.40	D 20.55					

4区1号井戸 (第72図 PL34)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部～底部 1/3 口・(29.0) 底・(16.7) 残高・16.0	①粗砂 ②還元 ③灰、炭素吸着		口縁部は立ち上がりが短く、先端は丸味を残す平坦面をなす。頸部内面の稜はくの字状を呈する。胴部外面は下位にヘラケズリ。内面は斜め方向のナデ。耳を装着後、外面側から粘土塊で補修を加えている。	
2	軟質陶器 内耳鍋	①中央 ②上層	口縁部～胴部中位破片 口・(29.0) 残高・11.5				
3	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	胴部下位破片	①粗砂 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		外面最下位にヘラケズリ。	外面に炭化物付着。

4区3号井戸 (第73図 PL34)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	土師質土器 皿	①②埋没土上層	口縁部～底部 1/4 口・(12.8) 底・(7.0) 高・3.2	①白色鈹物粒・黒色鈹物粒 ②還元 ③にぶい橙		右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	
2	須恵器 甕	①②埋没土上層	胴部破片				

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
3	軟質陶器 挿鉢	①中央 ②上層	口縁部～底部 口・(33.0) 底・10.8 高・13.9	①粗砂・細砂・雲母 ②還元 ③灰黄、炭素吸着	口縁部先端は外縁が弱く突出する。胴部外面は磨耗するがナデ調整と考えられる。内面に6本1単位の櫛状工具による挿目が放射状に5単位施されるが、使用による研磨により消されかけている。底部外面はナデ調整と考えられる。	

4区15号溝 (第76・77図 PL34)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③にぶい褐	口縁部先端は平坦で外側にわずかに突出する。頸部内面の稜は凹面をなす。内外面ヨコナデ。	
2	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③灰	口縁部の先端は平坦。頸部内面の稜は弱い凹面をなす。	
3	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部～胴部上位破片	①粗砂 ②還元 ③黄灰	口縁部先端は平坦で外側にわずかに突出する。頸部内面の稜は段状をなす。	外面に付着物。
4	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部～胴部上位破片	①細砂 ②還元 ③にぶい黄褐、炭素吸着	口縁部先端は平坦で外側に突出する。頸部内面の稜は段状をなす。	外面に付着物。
5	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部破片	①細砂 ②還元 ③灰、炭素吸着	口縁部先端は平坦で内側にわずかに突出する。	
6	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片 残高・5.8	①粗砂 ②還元 ③黄灰	口縁部先端は平坦で外側にわずかに突出する。耳の周辺は良くナデられている。	外面に付着物。
7	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部～胴部上位破片	①粗砂 ②還元 ③灰黄	口縁部先端は平坦で外側にわずかに突出する。頸部内面の稜はくの字状を呈する。	
8	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片	①細砂 ②還元 ③黄灰	口縁部先端は平坦である。頸部内面の稜は弱い凹面を呈する。	
9	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部破片	①粗砂・細砂 ②還元 ③黄灰、炭素吸着	口縁部先端は平坦で外側へ突出。頸部内面の稜は弱い凹面をなす。内外面ともヨコナデ。	
10	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	胴部下位破片	①細砂・雲母 ②還元 ③黄灰、炭素吸着	内外面ともヨコ方向のナデ。	外面に付着物。
11	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	胴部下位～底部破片	①粗砂・細砂 ②還元 ③黄灰、炭素吸着	平底。底部外面はいわゆる砂底状を呈する。	
12	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	胴部上位～中位破片	①粗砂 ②還元 ③灰、炭素吸着	胴部上位内面の稜は凹面をなす。内外面ともヨコ方向のナデ。	
13	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土上層	口縁部破片	①細砂・雲母 ②還元 ③灰黄、炭素吸着	口縁部先端は平坦で外側へ突出。頸部内面の稜は凹面をなす。内外面ともヨコナデ。	
14	土師質土器 皿	①②埋没土	口縁部～底部破片 口・(12.4) 底・(6.0) 高・2.6	①細砂 ②還元 ③浅黄	口縁部は外反著しく立ち上がる。回転クロコ成形。	
15	土師質土器 皿	①②埋没土上層	口縁部～底部破片 口・(7.0) 底・(5.0) 高・1.6	①粗砂・海綿・骨針・雲母 ②還元 ③橙	左回転クロコ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
16	土師質土器 皿	①②埋没土上層	口縁部下半～底部破片 底・(12.0) 残高・1.7	①細砂 ②還元 ③にぶい橙		左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し 後未調整。	
17	陶器 甕	①②埋没土上層	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③にぶい褐		外面はナデ。内面はヨコ方向に強いナデ。	中世。 常滑。
18	土師質土器 皿	①②埋没土上層	口縁部下半～底部破片 底・(5.0) 残高・1.6	①粗砂 ②還元 ③橙		左回転ロクロ成形か。底部の切り離しは粗 雑である。	

3区用水路 (第80図 PL35)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 甕	①②埋没土	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③灰白、炭素吸着		内外面ともヨコナデ。	
2	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③灰		焼成は不良。内面には使用による研磨痕が 顕著。	
3	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	胴部下位～底部破片 底・(10.0) 残高・4.8	①粗砂 ②酸化 ③灰、炭素吸着		胴部は斜め上方に向けて立ち上がる。内面 見込には上方から見て放射状となる櫛状工 具による擂目が施される。	
4	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	胴部下位破片	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰白		斜め上方に向けて外傾。内外面ともヨコ方 向にナデ。外面の一部にヘラケズリ。	割れ口磨耗。
5	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③にぶい黄褐		頸部内面の屈曲は弱い。口縁部先端は平坦 面をなす。	水ズケになり 二次的に還元 状態となる。
6	軟質陶器 不明	①②埋没土	底部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③にぶい褐		内外面ともヨコ方向のナデ。	天地不明。 3区0溝-4
7	軟質陶器 焙烙	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③橙		内外面ともヨコ方向のナデ。	近世。
8	陶器 おろし皿	①②埋没土	底部破片 底・(8.3) 残高・1.1	①精選 ②還元 ③灰白		右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し 後未調整。内面は格子状のおろし目が見ら れる。	中世。 古瀬戸。
9	陶器 片口鉢?	①②埋没土	底部～高台部 1/2 底・ 10.4 残高・2.2	①精選 ②還元 ③明黄褐(後世に変 色)		内外面とも磨耗、調整痕観察困難。内面に 飴釉。目痕あり。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
10	陶器 皿	①②埋没土	口縁部～高台部 1/3 口・(11.8) 底・ 6.8 高・ 2.3	①精選、わずかに粗 砂 ②還元 ③灰白		低い高台部が付く。右回転ロクロ成形。外 面は口縁部中位から高台部まで回転を伴う ヘラケズリ調整。内面に鉄絵具で蘭竹文が 描かれている。見込み目痕2ヶ所。	美濃。 17世紀前半～ 中。
11	陶器 碗	①②埋没土	口縁部～胴部下位破 片 口・(11.0) 残高・5.5	①精選 ②還元 ③黄灰		内外面に飴釉。	瀬戸・美濃。 18世紀後。 3区0溝-1
12	陶器 碗	①②埋没土	口縁部破片 口・(10.4) 残高・5.0	①精選 ②還元 ③灰白		内外面とも貫入著しい。外面はその下に山 水の文様が描かれている。	肥前。 陶飴染付。
13	磁器 碗	①②埋没土	口縁部下半～高台部 破片 底・ 4.4 残高・3.8	①精選 ②還元 ③灰白		外面に染付による雪輪梅樹と考えられる文 様が描かれる。高台不明銘。	肥前。 波佐見系。 18世紀中～後。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
14	陶器 練鉢	①②埋没土	底部～高台部破片 底・(16.0) 残高・3.2	①精選 ②還元 ③灰黄		右回転ロクロ成形。高台部周辺には回転を伴うヘラケズリ調整。内面から高台脇灰粘。見込み目痕あり。	瀬戸・美濃。 19世紀。 3区0溝-3
15	石製品 砥石	①②埋没土	2/3 長・9.1 幅・3.9 厚・2.0 重・105g	石材	流紋岩	手持用の砥石で一端は欠損している。側面は4面とも使用されている。各面とも研減りが著しい。	3区0溝-5
16	磁器 德利 御神酒德利	①②埋没土	頸部破片 残高・3.8	①精選、黒色鈹物粒 ②還元 ③灰白		一面に蛸唐草文が施されている。	肥前。 19世紀前～中。
17	磁器 小杯	①②埋没土	口縁部破片 口・(6.4) 残高・1.9	①精選 ②還元 ③灰白		内外面に花卉状の文様が描かれている。	肥前。
18	磁器 皿	①②埋没土	底部～高台部 1/2 底・(4.0) 残高・1.4	①精選 ②還元 ③灰白		ケズリ出し高台。内面から高台脇施釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	割れ口は磨耗。肥前。17世紀末～18世紀前。3区0溝-2

4区8号溝 (第82図 PL35)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	頸部～底部破片 底・(17.0) 残高・13.2	①粗砂 ②還元 ③灰白、炭素吸着		胴部下位は底部から一度斜め方向に丸味を有して立ち上がった後、斜め上方に向けて延びる。内外面ともヨコナデ。	外面に炭化物付着。
2	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	胴部下位破片	①白色鈹物粒 ②還元 ③褐灰、炭素吸着		外面の最下位にヘラケズリ。	外面に炭化物付着。

4区1号墓坑 (第85図 PL35)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
1	古銭 嘉祐元寶	①南東部分	A 23.35	C 23.25	① 1.10 ③ 1.15	2.95	1056年 北宋	鑄着。
		②埋没土	B 19.25	D 18.65	② 1.20 ④ 1.15			
2	古銭 元豊通寶	①南東部分	A 24.60	C 24.50	① 1.15 ③ 1.05	3.38	1078年 北宋	鑄着。
		②埋没土	B 20.35	D 19.95	② 1.25 ④ 1.20			
3	古銭 皇宋通寶	①南東部分	A 23.80	C 23.95	① 1.15 ③ 1.15	3.11	1039年 北宋	鑄着。
		②埋没土	B 20.10	D 19.90	② 1.25 ④ 1.10			
4	古銭 嘉祐元寶	①南東部分	A 23.55	C 23.25	① 1.25 ③ 1.10	3.14	1056年 北宋	鑄着。
		②埋没土	B 20.20	D 20.20	② 1.10 ④ 1.20			
5	古銭 元祐通寶	①南東部分	A (23.65)	C 24.55	① 1.15 ③ 1.15	2.54	1086年 北宋	
		②埋没土	B 20.25	D 20.85	② 1.25 ④ 1.20			
6	古銭 皇宋通寶	①南東部分	A 23.90	C 24.10	① 1.10 ③ 1.05	2.16	1039年 北宋	
		②埋没土	B 19.80	D 20.40	② 1.05 ④ 1.25			

4区1号火葬跡 (第87図 PL35)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
1	古銭 開元通寶	①中央東側	A 24.15	C 24.50	① 1.15 ③ 1.15	2.37	966年 南唐	鑄着。
		②埋没土	B 20.85	D 20.80	② 1.35 ④ 1.25			
2	古銭 開元通寶	①中央西側	A 23.30	C 23.20	① 1.15 ③ 1.15	2.32	966年 南唐	鑄着。
		②埋没土	B 19.65	D 19.55	② 1.15 ④ 1.30			
3	古銭 熙寧元寶	①中央東側	A 25.55	C 25.50	① 1.55 ③ 1.40	3.44	1068年 北宋	鑄着。
		②埋没土	B 21.00	D 20.45	② 1.80 ④ 1.55			
4	古銭 淳熙元寶	①中央西側	A 23.05	C 23.10	① 1.30 ③ 1.15	2.05	1174年 南宋	鑄着。
		②埋没土	B 17.20	D 17.45	② 1.25 ④ 1.35			

4区1号集石 (第88図 PL36)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	磁器 蓋	①②埋没土	口縁部破片 残高・4.4	①精選 ②還元 ③浅黄		外面型による施文か。内面から口縁端部外面無釉。	中世。 中国。 青白磁。
2	陶器 擂鉢	①20C—17G ②3面	口縁部破片	①粗砂少量 ②還元 ③赤		口縁部先端直下には沈潜が2条めぐる。内面には櫛目が施される。	境。 18世紀後～19世紀前。

4区集石部 (第89図 PL36)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考	
1	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	胴部中位～下位破片	①粗砂多量 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		外面は上位にヨコ方向、下位に斜め方向の粗雑なナデを施す。内面には5本1単位の櫛状工具による擂目施される。研磨されている。		
2	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	口縁部破片	①粗砂多量 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		口縁部先端は平坦面をなし、内側に弱く突出する。内面は研磨を受けている。		
3	軟質陶器 擂鉢	①②埋没土	胴部下位破片	①粗砂多量 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		外面はナデ、内面は研磨を受けている。		
挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鋳年代 国名	備考
4	古銭 天禧通寶	①4区集石周辺 ②As-B混土	A 24.40 B 19.00	C 23.85 D 19.25	① 1.25 ③ 1.15 ② 1.20 ④ 1.25	2.76	1017年 北宋	

3区1号溝 (第108図 PL36)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	青磁 碗	①②埋没土	口縁部破片 残高・2.3	①精選 ②還元 ③灰白		外面に片切彫による鎬蓮弁文。内外面とも貫入著しい。	中世。 龍泉窯系。 13世紀中～後。
2	陶器 灯明受皿	①②埋没土	破片 口・(10.0) 残高・2.0	①精選 ②還元 ③黄灰		右回転路ロクロ成形。内外面に錆釉が架かる。底部外面付近の釉拭い取る。	瀬戸・美濃。
3	陶器 碗	①②埋没土	口縁部破片 口・(10.0) 残高・2.2	①精選 ②還元 ③黄灰		外面、口縁部先端直下に2条の横線。以下に文様を配す。	肥前。 陶胎染付。

3区2号溝 (第109図)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	磁器 碗	①②埋没土	口縁部破片 口・(9.0) 残高・2.0	①精選 ②還元 ③灰白		内面、口縁部の先端直下に2条の横線が引かれる。	肥前。 江戸時代。
2	鉄器 鉄釘	①②埋没土	上部破片 残長・4.5 幅・3.0 厚・0.5 重・14.2g			鉤の手状に屈曲、図の下部は欠損する。断面形は長円形で中空の可能性も考えられる。	

3区3号溝 (第108図 PL36)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 鍋	②1面	口縁部破片	①細砂 ②還元 ③灰、炭素吸着		口縁部先端は平坦面をなす。内外面ともヨコ方向のナデ。	在地産。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
2	軟質陶器 鍋	②1面	頸部～胴部上位破片	①白色鈹物粒 ②還元 ③灰、炭素吸着	頸部内面の稜は弱い凹面をなす。内外面ともヨコ方向のナデ。	在地産。
3	磁器 皿	②1面	底部～高台部破片 底・(8.0) 残高・1.8	①精選 ②還元 ③灰白	内外面に型紙による草花文が施される。体部下半から高台部には3条の横線が引かれる。	製作地不詳。近代。

3区4号溝 (第110図 PL36)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	陶器 皿	①②埋没土	口縁部破片 口・(13.0) 残高・1.7	①精選 ②還元 ③灰白	外面に青緑釉。内面に透明釉。	肥前(内野山)17世紀中～18世紀前。

4区1号溝 (第111図 PL36・37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	胴下部～底部破片	①黒色鈹物粒少量 ②還元 ③灰、炭素吸着	外面一部にヘラケズリ。内面ヨコ方向のナデ。	
2	軟質陶器 焙烙	①20E-17G ②+3	口縁部～底部破片 口・(34.0) 底・(31.4) 高・5.4	①白色鈹物粒・黒色鈹物粒 ②還元 ③灰白、炭素吸着	口縁部は平底の底部から弱く外反して立ち上がる。先端は丸味をおびる。口縁部は外面の下位にヘラケズリ。他はヨコナデ、ヨコ方向のナデ。	
3	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③黄灰	内外面ヨコ方向のナデ。	
4	軟質陶器 内耳鍋	①20E-18G ②+9	胴下部破片	①白色軽石粒・黒色鈹物粒多量 ②還元 ③灰、炭素吸着	内外面ヨコ方向のナデ。	
5	土師質土器 皿	①20E-18G ②+3	口縁部破片 口・(8.0) 残高・1.5	①細砂 ②還元 ③にぶい黄橙	回転ロクロ成形。	
6	陶器 小碗	①20E-16G ②+19	口縁部～底部 1/4 口・(7.0) 残高・3.4	①精選 ②還元 ③灰白	右回転ロクロ成形か。外面に回転を伴うヘラケズリが見える。内面から高台脇灰釉。	瀬戸・美濃。江戸時代。
7	陶器 鉢	①20E-15G ②+4	底部～高台部破片 底・(11.0) 残高・2.6	①精選 ②還元 ③灰褐	高台部は断面台形を呈する。内面見込部分に沈潜2条がめぐる。内面白土象嵌後透明釉。	肥前 江戸
8	陶器 皿	①20E-14G ②+10	口縁部～高台部破片 口・(11.8) 底・(6.2) 高・3.0	①精選 ②還元 ③黄灰	器肉は全体に厚い。削り出し高台。右回転ロクロ成形。口縁部外面下半に回転を伴うヘラケズリ。内面から高台外面に灰釉。	内面に重ね焼の痕跡。 瀬戸・美濃17世紀?
9	磁器 筒形碗	①②埋没土	口縁部～高台部破片 口・(7.5) 底・4.0 高・5.8	①精選 ②還元 ③灰白	外面竹文。体部はやや外湾して立ち上がる。	肥前。 18世紀中～後。
10	磁器 碗	①②埋没土	口縁部破片 口・(9.3) 残高・4.2	①精選 ②還元 ③灰白	残存部梅樹文。	肥前。 波佐見系。18世紀後～19世紀前。
11	磁器 丸碗	①20E-16G ②底面直上	口縁部～高台部 1/2 口・8.7 底・3.5 高・5.6	①精選 ②還元 ③灰白	体部外面幅広の横線染付。見込みは五弁花状の文様。磁器の焼成不良か。	瀬戸・美濃。 18世紀後～19世紀前。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考	
12	石製品 砥石	①20E-17G ②底面直上	破片 長・4.4 幅・2.9 厚・3.4 重・83g	石材 砥沢石		手持砥で、2分の1以上が欠損している。4面ある側面のうち1面だけが良く使用されているが、他は原形面とノコギリ痕が残る。研磨面は凸面状を呈す。	江戸時代。	
13	石製品 円盤	①②埋没土	ほぼ完形 長・3.5 幅・3.6 厚・0.5 重・7.9g	石材 滑石		薄い板状を呈する。周縁部の割れ口は研磨し調整している。一部欠損。		
14	鉄製品 板状鉄製品	①②埋没土	完形か 長・5.5 幅・1.7 厚・0.3~0.5 重・6.7g			短冊状の板状品である。四隅のうち右側の2つはやや隅丸ぎみである。縁辺に沿って直径1.5~2.0mmほどの円孔が4箇所にはほぼ等間隔に開く。用途、不明。		
挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
15	古銭 開元通寶	①②埋没土	A 23.90 B 20.70	C 24.00 D 21.00	① 1.15 ③ 1.25 ② 1.25 ④ 1.25	3.32	966年 南唐	
16	古銭 淳祐元豊	①②埋没土	A 24.55 B 18.80	C 24.40 D 18.80	① 1.10 ③ 1.45 ② 1.30 ④ 1.30	3.27	1241年 南宋	

4区2号溝 (第113図 PL37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	胴部下位破片	①白色鉍物粒・黒色鉍物粒 ②還元 ③灰、炭素吸着		内外面ヨコ方向のナデ。	
2	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	頸部破片	①細砂 ②還元 ③灰黄褐、炭素吸着		内面の屈曲は弱い凹面をなす。	
3	軟質陶器 内耳鍋	①②埋没土	口縁部破片	①白色鉍物粒・黒色鉍物粒 ②還元 ③黄灰、炭素吸着		口縁部先端はやや丸味を有する。	
4	磁器 碗	①②埋没土	口縁部~高台部破片 口・(10.0) 底・2.6 高・4.7	①精選 ②還元 ③灰白		外面に雪輪梅樹文か。	肥前。 波佐見系。 18世紀後~19世紀前。
5	磁器 碗	①②埋没土	口縁部下位~高台部 1/2 底・(4.0) 残高・3.4	①精選 ②還元 ③灰白		羽を広げた鳥の文様が4単位配されている。	瀬戸・美濃。 19世紀中~後。
6	陶器 蓋	①②埋没土	底部~高台部破片 残高・1.6	①精選 ②還元 ③灰白		見込には松竹梅の文様が描かれている。	肥前。 江戸時代。
7	磁器 小碗	①②埋没土	口縁部中位~高台部 破片 底・(4.0) 残高・5.2	①精選 ②還元 ③灰白		外面に草文が描かれている。	瀬戸・美濃。 近代~現代。

4区3号溝 (第114図 PL37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 内耳鍋	①20F-11G ②底面直上	口縁部破片	①黒色鉍物粒 ②還元 ③浅黄		口縁部先端は平坦面をなす。	

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
2	陶器 甕	①②埋没土	口縁部下位～高台部 破片 底・(10.0) 残高・3.2	①鉄分粒 ②還元 ③にぶい黄橙		左回転ロクロ成形か。ケズリ出し高台。体部外面に鉄釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
3	磁器 皿	①②埋没土	口縁部破片 口・(12.0) 残高・2.4	①精選 ②還元 ③灰白		内面に染付による文様が描かれている。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前。 波佐見系？ 江戸時代。

縄文時代遺構外出土遺物 (第116図 PL37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 打製石鏃	①4区30F-1 G? ②不詳	ほぼ完形 残長・2.8 幅・1.4 厚・0.3 重・1.1g	石材	チャート	凸茎有茎鏃で、基部の先端はわずかに欠損している。鏃部は二等辺三角形を呈し、両側縁ともていねいな押圧剥離が重ねられる。	注記には、20F-21G出土とあり。

古墳時代遺構外出土遺物 (第116図 PL37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
2	土師器 台付甕	①2b区 ②Hr-FP泥流下	口縁部～胴部上位破片 口・(12.1) 残高・2.6	①粗砂・細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙		口縁部はS字を呈し、外反ぎみに立ち上がる。胴部外面にハケメ。	
3	土師器 台付甕	①2b区 ②As-B混土中	脚台部破片 残高・2.6	①細砂少量 ②酸化 ③にぶい黄褐		外面は斜め方向にハケメを施した後一部をナゲ消す。内面には粗砂をナゲ付ける。	
4	土師器 鉢	①2b区 ②Hr-FP泥流下	口縁部～胴部上位破片 口・(8.6) 残高・2.9	①粗砂 ②酸化 ③浅黄橙		口縁部は短く、外傾して立ち上がる。胴部は半球形状を呈するか。	
5	土師器 高杯	①2b区 ②Hr-FP泥流下	脚部破片 底・(12.4) 残高・2.0	①粗砂 ②還元 ③にぶい橙		内外面とも磨耗するが、外面はヨコ方向のナゲか。	
6	土師器 埴	①4区20C-9 G ②As-B混土中	胴部中位～底部 1/2 底・(3.2) 残高・4.8	①粗砂多量 ②酸化 ③にぶい黄橙		胴部は球形を呈するか。外面下半部には粗雑なヘラケズリ。内面は指頭によるナゲ。平底。	

奈良・平安時代遺構外出土遺物 (第116図 PL37)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
7	土師器 杯	①3区 ②Hr-FP泥流下	口縁部～底部 1/4 口・(12.0) 残高・3.0	①粗砂少量 ②酸化 ③橙		口縁部は丸底の底部から内彎して立ち上がる。口縁部はヨコナゲ。底部外面はヘラケズリ。	
8	土師器 杯	①2b区 ②Hr-FP泥流下	口縁部破片 口・(10.0) 残高・1.8	①粗砂少量 ②酸化 ③橙		口縁部は丸底の底部から彎曲、斜め上方に向けて立ち上がる。	
9	須恵器? 杯	①4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	底部破片 底・(4.4) 残高・1.1	①細砂 ②還元 ③黄灰		右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	
10	須恵器 杯	①3区用水路南側 ②As-B混土中	口縁部下位～底部破片 底・(6.0) 残高・1.7	①白色鈹物粒 ②還元 ③灰		右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	
11	須恵器 高台付碗	①2b区 ②As-B混土中	底部～高台部破片 底・(7.0) 残高・1.5	①細砂 ②還元 ③灰白		右回転ロクロ成形か。高台部は著しく磨耗している部分もある。	高台剥離後二次利用。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
12	須恵器 台付壺?	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	底部破片 残高・3.0	①粗砂 ②還元 ③黄灰		高台部は剥離している。ロクロ成形。	
13	灰釉陶器 高台付椀	① 2 b 区 ②As-B混土中	底部～高台部破片 底・(8.0) 残高・1.3	①精選 ②還元 ③灰黄褐		回転ロクロ成形か。高台部は内縁で接地する。	内面自然釉か。
14	須恵器 杯	① 4区20E-11 G ②As-B混土	口縁部～胴部破片 口・(14.0) 残高・4.0	①細砂 ②還元 ③灰		右回転ロクロ成形。	
15	須恵器 杯	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	口縁部～底部破片 底・(6.0) 残高・2.6	①白色鈹物粒 ②還元 ③灰白		口縁部緩やかに彎曲しながら立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部回転糸切り離し後未調整。	器面は磨耗が著しい。
16	須恵器 高台付椀	① 2 b 区 ② Hr-FP 泥流下	口縁部下位～高台部 破片 底・(7.0) 残高・2.4	①粗砂・赤色粘土粒 ②還元 ③灰黄		内外面とも磨耗するが、回転ロクロ成形と考えられる。	
17	須恵器 高台付椀	① 4区20C-9 G ②As-B上黒色土	口縁部下位～高台部 破片 底・(8.0) 残高・2.5	①白色鈹物粒 ②還元 ③灰白		高台部は低く、内縁が接地する。右回転ロクロ成形か。	器面の磨耗が著しい。
18	須恵器 甕	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	胴部破片	①粗砂大の白色鈹物 粒 ②還元 ③灰		外面叩き目。内面当て目。	
19	須恵器 羽釜	① 2 a 区 ②湿地中	鏝破片 残高・4.6	①粗砂・細砂少量 ②還元 ③灰白		断面三角形の鏝が付く。内外面ともナデ調整を施す。	

中世遺構外出土遺物 (第117・118図 PL37・38)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
20	青磁 碗	① 2 a 区 ②溜池中	胴部破片 残高・2.2	①精選 ②還元 ③灰白		外面に片切彫による鑄蓮弁文。	中世。 龍泉窯系。 13世紀中～後。
21	青磁 碗?	① 4区20G-9 G ②As-B混土中	口縁部破片 口・(18.0) 残高・2.6	①精選 ②還元 ③灰		口縁部先端にいたり強く外反する。内面に片彫りによる一条の線刻有り。釉は全体に薄い。白磁III期。	中世。 中国。
22	青磁 碗	① 4区 ②As-B混土中	口縁部破片 口・(12.0) 残高・2.4	①精選 ②還元 ③明オリブ灰		外面に片彫りによる鑄蓮弁文が見られる。	中世。 13世紀中～後頃。
23	青磁 盤	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	口縁部破片 口・(12.2) 残高・1.5	①精選 ②還元、焼成不良 ③灰白		口縁部先端は屈曲後大きく外反して立ち上がる。	中世。 中国。
24	陶器 大皿	① 3区As-A下 水田 ②As-A混土中	口縁部破片 口・(34.0) 残高・1.8	①精選 ②還元 ③灰白		口縁部は内面に稜をなして短く立ち上がる。内外面に灰釉。	中世。 古瀬戸。
25	陶器 皿	① 4区20C-10 G ②調査時の1面	口縁部破片 口・(14.0) 残高・1.6	①荒いが精選 ②還元 ③灰白		口縁部内面の先端に灰釉。	中世。 古瀬戸。
26	陶器 甕	① 3区20L-19 G ②As-A混土中	胴部破片	①粗砂大の白色鈹物 ②還元 ③明褐		外面ナデ調整。内面は下半に指頭圧痕を残し、上半にヨコ方向のナデ。	常滑。 中世か。
27	陶器 甕	① 4区20F-15 G ②As-B混下	胴部破片	①粗砂・細砂 ②還元 ③灰白		外面に自然釉がかかる。	中世。 常滑。
28	陶器 おろし皿	① 4区20G-11 G ②As-B混土中	底部破片 底・(8.0) 残高・1.2	①荒いが精選 ②還元 ③浅黄		内面に斜め格子状に櫛目が施される。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	中世。 古瀬戸。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調 ②焼成	成・整形技法の特徴	備考
29	陶器 おろし皿	① 4区20G-11 G ②不詳	底部破片 底・(7.0) 残高・1.2	①精選 ②還元 ③灰黄	内面に格子目状の櫛目が施される。右回転 ロクロ成形か。灰釉がかかる。	中世。 古瀬戸。
30	土師質土器 皿	① 4区20E-9 G ②As-B混土中	口縁部破片 口・(14.0) 残高・2.2	①粗砂少量 ②還元 ③にぶい黄橙	左回転ロクロ成形か。	
31	土師質土器 皿	① 4区 ②As-B混土中	口縁部～底部破片 口・(12.0) 底・(8.0) 残高・2.4	①細砂 ②還元 ③にぶい黄橙	口縁部内外面の広い範囲に煤が付着する。 左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し 後未調整。	
32	土師質土器 皿	① 4区 ②As-B混土中	口縁部～底部破片 口・(12.0) 底・(6.6) 残高・2.8	①粗砂 ②還元 ③にぶい褐	口径に比して底径が大きい。左回転ロクロ 成形。底部は回転糸切り離し後未調整。	内外面に付着 物。
33	土師質土器 皿	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	口縁部～底部破片 口・(8.0) 底・(5.8) 高・1.9	①粗砂少量 ②還元 ③灰白	灯明皿である。口縁部先端に煤が付着する。 右回転ロクロ成形と考えられる。底部は回 転糸切り離し後未調整。	
34	土師質土器 皿	① 3区As-A下 水田 ②As-A混土中	口縁部～底部破片 口・(8.0) 底・(5.6) 高・2.5	①細砂 ②還元 ③橙	左回転ロクロ成形。	
35	土師質土器 皿	① 4区20F-17 G ②調査時の3面	口縁部～底部破片 口・(8.2) 底・(5.0) 高・2.4	①粗砂 ②還元 ③橙	灯明皿として使用されたため口縁部先端に 煤が付着している。左回転ロクロ成形。底 部は回転糸切り離し後未調整。	
36	土師質土器 皿	① 4区20E-15 G ②調査時の3面	口縁部～底部破片 口・(8.0) 底・(4.6) 高・1.7	①細砂・雲母 ②還元 ③橙	回転ロクロ成形。	
37	土師質土器 皿	① 4区 ②As-B混土中	口縁部～底部破片 口・(10.0) 底・(8.0) 残高・6.1	①粗砂・細砂 ②還元 ③にぶい黄橙	回転ロクロ成形。	
38	土師質土器 皿	① 4区20F-15 G ②As-B混土下	口縁部破片 口・(10.0) 残高・2.0	①細砂 ②還元 ③橙	右回転ロクロ成形か。	
39	土師質土器 皿	① 4区20E-10 G ②As-B混土中	底部破片 底・(7.8) 残高・1.0	①細砂 ②還元 ③灰白	回転を伴うロクロ成形。底部外面は磨耗し ている。	
40	土師質土器 皿	① 4区20E-9 G ②As-B上黒色 土	底部破片 底・(6.8) 残高・1.1	①赤色粘土粒 ②還元 ③明黄褐	回転ロクロ成形。	器面の磨耗が 著しい。
41	土師質土器 皿	① 4区 ②As-B混土中	底部破片 底・3.8 残高・1.3	①粗砂 ②還元 ③にぶい褐	左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し 後未調整。	
42	軟質陶器 内耳鍋	① 4区20G-11 G ②As-B混土	口縁部破片 口・(34.0) 残高・6.1	①粗砂 ②還元 ③灰	口縁部は短く立ち上がり、先端はやや丸味 をおびる。頸部内面の稜はくの字状を呈す。 内外面ともヨコナデ、ナデ。	
43	軟質陶器 内耳鍋	① 4区 ②調査時の1面	口縁部破片	①粗砂・雲母 ②酸化 ③灰、炭素吸着	口縁部先端は平坦面をなす。内外面ともヨ コナデ。	
44	軟質陶器 内耳鍋	① 4区 ②As-B混土中	口縁部破片 残高・4.6	①粗砂少量 ②還元 ③灰、炭素吸着	口縁部先端は平坦面をなす。耳は装着後周 辺に粗雑なナデを加える。	
45	軟質陶器 内耳鍋	① 4区 ②As-B混土中	口縁部～胴部上位破 片	①粗砂・雲母 ②還元 ③灰黄褐、炭素吸着	口縁部は長く立ち上がり、先端は平坦面を なす。頸部内面の稜はくの字状を呈する。 胴部外面は器面調整のままの部分が多い。	

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考	
46	軟質陶器 内耳鍋	① 4区20E-11 G ②As-B混土上	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③灰、炭素吸着		口縁部先端は外縁が丸味をおびる。	外面に付着物。	
47	軟質陶器 擂鉢	① 4区20G-9 G付近 ②As-B混土上	口縁部破片	①粗砂・雲母 ②還元 ③褐		口縁部先端部は内外に肥厚、断面T字状を呈す。		
48	軟質陶器 擂鉢	① 4区 ②As-B混土中	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③灰		口縁部先端はやや丸味をおびる。内面はあまり研磨されていない。外面はヨコナデ、ヨコ方向のナデ。		
49	軟質陶器 擂鉢	① 4区20E-15 G ②調査時の3面	口縁部破片	①粗砂 ②酸化 ③灰、炭素吸着		口縁部先端に片口が付く。内外面ともヨコ方向のナデ。		
50	石製品 砥石	① 4区20E-10 G ②As-B混土中	破片 長・3.5 幅・3.2 厚・1.7 重・22g	石材 粗粒輝石安山岩		手持砥か。断面形は山形を呈し、一面は平坦な面を形作る。この面は研磨と考えられるが、石の材質は荒く、仕上砥にはとうてい使用できない。		
51	鉄製品 鉢	① 4区20F-17 G ②調査時の3面	口縁部～底部 1/3 口・(11.1) 残高・4.8			口縁部は平縁で、平底ぎみの底部から上方に向けて立ち上がる。錆化が進行し、器面の状況は不明である。現在の器高は、0.6~0.8cmを測る。	第4面で報告した集石調査時に、同一確認面上、4号集石の北方2.3mから出土。	
挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 国名	備考
52	古銭 祥符通寶	① 3区3面畠 ②埋没土	A 25.00 B 19.00	C 24.90 D 19.30	① 1.05 ③ 1.10 ② 1.00 ④ 1.10	2.58	1009年 北宋	注記はA下畑耕作痕埋没土。
53	古銭 景德元寶	① 4区20F-10 G②1面	A 24.50 B 19.60	C 24.25 D 19.10	① 1.10 ③ 1.15 ② 1.10 ④ 1.20	2.33	1044年 北宋	
54	古銭 判読不明	① 4区20E-9 G②As-B混土上	A 24.20 B 19.10	C 24.30 D 18.85	① 1.35 ③ 1.10 ② 1.20 ④ 1.20	2.54		□元□寶または□□元寶。
55	古銭 開元通寶	① 4区20E-17 G②As-B混土上	A 23.75 B 18.50	C 23.55 D 18.50	① 1.25 ③ 1.30 ② 1.30 ④ 1.15	2.74	966年 南唐	
56	古銭 皇宋通寶	① 4区20E-10 G②As-B混土	A 24.60 B 24.30	C 24.70 D 24.25	① 1.05 ③ 1.10 ② 1.10 ④ 0.90	2.12	1039年 北宋	
57	古銭 熙寧元寶	① 4区20E-9 G②As-B混土	A (23.00) B 18.15	C 23.20 D 18.15	① 1.40 ③ 1.25 ② 1.05 ④ 1.10	2.17		
58	古銭 皇宋通寶	① 4区 ②As-B混土中	A 24.30 B 19.80	C 24.40 D 20.25	① 1.05 ③ 1.00 ② 1.05 ④ 1.05	2.02	1039年 北宋	注記に館内。

近世遺構外出土遺物 (第119図 PL39)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	備考
59	陶器 碗	① 3区As-A下 畠 ②耕作痕埋没土	口縁部破片 口・(17.0) 残高・3.5	①精選 ②? ③にぶい褐		口縁部先端の外縁は玉縁状に肥厚する。内外面に白土刷毛塗り後透明釉。	肥前。 江戸時代。
60	陶器 皿	① 3区南トレン チ ②不詳	口縁部～高台部破片 口・(13.0) 底・(6.5) 高・2.5	①精選 ②還元 ③灰白		右回転ロクロ成形。高台部周辺は回転を伴うヘラケズリ調整。内面から高台脇に灰釉。	美濃。 17世紀。
61	陶器 皿	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	口縁部破片 口・(11.0) 残高・1.5	①粗砂少量 ②還元 ③浅黄		右回転ロクロ成形。口縁部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。内外面に長石釉。	瀬戸・美濃。 17世紀。
62	陶器 皿	① 3区 ②表採	口縁部～高台部破片 口・(14.0) 底・(10.0) 高・3.0	①精選 ②還元 ③明黄褐		口縁部は先端にいたり強く外反する。右回転ロクロ成形。口縁部外面の下半に回転を伴うヘラケズリ調整。内外面の口縁部先端に灰釉。	瀬戸・美濃。 17世紀。

遺物観察表

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
63	陶器 皿	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	口縁部～底部 1/4 口径・(14.0) 底径・ 6.7 高・ 2.8	①細砂少量 ②還元 ③灰白	左回転ロクロ成形。口縁部下回転を伴うヘラケズリ。高台部はケズリ出し高台。見込み蛇ノ目状に釉を剥ぐ。釉剥ぎ幅は一定せず雑。内面から体部外面灰釉。	瀬戸・美濃。 17世紀中頃。
64	陶器 皿	① 3区 ②表採	口縁部破片 口・(11.0) 残高・2.0	①精選 ②還元 ③浅黄	内外面に灰釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
65	陶器 皿?	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	底部～高台部破片 底・(10.3) 残高・3.0	①精選 ②還元 ③にぶい赤褐	断面台形の幅広高台。回転を伴うヘラケズリ調整が施される。高台外面端部面取り。高台を除き鉄泥施す。	肥前。 江戸時代。
66	陶器 灯明皿	① 3区東側トレンチ ②不詳	口縁部破片 口・(11.0) 残高・2.2	①精選 ②還元 ③淡黄	右回転ロクロ成形。外面下半には回転ヘラケズリ調整を施す。内外面とも錆釉。底部外面の釉拭い取る。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
67	陶器 灯明受皿	① 3区 ②表採	口縁部～底部破片 口・(11.0) 底・(4.0) 高・ 1.8	①精選 ②還元 ③灰白	内面に受けが見られる。外面は先端を除いて回転を伴うヘラケズリ調整。内面に透明釉。	京・信楽系。 19世紀。
68	陶器 鉢?	① 4区20G-10 G ② 1面	底部～高台部破片 底・(9.0) 残高・3.0	①荒いが精選 ②還元 ③灰白	高台部は削り出し高台。右回転ロクロ成形。体部外面鉄釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
69	陶器 片口鉢?	① 3区As-A下 畠 ②20P-13G	口縁部破片 口・(20.0) 残高・4.9	①精選 ②還元 ③浅黄	口縁部の先端は平坦面をなす。ロクロ目を残す。内外面に飴釉後、灰釉を流す。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
70	磁器 皿	① 3区 ②表採	口縁部破片 口・(12.0) 残高・2.4	①精選 ②還元 ③灰白	内外面に草木の文様が描かれている。口縁部輪花。	肥前。 波佐見系。 江戸時代。
71	磁器 碗	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	口縁部～高台部破片 口・(10.0) 底・ 3.2 高・ 5.5	①精選 ②還元 ③灰白	端反碗。文様は略されていて不明。	瀬戸・美濃。 19世紀中～後。
72	磁器 碗	① 3区東側トレンチ ②不詳	口縁部破片 口・(11.1) 残高・4.3	①精選 ②還元 ③灰白	外面には簡略化した龍と考えられる文様が、内面の先端直下には簡略化した雷文が見られる。	肥前。 19世紀前～中。
73	磁器 鉢	① 3区As-A下 水田 ②As-A混土中	口縁部破片 残高・4.4	①精選 ②還元 ③灰白	口縁部は八角形。外面に宝尽しかと考えられる文様を描く。	肥前。 18世紀末～19 世紀前。
74	磁器 碗	① 3区南トレンチ ②不詳	口縁部上位～高台部 1/2 底・ 3.2 残高・3.1	①精選 ②還元 ③灰白	青磁染付。見込みにコンニャク判による五弁花か。粗い貫入入る。	肥前? 江戸時代。
75	磁器 碗	① 3区 ②表採	口縁部～高台部 1/2 最大径・7.9 残高・ 4.6	①精選 ②還元 ③灰白	口縁部上位内外面には、帯状の区画内に斜格子文を伴う。下位には2本1単位の条線による山形状の文様が配されている。	製作地不詳。 19世紀。
76	磁器 瓶	① 3区As-A下 水田 ②As-A混土中	胴部中位～高台部破片 底・(7.0) 残高・6.3	①精選、黒色鈹物粒 ②還元 ③灰白	外面は口縁部中位に1条、高台部に2条横線が見られる。深い見込には回転を伴うケズリの痕跡を残す。	肥前。 江戸。 流水などによる磨滅あり。
77	鉄器 鉄釘	① 3区As-A下 水田 ②水田覆土中	破片 長・2.4 幅・0.8 厚・0.4 重・1.1g		棒状品で両端は欠損している。上・下両端で一辺の大きさが異なる。断面は四角形と思われる。	
78	磁器 小杯	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	口縁部～高台部 1/2 口・7.0 底・3.2 高・4.3	①精選、黒色鈹物粒 ②還元 ③灰白	口縁部先端直下に笹文を描いている。	肥前? 17世紀末～18 世紀。
79	磁器 仏飯器	① 3区As-A下 水田 ②不詳	脚台部のみ 底・ 4.5 残高・2.4	①精選 ②還元 ③灰白	脚台部は裾部にいたり大きく外反する。くびれ部に横方向の線が見られる。	肥前。 江戸時代。

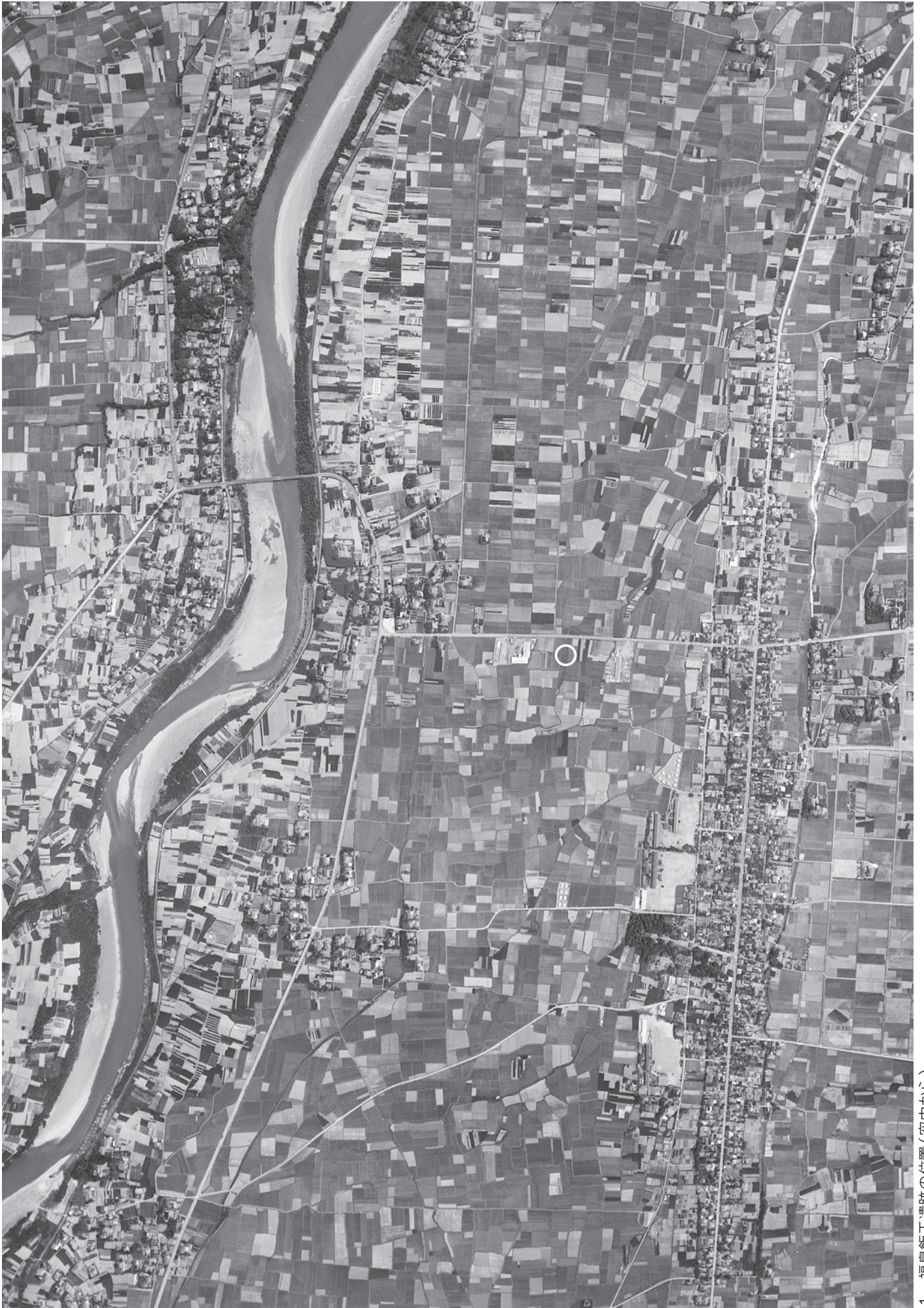
時期不明遺構外出土遺物 (第119・120図 PL39)

挿図番号 PL No.	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
80	土師質土器 皿	① 4区20G-17 G ②不詳	口縁部～底部 1/2 口・8.1 底・5.8 高・1.9	①黒色鈹物粒 ②還元 ③灰黄	口縁部は短く斜め上方に立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転切り離後未調整。	歪みが著しく、口縁部の平面形は長円形。
81	軟質陶器 甕?	① 3区20L-16 G ②As-B混土中	胴部下位～底部破片	①白色鈹物粒 ②還元 ③黄灰、炭素吸着	内外面ともヨコナデ。断面中央から黒灰、黄灰色。器表黒灰色。	
82	土製品 有孔円盤	① 4区20E-17 G ② 3面	1/2	①粗砂 ②還元 ③橙	直径4.8cmが復元される。厚さは0.6cmである。皿の作成は回転ロクロ成形。その底部の割れ口を研磨、二次利用している。底部の孔は皿作成時に焼成前穿孔と考えられる。孔の周縁に煤が付着している。	
83	軟質陶器 蓋	① 4区 ②As-B混土中	破片 口・(14.0) 底・(10.4) 高・ 1.7	①細砂 ②還元 ③灰白	円板状を呈しつまみはない。外縁から約2cm内側に断面三角形のかえりが付く。器面はていねいなナデ。	中世以降。
84	石製品 敲石?	① 2 b区 ②As-B混土中	破片 長・15.5 幅・ 6.9 厚・ 1.9 重・ 276 g	石材 雲母石英片岩	平面形は撥形、断面は扁平で板状を呈する。左側面下半は旧事の欠損か。小口部分は使用により磨耗している。左側面は敲打により小さな抉り込みが重なる。	
85	石製品 敲石?	① 4区20G-9 G ②As-B混土上	破片 長・12.1 幅・ 3.8 厚・ 2.5 重・ 179 g	石材 黒色片岩	棒状を呈する。小口部分に敲打痕が認められる。こも編石として利用されたか。用途不明。	
86	石製品 敲石?	① 4区20E-11 G付近 ②As-B混土上	破片 長・12.4 幅・ 4.7 厚・ 1.7 重・ 164 g	石材 粗粒輝石安山岩	棒状を呈する。小口部分に敲打痕が認められる。こも編石として使用されたか。用途不明。	

第27表 福島飯玉遺跡 掲載遺物器種別一覧表

面区	遺構	土須師恵器		軟質陶器		陶器				磁器				青磁		灰釉陶器	土製製品	砥石	板石	石製鉢	石製品	鉄製品	古銭	合計
		播内鉢	鍋鉢	火鉢	蓋不	片口鉢	火鉢	皿	おろし皿	大皿	練鉢	鉢	鉢	鉢	鉢									
8	4	1号竪穴状遺構	2																				2	
8	4	12号土坑	2																				2	
5-1	3	7号溝																					2	
5-1	4	6号溝	2																				4	
5-1	4	5号溝	1																				7	
5-1	4	172・225ピット																					1	
5-1	4	246・321ピット																					1	
5-1	4	359号ピット																					1	
5-1	4	366号ピット																					1	
5-1	4	373号ピット	1																				1	
5-1	4	388号ピット																					1	
5-1	4	408号ピット																					1	
5-1	4	431号ピット																					1	
5-1	4	5号井戸																					6	
5-1	4	6号井戸	1																				4	
5-1	4	1号土坑																					2	
5-1	4	5号土坑																					4	
5-2	4	7号溝	1																				1	
5-2	4	1号井戸	3																				3	
5-2	4	3号井戸	1																				3	
5	4	15号溝	13																				18	
5	3	用水路	3																				18	
4	4	8号溝	2																				2	
4	4	1号墓坑																					6	
4	4	1号火葬跡																					4	
4	4	1号集石																					2	
4	4	集石部	3																				4	
1	3	1号溝																					3	
1	3	2号溝																					2	
1	3	3号溝	2																				3	
1	3	4号溝																					1	
1	4	1号溝	3																				7	
1	4	2号溝	3																				7	
1	4	3号溝	1																				3	
		縄文時代																					1	
		古墳時代	5																				5	
		奈良・平安時代	2																				13	
		中世	3																				7	
		近世																					39	
		時期不明																					21	
		合計	11	11	15	50	2	1	2	1	1	3	5	1	10	3	1	1	1	1	1	1	23	
																							233	

写真図版



1 福島飯玉遺跡の位置 (空中から)



1 福島飯玉遺跡遠景(東、福島飯塚遺跡から臨む)



2 福島飯玉遺跡遠景(西、福島飯塚遺跡方向を臨む)



1 2b区第8面古墳時代水田(南から)



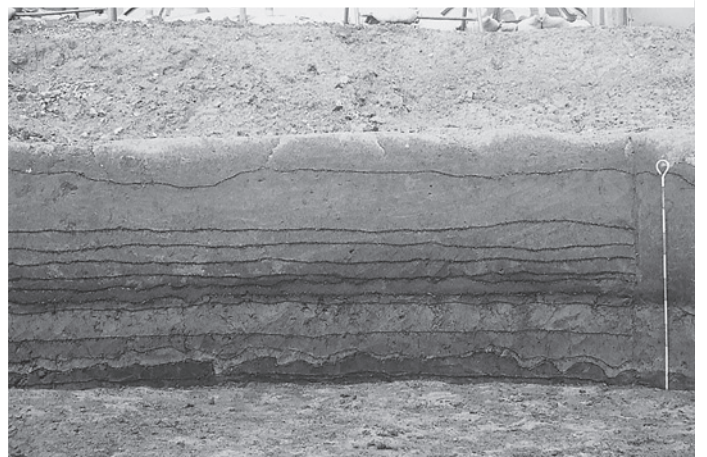
2 2b区第8面古墳時代水田(北から)



3 2b区第8面古墳時代水田(南東から)



4 2b区第8面古墳時代水田(東から)



5 2b区北東壁土層断面(南西から)

PL4 第8面の調査



1 2b区第8面3号溝(西から)



2 2b区第8面3号溝土層断面(北から)



3 3区第8面13号~21号溝(西から)



4 3区第8面20号・21号溝土層断面(南から)



5 4区第8面16号・18号・19号溝(空中から)



6 4区第8面12号土坑土層断面(北から)



7 4区第8面16号溝土層断面(南西から)



8 4区第8面19号溝(南西から)



1 2 a区第7面浅間B軽石下水田(西から)



2 2 a区第7面浅間B軽石下水田(北西から)



3 2 b区第7面浅間B軽石下水田全景(空中から)



4 2 b区第7面浅間B軽石下水田畦畔(南から)



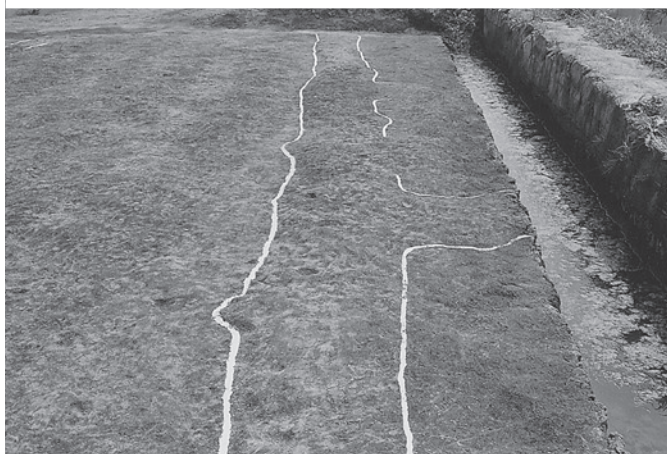
5 3区第7面浅間B軽石下水田全景(北西から)



1 3区第7面浅間B軽石下水田、用水路北側(西から)



2 3区第7面浅間B軽石下水田、用水路南側(西から)



3 3区第7面浅間B軽石下水田畦畔(北から)



5 3区第7面11号溝(南東から)



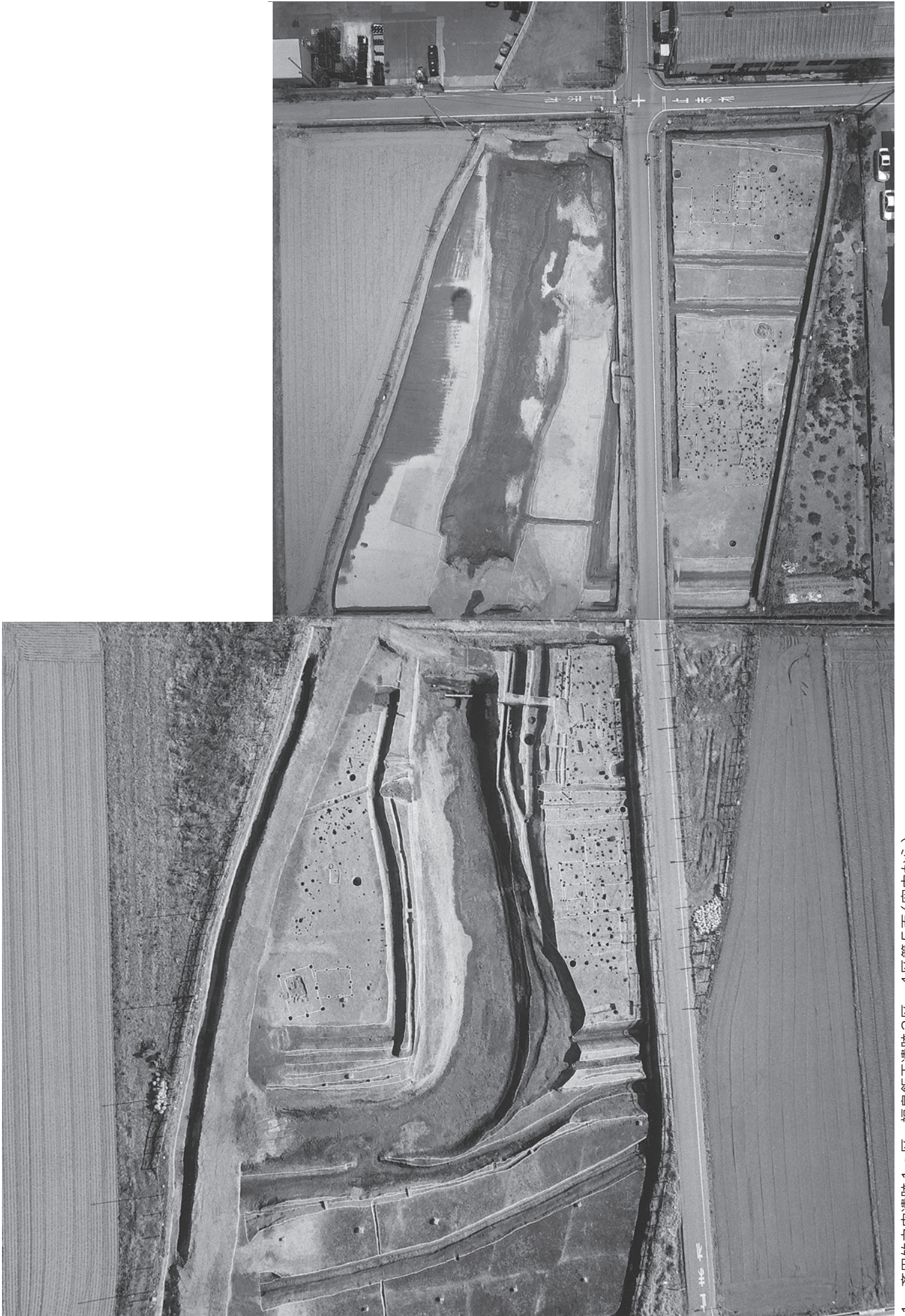
4 3区第7面11号溝(南東から)



7 3区第6面10号溝(南から)



6 3区第6面耕作痕全景(西から)



1 齊田竹之内遺跡 1 a 区、福島飯玉遺跡 3 区・4 区第 5 面(空中から)



1 4区第5面1号・2号屋敷全景(空中から)



2 4区第5面1号屋敷、5号溝(南から)



3 4区第5面1号屋敷、5号溝内柵状痕(北から)



4 4区第5面1号屋敷、5号溝土層断面(北から)



5 4区第5面1号屋敷、5号溝柵状痕土層断面(北から)



1 4区第5面1号屋敷、6号溝(北から)



2 4区第5面1号屋敷、6号溝壁土層断面(北西から)



3 3区第5面1号屋敷、8号溝(西から)



4 3区第5面1号屋敷、8号溝土層断面(南から)



5 3区第5面1号屋敷、7号溝(南から)



6 3区第5面1号屋敷、8号溝、7号溝との合流地点土層断面(東から)



7 3区第5面1号屋敷、7号溝土層断面(南から)



1 4区第5面1号屋敷内1号・2号掘立柱建物(南から)



2 4区第5面1号屋敷内1号掘立柱建物P1土層断面(南から)



3 4区第5面1号屋敷内1号掘立柱建物P3土層断面(南東から)



4 4区第5面1号屋敷内2号掘立柱建物P4土層断面(南から)



5 4区第5面1号屋敷内2号掘立柱建物P5土層断面(南から)



1 4区第5面1号屋敷内3号掘立柱建物(南から)



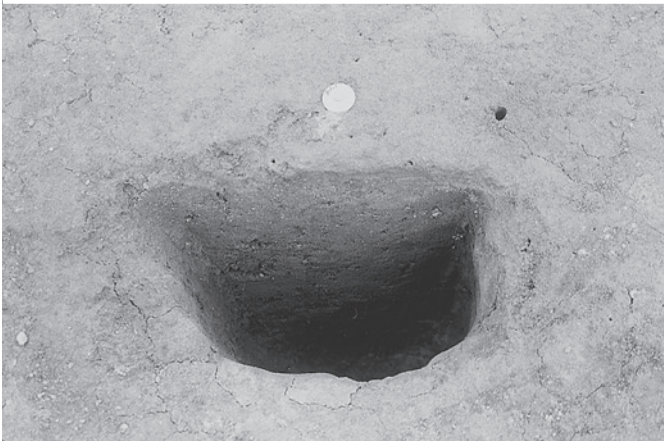
2 4区第5面1号屋敷内3号掘立柱建物P3土層断面(南から)



3 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物(北から)



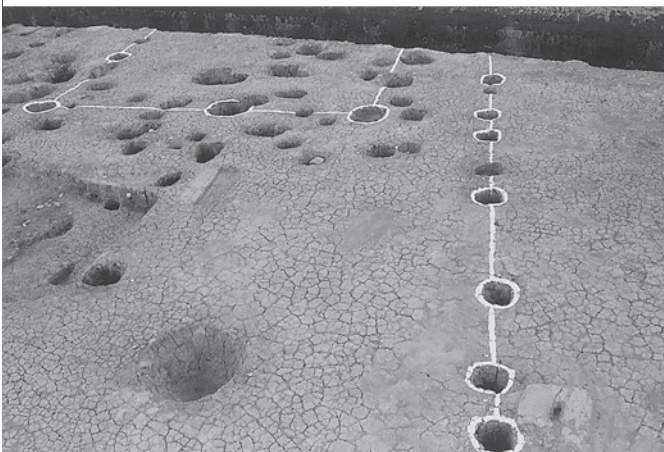
4 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P1土層断面(南から)



5 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P2土層断面(南から)



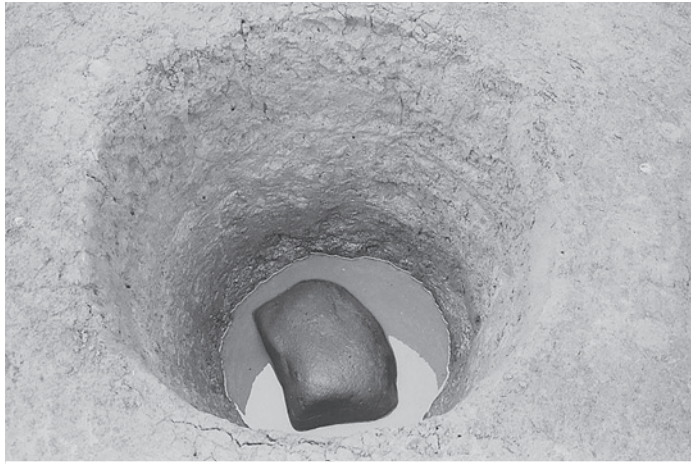
6 4区第5面1号屋敷内4号掘立柱建物P3土層断面(南から)



7 4区第5面1号屋敷内1号柵列(北から)



8 4区第5面1号屋敷内1号柵列P3土層断面(西から)



1 4区第5面1号屋敷内4号井戸礫出土状況(北から)



2 4区第5面1号屋敷内4号井戸土層断面(南から)



3 4区第5面1号屋敷内5号井戸(南から)



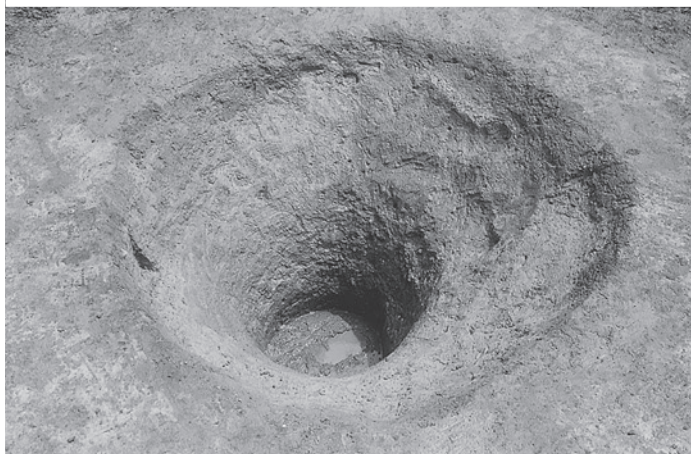
4 4区第5面1号屋敷内5号井戸遺物出土状況(南から)



5 4区第5面1号屋敷内5号井戸土層断面(南から)



6 4区第5面1号屋敷内5号井戸遺物出土状況(南から)



7 4区第5面1号屋敷内6号井戸(西から)



8 4区第5面1号屋敷内6号井戸礫出土状況(西から)



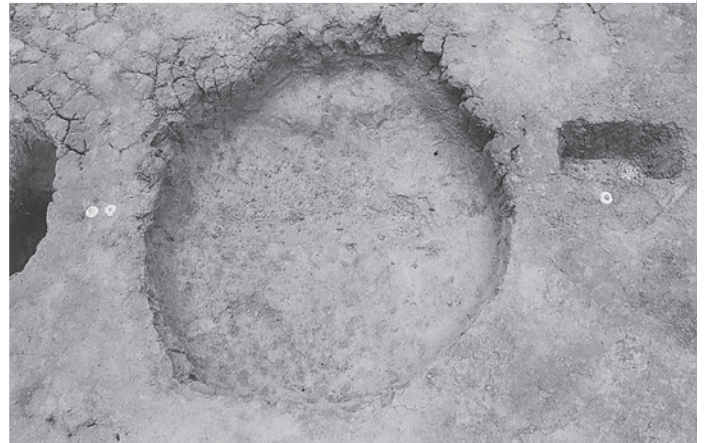
1 4区第5面1号屋敷内1号土坑(北から)



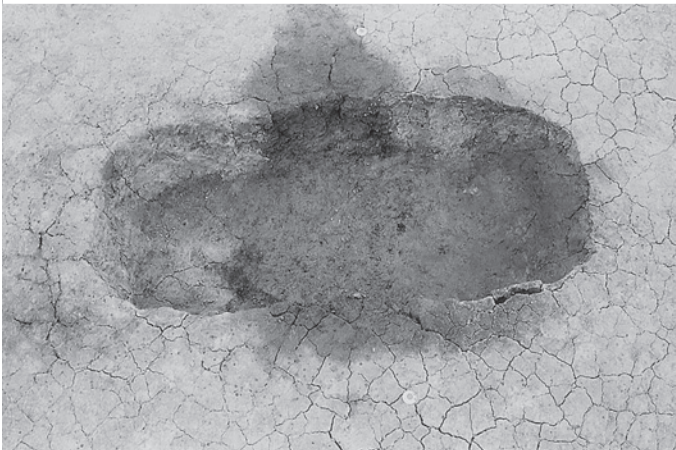
2 4区第5面1号屋敷内1号土坑遺物出土状況(北から)



3 4区第5面1号屋敷内3号土坑(東から)



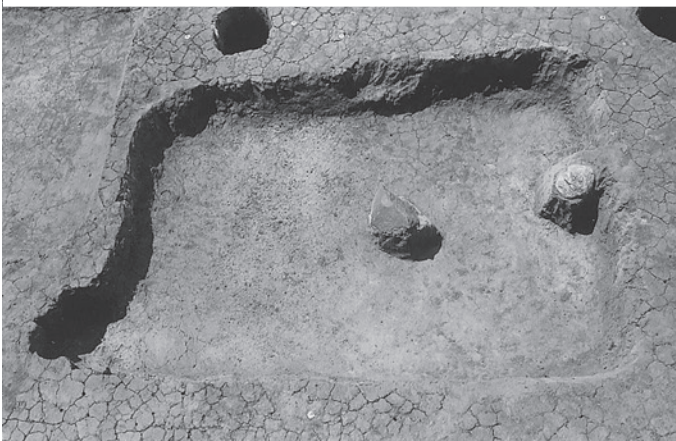
4 4区第5面1号屋敷内4号土坑(北から)



5 4区第5面1号屋敷内6号土坑(南から)



6 4区第5面1号屋敷内5号・8号・9号土坑(北から)

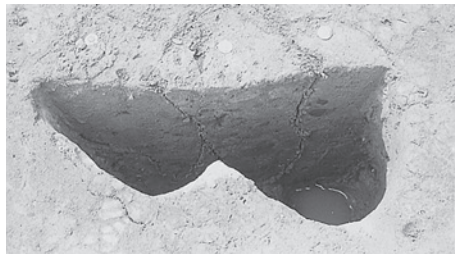


7 4区第5面1号屋敷内10号土坑(北から)



8 4区第5面1号屋敷内11号土坑(北から)

PL14 第5面の調査



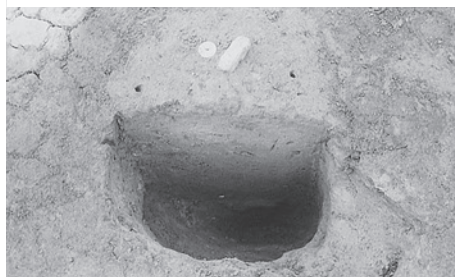
1 299号・484号・300号ピット土層断面(南東から)



2 145号ピット土層断面(南から)



3 274号ピット土層断面(南から)



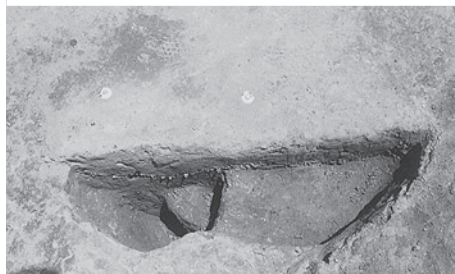
4 325号ピット土層断面(南から)



5 178号ピット遺物出土状況(南から)



6 203号ピット土層断面(南から)



7 122・211(左)号ピット土層断面(南西から)



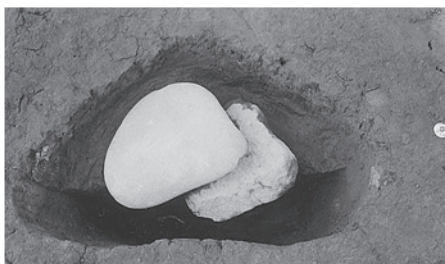
8 221号ピット土層断面(南から)



9 253号ピット土層断面(南から)



10 321号ピット遺物出土状況(東から)



11 308号ピット遺物出土状況(南から)



12 308号ピット土層断面(南から)



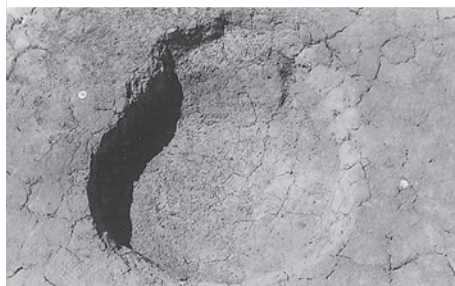
13 416号ピット土層断面(南から)



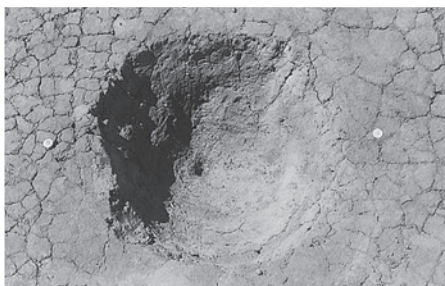
14 271号~273号ピット遺物出土状況(北から)



15 267号ピット遺物出土状況(北から)



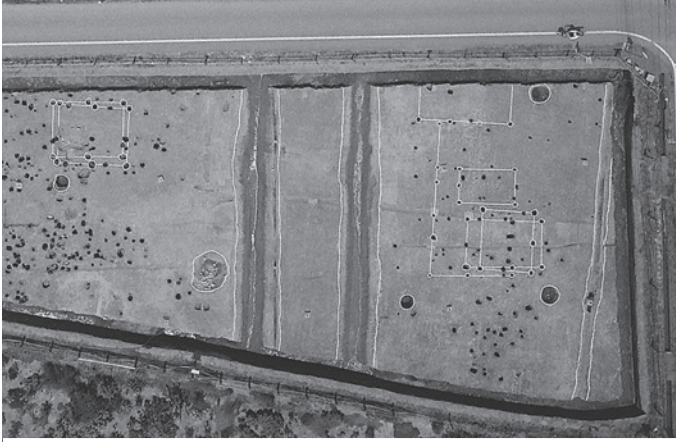
16 188号ピット(北から)



17 209号ピット(北から)



18 265号ピット土層断面(西から)



1 4区第5面2号屋敷(空中から)



2 4区第5面2号屋敷、4号溝(南から)



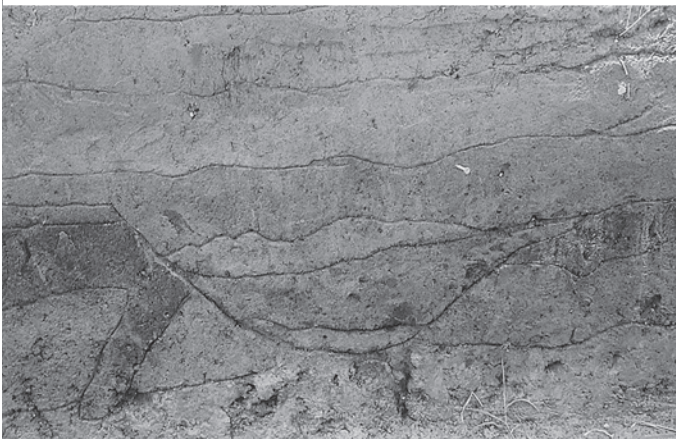
4 4区第5面2号屋敷内7号溝遺物出土状況(南から)



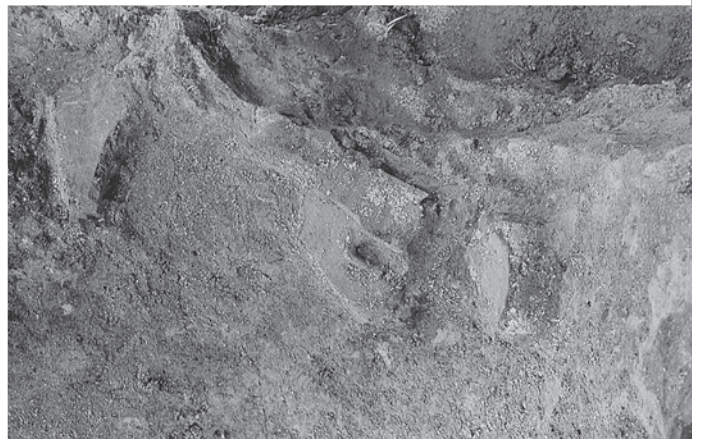
3 4区第5面2号屋敷、4号溝土層断面(北から)



5 4区第5面2号屋敷内7号溝掘削工具痕(西から)



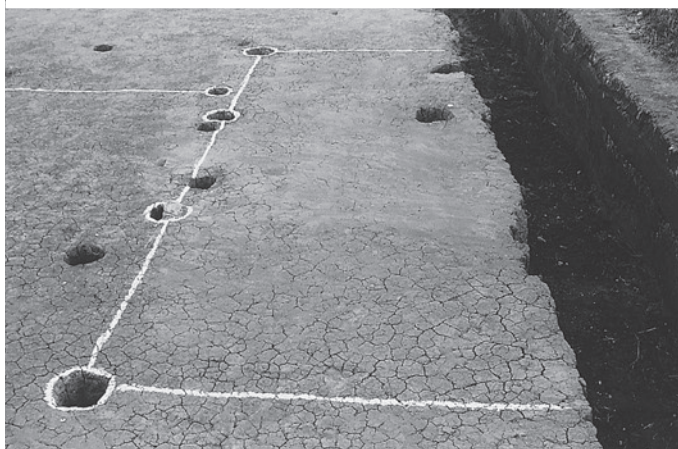
6 4区第5面2号屋敷内7号溝土層断面(北から)



7 4区第5面2号屋敷内7号溝遺物出土状況(北から)



1 4区第5面2号屋敷内2号・3号柵列(南から)



2 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物(東から)



3 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P2遺物出土状況(南から)



4 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P1土層断面(南から)



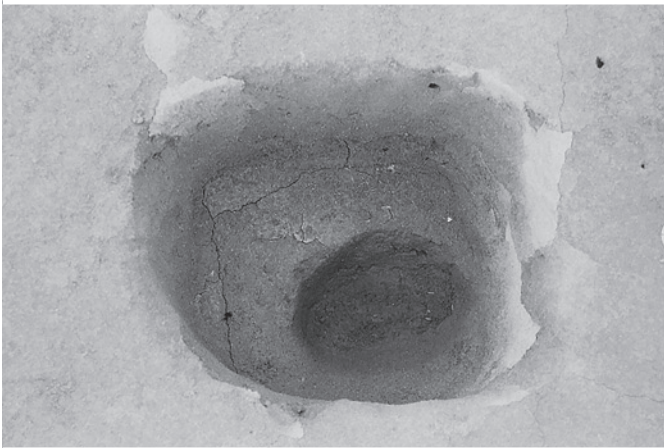
5 4区第5面2号屋敷内5号掘立柱建物P3土層断面(南から)



1 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物(南から)



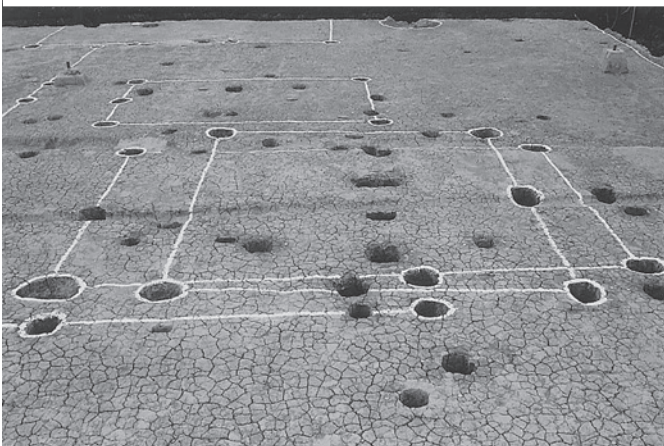
2 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P2土層断面(南から)



3 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P5(南から)



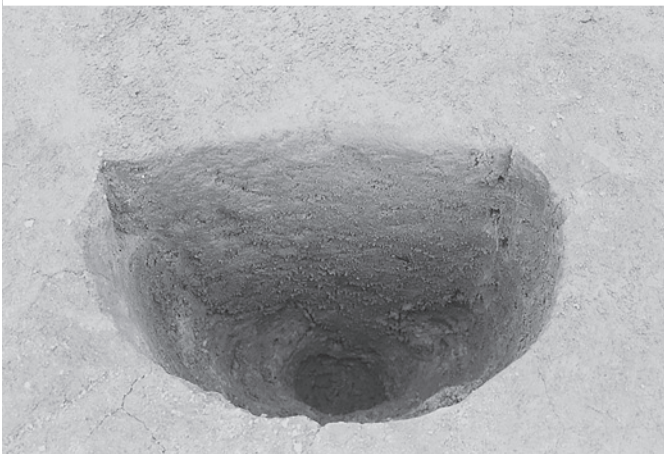
4 4区第5面2号屋敷内6号掘立柱建物P5土層断面(南から)



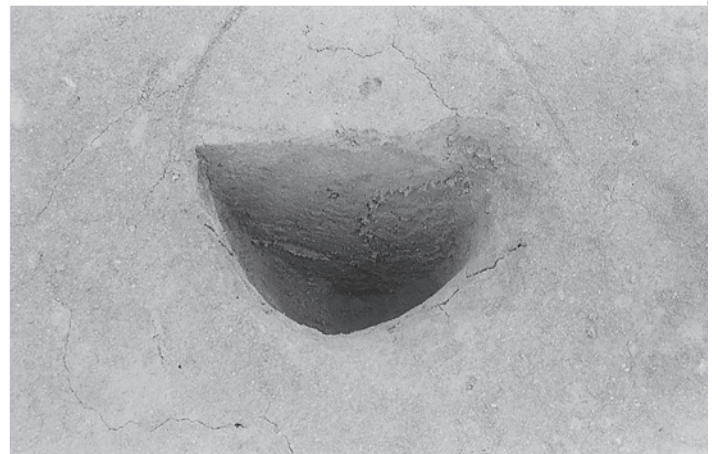
5 4区第5面2号屋敷内7号・8号掘立柱建物(南から)



6 4区第5面2号屋敷内7号掘立柱建物P1土層断面(南から)

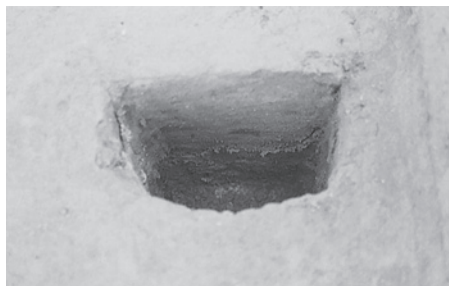


7 4区第5面2号屋敷内8号掘立柱建物P3土層断面(南西から)

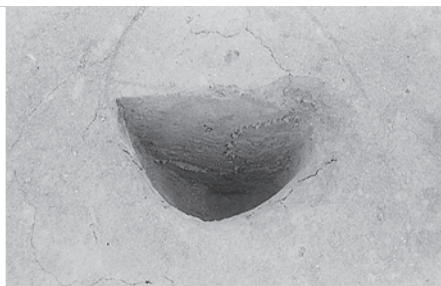


8 4区第5面2号屋敷内2号柵列P3土層断面(南から)

PL18 第5面の調査



1 2号柵列P2土層断面(南から)



2 2号柵列P3土層断面(南から)



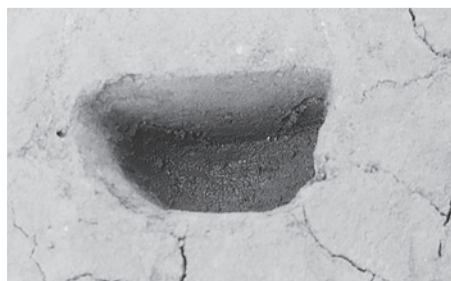
3 2号柵列P4土層断面(南から)



4 3号柵列P1土層断面(南から)



5 3号柵列P2土層断面(南から)



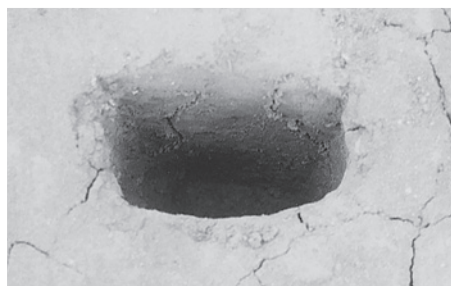
6 3号柵列P3土層断面(南から)



7 39号ピット土層断面(南から)



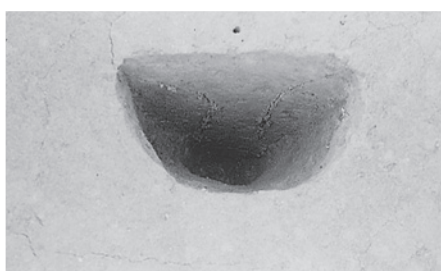
8 19号ピット土層断面(南から)



9 106号ピット土層断面(南から)



10 117号ピット土層断面(西から)



11 75号ピット土層断面(南から)



12 26号ピット土層断面(南から)



13 27号ピット土層断面(南から)



14 3号ピット(南から)



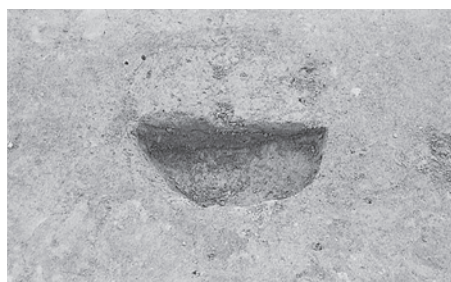
15 3号ピット土層断面(南から)



16 28号ピット土層断面(南から)



17 37号ピット土層断面(南西から)



18 38号ピット土層断面(南から)



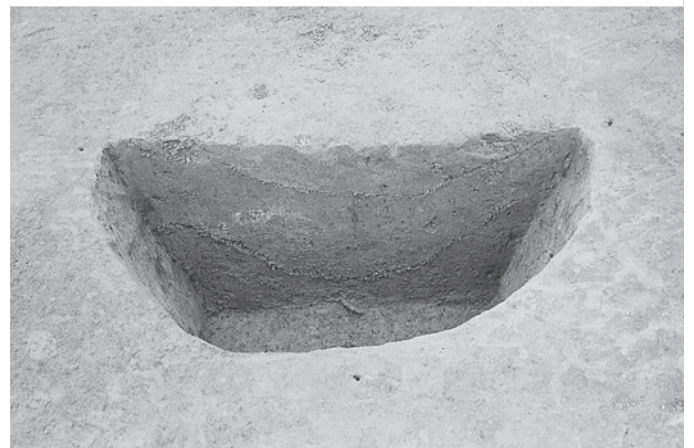
1 4区第5面2号屋敷内1号井戸(北から)



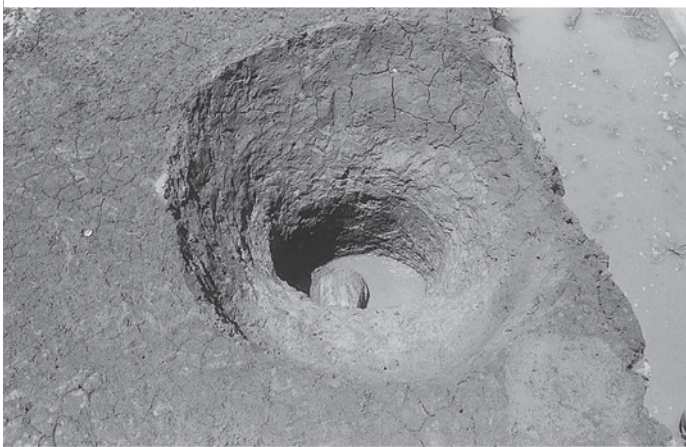
2 4区第5面2号屋敷内1号井戸土層断面(南西から)



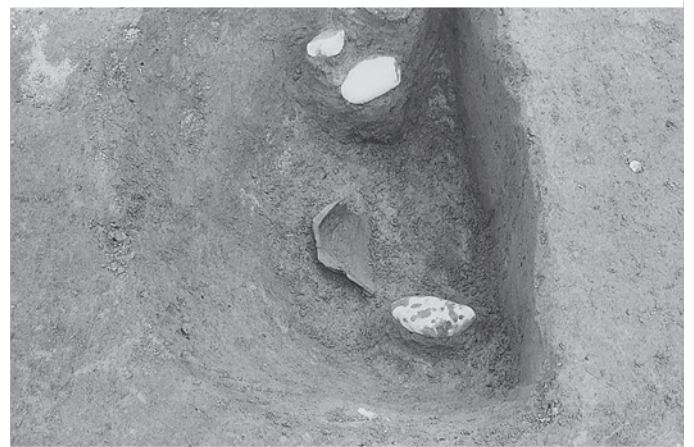
3 4区第5面2号屋敷内2号井戸(北から)



4 4区第5面2号屋敷内2号井戸土層断面(南から)



5 4区第5面2号屋敷内3号井戸磔出土状況(東から)



6 4区第5面2号屋敷内3号井戸遺物出土状況(東から)



7 4区第5面2号屋敷内2号土坑(南から)



8 4区第5面2号屋敷内2号土坑土層断面(南から)



1 4区第5面15号溝(南から)



3 4区第5面17号溝(東から)



2 4区第5面4号柵列P3土層断面(東から)



4 3区第5面用水路集石(南西から)



5 3区第5面用水路土層断面(西から)



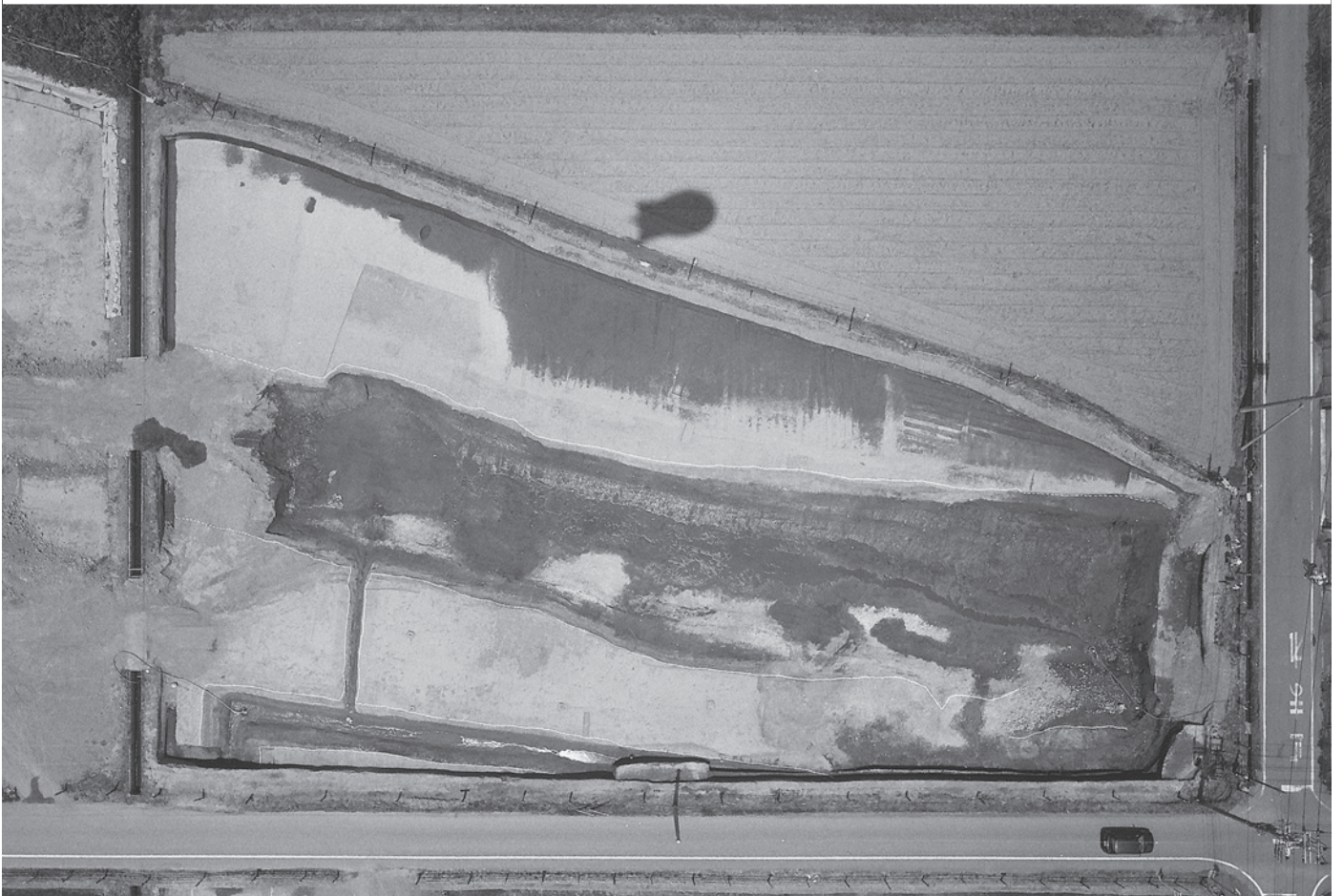
6 3区第5面用水路集石(北東から)



7 3区第5面用水路土層断面(西から)



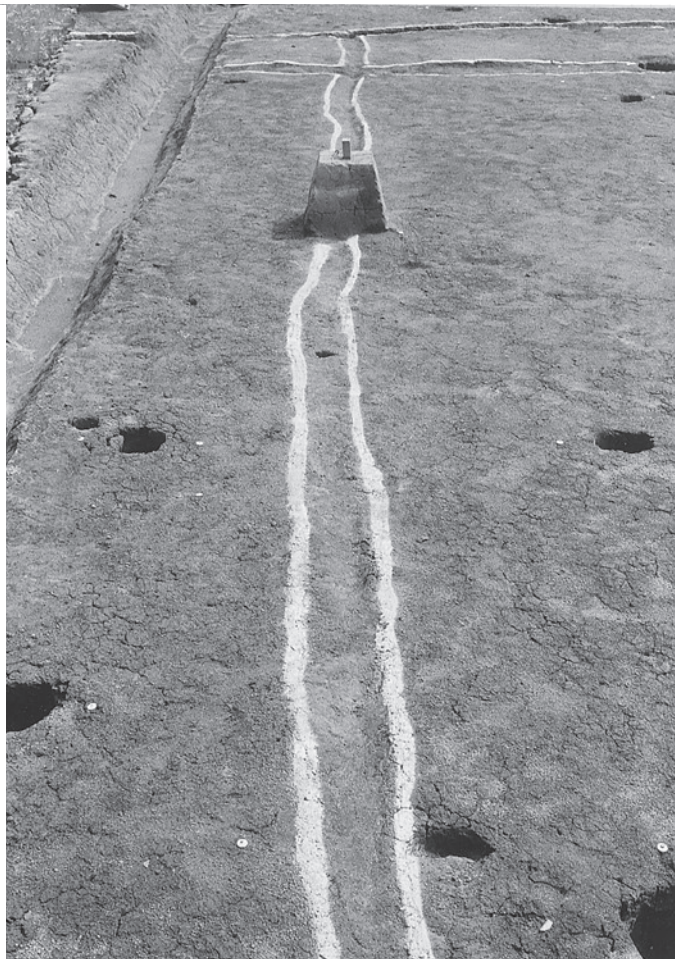
1 3区第5面用水路(西から)



2 3区第5面用水路(空中から)



1 4区第4面8号・9号溝(東から)



2 4区第4面10号溝(北から)



3 4区第4面11号溝(東から)



4 4区第4面14号溝(東から)



5 4区第4面13号溝(南から)



6 4区第4面13号溝土層断面(南から)



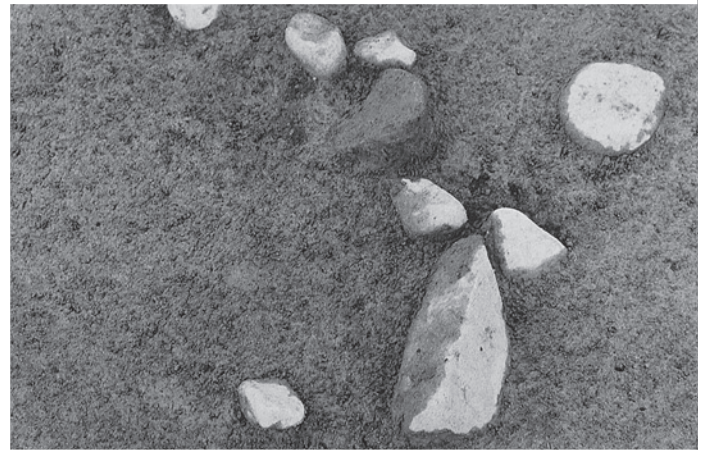
1 4区第4面1号火葬跡骨片出土状況(東から)



2 4区第4面1号火葬跡(東から)



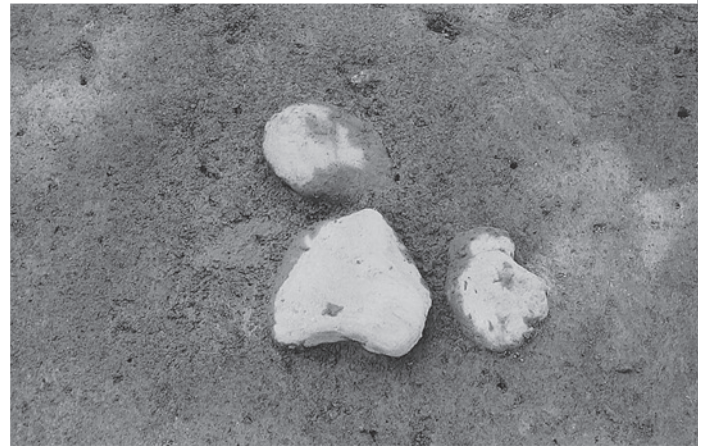
3 4区第4面1号集石(北から)



4 4区第4面2号集石(北から)



5 4区第4面3号集石(北から)



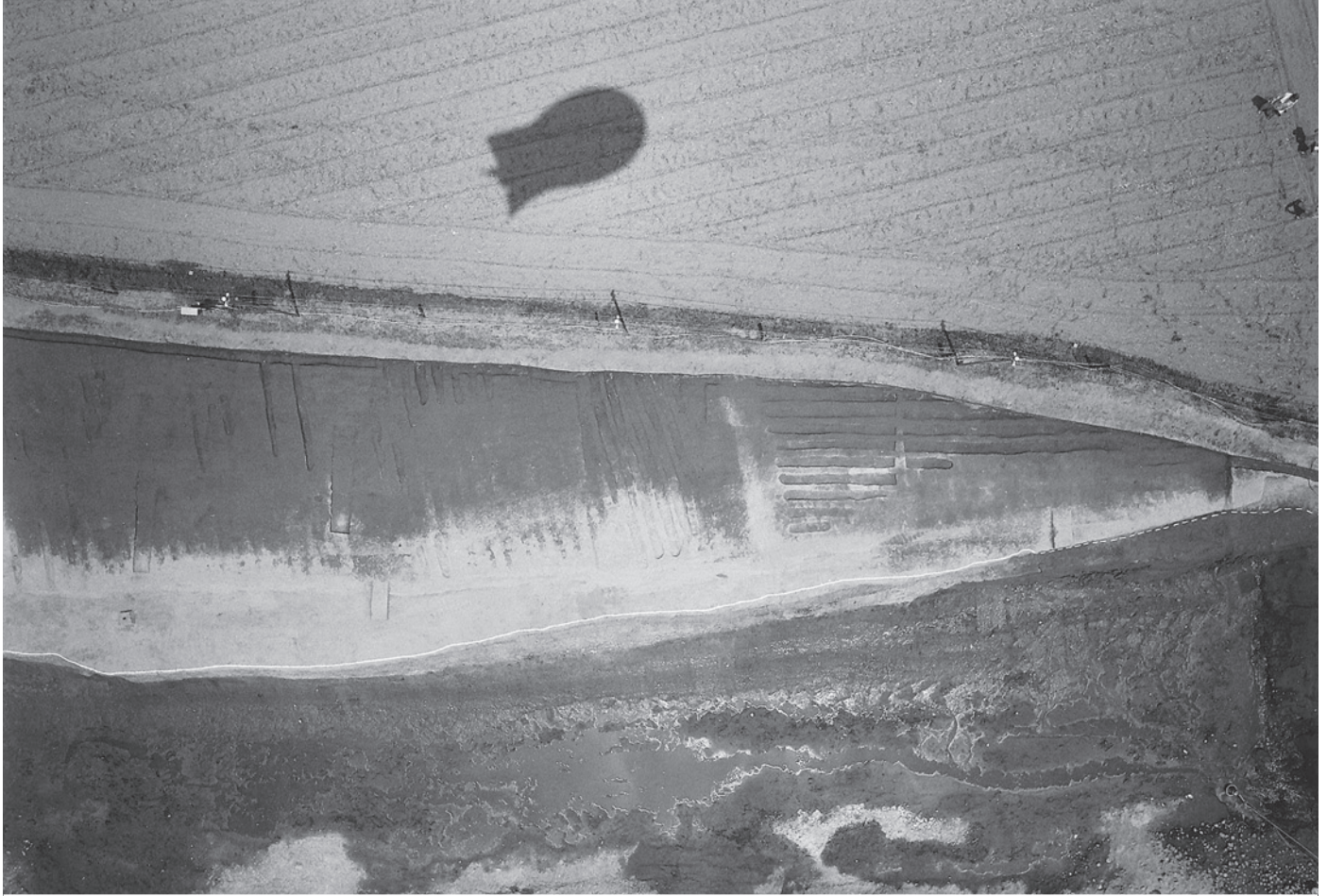
6 4区第4面4号集石(北東から)



7 4区第4面5号集石(北から)



8 4区第4面6号集石(北から)



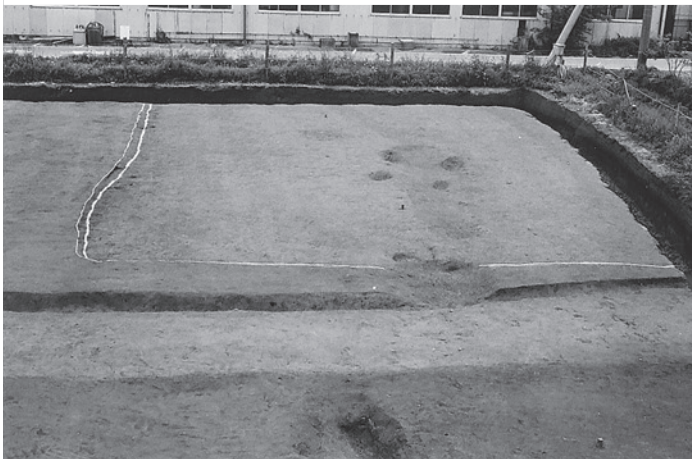
1 3区第3面畠(空中から)



2 3区第3面畠土層断面(南から)



3 4区第3面畠(南から)



4 4区第3面水田(西から)



5 4区第3面水田区画段差(西から)



1 2a区第3面3号溝(西から)



2 2a区第3面4号溝(西から)



3 2b区第3面1号・2号溝(西から)



4 3区第3面12号溝土層断面(南西から)



5 3区第2面水田(西から)



1 3区第2面畠(西から)



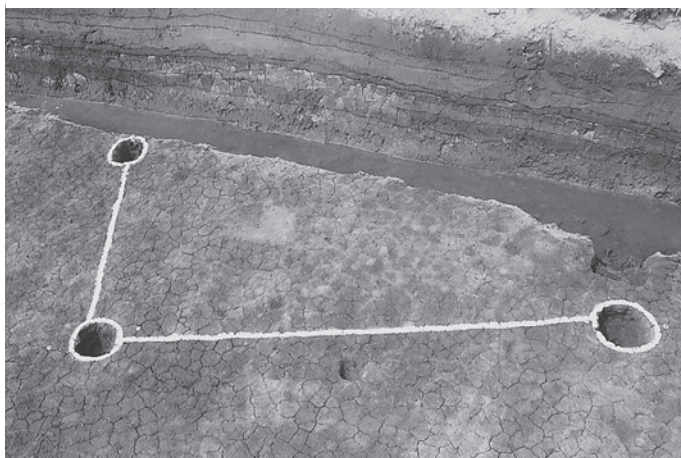
2 3区第2面5号溝(西から)



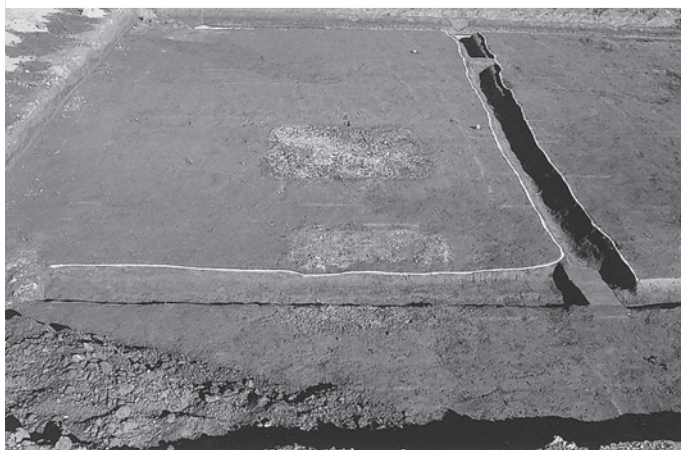
3 3区第2面6号・9号溝(西から)



4 3区第2面5号溝土層断面(東から)



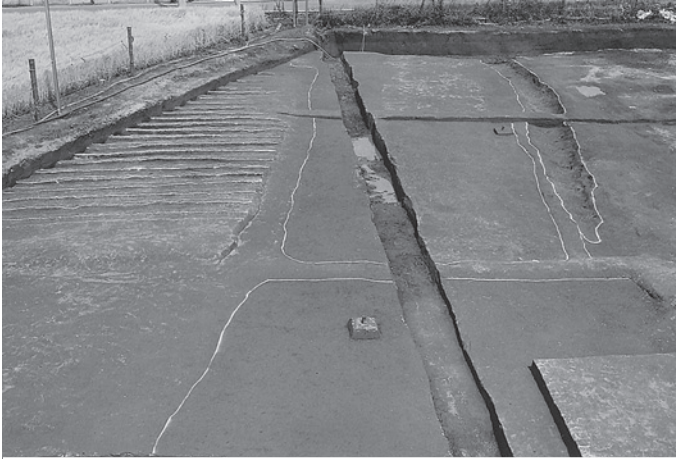
5 3区第1面1号掘立柱建物(南から)



6 2a区第1面2号溝(南から)



7 2a区第1面1号溝(西から)



1 3区第2面水田・第1面畠復旧溝(西から)



2 3区第1面畠復旧溝土層断面(南東から)



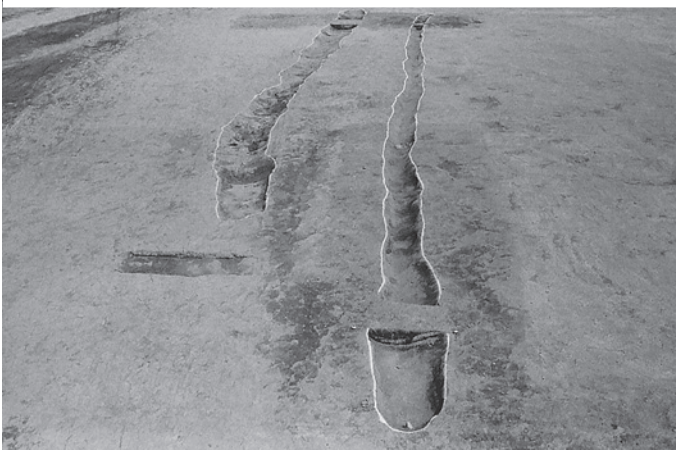
3 3区第3面畠・第1面畠復旧溝(東から)



4 3区第1面畠復旧溝土層断面(南東から)



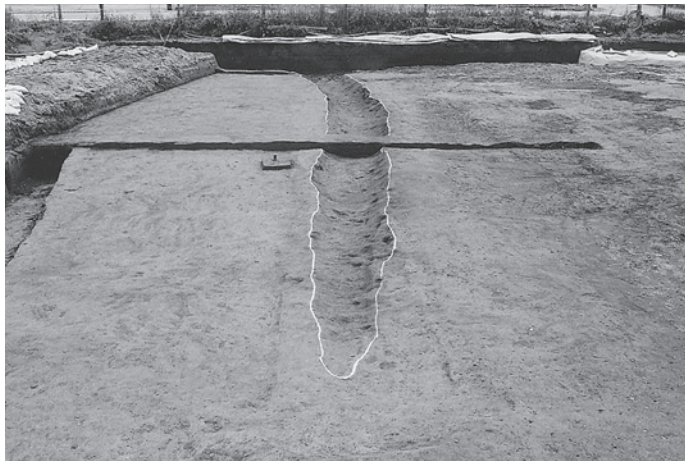
5 4区第1面耕作痕(西から)



6 3区第1面1号・3号溝(西から)



7 3区第1面2号溝(北から)



1 3区第1面4号溝(西から)



2 4区第1面1号~3号溝(東から)



3 4区第1面1号溝(東から)



4 4区第1面2号溝(北から)



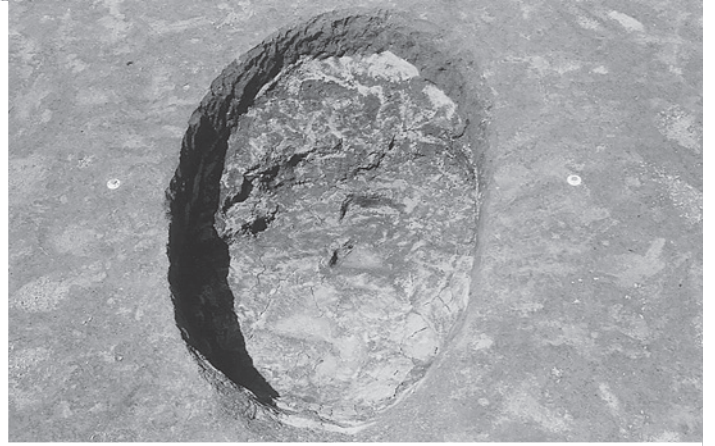
5 4区第1面2号溝土層断面(北から)



6 4区第1面3号溝(北から)



1 3区第1面1号土坑(西から)



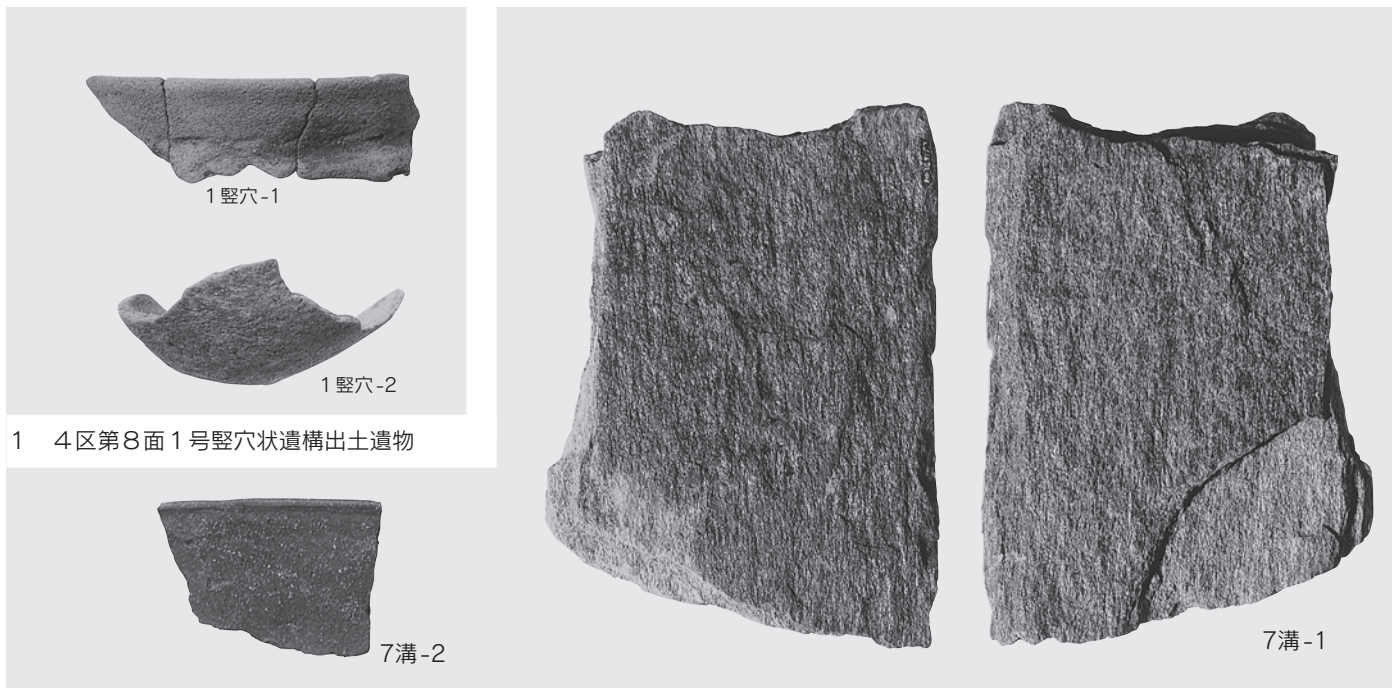
2 3区第1面3号土坑(南から)



3 3区第1面2号土坑(北から)

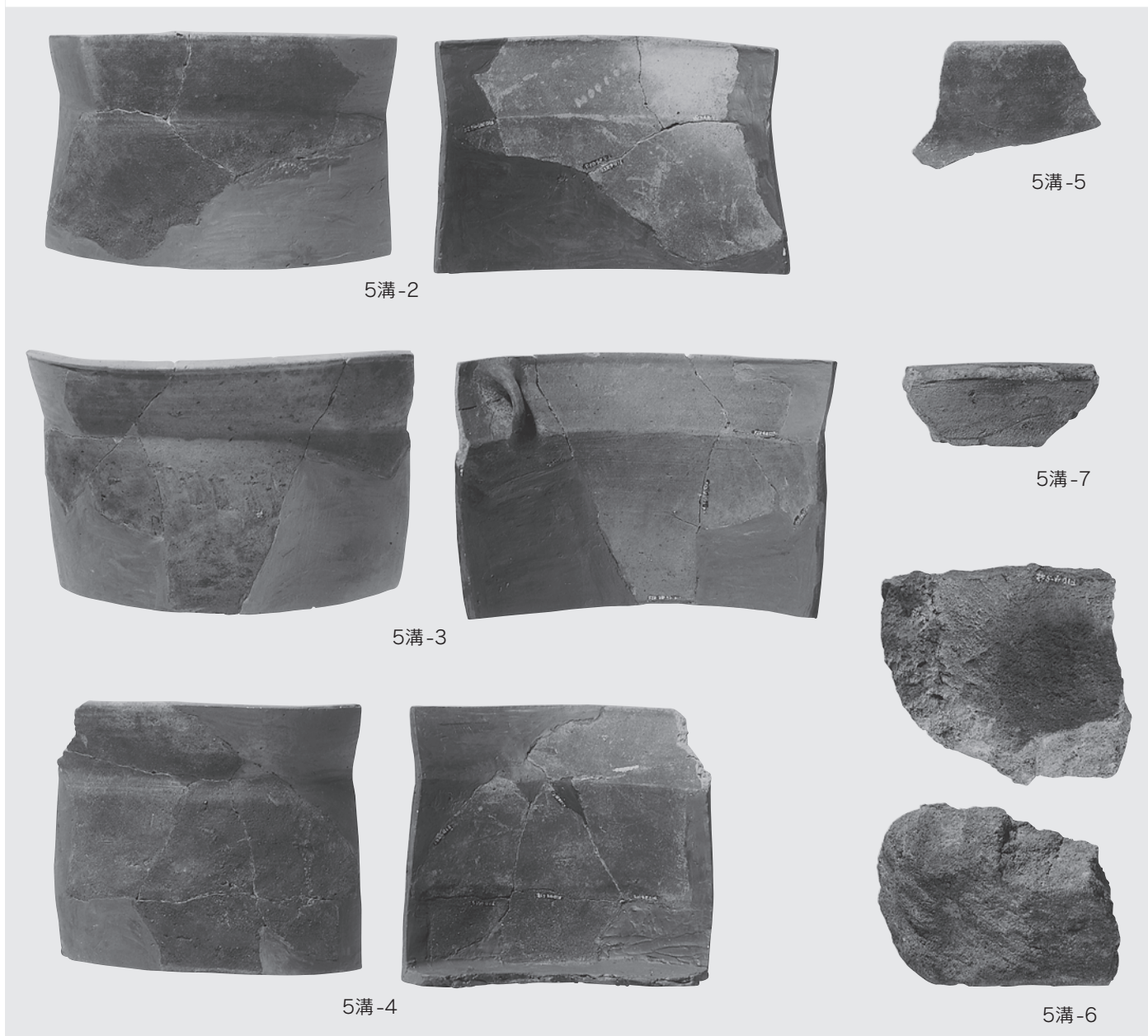


4 3区第1面2号土坑土層断面(南から)



1 4区第8面1号豎穴状遺構出土遺物

2 3区第5面7号溝出土遺物

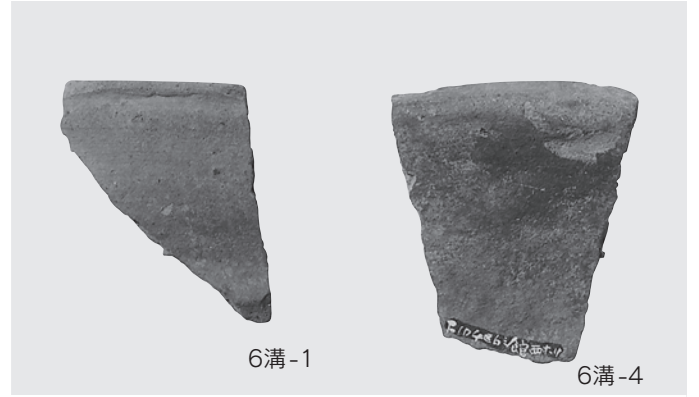


3 4区第5面5号溝出土遺物



5溝-1

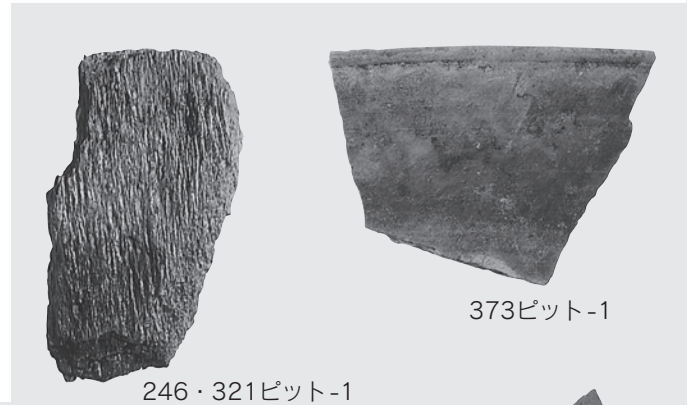
1 4区第5面5号溝出土遺物



6溝-1

6溝-4

2 4区第5面6号溝出土遺物



373ピット-1

246・321ピット-1



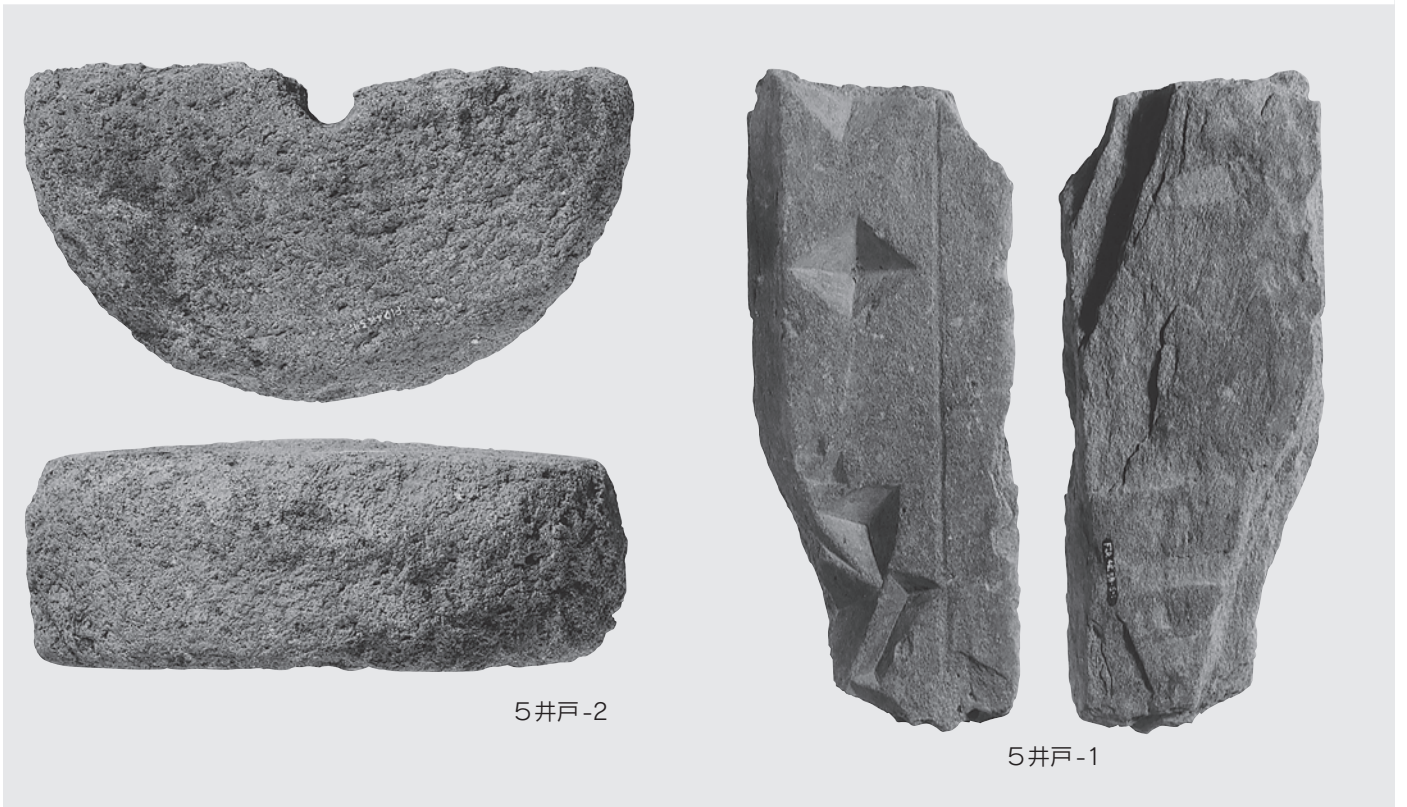
408ピット-1

388ピット-1

359ピット-1

431ピット-1

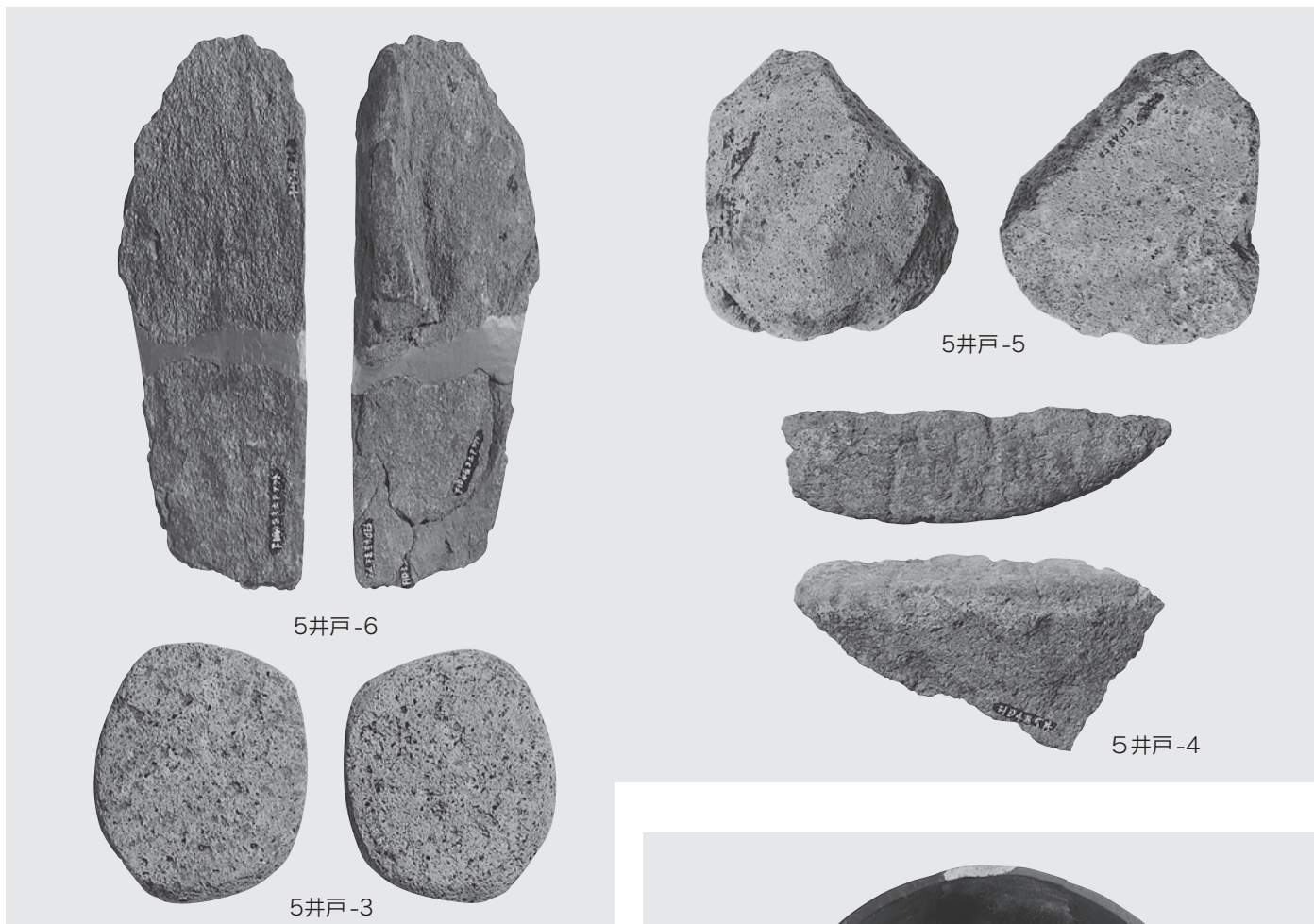
3 4区第5面ピット出土遺物



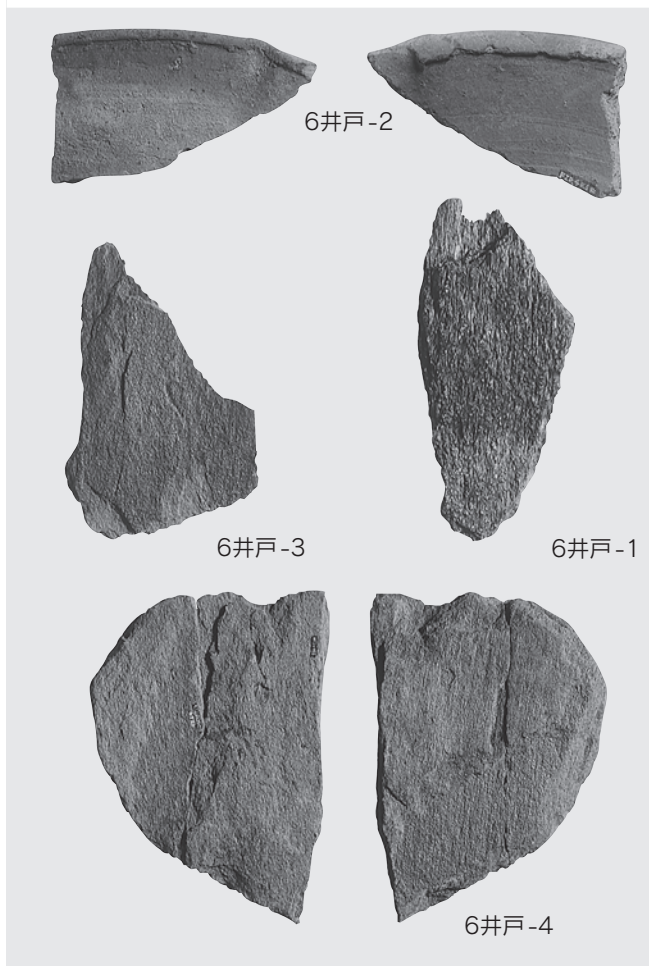
5井戸-2

5井戸-1

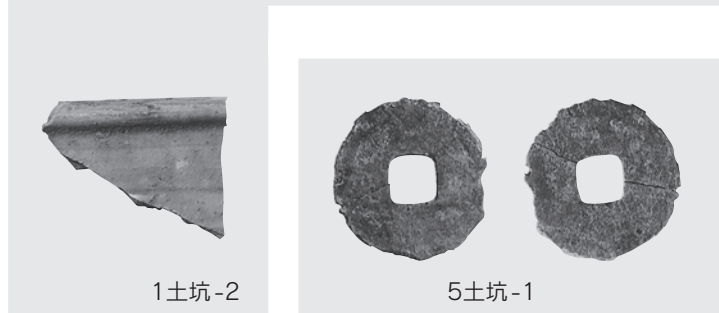
4 4区第5面5号井戸出土遺物



1 4区第5面5号井戸出土遺物

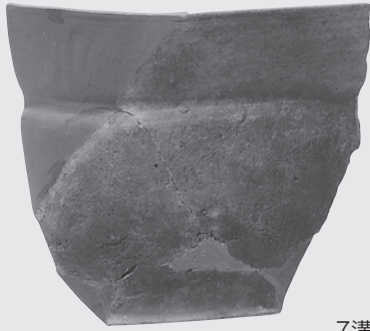


2 4区第5面6号井戸出土遺物

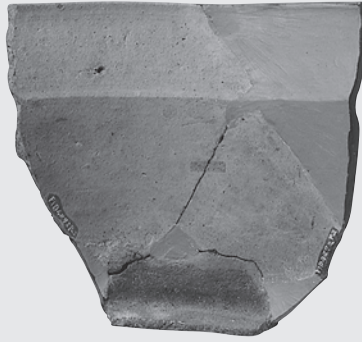


3 4区第5面1号土坑出土遺物

4 4区第5面5号土坑出土遺物



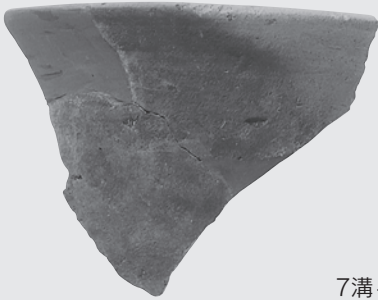
7溝-1



7溝-2



7溝-3



7溝-4



7溝-5



7溝-6



7溝-7



7溝-9



7溝-10



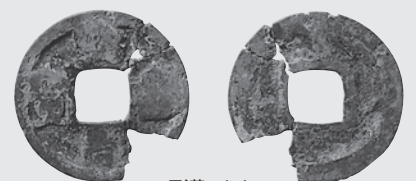
7溝-10



7溝-12



7溝-13



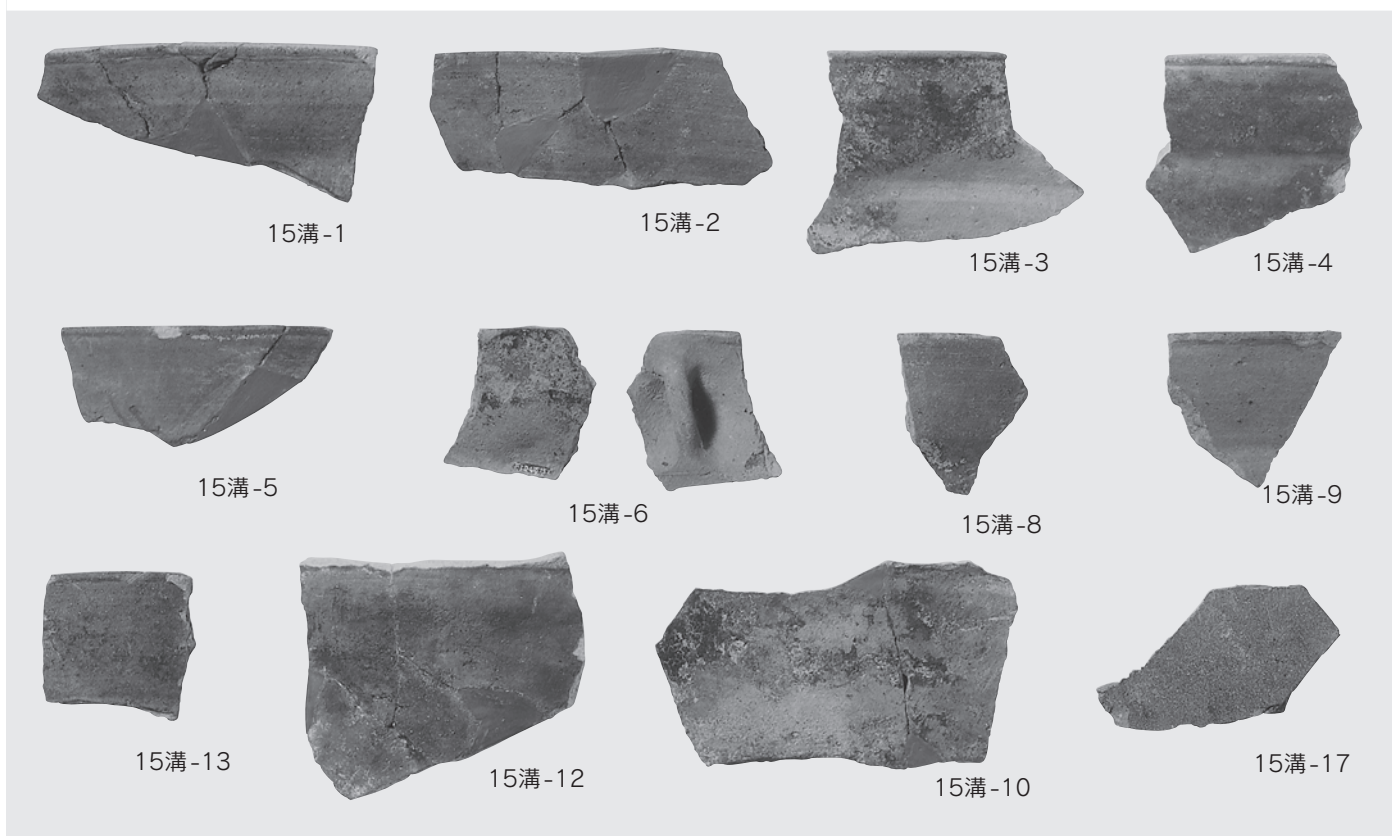
7溝-14



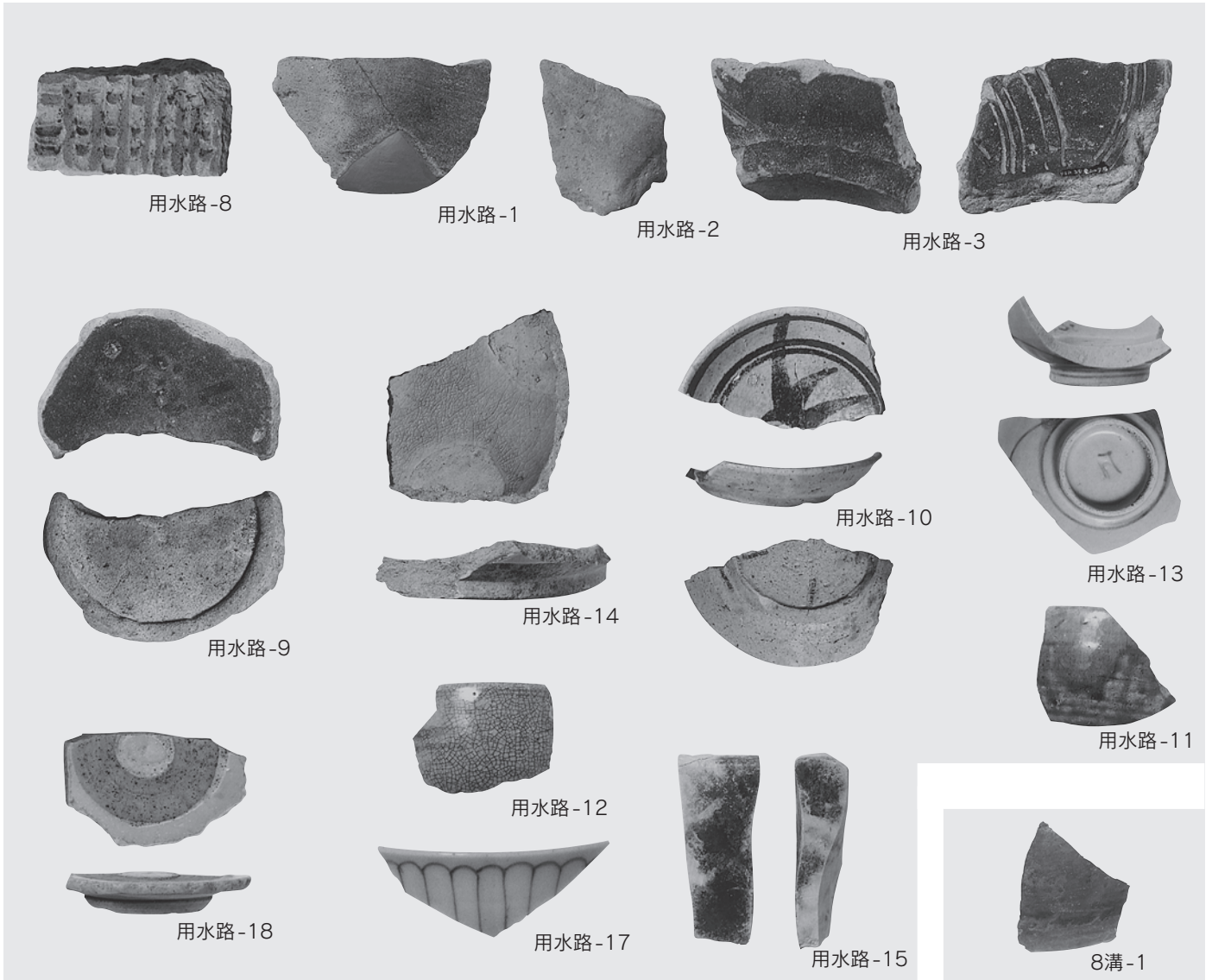
1 4区第5面1号井戸出土遺物



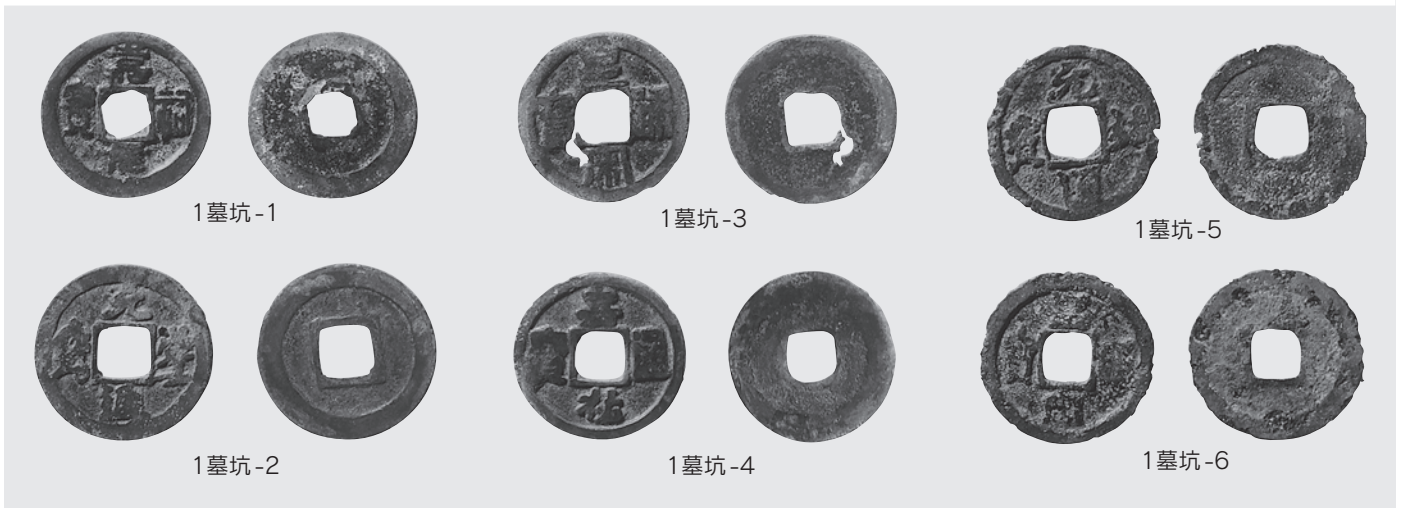
2 4区第5面3号井戸出土遺物



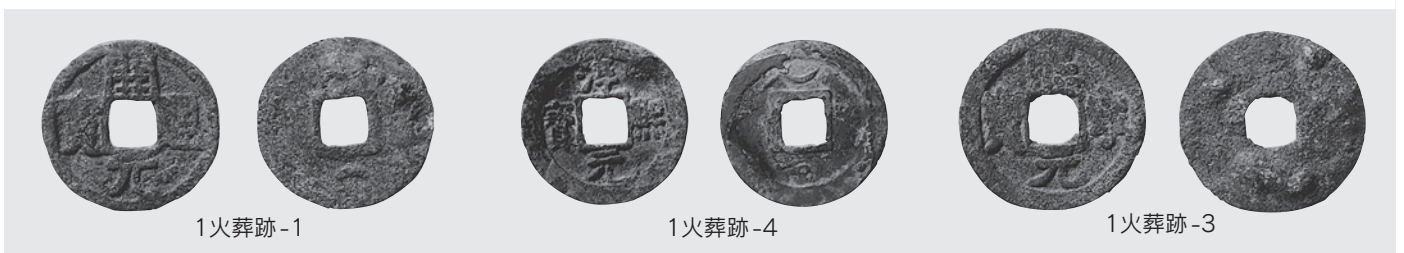
3 4区第5面15号溝出土遺物



1 3区第5面用水路出土遺物 2 4区第4面8号溝出土遺物



3 4区第4面1号墓坑出土遺物

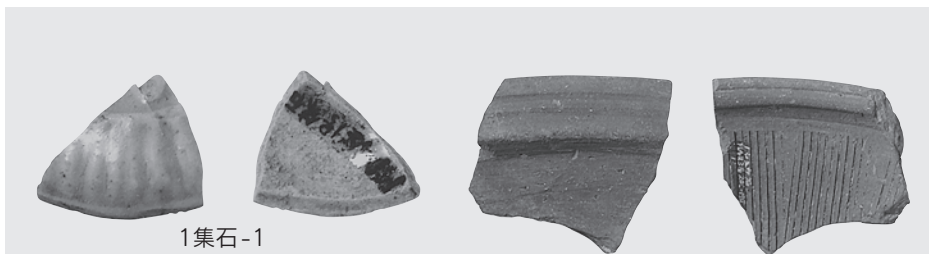


4 4区第4面1号火葬跡出土遺物



1火葬跡-2

1 4区第4面1号火葬跡出土遺物

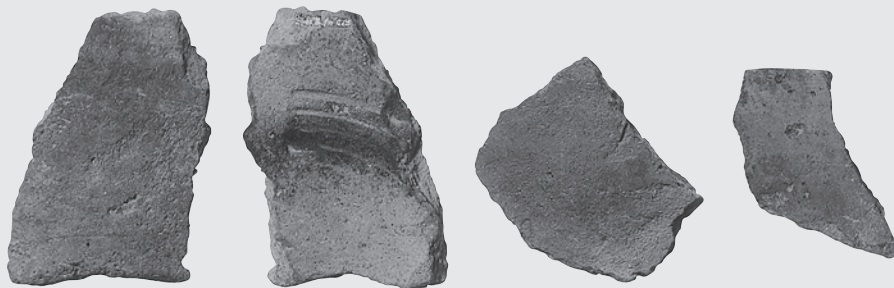


1集石-1

1集石-2



集石-4

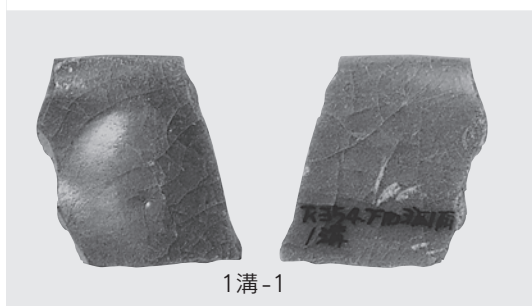


集石-1

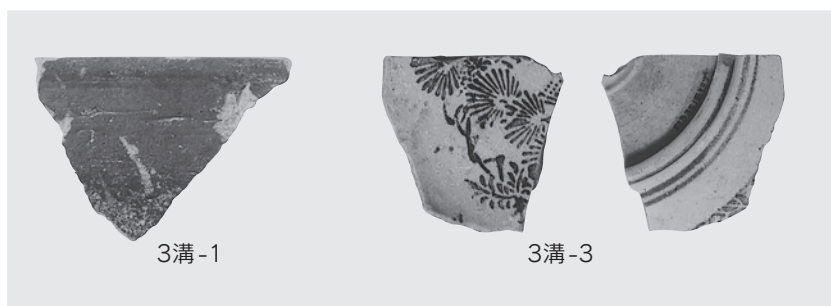
集石-3

集石-2

2 4区第4面集石出土遺物



1溝-1

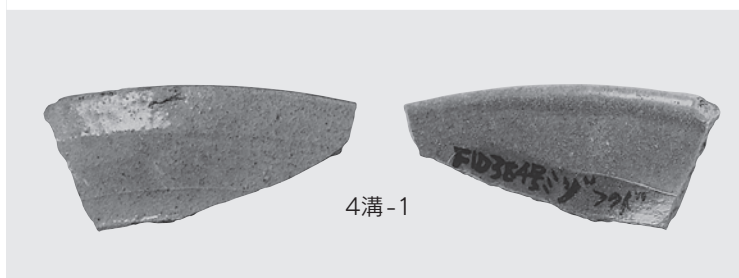


3溝-1

3溝-3

3 3区第1面1号溝出土遺物

4 3区第1面3号溝出土遺物



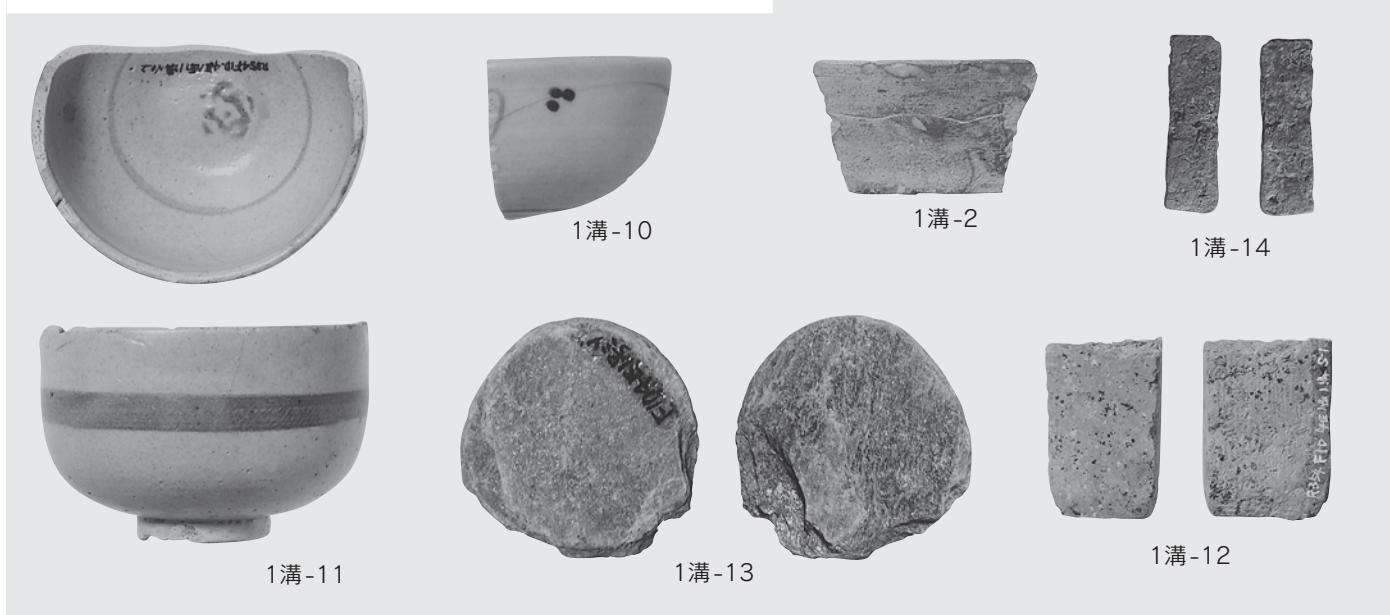
4溝-1

5 3区第1面4号溝出土遺物



1溝-9

1溝-6



1溝-10

1溝-2

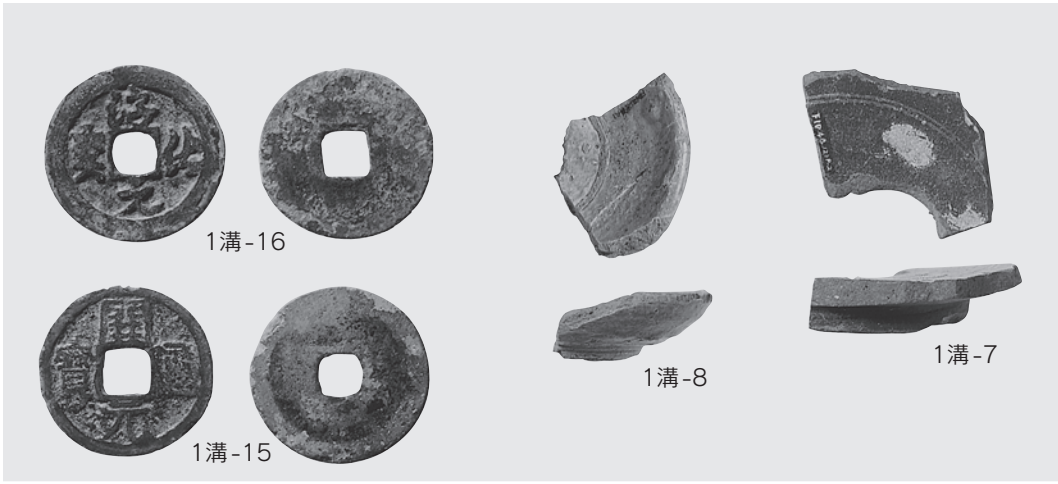
1溝-14

1溝-11

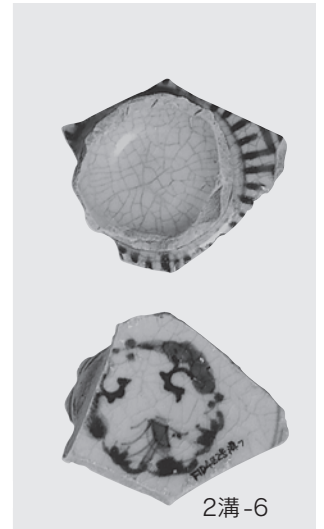
1溝-13

1溝-12

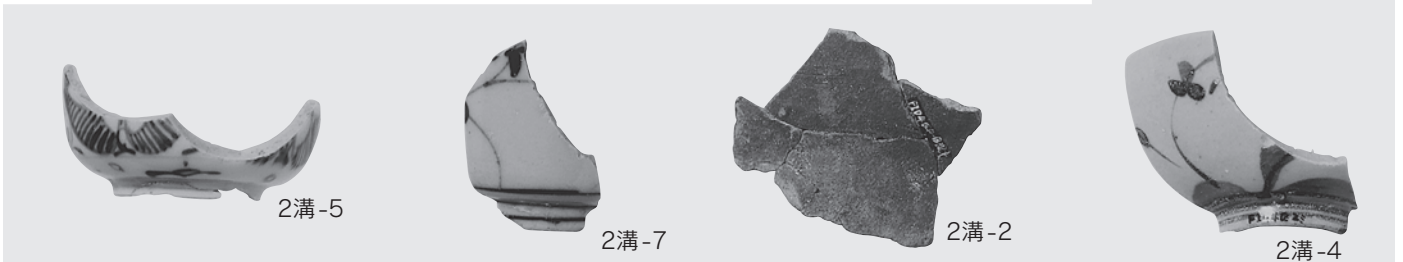
6 4区第1面1号溝出土遺物



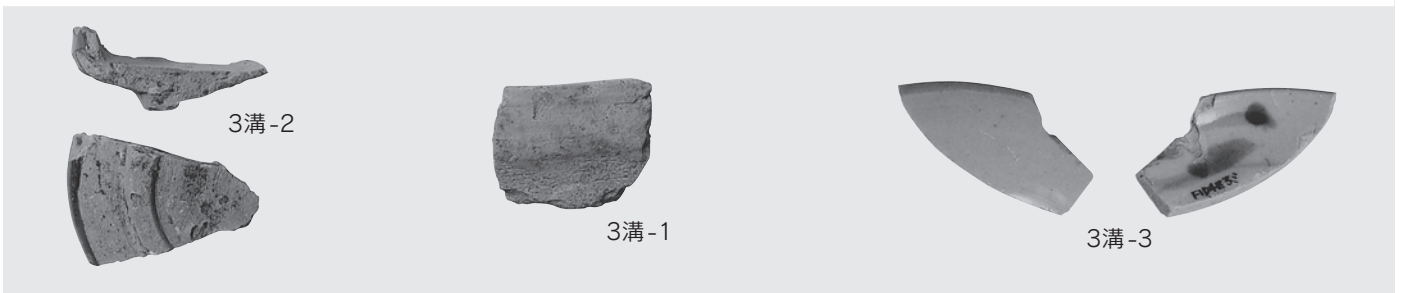
1 4区第1面1号溝出土遺物



2溝-6



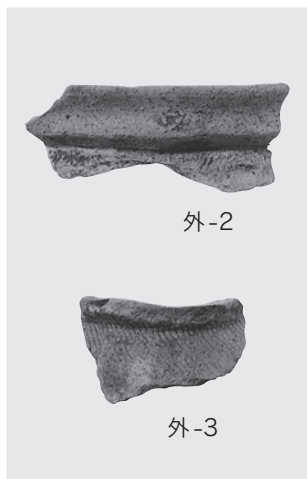
2 4区第1面2号溝出土遺物



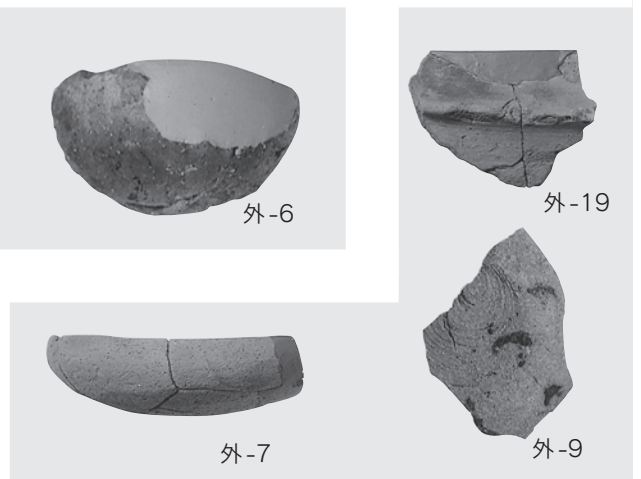
3 4区第1面3号溝出土遺物



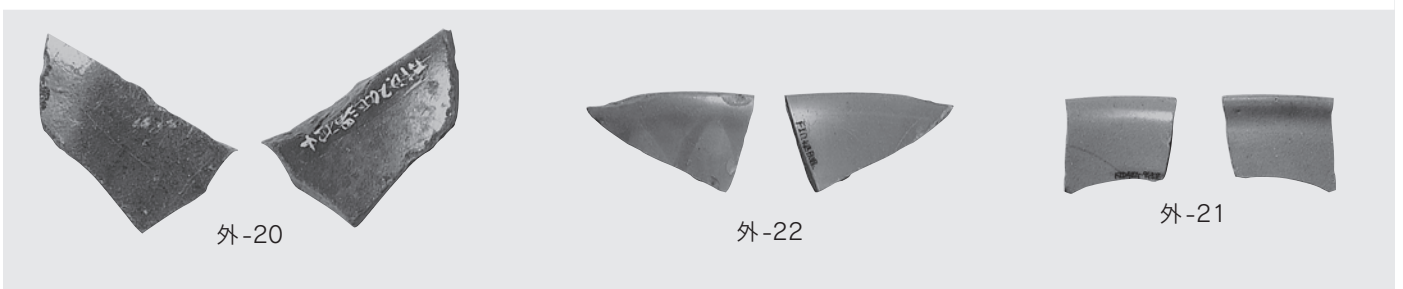
4 遺構外出土の遺物(縄文)



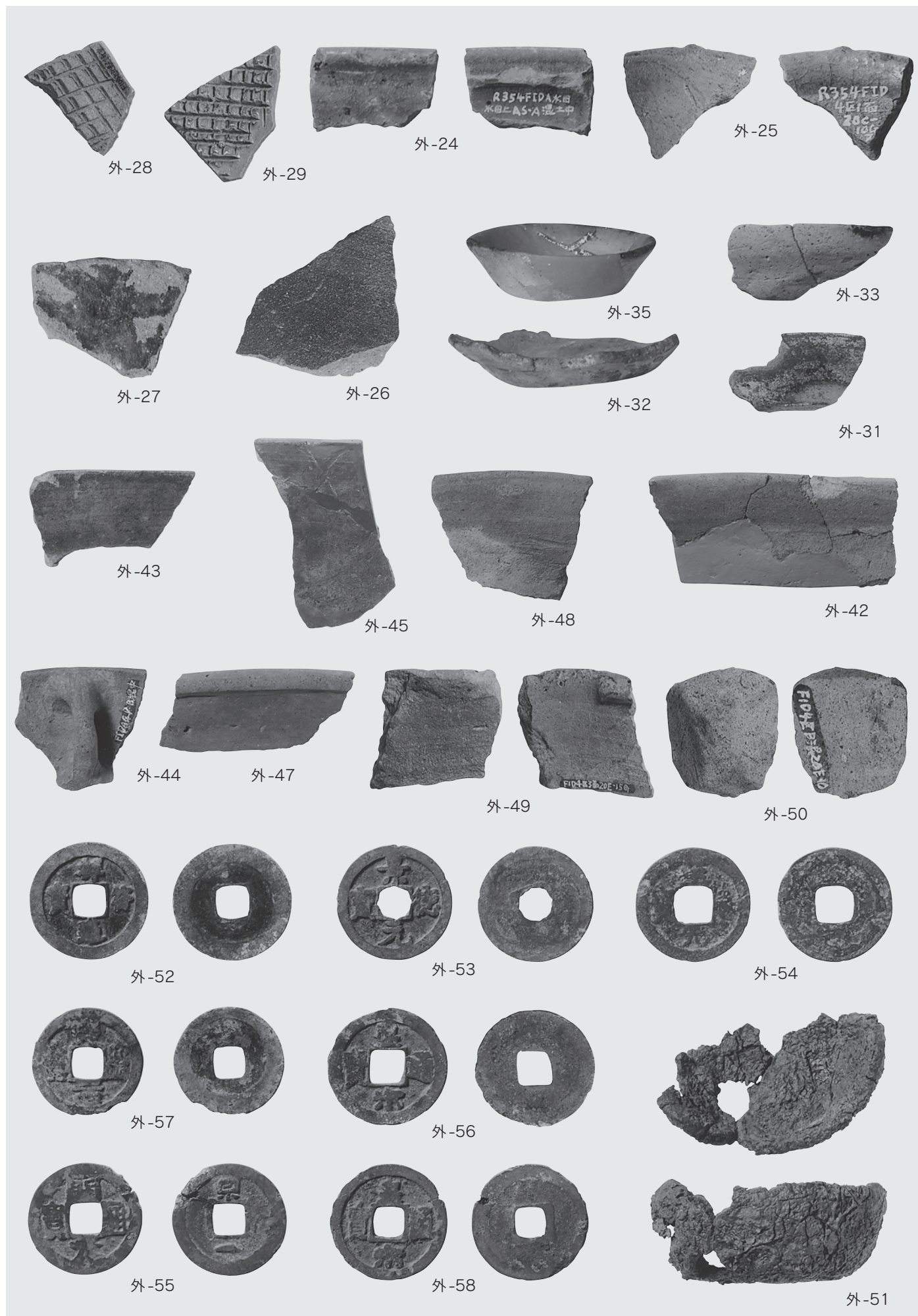
5 遺構外出土の遺物(古墳)



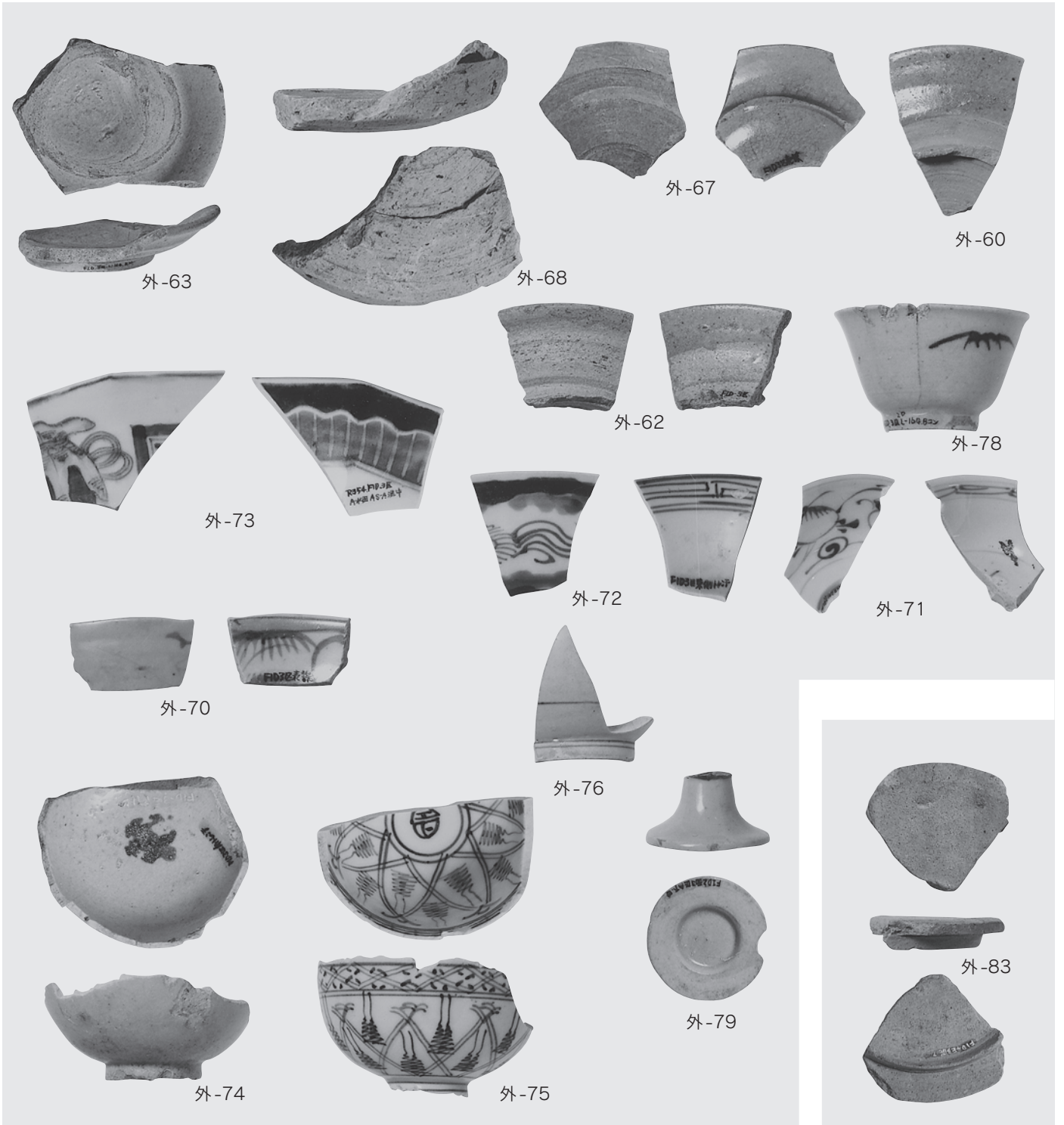
6 遺構外出土の遺物(奈良・平安)



7 遺構外出土の遺物(中世)



1 遺構外出土の遺物(中世)



1 遺構外出土の遺物(近世)



2 遺構外出土の遺物(時期不明)

抄 録

書名ふりがな	ふくしまいいだま
書名	福島飯玉遺跡
副書名	国道354号道路改築事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	446
編著者名	徳江秀夫 檜崎修一郎
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20081015
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ふくしまいいだまいせき
遺跡名	福島飯玉遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちふくしまあざいいだま
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町福島字飯玉111-1番地他
市町村コード	10464
遺跡番号	624
北緯(日本測地系)	361813
東経(日本測地系)	1390710
北緯(世界測地系)	361824
東経(世界測地系)	1390659
調査期間	20010402-20020329/20020401-20021227
調査面積	5835m ²
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/墓
主な時代	古墳/平安/中近世
遺跡概要	田畑-古墳-水田/その他-古墳-溝4+竪穴状遺構1+土坑1+土師器/田畑-平安-水田1/その他-平安-溝1/集落-中世-掘立柱建物8+柵列4+井戸6+ピット388+溝16+用水路1+墓坑1+火葬跡1+陶磁器+軟質陶器+板碑+石臼+古銭/田畑-中近世-水田1+畠1/田畑-近世-水田2+畠2/その他-近世-溝10+陶磁器
特記事項	中世の屋敷跡2箇所を調査。これらと同時期に掘削された用水路を合わせて検出した。
要約	本遺跡は玉村町西部に位置する古墳時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。中世には周囲を溝で区画した屋敷2箇所が形成され、内部から掘立柱建物・柵列・井戸・ピットなどが検出された。また、屋敷と同時期に存在していたと考えられる用水路は上幅10mに及ぶ規模を有するものである。この他に古墳時代・平安時代・近世の水田・畠が検出された。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第446集

福島飯玉遺跡

国道354号道路改築事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

平成20年10月8日 印刷

平成20年10月15日 発行

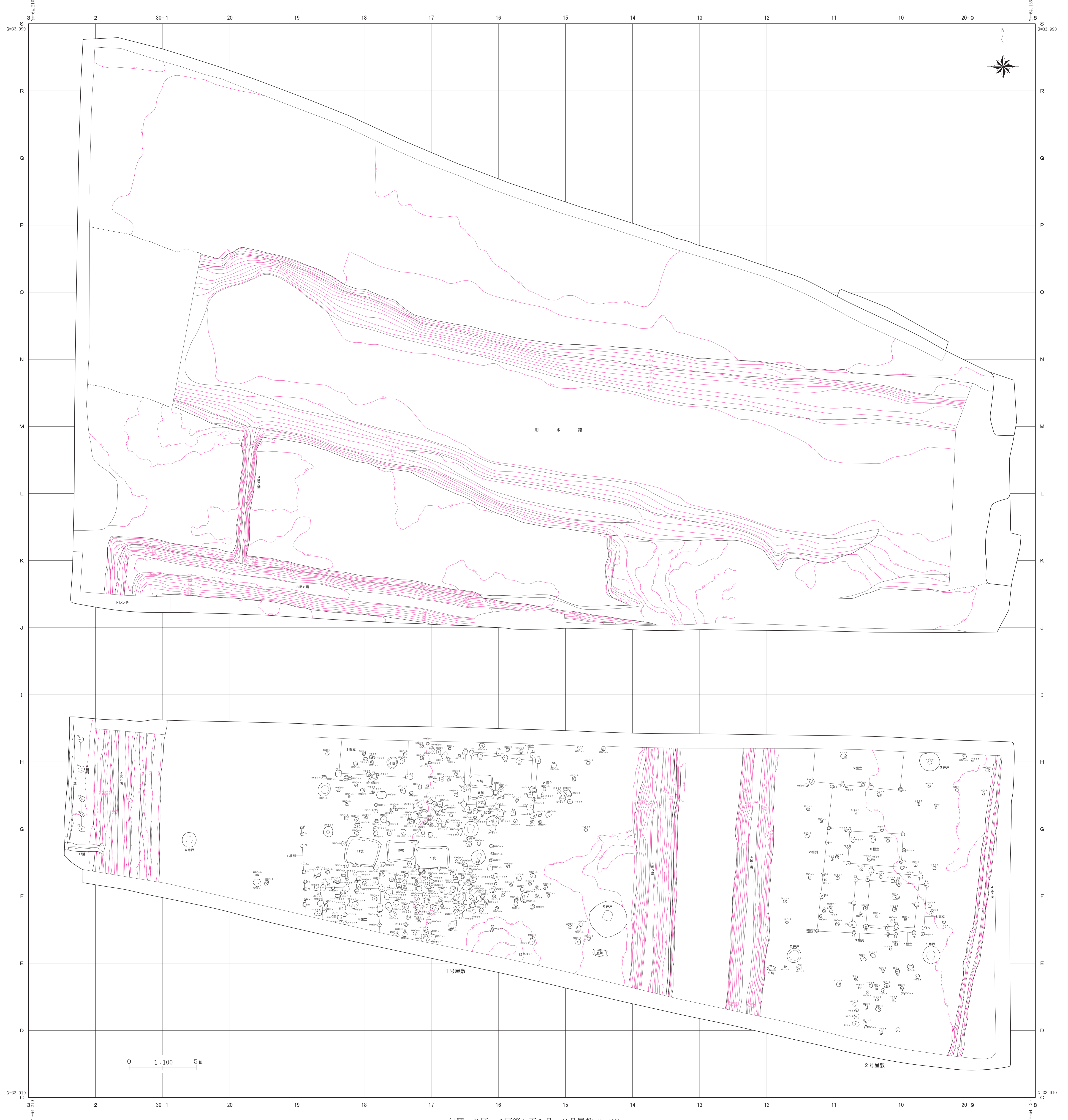
編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社



付図 3区・4区第5面1号、2号屋敷 (1:100)